

第IV章 江戸時代の遺物

記述の方法 既に述べているように、この調査地点からは百万点のオーダーで数える遺物が出土している。それらの全てを図示し、記載することは一万頁をこえる報告書を作ってもなお不可能である。仮にそうしたものを作ったとしても、それを読破することは困難であろうし、利用がきわめて限られたものになることは明らかである。そこで、いわば遺物の詳細な索引のようなものとして記述することを心掛けた。関心のある方々は、東京大学埋蔵文化財調査室で関心のある分野のものを直接実見していただきたい。

もっとも点数も多く、関心の深いと思われる陶磁器と土器に関しては、遺構から出土したものにはほぼ限定してはいるが、詳細な索引ができたと考えている。当初、それぞれの時期を代表する遺構出土のものに限ろうかとも考えたが、それでは索引にもならないという声があり、やや出土点数の多い遺構からのものと問題と関心と呼びそうな遺物に関してはほぼ網羅することができた。といっても、各遺構の中では、類似したものを全て取りあげているわけではない。またこの時代の特徴として、同一のものと考えられるものが数個体、時には数十個体出土することも珍しくなく、それらは一個体で代表させている。

江戸時代の遺構出土の遺物のもつ意味については既に触れてはいるが、その遺構のなかで使用されていたと考えられるものは全くといってよいほどないものと考えられる。この地点での遺物の出土状況を見ると、遺構が廃棄される時にゴミとして捨てられたものがほとんどであるように思われる。廃棄のされ方に二種類がある。一つは日常的にゴミとして捨てられるものであり、これは比較的短い時間の間に、おそらく一年未満の間に一緒に廃棄されたと考えることができよう。こうした遺物に関しては、使用と廃棄の間にほとんど時間の差を考える必要もないと思われる。一緒に出てきたものはほぼ同時に日常的に使用されていたものとすることができよう。他は火災などの原因により、屋敷が大きく改変される時に、それまでに利用されていた遺構を埋め戻す時に、廃棄されるものである。この場合には最終的な廃棄の同時性はあるが、屋敷の改変がなく長く利用されていた時にはものの使用と廃棄の間はかなり長い時がたつこともありうる。一緒に同じ遺構から出土したといっても、数十年隔たって、使用されていたものも最終的に同時に廃棄された可能性を捨てるわけにはいかない。まして製作から廃棄までの間にどれだけの時間が経過しているかは、明確ではない。このような背景があるが、一般的に言って、四半世紀は無理としても、半世紀までの期間をみればごく特殊な場合を除くと、一遺構から出土する遺物の製作年代はほぼ一致しているとみることができよう。そこで、陶磁器と土器に関しては遺構毎に記載することにする。

その他の遺物に関しては、遺構ごとに記載するだけの数量もないので、またまとまって出土している例もほとんどないので、各地点のものをそれぞれの材質によって、まとめて記載することにする。それぞれの節の末尾に図示したものの出土遺構を表で示している。参照されたい。

第一節 陶磁器・土器

1 記述にあたっての分類

* 陶磁器

本章で呈示した遺物群は底部片数100点という任意のボーダーラインを設け、それ以上出土した遺構に限り種々の分析の対象とし、本地点の相対年代を示した。それ以下の遺構については数量的に遺物群の組成、年代等の分析には不十分と考えこれを除外し、遺物を呈示するに止めた。また、相対年代は遺物群としての年代を呈示する関係上、III章での文献、発掘成果よりの廃絶年代推定とは若干の相違を有する遺構があるが、これについては本文中で触れる事とする。本章で用いた陶磁器の分類は胎質・産地—器種—小分類の順で行ない、各項目の詳細はV章で触れているが、概略を示すと以下の様になる（写真7～14参照）。

胎質	産地	器種		
J 磁器	A 船載	1 碗	14 蓋	27 水注
T 陶器	B 肥前系	2 皿	15 壺	28 渡瓶
	C 瀬戸・美濃系	3 小皿	16 急須	29 播鉢
	D 京都・信楽系	4 型皿	17 紅皿	30 餌入
	E 備前系	5 鉢	18 合子	31 火鉢
	F 志戸呂系	6 小坏	19 水滴	32 柄杓
	G 常滑系	7 猪口	20 蓮華	33 鍋
	H 萩系	8 仏飯器	21 植木鉢	34 土瓶
	I 萬古系	9 香炉	22 花生け	35 小物
	J 相馬系	10 瓶	23 片口鉢	36 盤
	Y 九谷様式	11 仏花器	24 喫煙具	37 薬研
	Z 不明（含産地限定不能）	12 油壺	25 鬚盥	38 手焙り
		13 蓋物	26 甕	39 おろし皿

なお磁器・陶器の実測図に見られる記号は以下のことを表わしている。

- ・▲は磁器における高台、見込みなどの釉際を表わしている。
- ・|——|は口唇部の口銹を表わしている。
- ・|←→|は敲打痕、磨耗痕を表わしている。

* 徳利

本地点出土の徳利には、瀬戸美濃産灰釉系徳利二合半入り・五合入り・一升入り、瀬戸美濃産鉄釉系徳利（いわゆる備前写、ぺこかん徳利）、瀬戸美濃産の船徳利、志戸呂産徳利、備前産の焼き締め徳利がある。類例が多くある瀬戸美濃産の灰釉系徳利には、口縁・頸部・肩部・胴部・底部に形態上の変化が認められる。志戸呂産徳利にも若干の形態差がある。これについてはV章で述べるこ

第IV章 江戸時代の遺物

とにする。なお、ここで述べる徳利の個体数は総破片数から推定した最小個体数である。

* 灯火具・カワラケ・焙烙

灯火具・カワラケ・焙烙の出土点数をいう場合、すべて底部片を基準としている。すなわち以下述べる遺構別の出土点数とは底部片数である。また算定の途中でこれら土器類の出土傾向が時期別に微妙に変化することが推測された。そこで各々の遺構別の出土傾向を把握するため、他の陶磁器類も同様の基準で処理し土器類と合計し、百分率で示すことにした。ここでいう“出土比率”である。ただしここでは瓦・金属製品・石製品・ミニチュアなど、いわゆる器物以外のものは除外している。なお個々の遺物に関する留意事項は以下の通りである。

灯火具

1) 灯火具は次のように分類した。灰釉・鉄釉・志戸呂・透明釉(鉛釉)・素焼である。志戸呂のみ生産地による分類である。灰釉・鉄釉・透明釉もそれぞれ信楽、瀬戸・美濃、今戸にほぼ生産地が限定されるが、中にはそれに含まれないものも存在し、分かりにくくもあるのであえてこのような分類を行っている。またここでいう“系”とは製品という意味に近い。

2) 器形は油皿・受付・有脚受付・秉燭(ヒョウソク)などに分かれるが、受付・有脚受付は油皿の受け台として機能したもの(佐々木 1977a)であり、通常“灯芯”油痕は付着しない。ただし油痕や煤が認められるのがいくつかあり、中には口唇をめぐり油皿として用いたらしいものもあった。ここでは他の理由による油痕や煤との区別がつかないので、すべて灯芯の油痕として記述している。

3) 素焼のいくつかには胡粉(?)を塗彩した銀色の灯火具がある。時期が下るにつれ、素焼そのままよりこの方が多くなるようである。厳密には鉛釉とされる透明釉と同様に、これらに対しても分類が必要であるが、ほとんどは痕跡のみの残存であり、区別がつきにくい。したがってここではすべて素焼として分類し、銀彩の痕跡の明らかなもののみ“銀彩”と記すことにした。

カワラケ

1) 口径は表す際、当初“cm”と“寸・分”の併用を考えたが、繁雑に過ぎるので、同じ文中でも記載の種類によって“cm”と“寸・分”を使い分けることにした。灯火具もこれに従っている。

2) カワラケはもっとも変化しにくい器種の一つである。その中で底部の切り離しの処理は変化を示す重要な指標となりうる。ロクロの左・右両回転の方向はもちろんであるが、いわゆる糸切りの最後段階まで両手を用いるかどうかの「離し糸切り」と「まわし糸切り」の問題がある(小川 1979)。近年「離し糸切り」の一部に対し、切り離しに用いた糸を最初から粘土に埋め込んで切り離したとする「中心糸切り」とする説も提出されているが(福田 1986)、いささか妥当性に欠け、ここでの記述はすべて小川氏に従っている。なお、文中で特に記載のないものはすべて左回転による「まわし糸切り」である。

3) 切り離し調整に関し、J31-1で明らかになったが「まわし糸切り」の後、あたかも「離し糸切り」を行ったかのようなカワラケが存在する。あるいは「離し糸切り」の変異とも考えたが、技法がわからず、見たままにあえて「まわし糸切り」の後、「離し糸切り」と記述している。理由は不明ながら本地点では時期を限っていくつかの遺構で認められ、時期区分上重要な指標となりうる。これらのカワラケはできるだけ拓本で示すようにしたが、最初に行われた「まわし糸切り」が分かり

第一節 陶磁器・土器

にくく、この場合のみ「ひねりどめ」の位置を▲で示している。

4) 多数の遺構から糸切り痕がなく粘土が精良でしかも器面の平滑な、『貞丈雑記』のいう“はだよし”と考えられるカワラケも出土している。最近上田氏はこれらのカワラケに対し分類を試みているが(1987)、ここでは単に上田氏が総称的に用いている“上製”もしくは“上製のカワラケ”と記すことにした。

5) 技法以外にカワラケのもっとも大きな違いは口径で示される。このため各遺構別に出土したカワラケの口径ごとの割合を示したいと考えたが、口径まで分かる破片は少なく、やむをえず底径の分かる破片から口径を推定することにした。ただしカワラケは時期を下るごとに底径が小さくなる傾向にあり、また個別の変異も存在し、一定の基準を設けることができなかった。このため各遺構ごとの完形もしくはそれに近いカワラケの底径および口径を計測し、それを底部片にあてはめて口径を推定することにした。したがって推定値は各遺構で異なっており、口径は先の出土比率同様、大略を示しているにすぎない。

焙烙

1) 焙烙は個体数の問題がある。焙烙は割れやすく、しかも小片となって確認されるのが通例である。したがって底部片のみを数えると実際捨てられた個体数(完形を捨てると思えないが…)とは異なった数値になると思われる。しかし実際算定してみると、確認できる焙烙の底部片はそれほど多いものではなく、土器の中では火鉢とほぼ同じ数値を示していた。したがって焙烙の個体数イコール底部片数と考えているわけではないが、大勢に影響はないものとみて底部片で算定を試みている。このため出土比率は後述する表あるいは一部を除き、記してはいない。ただし筆者の分類による形態別の出土傾向の把握のため、できるだけ口縁部の出土点数も記すことにした。あるいはこの数値が実際の個体数に近いかもしれない。

2) 従来の見解と異なり、この項で扱う蓋は焙烙に伴うものではなく、火消し壺など、火鉢類に伴うという説(辻 1989)が有力となってきている。2号組石でも火鉢に関連すると思われる瓦質の蓋が出土しているが、他は明確にはわからないのが現状である。ここでは分担等の問題もあり便宜的にこの項目の中で扱うことにする。

*土器

土器の記載にあたっては、以下のような分類にしたがって、その形態・刻印の記述を行なった。火鉢類は、いわゆる火鉢、手焙り、風炉、焜炉、涼炉といった暖房、加熱、調理に用いられたと考えられる基本的には上方に開口する鉢形の容器を指す。以下に示す分類は、すでに発表したもの(小川・小俣 1988)に基づいているが、表現その他一部手を加えた。

1 類一窓をもたない

a 円形で足をもち背が低い

イ 体部に文様が施される

ロ 体部に文様が施されない

b 円形で足をもち体部が直立し、背が高い

イ 口縁が内湾する

ロ 口縁が外反する

ハ 口縁が内折もしくは内側に肥厚する

c 方形で足をもつ

d 方形で足をもたない

第IV章 江戸時代の遺物

2類-窓をもつ

- | | |
|----------------------|------------------|
| a 窓が口縁から切り込まれ、突出部がない | イ 口縁が外反する |
| b 窓が口縁から切り込まれ、突出部がある | ロ 口縁が内側に屈曲する |
| c 窓が下方に開口し、体部が一重 | d 窓が下方に開口し、体部が二重 |

* 焼塩壺

焼塩壺は蓋の器形、身の器形および成形技法、刻印のそれぞれについて分類を行なった。これらの分類はすでに発表したもの（小川 1988）に基づいている。

蓋

- | | |
|------------------------|-----------------|
| ア類-断面外形・内形が弧を描くドーム形のもの | d 突起が太く浅いもの |
| イ類-断面が凹字形を呈するもの | e 突起がきわめて小さいもの |
| 1 胎土に雲母を含まないもの | 2 胎土に雲母を含むもの |
| a 身が薄く突起が細く、側面が内傾するもの | ウ類-断面が台形を呈するもの |
| b 身が薄く突起が細く、側面が直立するもの | エ類-断面が長方形を呈するもの |
| c 身が厚く突起が細いもの | オ類-断面が凸字形を呈するもの |

身

コップ形のもの

I類-輪積み成形 1 肩の張ったもの 2 なで肩のもの 3 ずん胴のもの

II類-板作り成形 1 胎土に雲母を含まないもの

- a 底部に粘土塊と粘土紐が入り、二重圏線が認められるもの
- b 底部に粘土塊のみが入り、一重の圏線が認められるもの
- 1 内面に縫い目のみが見られるもの
- 2 内面に粗い布目が見られるもの
- c 底部に粘土塊のみが入り、底部がまるみをもって側面に移行し、圏線がないもの
- 2 胎土に雲母を含むもの
- a 蓋受けの大きいもの
- b 蓋受けの小さいもの
- 1 内面の上三分二に布目、その下は平滑のもの
- 2 内面がへら等で削ったように調整されているもの
- c 蓋受けのないもの

III類-ロクロ成形 a 口縁内側が立ち上がるもの b 口縁内側と外側が立ち上がるもの

c 口縁上面がハの字状で鐙が巡るもの d 口縁上面が平坦で鐙が巡るもの

e 口縁上面が平坦で鐙が巡らないもの

鉢形のもの

- 1類 断面外形が弧を描くもの 2類 断面外形が直線状のもの
- 3類 断面外形が屈曲するもの

第一節 陶磁器・土器

刻印

- | | |
|--|---|
| <p>1 類—刻印の見られないもの</p> <p>2 類—印文に「みなと」の文字のはいるもの</p> <p>1 「ミなと藤左衛門」(杵線二重)</p> <p>2 a 「天下一堺ミなと 藤左衛門」
(杵線二重)</p> <p>b 「天下一堺ミなと 藤左衛門」
(杵線一重)</p> <p>3 「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」
(杵線一重)</p> <p>4 「御壺塩師 堺湊伊織」(杵線一重)</p> <p>5 「泉湊伊織」(杵線一重・隅切り)</p> <p>3 類—「泉州麻生」に類する印文を持つもの</p> <p>1 a 「泉州麻生」(長方形二重杵)</p> <p>b 「泉州麻生」(杵線二重・内側二段角)</p> | <p>2 「泉州磨生」(杵線二重・内側二段角)</p> <p>3 「泉州麻玉」(杵線二重・内側二段角)</p> <p>4 「泉川麻玉」(杵線一重・隅切り)</p> <p>5 「サカイ 泉州磨生 御塩所」(杵線一重)</p> <p>4 類—印文に「大極上」の入るもの</p> <p>1 「播磨大極上」(杵線一重)</p> <p>2 「大極上壺塩」(杵線一重)</p> <p>5 類—その他の刻印</p> <p>1 「御壺塩師 難波浄因」(杵線一重)</p> <p>6 類—蓋に見られる刻印</p> <p>1 「御壺塩師 難波浄因」(杵線一重)</p> <p>2 「深草 砂川 権兵衛」(杵線一重)</p> <p>3 「イツミ 花焼塩 ツタ」
(陽刻・杵線二重・内側二段角)</p> |
|--|---|

なお、本節では、磁器・陶器を成瀬・堀内が、徳利を松下が、カワラケ・焙烙・灯火具を佐々木が、土器・焼塩壺を小川が分担執筆している。池のカワラケについては藤本が執筆している。

2 中央診療棟地点の遺構出土の陶磁器・土器

B25-1 (IV-001図) 本遺構から出土した陶磁器は、18世紀前半を主体にしているが、二次火熱を受けているものも何点がある。

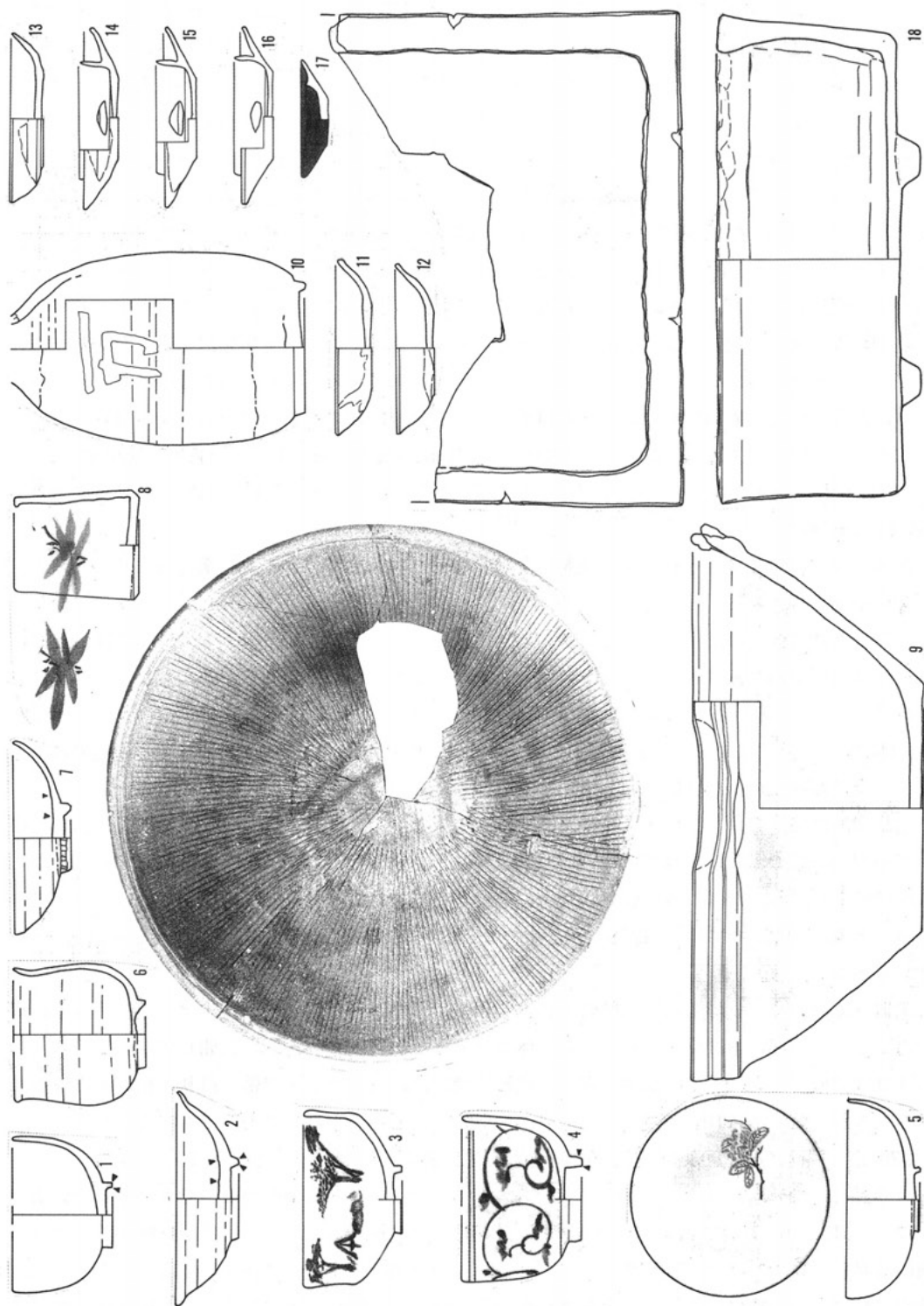
磁器(1, 2) 1は白磁の碗でJB-1-eに属す。2は白磁の皿でJB-2-1に属す。重ね焼きのために見込みには蛇ノ目状の釉剥ぎが施され、畳付には耐火砂が付着している。

陶器(3-9) 3-6は碗である。3はTC-1-1に属す。底部は無釉で、見込みには三箇所のピン痕が見られ、鉄絵によって草木文が描かれている。4はTB-1-fに属す。釉下には全面に白土が施され呉須によって唐草文が描かれている。5はTD-1-hに属す。見込みには鉄絵と呉須によって折枝に花が描かれている。7はTB-2-aに属す。銅緑釉が施されているが、見込みには蛇ノ目状の釉剥ぎがみられる。高台外面にはカンナ痕が観察される。8は灰落しでTD-24-aに属す。底部および内面は無釉。体部には鉄絵によって竹が描かれている。9は播鉢でTE-29に属す。口縁には搔きだし口が設けられ、播目は9条1単位とし、全面に施されている。底部では十字に施されている。

徳利 10は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施され、ベタ刻の釘書がある。口頸部を欠くものの割れ口は滑らかであり、再利用された可能性が考えられる。撫で肩で最大径は胴部中程にあり、高台は深く削り込まれてやや内傾する。このほか、5合・1升徳利が30個体弱出土している一方、2合半徳利はごく僅かしか認められない。

灯火具(11-17) 出土した灯火具の器形のわかるもの8点のうち、7点が志戸呂系。器形は油皿

第IV章 江戸時代の遺物



IV-001図 B25-1出土遺物

第一節 陶磁器・土器

(11-13)・受付(14-16)に限られる。すべて完形もしくはそれに近い。口径は油皿が10.5-11cm(三寸五―六分)、受付が11-11.5cm(三寸六―七分)である。図示したもの以外、完形に近い志戸呂系の受付がもう1点出土している。器種毎にほぼ同じ大きさであり、受付の方がわずかに大きい。灯芯の油痕は12にわずかに認められたにすぎない。透明釉を施した土師質の灯火具も出土している(17)。器形は受付で、口径7.3cm(二寸四分)である。ほぼ完形。透明釉の灯火具はこれ以外に見当たらず、おそらく流れ込みであろう。他に素焼の受付および瓦燈の小片も出土している。

土器 18は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り(小林謙 1986)成形である。四辺形であったと思われる、一辺の長さは30cmほどであるが、他辺の長さは不明である。足は小振りのものが二つ認められたが、本来四つあったものと思われる。外面は横および縦の丁寧なケズリで平滑に整えられ、底面と交わる部分は面取りされている。表面と上面には金属光沢を帯びた朱彩が施されている。内面は横にナデが走り、とくに底面付近で顕著である。また各角では縦に強くナデが加えられ窪んでいる。底面外側にはチヂレ目が見られる。口縁部の敲打痕は内側にのみ見られる。

B28-1 (IV-002図) 磁器(1-3) 1は碗でJB-1-aに属す。釉は生掛けで青灰色を呈す。2は小坏でJB-6-bに属す。青、赤、黄絵の具による上絵付けによって花が描かれている。3は蓋物の蓋でJB-14-aに属す。

陶器 4は碗でTB-1-bに属す。文様は鉄絵によって体部に描かれ、高台裏ほぼ中央に「清水」の刻印が施されている。

カワラケ(8-10) ほぼ完形のカワラケが4点出土、うち3点を図示している。8は口径11.3cmで、器壁は長期間にわたる灯火具としての使用のためか、かなりの部分の剥落が認められる。底部は左回転(?)の糸切り底。煤は全面を覆い、灯芯の油痕も口唇を全周する。9、10は小型のカワラケであり、ほぼ同じ大きさである。形態も類似する。口径6.3-6.5cm(二寸一―二分)。灯芯の油痕の付着もなく、全て左回転の糸切り底。同じ形態のものが他にもう1点出土している。

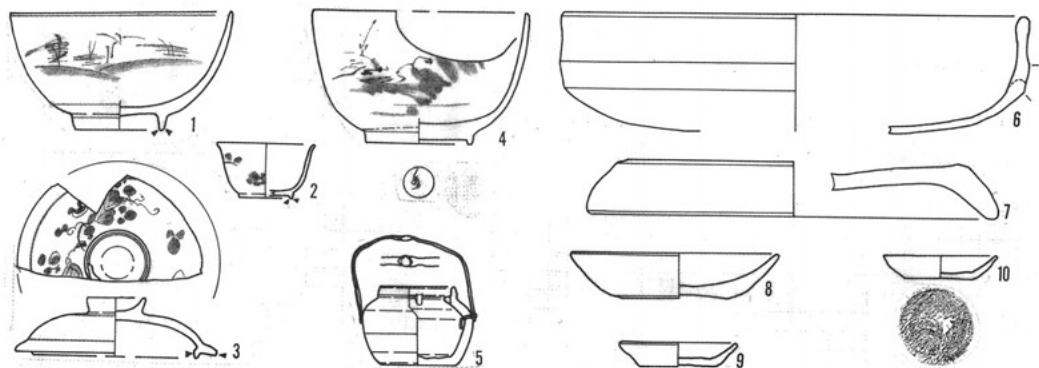
焙烙(6、7) 6は破片を接合した結果、ほぼ口縁が半周する。口径25.4cm、器高は推定6.2cm。概して小型の焙烙である。口縁部にやや屈曲部分が認められるが、器高は高くほぼ直立する。ただし底面は低平である。ケズリは底面との接合部を境として口縁側につく。この遺跡では古いタイプの焙烙である。7は蓋、つまみを除き、三分一が残っている。口径22.4cm、器高は推定2.9cmである。これも小型である。

土器 5はロクロ成形の軟質土師質の容器。中央でつながれた銅製の吊り手が付く。吊り手は銅の釘によって体部に直接留められている。体部は開き気味に立ち上がり、屈曲して口縁に至る。口縁はほぼ垂直で、口縁直下に沈線が巡る。口縁内側には断面三角形の突帯が巡り、相対する位置に切り欠きが一対設けられている。カンテラに類似するところから灯火具の類でもあろうか。

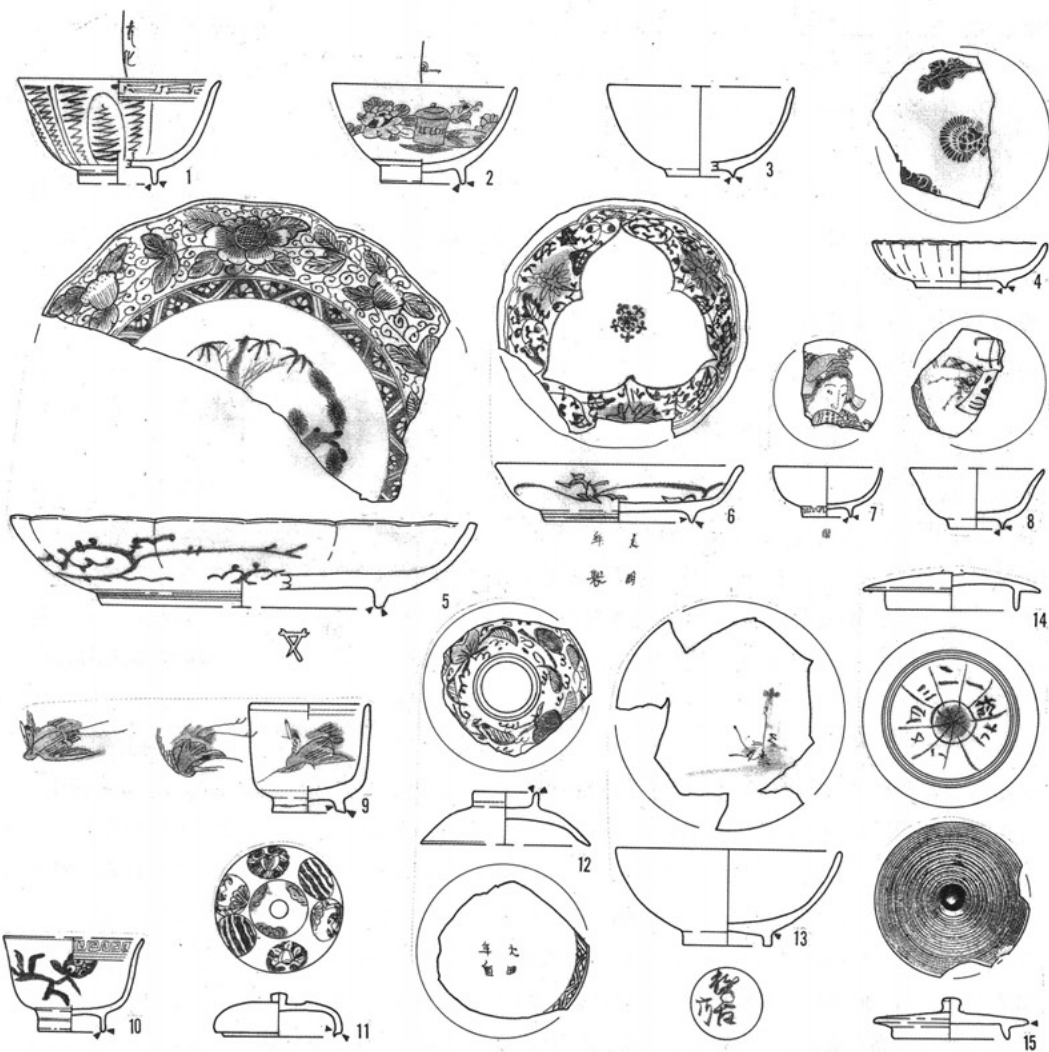
C26-1 (IV-002, 003図) 本遺構より出土した陶磁器はⅧ期を中心としている。

磁器(1-12) 1-3, 9, 10, 12は碗である。1, 2, 9, 12は瀬戸・美濃系の磁器でガラス質の胎土をもつ。1, 12はJC-1-dに属す。1は見込みに「大化□□」の銘がみられる。12は端反碗の蓋でつまみ内には銘が、裏面には「大明年製」銘がみられる。2は丸碗でJC-1-aに属す。体部には、赤、黒、黄絵の具による上絵付けによって宝寿文が描かれている。9はJC-1-eに属す。高台幅は広く蛇ノ目

第IV章 江戸時代の遺物



B 2 8 - 1



C 2 6 - 1 (1)

IV-002図 B28-1、C26-1(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器

状を呈す。体部には赤、黒、黄絵の具による上絵付けで鶴が描かれている。3, 10は肥前系である。3は白磁碗でJB-1-fに属す。10はJB-1-nに属し、高台高は1cmと高い。5, 6は皿である。5はJB-2-eに属し、口縁は輪花を形成している。見込みには松竹梅が描かれている。また欠損面には白玉による焼き継ぎ痕がみられ、高台裏には図示したような焼き継ぎ屋のマークがみられる。6はJB-2-eに属す。口縁は輪花を形成し、高台裏にハリ支え痕が一箇所みられる。見込みには五弁花が描かれ、高台裏には「太明年製」銘が描かれている。4は瀬戸・美濃系の型皿でJC-4に属す。体部は型打ちによって輪花を形成している。見込みに亀、葉が陽刻されダミで埋められている。7, 8は瀬戸・美濃系の小坏である。7はJC-6-aに属す。見込みには赤、黒、黄絵の具による上絵付けで美人画が描かれている。高台裏には銘がみられる。8はJC-6-bに属す。見込みには鉛ガラスと呉須の混合物によって上絵付けがされている。11は蓋物の蓋でありJB-14-dに属す。

陶器(13-17) 13は平碗でTB-1-cに属す。高台脇が面取りされている。見込み文様は鉄絵によって描かれ、高台裏には刻印がみられる。また高台裏には墨書がみられる。14, 15は土瓶の蓋であり、14はTZ-34-aに、15はTZ-34-dに属す。14の裏面には受け部内側を墨書で十等分し、一〜拾までの漢数字が描かれている。おそらく玩具として二次利用されたものであろう。15の裏面には一重角内に「丸傳」の刻印が施されている。16は行平の蓋でTZ-33-dに属す。表面に鉄釉、裏面に灰釉が施されている。17は播鉢でTC-29に属す。1単位16条の播目が放射状に施されている。下半部から底部は使用のためにほとんど播目を残していない。

徳利 18は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施され、ベタ刻の釘書がある。口頸部を欠くが撫で肩で最大径は胴下部にあり、高台は垂直に深くしっかりと削り込まれている。他に2合半徳利、5合・1升徳利ともにそれぞれ60~70個体ほどが出土しているが、そのほとんどは18に比べより後出と考えられるものである。

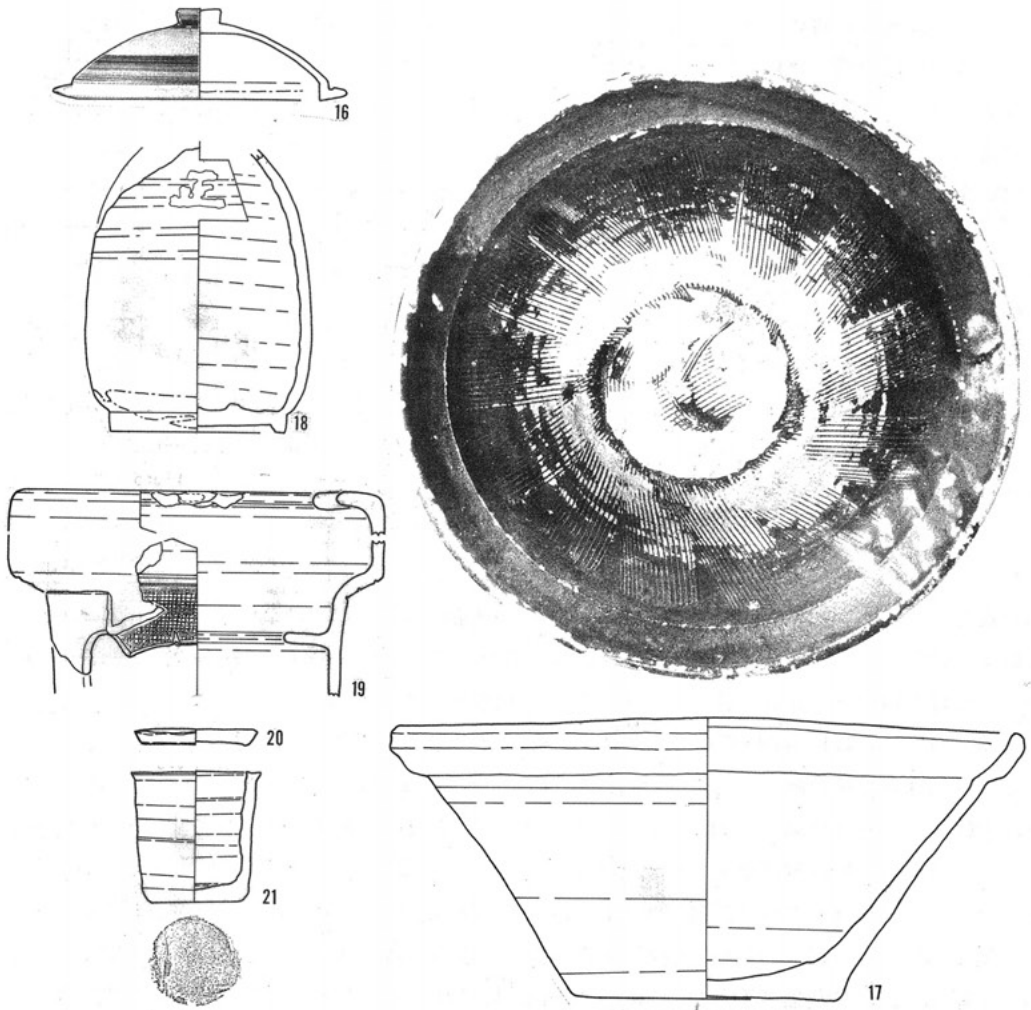
土器 19は2類c口に分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。下半を失っており、足の有無は不明であるが、器高は15-16cmほどであったと思われる。口縁の末端は内側に屈曲し、突起が貼付されている。突起は一つしか認められないが、類例から判断すると三つあったであろう。胴部には開口部があり、外面から作り出されたものと思われる。胴部の内側には板状の突起が巡っている。内側の端から1cmほどは火熱によると思われる赤黄変が見られる。口縁部・胴部外面には横のミガキが施され、光沢を持つ。胴部外面には格子状の装飾がある。このほかに瓦質・土師質の火鉢類の小片が多数ある。

焼塩壺(20, 21) 20はウ類に分類される蓋。濃いピンク色を呈する。上面は手掌による押圧(以下手掌痕と呼ぶ)が見られ凹凸が著しい。下面はやや窪み、側面と交わる部分が突塊状をなす。下面から側面にかけて布目が見られ、形態的に整っており、型で成形されたものと考えられる。21はIII類aに分類される身。刻印はない。黄褐色を呈する。底面には回転糸切りの痕が認められる。

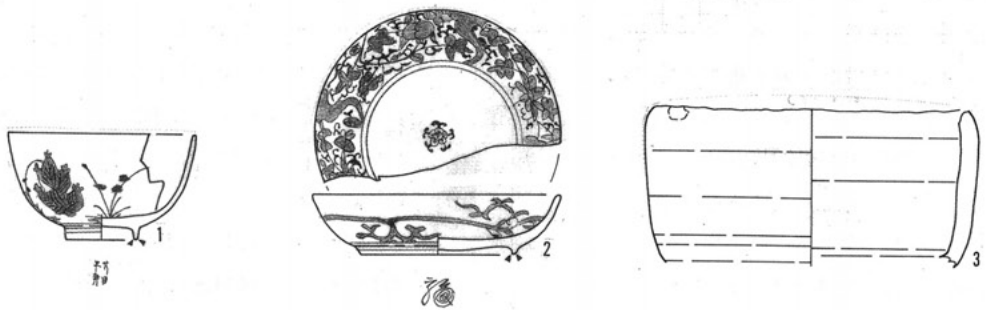
C26-2 (IV-200図) 陶器(1, 2) 1, 2は灰釉碗でTC-1-cに属す。

C27-1 (IV-003図) 磁器(1, 2) 1は碗でJB-1-gに属す。体部には草花とコンニャク判による松が描かれ、高台裏には「大明年製」銘がみられる。2は皿でJB-2-eに属す。見込みには五弁花、高台裏には渦福が描かれている。外文様の唐草は縁取りがある。

第IV章 江戸時代の遺物



C26-1 (2)



C27-1

IV-003図 C26-1(2)、C27-1出土遺物

第一節 陶磁器・土器

土器 3 は硬質瓦質の火入れ。輪積み成形である。底部を欠損している。内外面とも横にナデられている。口縁上端には敲打痕が巡っている。

C27-2 (IV-004図) 磁器 1 は碗でJB-1-gに属す。高台裏に「大明年製」銘がみられる。

陶器 2 は灰釉碗でTC-1-cに属す。

C27-5 (IV-004図) 焼塩壺 1 はイ類2に分類される蓋。胎土には雲母の大きな粒子が含まれる。橙赤色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。側面には完全に乾燥する前に手でもったことを示すように並ぶ指頭の痕がある。ほかに同様の蓋、I類3の身各1がある。

C28-1・2 (IV-004, 005図) 本遺構より出土している陶磁器はIII期が主体である。

磁器(1-6) 4 は筒形碗でJB-1-lに属す。1は皿でJB-2-eに属す。口縁は輪花を形成している。高台裏には一重圏線内に「大明年製」銘がみられる。2は小皿でJB-3-aに属す。口縁は輪花を形成している。見込みには五弁花が描かれ、側面には下部にタコ唐草、上部に唐草が組合されている。外文様の唐草は縁取りを有する。高台裏には二重圏線内に二重角枠の渦福が描かれている。また釉が二次焼成によって変質している。3は鉢でJB-5に属す。口縁は輪花を形成し、口唇には口鏽が施されている。見込みには唐草が細い線で丁寧に描かれ、高台裏には一重圏線内に二重角枠の渦福が描かれている。南川原窯ノ辻窯(大橋 1986a)出土の製品に類似するものである。5 は猪口でJB-7-bに属す。体部上半にコンニャク判によって紅葉が描かれている。6は小坏でJB-6-aに属す。コンニャク判と染付を組合せて草花を描いている。釉が二次焼成のため変質している。

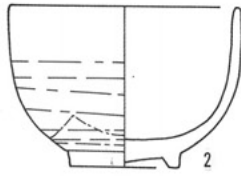
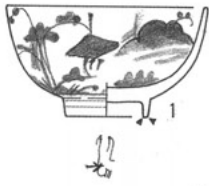
陶器(7-17) 7 は灰釉碗でTC-1-cに属す。釉は高台脇まで施されている。高台裏に墨書がみられる。8-10は京焼系の碗である。8は色絵碗でTD-1-bに属す。高台脇は面取りされている。上絵の具は剥げ落ちており色調は不明である。9, 10は平碗でTD-1-hに属す。9は色絵碗で高台裏も施釉されている。上絵の具は剥げ落ちて色調は不明である。また高台裏には楕円内に「清閑寺」銘の刻印が施されている。10は底部片で、高台裏には「清」銘の刻印が施されている。11は銅緑釉の鉢でTB-5-dに属す。見込みには蛇ノ目状の釉剥ぎが施されている。高台脇は面取りされている。12は香炉でTC-9-bに属す。13は仏花器でTC-11に属す。鉄釉が施されているが、二次焼成のため変質が著しい。14は蓋でTC-14-bに属す。表面に鉄釉が施されている。15は小物でTE-35に属す。底部には糸切り痕がみられる。16は播鉢でTC-29に属す。鉄釉が施されている。1単位16条の播目が施されている。底部には糸切り痕を残す。17は鉢でTB-5-aに属す。内外面ともに渦巻状の刷毛目が施されている。

徳利 18は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利である。完形品であるが釘書はない。口唇部は鏝状に張り出し、外縁部が軽く撫でられている。頸部は長く撫で肩で最大径は胴部中程にあり、全体に紡錘形を呈している。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られ高台の削り込みも深い。他に2合半徳利、5合・1升徳利ともに20個体ほどが出土しているが、それらの多くは18に比べより後出と考えられるものである。またいわゆる船徳利と思われるものも若干認められる。

灯火具(19-21) 4点の出土であり、全て志戸呂系である。19, 20は油皿、口径はそれぞれ11cm, 10.4cm。同じ形態のものが他にもう1点出土している。21は受付、口径11cm。19は三分二が残る。他はほぼ完形である。なお全ての灯火具の口唇には厚く灯芯の油痕が全周する。

カワラケ(22-26) 口径は以下の通り。22が23.4cm, 23, 24はそれぞれ16.2cm, 15.8cm。25が

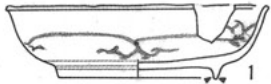
第IV章 江戸時代の遺物



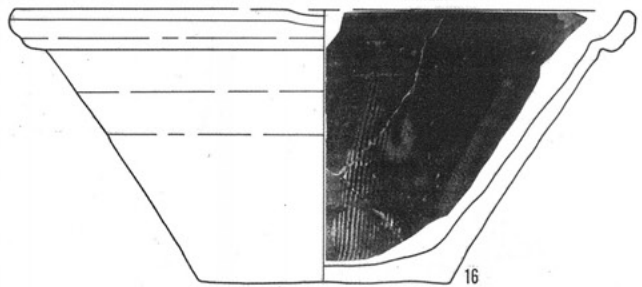
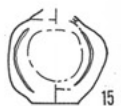
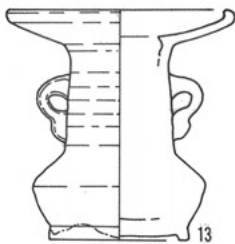
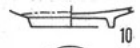
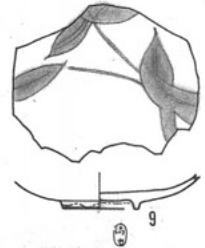
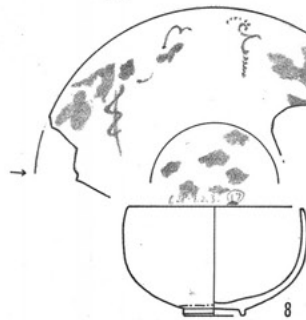
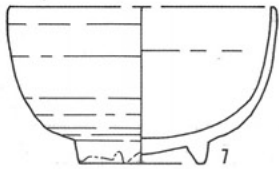
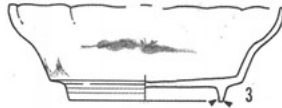
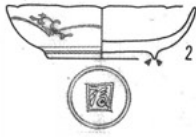
C27-2



C27-5



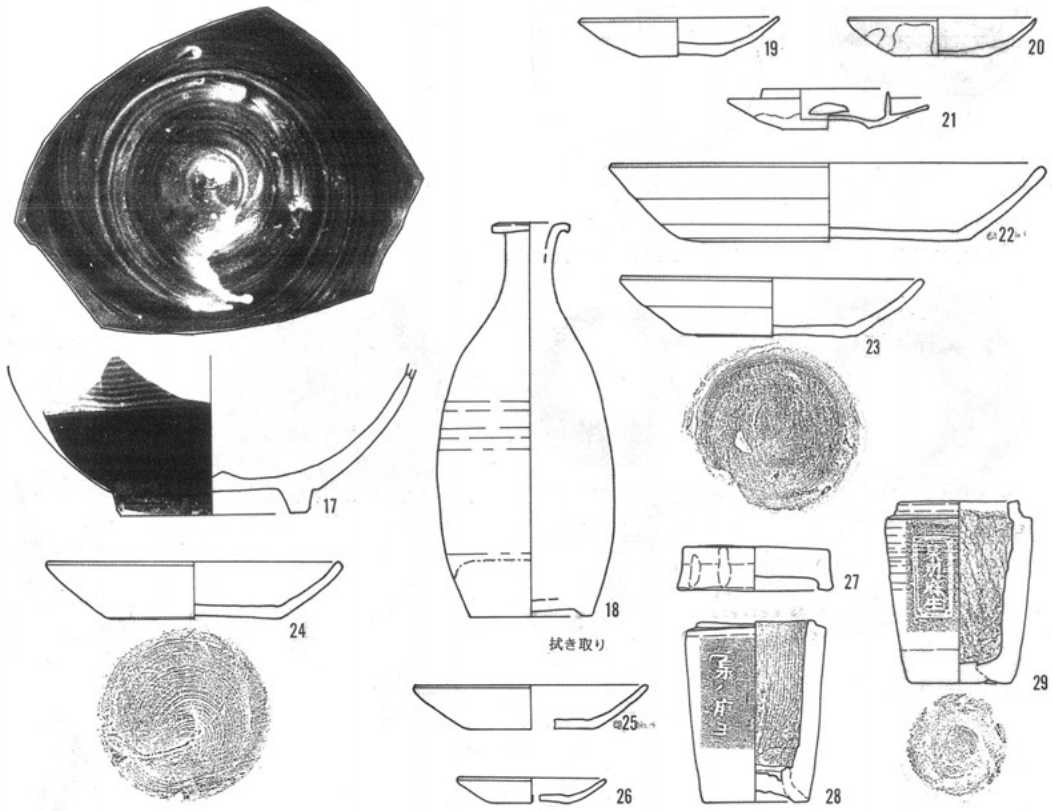
平
表
明



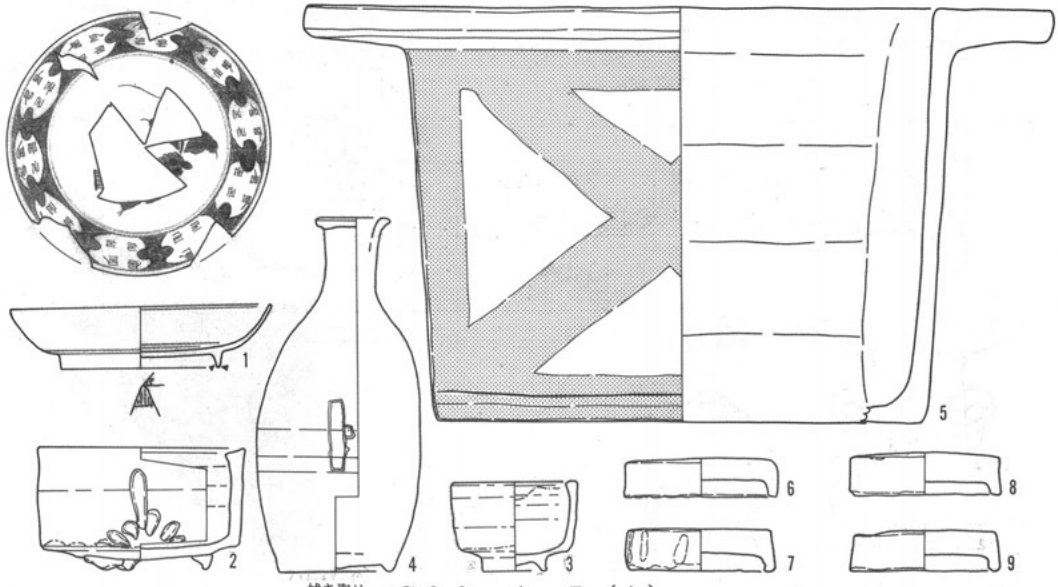
C28-1・2(1)

IV-004図 C27-2, C27-5, C28-1・2(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器



C 2 8 - 1 · 2 (2)



拭き取り C 2 8 - 4 · 5 (1)

IV-005図 C28-1・2(2)、C28-4・5(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

12.4cm。26が8cm。なお26は焼成後、底部に穿孔されたカワラケである。25は三分一が残存し、他はほぼ完形である。灯芯の油痕は24、25に認められ、特に25は口唇を全周する。26には内外面に煤の付着がある。明確でない25を除き、全て左回転糸切り底である。

この遺構のカワラケの底部片は全部で27点確認されている。破片であり、はっきりしないが、23-25の形態、すなわち四寸以上五寸五分以下のものが多く出土しているようである。

焼塩壺(27-29) 27はI類2に分類される蓋。胎土には雲母の粒子が含まれる。橙赤色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。側面は横にナデられて調整されており、指頭痕が並ぶ。28はII類2 a に分類される身。色調および胎土は27に類似する。刻印はやや判然としないが3類3であろう。内面は底部近くが平滑で、その上に粗い布目が見られる。底面は中央が深く抉られている。29はII類1 b2に分類される身。肌色を呈する。刻印は3類1 b。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。このほか土器は10個体以上あるが、いずれも小片である。

C28-4・5 (IV-005, 006図) 陶磁器は18世紀前半に位置付けられるが量は多くない。出土例のきわめて稀な「御壺塩師 難波浄因」の刻印をもつものと、これと同形でありながら「泉州麻生」の刻印をもつもの、また「泉州麻生」の刻印をもちながら器形の異なるものとの計4点の焼塩壺が出土したこと、さらにこれに対応するように蓋も出土している点で注目し値する。

磁器 1は皿でJB-2-cに属す。器厚は2-3mmと薄い。高台裏には銘が描かれている。見込みには異形字文様が描かれているが、これはL32-1の86と共通するものである。

陶器(2, 3) 2, 3は香炉である。2はTC-9-dに属し、底部に脚を有す。3はTC-9-aに属し、輪高台をもつ。

徳利 4は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、縁取り状の釘書が注目される。口唇部は小さく鐔状に折り返され、頸部は長く撫で肩である。最大径は胴部中程にあって、全体にやや小振ながらも紡錘形を呈する。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られ、高台の削り込みも深い。2合半徳利、5合・1升徳利ともに小量が認められるのみである。

土器 5は1類dに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。上方にやや開く方形の体部と、厚く幅の広い鐔状の口縁部とからなる。底面はほとんど残っていないが、体部とほぼ同じ厚さであり、足はなかったと思われる。体部外面は横および縦のケズリで平滑に整えられ、底面と交わる部分は強くケズられて面を構成している。内面は周囲がナデられ、その内側には横のナデが見られる。わずかに残る底面外側にはスグレ状の圧痕が残っている。口縁部の上と側面には金属光沢を帯びる朱彩が施されている。体部の側面は図のように四周および対角線に沿って墨が塗られている。ほかに、硬質瓦質の火鉢類の破片1がある。

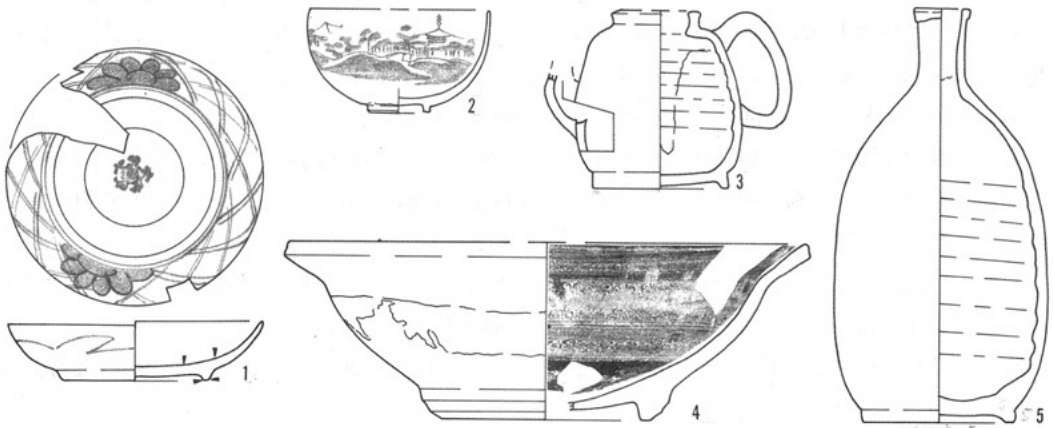
焼塩壺(6-13) 6はI類1 bに分類される蓋。肌色を呈する。7-9はI類2に分類される蓋。橙赤色を帯びた褐色を呈する。7の側面には指頭痕が見られる。10-12はII類2 a, 13はII類2 b2に分類される身。10は5類1, 11-13は3類1 bの刻印をもつ。10-12の内面は、底部近くが平滑で、その上に粗い布目が見られる。13の内面にはよじれたような粗い布目が見られる。

C28-8 (IV-006図) 磁器 1は碗でJB-1-eに属す。型紙摺りによって貝と海草を描き、グミをかけている。

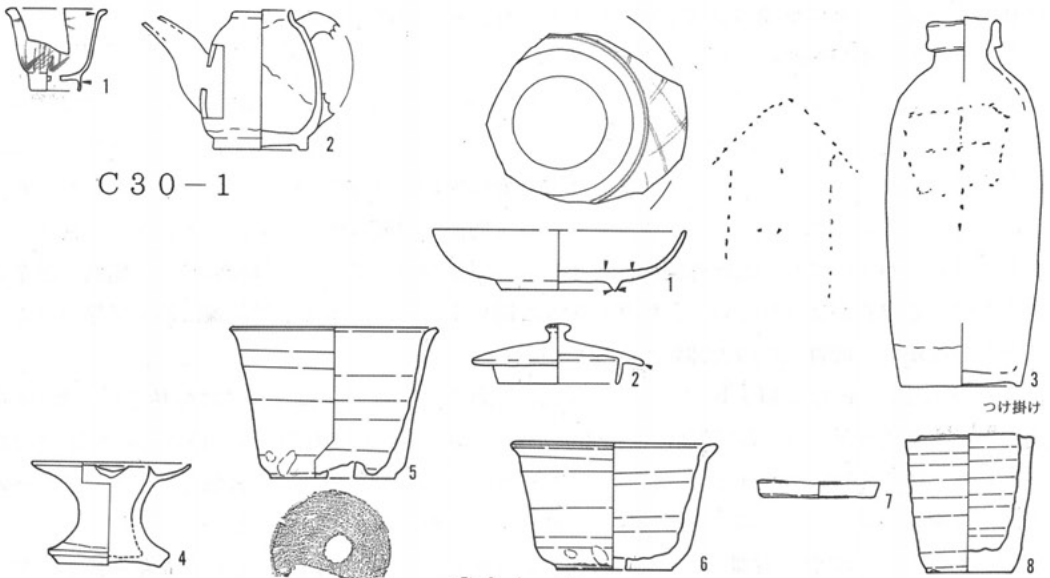
第一節 陶磁器・土器



C28-4・5 (2)



C29-3



C30-1

C31-1

IV-006図 C28-4・5(2)、C28-8、C29-3、C30-1、C31-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

C29-3 (IV-006図) 磁器 1はJB-2-mである。呉須の発色はやや鈍い。

陶器(2-4) 2は色絵の碗で、TD-1-bに分類される。器面は、緑、青、金で風景を上絵付けしている。底部は無釉で、畳付外周は面取りされている。3は鉄釉の水注で、TC-27-aに分類される。二次焼成を受けている。4はTB-5-bで、花文の印を施した後、白土を全面にラフに塗り、拭き取らずに上釉を掛けている。高台内、体部下半に鉄釉を化粧掛けしている。

徳利 5は瀬戸美濃産の5合徳利である。鉛釉に化粧掛けが掛けられベタ刻の釘書があるが、判読できない。口唇部は小さく鋸状に折り返され、頸部は長く撫で肩で、最大径は胴部中程にある。高台はほぼ垂直に深く削り込まれている。2合半徳利、5合・1升徳利、船徳利が少量ある。

C30-1 (IV-006図) 磁器 1は地呉須を用いた染付で、JC-21に分類される。内面は無釉。

陶器 2は鉄釉の水注で、TC-27-aに分類される。二次焼成を受けている。

C31-1 (IV-006図) 磁器 1はJB-2-mである。呉須の発色はやや鈍い。

陶器 2はいわゆる青土瓶の蓋で、TZ-34-aに分類される。つまみは花状に装飾されている。

徳利 3は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利である。胴部の表裏にはそれぞれ異なる点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返され、頸部は短く寸胴で、つけ掛けされているため胴部下端は無釉である。2合半徳利、5合・1升徳利ともに20個体前後が出土している。

灯火具 4は口径8.7cm、器高5.4cmの灰釉有脚受付である。ほぼ完形。他に透明釉油皿、受付、有脚受付の小片が出土している。

土器(5, 6) 5, 6は軟質土師質の植木鉢。ロクロ成形である。5は底部がわずかに絞られ、体部は口縁に向かってほぼ直線的に広がる。6は底部が強く絞られ、体部は上方に直線的に広がり、口唇部付近で強く屈曲して外反する。底面には焼成前に設けられた孔がある。ほかに火鉢類の小片がある。

焼塩壺(7, 8) 7はウ類に分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。側面と底面は比較的整っているが、上面には手掌痕が残り凹凸が著しい。8はIII類aに分類される身。刻印は認められない。

D26-1 (IV-007図) 磁器 2は青磁碗でJB-1-aに属す。畳付には多量の耐火砂が付着している。

陶器 1は皿でTC-2-dに属す。長石釉が全面に施され、高台裏には三箇所カ所のピン痕がみられる。見込みには印花が施されている。

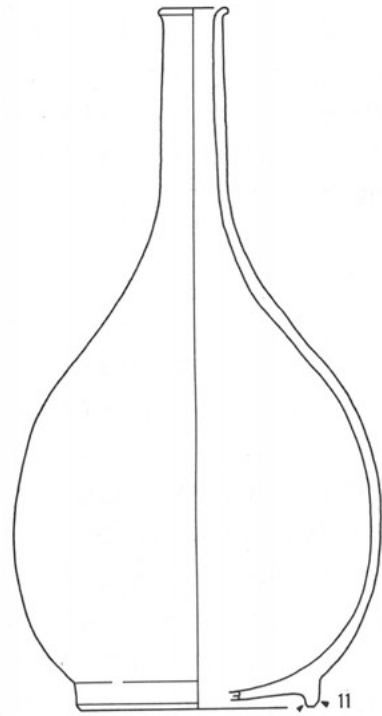
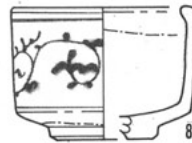
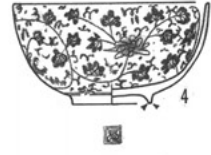
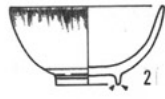
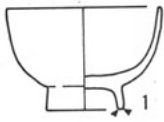
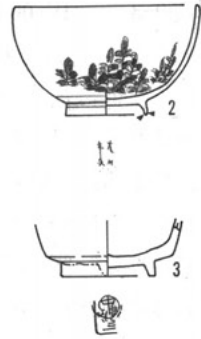
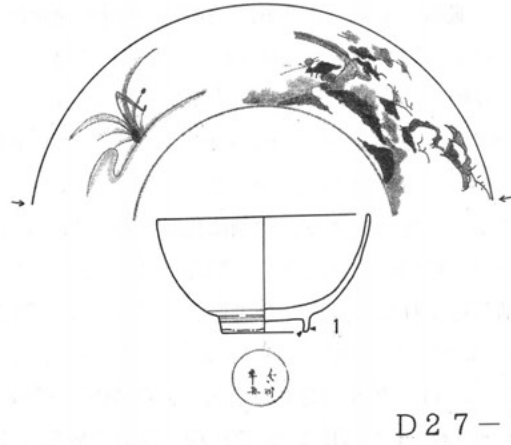
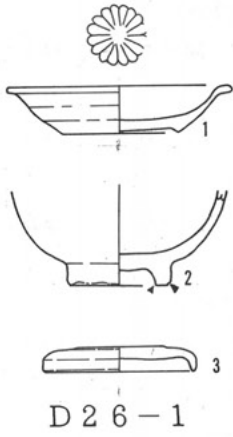
土器 3は軟質土師質の蓋。ロクロ成形である。やや黒ずんだ褐色を呈する。上面中央が一段高くなり、わずかに回転糸切り痕が見られる。形態や大きさから焼塩壺の蓋とも思われるが、きわめて念入りに作られていることなどから異なった器種の蓋や小型の皿である可能性もある。

D27-1 (IV-007図) 磁器(1, 2) 1, 2は碗でJB-1-dに属す。1は高台裏に一重圏線内に「太明年製」銘がみられる。2は染付による草花とコンニャク判による松が交互に描かれている。高台裏には一重圏線内に「太明年製」銘がみられる。

陶器 3は香炉でTD-9に属す。高台裏には一重角枠内に「中鳴三」銘の刻印がみられる。

D28-1 (IV-007, 008図) 磁器(1-7, 10-11) 2-4は碗である。2, 3はJB-1-gに属し、3の高台裏には渦福が描かれている。4はJB-1-eに属し、高台裏には二重角枠内に渦福が描かれている。5は皿でJB-2-eに属す。6は小皿でJB-3-aに属し、見込み中央にはコンニャク判による五弁花が、

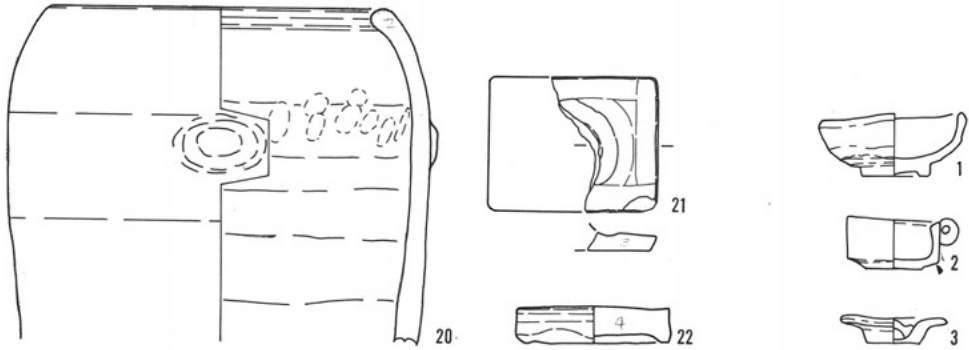
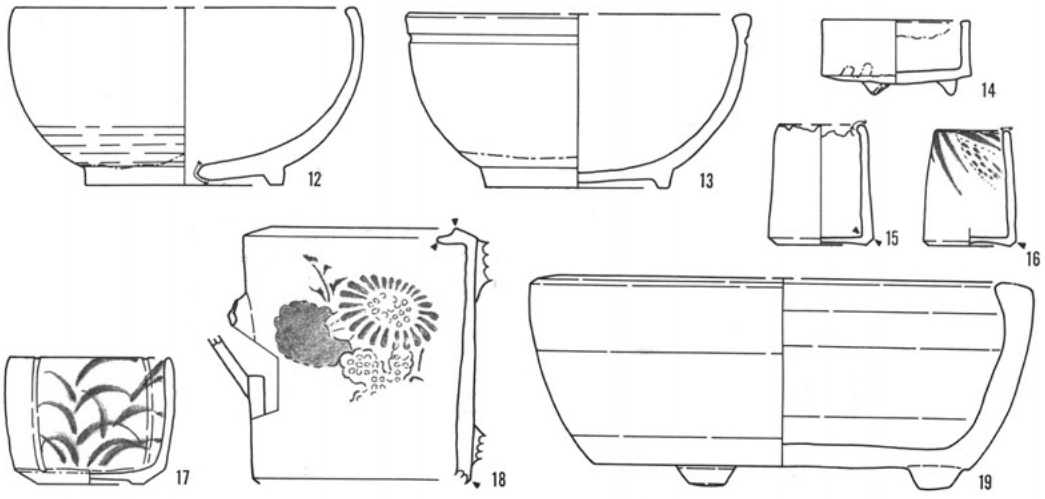
第一節 陶磁器・土器



D 2 8 - 1 (1)

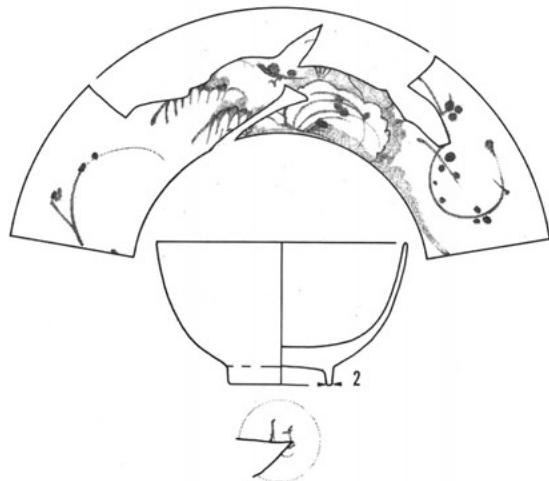
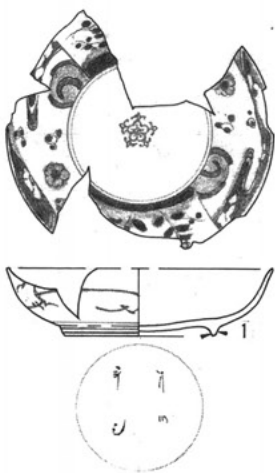
IV-007 図 D26-1、D27-1、D28-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物



D 2 8 - 1 (2)

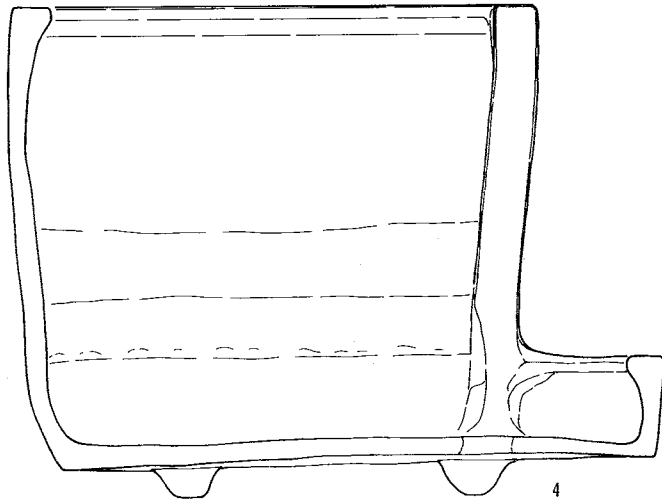
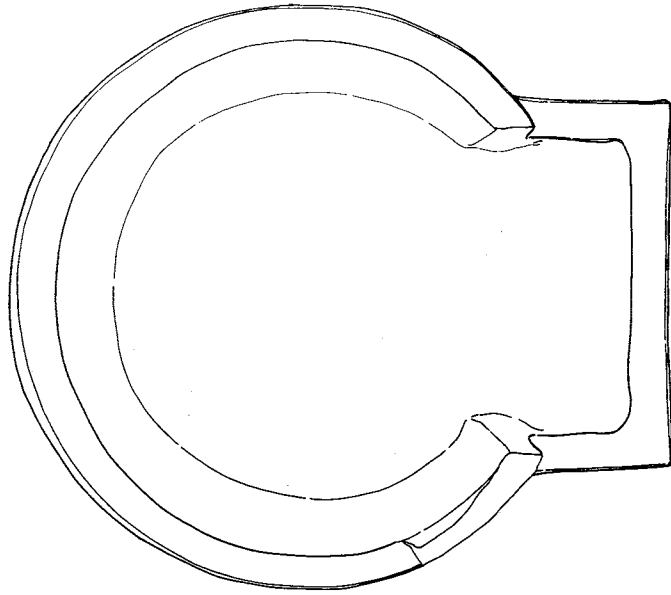
D 3 0 - 2



D 3 2 - 1 (1)

IV-008図 D28-1(2)、D30-2、D32-1(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器



4

IV 009 030 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

高台裏には一重圏線内に「太明年製」銘が描かれている。1は白磁の小坏でJB-6-aに属す。7は仏花器でJB-11に属す。胎土は灰白色を呈す。10は紅皿でJB-17に属す。型打ち成形によって外面は菊花を形成している。11は白磁の長頸瓶でJB-10-aに属す。

陶器(8, 9, 12-18) 9は京焼系の色絵碗でTD-1-bに属す。上絵は変質し色調は不明である。高台脇は面取りされている。12, 13は鉢でTC-5に属す。ともに灰釉が施されているが、12は底部中央を穿孔し植木鉢として再利用している。また二次焼成を受け釉が変色している。13は見込みに三箇所ピン痕がみられる。口縁は肥厚してやや内湾しており、注口をもつ可能性もある。8, 14, 17は香炉である。8は陶胎染付でTB-9-aに属す。高台は蛇ノ目高台を呈し、文様は白泥を施してから描かれている。14はTC-9-aに属し、底部に円錐状の脚が三箇所貼付されている。17はTD-9-aに属す。高台は蛇ノ目高台を呈するが、体部は型打ち成形によって二段角の隅丸方形を呈している。文様は鉄絵によって描かれている。15, 16は灰落しでTD-24-aに属す。口唇には煙管による敲打痕がみられる。16は鉄絵によって文様が描かれている。全体に黒ずんでおり二次焼成を受けた可能性がある。18は水注でTC-27-bに属す。胴部は型紙摺りによる鉄絵の草花文が描かれ御深井釉が施されている。

土器(19-21) 19はI類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面は横のケズリで平滑に整えられている。口縁上面と側面には銀彩が施されている。内面には横のナデが見られる。底面外側は平滑であるが、わずかに砂粒の痕が残る。20はI類bイに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。下半はない。小型の把手が一箇所に見られたが、本来は二つが対になっていたものであろう。外面は平滑で側面の一部には銀彩の痕跡が見られる。内面は横にナデが走り、把手の貼付される高さには指頭による圧痕が連続している。21は長方形の蓋。中央につまみをもっていたと思われる。底面にはコビキ等により粘土板を切りだしたことを窺わせる痕(以下コビキ痕と呼ぶ)が見られる。つまみを取り付けたのち、その貼付部分をナデ、さらに四辺をナデた痕が認められる。このほか軟質土師質の火鉢類の小片数個体がある。

焼塩壺 22はII類2に分類される蓋。胎土には雲母の粒子が含まれる。橙赤色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。側面は横にナデられて調整されており、側面下端は斜めに削がれたように指頭によると思われる押圧がある。ほかにII類2bの小片1点がある。

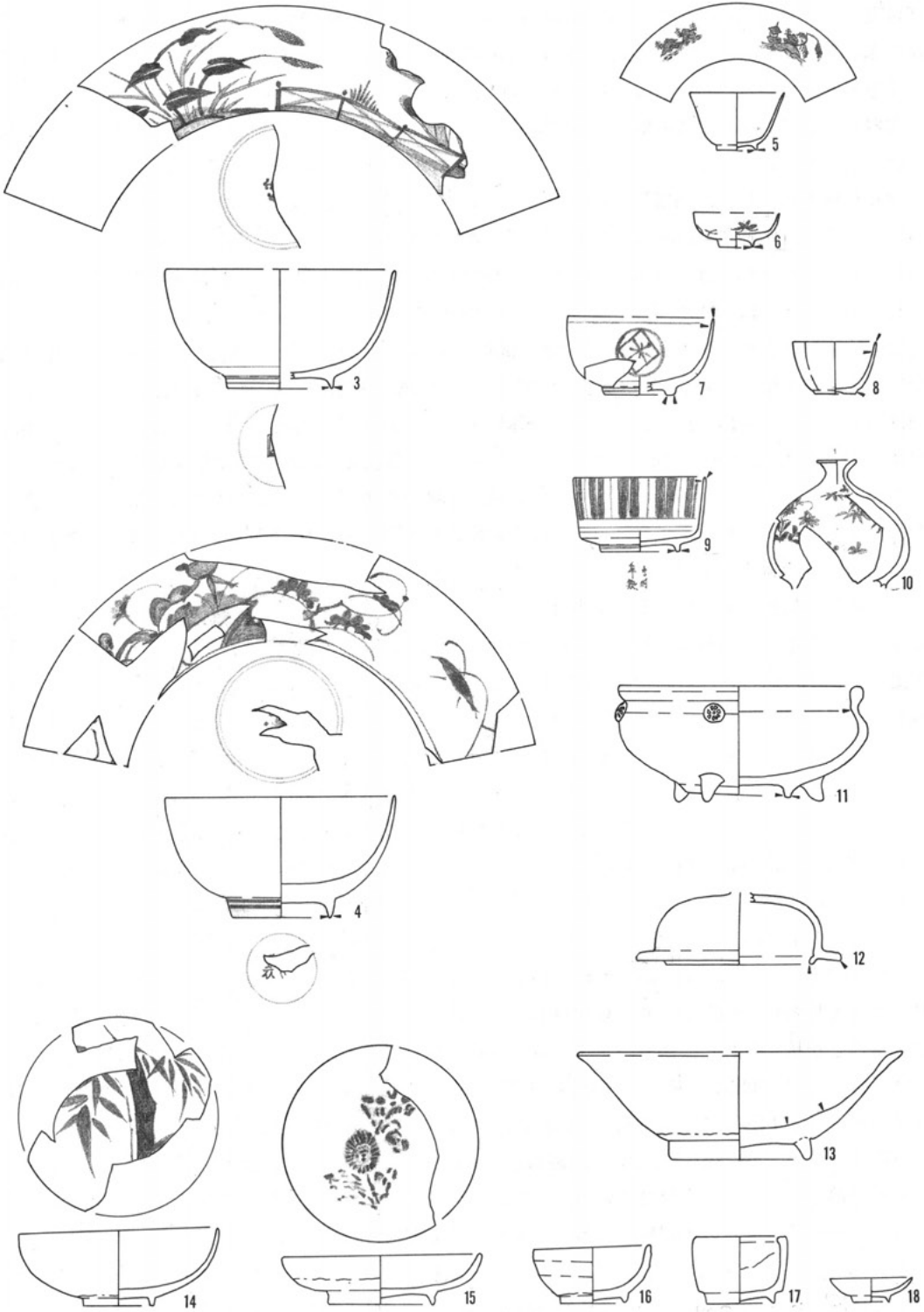
D30-1 (IV-009図) 土器 1はII類bに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形で、ほぼ完形で出土した。足が四つ設けられている。外面は細かく剥落している。内面上方、口唇部は火熱によると思われる剥落があり、煤が付着している。底面外側にはチヂレ目が見られる。また突出部と本体とが接合された痕跡や、足を貼付する際に刻み目を入れた痕も見られる。

D30-2 (IV-008図) 陶器(1-3) 1はTC-6である。見込み、外面上半に鉄釉が施される。2は灰釉の餌入で、TC-30に分類される。3はTC-14-aである。鉄釉が化粧掛けされている。

D32-1 (IV-008, 010, 011図) 陶磁器を中心に比較的まとまった量が出土しており、時期的にも18世紀前半でまとまりを見せている。また、すべてが二次焼成を受け、火事の後の一括廃棄が想定され、資料として良好な遺構である。本地点ではV期に位置付けられる。

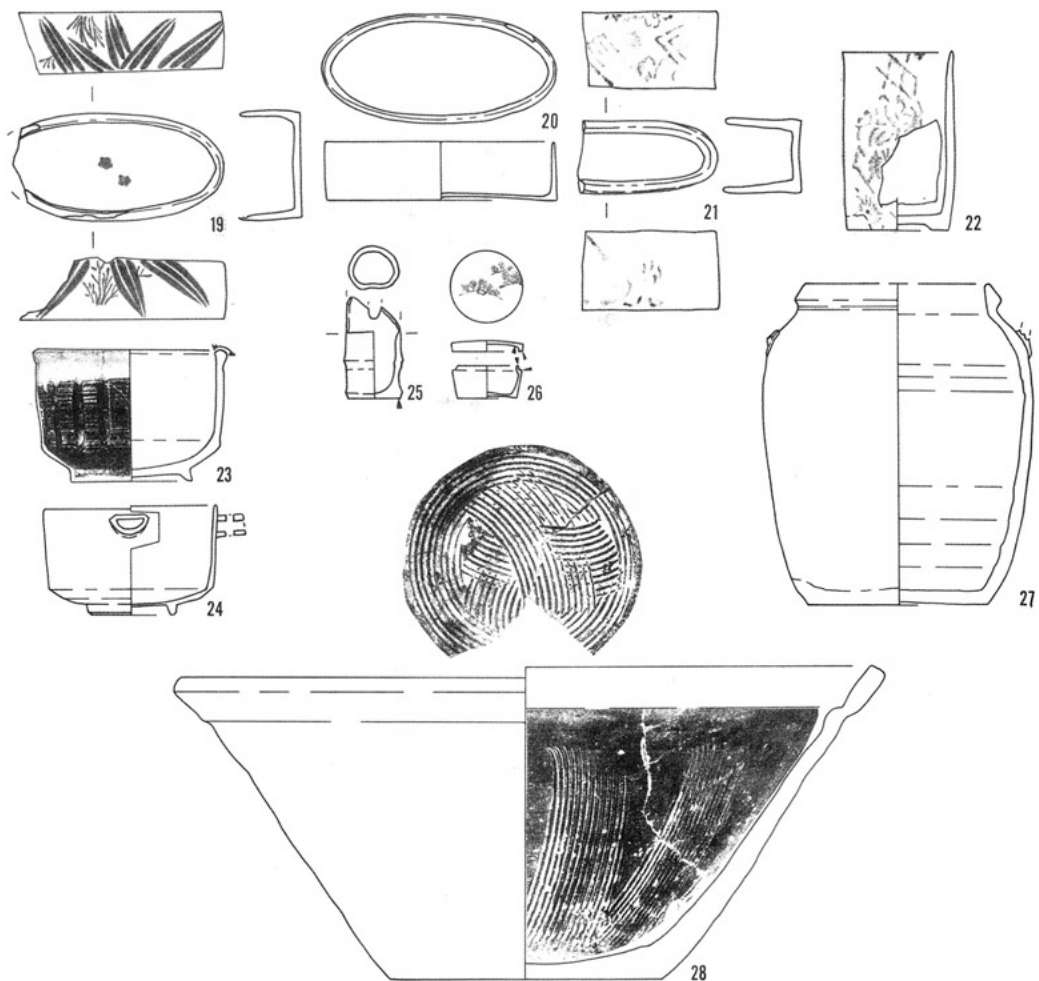
磁器(1-12, 18) 磁器は二次焼成を受けているためいずれも細片で検出されており、L32-1同様、割れ方に際立った特徴を示している。1は染付の輪花皿でJB-2-gに分類される。見込み中央にはコ

第一節 陶磁器・土器

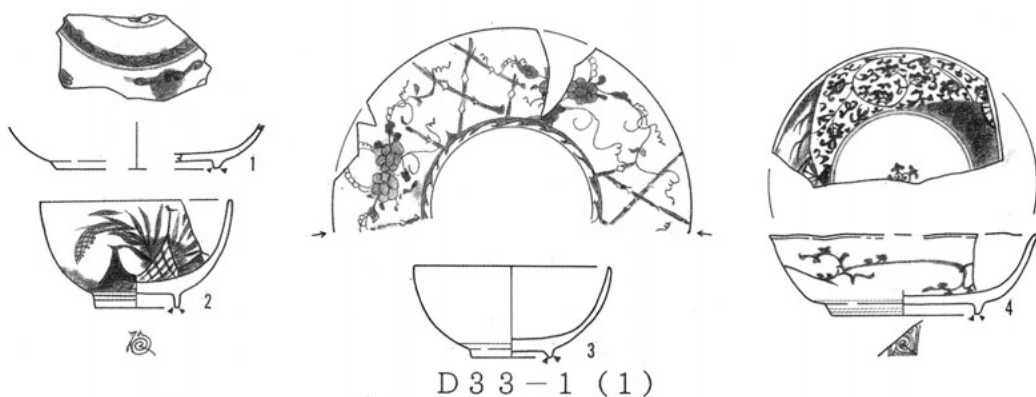


IV-010 圖 D32-1 出土遺物 (2)

第IV章 江戸時代の遺物



D32-1(3)



D33-1(1)

IV-011 図 D32-1(3)、D33-1(1) 出土遺物

第一節 陶磁器・土器

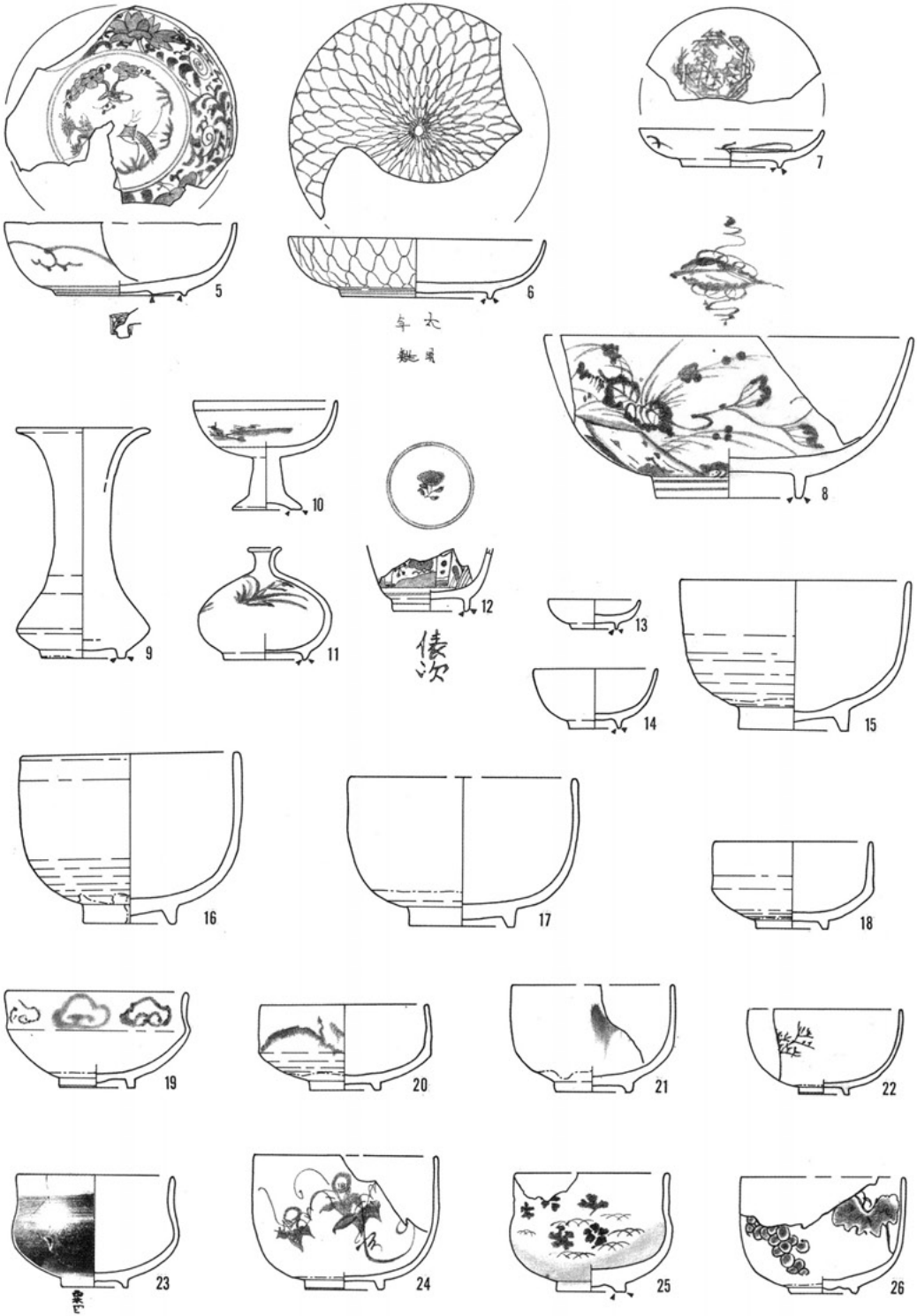
ンニャク判の五弁花が施文される。高台裏にはハリ支えが一箇所認められる。2-4は染付の鉢で JB-5 である。2, 4は呉須の発色、胎土とも悪く、くらわんか手の一群であろう。3は銘の大部分がなく、断定はできないがおそらく二重角枠内渦福であると考えられ、胎土も良好で、内山系の製品であろう。見込みには手書き五弁花が描かれる。5, 6は染付小坏で、それぞれ JB-6-b, JB-6-a に細分される。7は染付で、JB-13-a である。8は八角の型物で、一面には紗綾形文と花文が交互に型押しされ、上より瑠璃釉が施される。高台は幅広で、JB-13 である。9は染付で、JB-13-b に分類される。銘は「太明年製」である。10はいわゆる染錦手で、JB-12 である。梅、竹、花蝶文様を描いているが、枝、茎を釉裏に染付した後、花、葉、蝶を朱、金などで上絵付けしている。11は青磁の三脚付きの香炉で JB-9 に分類される。内面は無釉。12は白磁の壺の蓋で、JB-15 である。18は白磁の紅皿で、JB-17 である。

陶器(13-17, 19-28) 13は TC-5-c で、灰釉が掛けられる。高台は貼付けられている。14は色絵の平碗で TD-1-h に分類される。表面は二次焼成のため上絵の損傷が著しく、竹文を朱、緑などで上絵付けされていた事が判別できるに過ぎない。15は御深井風の皿で花文様を摺絵の技法を用いて描いている。TC-2-e である。16は飴釉で TC-6 である。17は灰釉香炉で TC-9-a に分類される。19-21は鬘盤で、19, 20は TD-25, 21は TC-25 に分類される。19は松葉文様を赤等で、内外面に上絵付けしている。20は二次焼成によって器面の文様がとんでいるので不明であるが、内面は透明釉が施されているのに対し、外面には釉が掛けられておらず、生地の上より例えば素三彩風な装飾が施されていたと推定される。21は器面に摺絵で花文様を描出しているが、極めてラフになされ文様は判別しづらい。22は15, 21同様御深井風で花文様を摺絵の技法を用いて描いている。TC-22 に分けられる。23は TC-9-e で、香炉であるが灰落しとして転用されたようで、口唇部には敲打痕が認められる。24は TD-32 で高台脇面取りがされている。25は竹を模した小型の花生けであろうと考えられる。上部が欠損しているが、径 5mm 程度の孔が穿たれている。TD-22 である。26は TD-18 で蓋には鉄絵の具と呉須で松が丁寧に絵付けされている。底部は無釉。底部脇は面取りされている。27は飴釉の壺で、把手が貼付されていた痕跡が残っている。底部、内面は無釉。TC-15 に分類される。28は TC-29 である。播目は14条で、1単位はやや間隔が開く。

D33-1 (IV-011~014 図) 本遺構からは多量の陶磁器が出土したが、特に京焼系の製品が多く出土していることが注目される。出土遺物の時期はV期に位置付けられるが、そのなかでも新しい様相を示すと考えられる。

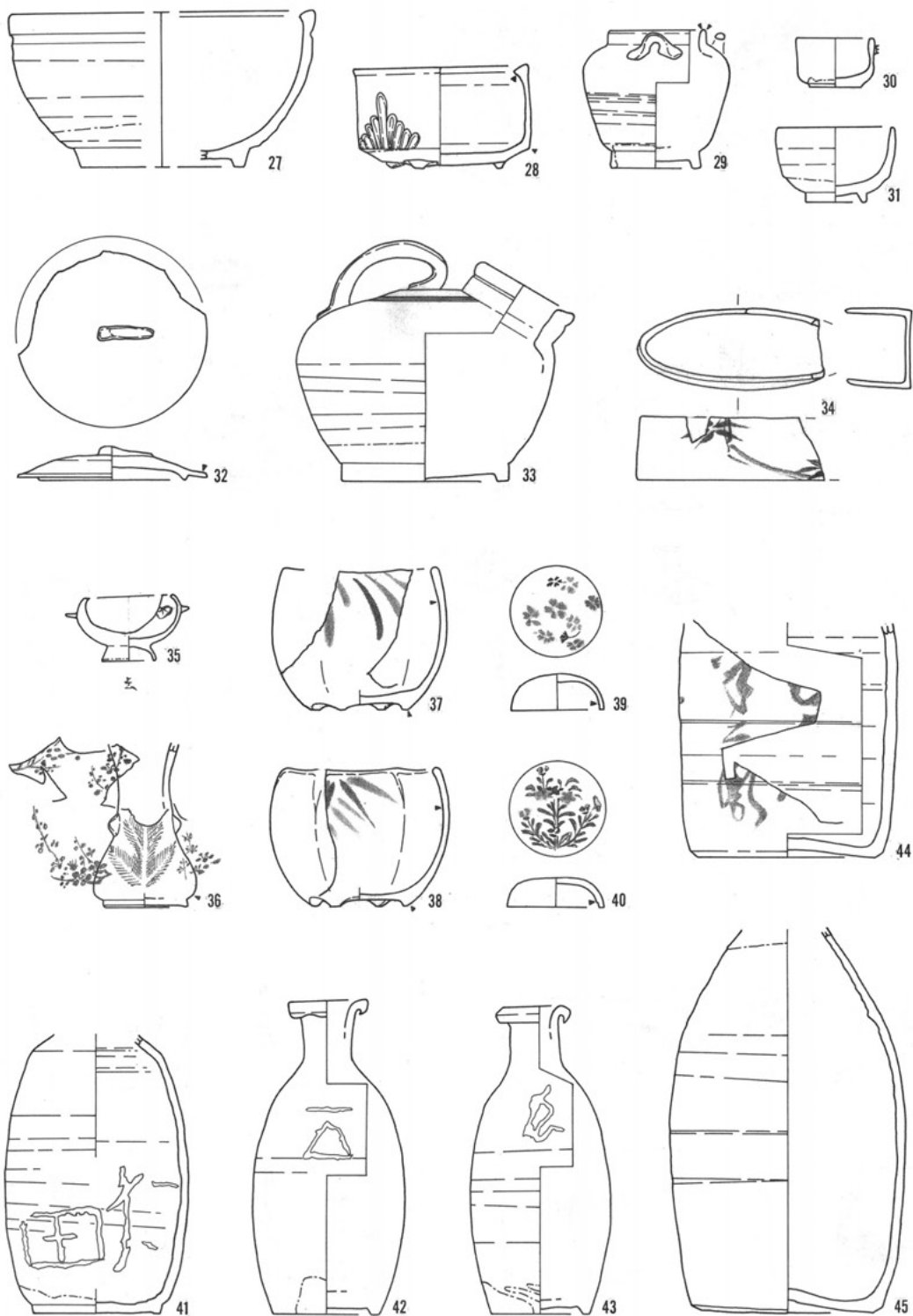
磁器(1-14) 1は中国明末の輸入陶磁で JA-2 に属す。畳付は斜めに面取りされ、高台裏にはカナ痕がみられる。2, 3, 12は碗である。2は JB-1-d に属し、高台裏には渦福が描かれている。3は JB-1-f に属す。12は JB-1-c に属す。高台裏には釘書によって「倭次」と彫られている。4-6は皿である。4, 6は JB-2-e に属す。4の口縁は輪花を形成している。見込み中央には手描きによる五弁花があり、高台裏に二重角枠内に渦福が描かれている。外文様の唐草は線描である。6は見込み、外側面ともに一重の網目文が描かれ、高台裏には「太明年製」銘がみられる。5は JB-2-j に属す。口縁は輪花を形成し高台裏には二重角枠内に渦福がみられる。7は小皿で JB-3-a に属す。見込みにはコンニャク判による文様がみられる。8は鉢で JB-5 に属す。9は青磁の仏花器で JB-11 に属す。全面施釉のため畳付に多量の耐火砂が付着している。10は仏飯器で JB-8 に属す。11は油壺で JB-12 に属

第IV章 江戸時代の遺物



IV-012図 D33-1出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-013 図 D33-1出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物

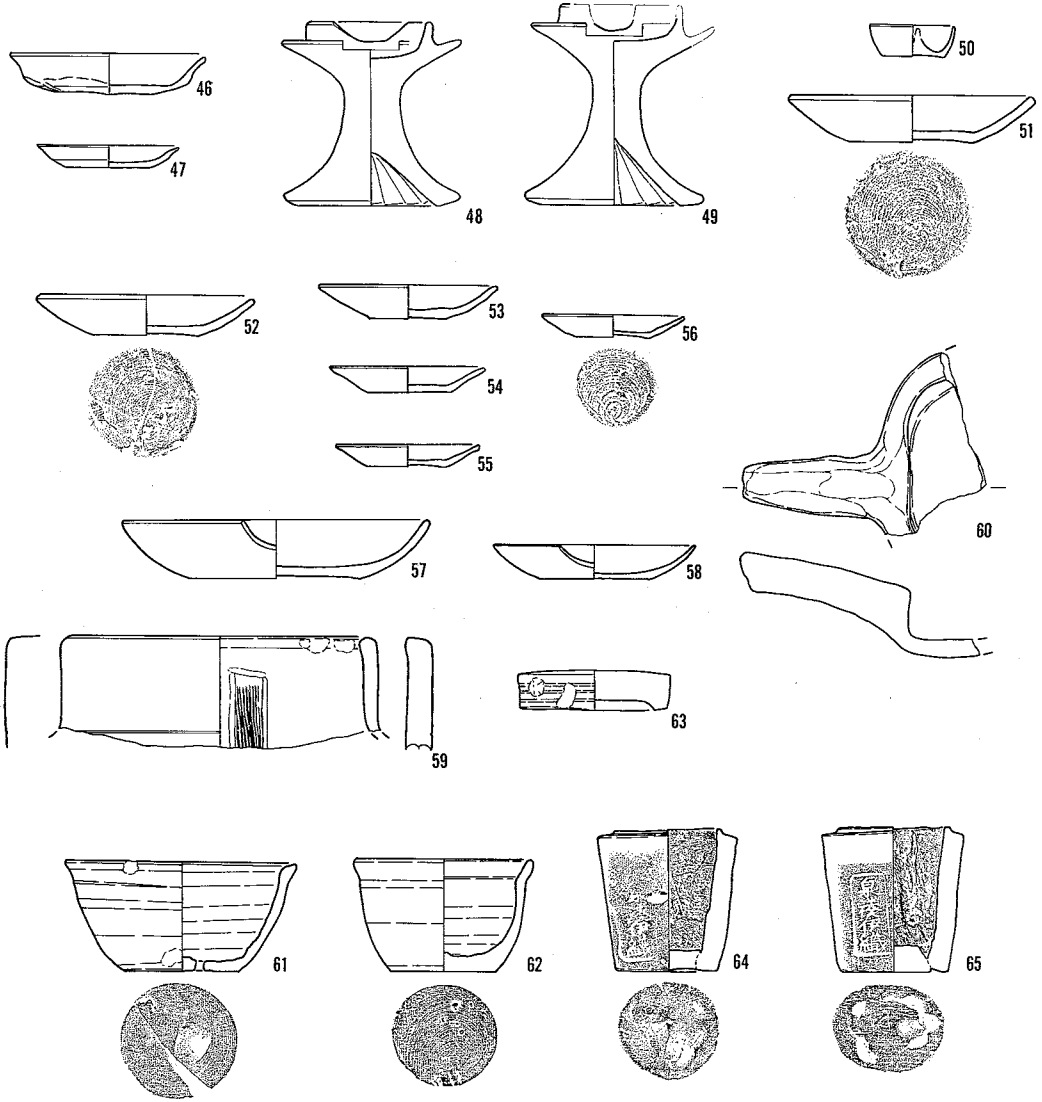
す。13は白磁の紅血でJB-17 に属す。全面に細かい貫入がはいる。14は白磁の小坏でJB-6-aに属す。

陶器(15-40) 15-18, 20, 21は瀬戸・美濃系の碗である。15-17は TC-1-cに属す灰釉の碗で、16は長石を含むためか釉調が白く濁り底部は無釉、15, 17は底部の釉を拭き取っている。18, 20は灰釉のせんで TC-1-1に属す。20には鉄絵と呉須による文様がみられる。21は TC-1-dに属す。畳付は丸い。灰釉が施され底部は無釉である。鉄絵によって文様が描かれている。19, 22-26は京焼系の碗である。19は TD-1-iに属す。見込みに三箇所ピン痕がみられる。高台脇は面取りされている。体部には鉄絵と白土によって雲形文が描かれている。22は TD-1-bに属す。胎土は灰白色で硬質である。高台脇は面取りされている。鉄絵によって枝が描かれている。23, 26は TD-1-aに属す。23は口縁下から高台付根まで下地として鉄釉が施され、そのうえに長石を含むと思われる乳濁色の釉が施されている。高台裏には「粟田」銘の刻印が押されている。26は灰褐色の硬質な胎土である。体部には上絵付けによって葡萄が描かれている。24は TD-1-cに属す。胎土が灰褐色であるため、釉と素地の間に白土が塗られ、その上に鉄絵と呉須によって朝顔が描かれている。高台脇は面取りされている。25は TD-1に属すと思われる。胎土は硬質で灰褐色を呈し白色微砂粒を多量に混入している。内面および外面上半部には白土が施されている。釉は高台裏にも施釉され畳付のみ無釉である。文様は外面白土上に花文が描かれている。

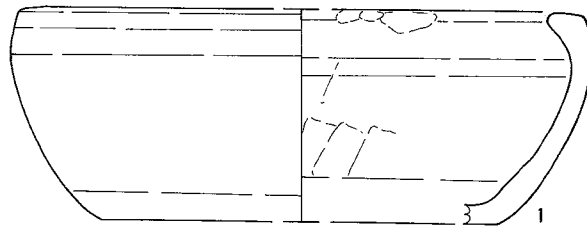
27は片口鉢で TC-23 に属す。底部からの杓掛けによって灰釉が施されている。28, 37, 38は香炉である。28は瀬戸・美濃系で TC-9-dに属す。底部には脚が三箇所貼付されている。37, 38は京焼系で TD-9-aに属す。ともにロクロ成形の後、形打ち成形によって胴張りの断面六角形に仕上げている。また高台も稜線の延長以外はアーチ状に削り取られ脚状を呈している。文様は37では赤、金による上絵が、38では赤、金、黒による上絵が描かれている。ともに赤以外は白絵の具で下描きをした上に施されている。38は E34-2 出土のものと同接合している。29は壺で TC-15 に属す。底部以外に鉄釉が施されている。肩部にはアーチ状の把手が一对貼付されている。30は餌入で TC-30 に属す。把手を欠損している。胎土は灰褐色を呈し硬質できめ細かい。灰釉が施されている。底部は無釉で糸切り痕が残る。31は小坏で TC-6に属す。底部以外に灰釉が施されている。32は蓋で TF-14に属す。胎土は茶褐色を呈し、硬質である。表面に鉄釉が施されている。33は渡瓶で TC-28 に属す。鉄釉が施されている。34は京焼系の鬚盥で TD-25 に属す。胎土は黄白色できめ細かい。底部は無釉で体部には鉄絵と呉須によって竹が描かれている。35は京焼系の仏飯器で TD-8に属すと思われる。高台裏は無釉で図示したような墨書がある。36は仏花器で TD-11 に属す。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。底部は平坦で無釉である。体部には赤、金絵の具によって松、梅が描かれている。また高台裏には図示したような墨書がある。39, 40は合子の蓋で TD-18に属す。ともに胎土は黄白色を呈す。表面は赤、金絵の具により草花が描かれるが、赤絵の具以外は白絵の具によって下地が施されている。

徳利(41-45) 41は瀬戸美濃産の5合徳利である。鉛釉が掛けられベタ刻の釘書が認められる。最大径は胴部中程にあり、高台は深く削り込まれてやや内傾する。42, 43は瀬戸美濃産の2合半徳利でともにベタ刻の釘書が認められる。口唇部は外縁部が大きく撫でられて断面が釣り針状となる。頸部は長く撫で肩である。最大径は胴部中程にあって全体に紡錘形を呈している。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られ、高台の削り込みも深い。44, 45は志戸呂産の徳利で、45では口頸部に茶褐色釉

第一節 陶磁器・土器



D 3 3 - 1 (4)



D 3 3 - 2

IV-014 図 D33-1(4)、D33-2 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

が掛けられている。最大径は胴部中程で底部外周にはヘラ削りが施されている。44の胴部には墨書がある。2合半徳利、5合・1升徳利ともに45—75個体ほどあるが、志戸呂産の徳利はせいぜい5個体分ほどが認められるに過ぎない。

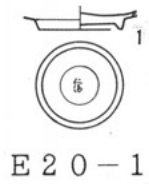
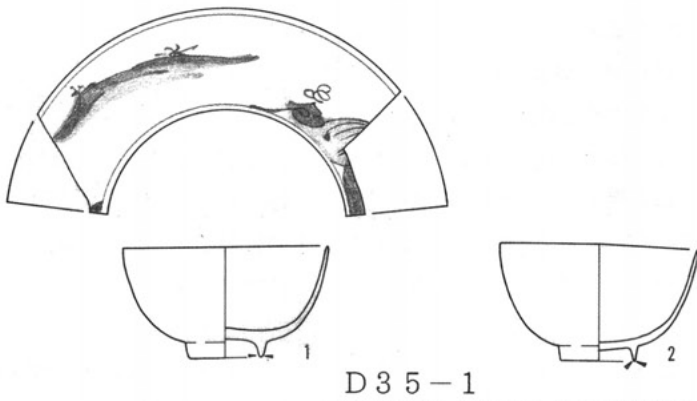
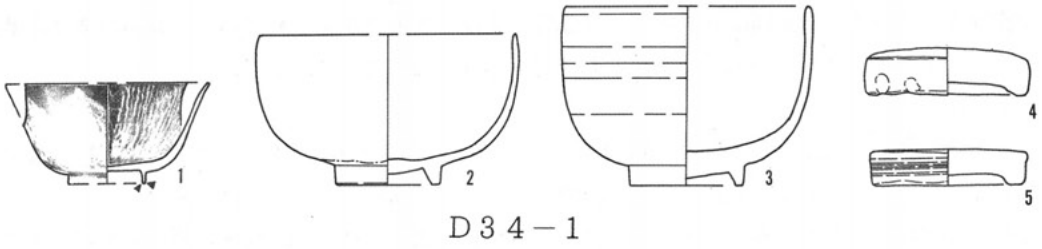
灯火具(46-50) 志戸呂と素焼を中心としての灯火具は16点ある。うち志戸呂系は9点、油皿(46, 47)6点、受付3点の出土である。46の口径10.3cm, 47は7.5cm。二つともほぼ完形である。灯芯の油痕は46が口唇を全周するのに対し、47は二箇所には認められない。底面の調整も46がヘラケズリであるのに対し、47は左回転の糸切りのままである。47と同様な小型の油皿はもう1点出土している。やはり左回転の糸切りである。素焼の灯火具は7点の出土。受付3点、古い形態の有脚受付が3点(48, 49)、乗燭1点(50)である。48の口径・器高はそれぞれ9.6cm, 9.8cm, 49のそれは9.8cm, 10.7cmである。二つとも三寸強の口径で、完形に近く、明らかに銀彩が施される。灯芯の油痕は認められない。他にも同じ形態の受付の底部片が1点出土している。乗燭(50)の口径は4.6cm。三分二が残存している。左回転の糸切り底である。鉄釉の灯火具の小片も出土しているが、流れ込みによるものと思われ、確実にここから出土しているのは志戸呂系と素焼系のみである。特に古い形態の素焼の有脚受付の出土が目された。

カワラケ(51-58) 51, 52は比較的大型であり、それぞれの口径は13.6, 11.6cm。53-56は小型であり、口径は7.6-9.5cm。53が三分二しか残っていない。ほかはほぼ完形である。拓本にある通り底面は全て左回転糸切りによる。灯芯の油痕は51が口唇を全周、52は半周、53は部分的に認められた。54-56には認められない。54には内外面に煤が付着している。57, 58は上製で、口径は57が16.4cm, 58が10.9cmで、2点ともほぼ完形だが、口縁に半月形の意識的な打ち欠きが認められる。底面はヘラケズリ調整。灯芯の油痕は57に認められず、58は打ち欠き部分以外の口唇に付着する。この遺構出土のカワラケは106点であり、陶磁器類を含めた総数のほぼ35%を占める。口径のわかるもの32点のうち二寸五分—三寸のものが22点ともっとも多い。次に三寸五分—四寸のもの5点が続く。底部片の検討からもほぼこの傾向が追認された。すなわち小型のカワラケが多い。なおこれら小型のカワラケには灯芯の油痕は付着していない。

土器(59-62) 59は2類aに分類されると思われる硬質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。口縁部外面は丁寧にミガかれている。小破片であり、全体の姿は明らかではないが、口縁上端から切り込みを持ち、板状の突起が設けられた風炉の類であったと考えられる。E34-1に類例が見られる。60は軟質土師質の十能。握りの部分は体部に接着され、ケズリにより整形されている。底面外側にはチヂレ目が見られ、周縁部には粘土板を折り曲げた際に生じる小亀裂が多く認められる。61は軟質土師質の植木鉢。ロクロ成形である。体部は底部から上方へやや内湾しながら広がる。底は焼成後に穿孔されている。焼成後の穿孔は類例が稀で、植木鉢以外の目的で作られたものが転用されたとも考えられるが、器形は植木鉢の範疇に入るものである。62は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。体部は底部から内湾しつつ広がり口縁部で屈曲して外反する。底に回転糸切り痕が見られる。このほかに軟質土師質の火鉢類が十数点見られる。

焼塩壺(63-65) 63はイ類2に分類される蓋。胎土には雲母の粒子がわずかに含まれる。やや橙色を帯びた褐色で下面には粗い布目が見られる。側面は横に条痕が走り、指頭の痕もみられる。64,

第一節 陶磁器・土器



IV-015 図 D34-1、D34-2、D35-1、E20-1 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

65はII類2bに分類される身。ともに2類5に分類される刻印をもつ。底面にはスグレ状の圧痕が認められる。64の内面は下の三分一ほどが平滑で、その上には粗い布目が見られる。65の内面は粗い布目が見られ、その上からケズられている。ほかに同種の蓋2, 身1が見られる。

D33-2 (IV-014図) 土器 1は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。底の大部分を欠く。体部外面は横にナデられ平滑である。内面下位には板状の工具によると思われる押圧痕が斜めに連続し、その上がナデられている。口唇内側には敲打痕が見られる。

D34-1 (IV-015図) 陶器(1-3) 1は刷毛目碗でTB-1-dに属す。胎土は暗灰褐色を呈し硬質である。畳付には砂が溶着している。2, 3は灰釉碗でTC-1-cに属す。2は底部無釉であり, 3は高台裏も施釉されている。

焼塩壺(4, 5) 4, 5はI類2に分類される蓋。ともに胎土には雲母の粒子が含まれる。橙赤色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。4の上面は丸く盛上っており, 側面は横に弱くナデられて調整され, 指頭痕が並ぶ。5の側面は横に条痕が走る。

D34-2 (IV-015図) 磁器(1-4) 1-4は碗である。1, 3, 4はJB-1-dに属し, 1の外面の文様はコンニャク判と染付の組合せによって描かれ, 高台裏には一重圏線内に「大明年製」銘がみられる。3は畳付に砂が溶着し, 高台裏には「大明年製」銘がみられる。2はJB-1-fに属し, 高台裏には「大明年製」銘がみられる。

陶器(5-8) 5, 7は京焼系の碗である。5はTD-1-iに属し, 胎土は黄白色を呈す。見込みには三箇所ピン痕が見られ, 高台脇は面取りされている。鉄絵と白土によって花文が描かれている。7は底部片でTD-1-cに属す。高台裏には「藤」銘の刻印が押されている。6は蓋物の身でTD-13-aに属す。胎土は黄褐色を呈す。蛇ノ目高台を呈し, 口縁脇には把手があるが, 欠損のため形態は不明である。欠損面には漆継ぎをした痕跡が認められる。体部には鉄絵と呉須によって折枝が描かれている。8は香炉でTC-9-aに属す。底部には貼付による三箇所の脚をもち, E34-2出土の遺物と接合する。

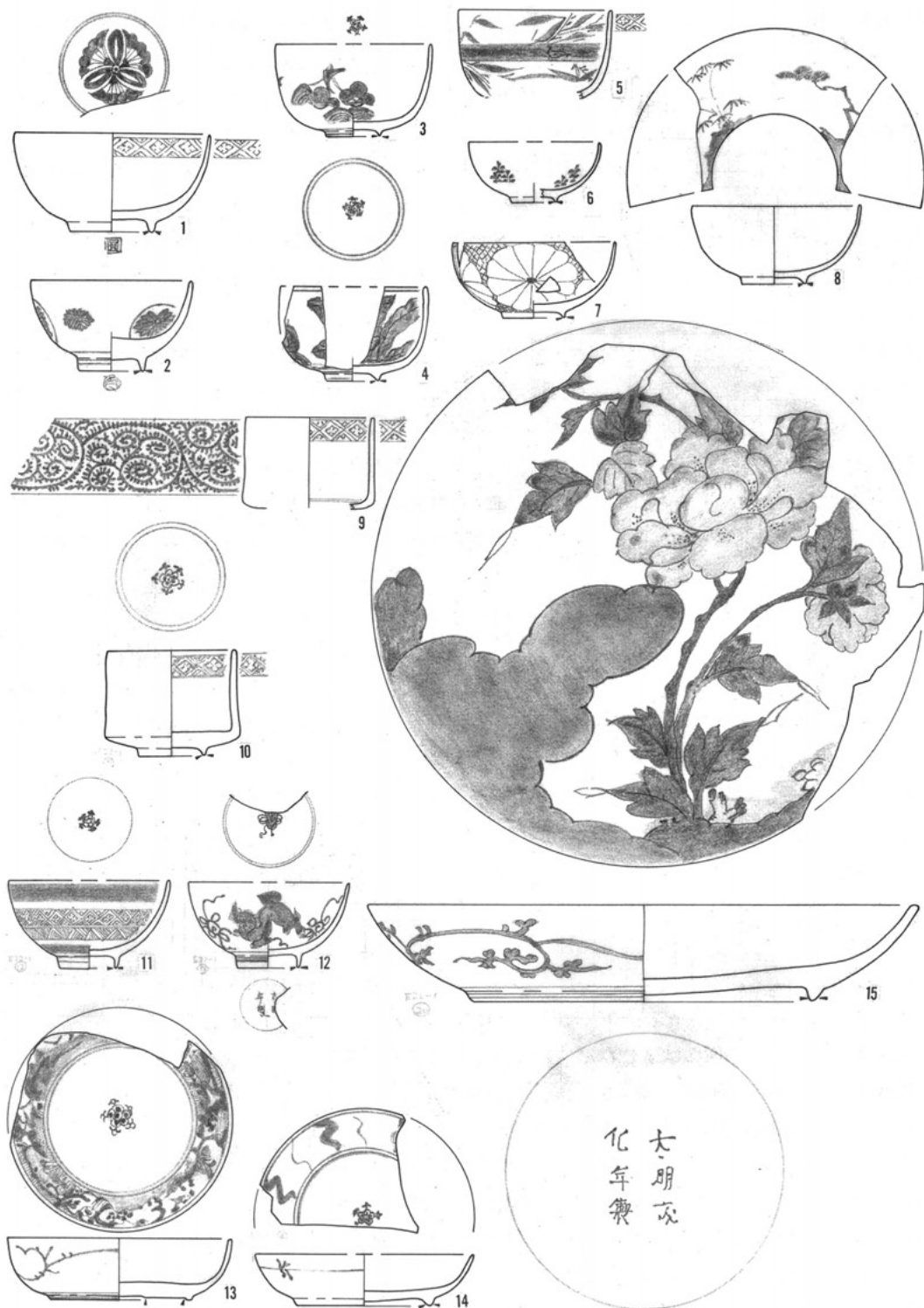
徳利 9は志戸呂産の徳利で, 胴部の表裏にはそれぞれ異なる墨書が認められる。口頸部を欠くが最大径は胴上部にあり, 底部外周にはヘラ削りが施されている。本遺構からは2合半徳利と志戸呂産徳利が少量, 5合・1升徳利が20個体ほど出土している。

焼塩壺(10, 11) 10はI類1bに分類される蓋。白色の強い肌色を呈する。薄手で整っている。上面には弱いナデと, かすかなスグレ痕が認められる。下面には細かい布目が見られ, 突起の下端にまでおよぶ。11はII類1b2に分類される身。3類1bに分類される刻印をもつ。口縁直下に太い沈線が巡っている。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。

D35-1 (IV-015・200図) 磁器(1-2) 1は染付碗で, JB-1-aに分類される。呉須の発色はやや悪い。2は白磁碗でJB-1-cに分類される。

カワラケ(3-17) 3-7までは右回転の糸切り底で, 口径は13.5cm-6.6cm。7のみはほぼ完形であるが, 他は三分二ほどが残るだけである。8-11は「まわし糸切り」の後, 「離し糸切り」を行った痕跡のあるカワラケである。すべて右回転の切り離しによる。口径は12.3cm-11.1cmである。10が三分二が残り, 他は完形である。これに対し, 12-17は左回転の糸切り底であり, 口径は14.8cm-11.7cmである。14, 16がほぼ完形, 他は二分一以上の残存である。灯芯の油痕は9, 10, 12, 13, 16で

第一節 陶磁器・土器



IV-016圖 E22-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

は口唇を全周し、3, 4, 14では疎らに付着する。それ以外にはない。

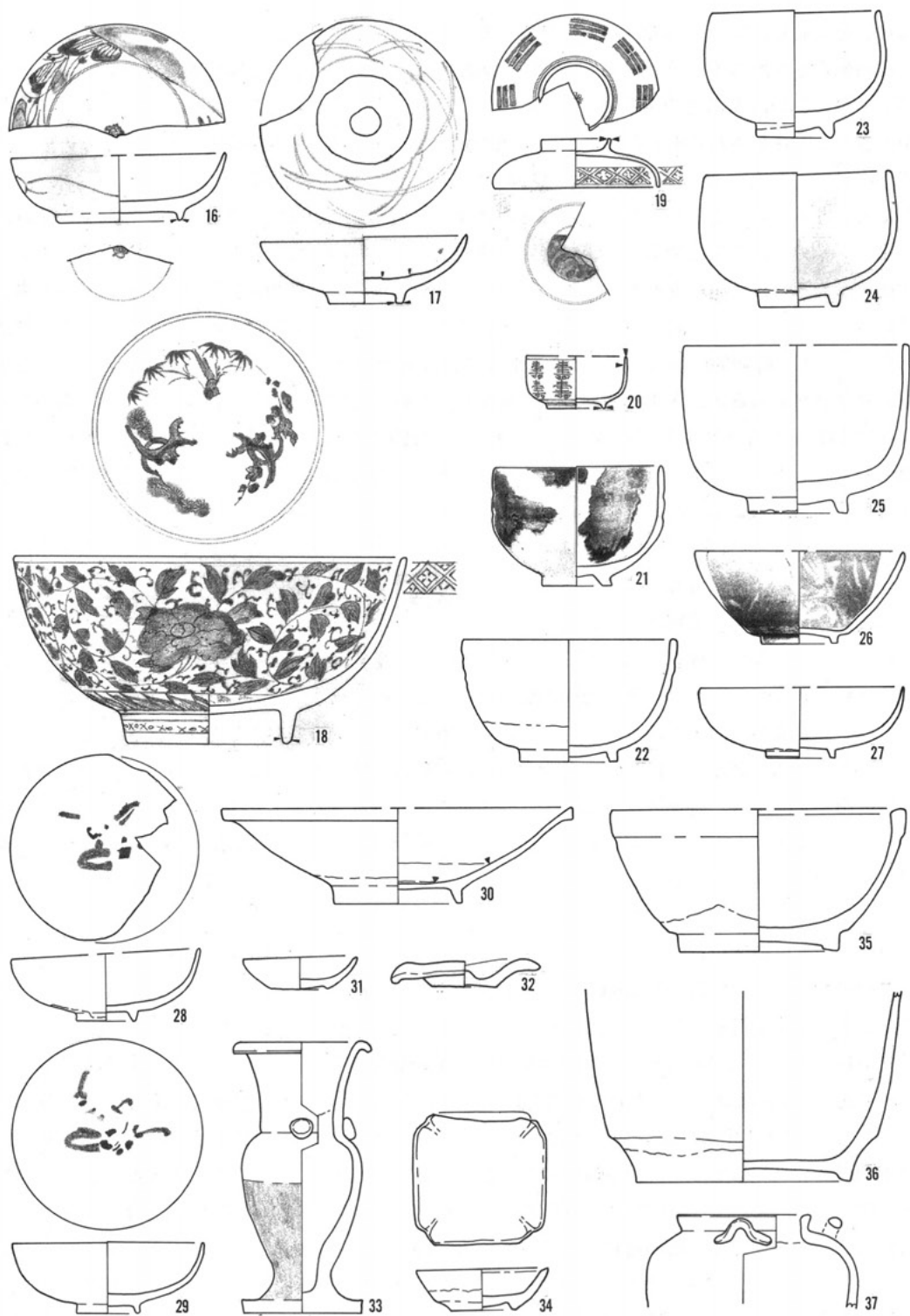
右回転糸きり底のカワラケは K22-2 やその他で出土しているものと同形態であり、精練された粘土を用い色調は赤褐色である。通常は3 のように口縁がいくぶん外反する。出土したカワラケの中でもっとも注目される8-11は、器形その他の特徴は右回転のそれと類似しており、切り離し技法以外に目立った違いはない。遺跡内で認められた右回転糸きり底の仲間のもっとも新しいタイプである可能性が強い。そしてこれらと左回転糸きり底のカワラケが確実に共伴する。左回転のそれは口縁がいくぶん内湾気味であり、色調は黄褐色である。形態的には上述したカワラケと違いもあるが底径が大きい点などに共通した要素も認められる。これらは初期の左回転糸きり底の一群と考えている。これとまったく同じ構成が J31-1 で、また左・右両回転のカワラケの共伴例が L32-1 で認められており、時期的に併行し明らかに一段階を画すると考えている。形態的には6, 7 のような小型のカワラケもあるが、大半は四寸前後に集中し、比較的大型のカワラケが多いようである。この傾向は J31-1 とも共通する。図示した以外カワラケは28点の出土である。右回転もしくは8-11に類似するもの 4点以外、すべて左回転の糸きり底である。これ以降、カワラケは左回転の糸きり底が主流となり、出土比率も高まり大きさもさまざまなものが出現する。

E20-1 (IV-015図) 陶器 1 は底部片である。刻印が「仁清」となっているが、胎土は山水文等を描いた肥前の京焼風碗に似ているので TB-1-b としておく。この京焼風の碗は、肥前の御経石窯、清源下窯、鍋島藩窯等で出土しているが、肥前のみではなく高知県の尾戸窯などでも出土しているらしく(内田 1986)、また京都の様子も不明である。刻印に関しては肥前諸窯からは「仁清」の銘は見つかっておらず、本例が肥前の製品であるとは限定はできないであろう。野々村仁清はその銘款が高台裏の左半に押印されるのが通常であるので、仁清の模作であると考えられる。

E22-1 (IV-016~019 図) 本遺構中からは陶磁器をはじめ、土器、カワラケ、灯火具などが多量に出土し、また、時期的にも前代よりの伝世、流れ込み等の混入が少ないため18世紀後半のきわめて良好なセットとしてとらえることができる。遺物群の特徴としてはこの時期を境に徳利の数量が飛躍的に増加していることがあげられる。瀬戸・美濃の徳利はこれ以降幕末まで継続してまとまった量が出土するが、志戸呂の製品の増加はこの時期だけの特徴としてとらえる事ができる。本地点ではVI期に位置付けている。

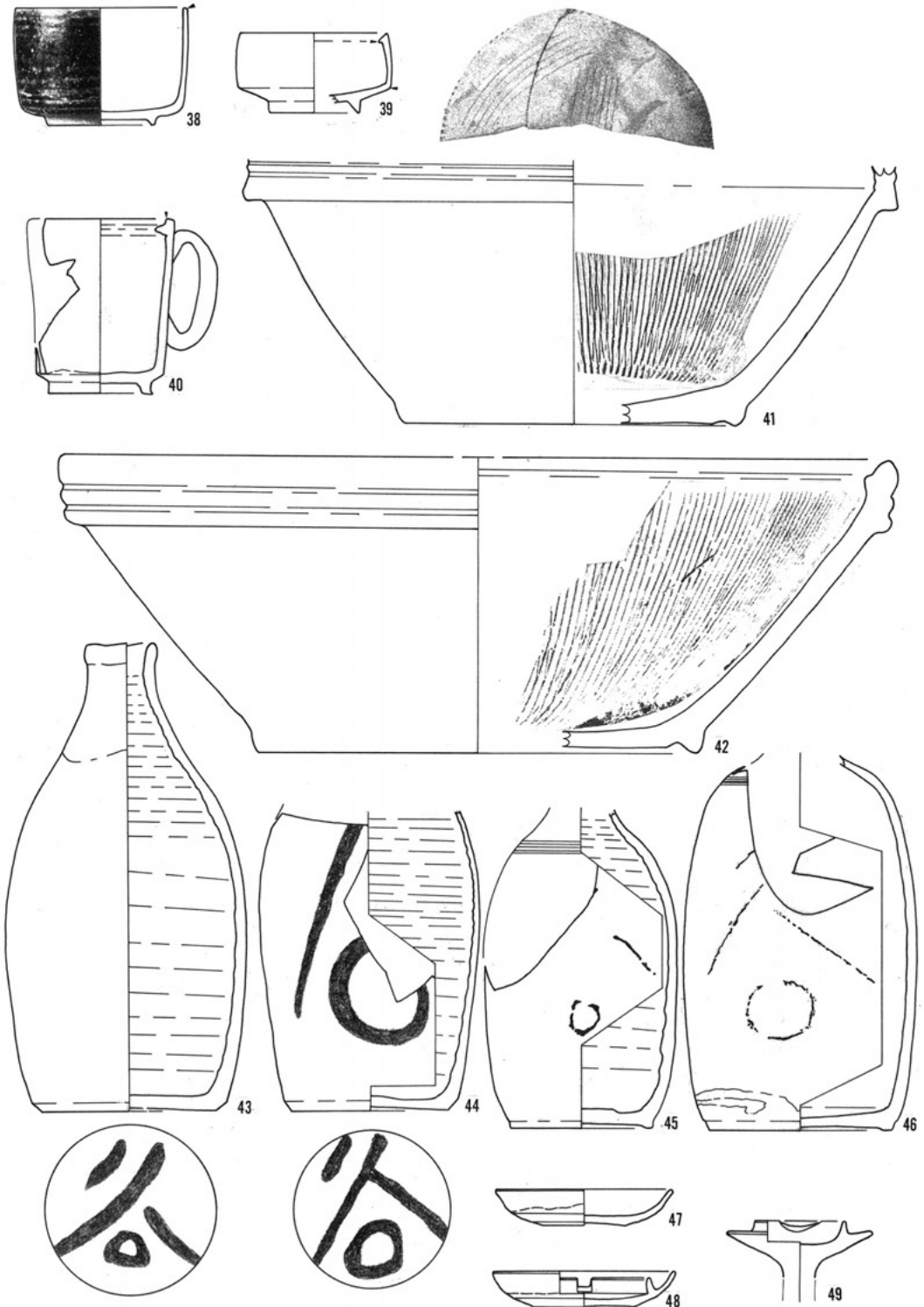
磁器(1-20) 1-12は碗で1, 10はいわゆる青磁染付、それ以外は染付である。1は JB-1-g で胎土は灰がかり、青磁染付が多量に出土している広瀬向2号窯の製品と類似している。おそらくそのあたりで製造されたものであろう。2は厚手で胎土、呉須の発色が悪く、いわゆるくらわんかと称されるものである。外面はコンニャク判で桐葉が描かれている。JB-1-g に分類される。3-5は JB-1-h である。3, 4 の見込み中央にはラフな手描き五弁花が認められる。6-8は JB-1-f である。7の割り菊文は本期以降19世紀になっても筒形碗、広東碗などに見られ、当時流行したようである。8は呉須の発色と胎土が良好で、高台の外側に金箔が認められる。9, 10は筒形碗で、JB-1-i に分類される。ともに呉須はこの時期に多い濃い藍色に発色している。10の見込み中央にはラフな手描き五弁花が認められる。11, 12 は JB-1-i である。いずれも見込み文様には、口縁部付近に二本の、中央には五弁花などを囲うように一―二本の圏線が施され、1780年代以降に製造が開始される JB-1-m (広東碗)

第一節 陶磁器・土器



IV-017 圖 E22-1 出土遺物 (2)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-018図 E22-1出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器

へと絵付け法が受け継がれていくと考えられる。13-17は染付皿である。13はJB-2-jで、見込み中央にはラフな手描き五弁花が認められる。14はJB-2-gで見込み中央にコンニャク判五弁花が絵付けされている。15は大皿でJB-2-eに分けられる。高台裏には「天明成化年製」の銘が描かれている。16は厚手の皿でJB-2-gに分類される。胎土、呉須の発色は悪い。17はJB-2-lで、胎土、呉須の発色は悪い。18は染付の鉢でJB-5である。19は染付蓋で、JB-14-a、20は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。

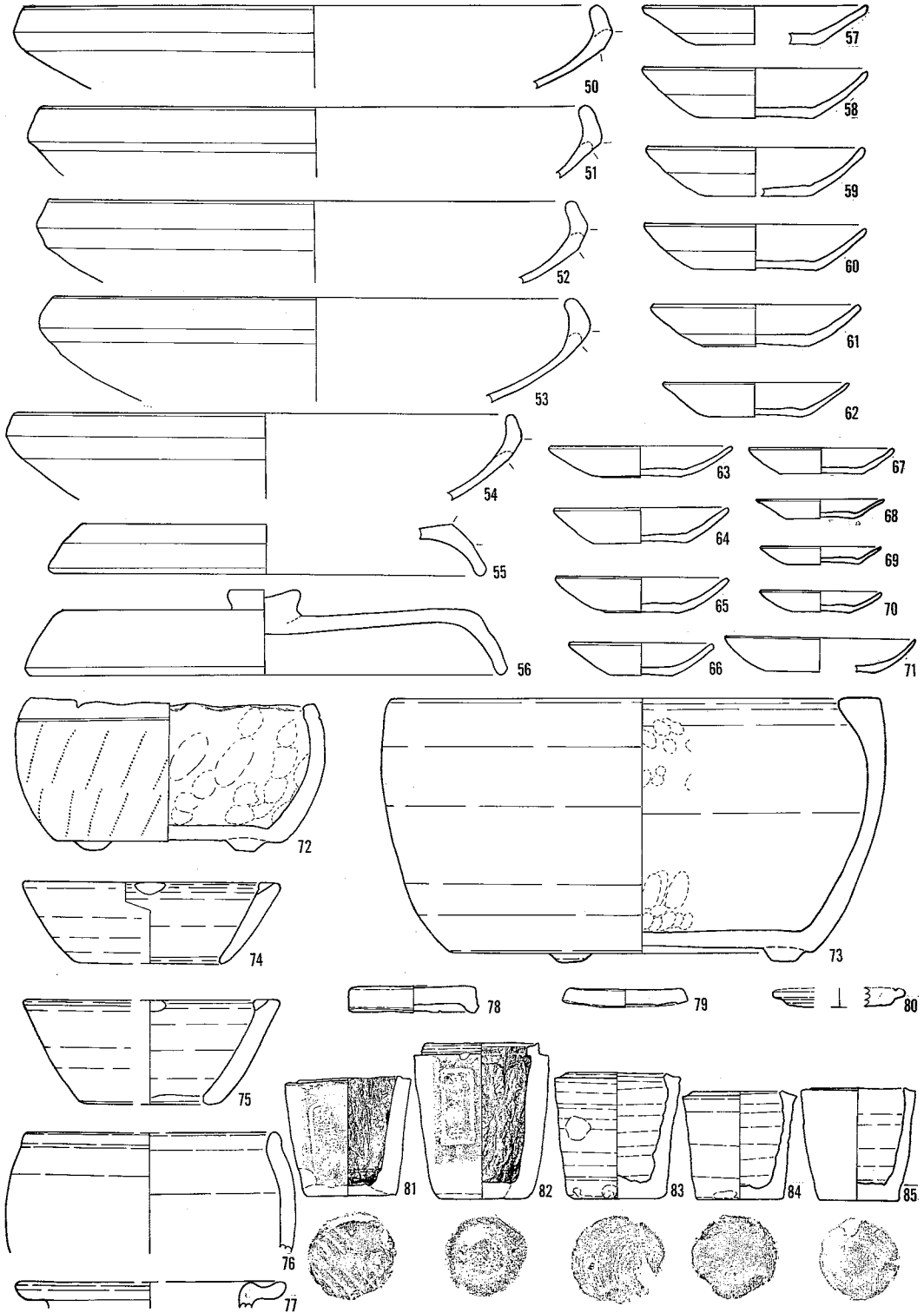
陶器(21-42) 21、23-29は碗である。21は灰釉の鉄釉流し掛けで、TC-1-fである。22は灰釉の緑釉流しの片口鉢で、TC-23である。見込みには三箇所ピン痕が認められる。23-25はTC-1-cで、いずれも体部下端～高台裏は無釉である。26は刷毛目の碗で、TC-1-sである。27は灰釉平碗で、TD-1-hである。全体に細かい貫入が認められる。28、29は瀬戸・美濃で京焼を模したものであろうと考えられる碗で、見込みに呉須と鉄絵の具で文様を付けている。TC-1-nに分類される。30は灰釉の輪割鉢でTC-5-cである。31はTC-2で、鉛釉が掛けられている。底部は碁笥底である。32は素焼きの蓋で表面に自然釉が認められる。TC-14-aに分けられる。33はTC-11で、上半が灰釉、下半が柿釉に掛け分けられている。底部には糸切り痕が残る。34はTC-4で灰釉が施されている。35は灰釉の片口鉢で、TC-23である。完形ではないため見込みには一箇所のピン痕のみ認められる。36はTC-26-aで、底部は無釉である。37はTC-15で、灰釉が掛けられている。38はTF-9で、器面には鉄釉が施される。内面、高台裏無釉。39はTC-9-aで、灰釉が掛けられている。40は御深井風の水注で、TC-27-bに分類される。鉄絵の具で摺絵された文様が一部残っている。41、42はTE-29である。41は口縁付近の摺目の最上部がナデられてそろえられており、口縁部縁帯の張り出しも42より鋭角的で、42より新しい様相を示している。42の摺目は7条である。

徳利(43-46) 43、44は志戸呂産の徳利で、43では口頸部に茶褐色釉が掛けられ最大径は胴部中程にある。ともに底に墨書があり、外周部にはへら削りが施されている。44は胴部にも墨書が残されている。45は瀬戸美濃産の灰釉系5合徳利である。線刻の釘書が認められ、撫で肩で最大径は胴部中程にあり、高台の削りは浅く雑である。46は瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利で、線刻～点刻の釘書が認められる。やや肩は張って寸胴に近づき、高台の削りも浅く雑である。2合半徳利も35個体ほどが出土するが、5合・1升徳利および志戸呂産の徳利は膨大な量に達しており、それぞれ500個体以上、700個体以上にもなる。また志戸呂産の徳利では90ほどある底部片(そのすべてにへら削りが認められる)のうち、現在認められるだけで30片ほどに43、44と同様の墨書が認められる。

灯火具(47-49) 47は油皿、48は受付。どちらも鉄釉系である。ほぼ同じ大きさであり、口径は11cm前後。47は半分、48は三分二ほどの残存。49は素焼の有脚受付。上半のみの残存である。口径は9.0cm。いずれも灯芯の油痕はもっていない。図示した以外、灯火具は5点出土している。鉄釉系と素焼系に限られる。鉄釉系は油皿3点、受付1点。素焼系は受付1点の出土である。

カワラケ(57-71) 口径は7.4cm-13.8cmのものを図示している。58-60は口径・胎土・形態ともに非常に類似している。61はわずかに小さい。66、67は形態は異なるが同じ口径である。68-70はほぼ同じ形態・口径である。四寸五分、三寸五分、三寸、二寸五分付近である。71は上製で口径11.6cm。68以外に完形品はない。不明の57を除き全て左回転の糸切り底である。灯芯の油痕をもつカワラケは口唇を全周するもの(59、60、67、71)、疎らなもの(61、63、66)に分けられる。もっとも小型の

第IV章 江戸時代の遺物



IV-019図 E22-1出土遺物(4)

第一節 陶磁器・土器

二寸五分前後のものには(68-70) 附着しない点が注目される。また70の底には「中」の墨書がある。カワラケは173 点の出土。出土比率の24% になる。小破片が多く、口径までわかるものは少ない。そのため残りのよい底部片33点を計測したところ底径 5.1-7.5cm で、おそらく口径が三寸五分一四寸五分におさまるものが7割を占めた。また口縁片の灯芯の油痕も検討したが、口径三寸五分前後のものに多く附着するらしく、68-70のような小型のカワラケには認められなかった。ただし墨書土器 4点は全てこの形態である。

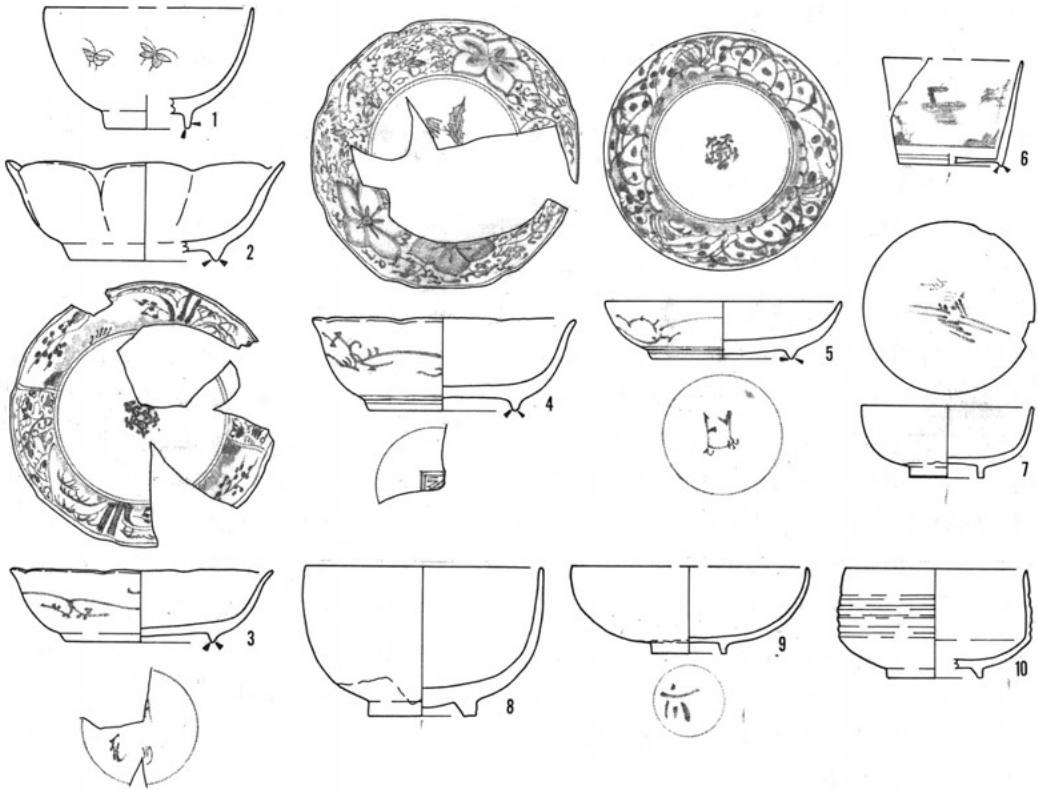
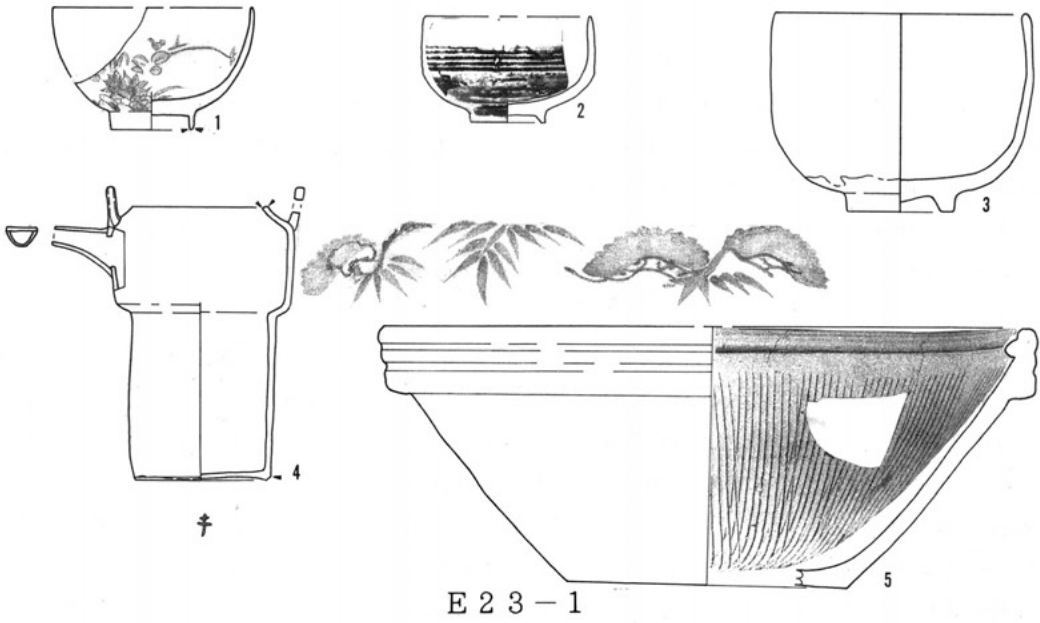
焙烙(50-56) いずれも三分一以下の破片から復元実測している。あまり明確ではないが二つの形態に分けられる。50-53および54である。50-53まで推定口径は32.4-35.4cm。概して口縁が高く、器壁も厚い。これに対し、54は小振りで器壁も薄い。推定口径は31.6cm。両者とも口縁が内湾し、ケズリが接合部を境として底部側につく。ケズリも広くはっきりしているのが特徴である。両者は大きさ・器壁は異なるが他の点はよく似ている。同一時期と考えている。後述するがこの遺跡内ではほぼこの頃より明確に口径の異なる焙烙が出現する。底部片は130 点あり、遺物全体の20%近い比率。口縁片は55点の出土。41点が 50-53と、13点が54と類似する。他の 1点は内耳をもつ形態のものかもしれない。ただし明確に内耳をもつ口縁片はない。55, 56は蓋。推定口径は55が26.6, 56が21.6cm である。蓋は14点出土している。

土器(72-77) 72はⅠ類 a イに分類される小型の硬質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面口縁下には沈線が巡り、その上はミガかかれている。沈線の下にはルーレット状の工具によるものであろうか、斜めの列点が二段に入る。内面には指頭による圧痕が多く見られる。底面外側にはスグレ痕が認められる。口縁内側は煤の付着が見られる。口縁上端には敲打痕が巡る。73はⅠ類 a ロに分類される大型の軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。足は比較的小さい。外面は平滑に整えられている。内面底部付近と口縁の下には小さい指頭痕が多く見られる。底面外側には砂粒の痕が見られる。74, 75は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上端は平坦であり、切り欠きが設けられている。外面は丁寧にナデられている。内面は白色の皮膜におおわれ、その下は黒色化して剝離が著しい。いずれも火熱によるものと思われる。76は軟質土師質の容器と思われる。輪積み成形である。下半を欠損している。内面はやや煤けたように黒変している。用途は不明であるが、火入れもしくは火消し壺の類であると思われる。77は軟質土師質の容器の口縁部と思われるものである。表面は平滑で整っており、ロクロ成形と思われる。用途は不明である。このほか瓦質、土師質の火鉢類を主にしてきわめて多量の破片がある。50個体以上にのぼろう。

焼塩壺(78-85) 78, 79はⅡ類 2 に分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。78は胎土にわずかに雲母を含む。79は突起が低い。下面には布目が見られる。80はⅡ類 1 に分類される蓋。上面を欠損しているが、縁から 1cm 弱内側に同心円状の沈線が入る。硬質の白色の胎土である。81はⅡ類 2 b に分類される身。2類 5 の刻印をもつ。内面の底部近くは平滑で、その上には粗い布目が見られる。底面にはスグレ痕が見られる。82はⅡ類 1 b2 に分類される身。3類 1 b の刻印をもつ。内面にはねじれたような粗い布目が見られる。83はⅢ類 b に、84, 85はⅢ類 a に分類される身。いずれも刻印は認められない。ほかにⅡ類 2 が5 個体、Ⅱ類の身が8 個体、Ⅲ類の身が4 個体ある。

E23-1 (IV-020図) 磁器 1 は色絵で、朱、黄、呉須で草花文を描いている。E24-1の 1と遺

第IV章 江戸時代の遺物



IV-020図 E23-1、E24-1(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器

構間で接合する。JB-1-dに分類される。

陶器(2-5) 2はTC-1-uである。3はTC-1-cで、高台裏および体部下端は無釉である。4は色絵の銚子で、TD-10である。上絵付けはほとんど絵の具がとんでいるため、竹、松が描かれていた痕跡が残るのみである。底部は無釉。5はTE-29である。播目は9条で1単位で、各々の単位は口縁部付近でやや間隔を有する。また、上端は未調整である。

E24-1 (IV-020~022 図) 本遺構中からは陶磁器を中心に比較的まとまった量の遺物が出土している。年代的にはやや幅があり、III~V期の製品が認められる。遺物はほとんどのものが二次焼成を受けている。

磁器(1-6) 1は色絵で、朱、黄、呉須で蝶文を描いている。E23-1の1と遺構間で接合する。JB-1-dに分類される。2は青磁輪花皿で、JB-2-eに分類される。青磁釉は厚く掛けられている。3-5は染付で、3、5はJB-2-gである。ともに見込み中央には、コンニャク判五弁花が、銘は崩れた「大明年製」が描かれている。4はJB-2-eである。銘は二重角枠内渦福である。6は染付でJB-7-bに分類される。

陶器(7-20, 22) 7はTB-1-cであるが、高台の削り、山水文の書き方がややラフで、銘もなく、同類としては末期のものであろう。器面は二次焼成を受けている。8はTC-1-cで、高台裏、体部下端は無釉である。9はTD-1-hで、高台裏と体部下端は無釉である。高台裏には墨書で「弐」?と書かれている。暈付脇は面取りされている。10はTC-1-qで暈付を除いて全面施釉されている。11はTD-1-dで、松、竹を色絵具で上絵付けしている。二次焼成を受けているため表面の釉は溶けて流れており、色などの識別はできない。12は灰釉片口鉢で二次焼成を受けている。見込みはピン痕が二箇所認められる。TC-23に分類される。13はTC-9-bで体部、口縁部に飴釉が施されている。14は御深井風の皿でTC-2-eに分類される。暈付の他全面施釉されている。摺絵。15はTE-12で堅く焼き締められ、底部には「井」形の窯印が刻印されている。火ダスキ痕が認められる。16はTC-8で、碗部に灰釉が施される。二次焼成を受けている。17は御深井風の香炉で、表面には鉄絵の具で意匠不明の文様(あるいは流し掛け)が描かれている。高台は輪高台であるが三箇所に指で凹みを作り出している。TC-9-cに分類される。18は光沢を有する鉄釉系の蓋である。灰褐色の緻密な胎土をもつ。産地不明。19はTC-5で灰釉が見込みと器面体部下半まで施される。見込みには三箇所の大きな円形の釉剥ぎが認められ、窯積みの様子を窺わせる。20はTD-11で黄褐色のうのふ釉が施される。底部は無釉で糸切り痕を篋で調整している。22はTE-29である。播目は11条で上端はなで揃えられている。

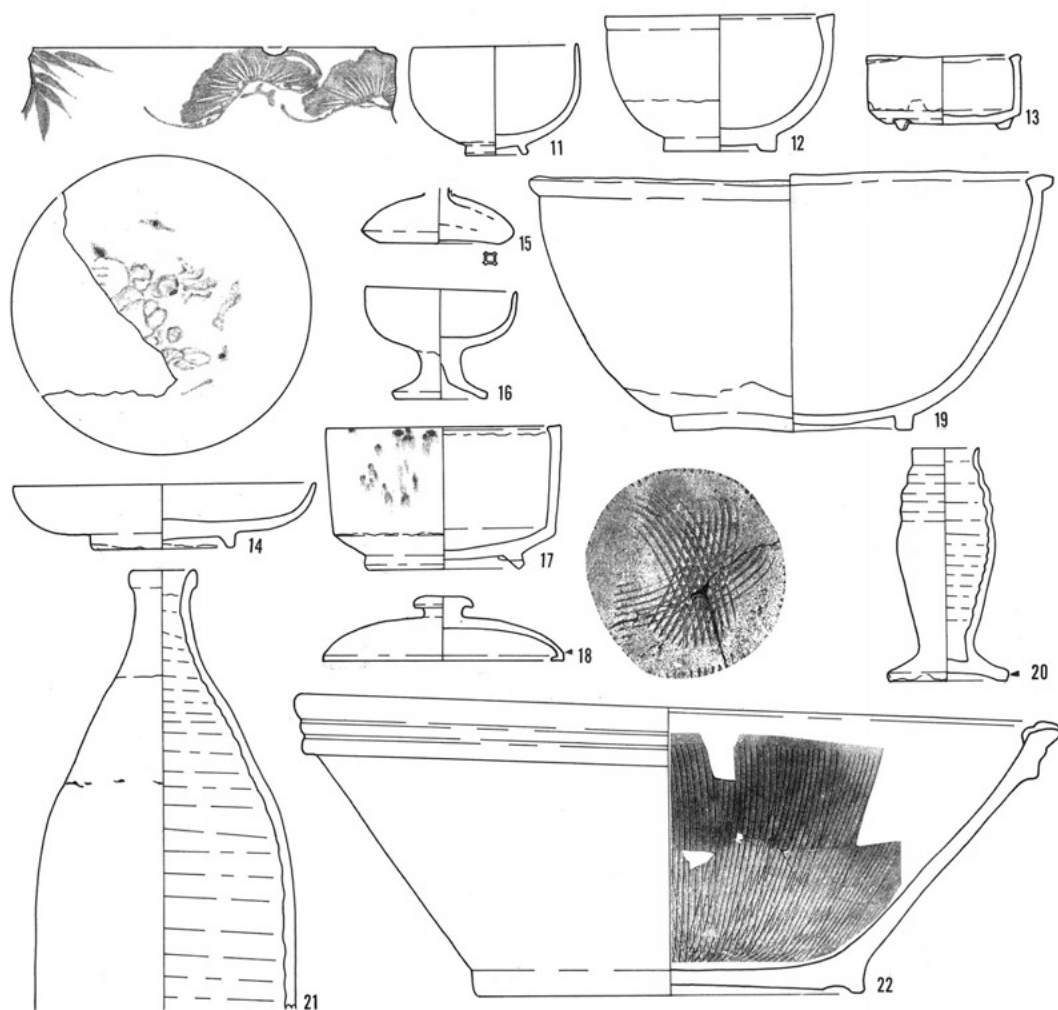
徳利 21は志戸呂産の徳利で口頸部には茶褐色釉が掛けられている。破片で瀬戸美濃産の2合半徳利が20個体弱、5合・1升徳利が70個体ほど出土し、志戸呂産の徳利は30個体ほどある。

灯火具(23-25) 23は透明釉系の乗燭の一種である。口縁部に「吉」の押印が認められる。透明釉の施された灯火具はもう1点出土している。やはり乗燭の一種である。破片であるため全形は不明だが、23とは全く異なる。以上の2点は流れ込みの可能性もある。24、25は素焼系の受付である。口径は11cm強で、二つとも完形。口唇の一部に灯芯油痕がある。底部は左回転の糸切りであり、24には銀彩がある。素焼系の受付は他に2点出土している。24、25と同じ大きさで同形態である。1点には確実に銀彩がある。

土器(26-32) 26は1類a口に分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。口縁部は大き

第IV章 江戸時代の遺物

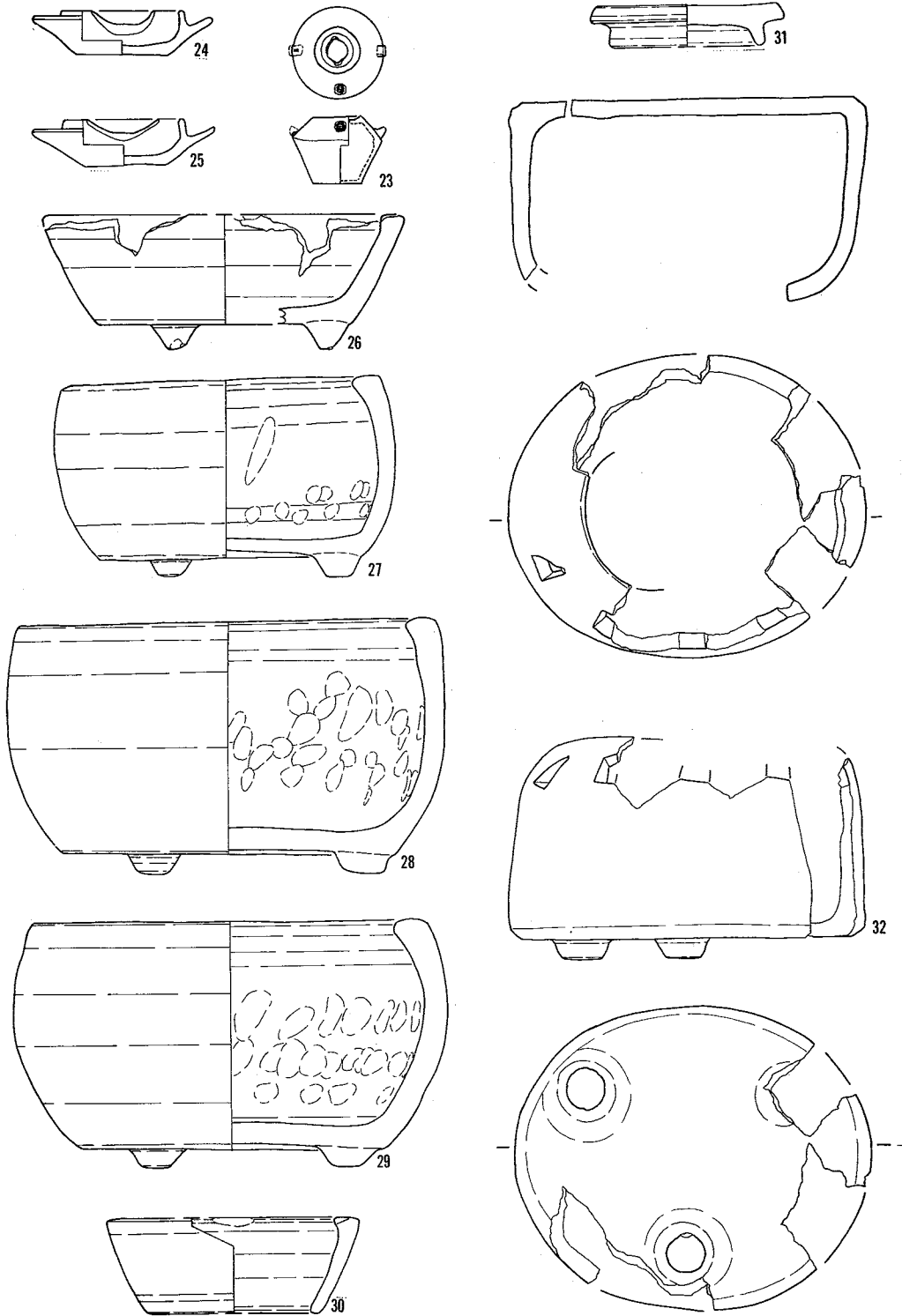
く欠損し、外面は剥離が著しいが横のミガキが施されていたようである。27-29は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。27はやや小さく、28、29はほぼ同じ大きさであるが、この三者は同形である。底部から開き気味に立ち上がり、緩やかに内湾して口縁に至る。口唇はわずかに肥厚し、口唇上面は丸みをもつ。足は大きめで底面の周縁部に付く。外面は平滑で銀彩が認められ、内面には多くの指頭による圧痕が見られる。この三者は軟質土師質の火鉢類の一つの時期を画するものである。30は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上面に切り欠きが見られる。内面は火熱によると思われる白色の皮膜、黒色化、剥離が見られる。31は軟質土師質の製品で、32に付属する蓋と思われる。上面は火鉢の底面外側に見られるような砂粒の痕が残っている。上面以外の部分はナデ調整されている。32は軟質土師質の行火。輪積み成形である。欠損部分が多く、全体の姿が明らかでないが、上部に開口部をもち、側面上方に最低五個の方形および三角形の通気孔が



E 24-1 (2)

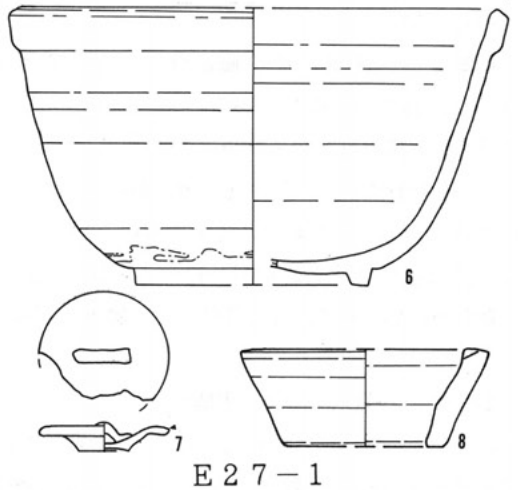
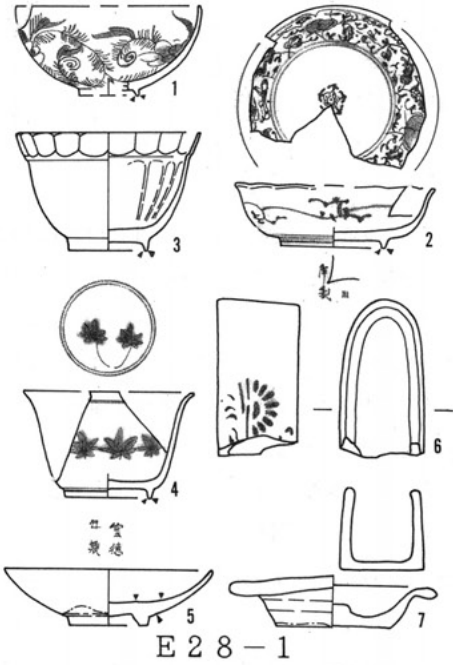
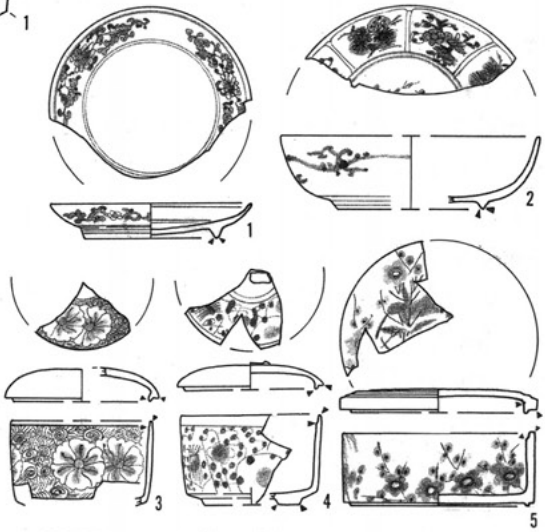
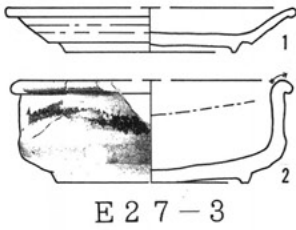
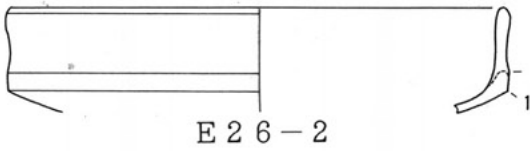
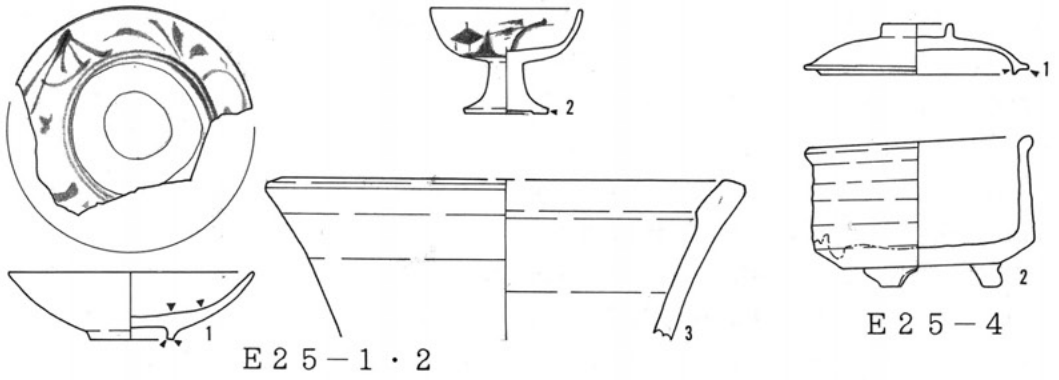
IV-021図 E24-1出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-022図 E24-1出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-023 図 E25-1・2、E25-4、E26-2、E27-1、E27-3、E28-1出土遺物

第一節 陶磁器・土器

設けられたものと思われる。大きめの足が3 つき、底面外側には砂粒の痕が見られる。火熱によると思われる黒変が見られる。このほか火鉢類が十数個体、焼塩壺の身・蓋の小片各2 がある。

E25-1・2 (IV-023図) 磁器(1-2) 1は皿でJB-2に属す。二次焼成を受け釉が変質している。2は仏飯器でJB-8に属す。脚は蛇ノ目状を呈し、無釉である。

土器 3は軟質土師質の火鉢類。2類cイに分類されるものと思われる。輪積み成形である。口縁部の破片であり、外面は丁寧に調整されており、平滑で、銀彩が施されている。

E25-4 (IV-023図) 磁器 1は白磁の蓋物の蓋でJB-14-aに属す。

陶器 2は香炉でTC-9-bに属す。底部には脚が三箇所貼付されている。

E26-2 (IV-023図) 焙烙 1は口径27.4cm。口縁に屈曲をもちケズリが口縁側につく。1点のみの出土。ただしこれほど良好な状態での出土例は少ない。古い形態の焙烙である。

E27-1 (IV-023図) 磁器(1-4) 1は小皿でJB-3-cに属す。外文様の唐草には縁取りが施されている。2は皿でJB-2-eに属す。口縁は輪花を形成する。外文様の唐草には縁取りがない。3-4は蓋物でJB-13-bに属す。蓋はドーム状を呈し、橋状のつまみを有す。ともに二次焼成を受け、釉が変質している。

陶器(5-7) 5は蓋物でTD-13-bに属す。胎土は黄白色を呈し硬質である。蓋、身ともに鉄絵、呉須、白土によって梅、竹が描かれている。身に関しては文様の構成から最上段のものであると思われる。蓋、身ともにL34-2出土のものと同構造間接合をしている。6は鉄釉鉢でTC-5に属す。底部は無釉である。7は鉄釉の落とし蓋でTC-14-aに属す。中央部に橋状のつまみが貼付されている。

土器 8は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上方に向かって開くが、途中わずかに屈曲する。内面も屈折する。上面に切り欠きが見られる。内面は火熱によると思われる白色の皮膜、黒色化、剝離が見られる。このほか火鉢類の小片が3 個体、風口の片1 個体がある。

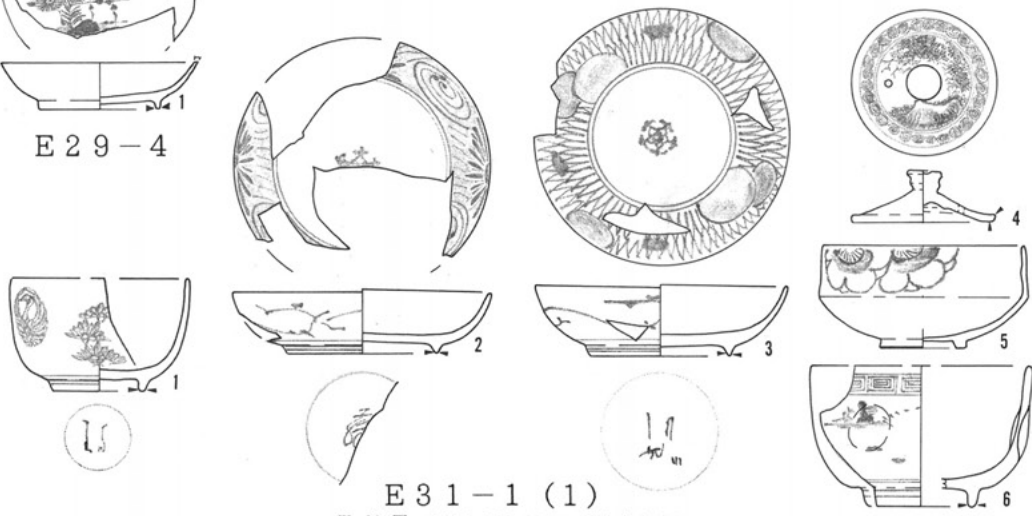
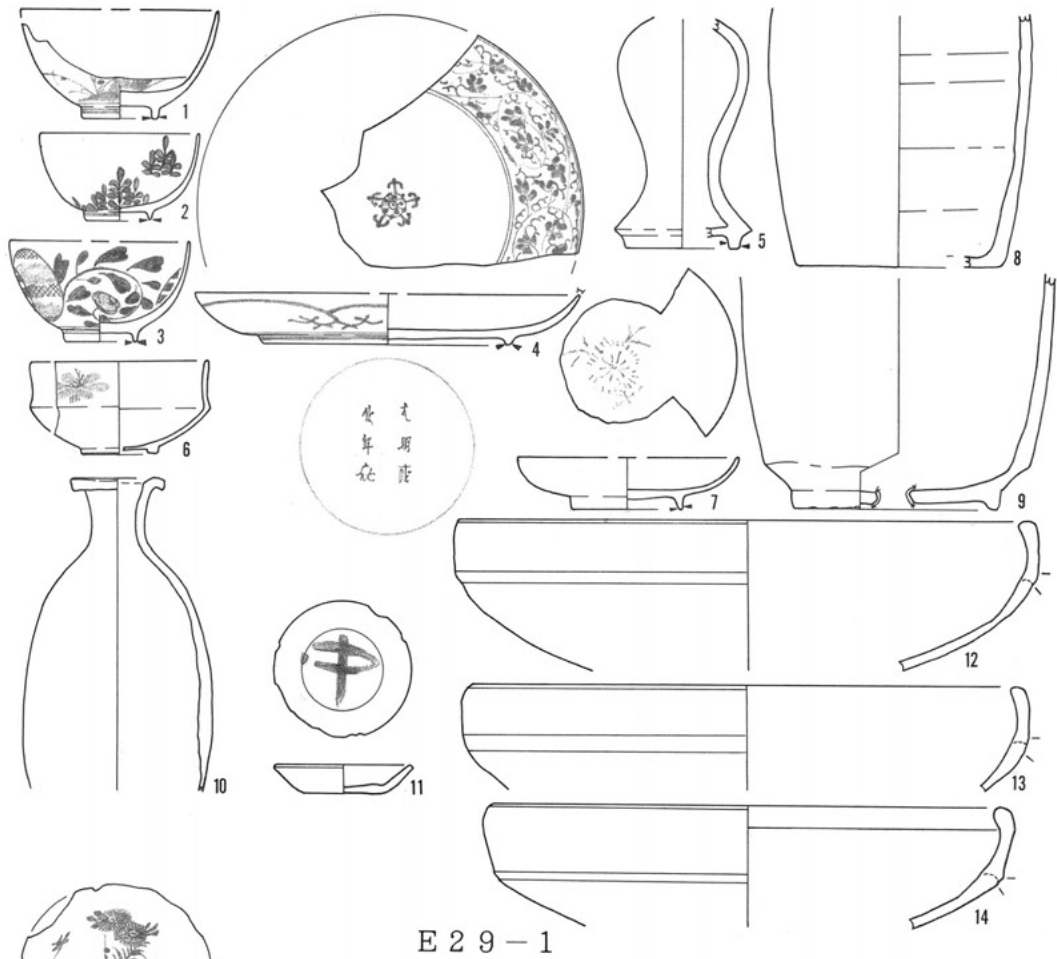
E27-3 (IV-023図) 陶器(1, 2) 1は灰釉の皿でTC-2-aに属す。見込みには三箇所ピンの溶着痕がみられ、高台裏には輪トチの溶着痕がみられる。釉は全面に施釉されている。2は香炉でTC-9-bに属す。柿釉が外側面に施されている。口縁内側に敲打痕がみられる。喫煙具として使用されていたのであろう。

E28-1 (IV-023図) 磁器(1-4) 1は碗でJB-1-fに属す。2は皿でJB-2-eに属す。口縁はやや外反し、輪花を形成している。見込みには手描きによる五弁花が、高台裏には一重圏線内に「□明年製」銘が描かれている。外文様の唐草は縁取りが施されていない。3, 4は小坏でJB-6-bに属す。3は白磁の小坏で、ロクロ成形後に形打ち成形によって体部内面は花卉文様に、口縁は二十角形に成形されている。南川原窯ノ辻窯の製品と思われる。4は見込みと体部外面に紅葉の文様が描かれている。高台裏には「宣徳年製」銘がみられる。5は見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿でJB-2-kに属す。

陶器(6, 7) 6は鬘盤でTC-25に属す。灰釉が施されている。体部には鉄絵の具による摺絵が描かれている。7は蓋でTC-14-aに属す。凹み中央には削り出しによる円柱状のつまみがある。

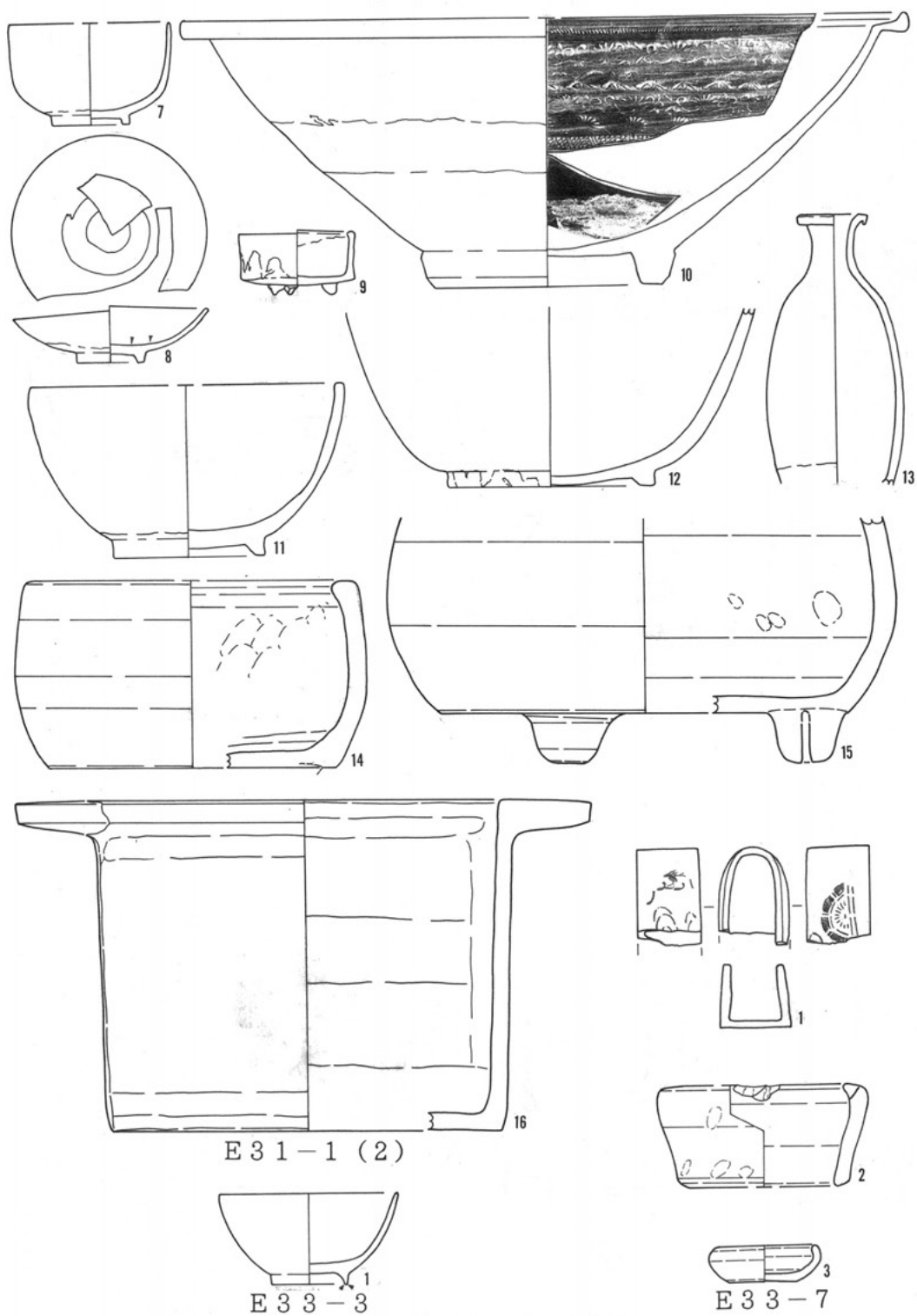
E29-1 (IV-024図) 磁器(1-5) 1-4は染付、5は青磁である。1, 3はいわゆるくらわんか碗でJB-1-gに分類される。1, 2, 4は二次焼成を受けている。2はJB-1-fである。4はJB-2-eである。見込み中央には、手描き五弁花、口唇には口銚が施される。高台裏には四箇所のハリ支えが認めら

第IV章 江戸時代の遺物



IV-024図 E29-1、E29-4、E31-1(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器



IV-025圖 E31-1(2)、E33-3、E33-7出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

れる。銘は「大明成化年製」である。5はJB-10-b である。頸部、底部の接合部より破損している。

陶器(6, 7, 9) 6はTD-1-iで、白土と鉄絵の具で花文様が描かれている。高台は幅広で、脇は面取りされている。内面にはピン痕が認められる。7は御深井風の皿で、TC-2-eに分類される。見込みは呉須で摺絵されている。9はTC-26-aで、内外面に柿釉が施されている。底部は中央に径1.7cmの孔が穿たれ、植木鉢として転用されていると考えられる。

徳利(8, 10) 8は志戸呂産の徳利で、底部外周にはへら削りが施されている。10は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で口唇部は鋸状に張り出し、外縁部が軽く撫でられて整形されている。頸部は長く撫で肩で、最大径は胴部中程にある。胴下部を欠き、釘書の有無については確認できない。2合半徳利、5合・1升徳利、志戸呂産徳利ともごく少量が認められるのみである。

カワラケ 11は完形で、左回転の糸切り(?)。灯芯の油痕はない。「中」の墨書がある。カワラケは他に4点の出土しているが、全て左回転の糸切り底である。

焙烙(12-14) 焙烙は12点の出土である。そのうち3点を図示。12-14の口径は30cm前後で、口径はやや異なるが、口縁が内傾し、ケズリが屈曲部に認められるのが共通した特徴である。また底部が低平ではなく、深く湾曲するらしい。この遺構から12点の口縁片が出土したが、9点がこの形態である。後に述べるF33-3出土の焙烙と類似する。蓋の破片も1点出土している。

E29-4 (IV-024図) 磁器 1は染付の輪花小皿である。口唇には口鋸が施される。JB-3-bに分類される。

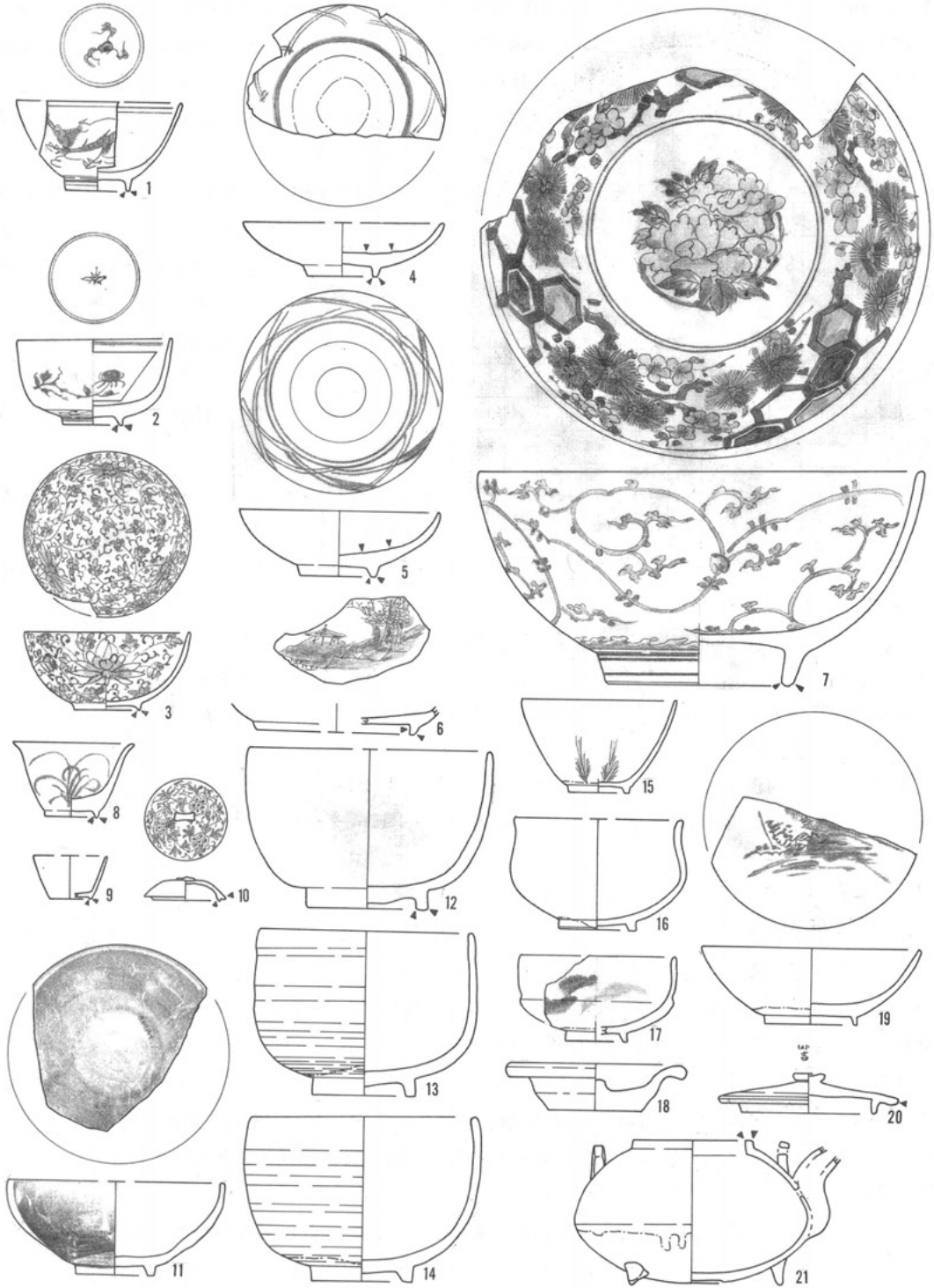
E31-1 (IV-024, 025図) 本遺構中からは陶磁器、土器を中心に比較的まとまった量の遺物が検出されている。遺物はいずれも二次焼成を受けており、火事等の一括廃棄を想定させる。時期的には若干年代幅を有し、18世紀前半代の遺物が中心であるが、17世紀代のもも見られる。本地点ではV期に位置する。

磁器(1-4) 1-4は染付である。1はJB-1-gで、コンニャク判で絵付けされている。胎土、呉須の発色ともに悪い。2, 3はJB-2-gで、見込み中央にはコンニャク判五弁花が認められる。2は見込み文様の花卉に墨弾きの技法を用いている。4は急須の蓋で、JC-16に分類される。火熱を受けておらず、年代的にも大きく異なるので流れ込みのものであると考えられる。

陶器(5-12) 5はTD-1-iで、器面は鉄絵の具で花文様に摺絵されている。幅広の高台を有し、脇は面取りされている。見込みには三箇所のピン痕が認められる。6はTB-1-fである。体部には所々凹みが見られる。7はTC-1-cで、高台裏と体部下端は無釉である。8は銅緑釉輪剝皿で、TB-2-aに分類される。9はTC-9-aで、灰釉が口唇、体部に施される。10は三島手の大鉢で、TB-5-bに分類される。象嵌の押印文様、白土の塗り込め方などはかなりラフである。見込み中央は砂胎土目積み、白砂が多量に付着している。高台の脇は面取りされている。11, 12はTC-5で灰釉が施されている。11は高台裏無釉で、見込みにはピン痕が認められる。12は高台内施釉後拭き取っており、見込みには三箇所の大きな円形の釉剥ぎが認められる。

徳利 13は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利である。口唇部は鋸状に張り出し、外縁部が軽く撫でられて整形されている。頸部は長く撫で肩で、最大径は胴部中程にある。釘書は認められない。これ以外に2合半徳利、志戸呂産徳利が少量、5合・1升徳利が30個体ほど出土している。

第一節 陶磁器・土器



IV-026图 E34-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

土器(14-16) 14, 15は1類 a 口に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。14は底部の大半を欠く。底面内側は強いナデが入る。底面外側にはチヂレ目が見られ、さらにスタレ状の圧痕も残る。体部外面には銀彩が施されている。15はきわめて大きく中央に細い孔の開けられた足を持ち、念入りに作られている。体部および底部外面が丁寧に調整され平滑で、内面も細かいナデが入る。体部から足にかけて火熱によると思われる黒変が見られる。丸火鉢であろうが、あるいは特異な形態をもつ点などから風炉の可能性もある。16は1類 d に分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形で足はない。体部外面は横および縦のケズリで平滑に整えられ、底面と交わる部分はケズリにより面取りされている。内面は周囲がナデられ、その内側には横のナデが見られる。底面外側には砂粒の痕が見られる。口縁部の上面と側面には金属光沢をもつ朱彩が施されている。このほか火鉢類が5 個体、五徳が1 個体、焼塩壺の蓋と身の小片各1 がある。

E33-3 (IV-025図) 磁器 1は白磁の碗で JB-1-d に属す。全体に細かい貫入が入っている。

E33-7 (IV-025図) 陶器 1は鬘盥で TC-25 に属す。体部に鉄絵による摺絵が描かれている。

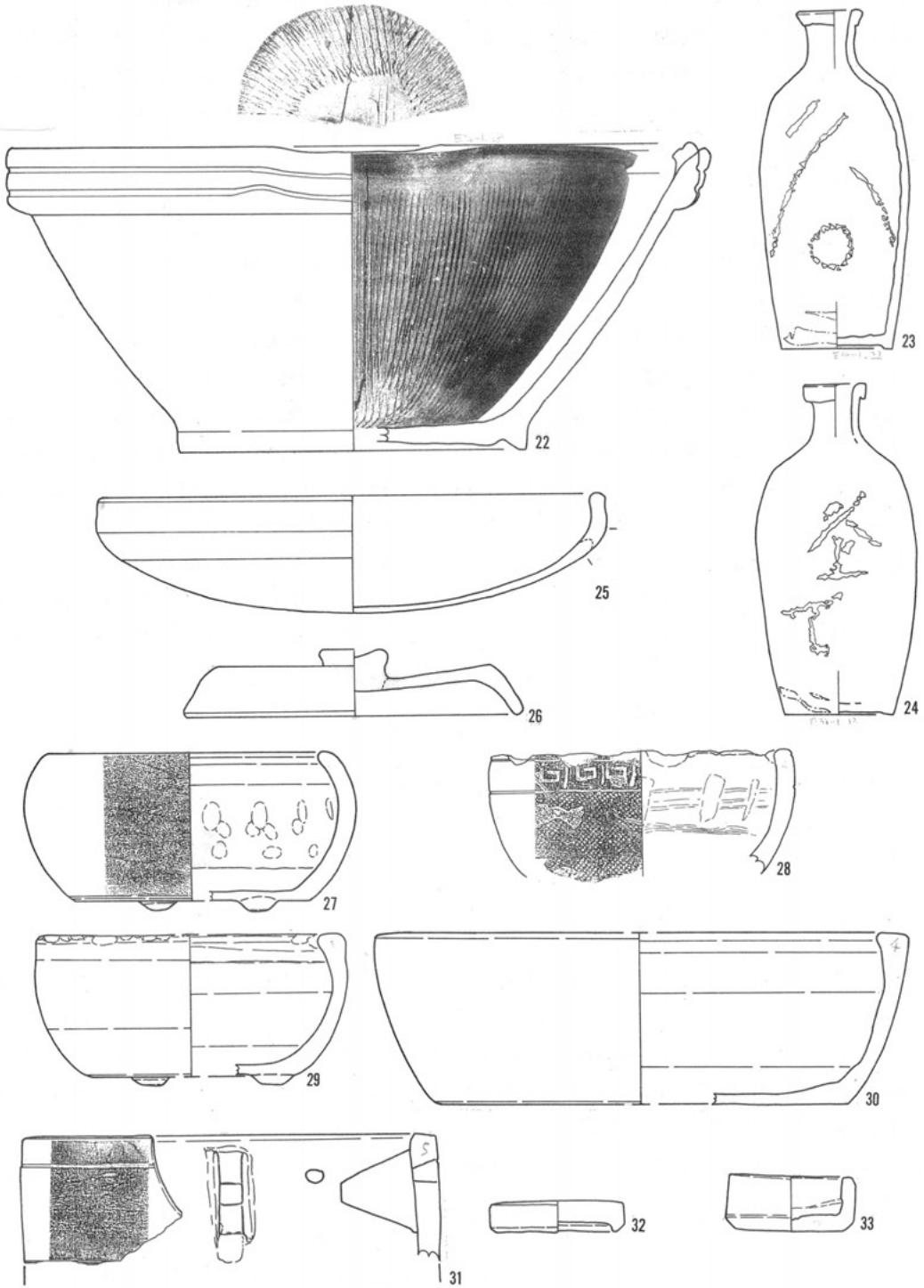
土器(2, 3) 2は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上面に見られる切り欠きは、二度にわたって行なわれている。内面は火熱によると思われる白色の皮膜が見られる。3は硬質で白色の鉢型の容器である。ロクロ成形である。内外面ともきわめて丁寧に調整されている。

E34-1 (IV-026, 027図) 陶磁器を中心に多量の遺物が出土している。時期的にはV期に位置付けられるが、そのなかで新しい様相を呈している。特に瀬戸・美濃、京焼系の量が多いが、徳利が大半を占めている。徳利に関しては、図示できるものはなかったが、志戸呂の出土量が多いのが特徴である。

磁器(1-10) 6 は中国産の青花皿で JA-2に属す。底部片で高台は内傾し、畳付は斜めに削られている。高台裏には二重圏線が描かれている。1-3は碗である。1は JB-1-i に属す。2は JB-1-h に属す。高台は八の字状に外傾している。見込みには二重圏線内に昆虫が描かれている。3は JB-1-f に属し、内外面ともに牡丹唐草が描かれている。E34-2, G34-3出土遺物と遺構間接合をする資料である。4, 5は皿で JB-2-1 に属す。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ、二重の網目文が描かれている。4は7 とともに E34-3出土遺物と遺構間接合をする資料である。7は鉢で JB-5に属す。高台は内傾し、畳付は丸く整形されている。外側面の唐草は縁取りが施されており、高台の周囲に波濤文が巡っている。8は小坏で JB-6-b に属す。胎土は灰白色を呈する。粗雑な作りで底部は 8mm と厚い。9は白磁の猪口で JB-7-b に属す。10は蓋で JB-14-c に属す。器形はドーム状を呈すが端部でやや外反している。

陶器(11-22) 11-17, 19は碗である。11は瀬戸・美濃系の刷毛目碗で TC-1-s に属す。体部はほぼ直線的に開くが口縁で緩やかに内湾する。白土で刷毛目を施した上に灰釉を施し、色調は黄緑色を呈している。底部無釉。12-14は灰釉碗で TC-1-c に属す。12は全面に施釉され畳付の釉を拭き取っている。13, 14は底部無釉である。15は小杉茶碗で TD-1-d に属す。胎土は黄白色で硬質である。高台脇は面取りされている。文様は鉄絵と呉須で描かれている。16は TC-1に属す灰釉碗である。胎土は灰褐色でやや軟質である。高台脇は面取りされている。底部は無釉で、釉には粗い貫入が入る。17はせんじで TC-1-1 に属す。胎土は黄白色を呈す。体部には鉄絵と呉須による文様が描かれている。19は京焼風の平碗で TB-1-c に属す。見込みには鉄絵によって文様が描かれ、高台裏には、「小

第一節 陶磁器・土器



IV-027図 E34-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

松吉]銘の刻印が押されている。18, 20は蓋である。18は落とし蓋でTC-14-a に属す。20はTD-14に属す。胎土は黄白色を呈す。中央部に削り出しによるつまみを有する。21はTZ-34 に属す。胎土は茶褐色を呈しやや軟質である。断面はそろばん玉状で、底部には円錐形の脚が三箇所貼付されている。注口部には茶滓留めの孔が三箇所穿たれている。体部上半には鉄釉が施されている。底部にはススの付着が認められる。22は播鉢でTE-29 に属す。胎土は赤褐色で白色微粒を多量に混入する。口縁は二本の沈線を有する縁帯と一本の沈線を有する突帯で形成され、一箇所に掻きだし口をもつ。底部は高台内側を半円状に削り込むことによって高台を作出している。播目は1単位9条で隙間なく施されている。底部の播目は十字に施されている。口縁内側には図のような刻印が押されている。

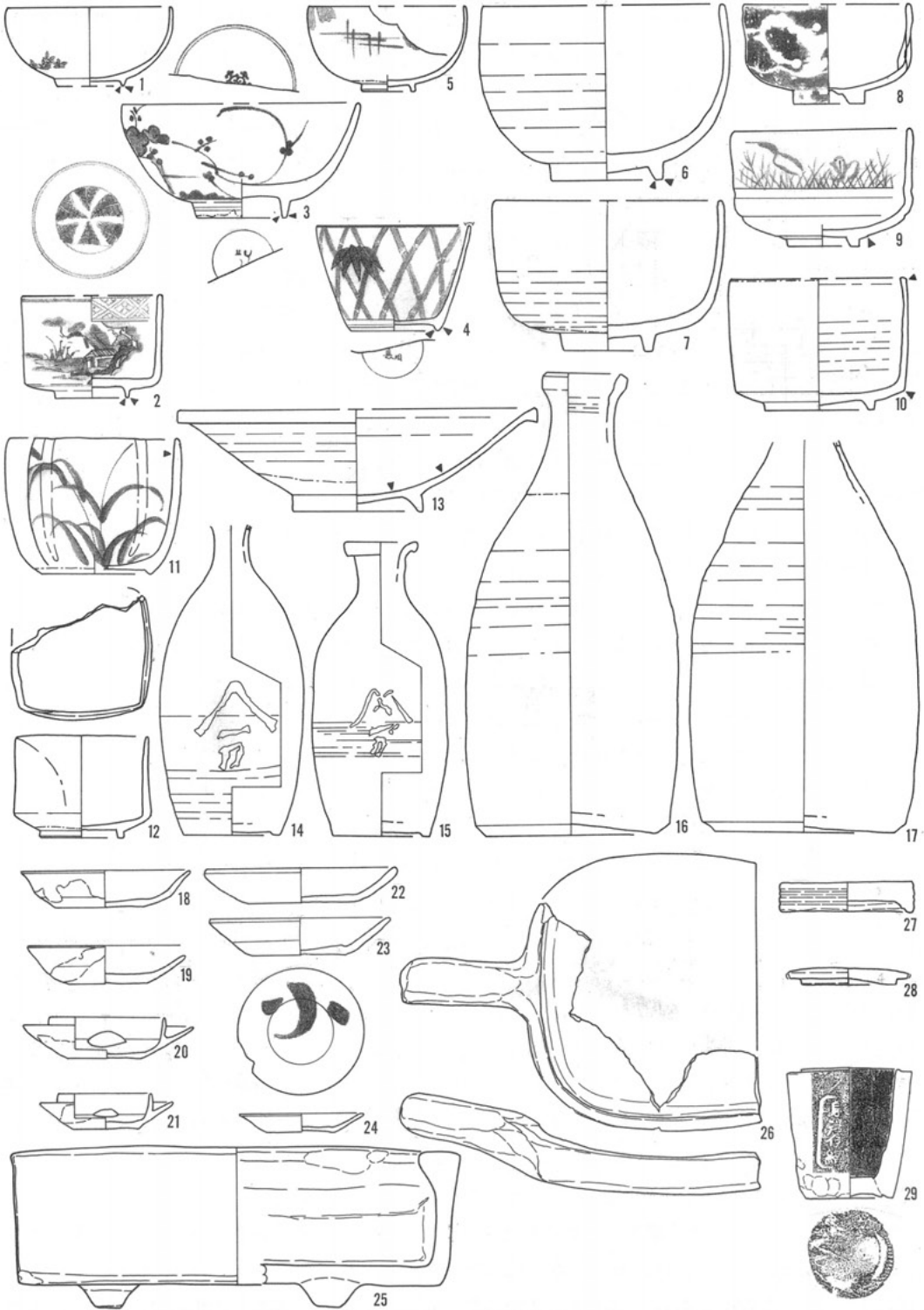
徳利(23, 24) 23, 24ともに瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、線刻の釘書が認められる。口唇部は薄めに折り返され、頸部はやや長く撫で肩で、最大径は胴上部にある。胴下端の釉の拭き取りはやや雑で、高台の削りも浅めである。2合半徳利は20個体弱が出土している一方、5合・1升徳利は160個体ほど、志戸呂産徳利は80個体ほどと大量に認められる。

焙烙(25, 26) 25の口径は31.1cmで底部までかろうじて四分一の残存。口縁はほぼ直立するが短い。ケズりは屈曲部より底部側につき、ケズリ部分が広いのも特徴である。26は蓋で口径20.8cm、高さ4cm。ほぼ完形。他に焙烙は8点の出土。口縁片も8点の出土である。はっきりしない4点の他は25に類似する。蓋は他に4点出土している。

土器(27-31) 27は1類aイに分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。外面には、細かい凹凸がつけられ、鮫肌状になっている。口唇部外側はミガかされている。内面は底部および体部の上下に強いナデが横に入り、体部中央には弱いナデと指頭痕が見られる。横のケズりで平滑に整えられている。底面外側は砂粒の痕が残る。28は1類aイの硬質土師質の火鉢類。輪積み成形である。下半を欠く。口縁下に沈線が巡り沈線より上はミガかれ、沈線の下には細かい斜格子の、おそらくはローラーによる模様がつけられ、その後ミガかされている。内面下方には工具によるナデが横に走り、体部中央には工具を押し引きしたと思われる痕が連続している。口唇部は敲打を受けており、また内面には煤が付着している。29は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。小さめの足が底面周縁部に付く。体部内外面は比較的丁寧にナデられている。口縁内面には沈線が巡っている。底面外面は平滑である。体部外面にわずかに銀彩がのこる。口唇部内外面には敲打痕が連続している。30は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。体部外面は丁寧に調整され、平滑で、金属光沢を帯びた朱彩が施されている。内面は横のナデ調整の痕が残り、指頭痕が少々見られる。底面外側にはチヂレ目が見られる。31は2類aに分類されると思われる硬質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。口縁周辺のみが残っており、全体の姿は明確にしえないが、口縁上端から切り込みをもち、板状の突起が設けられている。口縁の下に通気孔と思われる小孔がある。口唇および切り込み部の上面、外面がミガかされている。D33-1に類例が見られる。このほか、瓦質、土師質の火鉢類7、土師質の風口3、十能3が見られる。

焼塩壺(32, 33) 32はイ類2に分類される蓋。胎土には雲母の粒子が含まれる。白色を帯びた褐色を呈し、下面には粗い布目が見られる。側面は横にナデられて調整されており、側面下端は斜めに削がれたような押圧がある。33は鉢形2類の身。底面は平坦で、体部と底部の境は面取りがなさ

第一節 陶磁器・土器



IV-028 圖 E34-2 出土遺物 (1)

第IV章 江戸時代の遺物

れ、体部は垂直に立ち上がる。口縁上面は平坦である。体部および底部の内面には布目があり、胎土はやや橙色を帯びた肌色である。ほかにロクロ成形の身1、板作り成形の身3の小片がある。

E34-2 (IV-028, 029図) 陶磁器は18世紀前半にまとまり、V期に位置付けられる。徳利を除き、図示しなかった破片は少なく、出土した遺物の大半が完形に近いものもしくは大破片であったことが廃棄の一つのあり方を示すものとして特徴的である。

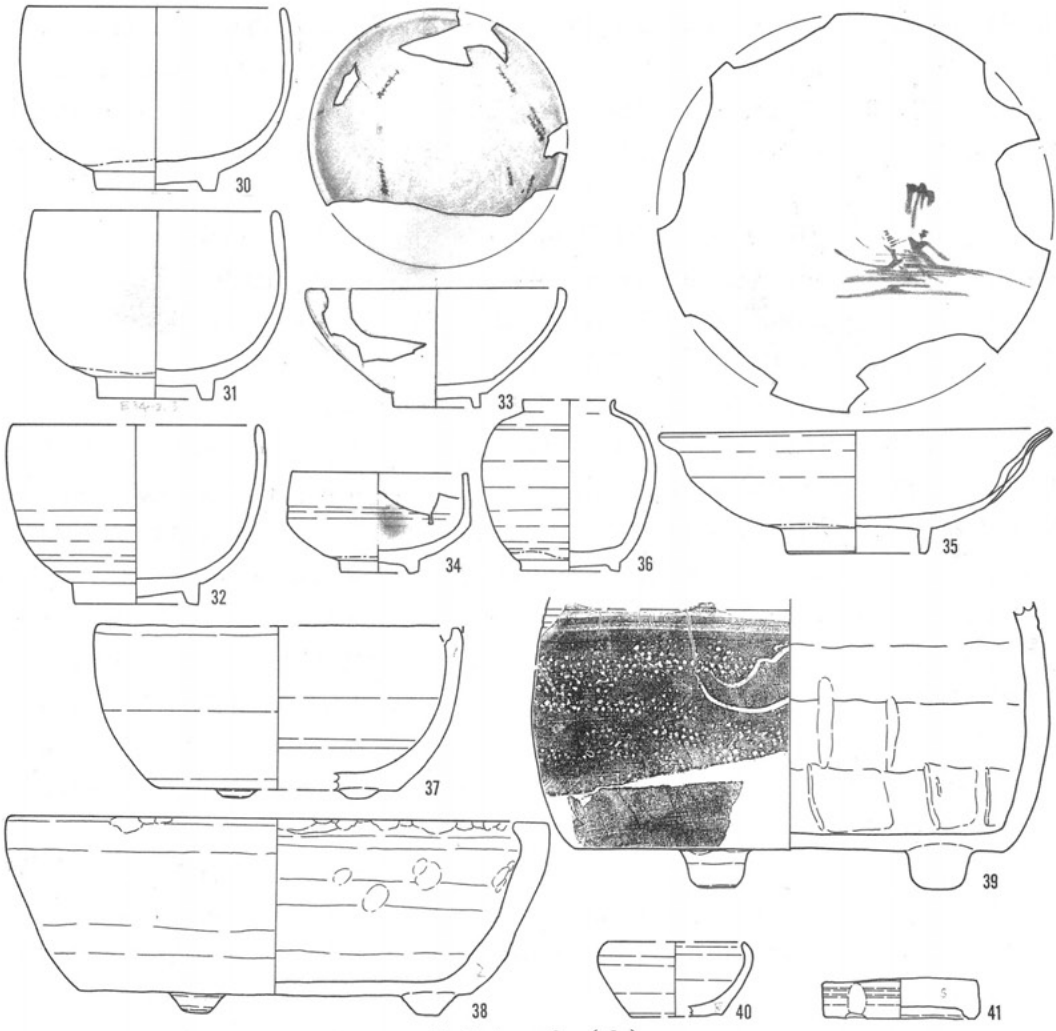
磁器(1-4) 1は碗でJB-1-fに属す。2は筒形碗でJB-1-lに属す。釉はややくすんでおり、微細気泡を多量に混入している。口縁内側には四方襷が描かれている。3は鉢でJB-5に属す。見込みには二重圏線内にコンニャク判による五弁花、高台裏には「太明年製」銘が描かれている。4は猪口でJB-7-bに属す。口唇部には口銹が施され、高台裏には一重圏線内に「□明□製」銘がみられる。

陶器(5-13, 30-36) 5-9, 30-34は碗である。5は京焼系の碗でTD-1-bに属す。胎土は灰白色を呈し硬質である。高台脇は面取りされており、全体に丁寧な作りである。文様は赤絵の具による格子状文と白土を下地に色絵の具を塗った花文が描かれているが、色絵の具は剥げ落ち色調は不明である。6-7, 30-32は灰釉碗でTC-1-cに属す。6, 32は全面施釉で30は底部の釉が拭き取られている。31の高台裏は平坦であるが、その他は緩やかな円錐形を呈している。8は拳骨茶碗でTC-1-pに属す。底部は蛇ノ目状の輪高台を呈し無釉である。また高台裏は渦巻状に削られている。釉は長石釉を散らした上に鉄釉を施している。9はTD-1-iに属す。胎土は黄白色を呈す。高台は断面台形を呈し、高台付根にはカンナ痕が巡る。見込みには三箇所ピン痕がみられる。体部には鉄絵と白土によって鷺と草が描かれている。底部にはかすかに墨書が認められる。33は瀬戸・美濃系の刷毛目碗でTC-1-sに属す。胎土は黄白色できめが粗い。白土で刷毛目を施し灰釉をかけている。色調は黄白色を呈する。34はせんじでTC-1-lに属す。底部以外に灰釉が施され体部には鉄絵による文様がみられる。12, 13, 35は鉢である。12は小型の鉢でTD-5に属す。胎土は黄白色で硬質である。ロクロ成形によって筒形に成形し、口縁を胴張りの方形に仕上げている。底部以外に灰釉が施されている。13は瀬戸・美濃系の輪剥鉢でTC-5-cに属す。灰釉が施されているが、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ底部は無釉である。35は肥前系の京焼風鉢でTB-5-cに属す。胎土は黄白色で硬質である。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。体部中位に二箇所凹みを有している。見込みには鉄絵による文様が描かれている。10, 11は香炉である。10は志戸呂系の香炉でTF-9に属す。胎土は暗褐色を呈し、白色微粒を混入している。外面には鉄釉が施されている。11は京焼系の香炉でTD-9-aに属す。胎土は黄白色を呈し、微砂粒を多量に混入している。体部はロクロ成形後に形打ちによって六弁の輪花状に成形されている。体部には鉄絵によるススキ文が描かれている。36はTC-15に属す。体部には灰釉が施されている。

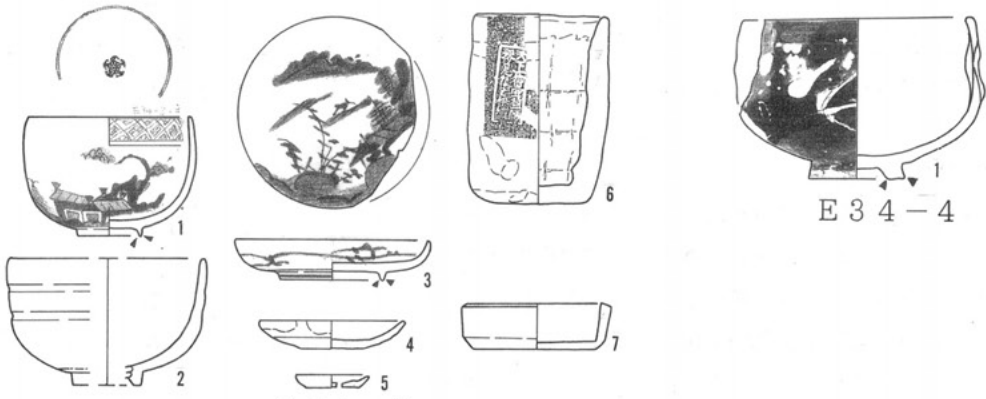
徳利(14-17) 14, 15は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利でベタ刻の釘書が認められる。15の口唇部は鏝状に張り出し、外縁部が軽く撫でられて整形されている。ともに頸部は長く撫で肩で、最大径は胴部中程にある。胴下端の釉は丁寧に拭き取られ、高台の削り込みも深い。16, 17は志戸呂産の徳利で16では口頸部に茶褐色釉が掛けられている。ともにほぼ寸胴であり、底部外周はヘラ削りされている。2合半徳利、5合・1升徳利、志戸呂産徳利ともに15~20個体ほどが出土している。

灯火具(18-21) 18, 19は志戸呂油皿。10cm強の口径で、二つともほぼ完形であるが、明らかに

第一節 陶磁器・土器



E 3 4 - 2 (2)



E 3 4 - 3

E 3 4 - 4

IV-029圖 E34-2(2)、E34-3、E34-4出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

二次焼成を受け変形している。図は復元して描く。灯芯の油痕は疎らにしか認められないが、18は口唇を厚く全周。底部はヘラケズリ調整されている。19にはヘラケズリ以前の左(?)回転の糸切り痕が残る。20, 21は志戸呂受付。21は完形。20には内面および口縁のところどころに灯芯の油痕の付着がある。21にはない。底部はやはり回転ヘラケズリ調整。志戸呂系は他に油皿 3点, 受付 1点の出土。素焼受付の小片も1点出土している。

カワラケ(22-24) 口径7.8-12.2cmのものを図示している。灯芯の油痕は認められない。全て左回転の糸切り底である。24には「小」の墨書がある。カワラケは全部で29点の出土。口径二寸七分以下が多い。最小の口径 3.1cmのカワラケ1点にのみ回転糸切りの後、縦方向のヘラケズリが施される。不明のものも多いが、左回転の糸切りが主である。なお大型の口縁片に限って灯芯の油痕がわずかに認められるものがある。

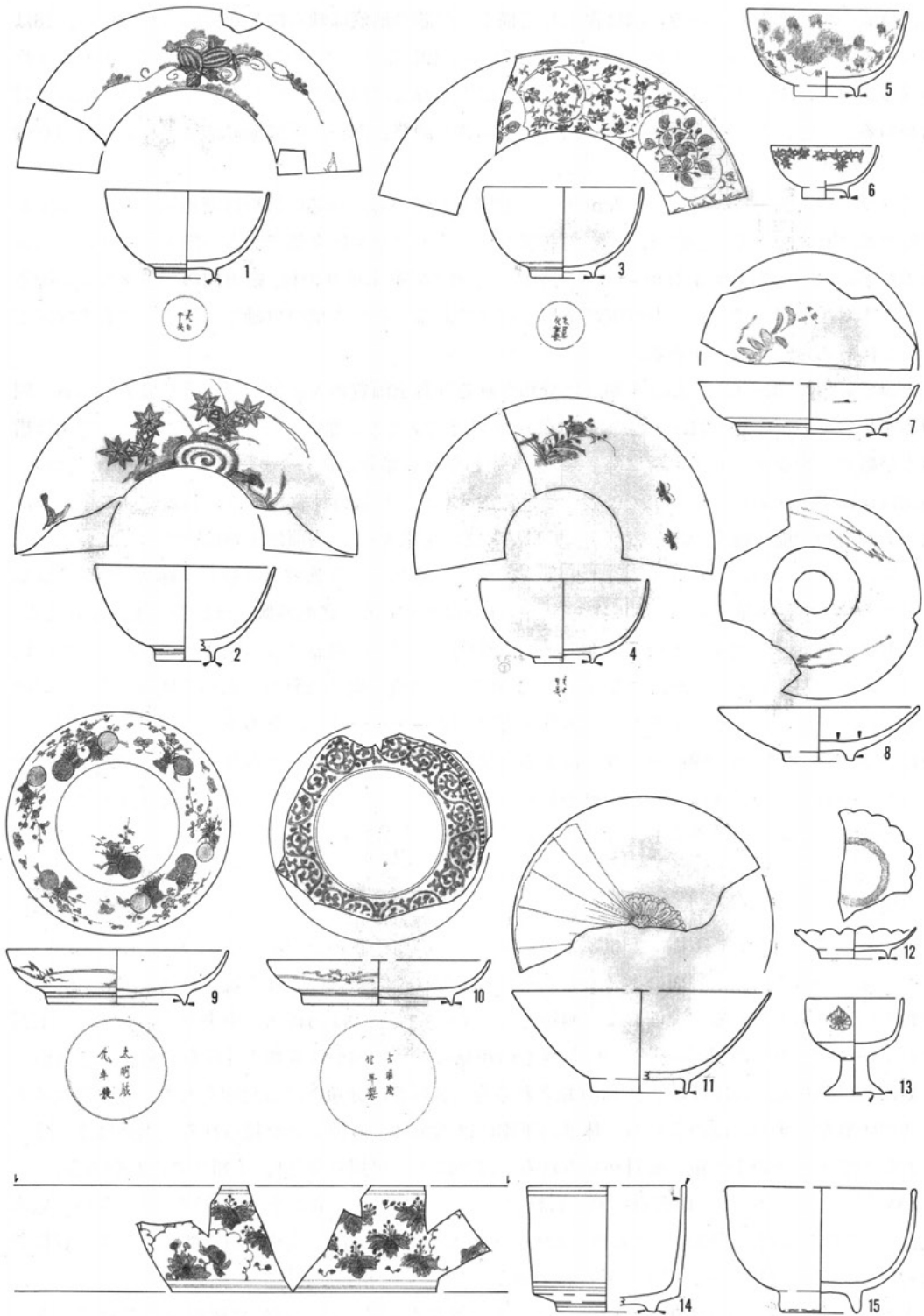
土器(25, 26, 37-40) 25は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われ、一辺の長さは28cmほどであるが、他辺の長さは不明である。外面は横および縦の丁寧なケズリで平滑に整えられ、底面と交わる部分は強くケズられて面を構成している。内面は横にナデが走る。また角では縦にナデが加えられ、底面外側にはチヂレ目が見られる。26は軟質土師質の十能。握りの部分はケズリにより整形されている。内面は丁寧にナデられている。底面外側にはチヂレ目が見られる。37, 38は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。37は小型の足をもつ。体部内外面とも丁寧にナデられ、底面外側には砂粒の痕が見られる。口唇部は敲打により欠損している。38の体部内外面はナデられ内面には指頭痕が見られる。口唇内面には敲打痕が連続する。39は1類aイに分類される硬質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。口縁部を欠損している。大きな足をもつ。体部上方に二条の沈線が巡り、その下には沈線による雲形の模様を描かれ、模様の外側はローラーによると思われる沢山の点がつけられ、その後弱いミガキが施されている。底面外側には砂粒の痕が見られる。丸火鉢であろうが、あるいは特異な形態をもつ点などから、風炉の可能性もある。40は軟質土師質の小型の容器。ロクロ成形である。やや黒ずんだ褐色を呈する。底面には糸切り痕が見られる。ほかに瓦質、土師質の火鉢類7, 十能2がある。

焼塩壺(27-29, 41) 27, 41はI類2に分類される蓋。胎土に雲母の粒子をわずかに含む。橙色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られ、側面は横に条痕が走る。27は突起の内側に段をもつ部分がある。41は側面に指頭痕もみられる。28はO類に分類される蓋。ロクロ成形である。硬質の白色の胎土である。上面および側縁を欠いている。下面は円錐状に中央が窪んでいる。上面にわずかに隅丸方形の刻印の枠とおぼしきものが見られ、類例から6類1(「深草 砂川 権兵衛」)の刻印と思われる。29はII類2bに分類される身。2類5に分類される刻印をもつ。底面にはスグレ状の圧痕がわずかに認められる。体部の下端には指頭による押圧痕が見られる。内面は下三分一ほどが平滑で、その上に粗い布目が見られる。ほかにI・III類の身各1, I類2の蓋2がある。

E34-3 (IV-029図) 磁器(1, 3) 1は碗でJB-1-hに属す。腰が張り、高台径は小さい。見込みには、二重圏線内に手描きによる五弁花がみられる。E34-1・2出土遺物と遺構間接合をする資料である。3は小皿でJB-3-aに属す。外文様の唐草は縁取りが施されていない。

陶器 2は碗でTC-1-fに属す。体部には二条の沈線が巡る。底部以外に灰釉が施されている。

第一節 陶磁器・土器



IV-030圖 E35-4出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

灯火具 4 は鉄釉油皿。ほぼ完形。他に志戸呂系の受付の小片が出土している。

カワラケ 5 は素焼であり、形態上の類似から一応カワラケに分類した。底部に焼成前の穿孔があり、灯芯の油痕が口唇を半周し顕著であることから、灯火具として扱うべき性質のものである。完形。左回転の糸切り底。

焼塩壺(6, 7) 6はI類3に分類される身。2類3に分類される刻印をもつ。底面外側にはかすかにムシロ目が認められる。内面は粗い輪積み痕をそのまま残し、底面付近には布目が見られる。7は鉢形2類の身。赤みを帯びた橙色を呈する。底面は平坦平滑で、体部と底部の境は面取りがなされ、体部は垂直に立ち上がる。体部外面は剥落が激しいが、体部内面は平滑で、底面内側には同心円状のナデ痕が見られる。ほかに土師質の火鉢類、風口の破片各1個体がある。

E34-4 (IV-029図) 陶器 1は拳骨茶碗でTC-1-pに属す。高台は蛇ノ目状を呈し、体部は腰が張る。また体部には八箇所凹みが認められる。釉は長石釉を散らし、鉄釉を施している。E34-1出土遺物と遺構間接合をする資料である。

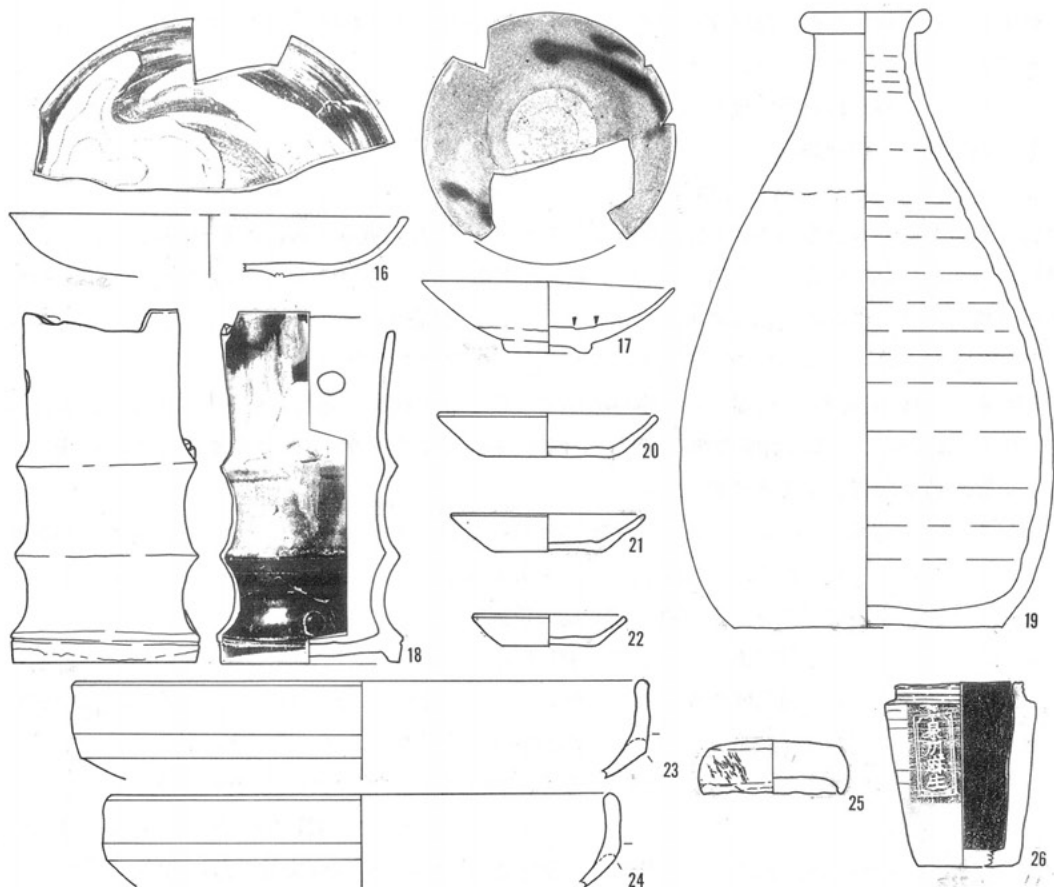
E35-4 (IV-030, 031図) 陶磁器, 土器, カワラケなどまとまった量出土し、特に陶磁器類は良質な製品が多く見られる。やや年代的に幅を有するものの17世紀末~18世紀前半の良好なセットとしてとらえる事ができる。本地点ではV期に位置する。

磁器(1-14) 1-6は染付である。1, 2, 5はJB-1-gでコンニャク判で絵付けされている。1の銘は「大明年製」である。5は過火度の焼成のためか呉須が滲んでいる。3はJB-1-eで、銘は「天明成化年製」である。4はJB-1-fである。高台裏が高台脇より薄く作られていること、銘の存在など本地点V期以降の本類の安定した年代の製品ではなく、初現的なタイプである。銘は「大明年製」である。6はJB-6-aで、コンニャク判で絵付けされている。7は色絵で、JB-2-cに分類される。上絵はほとんどとんでいる。高台裏にはハリ支えが一箇所認められる。8-14は染付である。8はJB-2-kで、高台裏無釉である。呉須の発色は悪い。9, 10はJB-2-dで呉須の発色、胎土、絵付け等が良好で、高台の釉際の処理や、高台の削り方が南川原窯ノ辻窯出土の製品と一致する。おそらくそのあたりで焼成された製品であろう。銘はともに「天明成化年製」、ハリ支えもともに一箇所認められる。11はJB-5に分類される。高台のつくりはJB-1-cと同様であり、17世紀の後半の製品であろうと考えられる。12は貼付高台の型皿で、JB-4-aに分類される。13はJB-8で、絵付けはコンニャク判でされている。14はJB-13-bである。高台は幅広で、脇面取りがされている。

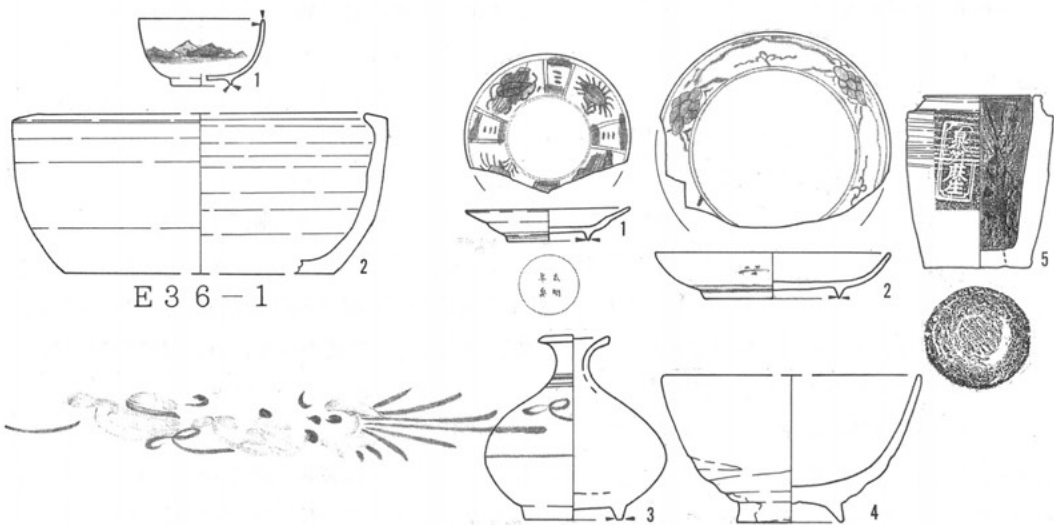
陶器(15-18) 15はTB-1-aで、全体に細かい貫入が認められる。16は刷毛目の皿で、白土で渦巻状と不規則に塗った後、棒状の工具で掻き落としている。高台は貼り付けていたと思われるが接合部より欠損している。TB-2である。17はTB-2-aであるが、灰釉に銅緑釉と薄いうのふ釉を流し掛けしている稀な例である。18は鉄釉にうのふ釉流しの竹を模した花生けで、TC-22に分類される。高台裏無釉で口縁やや下には、吊り下げ用かと考えられる径13mmの孔が穿たれている。

徳利 19は志戸呂産の徳利であるが、これのみは並み外れて巨大であり、おそらく容量的には通常の約2倍、2升程度になるのではないかと思われる。口頸部には茶褐色釉が掛けられている。口唇部は小さく折り返されて玉縁状となり、最大径は胴下部にあって全体の器形は涙滴形を呈する。また底部外周はへら削りがなされずベタ底となっている。墨書等は確認されなかった。瀬戸美濃産

第一節 陶磁器・土器



E 3 5 - 4 (2)



E 3 6 - 1

E 3 6 - 2 · 3

IV-031图 E35-4(2)、E36-1、E36-2·3出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

の2合半徳利、志戸呂産徳利はごく少量であるが、5合・1升徳利は30個体ほど出土している。

カワラケ(20-22) 図示したものの口径は8.4-12cm。20に灯芯の油痕がある。21, 22にはない。カワラケは64点出土し、44%を占める。おそらく流れ込みと考えられる右回転糸切りのカワラケも3点出土。上製は2点ある。他は全て左回転の糸切り底のカワラケである。ただし小片が多く、形態のわかるものは少なかった。

焙烙(23, 24) 23, 24の口径は31.3cmと28.1cm。23は口縁にややくびれをもち、口縁と底部の境が明瞭である。ケズリは口縁側にある。24はわずかに異なり、ケズリは口縁と底部の境に施される。これによって23ほど境が明瞭でなくなる。23がわずかに形態的に新しいと考えている。23, 24を含め底部片9点、口縁片15点出土。形態のわかる口縁片のうち、23に類似するもの8点、24に類似するもの3点の出土である。

焼塩壺(25, 26) 25はI類1に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。上面は丸みを帯びて緩やかに側面に至る。下面には細かい布目があり、突起の内側はやや内湾している。26はII類1 b2に分類される身。3類1 bに分類される刻印をもつ。口縁直下に二条の沈線が巡っている。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。II類の身2, 瓦質・土師質の火鉢類7, 風口2がある。

E36-1 (IV-031図) 磁器 1は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。

土器 2は軟質土師質のロクロ成形の容器。底部は欠損しており足は見られないが、口縁内側に煤の付着が見られることや、形態、大きさなどから1類a口に分類される火鉢類と思われる。ほかにIII類の焼塩壺の身1が見られる。

E36-2・3 (IV-031図) 磁器(1-3) 1は染付小皿で、JB-3-cに分類される。2は染付で、JB-2-cである。呉須の発色は鈍い。3は色絵で鳳凰を上絵付けしている。朱以外の色は消失して判別できない。JB-12である。

陶器 4は灰釉の碗である。片薄高台風の高台は緩く「ハ」の字に開き、脇面取りされている。灰釉は内面と外面体部下端までラフに施されている。体部下端は、棒状の工具で渦巻状に沈線を巡らせている。萩あたりの製品かもしれない。

焼塩壺 5はII類1 b2に分類される身。3類1 bに分類される刻印をもつ。口縁直下に沈線が、体部上半にも数条の条線が巡っている。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。底面にはムシロ目が見られる。ほかには同様の身の小片1が見られるのみである。

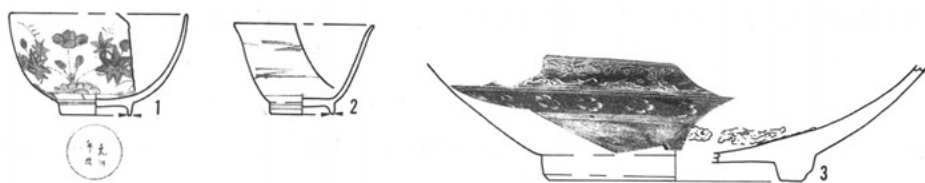
E36-4 (IV-032図) 磁器(1, 2) 1, 2は染付である。1はJB-1-gで、コンニャク判と手描きを併用して絵付けされている。2はJB-6-bに分類される。

陶器 3はTB-5-bである。象嵌の押印文様、白土の塗り込め方などはかなりラフである。見込み中央は砂胎土目積み白砂が多量に付着している。高台の脇は面取りされている。体部下半は鉄釉が化粧掛けされている。

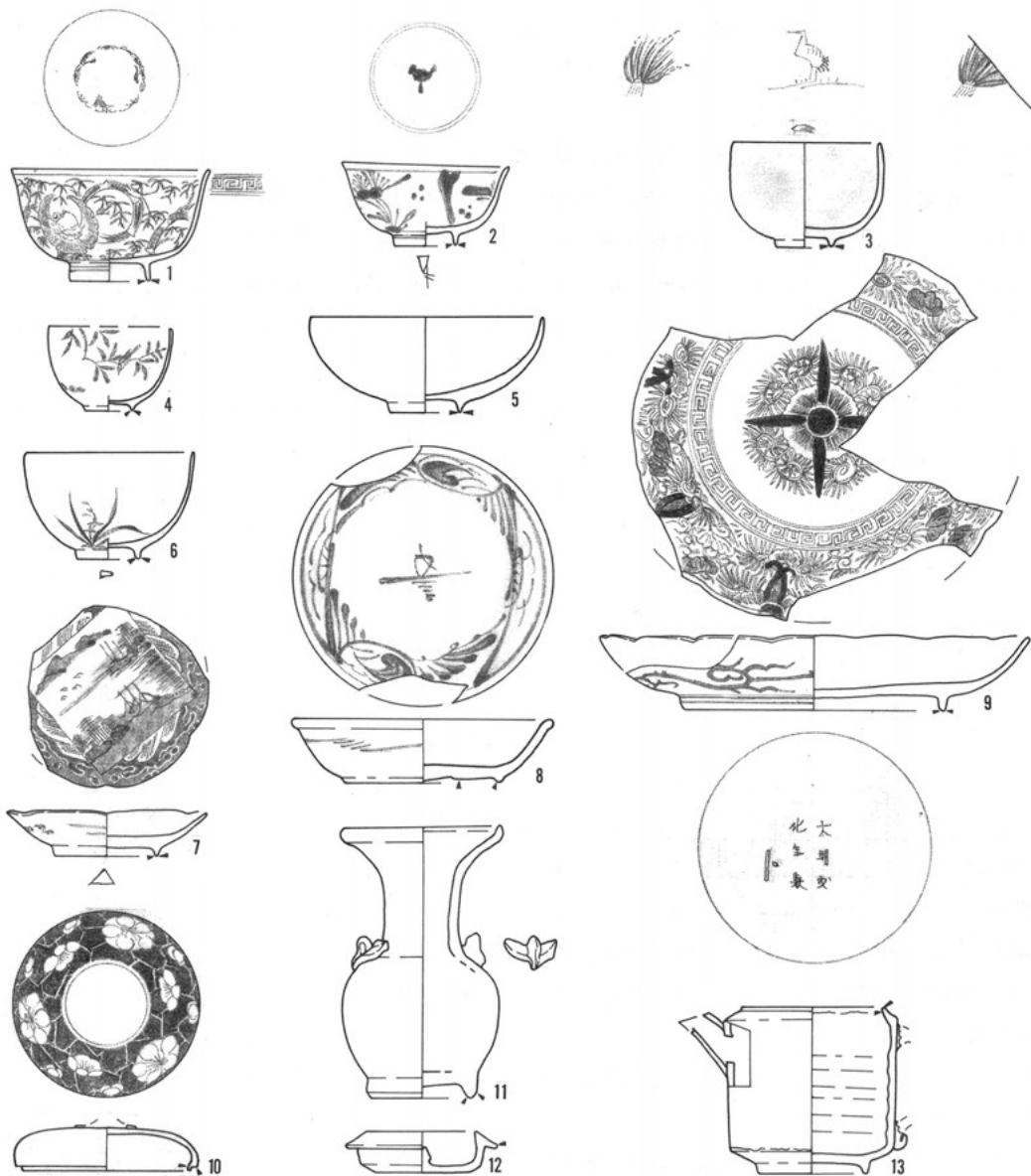
F23-2 (IV-032図) 本遺構は陶磁器類はまとまった量の出土を見ている。時期的には新しく本地点ではVIII期に属する。

磁器(1-4, 6, 7, 9-11) 1-4, 6は染付碗である。1はJB-1-nで、呉須の発色は良好である。絵付けは清朝磁器の影響と考えられる細線描でなされている。2はJC-1-dである。焼き継ぎがされて

第一節 陶磁器·土器



E 3 6 - 4



F 2 3 - 2 (1)

IV-032圖 E36-4、F23-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

おり、底部には焼き継ぎ印が認められる。呉須は、藍の強い地呉須を用いている。3はJB-1-jで、器面には、鶴、稲束文、見込み中央には羽根状の小印が描かれている。呉須の発色は鈍い。4はJB-6-aに分類される。6はJB-1-eに分類される。焼き継ぎがされており、底部には三角の焼き継ぎ印が認められる。7は染付輪花小皿でJB-3-bに分類される。見込み文様の色紙外側の波濤文は墨弾きされている。焼き継ぎがなされており、底部には三角の焼き継ぎ印が認められる。9は染付輪花皿で、JB-2-eに分類される。絵付けは清朝磁器の影響と考えられる細線描でなされている。高台裏には「ト」の釘書が認められる。銘は「太明成化年製」で、ハリ支えが一箇所認められる。10は染付蓋で、JB-14-cに分類される。絵付けは墨弾きの技法が用いられる。11は青磁で、JB-11に分類される。

陶器(5, 8, 12-14) 5はTD-1-hで、灰釉が畳付以外全釉されている。8はTC-2-hに分類され、呉須は地呉須を用いている。12は灰釉蓋で、TC-14に属する。13はTC-27-bで灰釉が掛けられている。14はTZ-34-cで底部にはススが付着している。絵付けは鉄絵の具、緑釉、黄釉で丁寧にされている。

徳利(15-18) 15は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利である。いわゆるべこかん徳利、備前写などと呼ばれるもので、胴部の2箇所にくぼみが認められる。折り返し口縁で最大径は胴部中程にあり、ベタ底である。このタイプとしては中型のものが見ることができる。16は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、点刻の釘書があるほか、胴下端の無釉部分の5箇所に同じ墨書が認められる。口唇部は厚く折り返され、寸胴つけ掛けである。17, 18はそれぞれ瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利、5合徳利で、双方とも胴部の表裏には異なる釘書が点刻でなされている。口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり、肩部は張ってほぼ寸胴、高台の削りは浅く雑であることも共通している。2合半徳利、5合・1升徳利が75~90個体ほど出土しており、そのほとんど全てが16-18と同タイプのものと考えられる。瀬戸美濃産鉄釉系徳利、志戸呂産徳利はごく小量が認められるのみである。

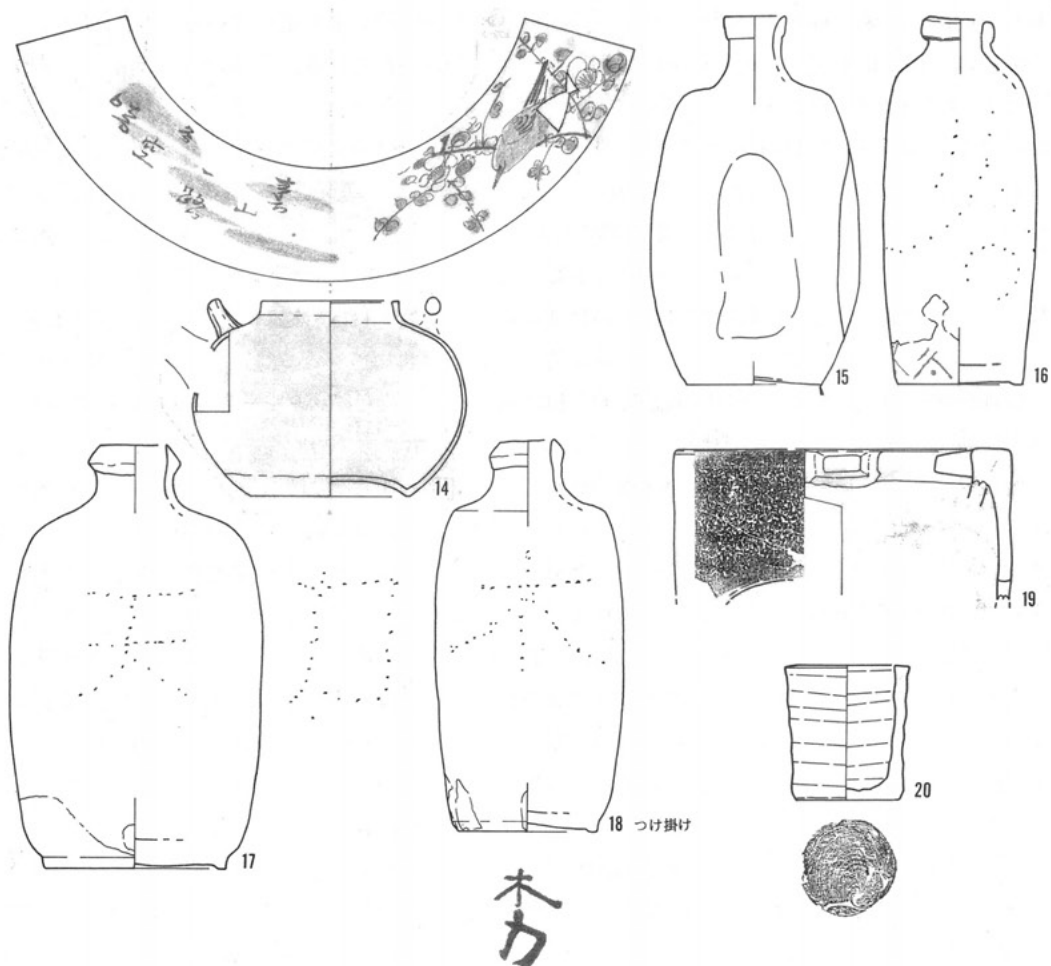
土器 19は2類dに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形されたものを組合せて形作られている。下半および内部の施設を欠損している。体部下方に開口部が認められる。口縁内側には突起が貼付されている。突起は三つあったものと考えられる。外面から口縁上面にかけてミガかされている。外面にはミガキの下にチリメン状の模様が施されている。口縁上面の内側から内面にかけて火熱によると思われる黄白色変が見られる。ほかに火鉢類の破片6個体分がある。

焼塩壺 20はⅢ類eに分類される身。刻印は認められない。体部はほぼ垂直に立ち上がる。

F25-1 (IV-033図) 磁器 1は碗でJB-1-gに属す。体部はコンニャク判と手描きの組合せによる文様である。高台裏は一重圏線内に「大明年製」銘がみられる。

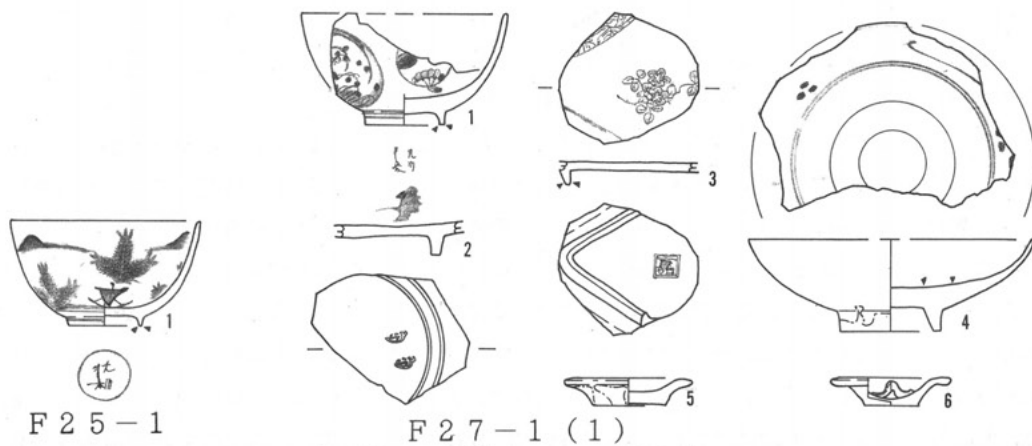
F27-1 (IV-033, 034図) 磁器(1, 3, 4, 7) 1は碗でJB-1-gに属す。器厚は底部で9mmと厚い。高台裏には「大明年製」銘がみられる。3は型皿でTB-4-aに属す。底部片であるが体部は型打ち成形で高台は糸切り細工による貼付高台で菱形を呈す。高台裏には二重角枠内に「嘉」銘がみられる。4は皿でJB-2-kに属す。見込み蛇ノ目釉剥ぎで、底部は無釉である。見込みには二重圏線が巡り、花文が散らしてある。7は色絵皿である。高台は断面三角で、体部の立ち上がりは緩やかである。胎土はやや軟質の灰白色を呈し、肥前、景德鎮の硬質のそれとは異なるように観察される。上釉は厚く、白濁色で全体にやや大きめの貫入が認められる。見込み文様はおもだかが青、赤、緑、黒絵の具を用いて上絵付けされている。JY-2に分類される。H29-1 出土のものと同遺構間接合し

第一節 陶磁器・土器



方

F 2 3 - 2 (2)



F 2 5 - 1

F 2 7 - 1 (1)

IV-033図 F23-2(2)、F25-1、F27-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

ている。分析試料の14である。化学分析により九谷の素地であることが明らかになった。

陶器(2, 5, 6, 8, 9) 2は鉢の底部片でTB-5-cに属す。底部は無釉で、見込みには鉄絵が、高台裏には図のような刻印が二箇所みられる。5, 6は落とし蓋でTC-14-aに属す。表面には鉄釉が施されている。5はつまみがなく裏面には糸切り痕を残す。6は橋状のつまみを有し、裏面には糸切り痕を残す。8は薬研でTE-37に属す。角を面取りされた長方形の台座に船底形の本体を乗せている。内面は薄く施釉されている。これと対で使用する車輪状の道具はF34-11に検出例がある。9は信楽系の播鉢でTD-29に属す。胎土は褐色を呈し、白色砂粒を多量に含有している。内面には1単位7条の播目が施され、底部は同一方向の播目により埋められている。

焼塩壺(10, 11) 10はI類1bに分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈し、薄手で整っている。下面には細かい布目が見られ、沈線による圏線が見られる。側面には指頭痕が多く見られる。11はII類1b2に分類される身。刻印は大部分が欠損しているが、枠線などから3類1bに分類されると思われる。体部口縁下に条線が巡っている。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。

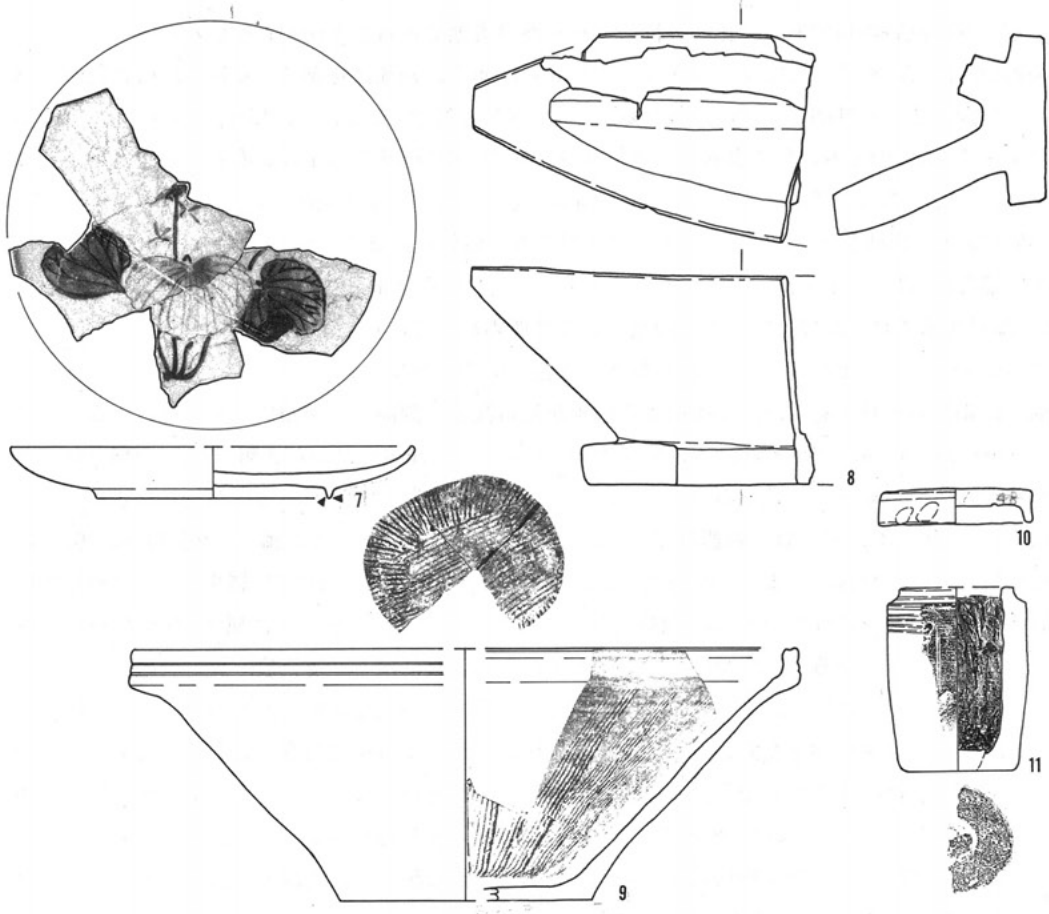
F27-2 (IV-034, 035図) 磁器(1-3, 5-7) 2は色絵碗でJB-1-dに属す。文様は赤, 黒, 青, 黄絵の具による上絵付けによって草花文が描かれている。1, 3は鉢でJB-5に属す。高台はやや内傾し畳付は平坦に整形されている。3は白磁である。5は乳白手の皿でJB-2-cに属す。体部は口縁で外反し輪花を形成している。高台断面は三角形を呈し、高台裏にはハリ支え痕、放射状のカンナ痕がみられる。見込みには陽刻によって窓絵内に松竹梅、鳥などの文様が施されている。全く同様の製品が柿右衛門B窯跡第10室北側物原第19層より出土しており(有田町教育委員会編1978)、その出土状況より柿右衛門窯のなかでも古い段階に位置するものといえよう。また、ドレスデン国立美術館にも所蔵されている。6は色絵の皿でJB-2-eに属す。胎土は灰白色を呈し、高台裏にカンナ痕を残す。釉は外側面、高台裏で釉切れが目立つ。見込み文様は黒, 赤, 青絵の具による上絵付けで草花文が描かれている。7は蓋でJB-14-aに属す。

陶器(4, 8-11) 4は皿でTB-2-aに属す。胎土は黄白色を呈し、高台脇は面取りされている。見込みには蛇ノ目状の釉剥ぎを有し、底部は無釉である。銅緑釉が施されている。8, 9は菊皿で、8はTC-2-kに属す。見込みには三箇所のピン痕が認められる。底部以外に灰釉が施されているが、二次焼成を受け溶解・変質している。9はTC-2-lに属す。見込みは型打ちによって菊花を、口縁は削りによって輪花を形成している。見込みには型打ち時の布目痕が認められる。また見込みには三箇所のピン痕が認められる。釉は灰釉を施し緑釉を流している。10は皿でTC-2-jに属す。高台裏には三箇所のピン痕がみられる。見込みには鉄絵によって笹文を描き、長石釉を全面に施している。F27-1出土遺物と遺構間接合をする。11は蓋でTF-14に属す。胎土は灰褐色を呈し、表面には鉄釉が施されている。裏面には糸切り痕を残す。

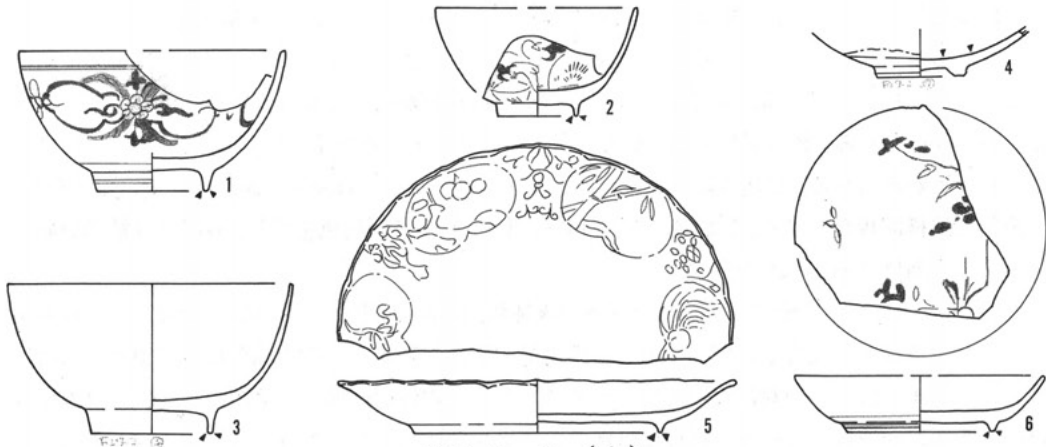
土器 13は1類bイに分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。破片はG27-2からも出土しており、遺構間で接合した個体である。中央で十字に交差する沈線の施された把手が一箇所に見られたが、本来は二つが対になっていたものであろう。内外面は横にナデが走り、底部付近には指頭による圧痕が連続している。底面には顕著なスグレ状圧痕が見られる。

焼塩壺 12はI類1aに分類される蓋。白色の強い肌色である。内面には、細かい布目が見られる。

第一節 陶磁器・土器



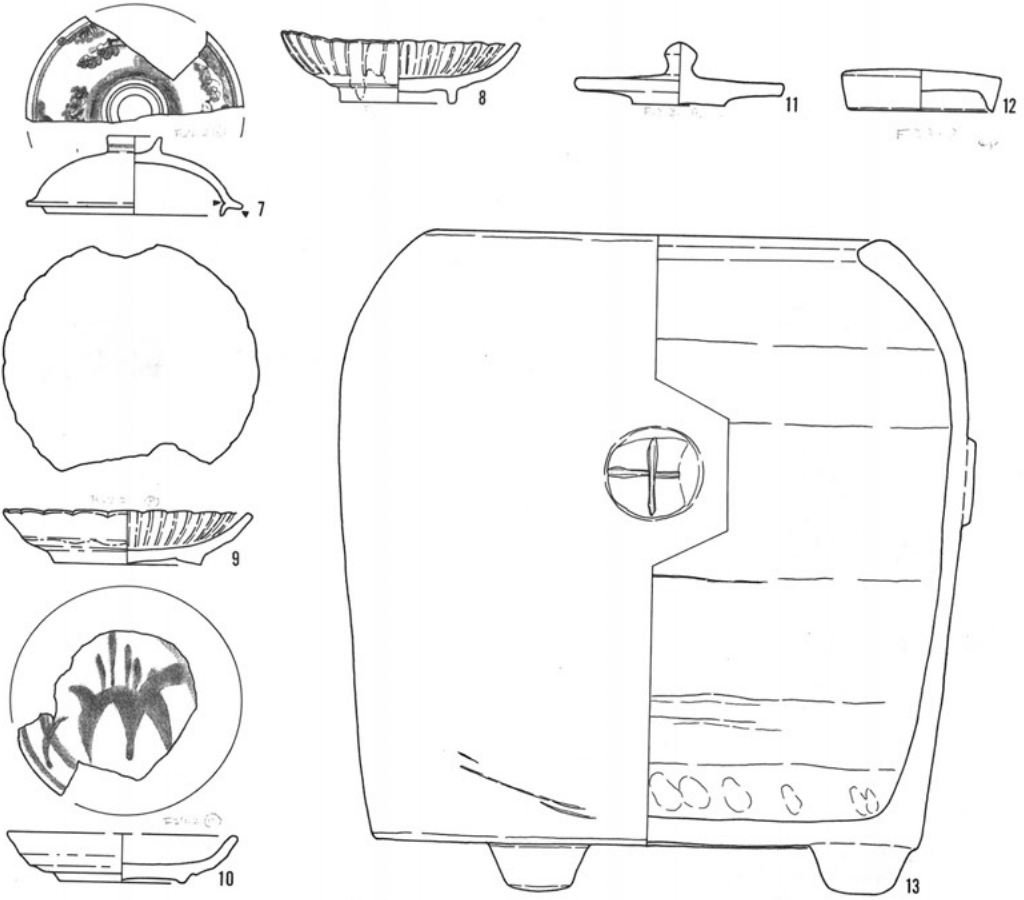
F 27-1 (2)



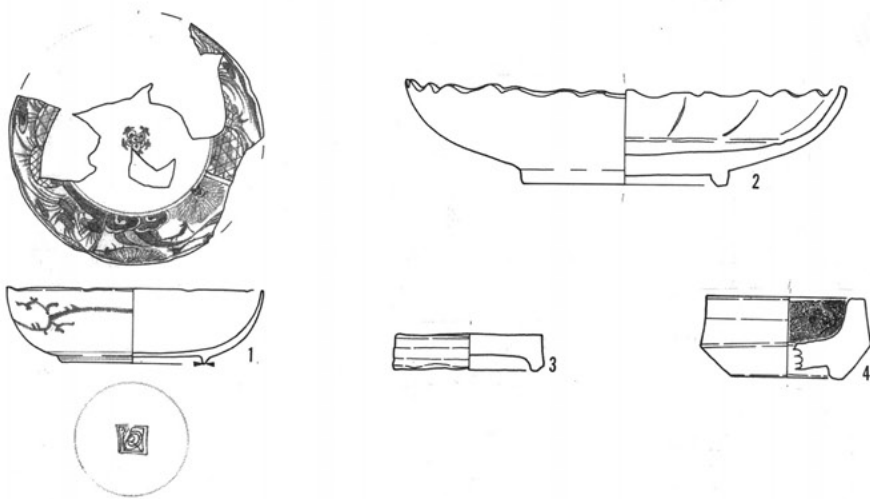
F 27-2 (1)

IV-034 圖 F27-1(2)、F27-2(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物



F 2 7 - 2 (2)



F 2 9 - 1

IV-035図 F27-2(2)、F29-1出土遺物

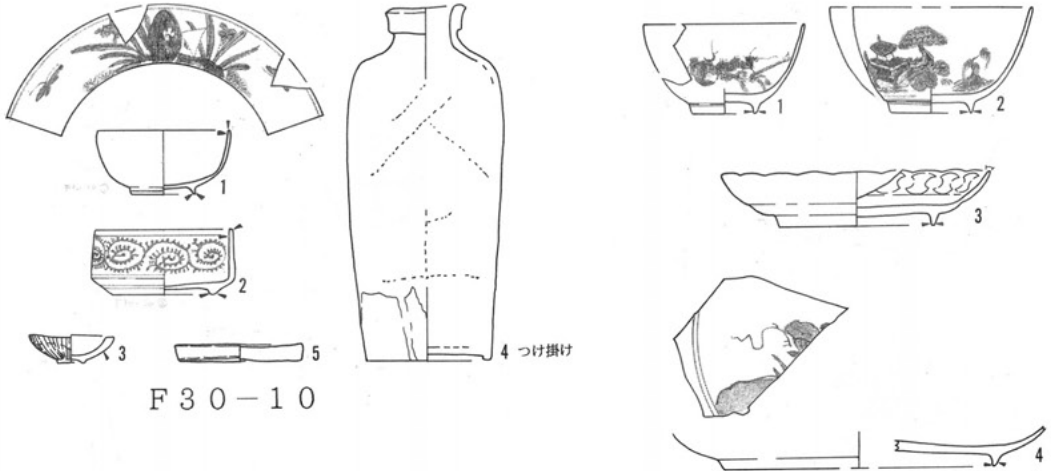
第一節 陶磁器・土器

イ類1の中でも古いタイプのものと考えられる。ほかにア類の蓋1がある。

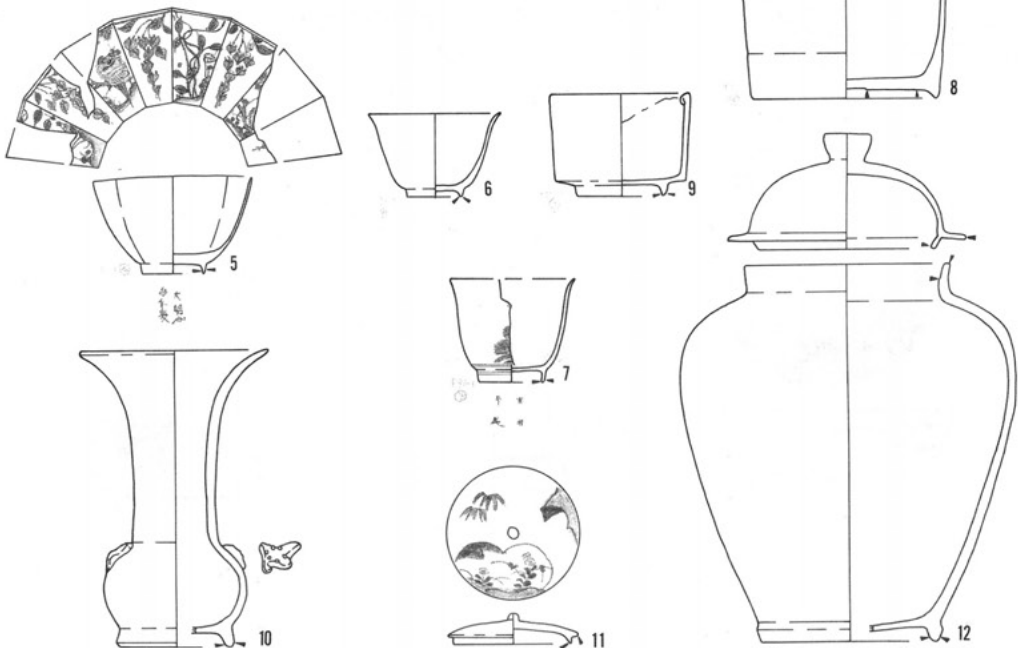
F29-1 (IV-035図) 磁器 1 は染付輪花皿で、二次焼成を受けている。見込み中央には手描き五弁花が書かれ、銘は二重角枠内渦福である。

陶器 2 は錆釉皿でTC-2に属する。口唇は波状に装飾され、見込みは放射状に線刻される。

焼塩壺(3, 4) 3 はイ類2に分類される蓋。胎土には雲母の粒子が含まれる。橙色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。側面は横に条痕が走る。4は鉢形3類に分類される身。刻



F30-10



F31-1(1)

IV-036図 F30-10、F31-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

印をもたない。外面は丁寧にナデられ平滑で、底面に碁笥底状のくぼみがある。内面には比較的細かい布目が見られ、中央には円筒状の浅い落ち込みが見られ、その周囲に縫い目が見られる。このほかII類の身の小片1と瓦質、土師質の火鉢類5 個体分の破片がある。

F30-10 (IV-036図) 磁器(1-3) 1は染付蓋物で、JB-13-aに属する。低火度焼成のため呉須の発色は鈍い。2は染付蓋物で、JB-13-bに属する。3は白磁で、JB-17に分類される。型作りである。

徳利 4 は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。5合・1升徳利が20個体ほど出土しているほか、2合半徳利、瀬戸美濃産鉄釉系徳利、志戸呂産徳利が少量認められる。

焼塩壺 5 はウ類に分類される蓋。白色を帯びた橙色を呈する。上面、下面、側面のいずれにも布目、手掌痕などは認められない。

F31-1 (IV-036, 037図) 本遺構よりの出土は陶磁器、カワラケを中心に比較的量は多い。遺物は本地点のII期に位置する。陶磁器類については若干新しい様相のものを含んでいる。11, 12を除いて二次焼成を受けていない。

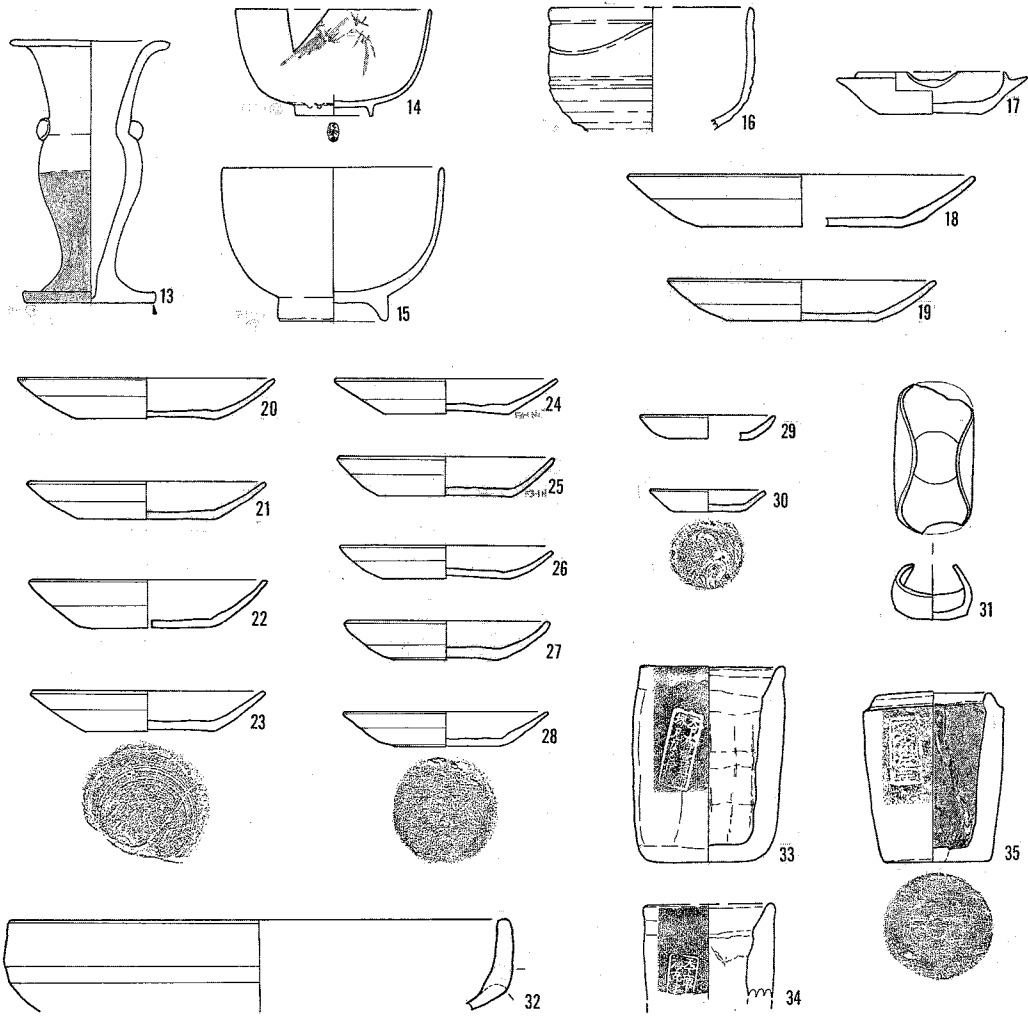
磁器(1-12) 1, 2 は染付碗でJB-1-cに分類される。胎土、呉須の発色ともに良好である。2は高台裏に二重圏線が認められるが、これはこの時期以降の碗には認められないものである。3は白磁皿で口唇には口銹が施されている。見込みには型による連続した分銅形の陽刻が浮き彫りされている。ハリ支えが一箇所認められる。JB-2-cに属する。4は染付皿でJB-2-cに属する。胎土、呉須の発色ともに良好で、高台裏にはハリ支えが一箇所認められる。5は染付でJB-6-eに分類される。型作りであるが器厚は極めて薄く、1-2mm程度である。銘は「大明成化年製」である。6は白磁でJB-6-bに分類される。7は染付小坏でJB-6-bに分類される。L32-1の85と同手である。銘は「宣明年製」である。8は青磁香炉でJB-9である。底部は蛇ノ目状に鉄釉が施されている。青磁釉は厚く薄い青灰色に発色している。9は白磁香炉でJB-9である。10は青磁で、JB-11に分類される。器面は二次焼成を受けている。高台裏施釉。11は染付蓋で、JB-14-eに分類される。12は白磁壺で、内外面施釉されている。二次焼成を受けている。JB-15である。

陶器(13-16) 13はTC-11で、下半柿釉、上半灰釉の掛け分けである。底部は糸切り痕が見られる。14はTD-1-cで鉄絵の具と呉須で笹文を描く。高台裏は無釉で楕円内に「清閑寺」の刻印が押印されている。15は灰釉碗でTB-1-aに分類される。16はTC-1-qで横方向と波状の沈線が施される。

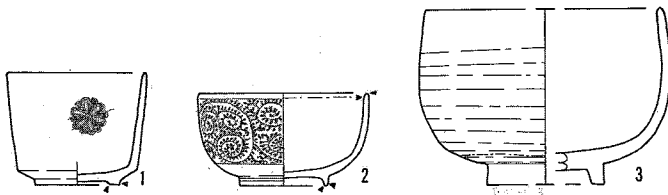
灯火具 17は素焼の受付である。ほぼ完形。銀彩が施されているが、二次焼成を受け剥落している。右回転の糸切り底。遺跡内のもっとも古い灯火具の一つである。他に同一個体と思われるが、瓦質の瓦燈片3点が出土している。

カワラケ(18-31) 図示したものの口径は6.2-18.6cmであるが、四寸前後の個体が中心となる。22の器高は高く、24, 28の口縁は内湾せず、直線的である。29, 30は口径に比べ底径が大きく、ほぼ同じ形態。31は耳皿、長軸8.2cm。灯芯油痕は全周するもの(19, 21, 23, 25)、疎らなもの(24, 26, 28, 30)に分けられる。特に21は油痕が内外面とも底部付近まで達する。これに対し疎らなものは一、二箇所程度の付着である。20, 27, 29, 31には付着しない。22は焼成後の底部穿孔。カワラケは全部で61点の出土。出土比率の51%。耳皿3点、上製1点以外、全て左回転の糸切り底である。底径の

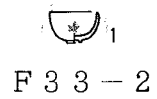
第一節 陶磁器・土器



F 3 1 - 1 (2)



F 3 3 - 1



F 3 3 - 2

IV-037圖 F31-1(2)、F33-1、F33-2出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

わかるもの25点は 5.5-8cmに分布するものが多く、これは口径が三寸八分から四寸八分ほどになるう。またこれらには灯芯油痕の付着する割合も高い。量的にも形態からもF34-11ときわめて近い。

焙烙 32は口径27.1cm。底部を欠くが口縁はほぼ完全に残存。ケズリは屈曲部から屈曲部上位になされ、口縁と底部は明瞭に画されてはいない。また口縁にくびれも認められない。F34-11のなかでも例外的な 197と強い類似を示す。他に底部片 4点、口縁片 3点、瓦質の蓋片がある。口縁片 2点は32より古い様相をもつ。F34-11の 194と類似する。

焼塩壺(33-35) 33, 34は I 類 3 に分類される身。33は 2 類 3, 34は 2 類 2 b に分類される刻印をもつ。35は II 類 1 b1 に分類される身。表面の剥落がげしいが、長方形二重枠の 3 類 1 a に分類される刻印、均整のとれた器形、小さめの底部粘土塊、明瞭な縫い目、布目の見られないことなどを特徴とする。35と同形の小片1 がある。33・34と35が同じ遺構から出土したことは重要である。

F33-1 (IV-037図) 磁器(1, 2) 1は小坏でJB-6-dに属す。高台は蛇ノ目高台で脇が面取りされている。コンニャク判による花文が描かれている。2は蓋物でJB-13-aに属す。口縁内側および畳付は無釉である。高台裏には釘書によって蓮花状の文様が彫られている。

陶器 3 は灰釉碗でTC-1-cに属す。底部は無釉である。

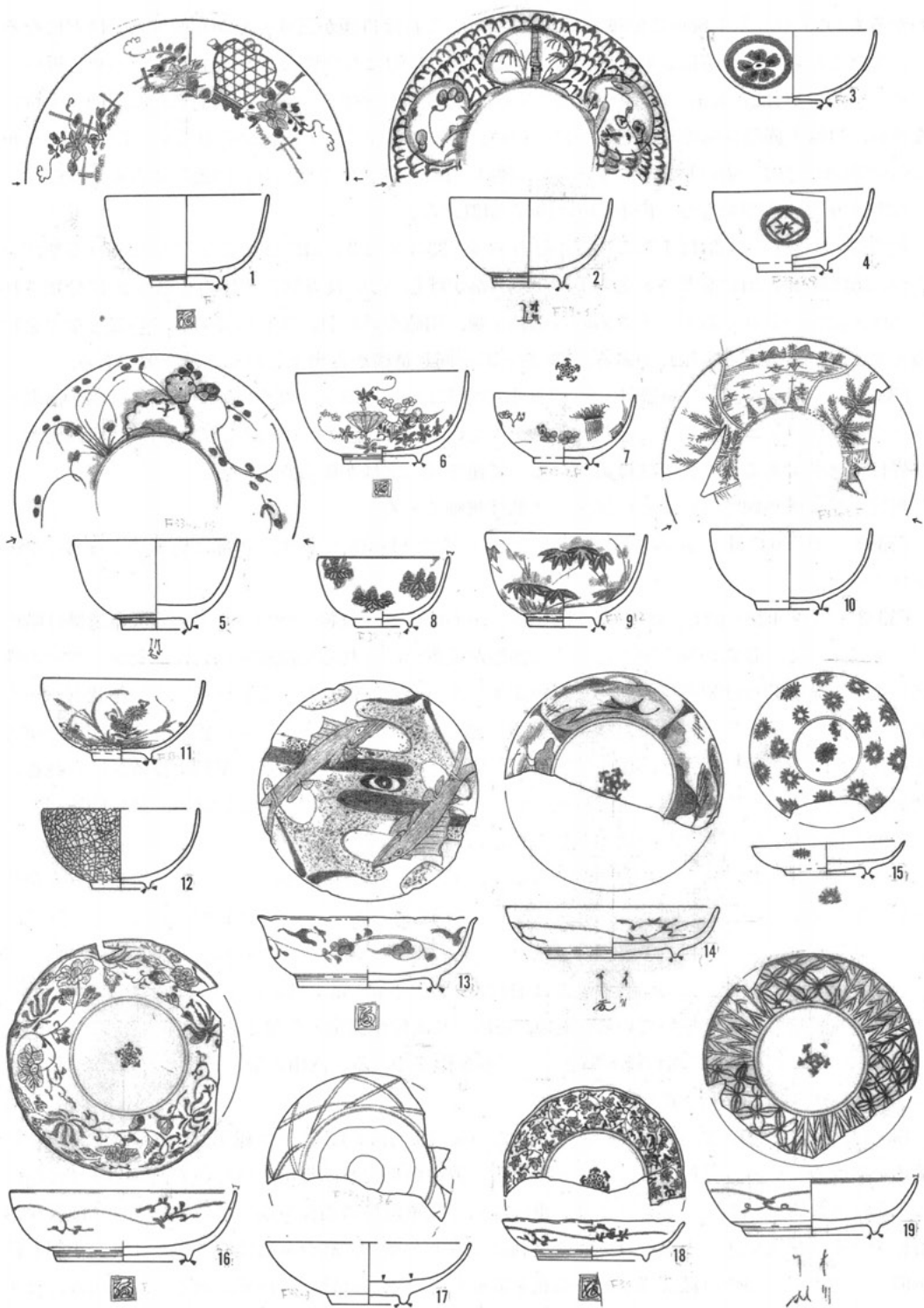
F33-2 (IV-037図) 陶器 1 は碗のミニチュアでTD-35に属す。体部に呉須による文様が描かれている。

F33-3 (IV-038~044, 200 図) 陶磁器を中心に多量の遺物が検出されている。本遺構は階段付地下式土坑で、日常の地下室としてその性格が位置付けられる可能性が高い。したがってその性格・規模より廃絶後は短期間に埋め戻しが完了したことが想像され、それは埋土の堆積状況からも裏付けられる。その埋土のなかに多量の遺物を含むということは災害、大規模な社会的な変化が考えられ、それを裏付けるように出土遺物はそのほとんどが本地点におけるV期に位置付けられる18世紀前半のまとまりを示している。特徴としては前段階と比べ、器種分化が進み、特に陶器において器種、量ともにいちじるしい増加が見られる。

磁器(1-33, 35-43, 147) 1-12は碗である。1, 6, 8はJB-1-eに属す。1, 6は高台裏に二重角枠内に渦福が描かれている。生地は薄く丁寧な作りで高台径はやや広い。8は口唇に口錆が施されている。体部にはコンニャク判によって桐を描いている。2, 5, 9はJB-1-gに属す。胎土は灰白色を呈し、厚手の作りである。2, 5の高台裏には崩れた「大明年製」銘が描かれている。9はコンニャク判と手描きを組合せ笹文を描いている。素地、整形より波佐見諸窯の製品と思われる。3, 4, 7, 10-12はJB-1-fに属す。薄手で高台径も小さく、丁寧な作りである。内山の製品と思われる。7は見込み到手描きによって五弁花を描いている。

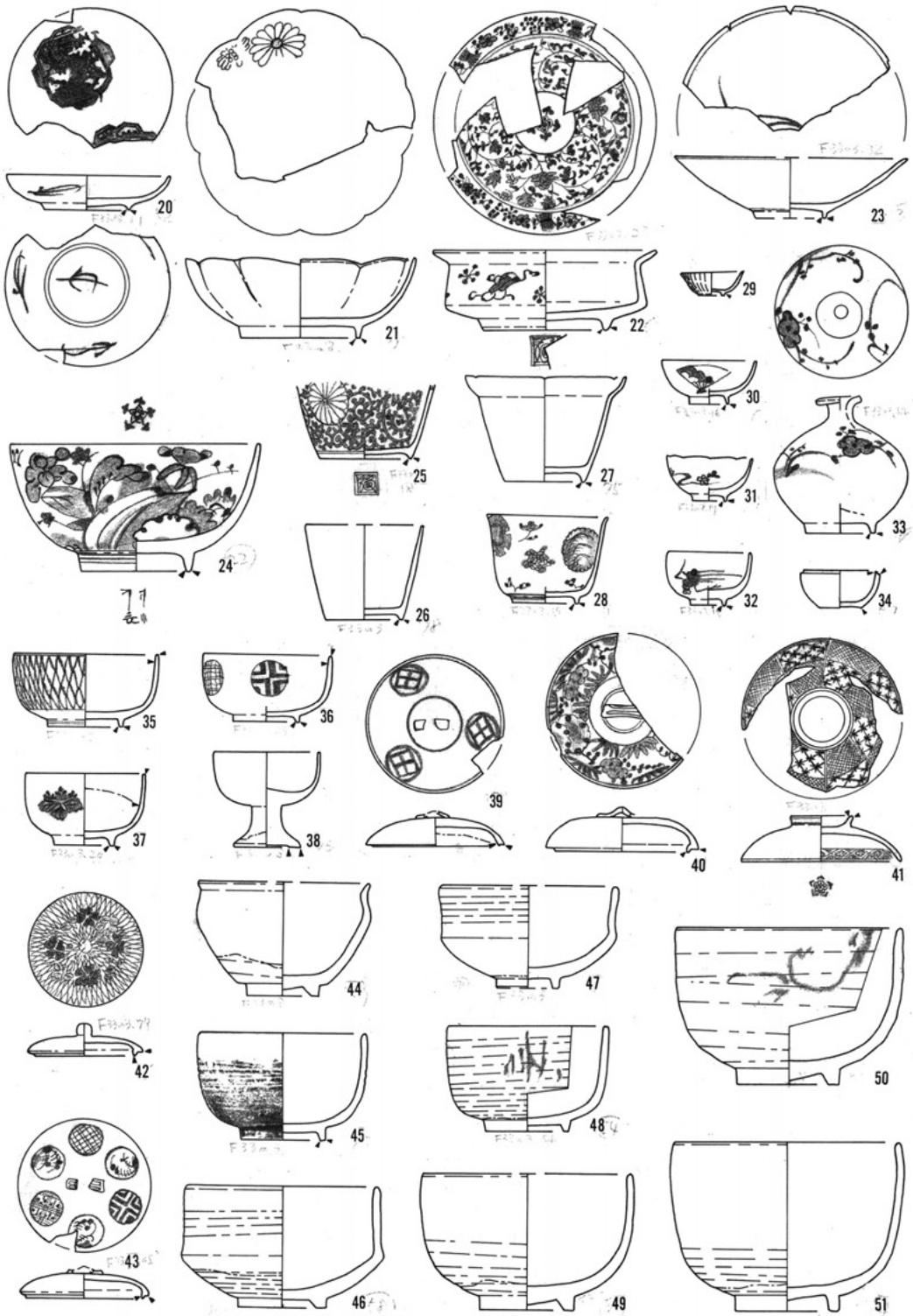
13, 14, 16-19, 21, 23 は皿である。13, 14, 16, 18, 19はJB-2-eに属す。13の口縁は 8単位の輪花を形成している。見込みには吹墨との併用で波中の魚文を二単位描いている。外文様は線描による花付きの唐草であり、高台裏には二重圏線内に二重角枠の渦福を描いている。畳付には砂が溶着している。14は見込み中央にコンニャク判による五弁花が、高台裏には崩された「大明年製」銘が描かれている。16の口縁は 8単位の輪花を形成している。口唇には口錆が施され、見込みには手描きによる五弁花がみられる。高台裏の銘は二重角枠内に渦福である。18は口縁が 8単位の輪花を

第一節 陶磁器・土器



IV-038图 F33-3出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-039図 F33-3出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器

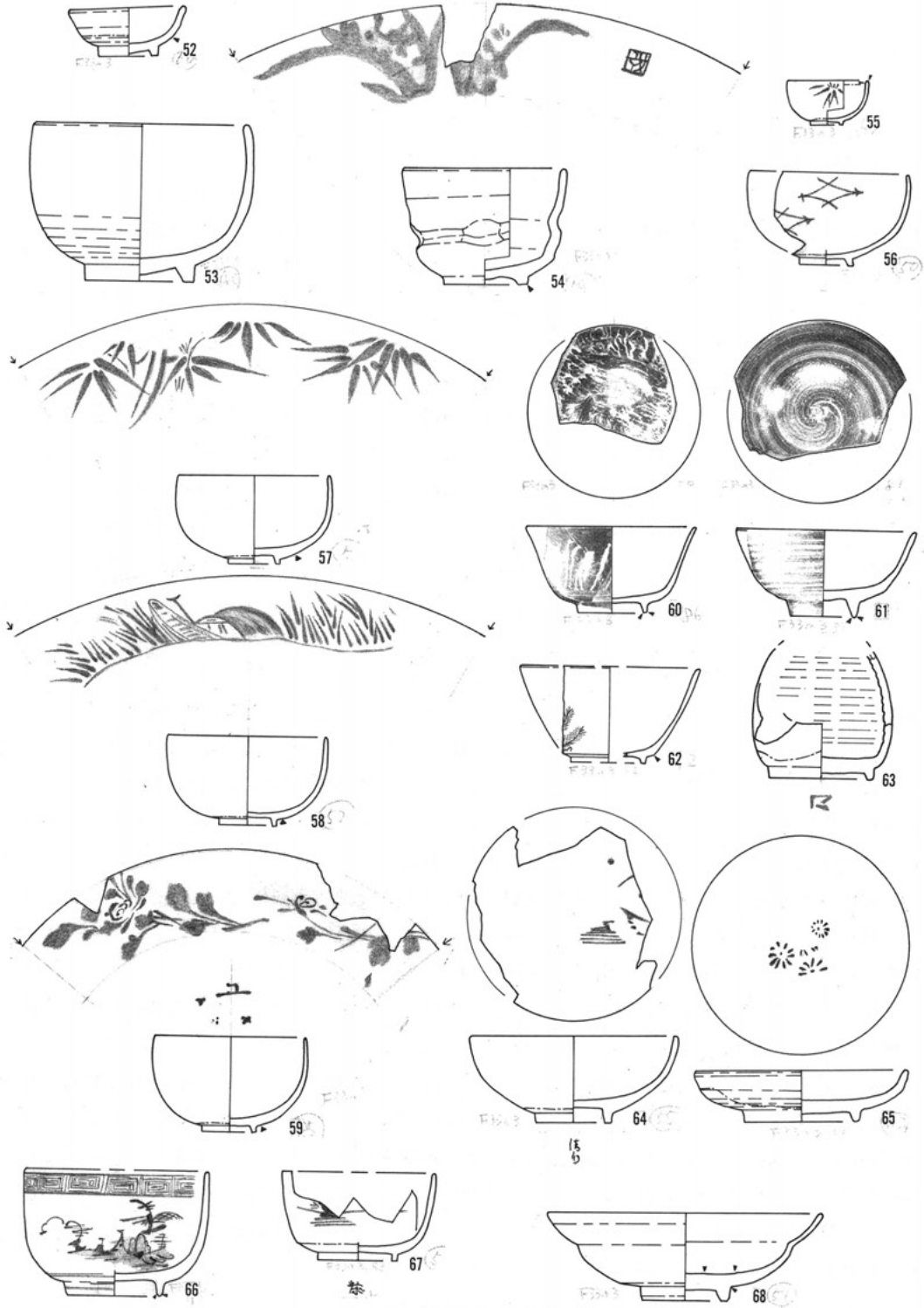
形成している。見込みには手描きによる五弁花が見られ、高台裏には二重角枠内に渦福が描かれている。19は口唇に口銹を有す。見込み中央にコンニャク判による五弁花を描き、高台裏には崩れた「大明年製」銘がみられる。これらの外文様は、全て線描による唐草である。17はJB-2-1である。21は白磁の皿で、JB-2-dに属す。見込みは深く、型打ち成形によって5単位の輪花を形成している。内側面には型打ちによる陽刻で菊花を描いている。釉調は乳白色を呈し、柿右衛門窯、南川原窯ノ辻窯などの製品かと思われる。23は「古九谷」の皿でJY-2に属す。胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒子を少量混入している。欠損面からやや軟質な感じを受け、内山や景德鎮とは質感が異なる。底部は小さく、体部は直線的に開く。釉は青灰色を呈し、全体に貫入が入る。見込みには手描きによって草花が描かれている。分析試料の17である。化学分析により九谷の素地であることが判った。

15, 20は小皿でJB-3-aに属す。15は見込み、外側面、高台裏に菊花状のコンニャク判を散らしている。20は見込みに幾何学的な模様コンニャク判を外側面、高台裏には手描きによる松葉を散らしている。同じ製品がD33-1からも出土している。22, 24は鉢でJB-5に属す。22は筒形の鉢で口縁は外反する。見込みには手描きによる五弁花、牡丹唐草が描かれている。高台裏には二重角枠内に渦福が描かれている。24は見込みには二重圈線内にコンニャク判による五弁花が描かれ、高台裏には一重圈線内に「大明年製」の崩れ銘が描かれている。25-27は猪口でJB-7-bに属す。25はタコ唐草を地文とし3単位の菊花文を配している。高台裏には二重角枠内に渦福を描いている。26, 27は白磁で27の口縁は外反し、6単位の輪花を形成している。28, 30-32は小坏である。28はJB-6-bに属す。30-32はJB-6-aに属し、31の口縁は型打ち成形によって輪花を形成している。32はやや腰が張っている。29は白磁の紅皿でJB-17に属す。底部は無釉である。体部外面は型打ちによって菊花状のシノギを施している。33は油壺でJB-12に属す。

35-37は蓋物で、JB-13-aに属す。いずれも腰が張っている。37ではコンニャク判で桐を描いている。35, 36が口縁内側の釉をきれいに削り取っているのに対し、37では内面下半部にのみ施釉されており、釉際は大きく波打っている。38は白磁の仏飯器でJB-8に属す。胎土は灰白色を呈している。底部は無釉で、脚部などで釉むらを生じている。高台裏はわずかに削り込まれ蛇ノ目状を呈している。39-43は蓋である。39, 40, 43は橋状のつまみが貼付されJB-14-cに属す。40, 43のつまみは中央に低い隆帯を作出している。43は底径、文様構成より36の蓋になるものであろう。41はJB-14-aに属す。高台状のつまみを有し、端部が無釉で身の受けもないことから碗の蓋と思われる。内面中央には手描きによる五弁花を有す。42は団子状のつまみを有しJB-14-eに属す。つまみの上部には刻みが施されている。文様は上絵付けで赤絵の具で一重網目文と花を、緑と黄で葉を描いている。147は鍋島の口縁部片でJB-2-nに属す。外文様には牡丹折枝文が描かれ、見込みには青磁釉が施され、赤絵の具による上絵付けが見られる。

陶器(34, 44-92) 34は合子の身でTD-18に属す。胎土は淡褐色を呈し硬質である。底部内はわずかに削り込まれている。44-46, 48-51, 53, 54は瀬戸・美濃系の碗である。44は天目茶碗でTC-1-aに属す。体部上半部から内面にかけて天目釉が施されている。高台は削り出しで内側は八の字状に外傾している。45は腰鍔碗でTC-1-uに属す。体部はやや腰が張り、沈線が螺旋状に巡っている。口縁外側から見込みにかけてやや緑色を帯びた灰釉が掛けられている。46はせんじでTC-1-iに属

第IV章 江戸時代の遺物



IV-040図 F33-3出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器

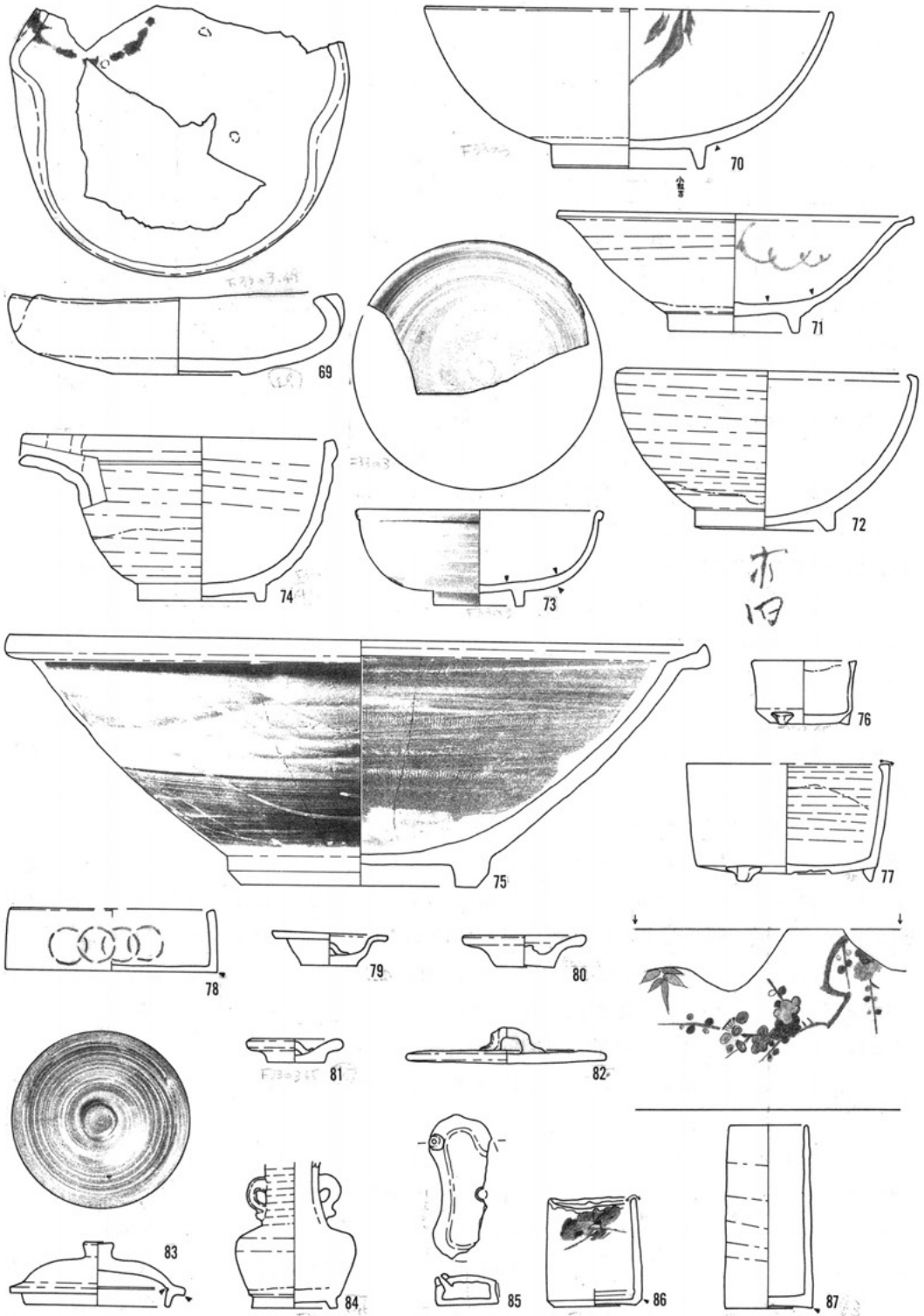
す。胎土は淡褐色を呈し、きめ粗く大粒の砂粒を含む。釉は灰釉で体下半から底部は無釉である。48は御室でTC-1-dに属す。体部には呉須によって山水を描いているがほとんど崩れ抽象化している。49-51, 53は灰釉碗でTC-1-cに属す。49, 51は底部方向からの柄杓掛けによって底部は無釉である。50, 53は全面に施釉されている。50の体部には呉須によって抽象文が描かれている。54は色絵碗でTC-1-kに属す。胎土は灰白色で硬質である。高台は削り出し高台である。体部には螺旋状の大きなくびれが巡り、さらにその中に凹みが付けられているところが二箇所認められる。長石釉が施されており、高台裏は無釉であるが、外面は畳付際まで施釉されている。体部には赤、緑、白絵の具を用い草文が上絵付けされており、また胴中位に図のような銘が黄絵の具で描かれている。志兵衛窯において同様の製品が出土している。

47, 56-59, 62は京焼系の碗である。47はTD-1-iに属し、せんに類似した器形をしている。胎土は灰褐色で非常に硬質である。底部周辺以外に長石釉が施されて、全体的に丁寧な作りで高台脇は面取りされている。また見込みにはピン痕が一箇所認められる。56-59は丸碗でTD-1-bに属す。丁寧な作りである。胎土は淡褐色を呈し緻密である。高台は削り出しで外傾している。高台脇は面取りされている。56の体部には鉄絵による松葉文が描かれている。57-59は上絵付けが施されている。57には竹文、58には船に草、59には草花が描かれているが、いずれも上絵の具は剥げ落ち、59の一部に赤絵の具が残存しているにすぎない。62は小杉茶碗でTD-1-dに属す。胎土は黄褐色を呈し、緻密である。丁寧な作りで、体部は高台付根よりほぼ水平に張り出しくの字状に屈曲してほぼ直線的に立ち上がる。体部には鉄絵による小杉が描かれている。

60, 61, 64, 66, 67は肥前系の碗である。60, 61は刷毛目碗でTB-1-dに属し、黒褐色の緻密な胎土をもつ。60は口縁部でやや外反する。畳付は無釉で内外面ともに打刷毛目が施されている。61は畳付は無釉で内外面ともに渦巻状の刷毛目が施されている。64は京焼風の平碗でTB-1-cに属す。胎土は淡褐色を呈し緻密である。高台脇は面取りされている。見込みには鉄絵によって山水が描かれ、高台裏には「清水」の刻印が施されている。67は同じく京焼風の丸碗でTB-1-bに属す。胎土は淡褐色で緻密である。腰の張る器形で体部に鉄絵によって山水が描かれている。高台裏には「柴」銘の刻印が施されている。66は陶胎染付の碗でTB-1-fに属す。胎土は灰褐色でやや緻密である。腰が張る器形を呈し、体部には呉須によって山水が描かれている。釉は厚く釉溜りは白濁している。52は小坏でTC-6に属す。胎土は乳白色を呈す。底部以外に鉄釉が施されている。また見込みには三箇所のピン痕が認められる。55はTD-13に属す。蓋物の身である。胎土は灰白色を呈し緻密で硬質である。上絵付けによって竹が描かれている。63は手焙りでTC-38に属す。器形はラッキョウ形を呈し、体部に楕円形の口がつけられたものと思われる。鉄釉が施されているが内面、底部は無釉である。高台裏には図のような墨書がみられる。真砂遺跡より同手のものが出土している(同調査団編1987:245)。65は皿でTC-2-eに属す。底部以外に灰釉が施され見込みには鉄絵による摺絵で花が描かれている。また口唇部にはススが付着しており、灯火具として二次利用されたものと思われる。

68はTB-5-dに属す。胎土は淡褐色できめはやや粗い。灰釉が施され底部は無釉、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。見込み釉剥ぎ内には直径5cmの畳付痕がみられる。なお本製品の高台径は5.2cmである。69は水盆でTC-5-fに属す。胎土は灰白色で白色微砂粒を混入する。体部は大き

第IV章 江戸時代の遺物



IV-041図 F33-3出土遺物(4)

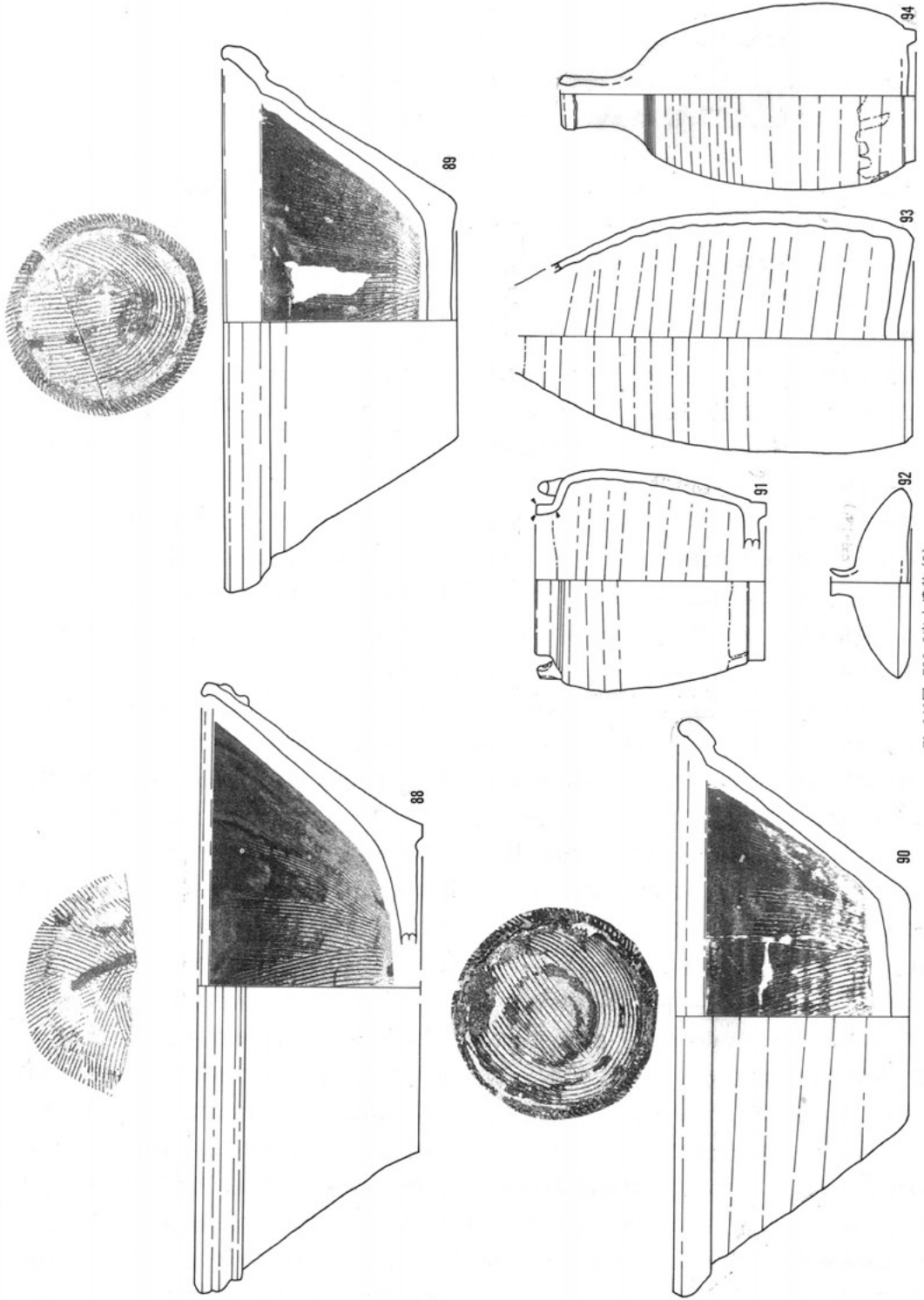
第一節 陶磁器・土器

く内湾し口縁にはへこみを有する。見込みには三箇所のピン痕がみられる。釉は灰釉で口縁から緑釉を流し掛けしている。底部は無釉である。70は京焼風の鉢でTB-5-cに属す。胎土は灰褐色で緻密である。高台は断面台形を呈し1.3cmと高い。高台脇は面取りされている。見込みに呉須によって草文が描かれている。高台裏には「小松吉」銘の刻印がみられる。71, 72は瀬戸・美濃系の鉢である。71はTC-5-cに属す。灰釉が施され底部は無釉で見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。薄手の作りで口縁は外反する。見込みには呉須によって文様が描かれている。釉剥ぎ部分には重ね焼きによる畳付痕がみられる。72はTC-5に属す。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で内側に屈曲する。見込みにはピン痕が五箇所みられる。灰釉が施されているが、底部は無釉である。高台裏には墨書で「木田」と書かれている。73は肥前系の刷毛目鉢でTB-5-aに属す。内外面ともに白泥による刷毛目が見られるが、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ、高台は無釉である。胎土は褐色を呈す。体部は丸味をもって立ち上がるが口縁が帯状に肥厚する。畳付および見込みには蛇ノ目釉剥ぎ部分に重ね焼きによる白土が付着している。

74は片口鉢でTC-23に属す。やや緑色を帯びた灰釉が施されている。底部は無釉である。注口部はロクロ成形によって円筒形の筒を作り、それを半截したものを貼付している。75は三島手の鉢でTB-5-bに属す。胎土は赤茶褐色を呈し、緻密で硬質である。高台脇は面取りされている。体部はほぼ直線気味に開口縁で外反する。見込みには陰刻による三島手文様が施されているが白泥は用いられていない。76, 77は香炉でTC-9-aに属す。底部には三脚の脚が貼り付けられている。77は灰落しとして利用されたものとみられ、口唇部の釉が敲打痕によって剥げ落ちている。78は鬚盥でTC-25に属す。板作りで作られており、底部以外には灰釉が施されている。体部には鉄絵による摺絵で丸文が描かれている。79-83は蓋である。79-81は落とし蓋でTC-14-aに属す。裏面には糸切り痕を残し表面には灰釉が薄く掛けられている。79, 81は貼り付けによる橋状のつまみを有するが、80は削り出しによるものである。82は平蓋でTC-14-bに属す。表面には柿釉が施されている。中央にはねじり文様のある橋状のつまみが貼り付けられている。83は刷毛目の蓋でTB-14-aに属す。山蓋でボタン状のつまみを有す。表面には白泥による渦巻状の刷毛目が施されている。84は仏花器でTC-11に属す。口縁部を欠損している。頸部には一對の把手が貼り付けられている。底部以外に鉄釉が施されている。85は水滴でTC-19に属す。型打ち成形によって作られ底部及び注口を貼り付けている。灰釉が施されているが底部は無釉である。86は灰落しとしてTC-24-bに属す。胎土は淡褐色で微砂粒を多量に含有する。底部端は面取りされている。体部はやや内傾して立ち上がる。鉄絵による折枝が描かれている。口唇部には激しい敲打痕がみられる。87は色絵の花生けでTD-22に属す。胎土は褐色を呈し緻密である。体部は筒形を呈するが若干内傾している。青、緑絵の具の上絵付けによって梅、竹が描かれている。

88-90は瀬戸・美濃系の播鉢でTC-29に属す。胎土は黄白色で錆釉が施されている。88は体部内面に1単位16条の播目が左回りに施され、底部では放射状に施されている。口縁外側には二本の沈線のある縁帯をもつ。底部は内側を削り込み高台を作出している。89は口縁がやや外反し、縁帯をもつ。底部には糸切り痕を残す。播目は1単位15条で左回りで14単位施されている。底部では丸の一の字状に施されている。底部周辺の釉はほとんど摺り落ちている。90は口縁がやや外反し縁帯を

第IV章 江戸時代の遺物



IV-042図 F33-3出土遺物(5)

第一節 陶磁器・土器

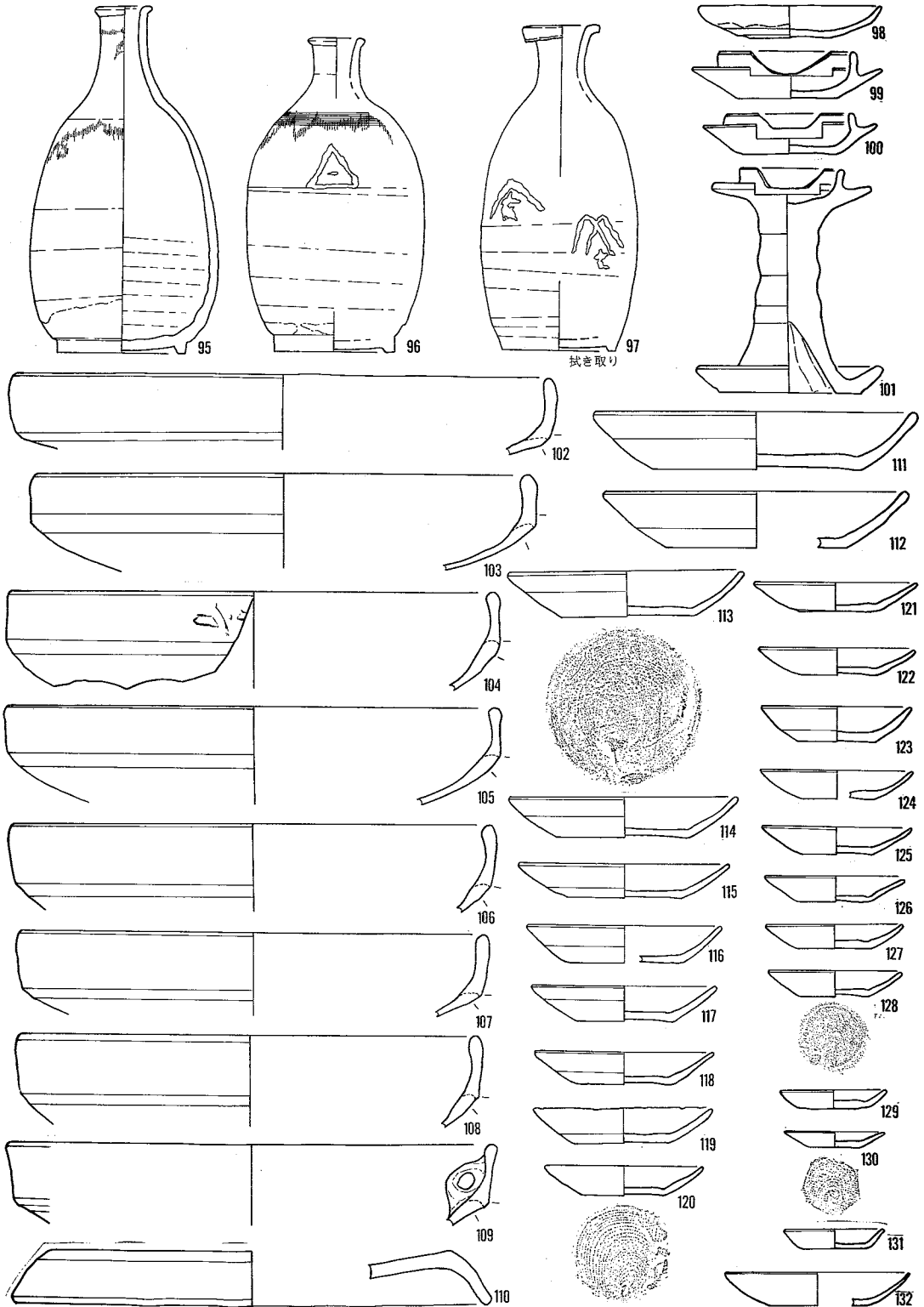
有す。底部には糸切り痕を残す。播目は1単位13条で構成され12単位施されている。底部は丸に一の字状に施されている。91は瀬戸・美濃系の壺でTC-15に属す。胎土は淡褐色で、鉄釉が施されているが、底部、内面は無釉、口唇部は釉剥ぎされている。肩部には粘土紐の貼り付けによる把手を一对有す。92は油壺でTE-12に属す。胎土は茶褐色で硬質である。

徳利(93-97) 93は志戸呂産の徳利で、底部外周にはへら削りが施されている。94-96は瀬戸美濃産の5合徳利であり、飴釉に化粧掛けが施されている。この3点の中では96のみにベタ刻の釘書が確認された。94の口唇部は小さく折り返されて帯状となり、頸部は長く撫で肩で最大径は胴部中程にある。高台は深く削り込まれてやや内傾する。95、96の口唇部は鐔状に小さく折り返されて、高台はほぼ垂直に深くしっかりと削り込まれている。95では最大径が胴下部にあるのに対し、96では胴部中程にきている。97は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利でベタ刻の釘書が2箇所認められる。口唇部は鐔状に張り出して外縁部が軽く撫でられて整形され、撫で肩で最大径は胴部中程にある。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られており、高台の削り込みも深い。2合半徳利が30個体ほど、5合・1升徳利が160個体ほど、志戸呂産徳利が50個体ほど出土している。またごく少量ながら船徳利、備前産徳利も認められる。

灯火具(98-101) 98は志戸呂の油皿。灯芯油痕が口唇を全周。底面はへラケズリ調整を施す。99、100は素焼受付。100は磨耗が激しく三分二の残存、99はほぼ完形。銀彩の痕跡があり、灯芯油痕は付着しない。ともに左回転の糸切り底。101は素焼有脚受付の古い形態のものである。完形で銀彩がある。油痕はない。灯火具の出土は7点であり、図示した以外、志戸呂の油皿2、瓦質の瓦燈1が出土している。土師質の瓦燈頭部片もある。志戸呂と素焼のみの出土である。

カワラケ(111-136) 口径6.2cm-19.8cmのものを図示した。三寸-四寸のものが中心である。132は上製。完形は111、119、120、125、126、128のみである。不明なものを除き全て左回転糸切り底。132は底面へラケズリ調整。灯芯油痕は113、114、119、121、122、124が口唇を全周。117、128に疎らに認められる。他にはほとんど見られない。119、124には銀彩の痕跡があり、形態も共通する。この二つは使用頻度が高かったためか器面の剥落が激しい。図は口径を基準に示したが、こまかに観察すればさまざまな違いも認められる。大部分の口縁はいくぶん内湾気味であるが、小型になるに従い口縁が外反する例がある(118、126、130)。また大きさはほとんど同じだが、130と129・131では器形が異なる。後者は前代からの残存形態であり、130はより古い形態であると考えている。他に底径に比べ、器高の高いカワラケもある(123)。あるいは別器種の疑いもあるが、類例は少ない。上製の132は器壁が薄く古い形態であると考えている。133-136には墨書がある。135以外、ほぼ完形。133は地鎮具といわれているもの。遺構直上からの発見であり、他とは出土状況に違いがある。111と類似しており時期的にあまり隔たらないと考えている。134は「五つ之也」が見込みにある。意味不明であるが、五枚セットで市販されていたのかもしれない。135には「小」が、136には「中」が外側底面にある。これらに灯芯油痕は認められない。全て左回転糸切り底。他に墨書のあるものは2点。図示したものを含めカワラケは238点の出土である。出土比率の29%。上製6、耳皿1を除き、全て左回転糸切りによる。底径の明確にわかる60点のうち、4.1-6cmのものが37点を占める。口径を推定すると二寸八分-三寸六分となる。次に述べるF34-11に比べ小型の製品が多いようである。

第IV章 江戸時代の遺物



IV-043図 F33-3出土遺物(6)

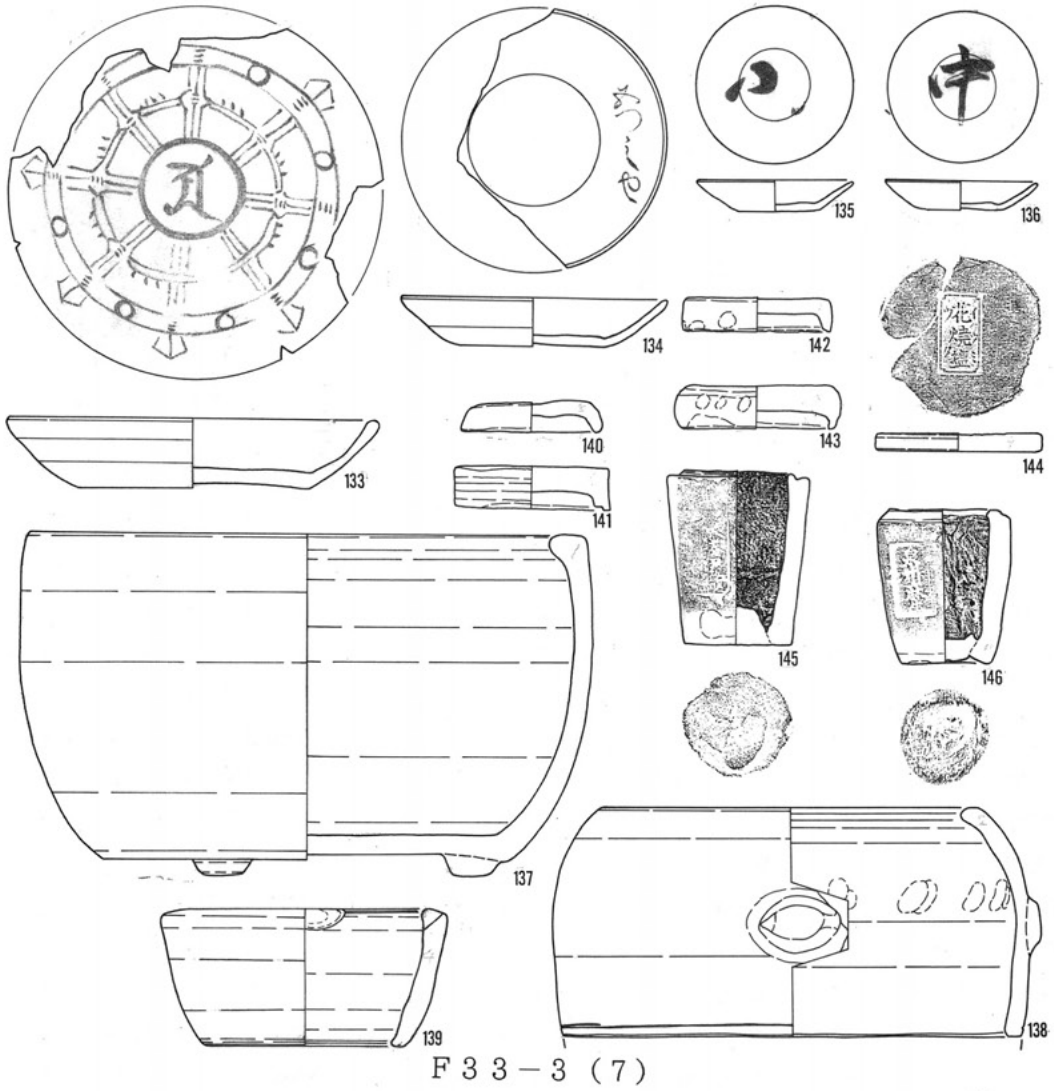
第一節 陶磁器・土器

焙烙(102-110) もっとも破片の接合した106 できえ口縁のみ三分一残存。図示したものの口径28.6-33.6cm。ほぼ30cm内外である。104の口縁に意味不明の墨書がある。焙烙はほぼ同形態。口縁にややくびれをもつものもあるが、明確に稜はもたない。内側でやや内湾気味であるが口縁はほぼ直立するとしてよい。次の点でやや異なる。一つはケズリの位置である。屈曲部に施されるもの(102-104)がある一方で、屈曲部を境として底面側に施されるもの(105-108)もある。後続するG26-1と共通する特徴である。また底面が下方へ大きく張り出すもの(104, 106, 108など)がほとんどであったが浅く低平なもの(102)も存在するらしい。F34-11の一群と共通し、古い形態の名残かもしれない。109は二十分一以下しか残存していないが、内耳をもつ焙烙である。類例が少なく図上復元を試みた。推定口径30cm。内耳部分しかなく明確ではないが、口縁はやや外反するようである。ケズリは屈曲部から底部にかけて認められる。110は蓋。109と同様に二十分一以下しか残存しておらず、これも図上復元を試みた。推定口径29.6cm。カワラケと同様、焙烙も多数出土している。図示した以外に底部片78点、口縁片は60点の出土である。うちケズリが屈曲部につくもの16点、底部側につくもの25点。他に口縁側につくもの18点が出土し、これらはF34-11の194, 197に似る。内耳部分は1点、蓋片は11点の出土である。

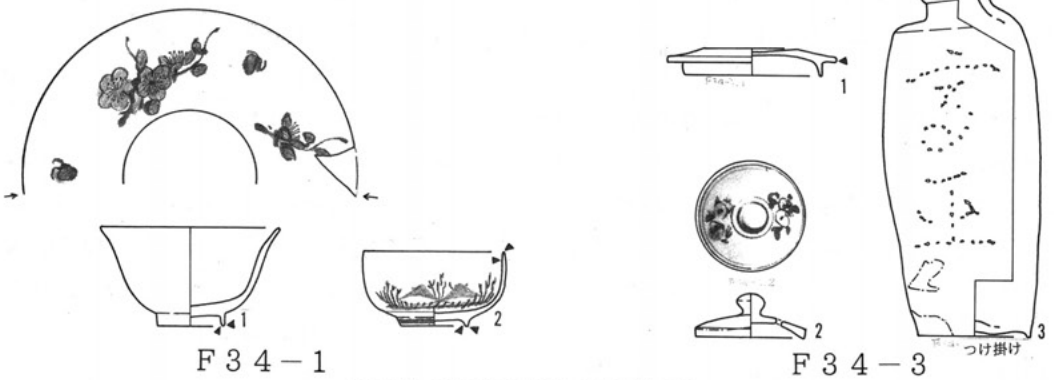
土器(137-139) 最小個体数で、土器20点、焼塩壺15点と、比較的まとまった量が見られた。土器は1点の小片を除いていずれも土師質であるという、大きな特徴をもつ。器種的には1類aがほとんどである。137は1類aに分類される軟質土師質の大型の火鉢類。輪積み成形である。外面は丁寧にナデられ、平滑で、わずかに赤彩が見られる。内面は指頭痕がわずかに見られ、念入りなナデが見られる。口唇内側に煤の付着が見られる。138は1類bに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。下半を欠く。一对の把手が貼付され接合部の周囲がナデられている。外面は丁寧なケズリによって平滑に仕上げられている。内面は把手の高さ付近に指頭痕が連続し、その上がナデられている。口縁上面に擦痕が巡っている。体部外面、残存部下端には焼成後に入れられた沈線が巡り、下端面はやはり焼成後に研磨を受けている。またこの下端部内面には煤の付着が2-3cmの幅で見られ、下端面に及んでいる。これらのことから、下端部を口縁として、逆位で火鉢類として再利用されたことが窺われる。139は軟質土師質の五徳。内面は火熱によると思われる白色の皮膜が見られ、わずかに黒色化した部分も見られる。

焼塩壺(140-146) 140はA類に分類される蓋。外面は白色を帯びた、内面は赤みを帯びた肌色を呈する。上面は指頭による押圧を受けて起伏している。側面には横のナデが走る。141, 143はイ類2に分類される蓋。白色を帯びた橙色を呈する。胎土に雲母を含む。下面に布目をもつ。突起は圧迫されたように歪んでいる。141は平坦な上面と側面とが直交し、側面には横のナデが走る。143は平坦な上面が緩やかに丸みをもった側面へと移行し、側面には指頭痕が連続する。142はイ類1bに分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。薄手で整っている。下面にはきわめて細かい布目が見られる。144はエ類に分類される蓋。橙色を呈する。上面に6類3に分類される刻印がある。上・下面、側面ともに平滑である。145はII類2bに分類される身。2類5に分類される刻印をもつ。底部の粘土塊が大きく内部に盛上っている。内面の下から三分一ほどまでは平滑で、その上に粗い布目が見られる。146はII類1b2に分類される身。3類1bに分類される刻印をもつ。体部、底部とも

第IV章 江戸時代の遺物



F 3 3 - 3 (7)



F 3 4 - 1

F 3 4 - 3

IV-044図 F33-3(7)、F34-1、F34-3出土遺物

第一節 陶磁器・土器

に粗雑さを感じさせる作りで、口唇部の立ち上がりもほとんど見られない。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。

F34-1 (IV-044図) 磁器(1, 2) 1は瀬戸・美濃系の染付端反碗でJC-1-dに属す。胎土は白色でガラス質である。体部には梅が描かれているが呉須はぼやけている。2は蓋物の身でJB-13-aに属す。腰の張る丸碗形である。欠損面には焼き継ぎ痕がみられる。

F34-3 (IV-044図) 陶器(1, 2) 1, 2は蓋である。1は平蓋でTD-14に属す。胎土は明灰褐色を呈し緻密である。裏面は無釉である。2は急須の蓋でTZ-16に属す。胎土は灰褐色を呈し、釉は乳白色で裏面は無釉である。中央には偏平球状のつまみを有し、体部には孔が一箇所穿たれている。表面には鉄と緑で草花文が描かれている。

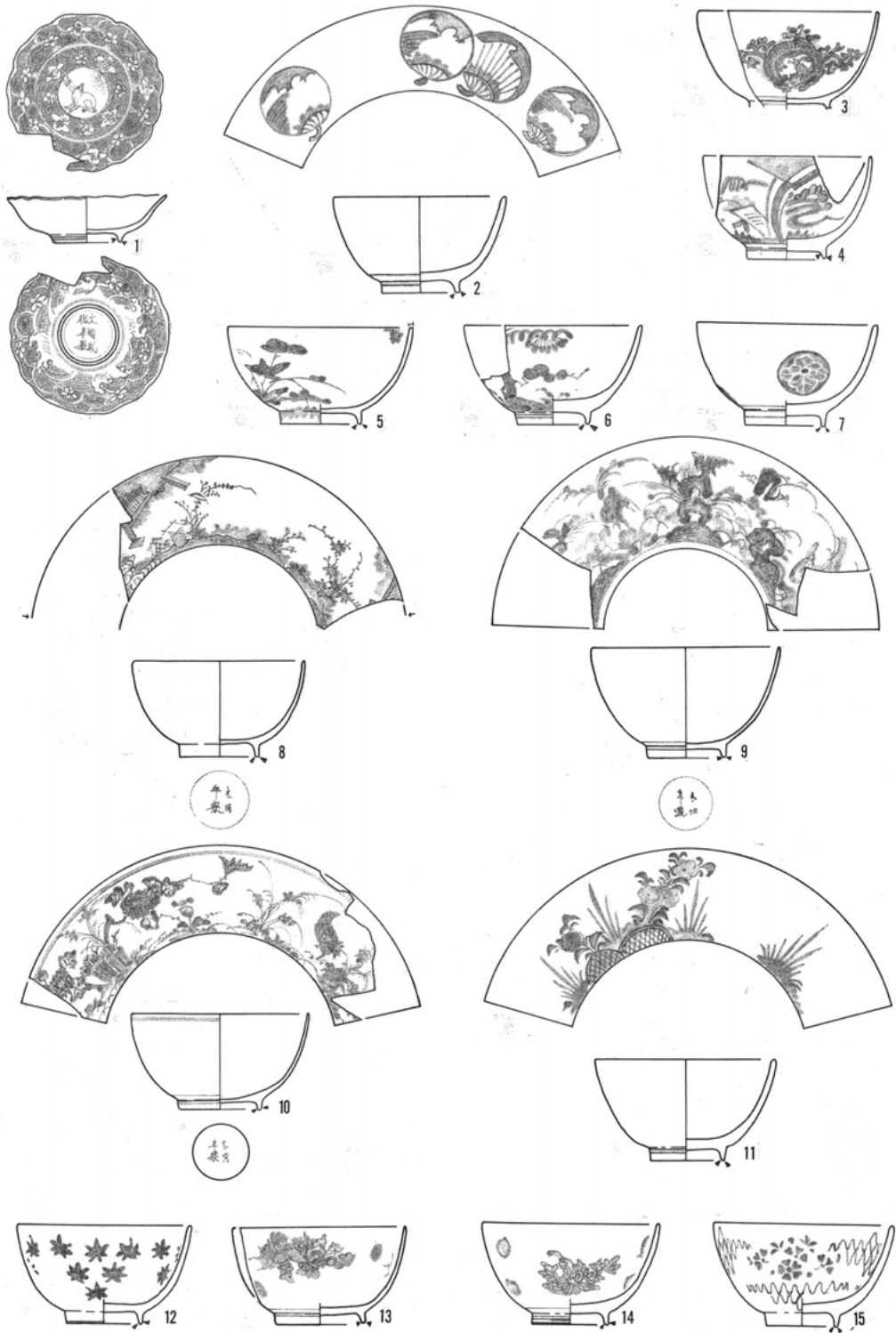
徳利 3は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けで、胴部下端は無釉となっている。ほかは少量出土しているのみである。

F34-11 (IV-045~058, 201 図) 本遺構は、多種にわたり非常に多量の遺物が出土している。しかもこれらの遺物群は、元禄十六年(1703)の大地震による一括廃棄の可能性も考えられ、前段階からの伝世と考えられるものは散見されるという程度で、該期における陶磁器、土器類の器種構成を考える上で重要であると思われる。天和二年(1682)の火災で廃棄されたと考えられるF36-2を切って作られ、また種々の状況から元禄十六年の火災以前と考えられることから、1682年から1703年の20年余の間に廃棄された遺構であることは確実であろう。本地点では、III期に該当する。

磁器(1-99) 1はJA-2に分類される明末の青花皿である。銘は「大明成化年製」で口縁には明末の特徴である虫食いが見られる。2-19は染付碗でJB-1-dに相当する。7は墨弾き、12-14はコンニャク判、15-19は型紙摺りを絵付け法として使用している。5は口唇部に口錆が施される。銘は8-10が「太明年製」、19が「大明年製」である。20-22は白磁である。20, 21は小坏でJB-6-a, 22は蛇ノ目高台の碗であるが、貫入が入る軟質の胎土で、一般的な肥前、中国のものとは異なっているように思える。高台脇は面取りがされている。分析試料の16である。23, 24は外面に青磁釉が施される、いわゆる青磁染付である。23はJB-6-a, 24はJB-7-aに相当する。いずれも見込み中央に呉須で文様が丁寧に描かれ、また胎土も白色で、18世紀後半以降に焼成される広瀬向2号窯等の製品とは異なる。24の底部は蛇ノ目凹形高台で、輪割部には鉄釉が施されている。技術的には明の龍泉窯の影響で、肥前の青磁皿、鉢類には高台内に輪状の鉄釉を施す例が多い。25, 26は白磁猪口でJB-7-bである。ともに高台の断面形は三角を呈している。26は口唇部に口錆が施される。27は色絵碗でJB-1-cである。

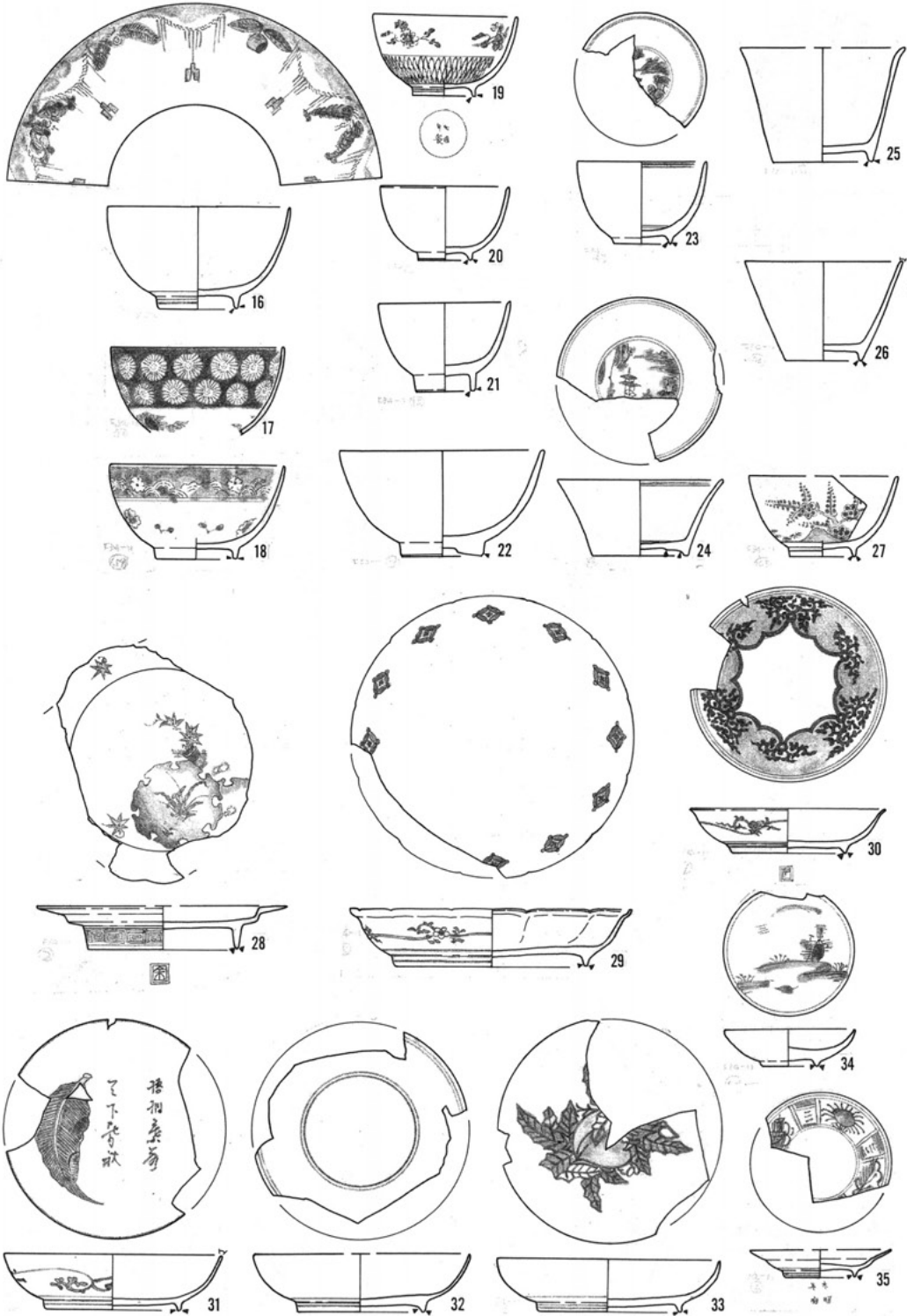
28-45は染付皿である。28-30はJB-2-cに分類され、胎土、呉須の発色、絵付け等が丁寧で、出土品の銘や裏文様が類似する柿右衛門窯あたりで焼成されたものか。28は糸切り細工の貼付高台で高台裏には一箇所のハリ支えが認められる。銘は二重圏線内に「金」。この銘は、大橋康二氏によれば1670年ごろ以降の長吉谷窯や柿右衛門窯、1690年代から18世紀の初頭と推測される南川原窯ノ辻窯からの出土品に見られるとしており(大橋 1988c)、このうち本例の高台の形態は柿右衛門窯の製品と類似している。29は型作りで、高台裏にはハリ支えが三箇所認められる。30は二重圏線内角福の銘を有し、ハリ支えが一箇所認められる。31-33はJB-2-eである。31は口唇部には口錆が施され、高台裏にはハリ支えが一箇所認められる。33は全面コンニャク判で絵付けされ、高台裏にはハリ支

第IV章 江戸時代の遺物



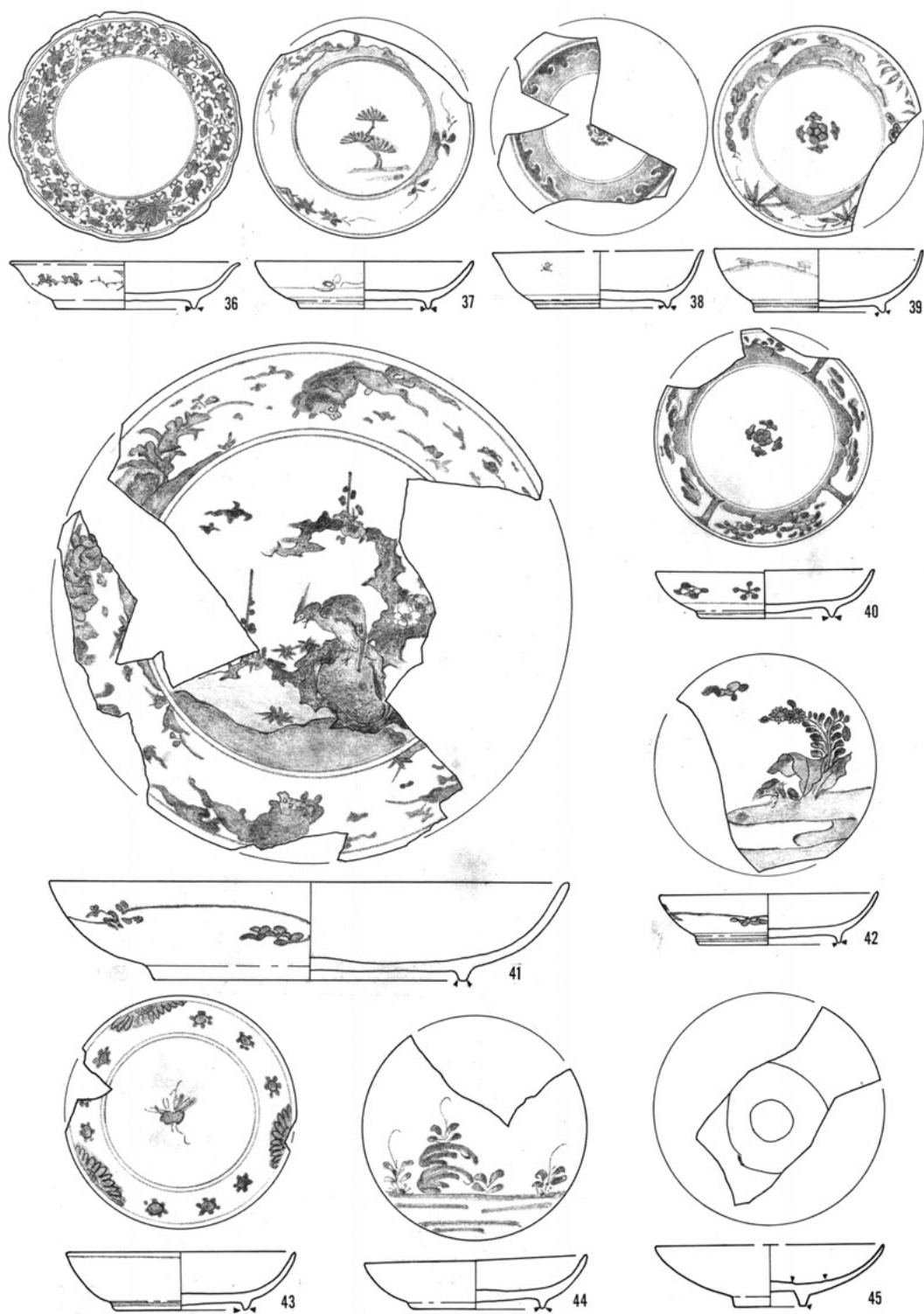
IV-045図 F34-11出土遺物(1)

第一節 陶磁器・土器



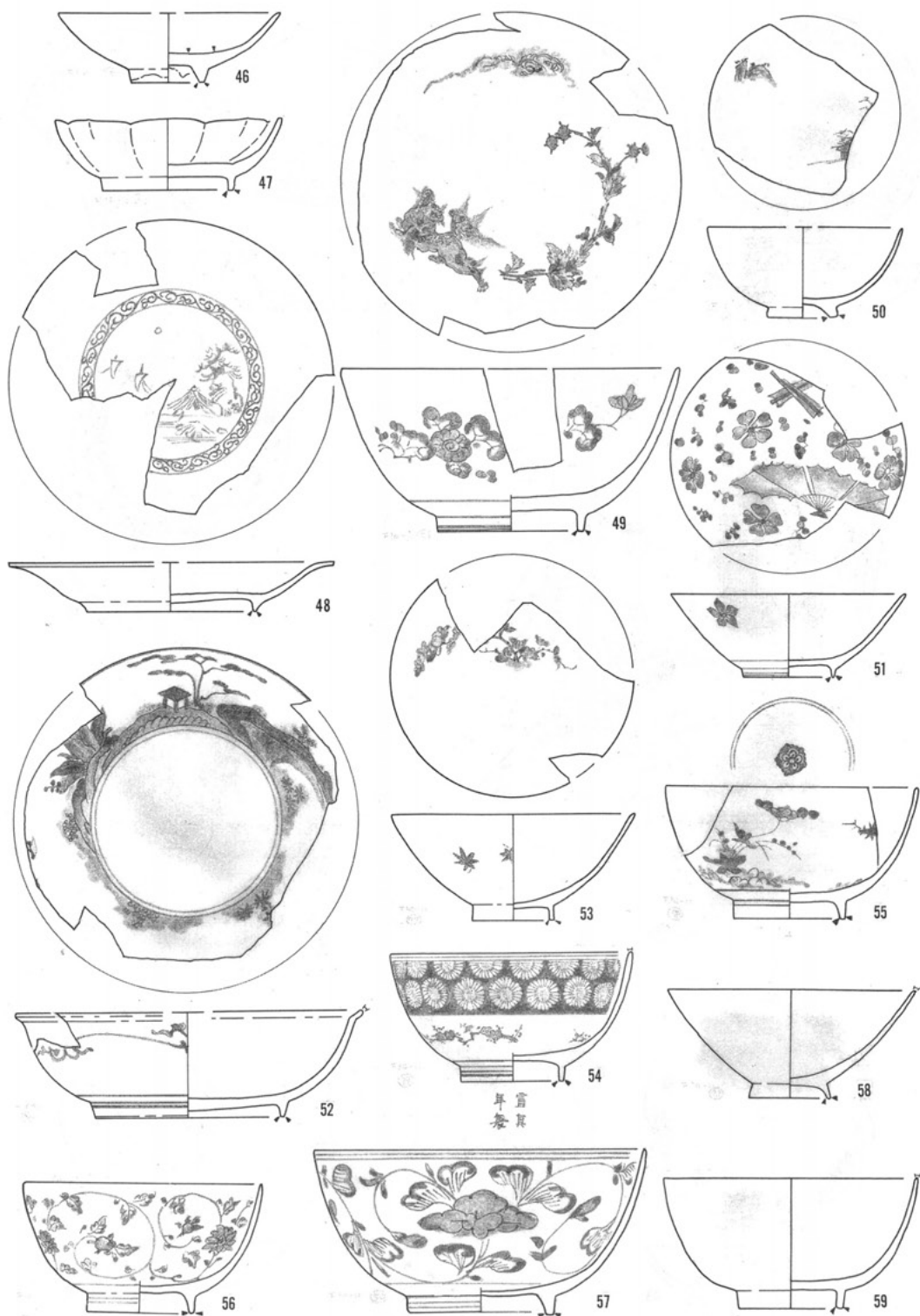
IV-046図 F34-11出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物



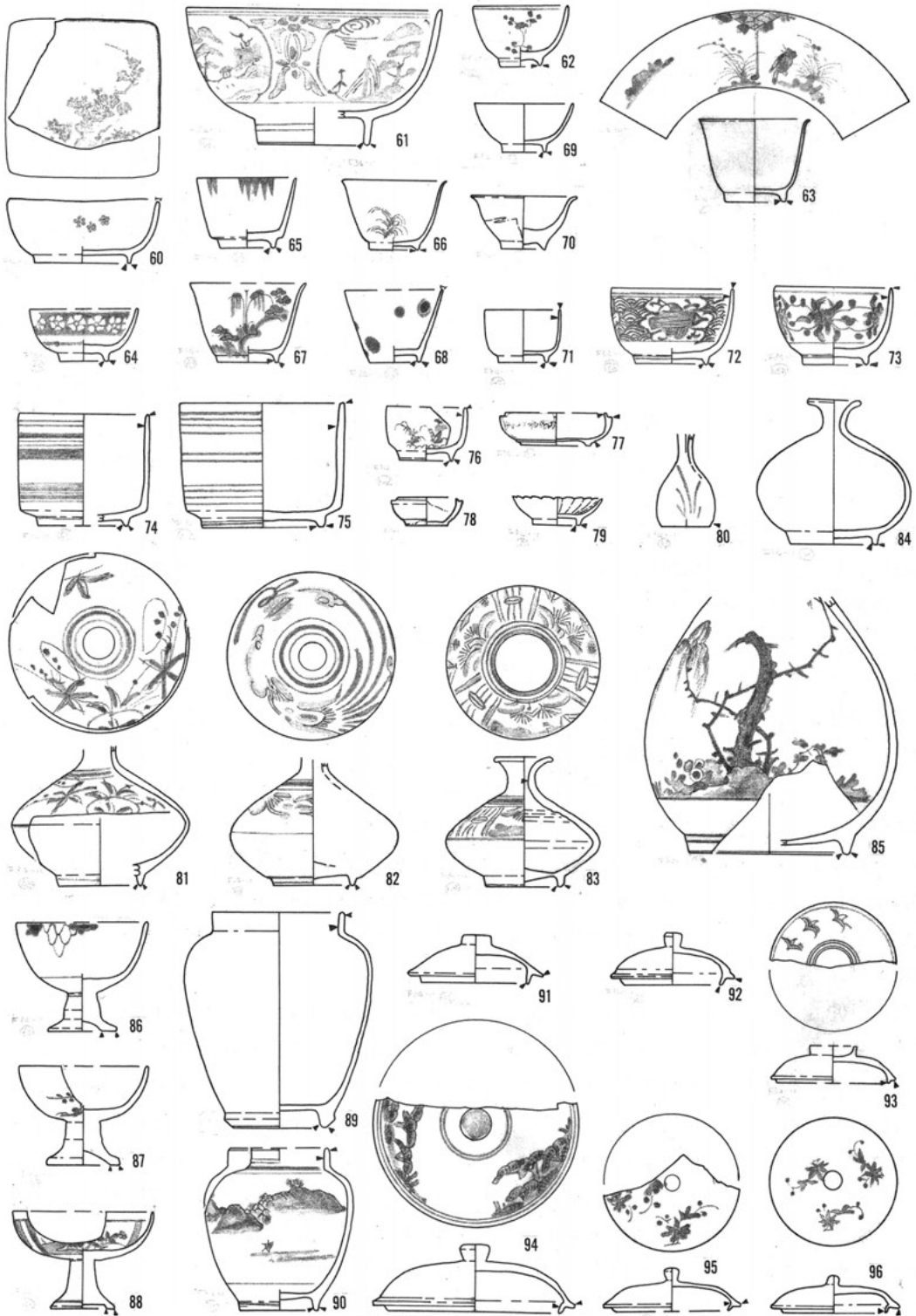
IV-047図 F34-11出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器



IV-048圖 F34-11出土遺物(4)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-049図 F34-11出土遺物(5)

第一節 陶磁器・土器

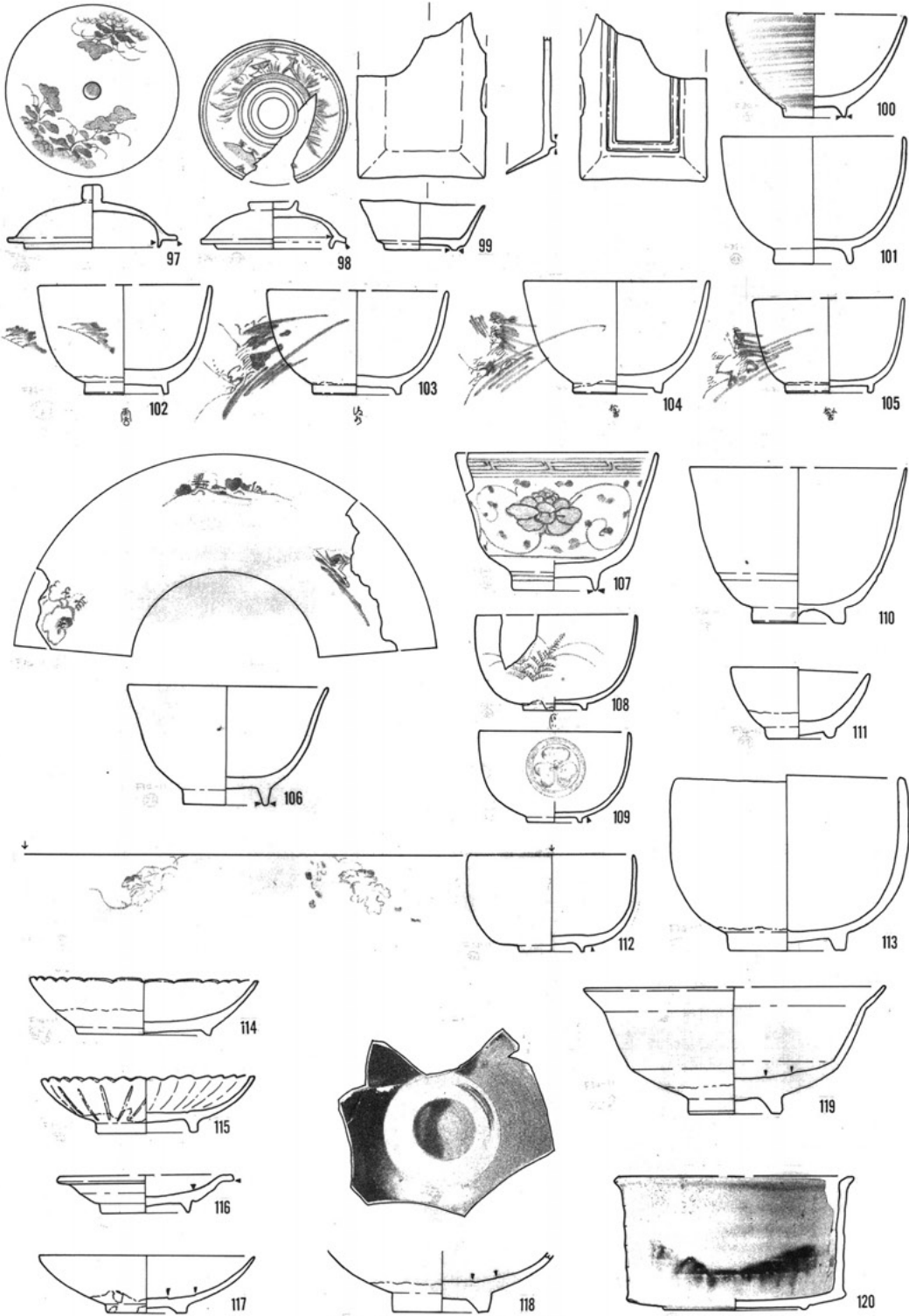
えが一箇所認められる。34, 35は JB-3-c である。35は小型の芙蓉手で、銘は「太明年製」である。36は JB-2-c である。ハリ支えが一箇所認められる。37-44は JB-2-e である。37, 39, 40, 43, 44は胎土が灰がかっており、呉須の発色も悪く有田内山の製品ではないであろう。38は墨弾き技法を用いている。39, 40 は見込み中央に四弁の花文様が手描きされ、1690年代以降盛行するいわゆる五弁花が定形化する以前の初期的な文様であると考えられる。41は高台裏に四箇所のハリ支えが認められるが、打ち落とされておらず円錐状のハリが溶着したままである。42は一箇所のハリ支えが認められる。45は染付、46は青磁で、ともに JB-2-k である。47は白磁で型作りの輪花皿で JB-2-d である。作りは極めて丁寧でいわゆる乳白手である。南川原窯ノ辻窯で出土している製品と類似する。48は色絵で JB-2-c である。表面は、朱、黄、呉須で山水を描いているが、色絵の具は風化が著しい。

49-57 は染付、58, 59は白磁、60, 61は色絵で JB-5に分類される。いずれも作り、呉須の発色、絵付けは良好である。52はハリ支えが一箇所認められる。55は見込み中央にはコンニャク判による五弁花が施文される。54は型紙摺りで絵付けされ、口唇部には口鏽が施される。銘は「宣真年製」。58は乳白手で口唇には口鏽が施される。59は口唇部に口鏽が施される。60は柿右衛門様式の型打ちによる角鉢である。乳白手に朱、青、黄で草花文が絵付けされ、口唇には口鏽が施されている。62-67, 69, 70 は小坏である。62, 64は染付、69は白磁で JB-6-a, 63, 66, 67は染付、70は白磁で JB-6-b, 65は染付で JB-6-d に分類される。64は型紙による絵付けである。68は染付で JB-7-b である。絵付けは墨弾きの手法が用いられ口唇には口鏽が施される。71は白磁、72-75は染付、76は色絵の蓋物である。71-73, 76は JB-13-a, 74, 75 は JB-13-b に分類される。77, 78は染付の合子で JB-18 である。79は白磁で JB-4-a に分類される。貼付高台である。

80は染付のミニチュアで、JB-35である。81は染付、82, 83は色絵、84は白磁の油壺で JB-12 に分類される。82, 83は灰白色の胎土をしており、朱、黄、呉須で上絵付けされる。85は染付の大瓶で JB-10-a である。86-88は染付仏飯器で JB-8に分類される。いずれも脚部、碗部の形態が17世紀代の様相を呈している。89は白磁、90は染付で、JB-15に分類される。91, 92は白磁、93-97は染付、98は色絵の蓋である。つまみの形態より、91は JB-14-f, 92, 94, 95は JB-14-b, 93, 98は JB-14-a, 96は JB-14-e, 97は JB-14-g に細分される。99は磁器の型皿である。貫入が入る軟質の胎土で、一般的な肥前、中国のものとは異なっている様に思える。高台も型で作り出している。あるいは近代以降の製品の流れ込みか。分析試料の15である。

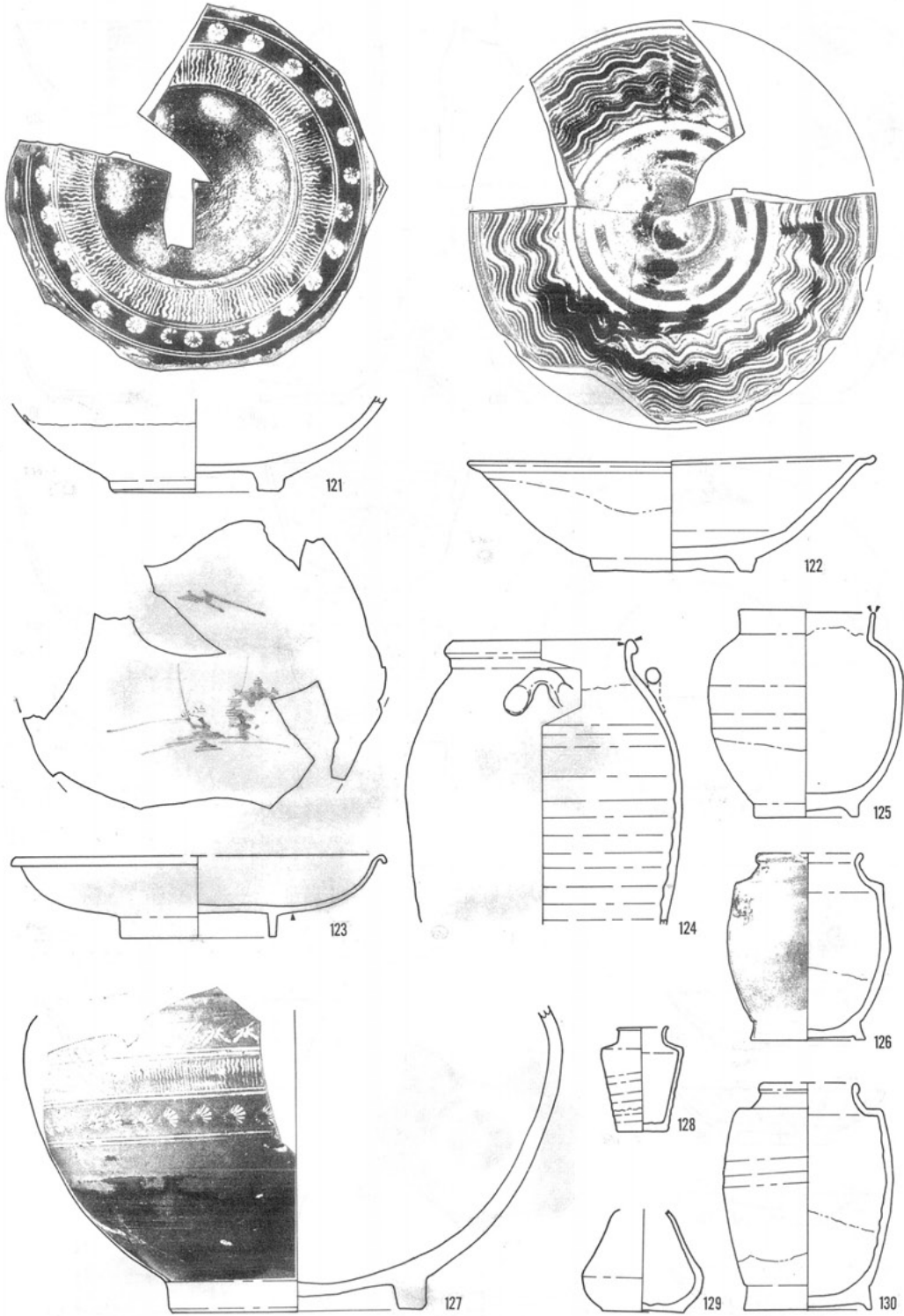
陶器(100-153, 227, 228) 100-107は肥前系の碗である。100は TB-1-d, 101は京焼風陶器のうちいわゆる呉器手と称されるもので TB-1-a, 102-105は伊万里市大川内の御経石窯や清源下窯で出土した鉄絵の山水が描かれた京焼風陶器の一群で、TB-1-b に分類される。刻印はすべてに施されている(IV-050図参照)。106は白化粧土の上から呉須絵が施されている碗で胎土は硬質の暗灰褐色で唐津系の土と考えられ、高台内は施釉されている。107は陶胎の染付で TB-1-f である。花と蔓文を描いているが、花はコンニャク判で絵付けされている。108-110, 112は京焼系の碗で TD-1に分類される。いずれも薄手で絵付け、焼成、成形等は丁寧になされている。108は鉄と呉須で丁寧な草文の絵付けがされている。高台内には楕円内に行書で「清閑寺」の刻印が押されている。109は小型の高台の丸碗で TD-1-b に細分される。剥落が著しいが、器面には三箇所金箔で家紋風の花文様が認め

第IV章 江戸時代の遺物



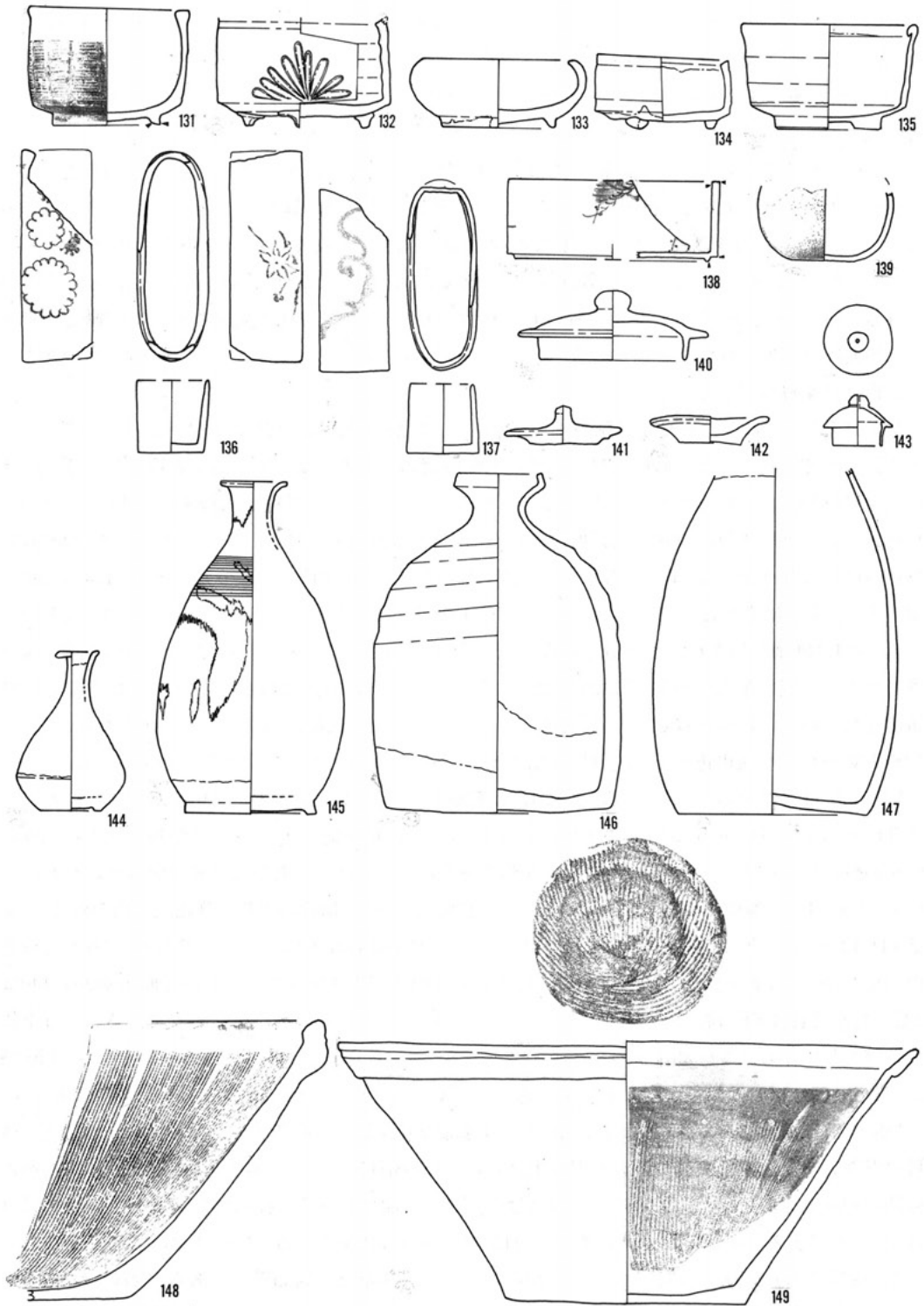
IV-050図 F34-11出土遺物(6)

第一節 陶磁器・土器



IV-051 図 F34-11 出土遺物 (7)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-052図 F34-11出土遺物(8)

第一節 陶磁器・土器

られる。110は硬質の灰褐色の胎土を有し、渦巻高台風である。112は釉裏に呉須、鉄絵で葡萄文を描き、白濁した上釉が施されている。111は鉄釉が施された瀬戸・美濃の小坏でTC-6に分類される。113は灰釉丸碗でTC-1-cに属する。本類の中でも初期のものと考えられ、高台裏や体部下半が釉が施された後、拭き取られている。

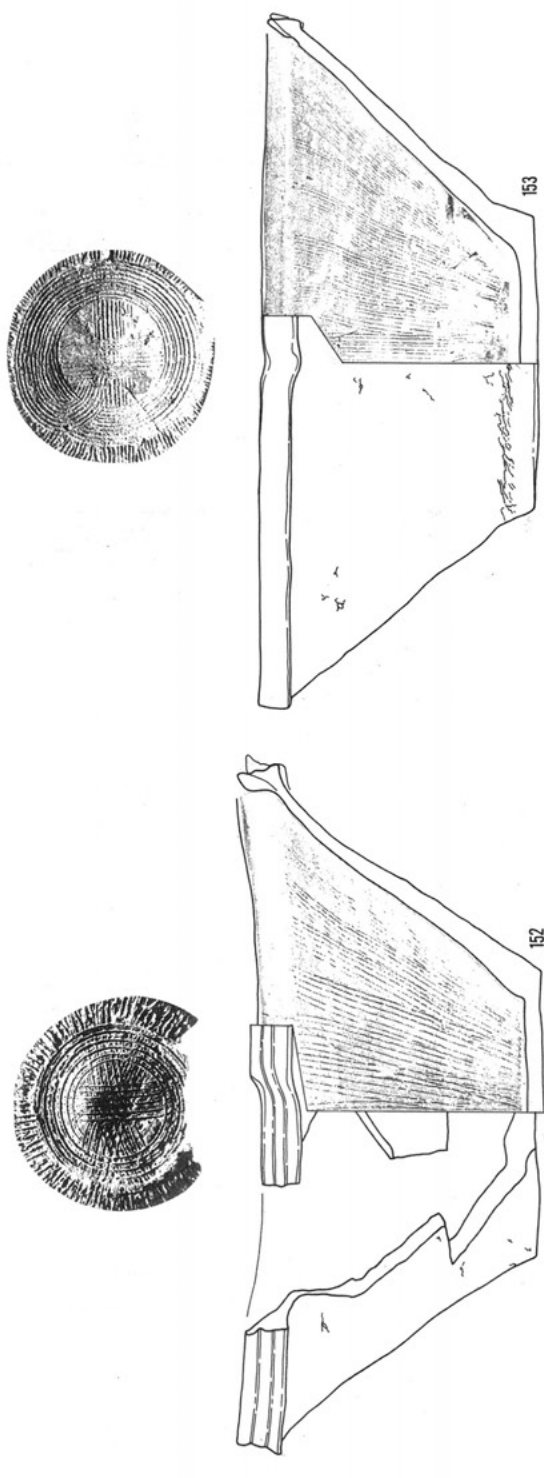
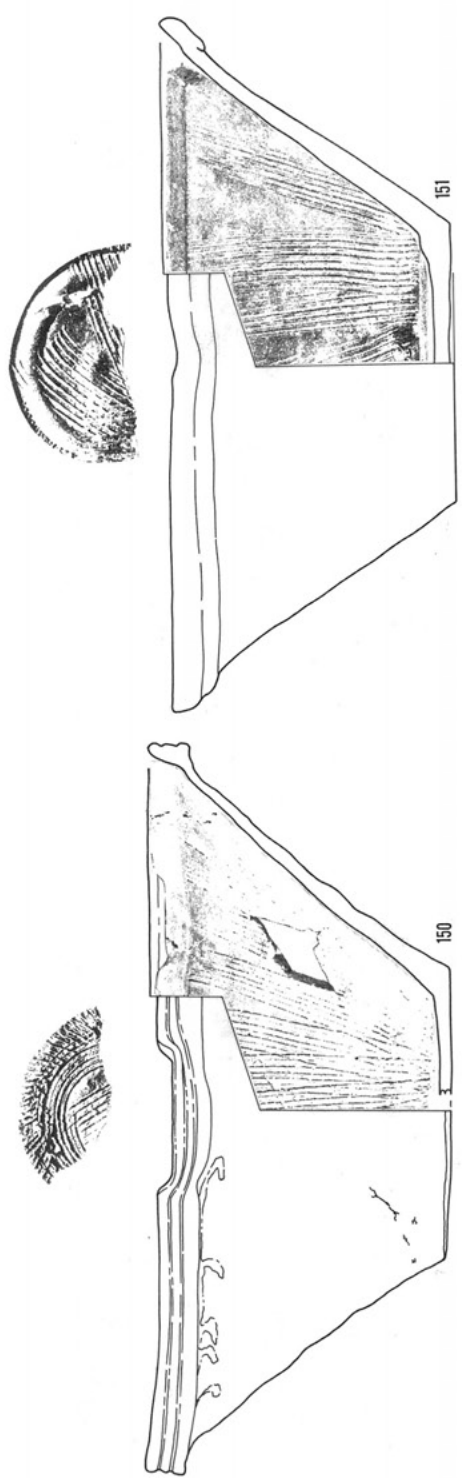
114はTC-2-1で見込みには緑釉が流し掛られている。見込みに布目痕が見込み、高台裏にはピン痕が三箇所認められる。115はTC-2-kで、114同様見込みには緑釉が流し掛られている。見込みには三箇所のピン痕が認められる。116は乱雑に釉が拭き取られているため明瞭ではないが、TC-2-mと考えられる。見込みには、窯積みの際の直重ねの畳付の痕跡が明瞭に認められる。117、118はTB-2-aで117は一般的な見込み銅緑釉、外面灰釉のもので、118は見込み餡釉と銅緑釉が掛分け、外面灰釉が施されている例である。119は同手のものであるが、兜鉢形で、TB-5-dに分類される。内面は銅緑釉である。

120はTC-9で器面は灰釉に緑釉が流し掛け、内面は無釉である。121はTB-5-bでいわゆる三鳥手の鉢である。見込みは、砂胎土目の痕跡が七箇所認められる。高台脇は浅く面取りがなされ、体部下半は鉄釉が化粧掛けされている。122はTB-5-aで白化粧土に緑釉と鉄釉を流し掛けしている。見込みには、砂胎土目の痕跡が六箇所認められる。123は京焼風の鉢で、ところどころ歪みがある。見込みにはTB-1-b、cと同様の山水文が鉄絵で描かれている。TB-5-cに分類される。124-130は壺類である。産地により124、126、128、130はTC-15、125はTF-15、127はTB-15、129はTD-15になる。124は鉄釉が施された三耳壺である。125は鉄釉が施されている。126は鉄釉に灰釉が流し掛けされた小型の壺で茶入れかも知れない。127は三鳥手の壺で鉢同様に高台裏、胴下半部に鉄釉が化粧掛けされている。128は口縁部から胴下半に鉄釉が施され、底部は糸切り痕が認められる。129はやや黄味がかかった淡褐色を呈し、硬質な胎土を有する。130は上半鉄釉、下半化粧掛けされている。

131-135は香炉である。131はTC-9-e、132は放射状のしのぎが施されTC-9-dに分類される。133はTC-9、134はTC-9-b、135はTD-9-bである。133は柿釉が施される。134は餡釉が施され三本の脚が貼付されている。135は淡褐色の硬質な胎土を有し、蛇ノ目高台風の高台脇は面取りが行われている。136、137は鬘盤でTC-25に分類される。136は鉄絵具で摺絵の雪輪、草花文が描かれる。138はTD-13-bで白絵土と鉄絵具で松文が描かれている。139は柑類を模した合子である。内外面に橙色の上釉を掛け、器面全体には細かい刺突が施される。産地不明。140-142は蓋で、産地、形態から140はTC-14-c、141はTF-14、142はTC-14-aに分類される。いずれも鉄釉が掛けられている。143は全体が手づくねで作られている蓋状のミニチュアである。赤褐色を呈し、堅く焼締められている。TE-35に分類される。144は餡釉が胴部中位まで施され、TC-10に分けられる。一輪差し的なものであろう。

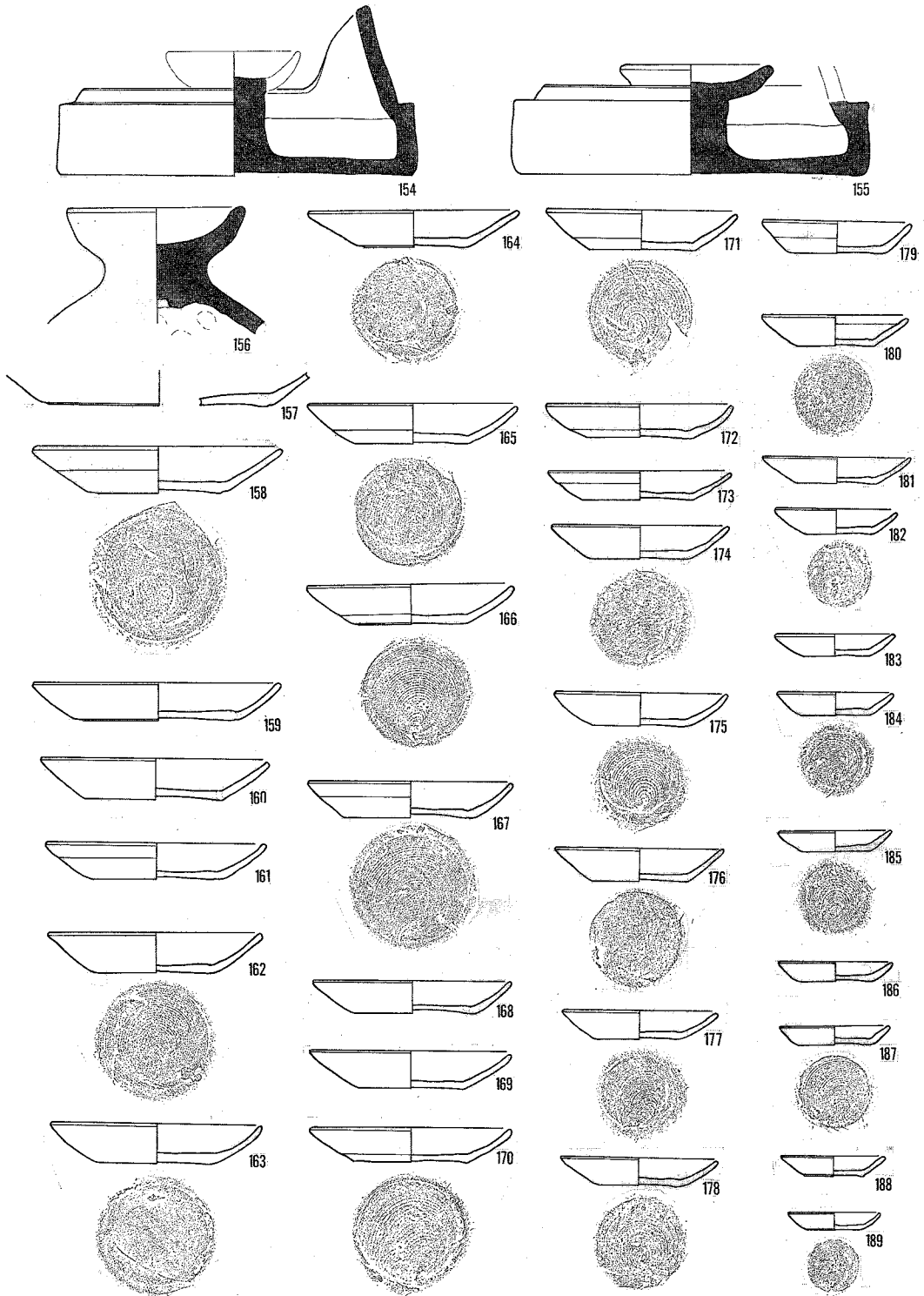
148-153は播鉢である。148はTE-29で、口縁部の装飾が丸みを帯び鋭角的に尖らないこと、播目の引き方が見込み中央部付近より引き上げられ、口縁部付近では隙間が開くことなど、備前系の播鉢の初現的な形態を示している。外面には火ダスキが認められる。播目は11条である。149、151はTC-29である。播目は149が15条で一周13単位、151は10条である。150、152、153はTD-29である。播目は150が7条、152は6条で一周35単位、153は10条で一周35単位である。227はTC-23である。内面および体部下半までには鉄釉が施されている。228は薬研と対になる円盤状のもので、TE

第IV章 江戸時代の遺物



IV-053図 F34-11出土遺物(9)

第一節 陶磁器・土器



IV-054圖 F34-11出土遺物(10)

第IV章 江戸時代の遺物

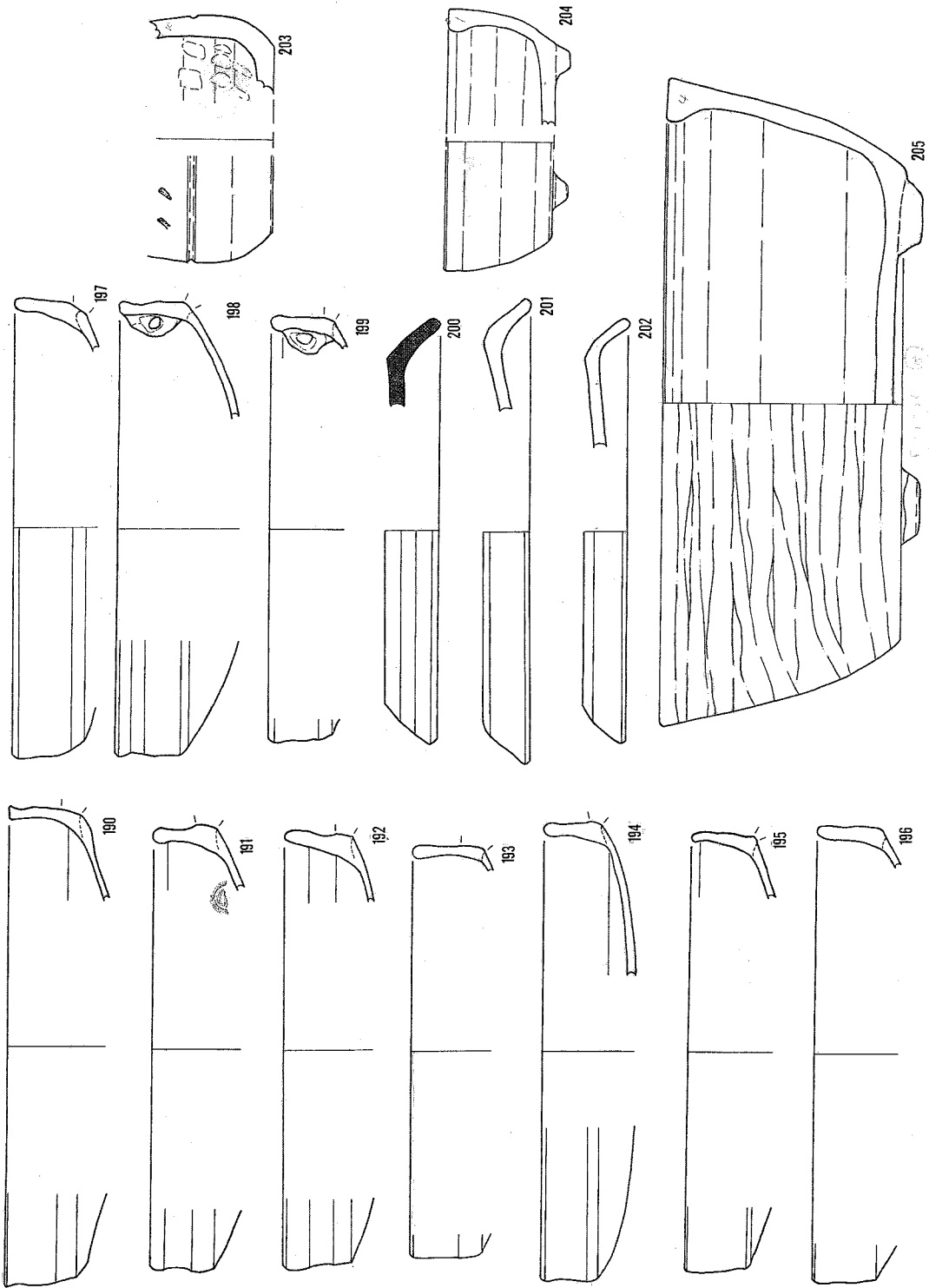
-37である。表面には錆釉が施され、中央付近には三角の中央に点の刻印が認められる。周辺部は使用のため釉が剥げ、平滑になっている。

徳利(145-147) 145は瀬戸美濃産の5合徳利で、鉛釉に化粧掛けが施され肩部の条線も2段にわたっている。口唇部は鏝状に張り出して外縁部が軽く撫でられて整形され最大径は胴下部にある。高台は深くしっかりと削り込まれてやや外反する。釘書はない。146は瀬戸美濃産で船徳利とも呼ばれるものである。黒褐色釉がつけ掛けされており胴部下端は無釉である。断面がくの字形になる口唇部と、低くどっしり座った器形が特徴的である。147は志戸呂産の徳利で、底部外周はへら削りされていない。2合半徳利、5合・1升徳利がそれぞれ20個体ほど出土しており、志戸呂産徳利も30個体強が認められる。瀬戸美濃産鉄釉徳利、船徳利、備前産徳利も少量が認められる。

灯火具(154-156, 225・226) 154-156は瓦質の瓦燈である。154, 155は受け部, 156は頭部である。154は内部の油皿を欠き, 155は上に向かう蓋受け部分を欠く。156は頂部の油皿のみの残存である。225は鉄釉油皿で完形品であるが、おそらく流れ込みであろう。226は志戸呂の油皿, これも完形品である。二孔が通常であるが, 226は三孔認められた。二つとも灯芯油痕はない。灯火具は図示した以外, 4点の出土。3点が瓦質の瓦燈のうち2点が受け部, 1点が頭部である。他の1点は志戸呂の受付である。225以外は素焼と志戸呂に限られ, 灯火具自体の出土も少ない点が指摘できる。また瓦燈がすべて瓦質である点も注目される。

カワラケ(157-189) 図示したものの口径5.2-15.3cm。157ははっきりしないがおそらく六寸以上であろう。大型の製品のなかでは163のみが内湾した口縁をもつ。165-170はほぼ同じ口径で, 167, 168が口径に比べ、底径が大きい。171, 172もほぼ同口径であるがだいぶ形態が異なる。172の口径は内湾し, 底径が広いのが特徴である。また胎土も異なるらしい。173の器高はやや低い。179も口径に比べ底径が広い。182-189はほぼ同形態であり, 小型のカワラケである。すべて底径が大きい一群である。160, 166, 168, 170, 174, 176, 177, 179, 180, 182, 184-187は完形品である。灯芯油痕が口唇を全周するものは159, 166, 169, 170, 173, 174, 176, 181, 185である。疎らなものは158, 160, 162-164, 167, 175, 177, 179, 180, 182, 183でそれ以外は認められない。ほとんどのカワラケに認められる中で, 二寸三分以下のものには185以外油痕はない。小型のものに付着しないことは他でも追認できる。図示したものはすべて左回転糸切り底であるが, 切り離し技法に明らかな違いがあるものがある。拓本でも明らかなように(162, 165, 175)主に大型の幾つかには「離し糸切り」の技法が認められる。大型のものには「離し糸切り」が多いという傾向は他の遺構でも追認され, 一般的な傾向となる。また底径にやや違いも認められたが, 底径が大きいものは前代のものと共通し, 幾分古い様相をもつと考えている。特に小型のものでそれが明確である。カワラケは口径一寸七分から五寸一分までほぼ連続して確認されているが断絶も認められる。二寸六分から二寸九分までの間であり, はっきりはしないが, 三寸三分から三寸四分, 四寸七分から五寸の間にも空白がありそうである。これが『貞丈雑記』などに記された“度”に関連するものと考えられる。この遺構より, カワラケは598点の出土。出土比率の40.9%。底径のわかるもの186点のうち, 3.1-4.5cmが41点, 4.6-6.5cmが45点, 6.6-8cmが86点, 8.1cm以上が14点となる。底径6.6-8cmのものは推定口径が四寸一分-四寸六分となりF33-3などより大型の製品が多いようである。さらにこの形

第一節 陶磁器・土器



IV-058圖 F34-11出土遺物(11)

第IV章 江戸時代の遺物

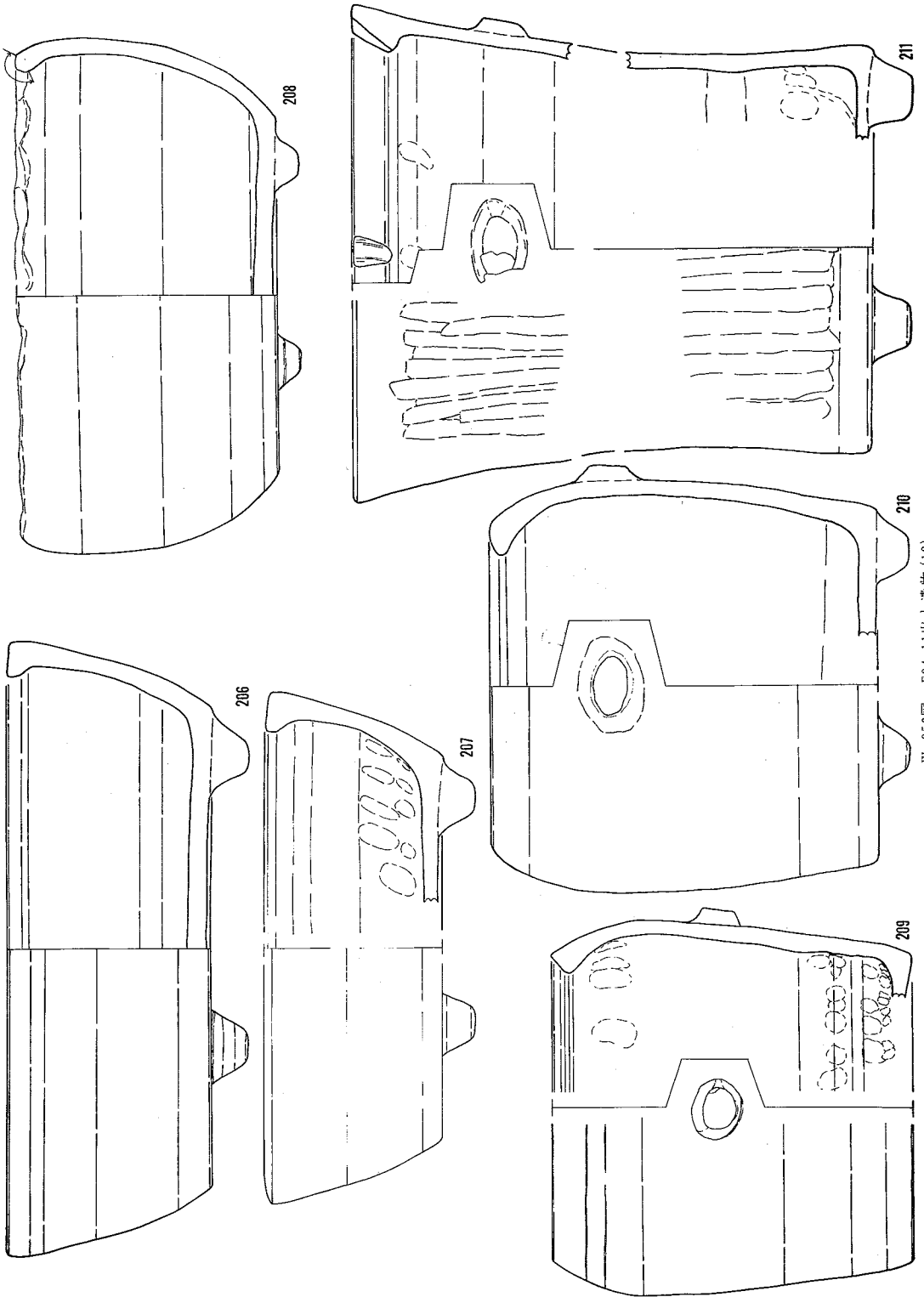
態のものに灯芯油痕の付着する割合がもっとも高い。他に耳皿1点、墨書土器3点の出土がある。

焙烙(190-202) 焙烙もかなりの点数が出土し、またさまざまな形態のものを含む。ケズリに注目し分類すると大きく二つに区分できる。一つはケズリが屈曲部を境として口縁側につくものであり、190-194が相当する。196はケズリが見当たらないが、193と類似しておりほぼこの一群に入ると思われる。口径25.4-29.6cm。他の群は口縁から屈曲部にかけて施されるものであり、195、197-199が相当する。199がほぼ完形。口径は26.2-28.2cmである。他に口縁側にケズリがつくものでも口縁に明らかにくびれをもつもの(191、192)ともたないもの(190、193、194)とに区別できる。ただし190は口唇の形態、胎土などで他とは異なっている。この形態の焙烙はこれ以外類例がない。なお191には図のような丸に一の字の刻印が認められる。刻印は鋭く深い。また屈曲部にケズリをもつものであっても197は斜めに入り、口縁から底部への移行が比較的スムーズであり、F33-3出土の一群と類似した形態となる。198、199は内耳をもつタイプである。内耳は団子状の粘土を張り付け、その後に貫通孔を穿つ。内部は空洞ではなく、古い手法による内耳である。198は口唇がやや外側に開く。他に1点類例がある。それ以外は内耳をもたない他の焙烙と特に違いはない。200-202は蓋。200は瓦質である。口径は26.2-28.8cm。蓋は4点の出土。うち2点が瓦質である。図示したものを含め底部片は75点の出土。刻印のあるものも他に1点出土している。口縁片も117点出土している。もっとも多いのが194に類似したもので、半数がこの形態である。次に多いのが191、192に類似したもので17点、197に類似したものは12点出土している。他に内耳をもつもの13点、196に類似したものが7点ある。それ以外18-19世紀のおそらく流れ込みと考えられるもの3点、不明7点の出土となる。なお内耳をもつものうち、9点は口縁側にケズリがつく。また内耳の破片が少ない点から、ほとんどの焙烙は内耳をもっていなかったと考えている。

F34-11から194に類似したものがもっとも多く出土しているが、この形態の焙烙は17世紀後半の遺構でよく出土する。191、192がさらに発展した形態と考えている。このように口縁に意識的なくびれが見られなくなり、ケズリが口縁から屈曲部へ移行した結果、197のような焙烙が生み出されたと考えている。それを裏付けるようにこの時期以降、191、192、194に類似したものはなくなり、197をさらに発展させた形態が多数を占めるようになる。F33-3がその好例である。

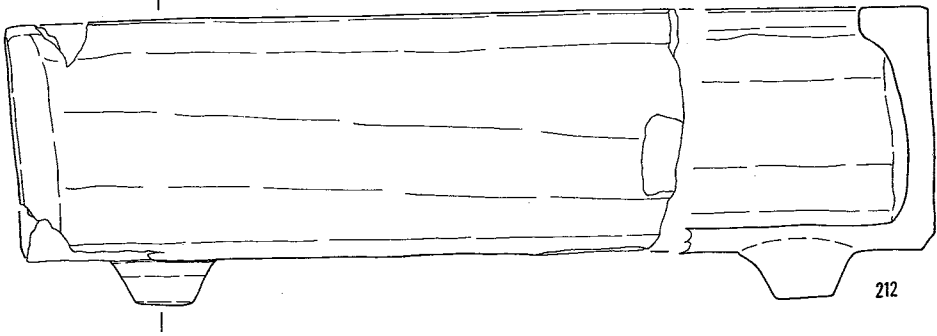
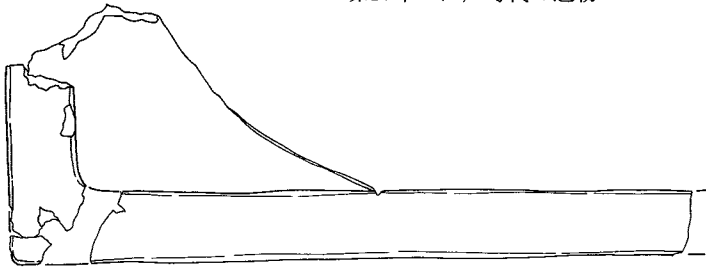
土器(203-218) 203は1類aイに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。口縁部を欠損している。外面には一条の深い沈線が横に巡り、その上に列点が見られる。内面には指頭痕が連続し、さらに弱いナデが横に入る。204は1類aロに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面は剝落が著しい。内面にはわずかに指頭痕が見られその上がナデられている。205-207は1類aロに分類される大型の軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。205は大きめの足が底面周縁部につく。底面との接合部を中心に念入りにナデられ足の先が研磨されている。体部外面には横のミガキが施されている。内面は比較的丁寧にナデられている。底部外面には砂粒の痕が見られる。口唇部内外面にはわずかに敲打痕が見られる。206は表面の剝落が著しいが、体部外面は丁寧にナデられている。底部外面には砂粒の痕跡が見られる。内面は横にナデられている。口唇部には敲打痕が見られる。体部内面には火箸によるものであろうか、縦の細かい傷が無数に見られる。207は底の大部分を欠く。体部外面は横にミガキが入り、体部下半、底部と接する部分はケズられ

第一節 陶磁器・土器

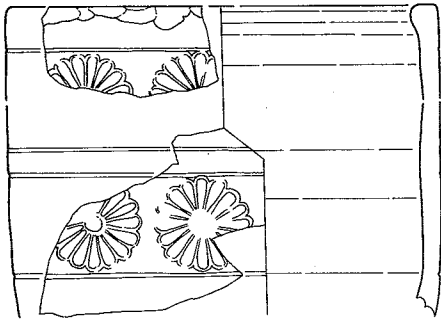


IV-056 区 F34-11出土遺物(12)

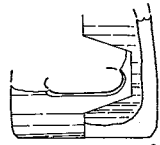
第IV章 江戸時代の遺物



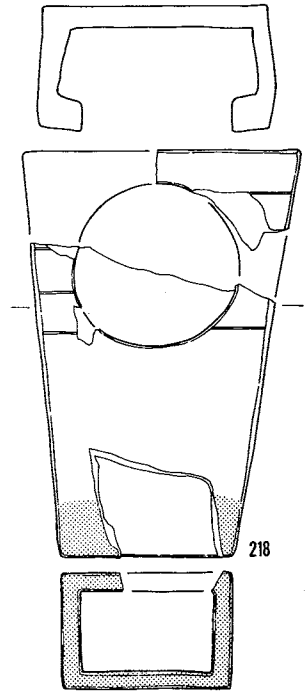
212



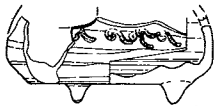
213



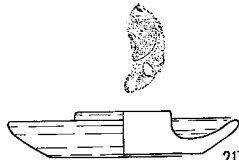
214



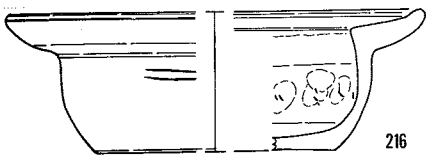
218



215



217



216

IV-057図 F34-11出土遺物(13)

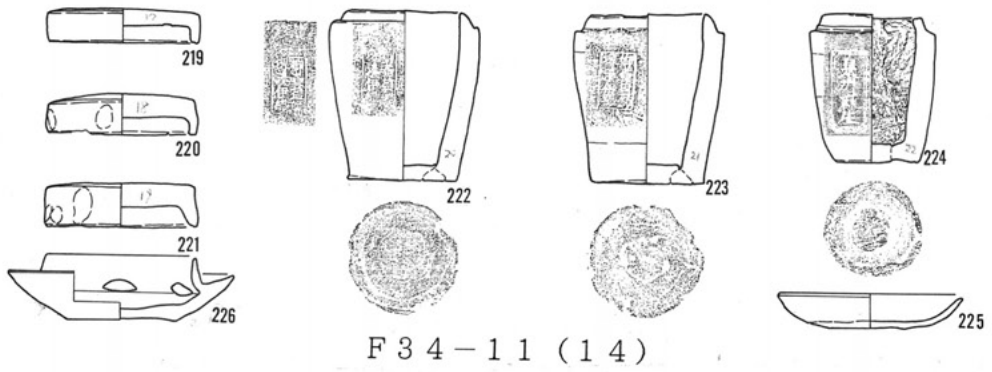
第一節 陶磁器・土器

ている。内面には指頭痕が連続しその上が横にナデられている。底部外面にはチヂレ目がある。208は1類aロに分類される大型の軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面には粗いナデが見られる。内面は横にナデられている。底部外面にはチヂレ目が見られる。口唇部内外面には敲打痕が連続する。体部内面には縦の細かい傷が無数に見られる。

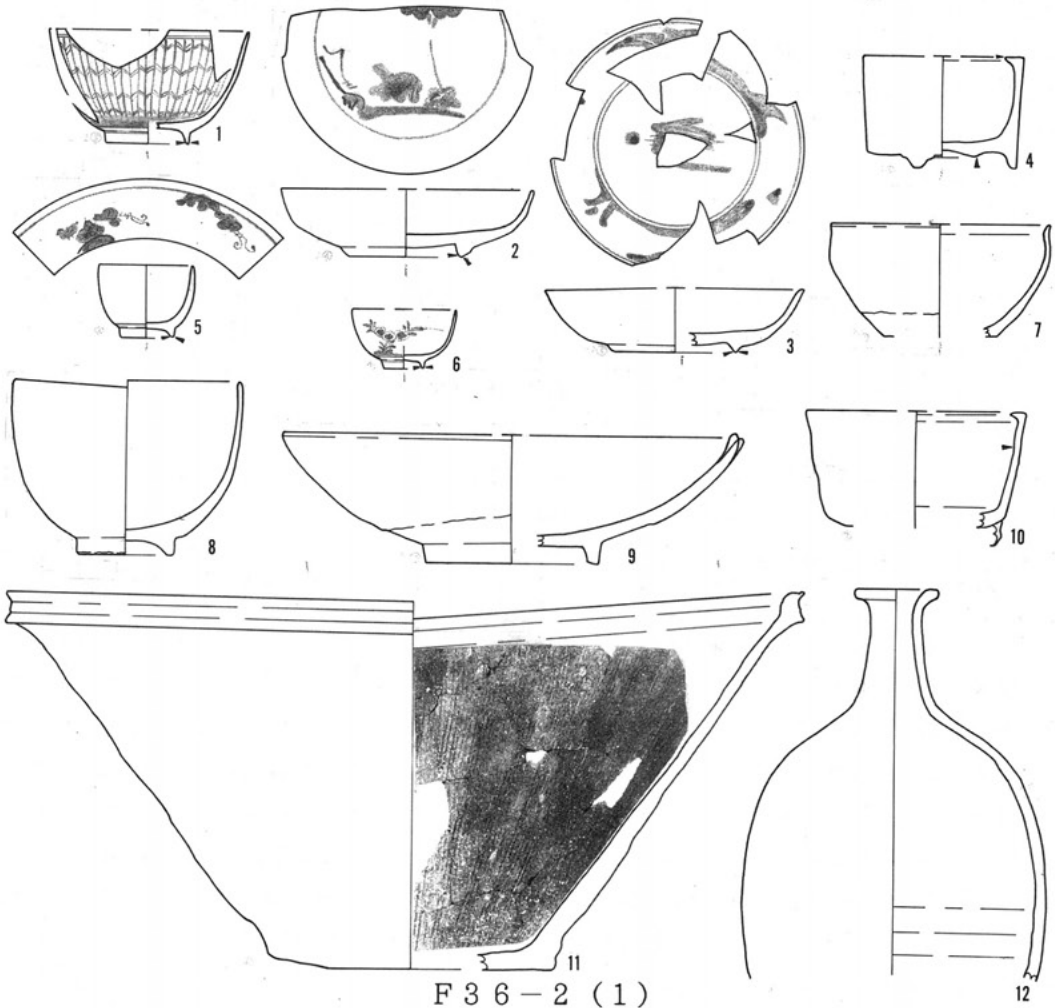
209, 210は1類bイに分類される軟質瓦質の火鉢類。209は底の大部分を欠く。両者とも体部中央口縁より一対の把手が貼付されている。体部外面は丁寧に調整され、平滑で体部下半、底部と接する部分はケズられている。内面は横のナデ調整の痕が残り、209には指頭痕が数多く見られる。底面外側は平滑である。211は1類bロに分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。口縁部および底部が残存しており、図のような大きさであろうと思われるが、あるいはやや背が低いものであるかもしれない。一対の把手が貼付されている。口唇部は内側に幅広い凸帯が貼付され、おそらくは三箇所溝状の切り欠きが設けられたものと思われる。体部外面は縦のケズリが入り、内面は横のナデが施されている。内面口縁下と底部付近に指頭痕が少々見られる。底面外側にはスグレ状の圧痕が残る。212は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われるが、一辺の長さは不明である。外面は横および縦の丁寧なケズりで平滑に整えられ、底面と交わる部分は強くケズられて面を構成している。内面は横にナデが走り、角には縦のナデが加えられている。底面外側には砂粒の痕跡が見られる。213は1類bハに分類される硬質土師質の火鉢類。輪積み成形である。下半部を欠損するが、円筒形を呈していたものと思われる。体部はほぼ垂直に立ち、口唇部は内側にわずかに肥厚する。外面は菊花の文様が横に走る沈線の間並びその上が念入りにミガかれている。口唇部外側を連続的な敲打痕が覆い、口唇部内側には煤が付着する。214は軟質瓦質のロクロ成形の製品である。上半部を欠損する。楕円もしくは長円の窓が底部近くに開けられている。底面には回転糸切り痕が見られる。火入れの類と思われる。215は軟質土師質のロクロ成形の製品である。口縁部を欠損するが、わずかに残る部分から窓が切り込まれていたことが知られる。外面には丸めた紐のようなものを繰り返し押しつけたと思われる、雲形の模様が続く。底部には回転糸切り痕が見られ、足を3もつ。器形は香炉にもっとも近いが、窓の存在から火入れの類と思われる。216は軟質瓦質の容器。輪積み成形であろう。底面の一部を欠損するが足はなかったと思われる。外面はよくミガかれ平滑である。内面は爪痕の付く指頭痕が連続し、その上をナデられている。217は中央の突出したカワラケに類似する軟質土師質の製品である。上下両面に回転糸切り痕が見られる。口唇には墨と思われる黒色の塗料がわずかに見られる。用途も名称もともに不明である。218は軟質土師質の箱形の製品である。板組造り成形である。細長い台形を呈していたと思われ、一面には円形の孔が開いており、その両側にはおそらく四本ずつの、底辺に平行な沈線が入れられていたようである。また台形の上底、すなわち短い辺にあたる面も開口している。この開口部の周囲には墨の塗布が見られる。また円形の孔の周囲がわずかに白色化している。七輪の部分品とされる、風口と呼ばれるものである。

焼塩壺(219-224) 219はイ類1bに分類される蓋。やや白色を帯びた肌色を呈する。薄手で、調整がとれている。下面にはきわめて細かい布目が見られ、突起の末端に及んでいる。下面にはまた浅く幅広い沈線による圏線が見られる。220はイ類1cに分類され、強い橙色を呈する。上面がやや

第IV章 江戸時代の遺物



F 3 4 - 1 1 (1 4)



F 3 6 - 2 (1)

IV-058図 F34-11(14)、F36-2(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器

丸みを帯び、側面もやや脹らんでいる。下面にはやや粗い布目が見られる。側面は横にナデられ指頭痕がわずかに見られる。221はI類1cに分類され、橙色を帯びた肌色を呈する。下面には細かい布目がナデの下に少々見られる。側面は横にナデられて調整されており、指頭痕が見られる。222、223はII類2bに分類される身。2類4に分類される刻印をもつ。桃色がかった橙色を呈する。均整のとれた体部と平滑な内面、底面に入れられた粘土紐とを特徴とする。222の刻印は、前後面に対になるように捺されている。223はII類1b2に分類される身。3類1bに分類される刻印をもつ。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。

本遺構出土の焼塩壺には際立った特徴がある。まず第一に、数量的に大なることが挙げられる。遺構自体の規模も大きいのが、最小個体数にして身が52点、蓋が41点出土しており、これは本地点はもちろんこれまでに知られる1遺構あたりの量ではおそらく最大であろう。また、カワラケ、焙烙以外の土器の32点と比べても、その量的な優越が知られる。第二にこれだけ多くの量がありながらそこに含まれる遺物の種類が少ない。言い換えれば同一種に分類されるものが多く集まっている。身ではII類1b1が19点、II類1aが33点であり、このほかのものは見られない。さらに前者のうちの15点に3類1bの、後者のうちの18点に2類4の刻印がそれぞれ見られ、他の刻印をもつものはない。蓋ではI類1cが41点のすべてである。第三に、比較的稀な身や刻印をもつものが多く見られる。上述のII類1aの身は本地点の他遺構からは小片を含めても8点しかなく、他の遺跡においてもやはり稀である。また2類4の文面をもつ刻印は他の遺跡においても散見されるが、その器形はII類1aとは異なるものである。

こうしたことから本遺構出土の焼塩壺は第一級の資料であると言えよう。詳しい検討は別に行うことにし、ここではこれらの特徴が何を意味し、ここから何が読み取れるのかについて触れておくことにする。まず、第二の特徴からこれらの遺物が比較的短時間にこの遺構に捨てられたことが考えられる。量的に多くても、それが長期にわたって少しずつ捨てられたものではなく、なんらかの理由によって、ほぼ同時に捨てられたと考えられるということであり、焼塩壺のもつ、宴席などにおける非日常的な使用という側面からして興味深い点である。また、これらが短時間に捨てられたと考えられることと、焼塩壺がほとんど伝世しなかったであろうことから、これらの一群の遺物にみられる差異が時間的な差異（時期差）に由来するものではなく、生産に関するヴァリエーションと考えられる。すなわち壺塩生産者の差異、焼塩壺製作者の差異、製作者の中の工人の差異や個体差である。前二者が形態や刻印の分類項目に対応していると考えられるところから、3類1aの刻印の見られるII類1b2の身と、2類4の刻印の見られるII類1aの身の各々の中に見られる差異は工人差もしくは個体差と考えられる。したがって、これらの差異を比較することによって、ある時期にある系統の壺塩生産者、あるいは焼塩壺製作者のもっていた製品に関する規範が規定できるのである。試みにII類1b2の身について見ると、計測可能な個体13点で器高は9.2-9.6cm、平均9.4cm、口径は6.1-6.7cm、平均6.3cm、底径は5.0-5.6cm、平均5.3cm、最大径は7.4-8.2cm、平均7.9cmであるが、一方本遺跡の他の遺構出土の計測可能な25点では、器高は8.1-10.4cm、口径は5.5-7.1cm、底径は4.7-5.8cm、最大径は7.1-8.2cmの間であり、特に器高と口径において高い規格性が認められる。II類1aの身については他の遺構にほとんど見られないことから、こうした検討

第IV章 江戸時代の遺物

が困難であるが、器形などの観察から、むしろこちらの方がより高い規格性をもっているように思われる。また3類1 a の刻印には a-f の6種の字体が認められるが、本遺構からは a が7点、b が7点、a、b いずれか不明1点であり、ほかの字体は見られない。

さらに、短時間に投棄されたと思われることから、身と蓋の対応関係の推定も可能である。蓋はI類1 c のものがほとんどである。橙色が強く、上面がやや丸みを帯びたものと橙色が弱く上面が平坦なものとの二者が見られ、身の色と比較して前者がII類1 a に、後者がII類1 b2に対応するものと思われるのである。

本遺構の焼塩壺についてはここで触れたこと以外にも、様々な検討が可能であり、V章において考察することにする。

F36-2 (IV-058, 059図) 本地点中では古い時期の遺物群が検出されている遺構である。遺物はいずれも二次焼成を受けており、火事後の一括廃棄を想定させる。年代的には、本地点ではI期としている時期に該当する。

磁器(1-6, 10) 磁器は4, 10を除き染付である。1はJB-1-cである。呉須は初期の独特の濃い青に発色している。2, 3はJB-2-aとともに呉須の発色はやや悪い。2は口唇に口錆が施されるが、大部分が磨り減って露胎している。4は白磁香炉でJB-9に分類される。底部は脚が体部と連続する様に三箇所貼付され、中央はやや突出して無釉になっている。5, 6は小坏でJB-6-aに分類される。5の方が釉調、高台の削りからやや古手である。10は青磁香炉で、JB-9に属する。獣面の脚が付く。著しく火熱をうけている。

陶器(7-9, 11) 7は天目茶碗でTC-1-aに分類される。ところどころ釉とびが認められる。8は灰釉の碗でTB-1-aであろうと思われるが、著しく被熱をされ、識別が困難であるため断定はできない。9はうのふ釉の鉢であるが、これも被熱のため識別が困難である。見込みに見られるピン痕が、瀬戸・美濃系の製品の溶着痕と類似することからあるいは瀬戸・美濃産か。11はTD-29である。播目は8条で、35か36単位で一周する。

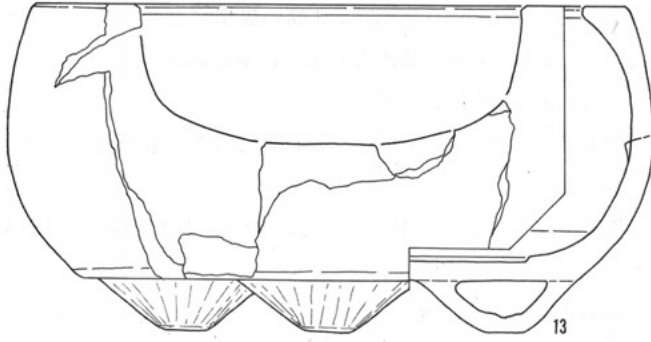
徳利 12はその胎土や釉調からおそらく瀬戸美濃産と思われるが、他に類例の見られない器形である。口唇部は小さく折り返されて玉縁状となり、胴部は強い丸味を帯びて黒褐色釉が掛けられている。2合半徳利、5合・1升徳利、瀬戸美濃産鉄釉系徳利、志戸呂産徳利、備前産徳利、それに船徳利がそれぞれ少量ずつ出土している。

土器 13は2類aに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。火熱による変色と変形とが著しい。わずかに残る破片から口縁から切り込まれた窓の存在が知られる。また足はきわめて大型の乳房状を呈し中空である。底面内側は周縁部に段をもつ。体部内外面とも丁寧にミガカレ、底面外側は平滑である。ほかに土師質の火鉢類の破片が1個体分ある。

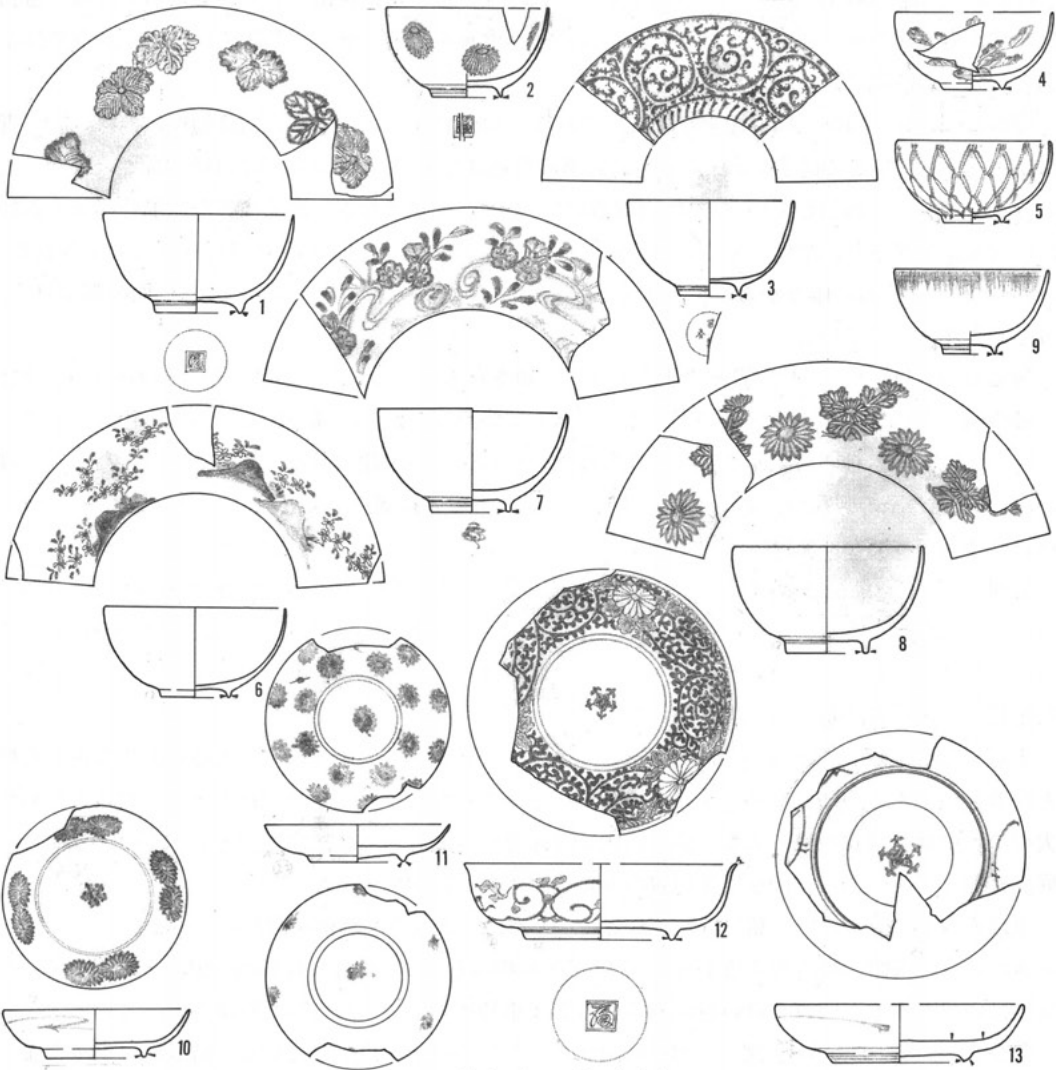
焼塩壺(14, 15) 14はA類に分類される蓋。火熱による変色と剥落が激しい。15はII類1 b2に分類される身。内側二段角の3類1 bに分類される刻印をもつ。体部は比較的均整がとれている。内面には布目がなく、明瞭な縫い目がある長方形二重枠の刻印のものと同じ特徴をもっている。

G20-2 (IV-059~062 図) 本遺構中からは多量の遺物が出土している。时期的にもまとまっており良好なセットといえる。本地点ではV期に位置する。

第一節 陶磁器・土器



F 3 6 - 2 (2)



G 2 0 - 2 (1)

IV-059圖 F36-2(2)、G20-2(1)出土遺物

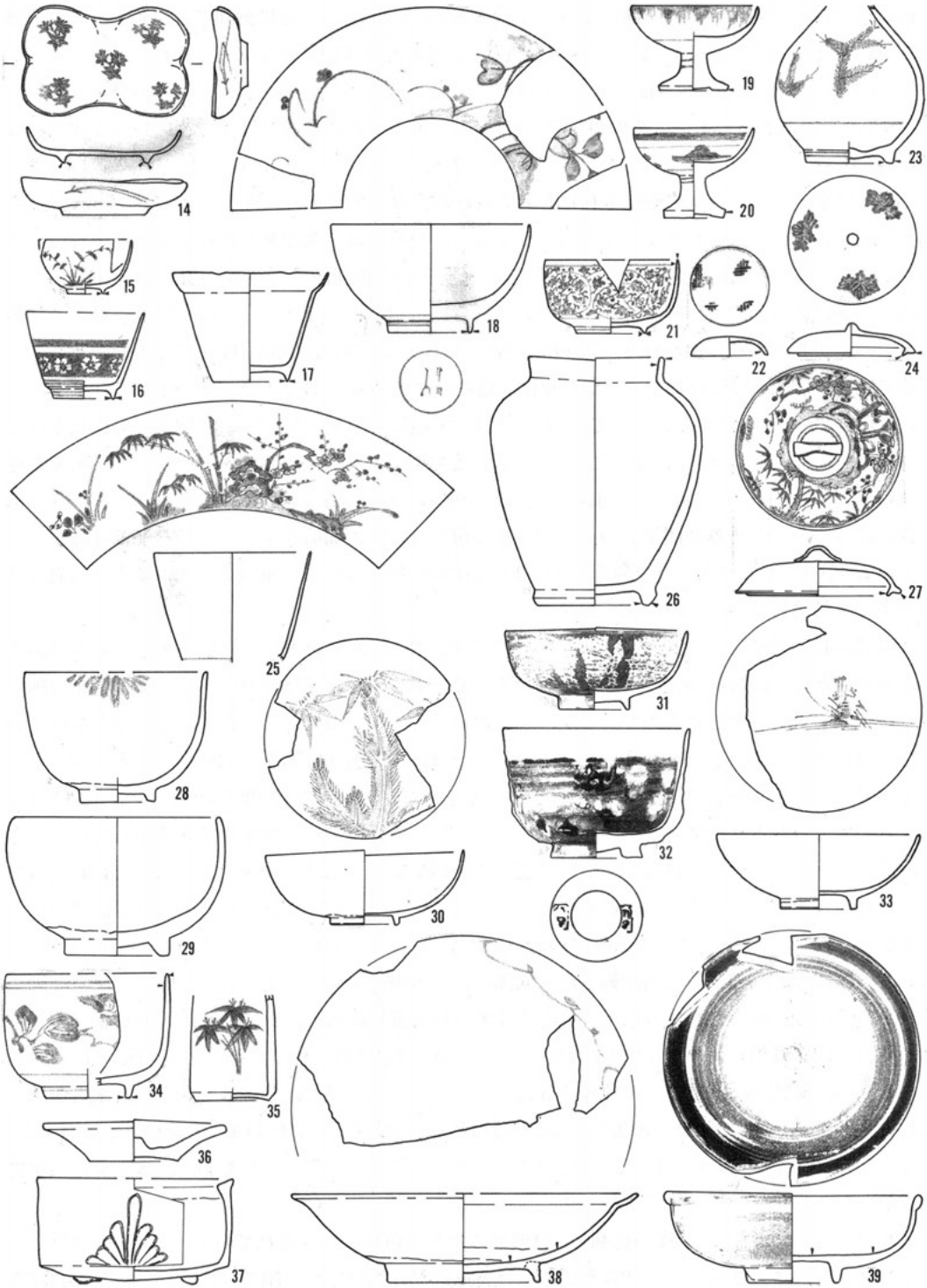
第IV章 江戸時代の遺物

磁器(1-27) 磁器は17, 26を除きすべて染付である。1-3はJB-1-eに分類され、胎土、呉須の発色ともに良好である。銘は1, 2が二重角枠内渦福, 3が欠損はしているが「富貴長春」であろう。4-6はJB-1-fである。7-9はJB-1-gで、いわゆるくらわんか碗である。胎土、呉須の発色ともに悪い。7はコンニャク判と手描きを併用して、8はコンニャク判のみで絵付けがされている。10, 11はJB-3-aで、10は五弁花を含めてすべてコンニャク判で絵付けがされている。12はJB-2-dに分類され、南川原窯ノ辻窯あたりで製造されたと考えられる良質の皿である。胎土、絵付け、呉須の発色、高台の釉ぎわの処理など極めて丁寧に行われており、口唇には口銹が施される。見込み中央には手描き五弁花、銘は二重角枠内渦福が印される。ハリ支えが一箇所認められる。13はJB-2-mである。見込み中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。14は型皿でJB-4-aに分類される。見込み文様はコンニャク判五弁花で描かれている。15は小坏でJB-6-aである。16はJB-6-dで器面の花文様は摺絵で抜いている。17は白磁で口縁部6単位の輪花にしている。JB-7-bに分類される。18はくらわんか手の鉢でJB-5に属する。厚手で、胎土、呉須の発色は悪い。19, 20はJB-8でともに焼きはややあまい。21はJB-13-aである。22はJB-18の蓋で型で紗綾形文の陽刻をしたのち、呉須をたらしている。23はJB-10で胎土、呉須の発色はやや悪い。24はJB-14-eで文様はコンニャク判で桐を絵付けている。つまみは団子状の小粘土塊を貼付しただけの簡略なものである。25は底部が欠損しているが、JB-7-bであろうと思われる。26は白磁の壺で、JB-15に分類される。器面、内面は鉄分が多量に付着している。27はJB-14-cである。

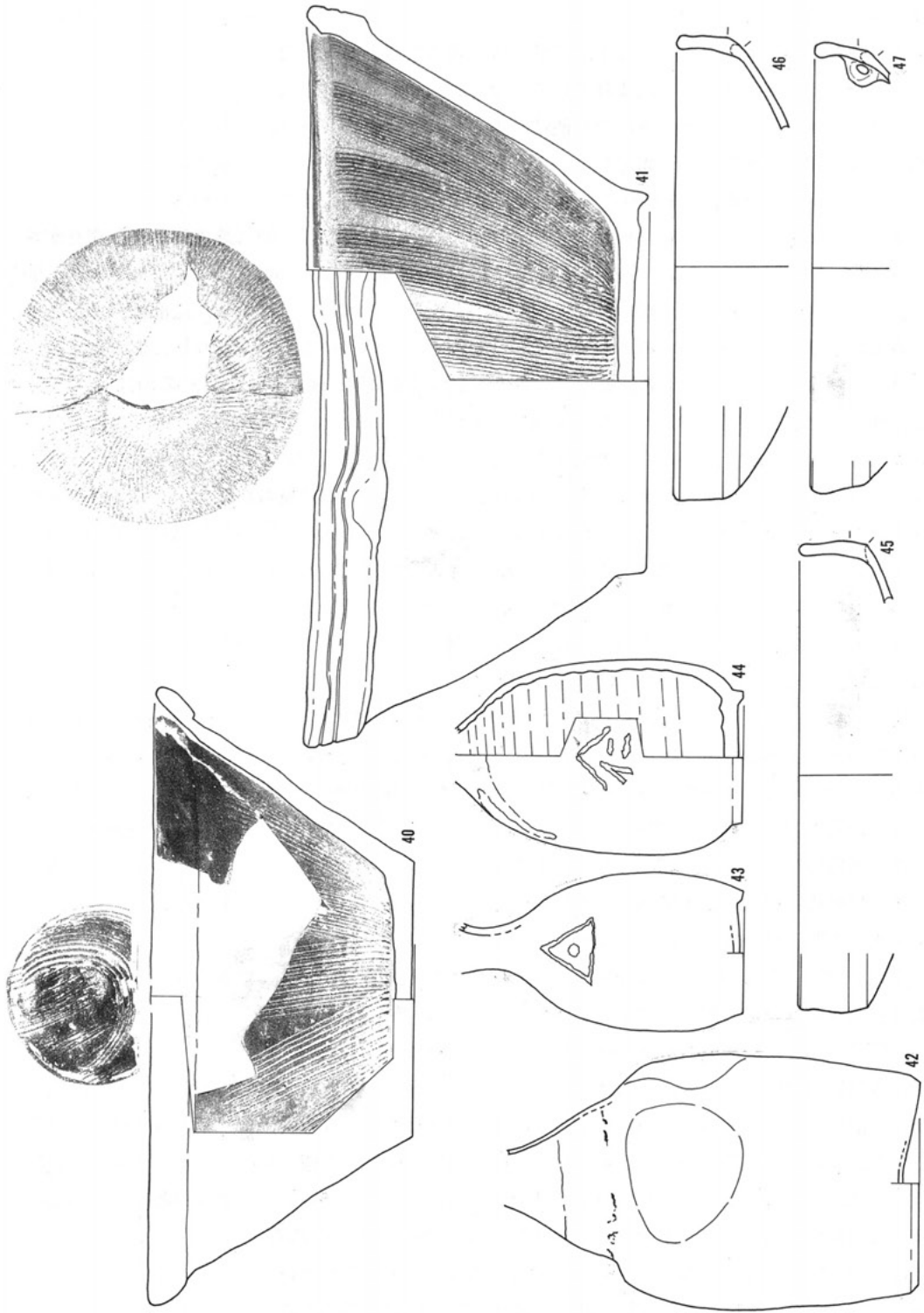
陶器(28-41) 28は呉須絵の灰釉碗でTC-1である。高台、釉の様子から京焼を模したものであろうと考えられる。29は灰釉碗でTC-1-cである。高台裏と体部下端は無釉である。30は灰釉の碗に松竹を色絵で上絵付けしたものであるが、色絵の具はすべて落ちており、色の観察はできない。高台脇は面取りされている。31はTC-1-qである。口縁は平面的には若干の凹凸を有する。32はもっとも初期の段階の腰鑄碗で、TC-1-uに分類される。瀬戸地方の本類の分類では第1～第2型式に該当すると考えられる(藤澤 1987)。33はTB-1-cで見込みには鉄絵で山水文様が描かれている。高台脇は面取りされている。34は陶胎染付の蓋物で、TB-13-aに分類される。35はTD-24-aで口唇部は敲打痕が明瞭に観察される。器面には鉄絵の具で笹文が絵付けされている。36は器面に鉄絵が化粧掛けされている蓋で、TC-14-aに分類される。裏面は回転糸切り痕が認められる。37はTC-9-dである。器面と口縁部には飴釉が施され、底部にはその中央をつまんで尖らせただけの簡略な脚が貼付されている。灰落としにも転用されたようで、口唇部に敲打痕が認められる。38は輪剝の灰釉鉢で見込みには呉須で簡単な文様が絵付けされている。高台は貼り付けられている。TC-5-cに分類される。39は輪剝の刷毛目の鉢でTB-5-aに属する。高台裏無釉で、判読はできないが墨書が認められる。40はTC-29で播目は10条である。41はTE-29である。播目は14条で、28単位で一周する。播目の上端は軽くなでられ、揃えられている。まだ口縁部装飾の張り出しも弱く、筒も見込み中央付近から引かれている。

徳利(42-44) 42は志戸呂産の徳利で、口頸部には茶褐色釉が掛けられている。肩部がややひしゃげており、胴部にも2箇所にくぼみが認められる。底部外周にはへう削りが施されている。43は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、ベタ刻の釘書が認められる。頸部は長く全体に紡錘形をしており、

第一節 陶磁器・土器



IV-060図 G20-2出土遺物(2)



IV-061図 620-2出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器

胴部下端の釉は丁寧に拭き取られて高台の削り込みも深い。44は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施され、ベタ刻の釘書のほか、底部には墨書の痕跡がある。撫で肩で最大径は胴下部にあり、高台はほぼ垂直に深く削り込まれている。なお43、44は口頸部を欠いているが双方ともにその割れ口は滑らかであり、再利用された可能性が考えられる。2合半徳利、5合・1升徳利、志戸呂産徳利ともに10~20個体ほどが出土している。備前産徳利もごく僅かながら認められる。

カワラケ(48-61) 図示したものの口径は5.3-20.4cm。種々の大きさのものがあるが、三寸~四寸前後のものが中心となる。51は銀彩があり器壁が厚く形態も異なる。52は焼成後の底部穿孔がされ、55にも同じ底部穿孔がある。55は器壁にも径3mmの穿孔がある。59は手捏ねかもしれない。60は墨書「中」が認められる。底部内外面に穿孔の痕跡が認められる。61は上製、底部はヘラケズリによるものではなく、同心円状の多数の浅い沈文がめぐり、いわゆる『渦糸切り』に似るが、糸切りによる切り離しではない。灯芯油痕は51、53のみが口唇を全周。疎らに認められるのは54、56のみで、他にはない。不明な50以外、全て左回転の糸切り底。また48、51以外のカワラケは変形している50ほどではないが、一様に二次焼成を受けている。破片も同様である。

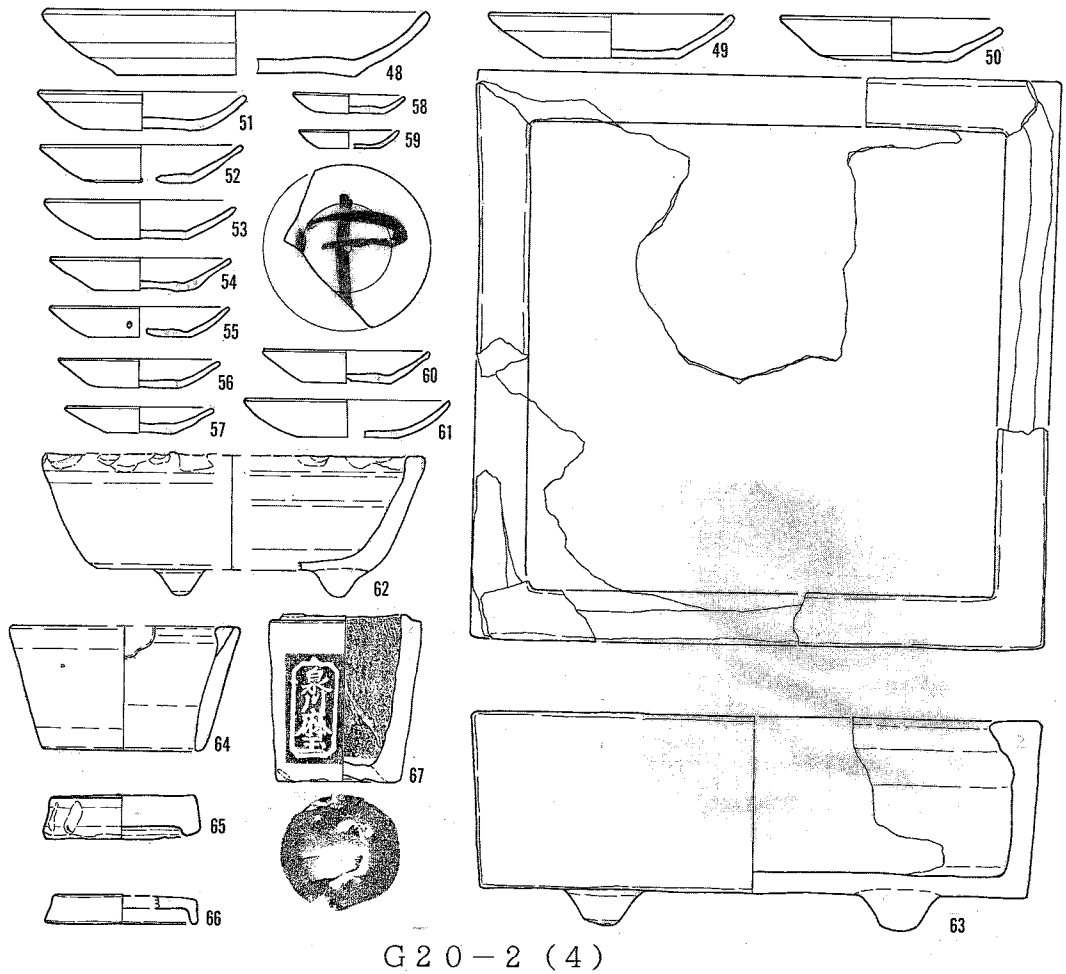
カワラケは115点の出土。出土比率の33.5%に相当する。17世紀に見られるおそらく流れ込みの手捏ね、上製4、耳皿1以外、全て左回転糸切り底のカワラケである。図示した以外、墨書も2点出土している。一つは不明、他は「中」と読める。このうち底径のわかるものは、上述のものを含め31点。分布は4.1-6.5cmにおさまるものが約20点である。口径は二寸九分~三寸九分にほぼ対応できよう。また底径までわからなかったが、48と類似した口径六寸以上の破片もいくつか出土している。ほぼF33-3と類似した分布を示すようである。

焙烙(45-47) 45はF34-11の193などに類似する。口縁側に幅の広いケズリが施され、流れ込みの可能性もある。46はG26-2の34とも似るが、ケズリが屈曲部をめぐり、F33-3の104、105などとも近い。47は内耳をもつ焙烙。推定口径27cm。F34-11の198、199とは口縁がいくぶん内湾する点で異なり、F34-11より新しい形態と考えている。ケズリは屈曲部をめぐり、内耳は内側屈曲部に接着し内耳内部は空洞である。図示したものを含め底部片は34点の出土。丸に一の字の刻印のあるもの1点。口縁片は24点の出土である。45に類似したもの4点、46に類似したもの15点、内耳のあるもの3点、不明2点の構成である。なお内耳のあるものは47と似る。

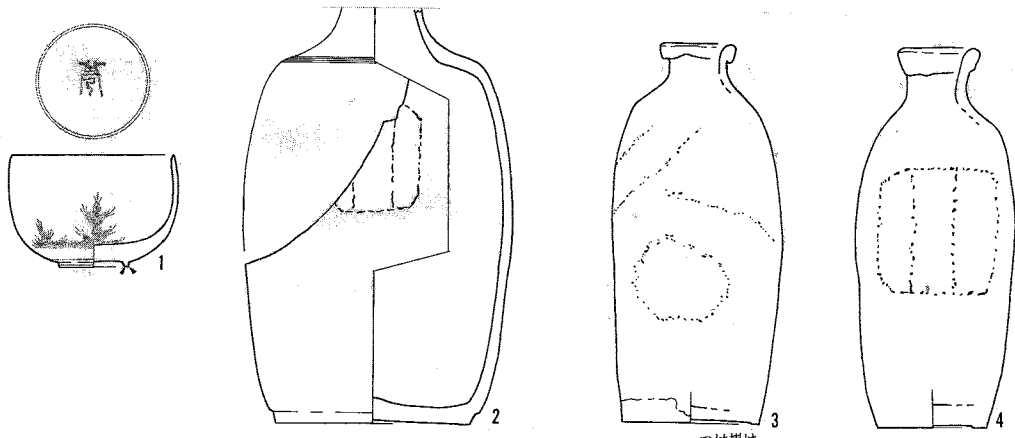
土器(62-64) 62は1類aロに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は剝落が激しいが、弱くミガかれていたようである。体部内面は横にナデられている。底面外側は平滑である。口縁上端には敲打痕が巡り、また内側には煤の付着が見られる。63は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。外面は横の弱いナデで平滑に整えられ、底面と交わる部分は強くケズられて面を構成している。内面は横にナデられ、口縁下は強くナデられ窪んでいる。底面外側には砂粒の痕が見られる。64は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上端は平坦であり、切り欠きが設けられている。外面は丁寧にナデられている。内面は火熱による白色の皮膜に覆われている。ほかに土師質の火鉢類7、風口4個体の小片がある。

焼塩壺(65-67) 65はイ類2に分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。胎土にわずかに雲母を含む。下面には粗い布目が見られる。66はイ類1bに分類される蓋。薄手で均整がとれてい

第IV章 江戸時代の遺物



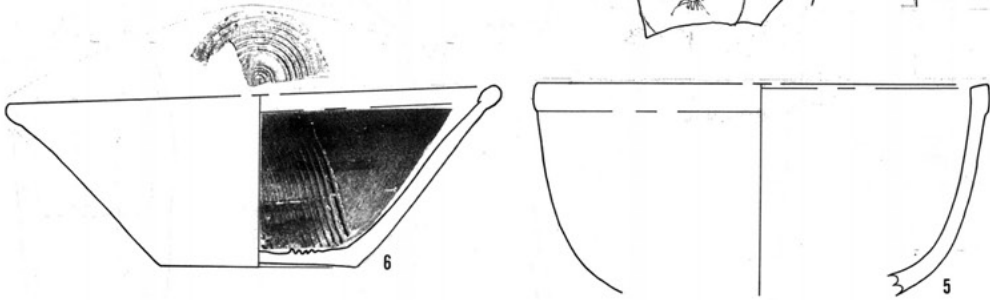
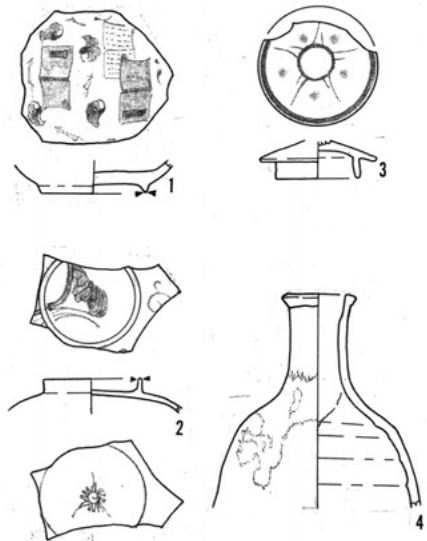
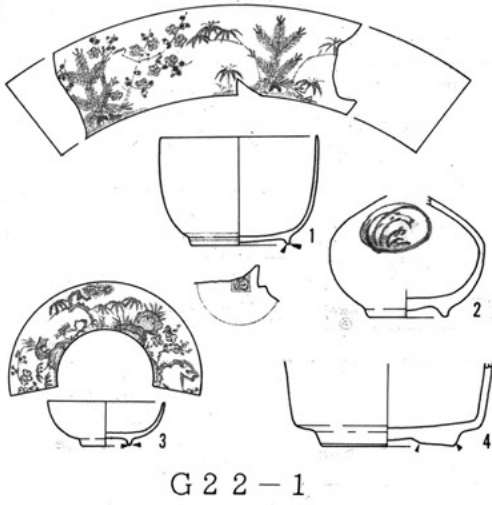
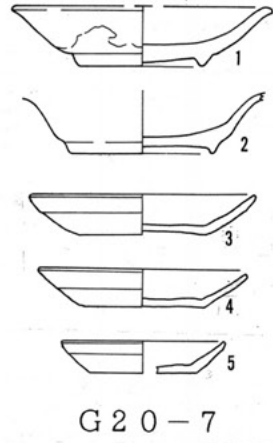
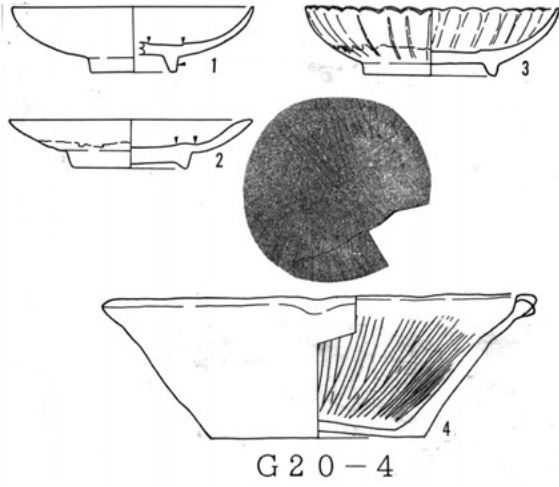
G20-2(4)



G20-3

IV-062図 G20-2(4)、G20-3出土遺物

第一節 陶磁器・土器



IV-063圖 G20-4、G20-7、G22-1、G22-3(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

る。67はII類2 a に分類される身。3類4の刻印をもつ。内面の底部近くは平滑でその上には粗い布目が見られる。ほかに65と同形が2, 67と同形が3 完形で, I類3が1, II類1 b2が3 片出土。

G20-3 (IV-062図) 磁器 1はJB-1-jである。低火度焼成のため表面は白濁している。

徳利(2-4) 2は瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利で、点刻の釘書が認められる。肩部は張って寸胴に近付き、高台の削り込みは浅く雑である。3, 4は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、点刻の釘書が認められる。双方とも口唇部はやや薄めに折り返されて寸胴に近付き、3はつけ掛けで胴部下端は無釉であり、4は雑な拭き取りがなされている。2合半徳利が15個体ほど、5合・1升徳利が50個体ほど出土しており、また志戸呂産徳利もごく僅かながら認められる。

G20-4 (IV-063図) 磁器 1はJB-2-kで、青磁釉が施される。高台裏無釉で、畳付には砂が付着する。

陶器(2-4) 2はTC-2-mである。輪剥部はやや盛り上がり、釉は灰釉であるが長石分が含まれ、不透明な白濁色を呈す。3はTC-2-kである。見込みには径1cm程度のピン痕が認められる。4は小型の播鉢で、TD-29に分類される。口縁部内面にススが付着する。

G20-7 (IV-063図) 陶器(1, 2) 1は灰釉皿で、見込みには窯積めの際の直重ねの溶着痕が輪状に認められる。TC-2-bに分類される。2はTC-2-cである。全体に志野釉独特の貫入が認められる。高台裏は釉を拭き取っている。

カワラケ(3-5) 3点のみの確認。口径は9-12.4cm。灯芯油痕は4のみに認められる。3, 4ともに左回転の糸切りによる。おそらく5も左回転の糸切り底だろう。左回転の中でも4, 5は口径に比べ底径が広く、口縁の形からしても、この一群の中でもっとも古いタイプと考えられる。

G22-1 (IV-063図) 磁器(1-4) 1-3は染付、4は青磁である。1はJB-1-eで銘は二重角枠内渦福である。2はJB-12である。低火度焼成のせいか胎土は完全な磁胎になっておらず、呉須の発色も悪い。3はJB-6-aである。4はJB-9で高台は幅広の蛇ノ目高台になっている。

G22-3 (IV-063, 064図) 磁器(1, 2, 7) 磁器はすべて染付である。1は輪花小皿でJB-3-bに分類される。2はJB-1-m, 広東碗の蓋である。7は大皿でJB-2-eである。高台裏にハリ支え(遺存部で三箇所)と、二重角枠内渦福と思われる銘の一部が認められる。

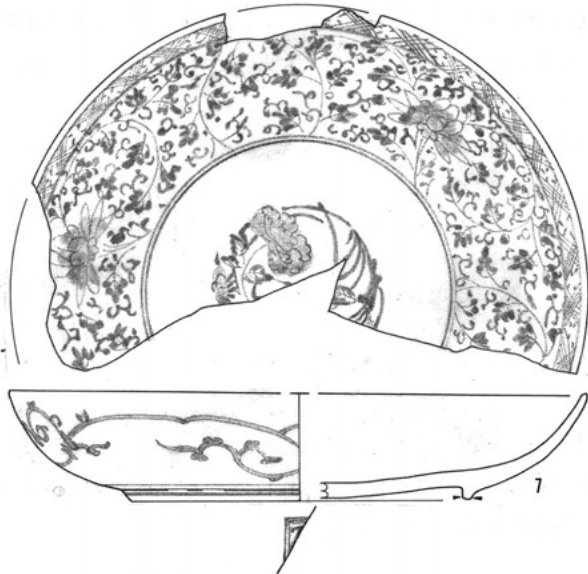
陶器(3, 5, 6) 3はTZ-34-cの蓋である。5は内外面に鉛釉が施される。TC-23である。6はTC-29である。播目は13条で、7単位で一周すると推定される。目はかなり疎に引かれ、口縁部は内側に折り返されている。この形態を藤澤氏は播鉢II類とし、1700年を挟んだ前後に位置付けている。

徳利 4は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施されている。口唇部は鐔状に小さく折り返され撫で肩である。胴部下半を欠き、釘書の有無については確認できない。2合半徳利、5合・1升徳利が20~30個体ほど出土しているほか、瀬戸美濃産鉄釉系徳利も少量認められる。

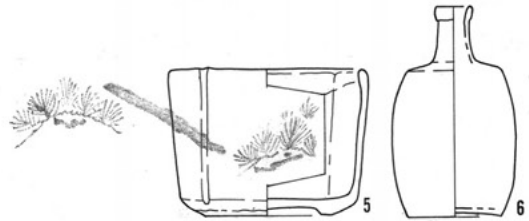
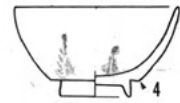
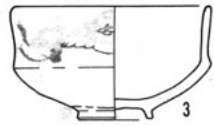
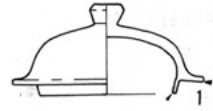
G22-4 (IV-064図) 磁器(1, 2) 1は白磁で、JB-15の蓋である。2は染付で、JB-1-eに分類される。これはV期までには見られない碗形で、おそらくJB-1-fの系譜上に位置するものであろう。

陶器(3-5) 3はTC-1-iである。白土と鉄絵の具で松の文様を描いており、見込みにはピン痕が三箇所認められる。底部は高台裏無釉で高台脇は面取りされている。底部の調整や施釉部位などから京焼を写したものと思われる。4はTC-1-wで器面には鉄絵の具で若杉と思われるものが絵付けされ

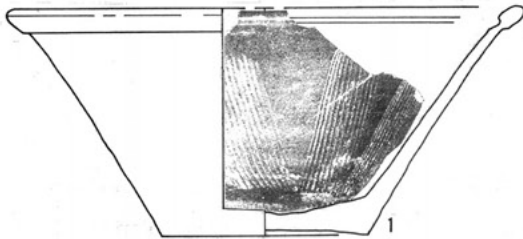
第一節 陶磁器・土器



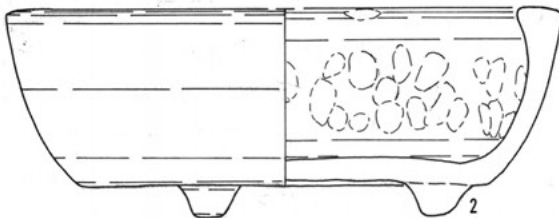
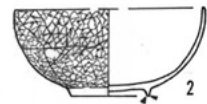
G 2 2 - 3 (2)



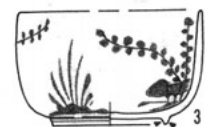
G 2 2 - 4



G 2 3 - 1



G 2 5 - 6



G 2 6 - 1 (1)

IV-064 圖 G22-3(2)、G22-4、G23-1、G25-6、G26-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

ている。これは信楽等で量産されたいわゆる小杉茶碗の写しと思われる。5はTD-9-aで器面には鉄絵で松文を描いている。口唇部には敲打痕が認められ灰落としとしても使用していたと考えられる。

徳利 6は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で、このタイプとしては小型のものである。折り返し口縁で肩部が張り、胴部には二箇所にくぼみがあってベタ底である。2合半徳利、5合・1升徳利、志戸呂産徳利も少量ずつが出土している。

G23-1 (IV-064図) 磁器 1は白磁小坏で、JB-6-cに分類される。

G25-6 (IV-064図) 陶器 1は播鉢でTC-29に属す。胎土は黄白色を呈し全面に鉄釉が施されている。体部の播目は1単位12条で、底部の播目は1単位が8条で渦巻状に施されている。

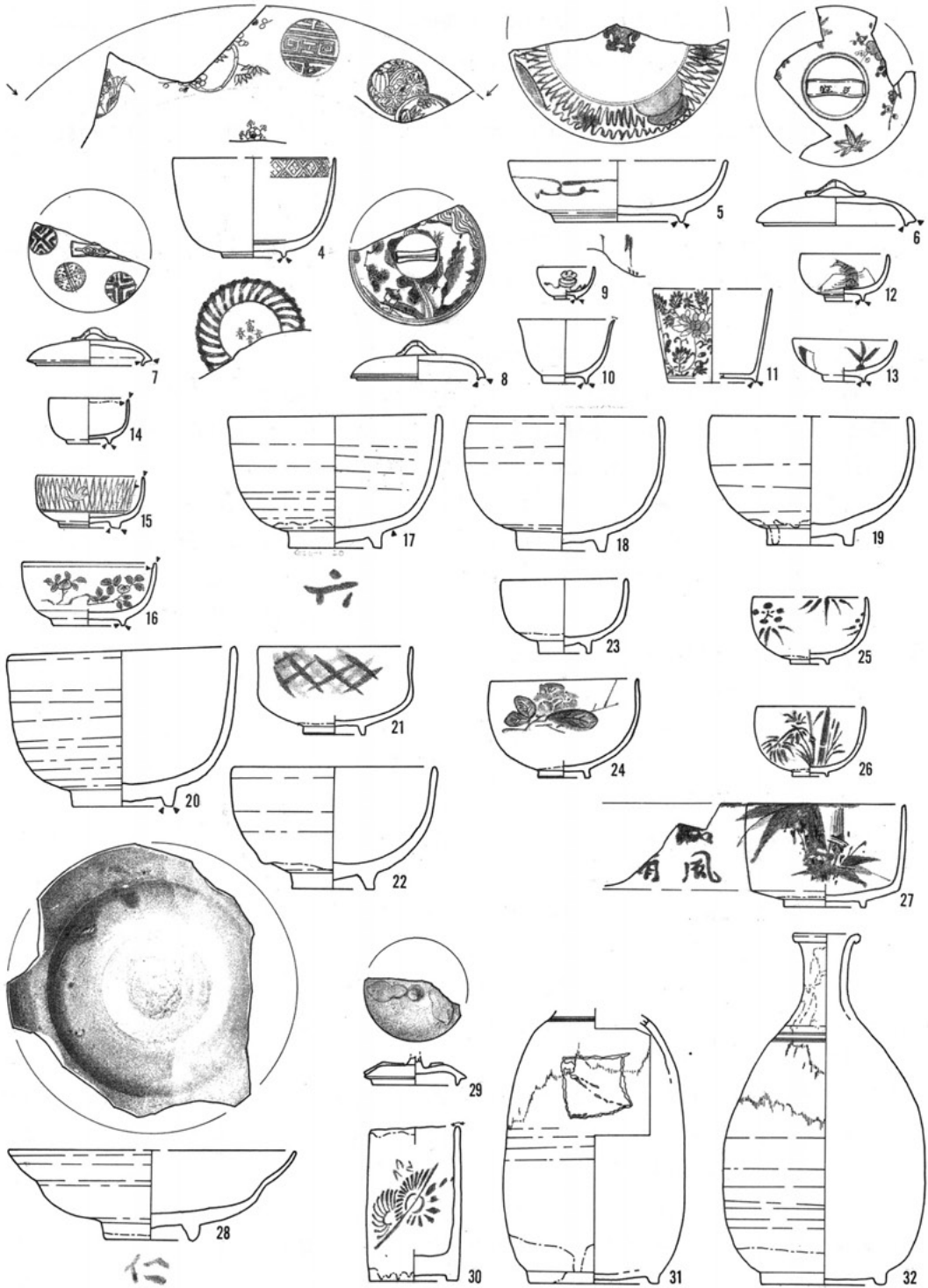
土器 2は1類a口に分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は横にナデられ部分的にミガキが施されている。内面には夥しい指頭痕が見られ、口縁部および底部付近は横にナデが施されている。底面には砂粒の痕が見られる。口唇部には敲打痕が少々見られる。

G26-1 (IV-064~066 図) 本遺構から出土した遺物はV期に位置付けられる。他の同期の遺構と同様に、陶器では瀬戸・美濃、京焼系の碗の出土量が多い。

磁器(1-16) 1-3は染付碗である。1, 2はJB-1-fに属し、1には草花文が、2には氷裂文が描かれている。3はJB-1-eに属す。高台径は大きく腰が張っている。高台裏には一重圏線内に渦福が描かれている。4は色絵碗でJB-1-hに属す。呉須によって見込みには手描きによる五弁花を、口縁内側には四方禪、高台裏には「富貴長春」銘が描かれている。体部には上絵付けによって丸文、竹、梅などが描かれている。5は皿でJB-2-eに属す。見込み中央にはコンニャク判による五弁花、高台裏には「大明年製」の崩し銘が描かれている。6-8は蓋でJB-14-cに属す。体部はドーム状を呈し、身の受け部を有する。中央部には橋状のつまみを有するが、6には唐草が陰刻され、7にはりボン状の陽刻が施され、8は一条の微隆起線を伴っている。9は小物でJB-35に属す。丸碗のミニチュアで体部には宝寿文が描かれている。10, 12, 13は小坏である。10はJB-6-bに属す。白磁の小坏で、口縁が外反する。口唇には口銹が施されている。12, 13はJB-6-aに属し、12の高台裏には一重圏線が描かれている。11は猪口でJB-7-bに属す。14-16は蓋物でJB-13-aに属す。14は白磁である。15は色絵である。高台は蛇ノ目高台である。口縁内側の無釉部分は幅6mmと広い。文様は赤絵の具によって斜格子に鳥が描かれている。16は染付である。

陶器(17-30) 17-20, 22は瀬戸・美濃系の灰釉碗でTC-1-cに属す。17-19, 22は底部無釉であるが、20は全面施釉を施し、畳付の釉を拭き取っている。17の高台裏には墨書で「六」が書かれている。21はTC-1-iに属す。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台脇は面取りされ、高台は無釉である。体部には鉄絵と白泥によって斜格子が描かれている。23はTC-6に属す小坏である。体部は丸味をもって立ち上がる。灰釉が施されているが底部は無釉である。24-27は京焼系の碗である。24-26はTD-1-bに属す。胎土は黄白色を呈し、体部は丸味をもって立ち上がり高台脇は面取りされている。24は呉須と鉄絵による下絵付けで折枝に花が描かれ、25, 26は上絵付けによってそれぞれ竹と梅、竹が描かれているが絵の具はほとんど剥げ落ち、色調を知ることはできない。27はTD-1-jに属す。胎土は黄白色を呈し緻密である。底部は無釉である。施釉部分では素地の上に白泥を薄く施しその上に鉄で文様を描いている。口唇には口銹が施されている。28はTB-5-dに属す。胎土は

第一節 陶磁器・土器



IV-065圖 G26-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

黄白色を呈し若干きめが粗い。高台脇は面取りされている。体部は丸味をもって立ち上がるが中位において一段稜を有す。釉は鉄釉と灰釉の掛け分けで見込みほぼ中央で分けられている。また見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。底部は無釉である。高台裏には墨書で「仁」と書かれている。29は産地不明の蓋のみかんを模している。胎土は黄白色で、表面には黄釉が施されている。へたでつまみを表わし周辺に二枚の葉を貼り付けている。全体に細かい刺突痕がみられる。30は灰落してTC-24-bに属す。灰釉が施されているが底部は無釉である。体部には鉄絵による摺絵で花文が一対描かれ、口唇部には著しい敲打痕がみられる。

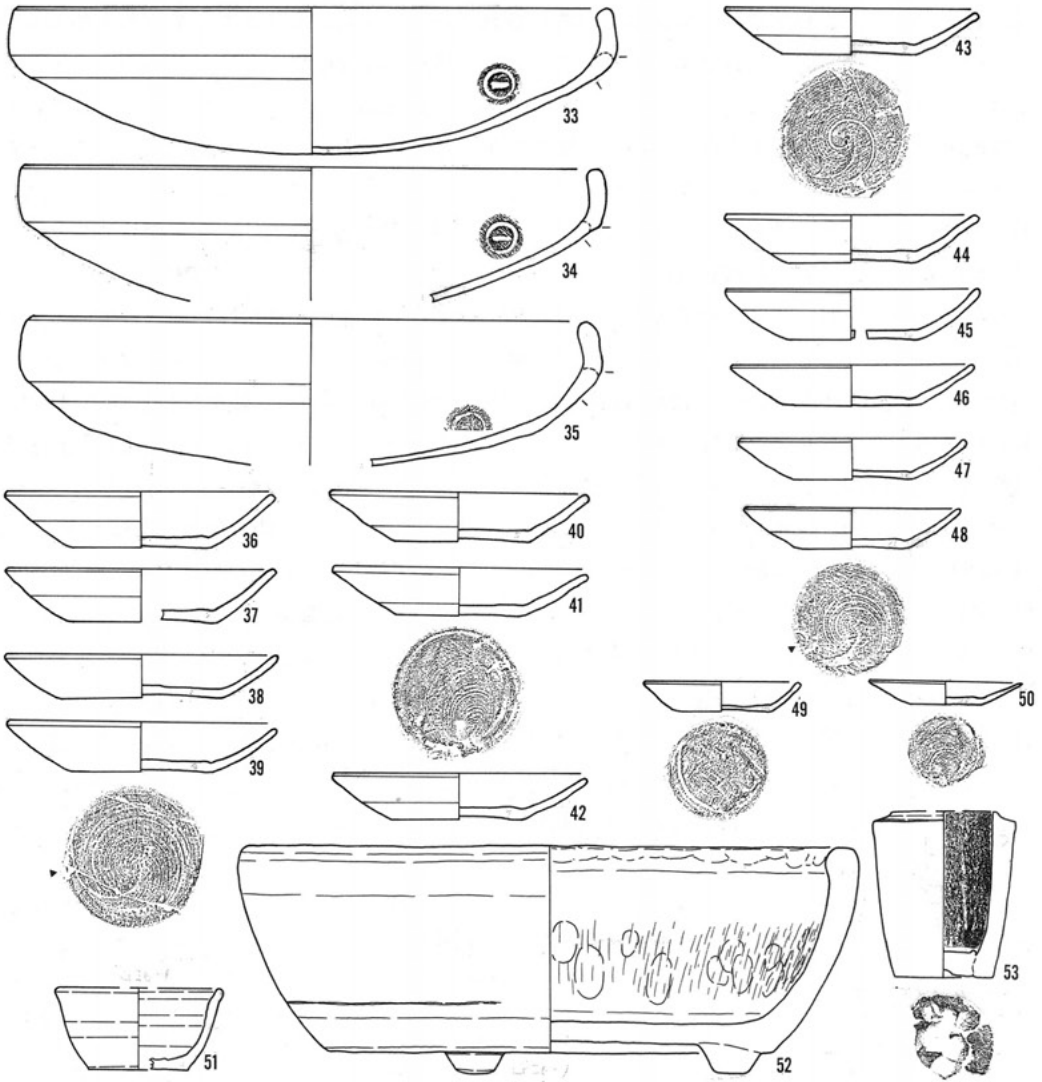
徳利(31, 32) 31, 32は瀬戸美濃産の5合徳利でいずれも鉛釉に化粧掛けが施されている。31には胴部の表裏に異なる線刻の釘書が見られる。最大径は胴部中程にあり高台は深く削り込まれやや内傾する。32には釘書はない。口唇部は鐔状に小さく丁寧に折り返され、頸部は長く撫で肩である。最大径は胴下部にあり高台はほぼ垂直に深くしっかりと削り込まれている。5合・1升徳利と志戸呂産徳利が15個体ほど出土するほか、2合半徳利、船徳利もごく僅かながら認められる。

カワラケ(36-50) 図示しているものの口径8.2-14.4cmであるが、四寸前後のものが多い。36, 37は同一形態であり、38のみ底径が大きく胎土も36, 37と異なる。40, 41および43, 44は同一形態。他に41, 44と類似した完形品が5点ある。45には焼成後の底部穿孔がある。46-48はほぼ同形態である。49, 50は口径はほぼ同じであるが、底径が異なる。38と同様49も古い形態と思われる。灯芯油痕は36, 39, 40, 43, 44, 48が口唇を全周、37, 41, 42, 49には疎らに付着している。42, 49は一箇所のみ付着である。それ以外には付着しない。不明の37以外全て左回転糸切り底であるが、ここにもあたかも二度切り離しを行ったようなカワラケが存在する。ただし39, 48のように確実に判断できる例は少なく、他の遺物でも確認されていない。左回転糸切り底の変異と考えている。カワラケは57点の出土で、出土比率の32%。そのうち底径のわかるものは34点、図でも理解できるように底径5.6-7.5cmのものが多いようである。これから推定される口径は三寸七分-四寸七分である。完形もしくはそれに近いカワラケが多く、また形態的にも揃っており18世紀前半のカワラケを考える上で好資料となる。

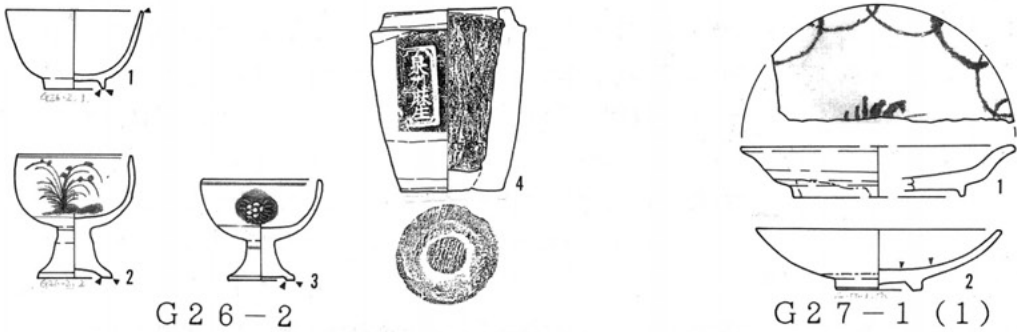
焙烙(33-35) 口径は30-31.8cm。33は底部まで残っており、高さ7.9cm。3点とも図にあるように同じ刻印、丸に一の字が認められ、ほぼ同一形態の焙烙である。刻印は径1.7cmであり、F34-11のそれは1.3cmなのでやや大型になる。ただし35は釘書きの可能性もある。F33-3の一群に比べ口縁はさらに短くなり、F33-3で痕跡的に認められた口縁のくびれもここではみられない。35のように内湾する例もある。もっとも大きな違いはケズリが屈曲部にあるのではなく、屈曲部直下の底面側に施す点である。F33-3の105-108に似るが、やや後出的な印象も受ける。図示したものを含め底部片は25点の出土。形態のわかる口縁片は11点、そのうち33-35に類似するもの6点、F33-3の104に類似するもの2点、流れ込みと考えられる新しい時期のもの3点の構成となる。

土器(51, 52) 51は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。橙色を帯びた褐色を呈する。底面に回転糸切り痕が見られる。52は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は横にナデられ平滑である。底部付近は横にケズられ、またこれに伴うと思われる条線が1条見られる。体部内面には指頭痕が見られ、口縁部および底部付近は横にナデが施されている。底

第一節 陶磁器・土器



G 2 6 - 1 (3)



G 2 6 - 2

G 2 7 - 1 (1)

IV-066圖 G26-1(3)、G26-2、G27-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

面にはチヂレ目が見られる。口唇部内側を中心には敲打痕が連続する。内面には、火箸によると思われる縦の擦痕が多く見られる。ほかに20個体ほどの土師質の火鉢類の小片がある。

焼塩壺 53はII類2 b に分類される身。刻印の僅かな一部を含む破片である。2類5の刻印をもつと思われる。内面の底部近くは平滑で、その上には粗い布目が見られる。

G26-2 (IV-066図) 磁器(1-3) 1は小坏でJB-6-aに属す。外面には鉄釉が、見込みと高台裏には透明釉が施されている。見込みには呉須によって二重圈線が描かれている。2, 3は仏飯器でJB-8に属す。高台裏も施釉されている。3はコンニャク判によって花文が描かれている。

焼塩壺 4はII類1 b2に分類される身。3類1 b の刻印をもつ。内面には粗い布目が見られる。底面にはムシロ状の圧痕が見られる。ほかに同形の小片1がある。

G27-1 (IV-066, 067図) 陶器(1, 2) 1は鉄絵の皿でTC-2-jに属す。高台径は広く、体部は口縁で外反する。長石釉が施されているが底部は無釉である。見込みには鉄絵によって笹文?が描かれている。2はTB-2-aに属す。釉は銅緑釉が施され、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。高台脇は面取りされている。

土器 3は軟質瓦質の輪積み成形の製品。上部、底部ともに欠損している。体部下半に、錨状の張り出しが設けられ、その上には小孔がみられる。体部外面は横にケズられ、体部内面は錨の付着部のやや上に指頭痕が連続し、その上をナデられている。上部のすばまった部分には、ちょうどギヤザーをよせたような部分がある。通気孔のような小孔、襷のような成形痕、内外面の調整などから、瓦灯の蓋(瓦灯頭部)の一種であると思われる。

G27-2 (IV-067図) 磁器(1-3) 1は鉢でJB-5に属す。2は皿でJB-2-aに属す。胎土は灰白色を呈す。高台径は小さく若干内傾する。畳付内側には砂が溶着している。3は壺でJB-15に属す。畳付は平坦である。体部には交点に花状の文様を伴った一重網目文が描かれている。

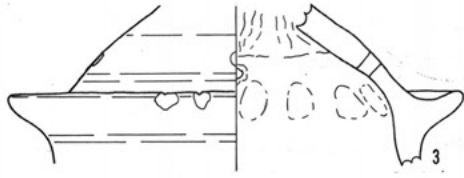
陶器(4-6) 4, 5は碗である。4はTC-1に属す。口縁は隅丸方形を呈すると思われる。体部には鉄絵による文様が描かれている。底部は無釉である。5はTB-1-bに属す。胎土は黄白色を呈す。高台径は大きく体部は丸味をもって立ち上がるが、やや腰が張っている。体部には鉄絵によって山水が描かれ、高台裏には図のような刻印が施されている。6は皿でTC-2-bに属す。灰釉が施され、底部は無釉である。直積みのために見込みには畳付の付着痕が残り、また畳付には釉が付着したり欠けている部分がある。

徳利 7は志戸呂産の徳利で、底部の外周にはへら削りが施されていない。ほかに志戸呂産徳利、それに船徳利がごく僅かに見られるのみである。

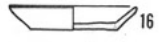
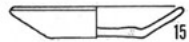
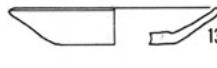
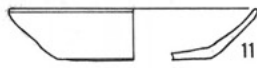
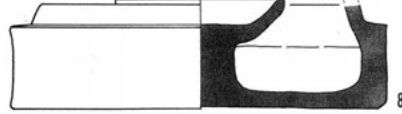
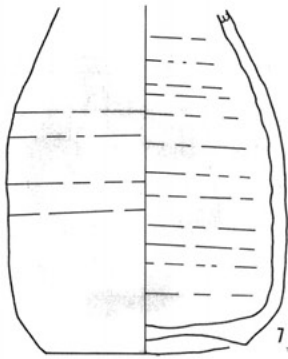
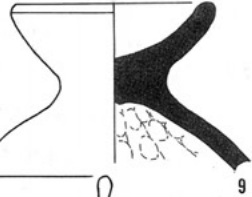
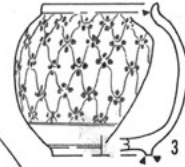
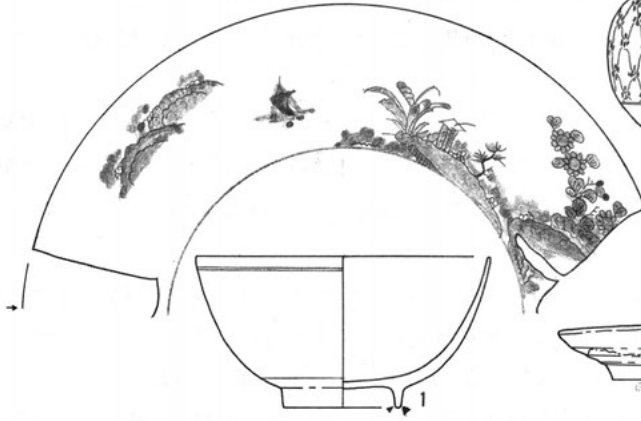
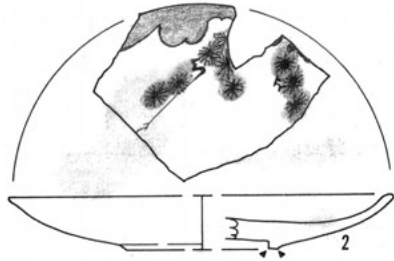
灯火具(8, 9) 灯火具は2点の確認。8は瓦質の瓦燈の受け部で、上に伸びる蓋受け部分を欠く。9も瓦質の瓦燈頭部であり、頂部油皿のみの出土。なお裏面に成形の際の指頭圧痕が顕著に残る。他に瓦燈頭部の大型破片がある。

カワラケ(11-17) 図示したものの口径は6.8-13.2cm。ほぼ二寸強から四寸強までのものが出土している。灯芯油痕は11-13, 17は口唇を全周し、15は疎らに認められる。14, 16にはない。14-17までは左回転糸切り底、11-13は不明確だがおそらくこれらも左回転糸切り底であろう。口径に比べ底径の大きいものが多く、左回転糸切りの中でも古い一群と考えられる。破片を含め、47点の確認

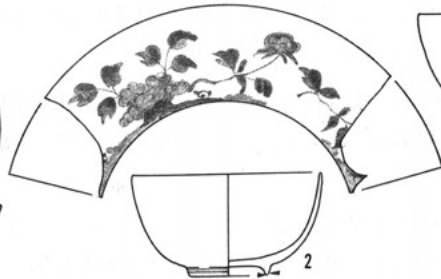
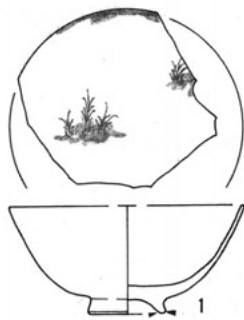
第一節 陶磁器・土器



G27-1 (2)



G27-2



G30-2 (1)

IV-067圖 G27-1(2)、G27-2、G30-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

である。出土比率の47%。うち底径のわかるもの23点、3.1-5cmのもの5点、5.1-7cmのもの11点、7.1-8cmのもの7点の出土である。これから口径を推定すると、口径二寸六分―四寸三分のカワラケがほぼ等質に分布するようである。他に明らかに口径六寸以上とわかる口縁片もある。また右回転のそれとわかる口縁片も出土している。

焙烙 10は十分一以下の口縁片を図上復元したもの。推定口径29cm、これより小さくなる可能性もある。口縁にくびれをもち、ケズリが口縁側に施される。底部片は10点の出土。確認した口縁片3点はすべて10と同形態である。あるいは同一個体かもしれない。

G30-2 (IV-067, 068図) 磁器(1-6) 1-3, 6は染付である。1はJB-5である。高台は「八」の字状に開く。2はJB-1-eで銘は「大明年製」である。3はJB-1-dである。これはF34-11の遺物に多く見られる碗形である。4, 5は白磁である。4はあわびを模した型作りの水滴で、JB-19に分類される。5はJB-6-bである。6はJB-13-aで高台は幅広の蛇ノ目高台である。

陶器 7は京焼風の平碗で、TB-1-cに分類される。高台裏は無釉で、高台脇面取りされている。刻印は認められるが、浅く不明瞭である。「森」か？

徳利 8は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利でベタ刻の釘書が認められる。際立って小振であり、実質的な容量は2合半に満たないのではないかと考えられる。口唇部は鏝状に張り出して外縁部が軽く撫でられて整形され最大径は胴部中程にある。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られ高台の削り込みも深い。2合半徳利、5合・1升徳利、志戸呂産徳利、備前産徳利が少量ずつ出土している。

カワラケ(10-12) 10-12の口径は8.6-14.2cm。灯芯油痕は12にわずかに付着。他はない。10, 11は左回転糸切り底、はっきりしないが12もおそらく左回転糸切り底であろう。全部で14点の出土である。口径三寸八分前後のものが多い。

焙烙 9は三分一の残存で、口径30.9cm。口縁にややくびれをもつがほぼ直立し、ケズリは屈曲部に施される。F33-3の105に類似する。底部片は6点の出土。ただし9と同一個体と思われる破片も含まれる。

G32-1 (IV-068図) 本遺構中からは比較的まとまった量の遺物が出土している。遺物はいずれも二次焼成を受けており、細片で検出され、火事の後の一括廃棄が想定される。年代的には本地点のII期に相当し、L32-1との類似点が多い。天和二年の火事の可能性が強い。

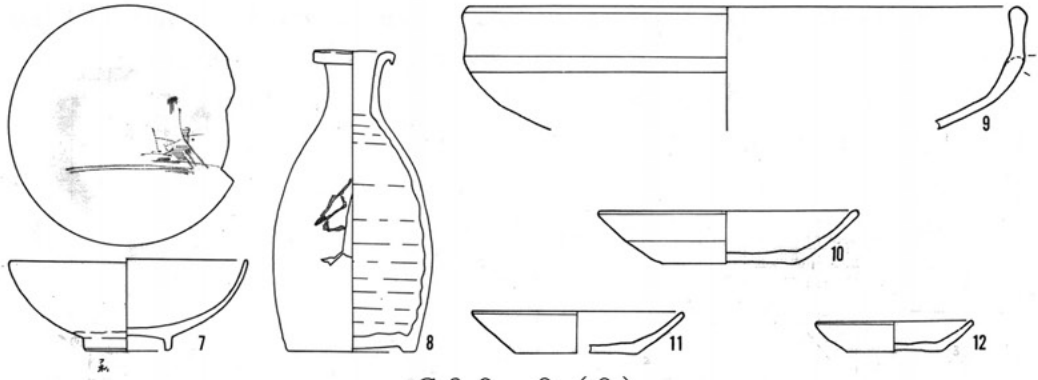
磁器(1-4, 8) 1-3は染付、4は白磁、8は青磁である。1はJB-1-cである。2, 3はJB-2-cでともにハリ支えが一箇所認められている。3は数個体分出土している。4はJB-6-bである。8はJB-8である。焼きはやや甘い。

陶器(5-7, 9) 5は鉄絵で山水を描いた京焼風の碗で、TB-1-bに分類される。胎土は緻密で丁寧に作られている。6は鉄絵の香炉で、被熱のため著しく器面が荒れている。TC-9-bに分類される。7はTC-6で灰釉が施されている。9はTC-5で口縁部は波状に装飾されている。畳付を除いた全面に灰釉が施される。

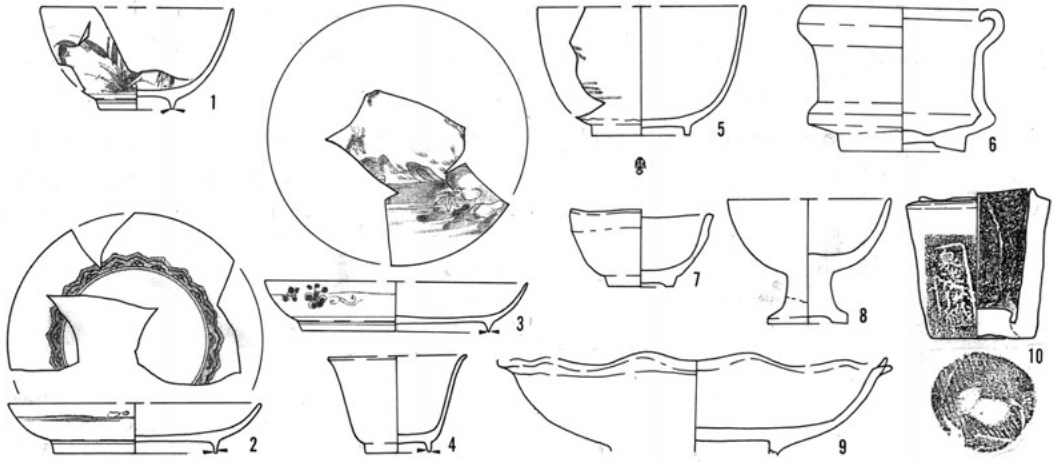
焼塩壺 10はII類2bに分類される身。2類5の刻印をもつ。内面の底部近くは平滑で、その上には粗い布目が見られる。底面にはスグレ痕が見られる。

G33-5 (IV-200図) カワラケ(1-6) 図示したものの口径は5.6-13.8cm。すべて左回転糸切

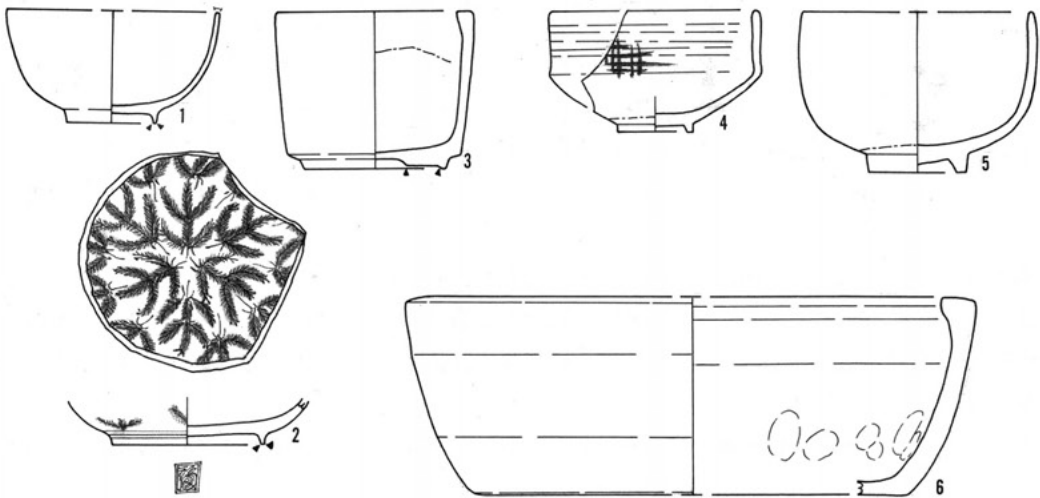
第一節 陶磁器・土器



G30-2(2)



G32-1



G33-7

IV-068圖 G30-2(2)、G32-1、G33-7出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

り底である。灯芯油痕は 1 のみに付着する。粘土が精良で器面調整も丁寧に施され、やや後出的な印象も受けるが、ほぼ E22-1 や Y34-4 の一群と並行すると考えている。図示したものを含め、29 点の出土である。

G33-7 (IV-068図) 磁器(1-3) 1は白磁の碗で JB-1-e に属す。口唇部には口銹が施されている。2は皿で JB-2-e に属す。見込み、外面ともに小杉文が描かれている。高台裏には二重角枠内に渦福が描かれている。3は青磁の香炉で JB-9 に属す。蛇ノ目凹形高台を呈す。蛇ノ目部は無釉で鉄が塗られている。

陶器(4, 5) 4はせんじで TC-1-1 に属す。高台脇は面取りされている。見込みには三箇所のピン痕が認められる。灰釉が施され底部は無釉である。体部には鉄絵による格子目文様が描かれている。5は灰釉碗で TC-1-c に属す。底部は無釉である。

土器 6 は 1 類 a 口に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面には横のケズリが見られ、また口縁部付近は横にナデられ平滑である。体部内面には指頭痕が見られ、口縁部および底部付近は横にナデが施されている。底面にはチヂレ目が見られる。ほかに土師質の火鉢類 3 個体分、I・II類の焼塩壺の小片各 1 がある。

G33-10 (IV-069図) 磁器(1, 2) 1は中国清代の色絵碗で JA-1 に属す。胎土は白色で硬質である。底部は蛇ノ目高台を呈し、無釉である。体部には梅と竹が描かれているが梅花と竹に色絵が用いられている。2は白磁の猪口で JB-7-b に属す。高台は直立し口縁でやや外反する。

陶器 3 は京焼系の平碗で TD-1-c に属す。胎土は黄白色で、釉調は焼成のためか乳濁色である。底部は無釉である。高台裏には渦巻状の整形痕がみられる。見込みには上絵によって蔓文が描かれているが、絵の具は剥げ落ち色調は不明である。高台裏には図のような刻印が押されている。

カワラケ(4-7) 図示したものの口径は 12.3-14.6cm。4点とも灯芯油痕は付着しない。4は左回転糸切り底、不明であるが他もおそらく左回転糸切りであろう。7は上製、口径 14cm。底面はヘラケズリ調整による。カワラケは全部で 24 点の出土。小破片が多く不明確であるが、口径四寸前後のものが多い。

焼塩壺 8 は I 類 3 に分類される身。2 類 2 a の刻印をもつ。体部外面には縦のケズリが見られる。

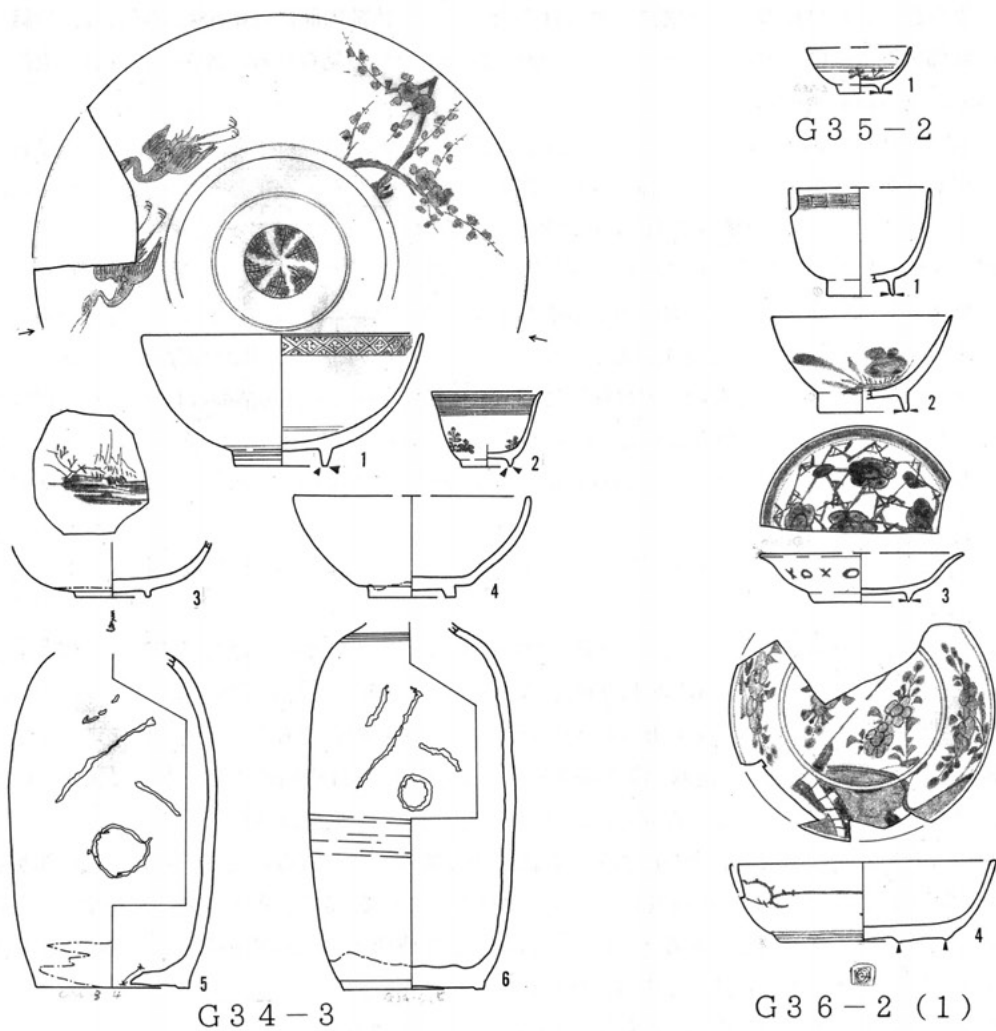
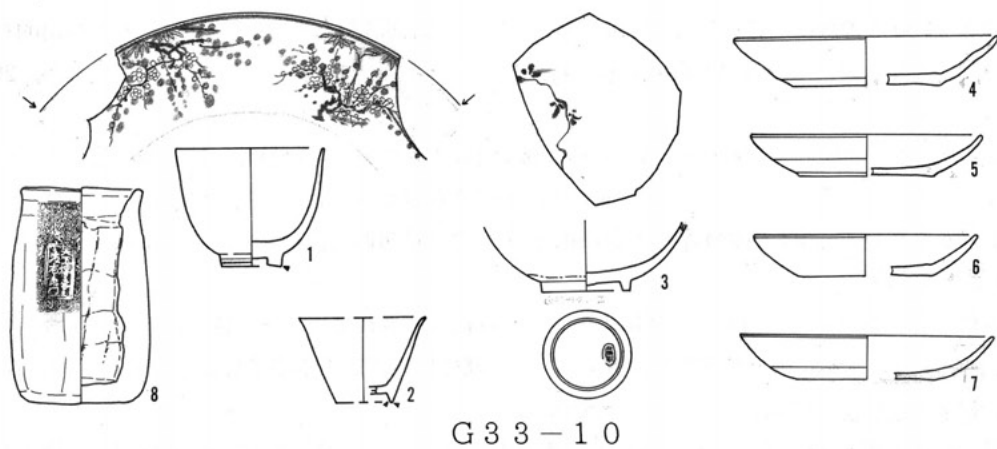
G34-3 (IV-069図) 磁器(1, 2) 1は鉢で JB-5 に属す。高台はやや内傾し、体部は丸味をもって立ち上がる。2は小坏で JB-6-b に属す。口縁はやや外反する。E34-2 出土遺物と遺構間で接合する。

陶器(3, 4) 3は平碗で TB-1-c に属す。胎土は黄白色を呈し緻密である。見込みには鉄絵によって山水が描かれ、高台裏には「清水」銘の刻印が押されている。4は緑釉碗で TC-1-x に属す。体部は高台付根よりやや張り出してから立ち上がり口縁で内湾する。底部は無釉である。

徳利(5, 6) 5, 6は瀬戸美濃産の灰釉系 5 合徳利で線刻の釘書が認められる。双方とも肩部が張りをはじめて寸胴に近付き、高台の削り込みも浅く雑になっている。5では底部中央に人為的な穿孔が認められ、再利用された可能性が考えられる。5合・1升徳利と志戸呂産徳利が 20~30 個体ほど出土している一方、2合半徳利はごく少量が見られるに過ぎない。

G35-2 (IV-069図) 磁器 1 は染付で、JB-6-a に分類される。

第一節 陶磁器・土器



IV-069 图 G33-10、G34-3、G35-2、G36-2(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

G36-2 (IV-069, 070図) 磁器(1-6) 磁器はすべて染付である。1はJC-1-eである。文様は毛彫りした後、呉須を施している。毛彫りは瀬戸・美濃地方で磁器生産開始とともに文様の絵付け法の一つとして流行した手法であると思われ、本地点に限らず消費遺跡から多量に出土している。2はJB-1-mで胎土、呉須の発色は悪い。3はJC-3-bである。文様は青の濃い地呉須を使っている。4はJB-2-jである。見込み文様は全体を利用して描かれており、高台裏には簡略した渦福が施文される。蛇ノ目凹形高台で外周部の高さがほとんどないタイプの本類は、高いタイプのJB-2-iの前段階に出現すると思われ、本地点ではV期以降見られる。5, 6はJB-14-aに分類される。

陶器(7-9) 7はTC-1-cで高台裏、体部下端は無釉である。8はTC-1-uである。藤澤氏の腰鍔碗の分類では第6型式に相当しよう(1987)。9はTZ-34-aの蓋である。

焼塩壺 10はIII類cに分類される身。刻印をもたない。比較的小型で、口唇部の鏝もきわめて小さい。ほかにロクロ成形の身2, 火鉢類の小片5 個体分がある。

G36-3 (IV-070図) カワラケ 遺物はカワラケ 1点のみである。1は口径16cmで、ほぼ完形。灯芯油痕は口唇を全周し器面内外に及ぶ。底部の切り離しは拓本で示したように「静止糸切り」による。本地点には他にこのような例はない。器壁が厚く口縁が直線的である点、また底面内側の断面形など17世紀の右回転糸切りのカワラケに似るが、17世紀代のものかどうかはわからない。

G36-6 (IV-070図) 陶器 1はTC-27-aで鉄釉が施されている。二次焼成を受けている。

H20-1 (IV-070図) 磁器(1, 2) 磁器は2点とも染付である。1はJB-1-mである。胎土、呉須の発色は悪い。2は輪花皿でJB-2-eに分類される。見込み外周の雲形文様は墨弾きの技法が用いられている。ハリ支えが遺存部で三箇所認められる。

陶器 3はTD-1-gである。高台脇は面取りされている。

土器 4はI類aロに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。底の大部分を欠くが、コビキ痕がわずかに見られる。外面には体部下半を中心にケズリが見られる。口縁上端内外面には敲打痕が少々見られる。内面には漆喰と思われる白色の物質がわずかに付着している。

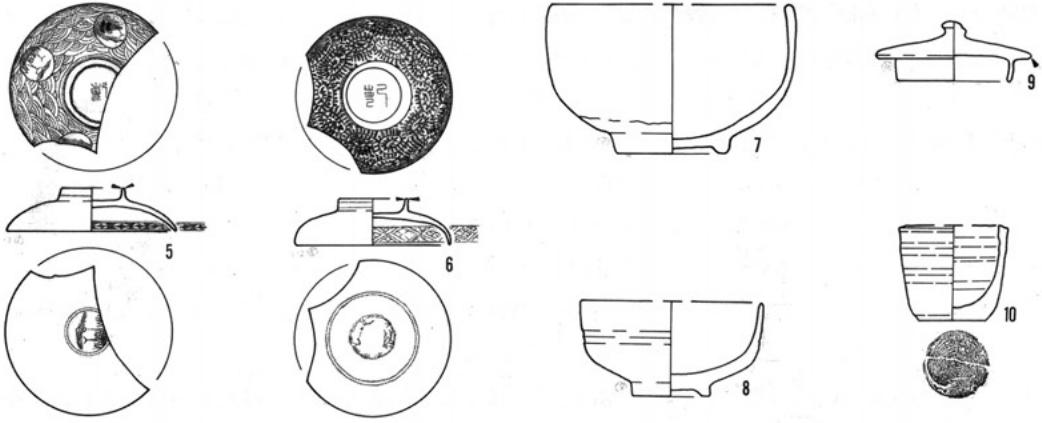
H20-4 (IV-071図) 陶器(1, 2) 1はTC-2-nである。口縁は小さい波状に作られ、ヒグ状を呈している。全面に志野釉特有の大きな貫入が認められる。2はTC-2-jである。高台裏、見込みにピン痕が三箇所認められる。

カワラケ(3, 4) 3は手捏ねによるもので、灯芯油痕は器面内外に及ぶ。指頭による押えが口縁下半に認められ、他は丁寧なナデによって調整される。口唇は内面の沈線によってつまみ上げられた形状となり、底部内面にも沈線が巡る。器壁は全体的に厚い。4はおそらく左回転の糸切り底で、灯芯油痕はない。3に伴うか明らかでない。他に4点の出土。いずれも小片であり、左右それぞれの回転糸切りによる底部片が1点ずつ出土。

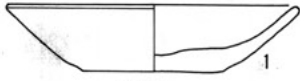
H20-5 (IV-071図) カワラケ 遺物はカワラケ1点のみ。1の口径12.6cm。ほぼ完形。灯芯油痕は二箇所のに認められる。右回転糸切り底。器壁は底面との境でもっとも厚くなる。また口径に比べ底径が大きいのも特徴となる。17世紀代のカワラケである。

H20-7・9 (IV-071図) 陶器(1-6) 1はTC-1-aである。通常为天目釉ではなく、濃い柿釉に灰釉が流し掛けられている。2はTC-14-dで器面に柿釉が施されている。3はTC-14-eで鉄釉が掛

第一節 陶磁器・土器



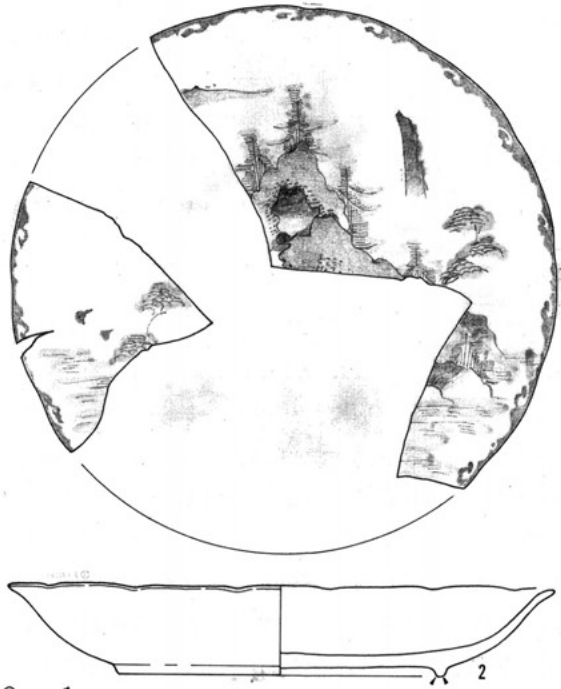
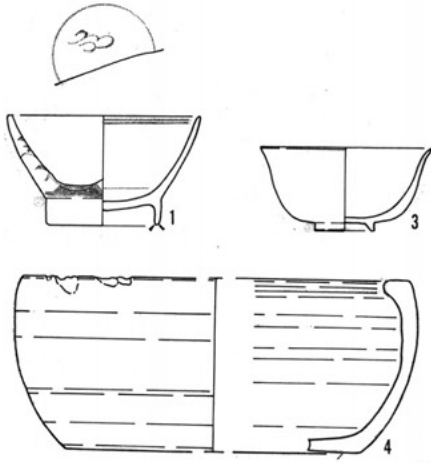
G 3 6 - 2 (2)



G 3 6 - 3



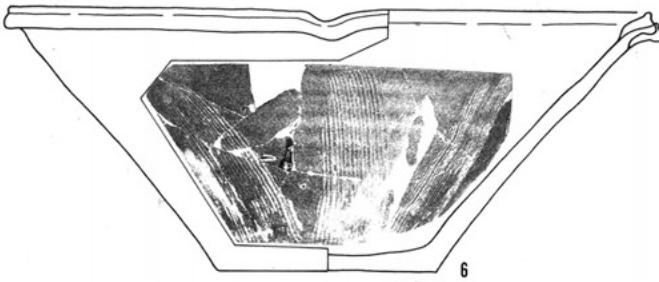
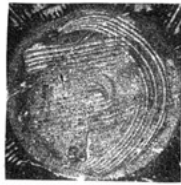
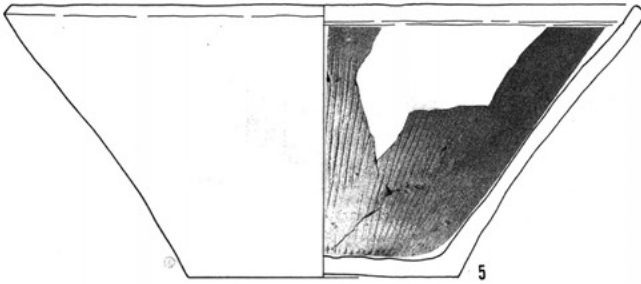
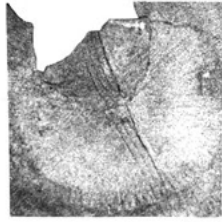
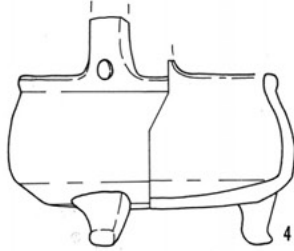
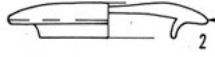
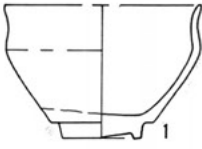
G 3 6 - 6



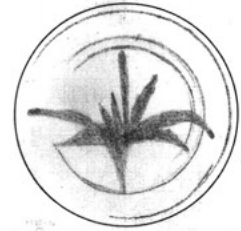
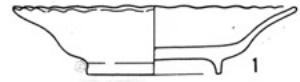
H 2 0 - 1

IV - 070 图 G36-2(2)、G36-3、G36-6、H20-1出土遺物

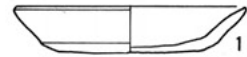
第IV章 江戸時代の遺物



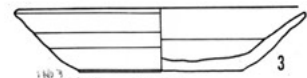
H20-7・9



H20-4



H20-5



H20-11

IV-071図 H20-4、H20-5、H20-7・9、H20-11出土遺物

第一節 陶磁器・土器

けられている。器面にはピンの溶着痕が認められる。4は灰釉の手鉢で TC-5-h に分類される。見込みにはピン痕が三箇所認められる。器面には浅くて不明瞭であるが、棒状工具で蓮弁状の連続文が刻まれている。5は TD-29 で播目は 6条である。焼きはやや甘く、橙褐色を呈している。6は TC-29 である。播目は16条で、やや間隔を有し、7単位で一周している。

H20-11 (IV-071図) カワラケ(1-3) 1, 2は手捏ね。ほぼ同形であり口径11.6cm。口縁中央に指頭による押えがあり、この結果口縁は「く」の字状となる。H20-4の 3で認められたような沈線もなく器壁も薄い。器面は薄い橙色。「池」出土のカワラケに似る。二つとも灯芯油痕が全周する。3は右回転糸切りによるカワラケ。ほぼ完形である。底径が大きく、また口縁の形態など H20-4 の 4 と似る。出土遺物はカワラケ 6点のみ。3以外すべて手捏ねである。図示しなかったものは1, 2 よりやや大型である。なお底部片はなかったが右回転糸切りによる口縁片も出土している。出土状況からこれらのカワラケは一括して投棄されたと考えている。この組み合わせも「池」出土のカワラケと似る。

H21-1 (IV-072~077 図) 本遺構から検出された肥前系磁器は碗では端反碗、皿では蛇ノ目凹形高台をもつものが主体を占めている。瀬戸・美濃系の磁器も顕著にみられる。また焼き継ぎ痕を有するものの出土も多い。陶器では行平鍋、土瓶など地方窯で焼成された製品も現れ、瀬戸・美濃系では、勇右衛門窯等でみられる製品が主体を占める。この傾向は H21-2, 3 においても同様である。本地点ではⅧ期に属する。

磁器(1-52) 1-14は碗である。1, 3は JB-1-e に属す。1は蓋と身のセットで検出された。釉は焼成不良のため部分的に白くくすんでいる。3は高台裏に一重圏線内に図のような銘をもつ。1, 3ともに見込みに丸文状の松竹梅が描かれている。2は JB-1-q に属す。高台は八の字状に開き体部は腰が張る。見込みには二重圏線内に丸文状の松竹梅が描かれている。4は JB-1-h に属す。高台は低く体部は腰が張っている。見込みには寿字文が描かれている。5は広東碗で JB-1-m に属す。高台はやや外傾し、畳付には砂が付着し、釉は焼成不良のためか白くくすんでいる。見込みには一重圏線内に山水が描かれている。6, 8, 10は瀬戸・美濃系の端反碗で JC-1-d に属す。胎土はガラス質で光沢がある。釉は厚みがあり全体に微細気泡を含有する。呉須はにじんでいる。6は外面、見込みに松葉を描く。8は内外面ともに梅花が手描きと墨弾きにより交互に描かれている。10は口縁内側に墨弾きを伴う帯文を描き見込みには蝙蝠が描かれている。7, 9, 11, 12は肥前系の端反碗で JB-1-n に属す。7は H21-2 出土遺物と遺構間接合をする。11は口縁内側に墨弾きによる文様を伴った帯文がみられる。見込みには一重圏線内に蝙蝠を外面には蝙蝠と草花を描いている。12は全体的に薄手の作りである。高台裏には焼き継ぎ屋の印が白玉で描かれている。13は瀬戸・美濃系の湯碗で JC-1-e に属す。染付により口縁に雷文が描かれ、体部には上絵によって桜花を散らしている。14は JB-1-p である。

15, 21, 23, 24 は蛇ノ目凹形高台の皿で JB-2-i に属す。蛇ノ目部分は無釉である。15は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇には口錆が施されている。21は胎土は灰白色を呈す。体部は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇に口錆を施す。高台裏には墨書がみられる。H21-2出土遺物と遺構間接合をする資料である。23, 24は型打ち成形によって8 単位の輪花を形成する。23の高台裏には「成化年製」銘が、24の高台裏には「富貴長春」銘が描かれている。19は皿で JB-2-e に属す。胎

第IV章 江戸時代の遺物



IV-072図 H21-1出土遺物(1)

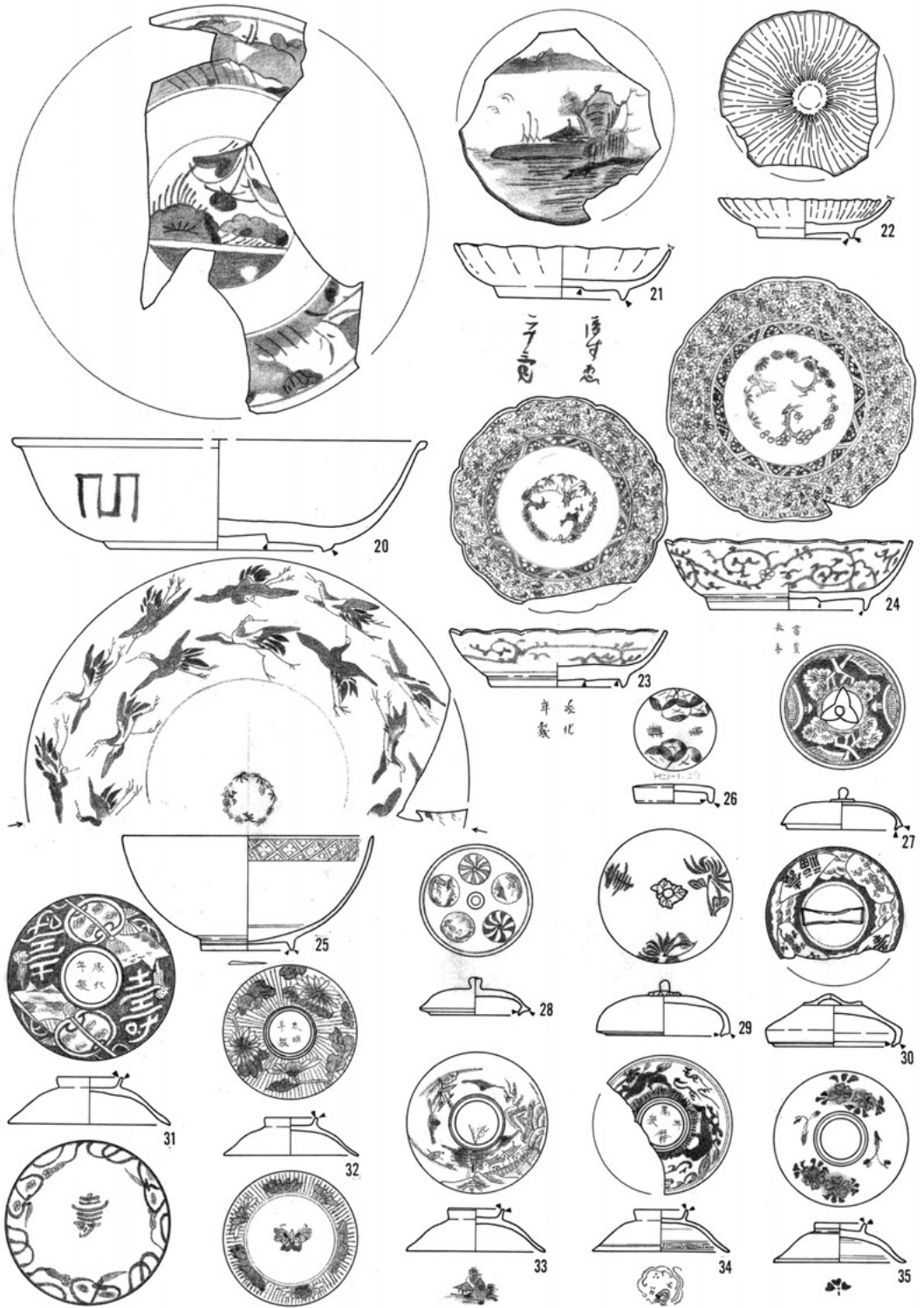
第一節 陶磁器・土器

土は灰白色を呈す。体部は口縁で外反し12単位の輪花を形成する。高台裏には少なくとも二箇所のハリ支え痕が認められた。口縁内側には墨弾きを伴う帯文が巡っている。欠損面には焼き継ぎ痕がみられる。16は瀬戸・美濃系の色絵小皿でJC-3-bに属す。高台裏は施釉されているが蛇ノ目凹形高台を模している。見込みには上絵によって鳥、ススキが描かれている。17, 18は小皿JB-3-bに属す。17は8単位の輪花である。口唇には口錆が施され見込みには墨弾きによる唐草と、折紙に幾何文、五三の桐が描かれている。18は8単位の輪花であるが口唇は平坦に整形されている。口唇には口錆が施されている。22は白磁小皿でJB-3-aである。型打ちによって捻花状の輪花を形成している。口唇には口錆が施されている。

20は鉢でJB-5に属す。胎土は灰褐色を呈す。底部は蛇ノ目凹形高台であるが釉は蛇ノ目部分から高台にかけて無釉である。体部は丸味をもって立ち上がり口唇で肥厚する。25は鉢でJB-5に属す。体部には焼き継ぎ痕がみられ、高台裏に「|」の焼き継ぎ屋の印がみられる。26は合子の蓋で、JB-18に属す。筒形の蓋で下端部は無釉である。27-30は蓋物の蓋である。27はJB-14-hに属す。体部はドーム形で、端部でやや外反する。つまみは玉状のものの付根に型打ちされた三柏を伴うものである。29は瀬戸・美濃系の蓋でJC-14に属す。体部はドーム形を呈し、型打ちされた桐の葉を台座にもつつまみが貼り付けられている。28はJB-14-bに属す。体部はドーム形を呈し口縁でやや外反する。中央に算盤玉状のつまみを有す。30はJB-14-cに属す。体部はつまみ周辺は平坦でそこから富士山状に拡がり端部で内側に屈曲して垂下する。橋状のつまみは平面鼓状を呈す。31-34は肥前系の端反碗の蓋でJB-1-nに属す。31は両面に宝寿文を描き、つまみ内には「成化年製」銘が描かれている。32はつまみ内に「太明年製」銘が描かれている。33は両面ともに山水楼閣文が描かれているが表面はつまみ内にまで文様が及んでいる。34はつまみ内に「萬曆年製」銘がみられる。35は瀬戸・美濃系の端反碗の蓋でJC-1-dに属す。胎土はガラス質で光沢がある。釉は厚く微細気泡を多量に含み、呉須はぼやけている。36, 37は油壺でJB-12に属す。36は高台脇が面取りされている。最大径は体中位のやや下部にあるが湾曲が強く、器形はやや偏平を呈する。37は高台脇が丸く整形されている。38は仏飯器でJB-8に属す。高台は蛇ノ目状を呈し、畳付は無釉である。

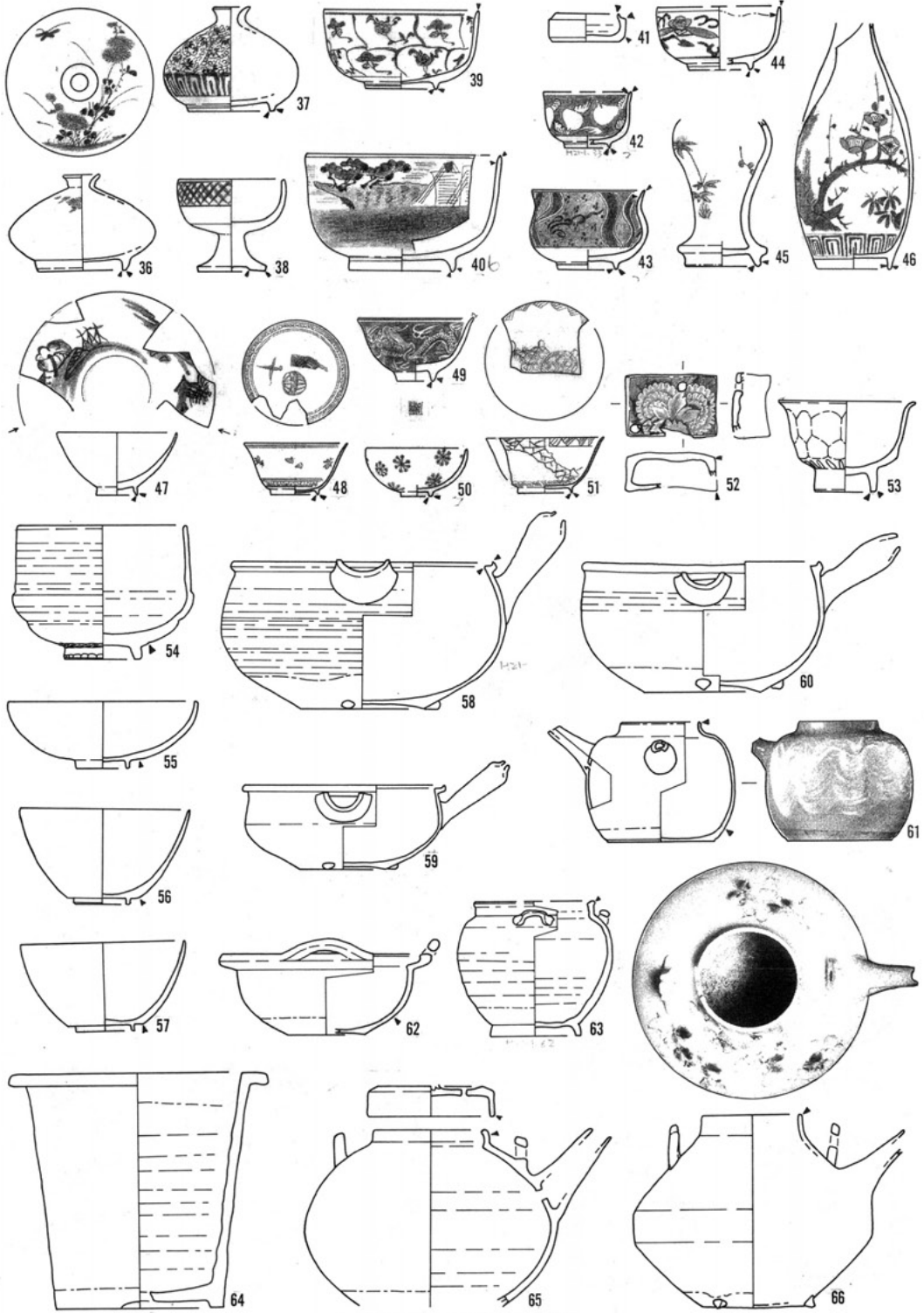
39, 40, 42-44は蓋物の身である。39, 40, 42, 44はJB-13-aに属す。体部は腰が張っている。42は口縁部でやや外反する。43はJB-13-dに属す。体部の文様は墨弾きで縁取られた蛇行帯で3単位の区画されている。41は合子の身でJB-18に属す。筒形の合子で底部端は丸く整形されている。45は仏花器でJB-11に属す。高台はやや外傾している。上絵付けによって松竹梅が描かれている。46は神酒徳利でJB-10-cに属す。高台両脇は面取りされている。体部は高台から直立し緩やかに膨らむ。49は中国産の輸入陶磁でJA-6に属す。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。口唇には口錆が施され、外面には瑠璃釉が施されている。体部には金彩によって龍が描かれている。高台裏には図のような銘が描かれている。47, 50は小坏でJB-6-aに属す。47はほぼ直線的に開く。50は高台径が1.9cmと小さいが、畳付幅は2mmと広い。48, 51は小坏でJB-6-cに属す。極めて薄い作りである。51の見込みには金彩によって亀、松が描かれている。外面は呉須による帯状の水裂文である。52は水滴でJB-19に属す。型打ち成形によって作られており底部を貼り付けている。底部には布目痕がみられる。表面は型打ちによる陽刻で菊を描き、二箇所穿孔されている。釉は短辺側

第IV章 江戸時代の遺物



IV-073図 H21-1出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-074 図 H21-1出土遺物(3)

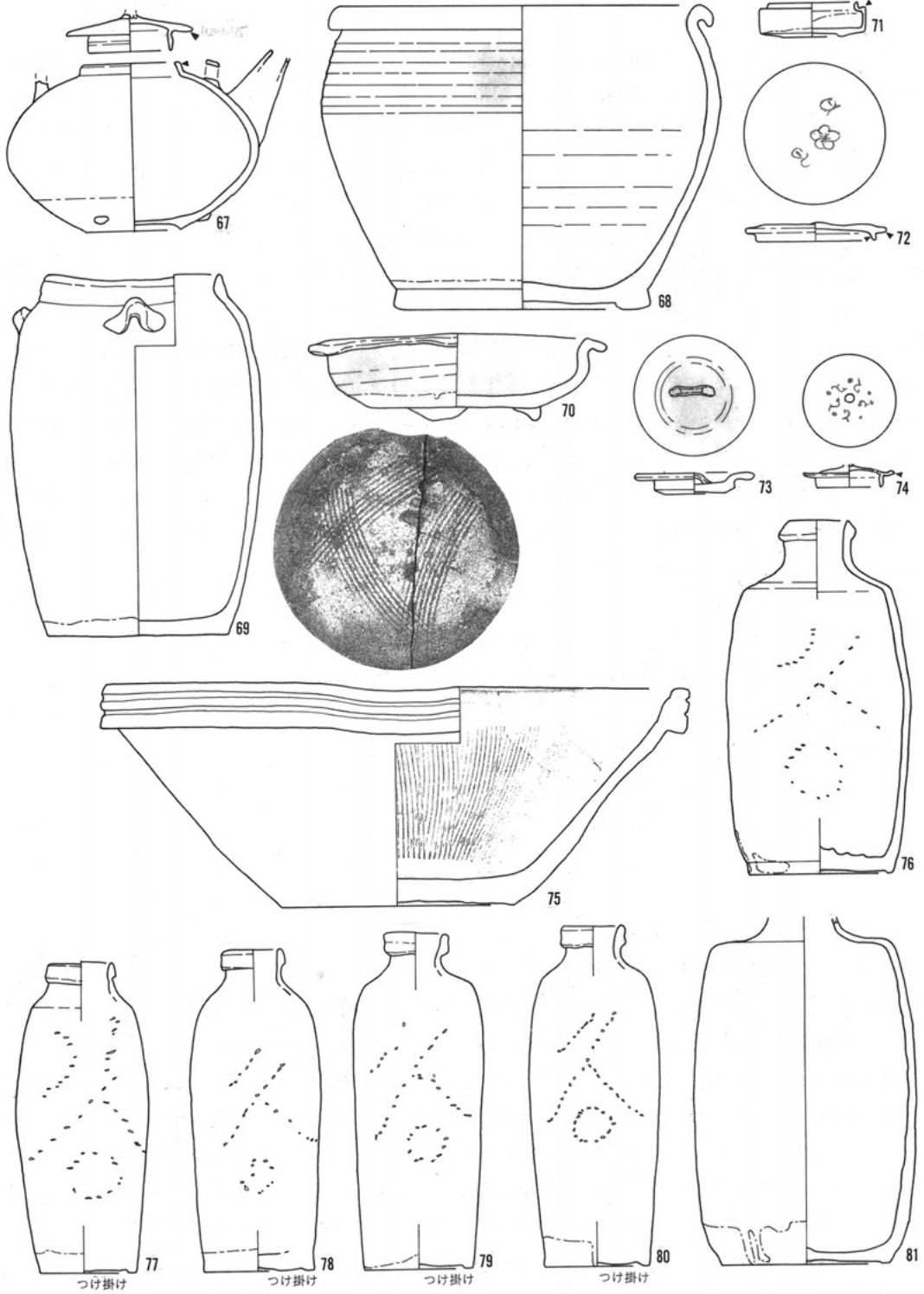
第IV章 江戸時代の遺物

の一面のみが無釉である。

陶器(53-75) 53は瀬戸・美濃系の小坏でTC-6に属す。胎土は黄白色を呈し硬質である。灰釉が施されているが豊付は無釉である。高台高は13mmと高い。体部下部には放射状の沈線、中位から口縁にかけては亀甲模様に成形されている。口縁は外反する。54-57は京焼系の碗である。54はTD-1-iに属す。胎土は黄褐色を呈す。高台脇は篋状工具によって面取りされているが、ロクロを用いずに削りこまれ多角形となる。高台付根も同様な整形がなされているが1単位の削り中に何本もの条線を伴っている。体部の湾曲部の両側には浅い沈線が巡っている。55は平碗でTD-1-hに属す。胎土は黄白色を呈し硬質である。底部は無釉で高台脇は面取りされている。56, 57はTD-1-dに属す。胎土は黄白色で硬質である。体部は高台より数mm張り出しそこから屈曲して立ち上がる。釉際はこの屈曲部にある。56は高台脇が面取りされている。57は高台裏に墨書がみられる。58-60は行平鍋である。58, 60は灰釉が施されており、TZ-33-bに属す。胎土は灰褐色を呈し硬質である。見込みにはピン痕が三箇所認められる。把手は型打ち成形され、上面には58に陽刻で草花が、60には「福寿」字が施文されている。59は鉄釉が施されており、TZ-33-cに属す。胎土は燈褐色を呈し軟質である。把手は型打ち成形され、上面には陽刻で「吉見」字が施文されている。61は急須でTZ-16に属す。胎土は黄白色で緻密である。全体に丁寧な作りで注口部の穿孔は一箇所で大いものである。体部には白泥による波状の刷毛目が施文されている。底部は無釉である。62は鍋でTZ-33-aに属す。胎土は暗灰褐色で硬質である。底部には瘤状の脚が三箇所貼り付けられ、口縁にはアーチ状の釣手掛けが一對貼り付けられている。63は灰釉が施された壺でTC-15に属す。胎土は黄白色でやや軟質である。肩部には橋状把手が一對貼り付けられている。64は植木鉢でTC-21に属す。胎土は黄白色である。口縁内側から底部脇にかけて灰釉が施されている。底部中央には直径2cmの水切り孔を有し、高台にはアーチ状の削り込みが一箇所ある。

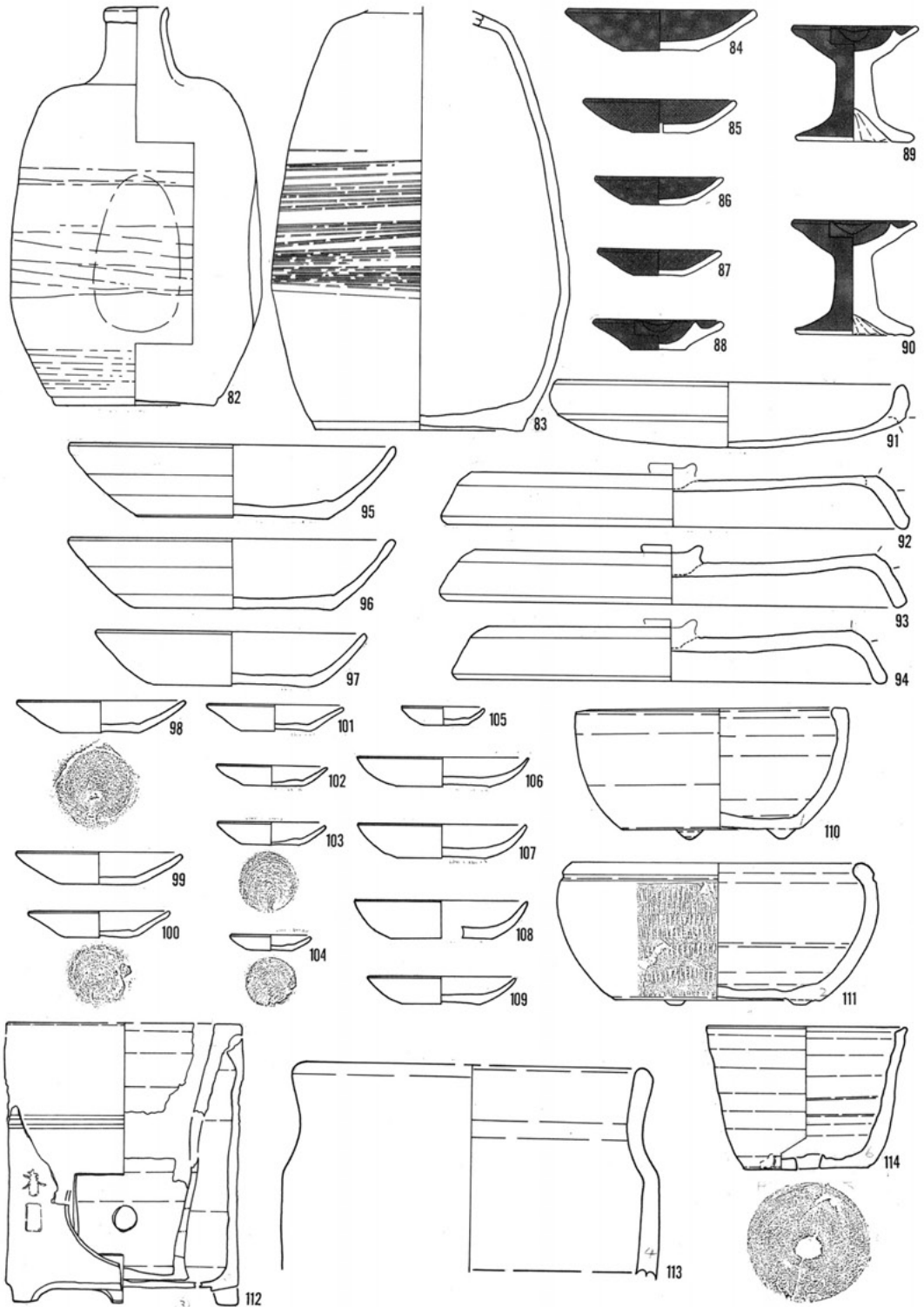
65-67は土瓶である。65, 67は銅緑釉が施されTZ-34-aに属す。胎土は黄白色である。注口部の穿孔は三箇所、底部にはススが付着している。66はTZ-34に属す。胎土は黄白色で緻密である。注口部の穿孔は二箇所みられる。体上部には草花が描かれているが鉄絵で輪郭をとり、青、緑で埋めている。体下半部が二次焼成のため変色している。68は甕でTC-26-bに属す。柿釉が施され、胎土は乳白色できめが粗い。体上部には7条の条線が巡っている。見込みには五箇所窯道具の溶着痕が認められる。69は灰釉壺でTC-15に属す。底部、内面は無釉である。肩部には把手が三箇所貼り付けられている。底部にはわずかに糸切り痕を残す。70は灰釉鉢でTC-5に属す。底部には粗雑な脚が三箇所貼り付けられている。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で屈曲して開く。口縁上には溝を有する。71は合子の身でTC-18に属す。筒形を呈し灰釉が施されている。見込みには黒色の付着物が認められる。72-74は蓋である。72は京焼系でTD-14に属す。おそらく重箱の蓋であろう。胎土は黄白色で緻密である。表面中央にはつまみが退化したと思われる瘤状の隆起がある。鉄絵と白泥により梅花を描いている。73は瀬戸・美濃系の落とし蓋でTC-14-aに属す。表面の凹み部分に橋状のつまみを有し、裏面には糸切り痕を残す。灰釉が施されている。74は急須の蓋でTZ-16に属す。胎土は黄白色で緻密である。丁寧な作りで通気孔が一箇所穿たれている。鉄絵と青絵の具で花卉文様が描かれている。75は備前系の擂鉢でTE-29に属す。胎土は茶褐色で白色微粒を多量に含有す

第一節 陶磁器・土器



IV-075図 H21-1出土遺物(4)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-076図 H21-1出土遺物(5)

第一節 陶磁器・土器

る。緑帯は 2条の沈線を伴い発達している。内面の突帯は 1条の沈線を伴っているが未発達である。播目は 9条で 1単位である。

徳利(76-83) 76は瀬戸美濃産の灰釉系 5 合徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり、肩部は張って寸胴、高台の削りも浅く雑である。77-80は瀬戸美濃産の灰釉系 2 合半徳利でやはり点刻の釘書が認められる。いずれも口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。81は瀬戸美濃産の灰釉系 1 升徳利で胴部の破損により釘書の有無は確認できない。肩部は張って寸胴であり、高台の削りは浅く雑である。82, 83は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で、このタイプとしては大型、特大型のものである。ともに最大径は胴下部にあって、胴下端には削り込みが認められる。また83の胴部中程には浅い糸目文が施されている。2 合半徳利, 5 合・1 升徳利が 120-140個体ほど出土しているほか、志戸呂産徳利, 瀬戸美濃産鉄釉系徳利も 15-25個体ほど見られる。

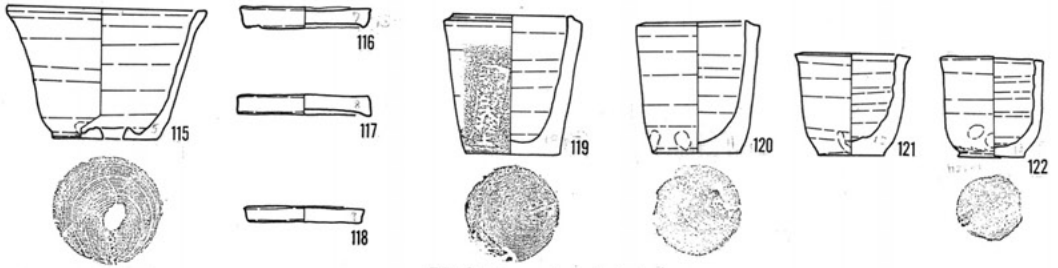
灯火具(84-90) 全て透明釉である。84-87までは油皿。図示したものの口径は7.6-11.8cm。85の底部に焼成後の四角い穿孔がある。86, 87は同形である。88は受付で口径8cm。89, 90は同形の有脚受付。2点とも口径7.8cm, 器高7cm である。灯芯油痕は87のみに疎らに付着し他はない。なお84-88まで左回転の糸切り痕が顕著である。図示したものを含め灯火具は19点の出土。全て透明釉であり、油皿9, 受付1, 有脚受付9 の出土である。他に鉄釉の受付口縁片も出土している。

カワラケ(95-109) 図示したものの口径は3.2-20cm。98-105にそれぞれ2 点ずつ同じ口径のカワラケを並べた。最大の95と96は同形態であるが、96の底径がわずかに大きい。他もそれぞれ同形態だが、底径・器高にわずかに違いも認められる。106-109は上製。106, 107は底径・器高もほぼ同じ、同形態である。108は器高が高く、あるいは106, 107 と器種が異なる可能性もある。18世紀前半までと異なり、器壁が厚い。97は内面全体を煤が覆うが、口唇に明確な灯芯油痕は認められない。他のカワラケにも灯芯油痕は付着していない。95-105まで左回転の糸切り底。106-109にはヘラケズリ調整が施される。カワラケは全部で27点の出土。出土比率の7%。図示した以外の12点は底径までわかるものは少ない。7点までが上製である。他の 5点は 95-97に類似するもの 2点, 102, 103に類似するもの 2点, 耳皿 1点である。また灯芯油痕が認められた口縁片は1 点のみ。出土比率が低く、大小のカワラケのみで構成され、上製の多い点などが注目される。

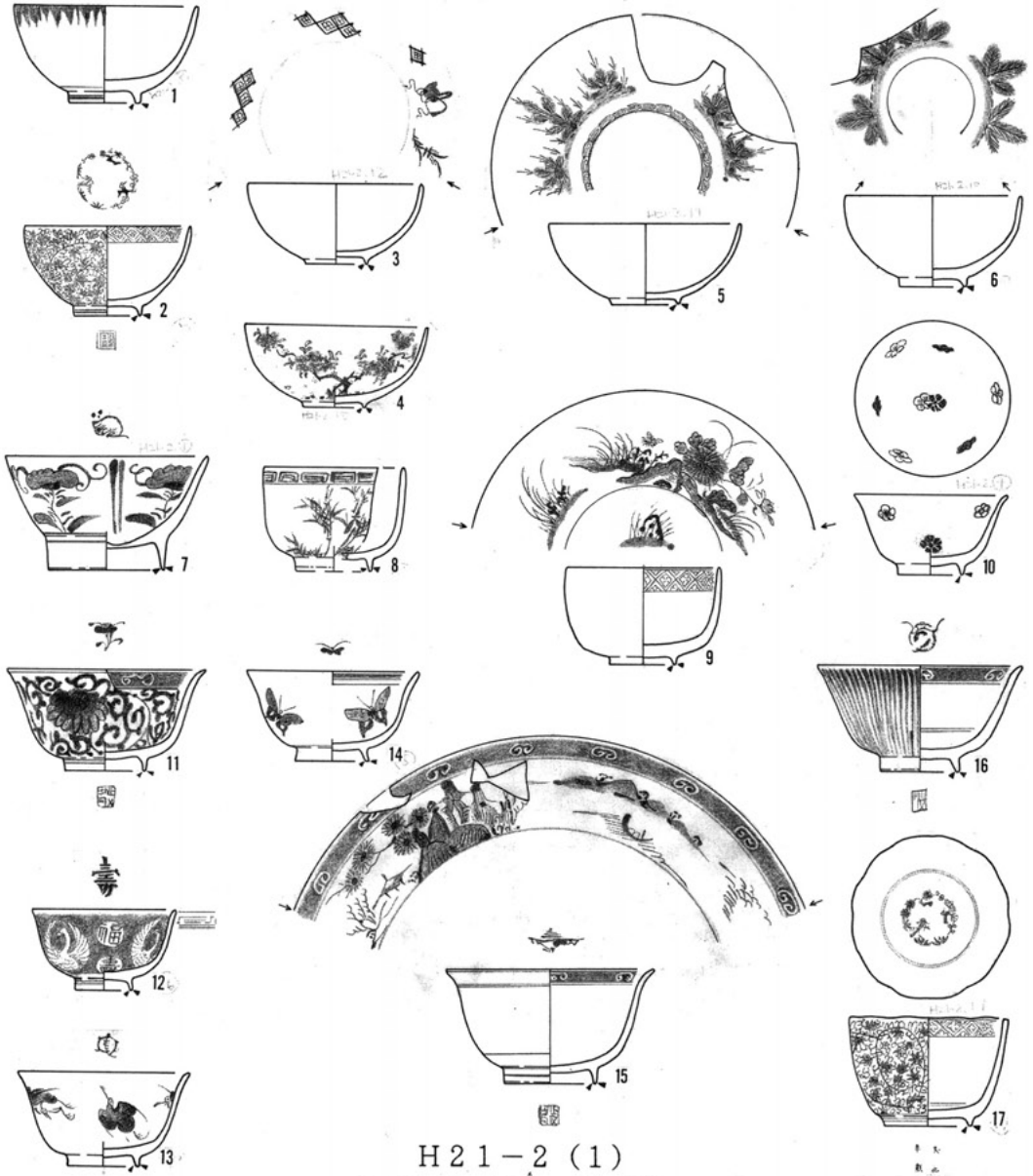
焙烙(91-94) 91は小型の焙烙である。ケズリは屈曲部より下位に施される。口縁は厚くやや内湾気味であり、底部は比較的平らである。92-94は蓋である。92, 93は同じ口径で、29cm。94はやや小さく口径27cm。92, 94はつまみを欠く。二つとも93より小型のつまみが付いていたと思われる。焙烙の底部片, 口縁片はそれぞれ16点, 12点の出土である。うち91と類似した口縁片は 8点ある。91より器壁が薄いようであるが、小型の焙烙になるかは不明である。確実に大型となる口縁片は 3点の出土である。ただし2 点は流れ込みの可能性がある。91の存在が示すようにほぼこの頃より、明確に小型とわかる焙烙が出土する率が高まる。蓋は図示した以外、11点の出土。

土器(110-115) 110は 1 類 a ロに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。底面にはコビキ痕が見られる。外面は丁寧にケズられ平滑であり、銀彩が施されていたと思われる。口縁部内面には煤の付着が見られる。111は 1 類 a イに分類される小型の硬質瓦質の火鉢類。ロクロ

第IV章 江戸時代の遺物



H 2 1 - 1 (6)



H 2 1 - 2 (1)

IV-077 図 H21-2(6)、H21-2(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器

成形である。体部外面は口唇部が丁寧にミガかれ、その下にはトビガンナ状の凹凸が連続する。底面には砂粒の痕が見られる。112は2類dに分類される火鉢類。体部、口縁の多くを欠損しているがロクロで成形したものを組合せたものと思われる。二重になった体部の内側には、正面に方形の窓が、その反対側には小さい円孔が開けられている。外側の体部下半の前面には円形と思われる開口部が切れ、周囲がナデられている。この開口部の脇にはなんらかの文字と印と思われるものが陰刻されている。切り出されて形づくられた板状の足をもつ。口縁下にはローラーによる装飾が施されていたと思われる。底には回転ヘラ切りに類する渦巻状の圏線が見られる。胎土は白色を帯びた肌色で、外面には白色粘土の化粧掛けが施されており平滑である。口縁部から内面にかけては五徳の内面に見られるような白色化が見られる。113は硬質瓦質の製品。輪積み成形である。下半を失っており、全体的な姿は明らかでない。外面および口縁部の内側はきわめて念入りにミガかれ、光沢をもつ。火鉢の類と思われるが、あるいは風炉の類であるかもしれない。114は硬質瓦質の、115は軟質土師質の植木鉢である。いずれも底面中央に焼成前の穿孔を有する。体部はやや開き気味に立ち上がり、114は内側に傾斜する口唇をもち、115はやや外反する口縁部をもつ。ほかに火鉢類9、風口、耳皿など7点がある。いずれも小片である。

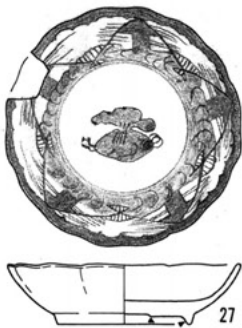
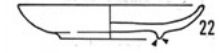
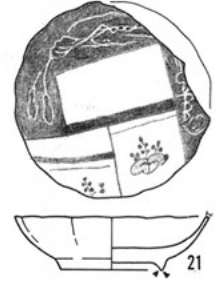
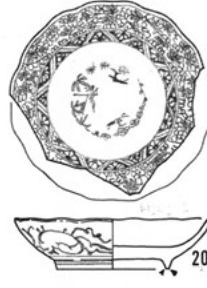
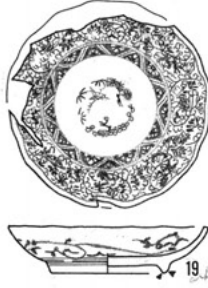
焼塩壺(116-122) 116、117はイ類1eに分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。116は上面に手掌痕が見られ下半は整っている。型に入れて成形されたと思われる。117は表面が荒れていて詳しい観察ができないが、下面には粗い布目が残っているようである。118はウ類に分類される蓋。上面に手掌痕が見られ整っている。型に入れて成形されたと思われる。119、120はⅢ類aに分類される身。119は4類1の刻印をもち、120は刻印をもたない。119の刻印の裏には指頭痕が見られ、内側に指を刮えて刻印を捺したことが窺える。121はⅢ類dに分類される身。122はⅢ類eに分類される身。いずれにも刻印はない。体部底面付近は強く絞られている。120-122の底面付近には指頭痕が並び、乾燥する前に逆位にもたれたことが窺える。ほかにウ類の蓋6、ロクロ成形の身16がある。

最小個体数で土器22点、焼塩壺29点と、多量の遺物が見られる。土器ではロクロ成形の軟質土師質の小型の火鉢類の存在、またこれと硬質瓦質の小型の火鉢類、涼炉との組み合わせ、土師質と瓦質の植木鉢の組み合わせが一つの時期を示すものとして注目される。焼塩壺では、刻印をもつロクロ成形の例の存在、器形的には3種のもの組合せとが、やはり注目される。

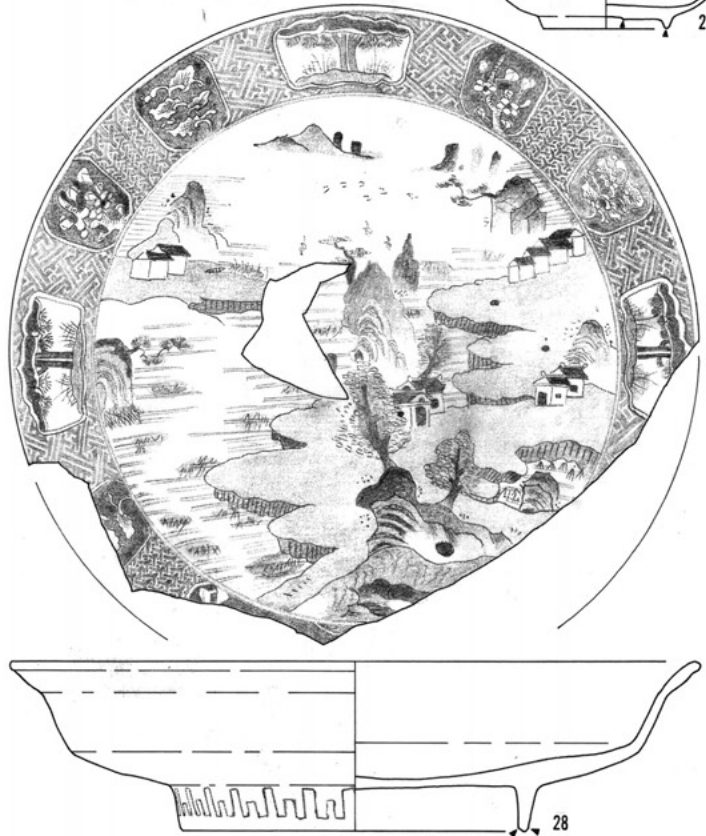
H21-2 (IV-077~082 図) 本遺構から出土した遺物組成はH21-1と同様のものであり、Ⅷ期に属するものである。端反碗では瀬戸・美濃系の製品も多いことも特徴付けられる。

磁器(1-51) 1-16は碗である。1はJB-1-gに属す。胎土は灰白色である。口唇部に釉飛びがみられる。2はJB-1-eに属す。口縁内側には四方禰が巡っている。見込みには二重圏線内に丸文状の松竹梅が、高台裏には二重角枠内に図のような銘が描かれている。3-6はJB-1-fに属す。薄手の作りで高台断面は三角形を呈し低い。6にみられるような松文を有する碗が広瀬向2号窯の端反碗を伴う3層より出土している。7は瀬戸・美濃系の広東碗でJC-1-cに属す。胎土はガラス質で光沢がある。釉は厚くかけられ全面に微細気泡を含む。8は瀬戸・美濃系の湯呑碗でJC-1-eに属す。胎土はガラス質で光沢がある。文様は呉須による雷文が口縁外側を巡り、体部には上絵で竹文が描かれている。9はJB-1-hに属す。体部は腰が張る。見込みには一重圏線内に草花文を描き口縁内側には四方禰が

第IV章 江戸時代の遺物

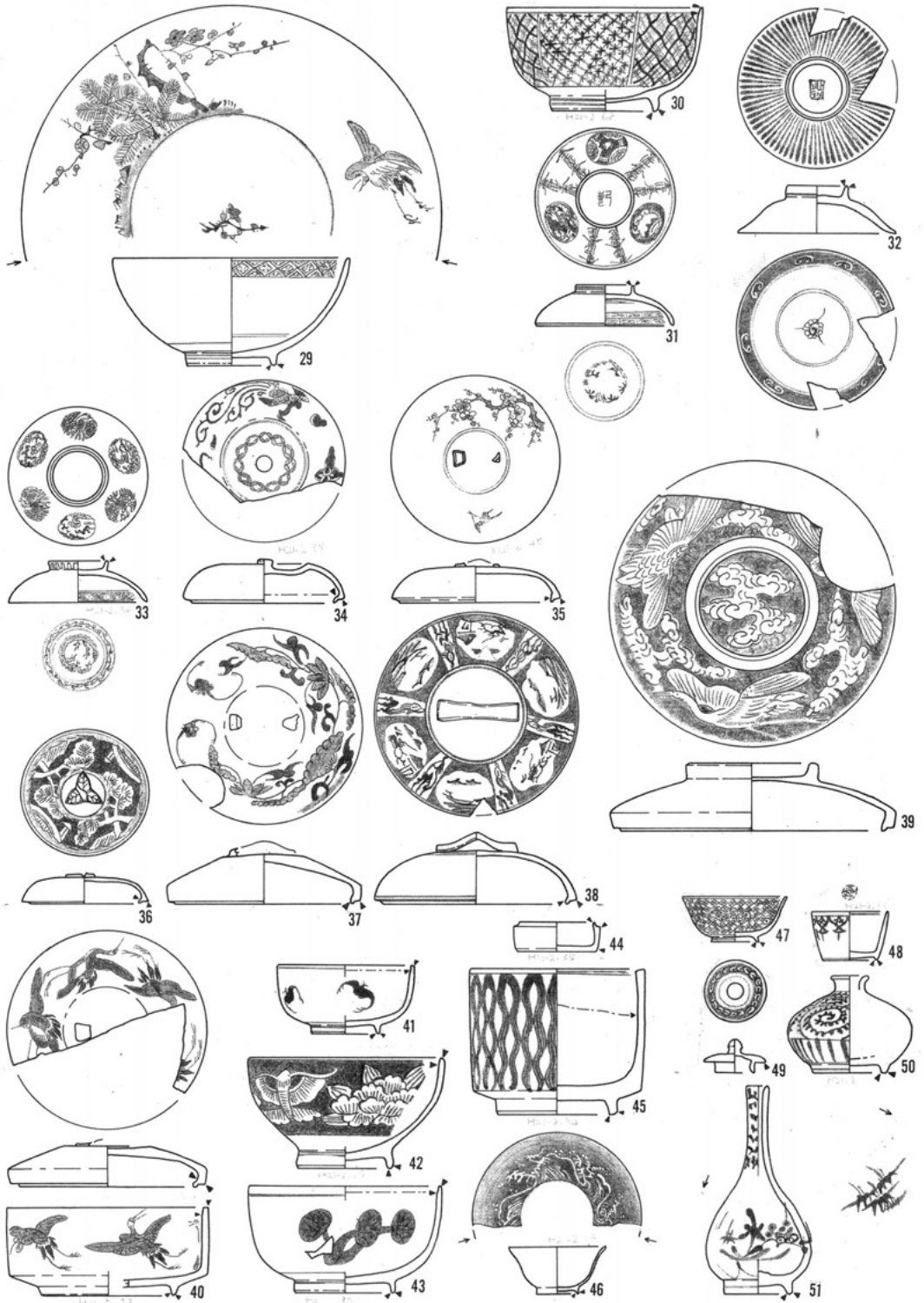


南
東



IV-078図 H21-2出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-079図 H21-2出土遺物(3)

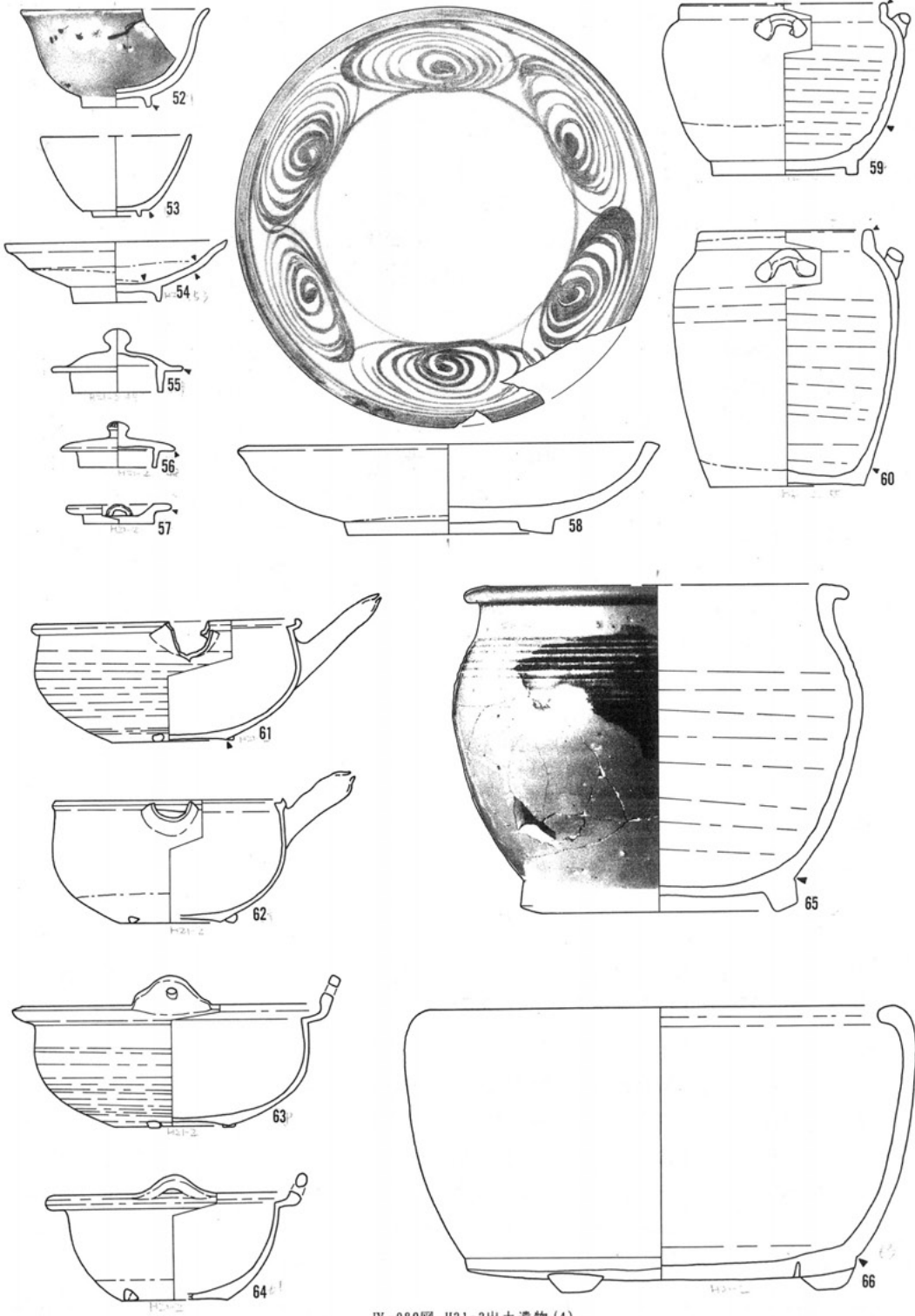
第IV章 江戸時代の遺物

巡っている。10, 11, 13-16は瀬戸・美濃系の端反碗でJC-1-dである。胎土はガラス質で光沢がある。釉は若干青味を帯び、全面に微細気泡を含む。11は口縁内側に墨弾きを伴う帯文が巡り、見込みには二重圏線内に、草花文が描かれている。高台裏に図のような銘が描かれている。この銘は15, 16と共通する。14の高台は八の字状に開き、釉には部分的に貫入が入る。15は口縁両側に墨弾きを伴う帯文が巡り、見込みには二重圏線内に山水が描かれている。高台裏には銘が描かれている。接合面に焼き継ぎ痕がみられる。16は口縁内側に墨弾きを伴う帯文が施されている。見込みには二重圏線内に花文が、高台裏には銘が描かれている。H21-1出土遺物と遺構間で接合をする資料である。12は肥前系の端反碗でJB-1-nに属す。高台は八の字状に外傾している。口縁内側には雷文が巡り、見込みには寿字文が描かれている。17はJB-6-eに属す。体部は型打ち成形によって6単位の輪花を形成している。口縁内側には四方嚮が巡り、見込みには二重圏線内に丸文状の松竹梅が描かれている。

18, 23-28は皿である。18はJB-2-eに属す。口縁部は6単位の輪花を形成している。23-27は蛇ノ目凹形高台の皿でJB-2-iに属す。23は6単位の輪花を形成している。口唇には口鏽が施されている。蛇ノ目部分に墨書あり。24-27は8単位の輪花を形成している。高台裏に墨書あり。27の墨書が辛うじて文字と判断できるのみである。25の口唇には口鏽が施されている。24は同種のものが他に2点、26は他に1点出土している。19-21はJB-3-bに属す。高台断面は三角形を呈し、体部は8単位の輪花を形成している。19, 20には同様の文様が描かれているが、19の高台裏には「成化年製」銘が、20の高台裏には二重角枠内に図のような銘が描かれている。21の見込みには五三の桐をあしらった二枚の色紙が描かれ、地文には墨弾きで唐草を描いている。口唇には口鏽が施されている。H21-1の17と同手である。22は白磁の小皿でJB-3-aに属す。28は盤状の大皿でJB-2に属す。高台は高くやや内傾している。見込みには海浜図、側面には3種の窓絵が4単位配され、地文には墨弾きによって祥瑞文様が描かれている。高台脇には櫛目文が巡り、高台裏には銘がみられる。接合面に漆継ぎの痕跡あり。H21-3出土の遺物と遺構間接合をする資料である。29は鉢でJB-5に属す。畳付は両側から面取りされている。見込みは二重圏線内に梅が描かれている。

31, 33は蓋付丸碗の蓋と思われ、JB-14-aに属す。31はつまみがほぼ直立する。外面には丸文と寿字文を交互に配し、つまみ内には銘が描かれている。33はつまみがやや外傾する。外面には丸文が配され、内面には丸文状の龍が描かれている。32は瀬戸・美濃系の端反碗の蓋でJC-1-dに属す。釉は青味を帯びている。裏面には墨弾きを伴う帯文と花文が、つまみ内には16などと同様の銘が描かれている。おそらく16に伴う蓋である。34-39は蓋物の蓋である。34はJB-14-dに属す。中央部に凹みを有し算盤玉状のつまみをもつ。35, 37, 38は橋状のつまみをもちJB-14-cに属す。35, 38の体部はドーム状を呈す。37は直線的に開き端部で屈曲し垂下する。釉は焼成不良のため白い斑点がみられる。接合部分には焼き継ぎ痕がみられる。36は型打ちによる三柏の装飾を伴うつまみを有し、JB-14-hに属す。体部は丸味をもって開くが端部でやや外反する。接合部分に焼き継ぎ痕がみられる。H21-2の27と同種である。39は大型の蓋でJB-14-aに属す。体部はほぼ直線的に開き端部で屈曲する。30, 40-43は蓋物の身である。30は蓋物の身でJB-13-aに属す。体部はやや腰が張って立ち上がる。H21-1出土遺物と遺構間接合をする資料である。40は蓋とセットでJB-13-bに属す。蓋は直線的に開き橋状のつまみを有する。ともに鶴が描かれている。H21-1出土遺物と遺構間接

第一節 陶磁器・土器



IV-080圖 H21-2出土遺物(4)

第IV章 江戸時代の遺物

合をする資料である。41-43は JB-13-a に属す。41, 43は腰が張っている。41では胎土は灰白色を呈す。畳付は両端が面取りされている。42は緩やかな丸味をもちながら開き気味に立ち上がる。高台は外傾している。H21-1, 5出土遺物と遺構間接合をする資料である。

44は合子で JB-18 に属す。体部は円筒形を呈し、底部外端が丸く整形されている。内面に紅が付着している。45は香炉で JB-9 に属す。高台脇は面取りされている。46, 47は小坏である。46は JB-6-c に属す。高台は外傾し体部は口縁で外反する。器厚は極めて薄い。見込み側面には鳥が描かれ、外文様は墨弾きによる波濤文である。47は JB-6-b に属す。高台は外傾し体部は口縁で外反する。48は猪口で JB-7-b に属す。見込みには手描きによる五弁花が描かれている。49は瀬戸・美濃系の蓋で JC-14 に属す。釉は青味を帯び、中央部に団子状のつまみを有す。おそらく急須の蓋であろう。50は油壺で JB-12 に属す。胎土は灰白色を呈す。畳付内側に砂が付着している。51は瀬戸・美濃の神酒徳利で JC-10-c に属す。

陶器(52-67) 52, 53は京焼系の碗である。52は TD-1-f に属す。胎土は黄褐色を呈し緻密である。見込みには全面に白泥を施している。外面には白泥と鉄絵の具によって梅が描かれている。53は小杉茶碗で TD-1-d に属す。胎土は灰褐色を呈す。54は皿で TC-2-m に属す。長石釉が施されているが、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。55-57は蓋である。55, 56は山蓋で TC-14-c に属す。表面には灰釉が施されている。中央部に団子状のつまみが貼り付けられているが、56ではつまみに放射状の沈線が施されている。57は落とし蓋で TC-14-a に属す。中央の凹み部分に橋状のつまみを有す。裏面には糸切り痕を残している。58は馬の目皿で TC-2-g に属す。高台は幅広の付高台である。鉄絵の具によって口錆、渦巻文様が描かれている。高台周辺以外に長石釉が施されている。59, 60は壺で TC-15 に属す。肩部に橋状把手が一對貼り付けられている。胴部から口唇にかけて灰釉が施されている。60は高台をもたない。

61, 62 は行平鍋である。61は TZ-33-e に属す。胎土は橙褐色を呈し軟質である。把手上面に型打ちによる陽刻で草花が施されている。外面は鉄釉が施されているが内面はマンガン釉で深緑に発色している。62は TZ-33-b に属す。把手上面には型打ちによる陽刻で草花が施されている。胴部から内面にかけて灰釉が施されている。底部にはススが付着している。63, 64は鍋で TZ-33-a に属す。63は胎土は橙褐色で極めて軟質である。外面は鉄釉で内面はマンガン釉が施されている。胎土、釉薬ともに61と同じものである。64は胴部から内面にかけて柿釉が施されている。65は甕で TC-26-b に属す。高台は付高台である。体部は丸味を帯び、口縁は大きく外折する。肩部には平行沈線が施文されている。釉は柿釉が施され肩部には灰釉が流し掛けされている。66は火鉢で TC-31 に属す。体部は丸味を帯び口縁は内湾する。底部には半球状の脚が三箇所貼り付けられている。脚の内側には木製の台を取り付けるための、未貫通の孔が穿たれている。底部脇から口縁にかけて鉄釉が施され、内面は錆釉が刷毛塗りされている。67は土瓶で TZ-34-a に属す。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。体部は球状を呈し、注口部の孔は五箇所穿たれている。底部にススの付着痕がみられる。

徳利(68-70) 68-70はいずれも瀬戸美濃産の灰釉系徳利で、それぞれ2合半、5合、1升の容量である。3点ともに点刻の釘書が認められる。68では口唇部は厚く折り返され寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉である。69, 70の口唇部は厚く折り返されて算盤玉状になり、寸胴で高台も浅く雑

第一節 陶磁器・土器



IV-081 図 H21-2出土遺物(5)

第IV章 江戸時代の遺物

に削り込まれている。2合半徳利が90個体ほど、5合・1升徳利が170個体ほどと大量に出土している一方、志戸呂産徳利はごく少量である。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利は20個体ほど認められる。

灯火具(71-78) 71は鉄釉系の受付。72-78は透明釉である。72-74までは油皿。72, 73は同一の口径10cmで、全く同じ形態である。ただし72に四角い焼成後の底部穿孔があり、H21-1の85と共通する。75, 76は受付, 77は有脚受付, 78は乗燭である。ほとんど灯芯油痕は78の灯心立の先端のみに付着する。71の底面はへラケズリ調整が施され, 72-76, 78は左回転の糸切り底である。灯火具は15点の出土である。図示した以外はすべて透明釉であり, 油皿4点, 受付2点, 有脚受付2点の出土である。H21-1の構成と似る。

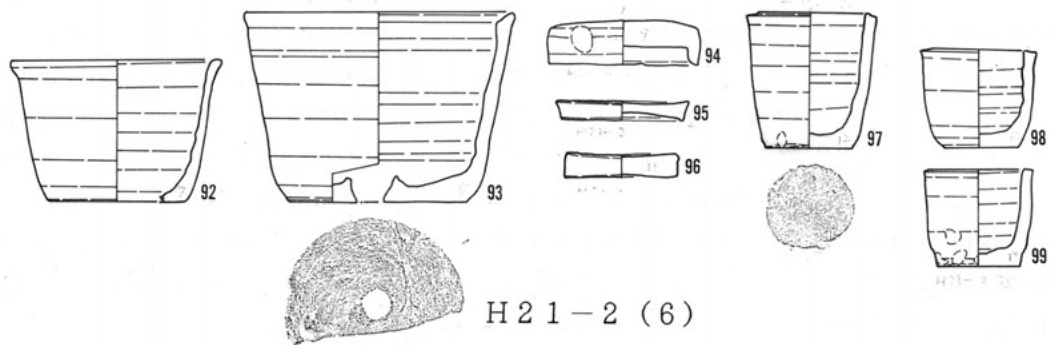
カワラケ(82-84) 82の口径20cm, 83は7cmである。84は上製の耳皿で用いたカワラケは器高が高く, 椀に近い形態である。この遺跡内ではもっとも新しい耳皿と考えられる。3点ともほぼ完形。灯芯油痕は認められない。82, 83は左回転糸切り底, 84は底にへラケズリ調整を施す。カワラケは25点の出土である。出土比率の7.6%。図示した以外, 底径のわかるものは少ない。82に類似した底部片が11点, 83に類似するもの3点, 83よりやや大型と考えられるもの2点, 上製6点の構成となろう。他に耳皿の口縁片も2点出土している。出土比率が低く, 六寸以上の大型および上製が多い点などH21-1と共通する部分が多い。

焙烙(79-81) 79は口径33cmの大型の焙烙である。ほぼ完形で, 底面に丸に一の字の刻印が認められる。刻印はG26-1に比べさらに大きく径2.4cmになる。口縁は短く内傾し底面の器壁が薄くなる。ケズリは屈曲部より完全に下に位置し, 明瞭でなくなるのも特徴である。80, 81は蓋であるがつまみを欠く。図示した以外焙烙の底部片は21点の出土。口縁片は19点である。79と類似するもの16点, 小型の可能性のあるもの2点, 流れ込みによる古い時期のもの1点の出土である。破片から判断する限り焙烙もH21-1と共通する部分が多い。図示した以外, 蓋の破片は12点の出土である。

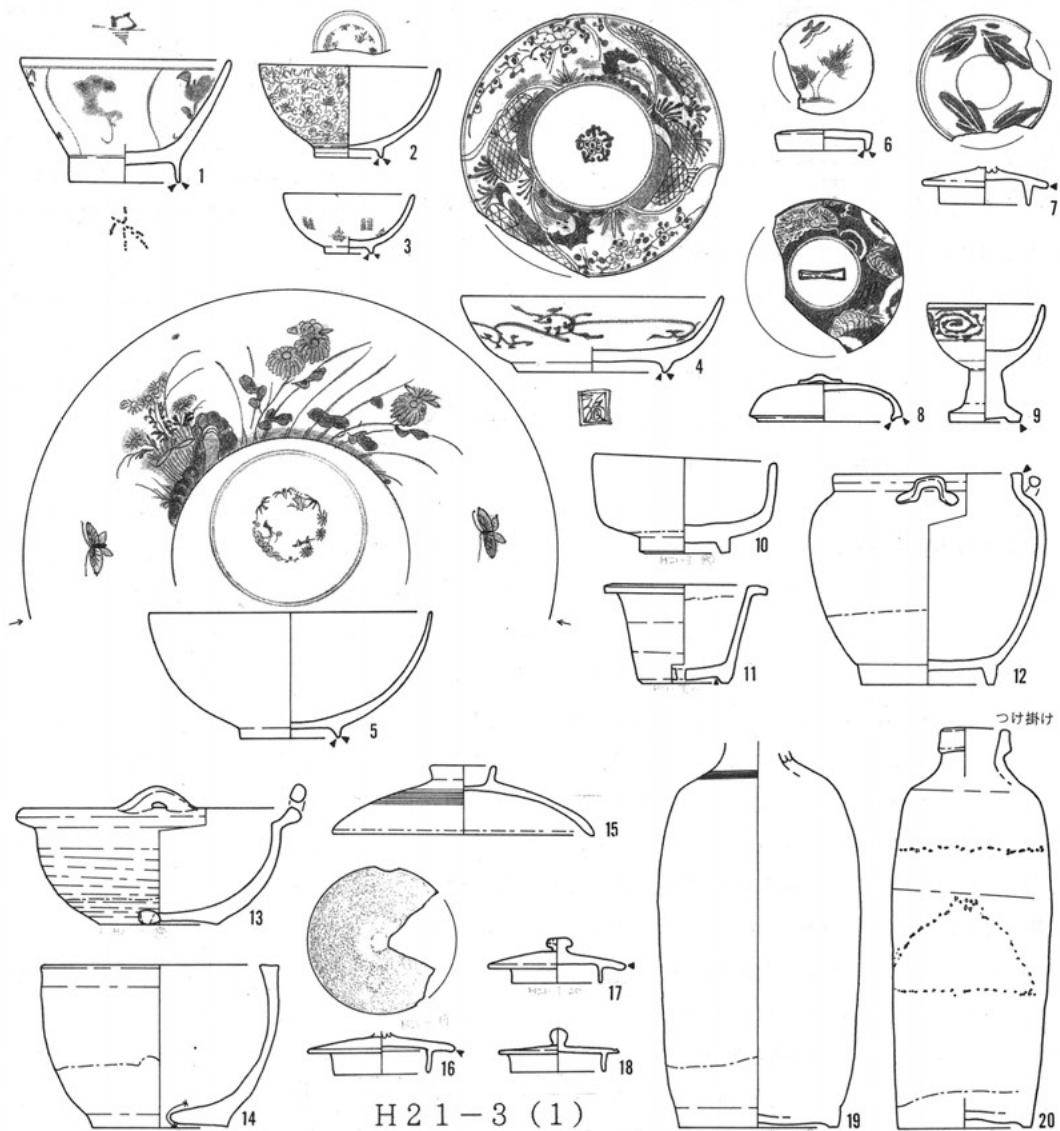
土器(85-93) 85は1類aロに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面はケズられわずかに銀彩が残る。底面にコビキ痕が見られ, 口縁内側に煤の付着が見られる。86は1類aイに分類される小型の硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面は口唇部が丁寧にミガかれ, その下にはトビガンナ状の凹凸が連続する。底面は平滑でわずかに砂粒の痕が見られる。87-89は口縁部の小片である。87, 88は2類aに分類されると思われるロクロ成形の火鉢類。87は硬質土師質で外反する口縁部と縦に刻みの入れられた乳房状の突起とをもつ。外面は念入りにナデられている。88は硬質瓦質で, 直立する口縁と下部に孔の開いた中空の乳房状の突起とをもつ。外面は口唇部が丁寧にミガかれ, その下には粗いチリメン状の凹凸がつけられている。突起には煤が付着している。窓の切り込み部の破片は見られないが, 87, 88の両者ともに風炉の一種と思われる。

89-91は2類dに分類されるロクロ成形のものを組合せて作られたた火鉢類。89は褐色がかかった白色の胎土をもつ。湾曲した胴部とやや脹らんだ直立した口縁からなり, 口縁内側には四角錐台形の突起が貼付されている。口唇部外面はケズられて平滑であり, 胴部は粗いケズリが入っている。90, 91は同一の個体の内側と外側である。橙色を帯びた肌色の胎土をもち, 外面は表面に白色の化粧掛けが施されている。口縁内側には四角錐台形を基調とする大小のある突起が三つ貼付されている。二重になった体部の内側は上面に鉄製の簀子状の部品(ロストル)と錆で融着した状態で出土

第一節 陶磁器・土器



H21-2 (6)



H21-3 (1)

IV-082図 H21-2 (6)、H21-3 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

したため、外側の部分とは直接接合していない。正面に方形の窓が、その反対側には小さい円孔が開けられている。またその底面にはボタン状の貼り付けが三箇所に見られ、内外の高さの調節がなされたものと思われる。91の体部下半の前面には円形の開口部があり、周囲がナデられている。この上には「虞夏陶河濱」と読める文字と印と思われるものが陰刻されている。底面周縁に切り出されて形づくられた板状の足をもち、底面中央には回転へら切りに類する渦巻状の圏線が見られる。92は軟質土師質の、93は硬質瓦質の植木鉢である。いずれも底面中央に焼成前の穿孔を有する。体部はやや開き気味に立ち上がり、92はやや外反する口縁部を、93は内側に傾斜する口唇をもつ。このほか火鉢類の破片が15、風口、五徳の破片が2-3 個体分ある。

焼塩壺(94-99) 94はI類1 b に分類される蓋。白色を帯びた肌色を呈する。上面はやや丸みを帯び周縁部がナデである。側面はやや脹らみ指頭痕が見られる。下面には細かい布目が見られ、その上をナデである。95はI類1 e に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。上面に手掌痕が見られ下半は整っている。型に入れて成形されたと思われる。96はウ類に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。表面が荒れているが、上面に手掌痕が見られる。97はIII類 a に、98はIII類 d に、99はIII類 e に分類される身。99は体部底面付近は強く絞られている。97-99のいずれも刻印をもたない。ほかにウ類の蓋が4、ロクロ成形の身が13個体ある。

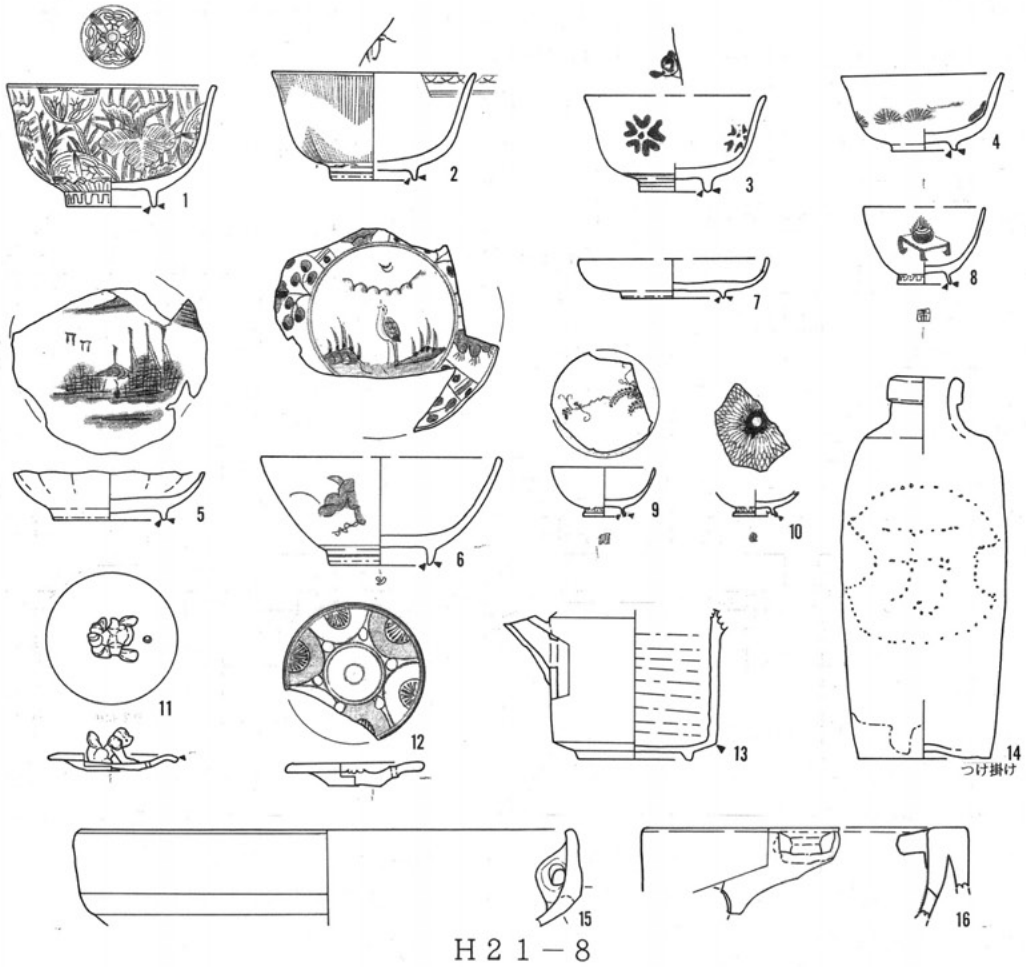
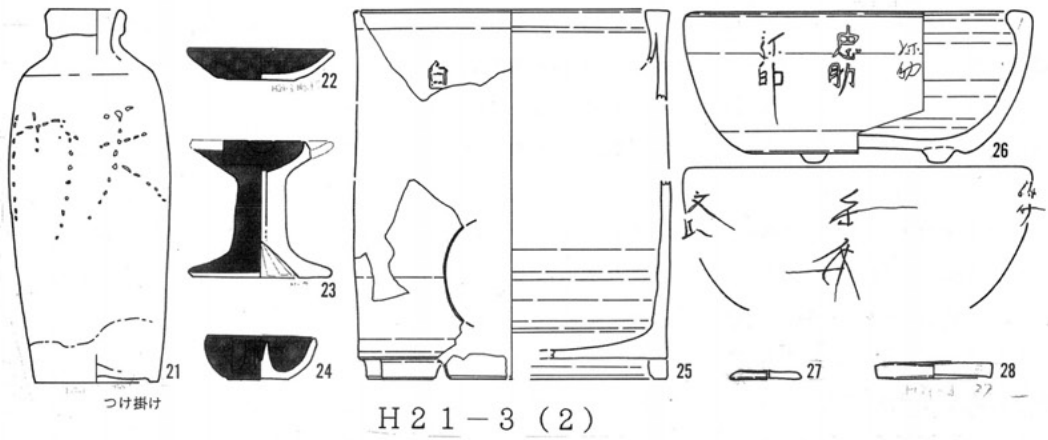
土器、焼塩壺ともに、量的な点からも、その構成という点からも、前項のH21-1 と極めて類似している点が注目される。ほぼ同時期の所産と見てよからう。

H21-3 (IV-082, 083図) 本遺構から出土した遺物はVIII期に位置するまとまりを見せるが、これは近接するH21-1, 2 と同様な様相を示している。その遺構の形からもほぼ同時期に存在したゴミタメと考えられるだろう。

磁器(1-6, 8-9) 1は瀬戸・美濃系の広東碗でJC-1-cに属す。畳付には砂が付着している。高台裏には釘書きによって「木」が施文されている。2は碗でJB-1-eに属す。見込みには二重圏線内に丸文状の松竹梅が描かれている。接合面に焼き継ぎ痕がみられる。3は小坏でJB-6-aに属す。高台脇は面取りされている。体部には「福寿」字が描かれている。接合面には焼き継ぎ痕がみられる。4は皿でJB-2-eに属す。胎土は灰白色を呈す。見込みには手描きによる五弁花が描かれ、高台裏には二重角枠内に渦福銘が描かれている。5は鉢でJB-5に属す。見込みには二重圏線内に丸文状の松竹梅が描かれている。6は合子の蓋でJB-18 に属す。円筒形であるが、体部はやや内傾している。8は蓋でJB-14-cに属す。体部はドーム形を呈し端部でやや外反する。つまみは中央がややくびれている。9は仏飯器でJB-8に属す。胎土は灰白色を呈す。体部は丸味をもって開き腰はあまり張らない。

陶器(7, 10-18) 10は鉄釉碗でTC-1に属す。腰が張っている。11は植木鉢でTC-21 に属す。胎土は灰白色で硬質である。釉薬は灰釉で高台内側から口縁内側にかけて施釉されている。高台裏には輪トチと思われる溶着痕がみられる。12は壺でTC-15 に属す。肩部に一对の把手が貼り付けられている。胴部から口唇にかけて灰釉が施されている。13は鍋でTZ-33-a に属す。体部は丸味を帯びて立ち上がり口縁は外折する。口唇上には一对のアーチ状の釣手掛けが貼り付けられている。見込みにはピンの溶着痕がみられる。胴部から内面にかけて柿釉が施されている。底部にはスガが付着している。14は半胴甕でTC-26-a に属す。体部はやや丸味を帯びている。胴部から内面にかけて

第一節 陶磁器・土器



IV-083図 H21-3(2)、H21-8出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

鉄釉が施されている。底部中央は穿孔され植木鉢として再利用されている。7, 15-18は蓋である。15は行平鍋の蓋でTZ-33-bに属す。灰釉が施され平行沈線が巡っている。7, 16-18は土瓶の蓋である。7はTZ-34-bに属す。胎土は黄白色を呈す。白泥を施し鉄絵で葉を描いている。裏面は無釉である。16はTZ-34-fに属し鮫釉が施されている。17はTZ-34-aに属し銅緑釉が施されている。つまみは団子状を呈し放射状の沈線を伴っている。裏面にススが付着している。18はTZ-34に属し素焼きである。

徳利(19-21) 19は瀬戸美濃産の灰釉系5合徳利で胴部の表裏にはそれぞれ異なる点刻の釘書が認められる。肩部が張って寸胴であり、高台は浅く雑に削り込まれる。20, 21は瀬戸美濃産の2合半徳利で点刻の釘書が認められる。いずれも口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利, 5合・1升徳利は230-240 個体ほど出土するが、志戸呂産徳利はごく僅かしかない。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利は20個体ほど認められる。

灯火具(22-24) 全て透明釉である。22は油皿, 23は有脚受付, 24は乗燭である。24の灯心立の先端のみに灯芯油痕がある。22, 24は左回転の糸切り底である。なお23の油皿底面には径0.6cmの脚部へ続く焼成前の穿孔がある。類例がなく、性格も不明。図示した以外灯火具は4点の出土。油皿3点, 有脚受付1点である。他に鉄釉受付の口縁片も出土。H21-1・2と類似した出土状況である。

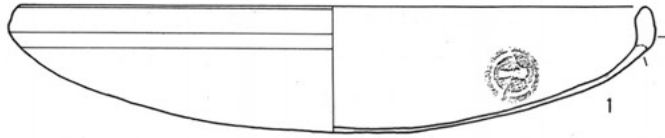
土器(25-27) 25は2類dに分類される火鉢類。口縁および底部の破片である。いずれもロクロ成形である。二重になった体部の内側は残存しない。正面には円形と思われる開口部が切れ、周囲がナデられている。口縁部の下には「自」と思われる文字が陰刻されている。切り出されて形づくられた板状の足をもつ。底面には回転ヘラ切りに類する渦巻状の圈線が見られる。胎土は白色を帯びた肌色で、外面には白色粘土の化粧掛けが施されており、平滑である。26は1類aに分類される小型の軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面は横にナデられ平滑である。底部付近は横にケズられている。底面にはコビキ痕が見られる。体部外面には、「忠助」「弥助」と読める文字や、「文政」と思われる文字、さらに判読し得ない文字様のものが焼成後に刻書されている。27は焼成前の穿孔のある軟質瓦質の小円盤。灯火具としてのカワラケの一種とも思われるが、断面は台形であり、あるいは紡錘車もしくはそのミニチュアとも思われる。9点の火鉢類がほかにある。

焼塩壺 28はウ類に分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。上面には手掌痕が見られ、側面および下面は整っている。ほかに類似の蓋が4, ロクロ成形の身13の小片がある。

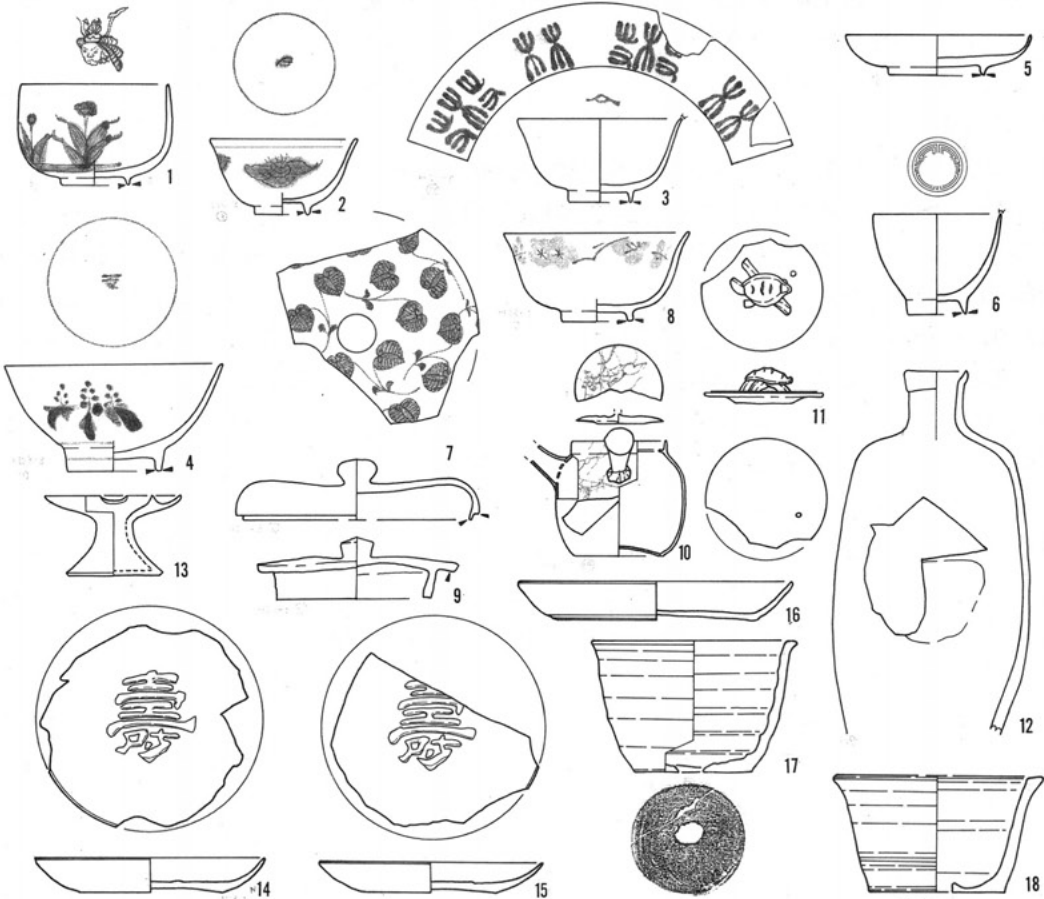
H21-8 (IV-083図) 本遺構から出土した遺物は瀬戸・美濃系の磁器製品を多く含み、VIII期に位置付けられる。

磁器(1-10) 1は端反碗でJB-1-nに属す。口縁内側には墨弾きによる四方櫛が巡る。2-4は瀬戸・美濃系の端反碗でJC-1-dに属す。2の染付線は細くにじみもない。接合面に焼き継ぎ痕がみられる。4は文様の輪郭を毛彫りし、その上にダミを施している。5は染付小皿でJB-3-bに属す。体部は型押しによって輪花を形成する。7は瀬戸・美濃系の白磁の小皿でJC-3-bに属す。高台裏に円形の削り込みがみられる。6は鉢でJB-5に属す。口縁部は輪花を形成している。接合面には焼き継ぎ痕がみられ高台裏には「ソ」字の焼き継ぎ屋の印がみられる。8-10は瀬戸・美濃系の小坏でJC-6-aに属す。8は高台裏に銘がみられる。9, 10は高台がクランク状に広がる。見込みには呉須と鉛ガラスの混合物によって9には藤が, 10には斜格子状文が上絵付けされている。また9, 10ともに高台裏

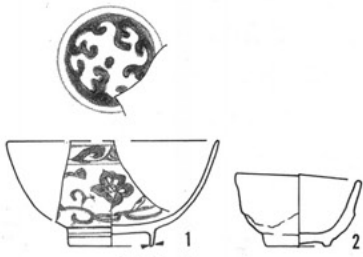
第一節 陶磁器・土器



H 2 2 - 1



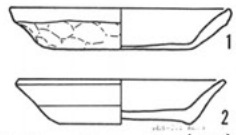
H 2 3 - 3



H 2 3 - 4



H 2 8 - 1



H 2 8 - 2 · 3 (1)

IV-084圖 H22-1, H23-3, H23-4, H28-1, H28-2·3(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

に同一の銘がみられる。

陶器(11-13) 11, 12は急須の蓋でTZ-16に属す。11のつまみは狛犬を象っている。釉薬は外面に長石釉が施されている。12は素地の上に白泥を塗り、鉄釉と黄絵の具で花卉文様を描く。二次焼成を受けている。13は水注でTC-27-bに属す。注口部の穿孔は一箇所である。灰釉が施されている。

徳利 14は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返され寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利が190個体ほど、5合・1升徳利が250個体ほどと大量に出土する一方、志戸呂産徳利はごく僅かが確認されるのみである。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利もごく小量が認められる。

焙烙 内耳をもつ焙烙は少なくあえて図示した。15の口径28.8cm。口縁にややくびれをもち、ケズリが屈曲部をめぐる。内耳は内部が空洞であり、F34-11などに比べ新しい。F33-3の109などと似る。ただし遺構出土の他の遺物とは時期的に異なり、流れ込みによるものと考えている。

土器 16は2類dに分類される硬質土師質の火鉢類。口縁破片である。ロクロ成形のものが組み合わされている。口縁内側には、直方体を基調とする突起が設けられている。二重になった内側のものには円孔の一部が残っている。外面はいわゆるチリメン状の凹凸がつけられ、その上がミガかされている。内面には火熱により白色化した部分がある。ほかに火鉢類の小片5個体がある。

H22-1 (IV-084図) 焙烙 1の口径33.6cmで、ほぼ完形。口縁は短く内傾し、底面の器壁は薄い。底にH21-2の79と同形の丸に一の字の刻印が認められる。刻印ばかりでなく、胎土・形態もよく似ている。あるいは同じ製作者が作ったと想像するほどであった。

H23-3 (IV-084図) 磁器(1-7) 1-4, 7は染付である。5, 6は白磁である。1はJB-1-jである。2, 3はJC-1-dである。2は毛彫りの上に、呉須が施される。3は口縁部に口錆が施される。低火度焼成のため、上釉に透明感はなく呉須の発色も悪い。4はJC-1-cである。青の濃い地呉須を使用している。5はJC-3-bである。6は「壽」の字を図案化したと思われる印が押された小坏でJC-6-aである。口唇には口錆が施されている。7はJC-14である。地呉須ではなく輸入呉須を使用している。

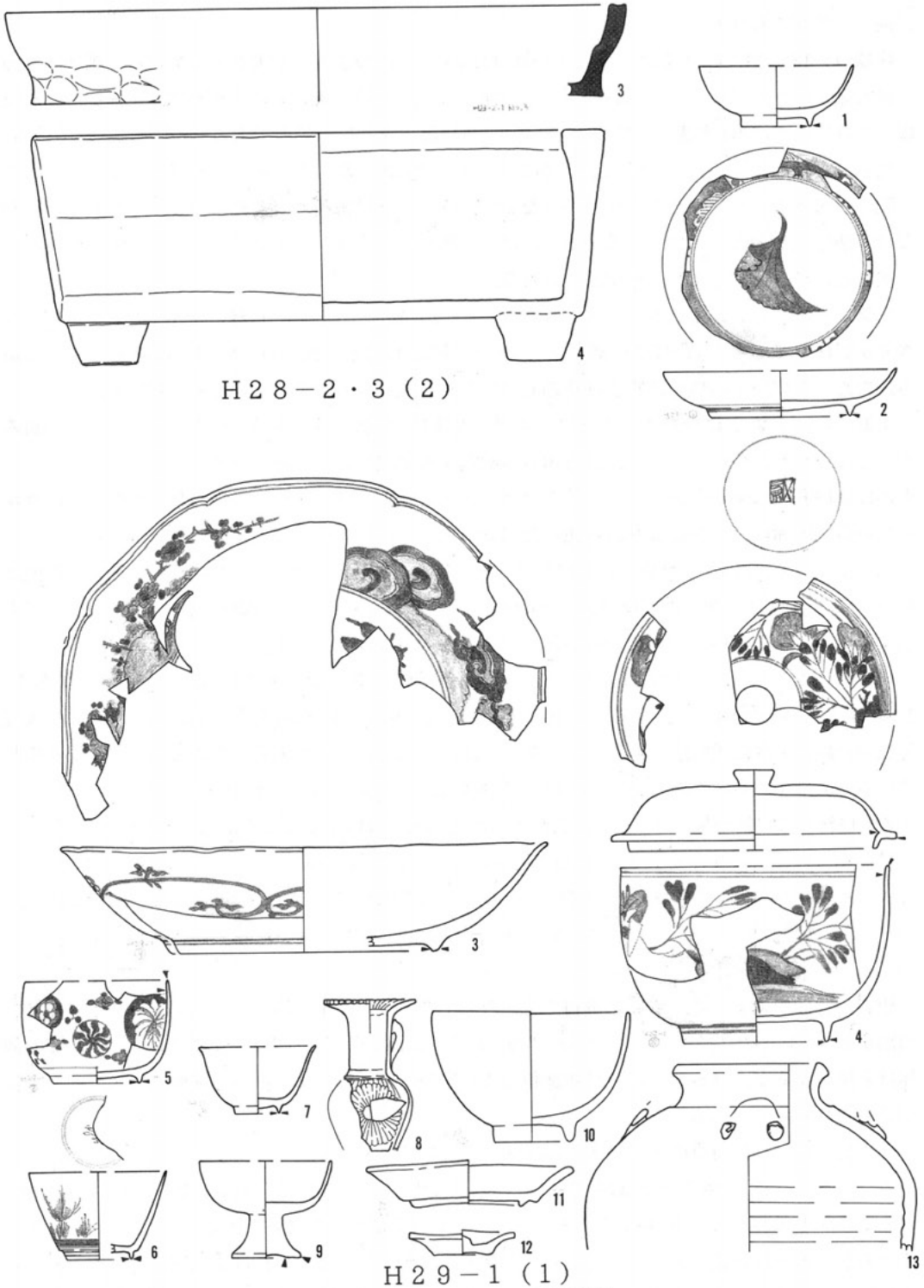
陶器(8-11) 8はTD-1-fである。白土と鉄絵の具で梅文様を描いている。9は鉄釉を施したのち、降灰させている。胎土は硬質で焼き締められている。産地は不明。10はTZ-16である。胎土は堅く精緻で、薄く作られている。産地は万古か。11はTD-16の蓋である。灰釉の蓋に鉄釉を施した亀をつまみとして貼付している。

徳利 12は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で、このタイプとしては中型のものである。折り返し口縁で肩部が張り、胴部の2箇所にはくぼみが認められる。2合半徳利と5合・1升徳利はそれぞれ220個体ほど出土するが、ひきかえ志戸呂産徳利はごく僅かしかない。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利も小量が認められるのみである。

灯火具 灯火具は1点のみの出土。13は灰釉の有脚受付である。

カワラケ(14-16) カワラケは図示の3点のみの出土である。14, 15は袍衣容器(北原・谷川 1989)のカワラケと思われる。2点の出土であり身と蓋として機能したのであろうか。「壽」の陽刻が見込みにある。器面は白色であり、通常のカワラケと異なる。二つとも口径は丁度四寸である。形態および陽刻の状態が一致することから、型作りでつくられた可能性がある。16も通常のものとは異なる

第一節 陶磁器・土器



IV-085 圖 H28-2·3 (2)、H29-1 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

るカワラケである。口径14.6cmでおそらく手捏ねであろう。器壁が薄く、指頭による圧痕が随所に認められる。類例もなくはっきりしないが、14、15と相伴したものと考えている。遺構の性格が問題となろう。

土器(17, 18) 17は軟質土師質の、18は硬質瓦質の植木鉢。ただし17は部分的に硬質瓦質に似た色を呈する。底面中央に焼成前の穿孔を有する。

H23-4 (IV-084図) 磁器 1は青花碗で、JA-1である。口唇部は虫食いが認められる。

陶器 2は灰釉小坏で、TC-6に分類される。

H28-1 (IV-084図) 磁器 1は染付碗でJB-1-dに属す。高台裏には「大明年製」銘が描かれている。

H28-2・3 (IV-084, 085図) カワラケ(1, 2) 1は手捏ねである。口径四寸弱で、完形。灯芯油痕が口唇を全周し、内面にまで広がる。2は右回転糸切りによる。1と同様、灯芯油痕は内面まで広がる。カワラケは15点の出土。手捏ねは2点のみであり、他はすべて右回転糸切り底である。カワラケの形態および構成は「池」とよく似ている。

焙烙 3は瓦質の焙烙である。口径は不確実であるが、38.5cmと推定する。内面に段があり、おそらく内耳をもつ形態である。口縁下半に指頭による押圧が認められる。この地点で確認されたものとも初期の焙烙である。

土器 4は1類cに分類される軟質瓦質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われ、一辺の長さは36cmほどであるが、他辺の長さは不明である。足は大型で底面との接合部を中心に丁寧にナデられている。外面は横のケズリが、角では縦の、底面と交わる部分では横の強いケズリが施されて面を成している。内面は横にナデが走る。また各隅では縦に強くナデが加えられ窪んでいる。底面外側にはわずかにチヂレ目が見られる。同様の火鉢類の小片1がある。

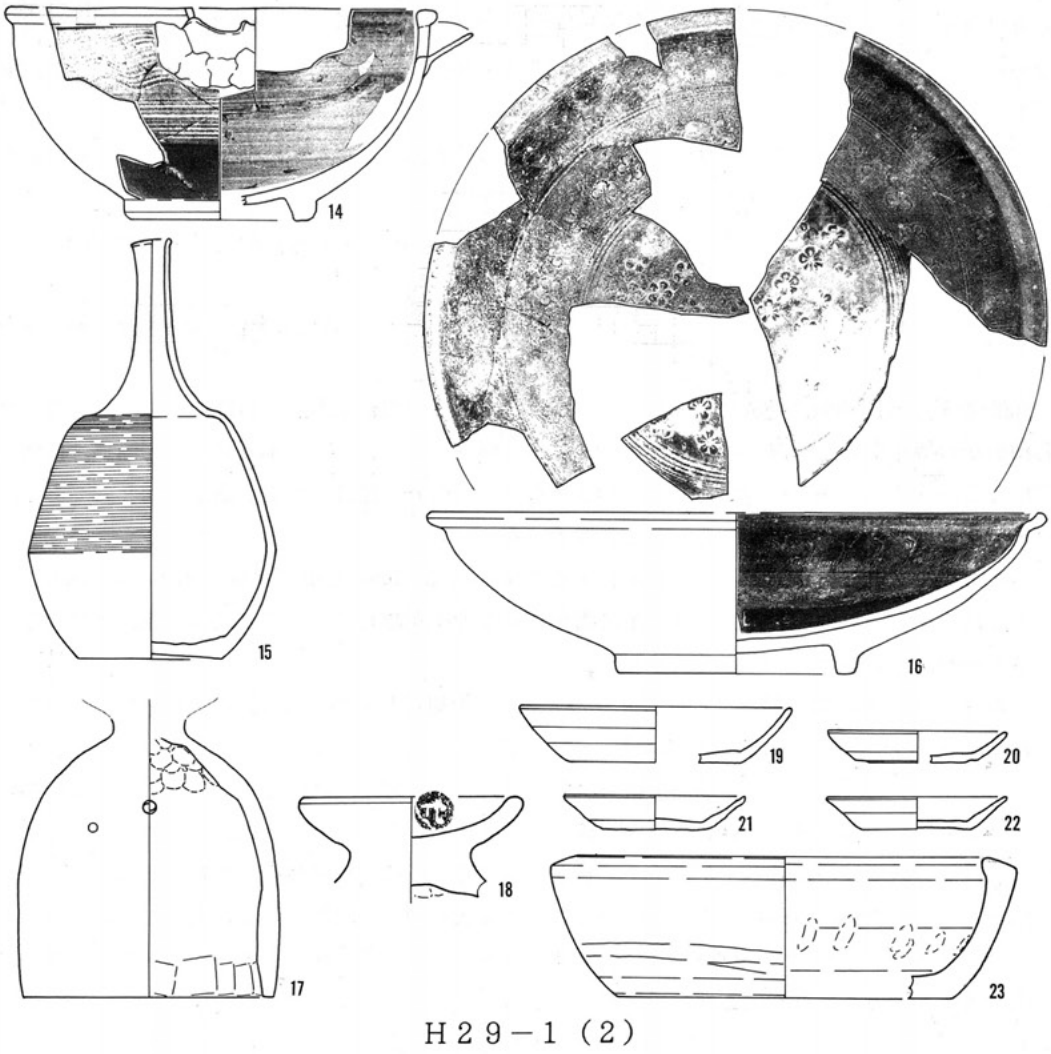
H29-1 (IV-085, 086図) 本遺構中からは二次焼成を受けた遺物が多量に出土している。いずれも小片であり、L32-1と類似点が多い。時期的にも同じで、天和二年の火災の際の後始末の際の一括廃棄であると考えられる。本地点ではII期に位置する。

磁器(1-9) 磁器は1, 7-9の他は染付で、いずれも二次焼成を受けている。1は白磁の小坏でTC-6-aに分類される。2はJB-2-cである。ハリ支えはない。3は輪花皿でおそらく長吉谷窯あたりで焼かれた製品であろう。4, 5はJB-13-aである。6は小坏でJB-6-dである。7は白磁でJB-6-bに分類される。8は白磁の仏花器で、JB-11に分類される。9は白磁の仏飯器でJB-8に分類される。

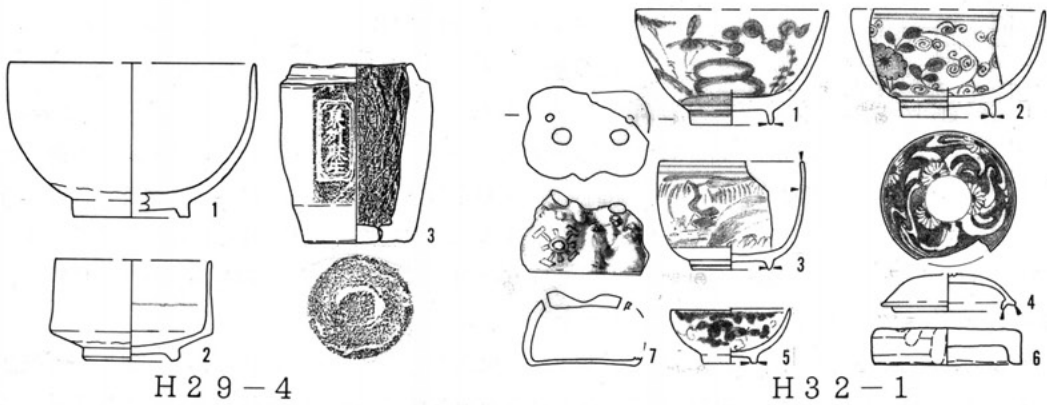
陶器(10-14, 16) 10は京焼風陶器の中でいわゆる呉器手と称されているものでTB-1-aである。11はTC-2-aである。見込み、高台裏には三箇所のピン痕が認められる。12はTC-14-aで器面には鉄釉が施されている。13はTD-15である。胴部上半以上は鉄釉が掛けられている。肩部には四箇所の橋状の把手が貼付されている。14は刷毛目の片口鉢で、TB-23に分類される。16は三島手の鉢でTB-5-bに分類される。通常象嵌とは異なり、白土が充填されていない。見込み、畳付には胎土目積みの痕跡が観察される。高台脇は面取りされていない。

徳利 15は備前産の徳利と考えられる。胎土は黒褐色で堅く焼き締められており、最大径は胴部の中程にあって、これより上部には鮮やかな糸目文が施されている。口縁部が玉縁状を呈す長い頸

第一節 陶磁器・土器



H 2 9 - 1 (2)



H 2 9 - 4

H 3 2 - 1

IV-086圖 H29-1(2)、H29-4、H32-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

部が特徴的で、ベタ底である。2合半徳利は全く見られず、5合・1升徳利、志戸呂産徳利も混入と思われる破片がごく僅かに認められるのみである。これにひきかえ備前産徳利、あるいは瀬戸美濃産の船徳利かと思われるものは25個体分ほどが確認されている。

灯火具(17, 18) 17は頂部を欠く小型の瓦燈頭部である。上方に空気取り入れ用の穴を穿つ。これに対し18は瓦燈頂部の油皿のみの確認である。見込みに「π」字状の印刻をもつ。通常出土する大型の瓦燈頭部片である。

カワラケ(19-22) すべて左回転の糸切り底であり、二次焼成を受けていた。このため22は口縁が広がった可能性もある。20-22は口径に比べ底径が大きく、左回転糸切り底の中でも古く位置づけられる。他にカワラケは7点の出土。図示したものと同様、すべて二次焼成を受けている。

土器 23はI類a口に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。全体に強い火熱を受け、また底部のほとんどを欠損している。体部外面には横のケズリが見られる。体部内面には指頭痕が見られ、口縁部および底部付近は横にナデが施されている。底面にはスダレ状の圧痕が見られる。ほかに8個体の火鉢類の破片がある。

H29-4 (IV-086図) 陶器(1-2) 1はTC-1-cである。高台裏まで施釉されている。2はTD-32である。灰釉が掛けられており、内面には鉄絵の具で目盛りと考えられるラインが引かれている。

焼塩壺 3はII類1b2に分類される身。3類1bに分類される刻印をもつ。内面は刺し子のある粗い布目が見られる。

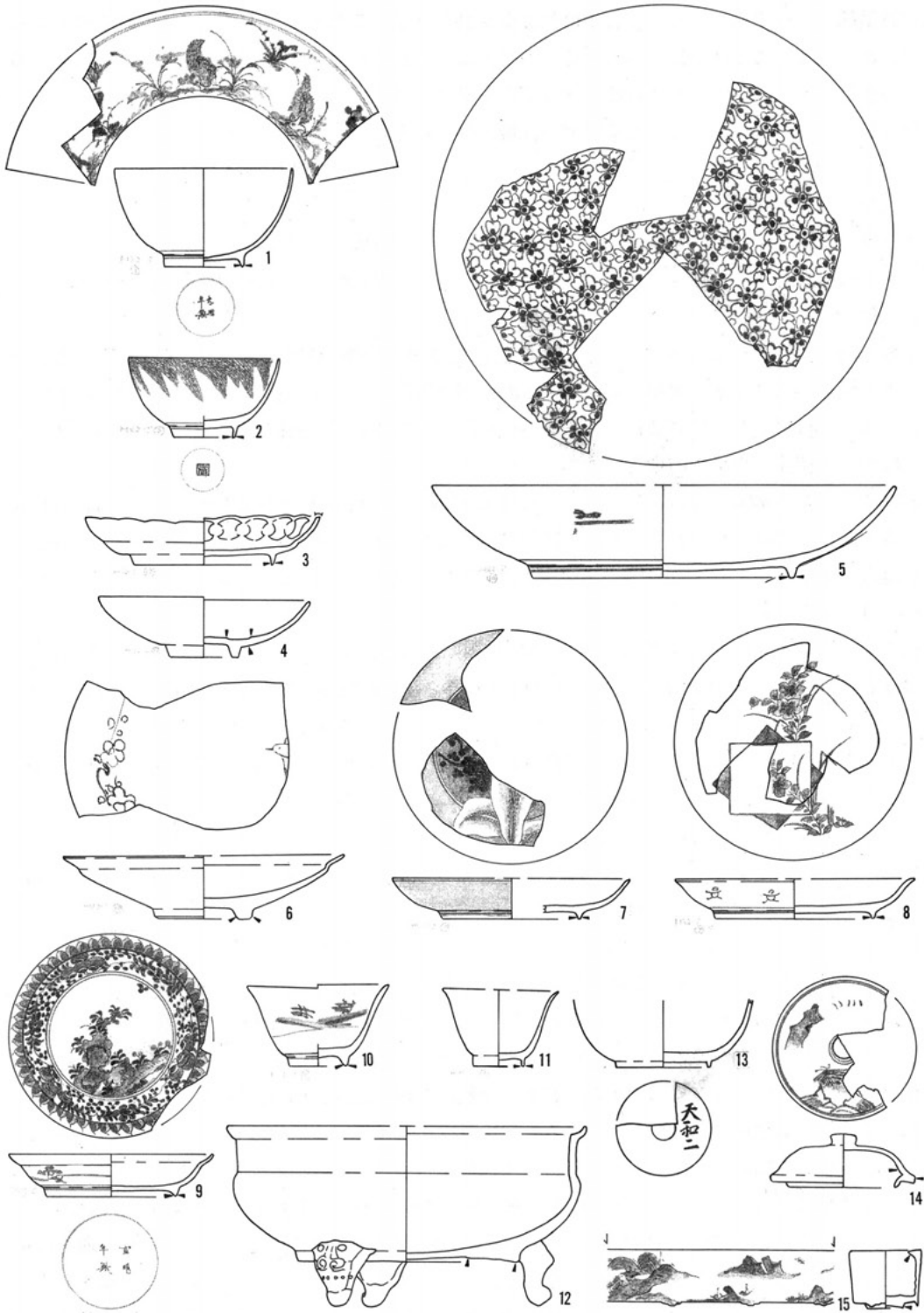
H32-1 (IV-086図) 磁器(1-5, 7) 3は色絵でその他は染付である。1, 2はJB-1-dである。本類はF34-11より多量の出土を見ており年代的に指標となる碗形であると考えられる。3は青, 朱, 緑, 呉須などで風景を上絵付けされた蓋物で、JB-13-aに分類される。4はJB-14である。G32-1出土遺物との遺構間接合をしている。5はJB-6-aで葡萄文様が描かれる。7は色絵の大黒, 恵比寿様を象ったと思われる水滴で、JB-19に分類される。首から上は欠損しているが、漆継ぎの痕跡が認められる。二次焼成を受けている。

焼塩壺 6はI類1bに分類される蓋。白色を帯びた肌色を呈する。下面には極めて細かい布目が見られ、側面に指頭痕が見られる。

H32-5 (IV-087, 088図) 本遺構中からは多量の遺物が検出されている。年代的には本地点のII期が大部分を占めているが、III期のものも若干含まれているようである。II期ではL32-1がもっとも多量の遺物が出土しているのであるが、遺物群を見ても供応用のものであると思われる、通常的生活用具を直接反映しているとは考え難い。図示できた点数は少ないものの、本遺構の遺物群が、よりそれに近い性格であろうと考える。II期では他の遺構の遺物群同様、磁器の占める割合が多い事があげられ、本地点の特徴となっている。二次焼成を受けている遺物はII期で、III期のものは被熱されていない。13の「天和二」年の墨書は年代比定の手掛かりとなるであろう。

磁器(1-12, 14, 15) 1, 2は染付碗で、JB-1-dに分類される。1は胎土、呉須の発色は良好で、丁寧に作られており、銘は「太明年製」が描かれている。2は摺絵の技法を用いているが、通常白抜きされている部分には白土が埋められ、その上に呉須を施している。銘は一重角枠内角福である。3は白磁でJB-2-cに分類される。口唇には口銹が施され見込みは型で分銅形の連続文を陽刻させて

第一節 陶磁器・土器



IV-087圖 H32-5出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

いる。高台裏にはハリ支えの痕跡が一箇所認められる。二次焼成を受けている。4は青磁でJB-2-kに分類される。高台裏は無釉で、畳付には白砂が多量に付着している。二次焼成を受けている。5は染付でJB-2-cである。ハリ支えが認められる。6は染付であるが上釉は青磁釉を用いている。高台は幅広の蛇ノ目高台で、外周、内周面取りされている。7-9は染付皿でJB-2-cに分類される。7は素焼する前より絵付けを意識して作られており、見込みの百合の花の部分は型で凹ませて作られている。見込みの百合の花と高台裏には透明釉、その外は薄瑠璃釉に掛け分けられている。これらの手法は献上用に作られた鍋島に多用される技法で、この製品は鍋島ではないが高級磁器といえよう。二次焼成を受けている。8は数個体の揃いで出土している。高台裏にはハリ支えが一箇所認められる。二次焼成を受けている。9は胎土、呉須の発色、絵付けなどがきわめて良好で、裏文様、高台の作りから柿右衛門窯あたりの製品と考えられる。銘は「宣明年製」である。ハリ支えが一箇所認められる。10は染付、11は白磁でともにJB-6-bに分類される。二次焼成を受けている。12は青磁でJB-36である。獣面の脚が三箇所に貼付されている。二次焼成を受けている。14は染付の蓋で、JB-14-gである。二次焼成を受けている。15は染付の香炉でJB-9である。二次焼成を受けている。

陶器(13, 16-18) 13は京焼風碗でTB-1-bに分類される。高台裏には「天和二」の墨書が書かれている。二次火熱を受けている。16はTD-1である。灰釉が施されている。高台裏は無釉で二次焼成を受けている。17はTD-9である。口縁部及び外面に灰釉が施されている。二次焼成を受けている。18はTC-9-bである。口唇部は灰落としにも使用したようで、敲打痕が明瞭に観察される。見込みにはピン痕が認められる。二次焼成を受けている。

徳利 19は瀬戸美濃産の徳利で船徳利とも呼ばれるものである。茶褐色釉がつけ掛けされており断面がくの字型になる口唇部と低くどっしり座った器形が特徴的である。2合半徳利、5合・1升徳利も少量が出土しているが、船徳利と思われるものがそれをはるかに上回る量で(40個体ほど?)見られ、備前産徳利も少量が認められる。志戸呂産徳利も20個体弱が出土しており、底部片が5点含まれるが、そのうち少なくとも4点は外周にヘラ削りの施されないものである。

焼塩壺 20はA類1に分類される蓋。桃色がかった橙色を呈する。内外面ともよくナデられているが、一部に粗い布目が見られる。ほかにII類の身の小片が3個体ある。

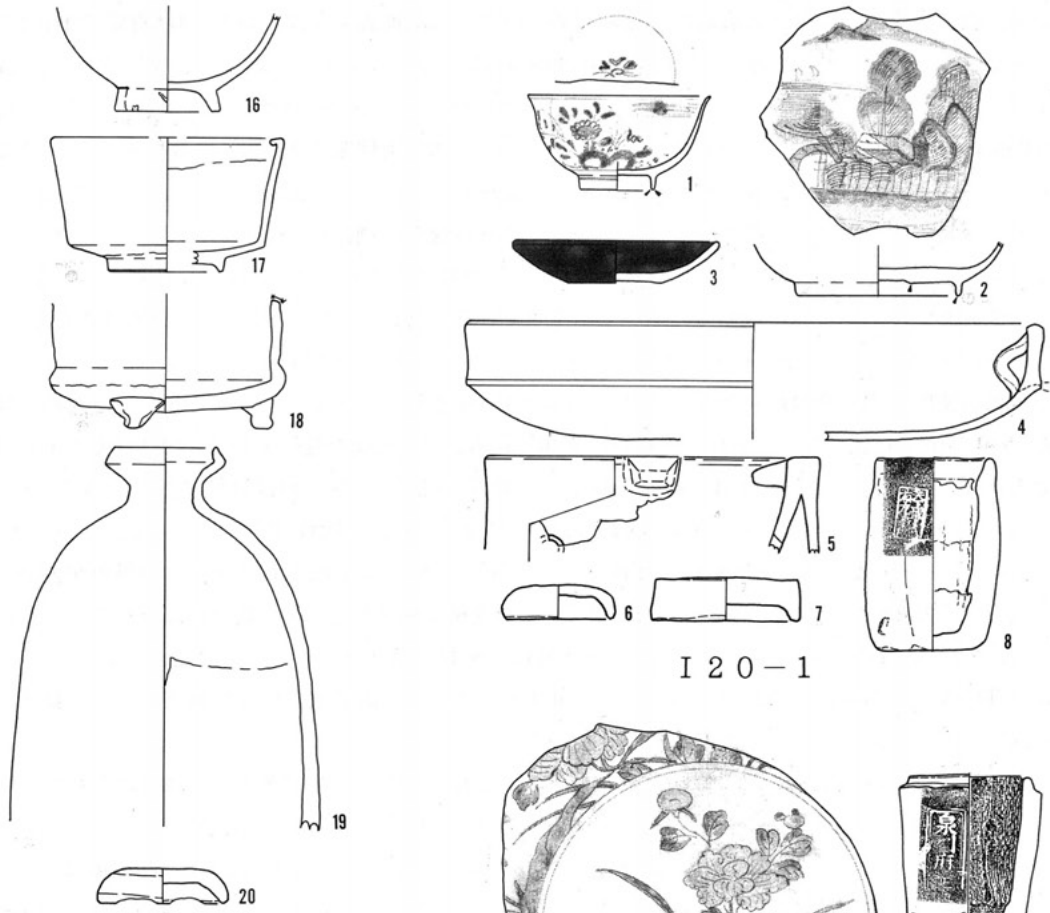
I20-1 (IV-088図) 磁器(1, 2) 1, 2は染付である。1はJC-1-dで、絵付けには地呉須を使用している。2はJB-2-iである。輪花皿と思われる。

灯火具 3は透明釉受付。灯芯油痕が口唇を厚く全周する。左回転の糸切り底である。他に灯火具は4点の出土。透明釉の受付1点、有脚受付2点、銀彩を施した素焼受付が1点である。

焙烙 4は口縁にくびれをもち、ケズリが屈曲部に施される。口縁形はF34-11の199に似る。ただし内耳が異なり、短い棒状の粘土を折り曲げて口唇から底部にわたしている。類例はない。17世紀代の瓦質の焙烙の影響を受けたのかもしれない。

土器 5は2類dに分類される硬質土師質の火鉢類。口縁の破片である。ロクロ成形のものが組み合わされている。口縁内側には、直方体を基調とする突起が設けられている。二重になった体部の内側には円孔の一部が残っている。外面はいわゆるチリメン状の凹凸がつけられ、その上がミガかされている。

第一節 陶磁器・土器



H32-5(2)

I20-1



I20-3

IV-088图 H32-5(2)、I20-1、I20-3出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

焼塩壺(6-8) 6はA類に分類される蓋。桃色がかった橙色を呈する。内外面ともよくナデられている。7はI類2に分類される蓋。火熱を受けて変色している。胎土に雲母をわずかに含む。下面には粗い布目が見られる。8はI類3に分類される身。2類2bの刻印をもつ。桃色を帯びた橙色を呈する。ほかにI類3の小片1がある。

I20-3 (IV-088図) 磁器(1-3, 5) 磁器は全点染付である。1はJB-1-eである。二重角枠内渦福の銘が記される。2はJB-3-aである。絵付けはコンニャク判で行われている。3はJB-7-bである。二重角枠内渦福の銘が記される。5は大皿で、JB-2-eに分類される。銘は「大明成化年製」で、ハリ支えが五箇所認められる。

陶器 4は瀬戸・美濃産の御室風碗で、TC-1-dに分類される。呉須で薄く絵付けがされている。

焼塩壺 6はII類2aに分類される身。3類1bに分類される刻印をもつ。内面は下三分の一ほどが平滑でその上に粗い布目が見られる。刻印は圧迫されて判然としない部分もあるが、3類1bのなかでは、字体や大きさなどが特異なものである。ほかにI類の蓋2, II類1bの身1がある。

I29-1 (IV-089図) 陶器 1はTC-9-bで柿釉が施される。底部にはススが付着している。

焼塩壺 2はI類1bに分類される蓋。薄手で、均整がとれている。内面には細かい布目が見られる。上面におそらくは梅鉢の紋を描いたと思われる墨書がある。

I30-1 (IV-089図) 磁器(1, 2) 1は青磁染付碗で高台の削り、釉際の処理は丁寧に行われている。口唇は口銹が施され、見込みにはコンニャク判の五弁花が描かれる。コンニャク判五弁花が描かれるもっとも初期の製品であろう。JB-1-dに分類される。2は染付小坏で、JB-6-bに分類される。銘は「宣明年製」である。

焼塩壺(3, 4) 3はA類に分類される蓋。桃色がかった橙色を呈する。内外面ともよくナデられているが一部に粗い布目が見られる。4はI類3に分類される身。2類2bに分類される刻印をもつ。ほかにA類の蓋が1, I類3の身が3見られる。

J20-1 (IV-089図) 陶器(1, 2) 1はTB-1である。灰釉が施される。高台裏は無釉で、畳付には砂が付着する。2はTC-2-bである。見込みには窯積みの際、直重ねされた溶着痕が認められる。

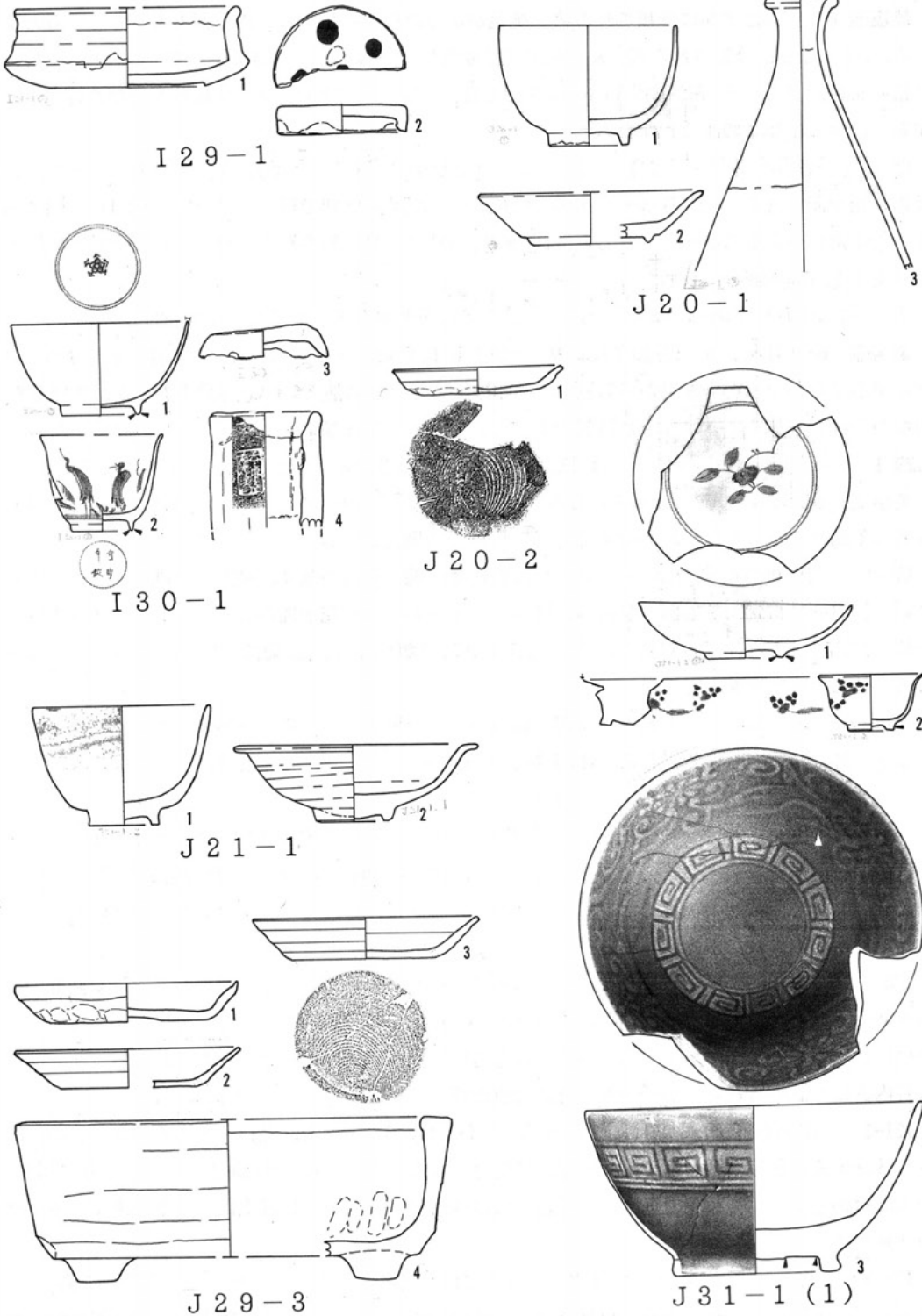
徳利 3は志戸呂産の徳利で、口頸部には茶褐色釉が掛けられている。口唇部は鏝状に張り出し外縁部が整形されて玉縁状となる他、ラッパ状の頸部が印象的である。

J20-2 (IV-089図) カワラケ 1の器形は手捏ねに似るが、拓本で示したように右回転の糸切り底のカワラケである。底部周縁にケズりがめぐる。この時期の糸切り底のカワラケは底面近くの口縁が肥厚する傾向にあり、あるいはこれを避けるためケズりだったのかもしれない。ケズりは口唇内側にも認められる。器面内外を灯芯油痕が覆う。

J21-1 (IV-089図) 陶器(1, 2) 1は碗でTC-1に属す。胎土は乳白色できめ細かい。高台はやや外反する。釉は鉄釉が施され、全体に黒褐色の斑点がみられる。2は溝縁皿でTB-2-bに属す。胎土は橙褐色で白色微粒を混入する。見込みには砂目痕がみられ、口縁上には1条の溝が巡る。高台は無釉である。

J29-3 (IV-089図) カワラケ(1-3) 1は手捏ねで完形である。「池」出土のカワラケと異なり、器壁も厚く丁寧な作りである。口唇内側には沈線がめぐる、見込みには縦方向のナデ調整が認め

第一節 陶磁器・土器



IV-089 Ⅰ29-1、Ⅰ30-1、J20-1、J20-2、J21-1、J29-3、J31-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

られる。底面には指頭によるへソ状の凹みがある。2, 3の口径は13.7cmで、右回転糸切り底である。いずれも灯芯油痕が口唇を全周する。他にカワラケは4点の出土。1点が手捏ね、3点が右回転の糸切り底である。

土器 4 は1類cに分類される軟質瓦質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われるが、辺の長さは不明である。外側面には横の深いケズリが見られ、底面と交わる部分では横の強いケズリが施されて面を成している。内面は横にナデが走る。底面外側にはわずかにチヂレ目が見られる。

J31-1 (IV-089, 090, 200図) 磁器(1-3, 15) 1はJB-2-aである。畳付には、砂が付着している。2はJA-6である。高台は幅広で脇は面取りされている。高台裏無釉である。3は青磁の鉢でJB-5である。高台裏は蛇ノ目状に鉄釉が施され、窯道具の痕跡も認められる。見込み花文様は浮文、内外面の雷文は刻文である。15はJB-4-aである。型作りで高台は貼り付けられている。胎土、呉須の発色は良好である。

カワラケ(4-12) 4-6は「まわし糸切り」および「離し糸切り」の痕跡のあるカワラケである。口径は四寸前後であり、灯芯油痕は4のみに疎らに認められる。他は左回転の糸切り底と思われるが、7, 12は不明、11は右回転糸切り底の可能性もある。12はもっとも小さく口径10cm。他はほぼ四寸から五寸の間に分布する。7のみの口唇に灯芯油痕が全周する。他には認められない。D35-1と類似した関係にあり、左右両回転の切り離しによるカワラケが出土している。図示した以外、カワラケは42点の出土である。そのうち底部の切り離し痕の明瞭なものは9点あり、6点が左回転による。左回転の糸切り底が多いようである。両者は胎土・口縁形も異なり、他の破片の検討からもこの傾向がうかがえた。

焼塩壺(13, 14) 13はア類に分類される蓋。桃色がかった橙色を呈する。上面には指頭による押圧が見られるが、側面および下面はよくナデられている。14は鉢形3類に分類される身。刻印をもたない。外面は丁寧になでられ平滑で、底面に基筒底状のくぼみがある。内面は平滑であるが、側面と底面との交わる部分を中心に縫い目が見られる。

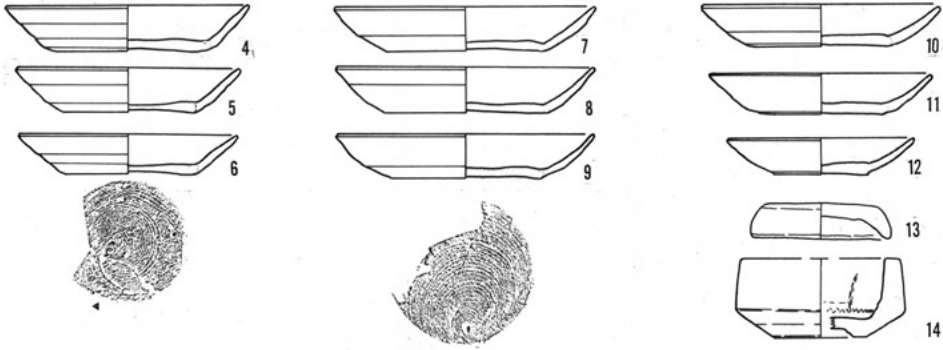
K20-1 (IV-090図) 磁器 1は染付の香炉でJB-9に分類される。二次焼成を受けている。

陶器(2-5) 2は鉄釉が施された小坏で産地は不明である。二次焼成を受けており、釉調、胎土などの判別ができにくい。3はTC-2-cである。長石釉が施されており見込みにはピン痕が認められる。器形的には、J20-1の2と類似しており、瀬戸・美濃の製品が長石釉より灰釉へと漸次推移している事から同一の系譜の年代的な相違と考えたほうがよさそうである。窯積み法もピンから直重ねへと推移しているであろう。二次焼成を受けている。4はTC-2-kである。釉は灰釉のみで、見込みにはピン痕が認められる。二次焼成を受けている。5はTC-9である。内面、外面体部に灰釉が施されている。二次焼成を受けている。

K20-2 (IV-090図) 陶器 1はTC-2-jで鉄絵の具で笹文がかかっている。見込みにはピン痕が三箇所認められる。

K22-1 (IV-090図) 焼塩壺(1, 2) 1はア類1に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。下面および側面はよくナデられている。2はI類3に分類される身。2類1の刻印をもつ。内面は桃

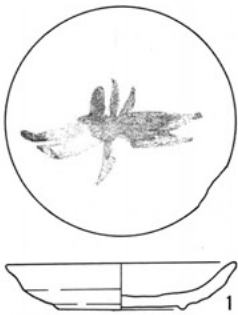
第一節 陶磁器・土器



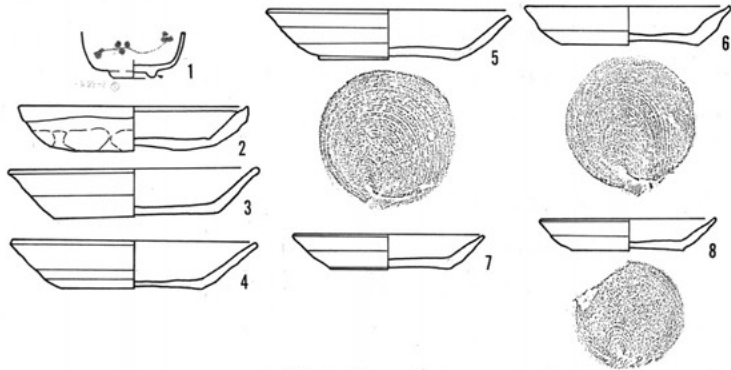
J 3 1 - 1 (2)



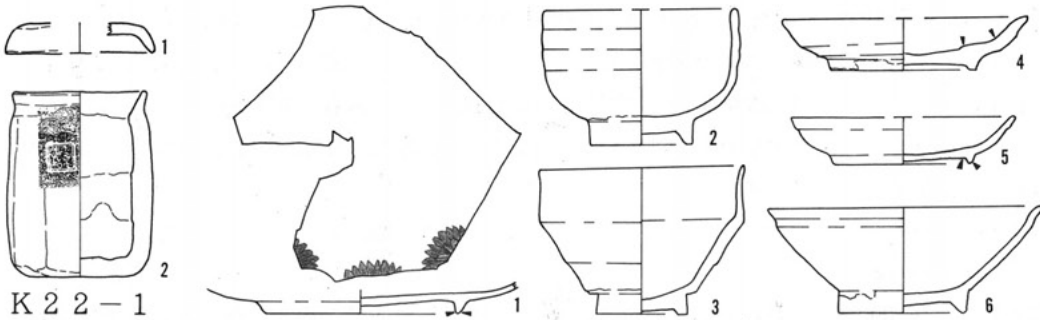
K 2 0 - 1



K 2 0 - 2



K 2 2 - 2



K 2 2 - 1

K 2 3 - 1 (1)

IV-090 図 J31-1(2)、K20-1、K20-2、K22-1、K22-2、K23-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

色、外面は橙色を帯びた褐色を呈する。外面はよくナデられている。

K22-2 (IV-090図) 磁器 1 は青花小坏で JA-6である。高台は幅広で底部裏は無釉である。

カワラケ(2-8) 2は手捏ねであり、口径四寸。完形である。J29-3の1 同様底中央に指頭によるへソ状の凹みをもち口唇には沈線がめぐる。見込みにも縦方向のナデが丁寧に施されている。灯芯油痕が口縁の両端に認められる。以下はすべて右回転糸切り底のカワラケである。3-5はほぼ同一の形態である。灯芯油痕は3点とも口唇を厚く全周する。6-8は大きさはわずかに異なるが口縁が底部近くで肥厚し、ほぼ似た形態となる。この時期の小型のカワラケはこれに似たものが多い。3点ともほぼ完形。灯芯油痕は6, 7 のみにわずかに認められる。手捏ねと右回転糸切り底のカワラケが共伴する好例である。

K23-1 (IV-090, 091図) 磁器 1 は青花皿で、JA-2に分類される。呉須は濃い青色で、畳付には耐火砂と考えられる粗砂粒が多量に付着している。

陶器(2-6) 2は TC-1-f で、灰釉が施されている。底部は無釉。3は TC-1-b である。4は輪割の灰釉皿で TC-2-m である。5は TC-2-c で、長石分が含まれると思われる灰釉が掛けられている。見込み、高台裏にはピン痕が認められる。6は TC-5である。灰釉が掛けられており、見込みにはピン痕が三箇所認められる。

カワラケ(7-9) 7, 8は右回転糸切り底のカワラケである。8は「まわし糸切り」の後で、「離し糸切り」を施したカワラケである。ともに口唇を灯芯油痕が全周する。他に8 と同形だが切り離し方法が異なり、「まわし糸切り」によるカワラケが1点出土している。9はこの遺構から1点のみ確認された左回転糸切り底のカワラケである。口縁を欠き全容は不明であるが、角度からみて口唇が外反するらしい。出土している右回転糸切り底のカワラケと類似した器形になりそうである。色調と胎土が異なり、灰白色であり器面も平滑である。あるいは左回転糸切り底のなかでもっとも古い形態であるのかもしれない。7は K22-2 の2-5 などと口径もほぼ同じであり類似した形態となるが、8はK22-2の5-8 とは明らかに異なる器形である。むしろD35-1の9-11と近い。底部の切り離し方法も同じである。そしてD35-1からは左回転の糸切り底のカワラケも出土している。点数が少なく明確ではないが、この遺構でも左・右両回転の切り離しによるカワラケの共伴関係が示せそうである。カワラケは図示した以外3点の出土である。1点は文中で触れたが他の2点も右回転糸切り底である。

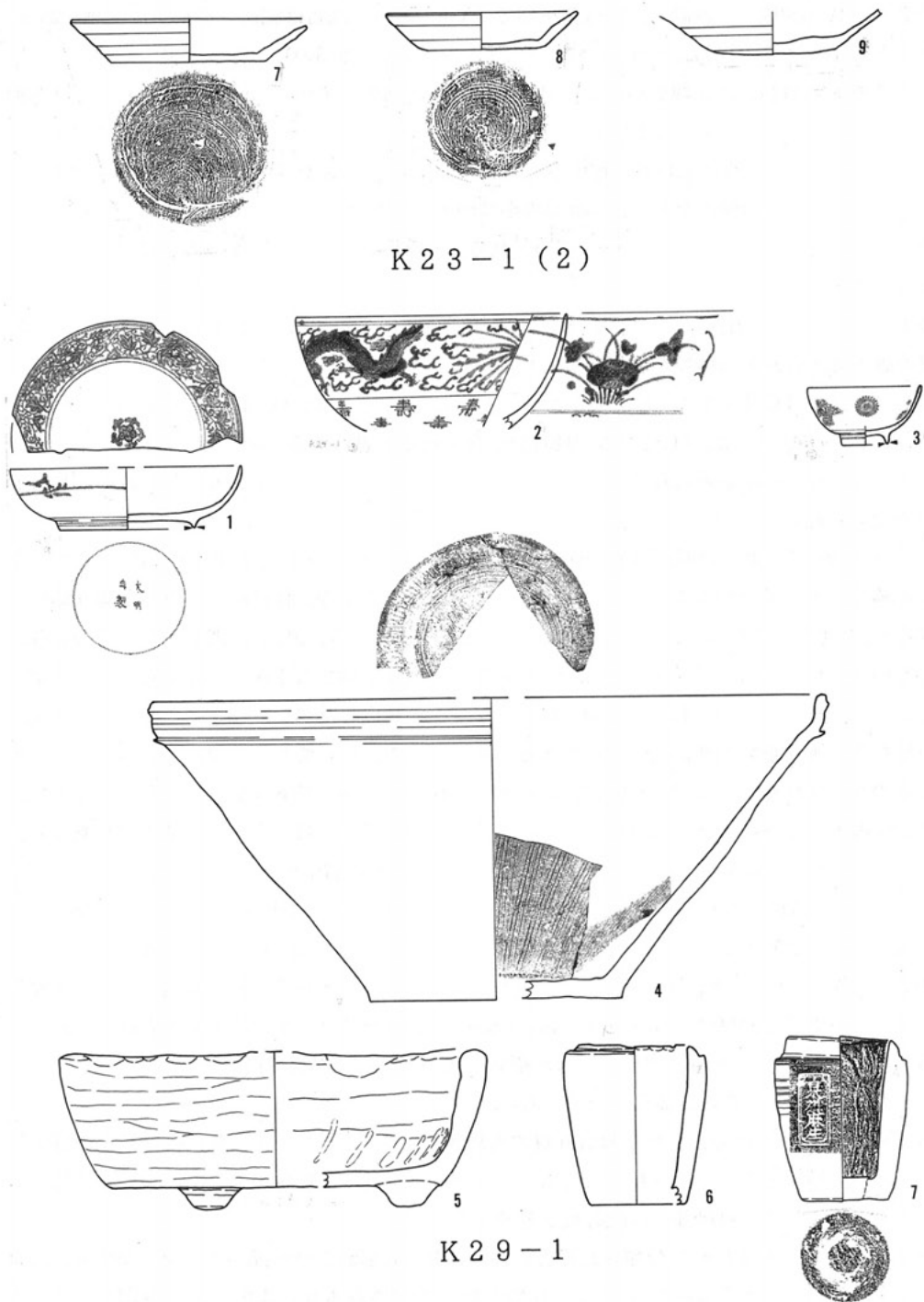
K29-1 (IV-091図) 磁器(1-3) 1-3は染付である。1は JB-2-e である。見込み文様、五弁花すべてコンニャク判で絵付けされている。銘は「太明年製」でハリ支えが一箇所認められる。2は JB-5である。3は JB-6-a である。文様は稲東が摺絵、花がコンニャク判で描かれている。

陶器 4 は TD-29 である。播目は 6条である。

土器 5 は 1類 a ロに分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。底面には砂粒の痕が見られる。外面は横のミガキが施され平滑である。内面底部付近には板状の工具痕が斜めに連続しその上がナデられている。口縁部には敲打痕が連続する。

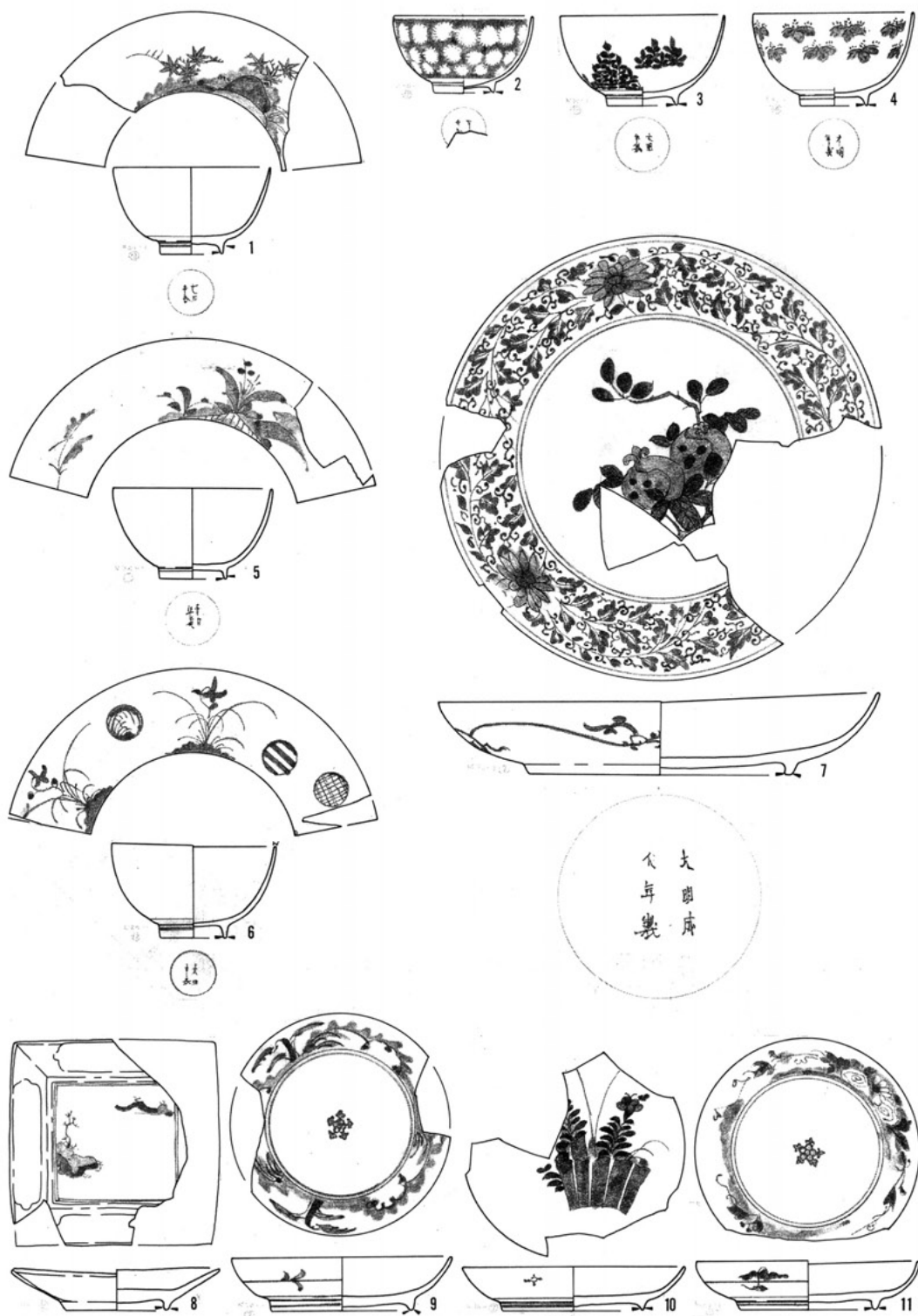
焼塩壺(6, 7) 6は II類 1 a に分類されると思われる身。底部および体部の多くを欠損する。内面は平滑で、外面もよくナデられている。7は II類 1 b2に分類される身。3類 1 b の刻印をもつ。外面上半には横に走る条線が見られる。内面には粗い布目が見られる。

第一節 陶磁器・土器



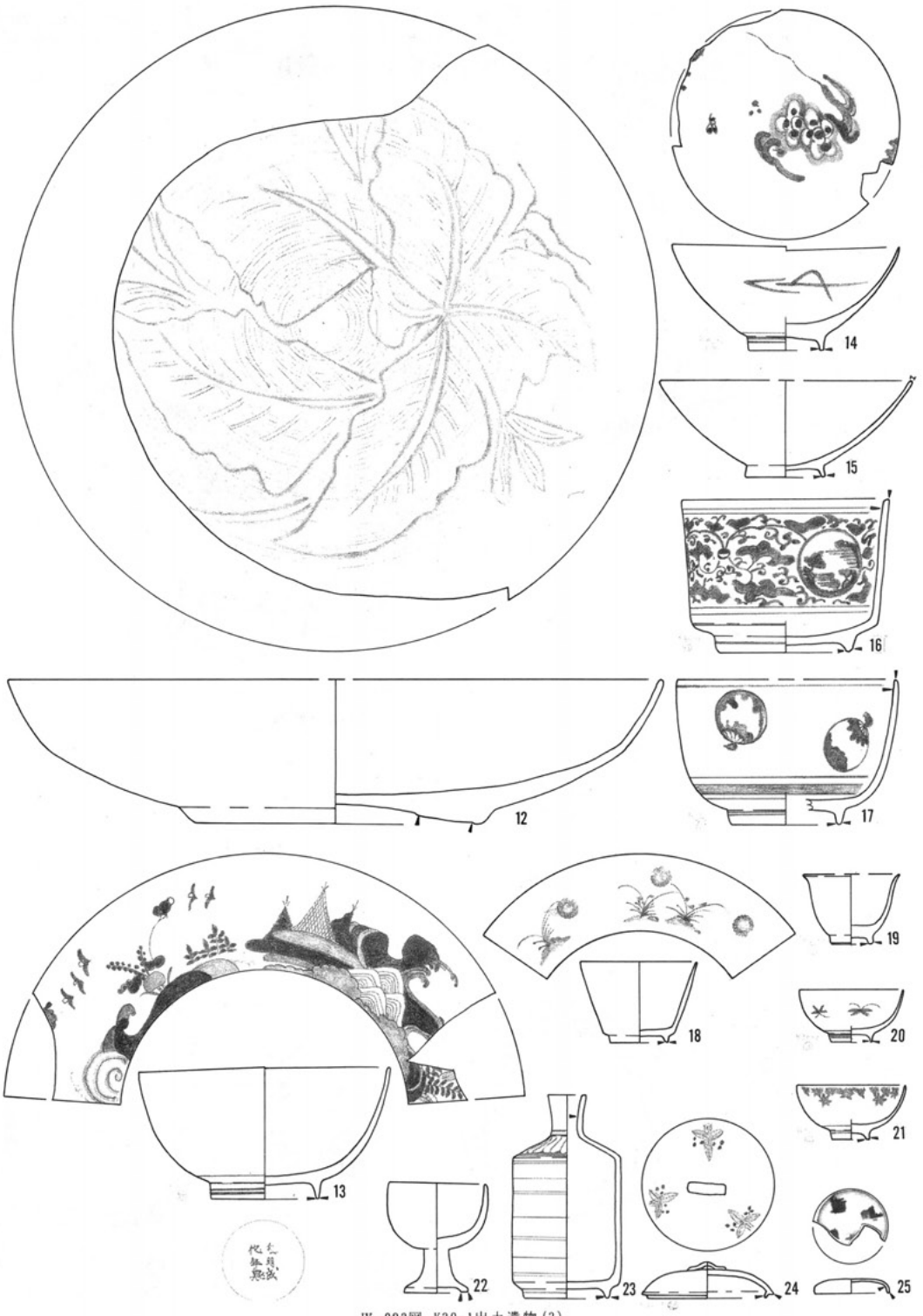
IV-091圖 K23-1(2)、K29-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物



IV-092図 K30-1出土遺物(1)

第一節 陶磁器・土器



IV-093図 K30-1出土遺物(2)

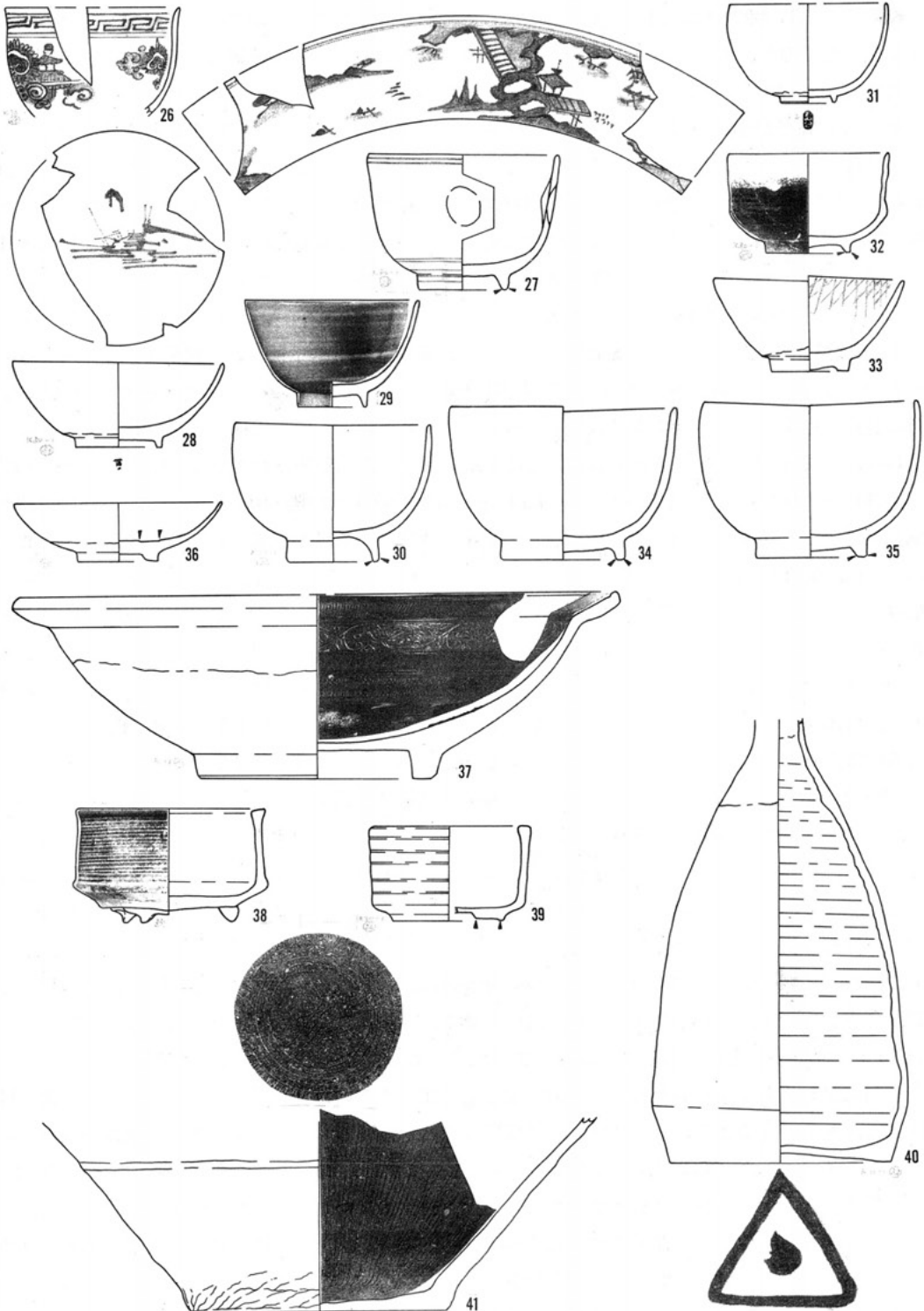
第IV章 江戸時代の遺物

K30-1 (IV-092~096 図) 本遺構中からは陶磁器、カワラケ、焙烙、土器、焼塩壺などが多量に出土しており、本地点においてはIV期の指標になる遺物群として位置付けている。

磁器(1-25, 39) 1-6は染付碗である。1はJB-1-dである。前段階同様に高台が高いが、前段階に比較すると底径が小さくなっている。IV期の特徴的な碗形でJB-1-dとJB-1-eの中間形態であろう。釉際の処理もまだ不十分である。文様にコンニャク判を使用し、銘は「大明年製」を施す。2はJB-1-eである。釉際は丁寧に揃えられ、畳付は丸く耐火砂も付着していない。明らかに1, 3-6の碗とは一線を画するものである。文様に摺絵を使用し銘は「大明年製」である。3-6は1と同様の作りの碗でJB-1-dに分類される。銘は3-6まで「大明年製」で、4は絵付けに摺絵を使用している。6の口唇部には口銹が施される。7-11は染付皿である。7は大皿でハリ支えが認められる。JB-2-eである。8は型作りの皿であるが、輪高台であり、まだ糸切り細工、貼付高台も技術的にできていない頃の製品であろう。JB-2-aである。9-11はJB-2-eである。9, 10はハリ支えが一箇所認められ、9, 11は見込み中央にコンニャク判で五弁花が描かれている。12は青磁の大皿で、JB-2に分類される。見込みは草文様がへう彫りされており、高台は蛇ノ目状に鉄釉が施されている。13-14は染付、15は白磁乳白手の鉢でJB-5に分類される。15は見込みは型で捻花状の陽刻が浮文され、口唇部に口銹が施されている。16は染付蓋物で、JB-13-bに属す。漆継ぎの痕跡が残る。17は染付で、JB-13-aである。18は染付でJB-6-dである。19は白磁の小坏でJB-6-bである。粗雑な作りである。20, 21は染付小坏でJB-6-aに分類される。21は絵付けにコンニャク判を用いている。22は白磁でJB-8である。高台裏にも施釉している。23は染付の瓶で、JB-10に分類される。24は色絵の蓋で、朱、黄、呉須でオモダカを上絵付けしている。JB-14-cである。25はJB-18の蓋である。型で紗綾形文を浮文とし、呉須を所々滴らしている。39は青磁でJB-9である。底部は蛇ノ目状に鉄釉が施されている。青磁釉は内外面に施されるが内面及び高台裏は外面、口唇部より薄く施されている。

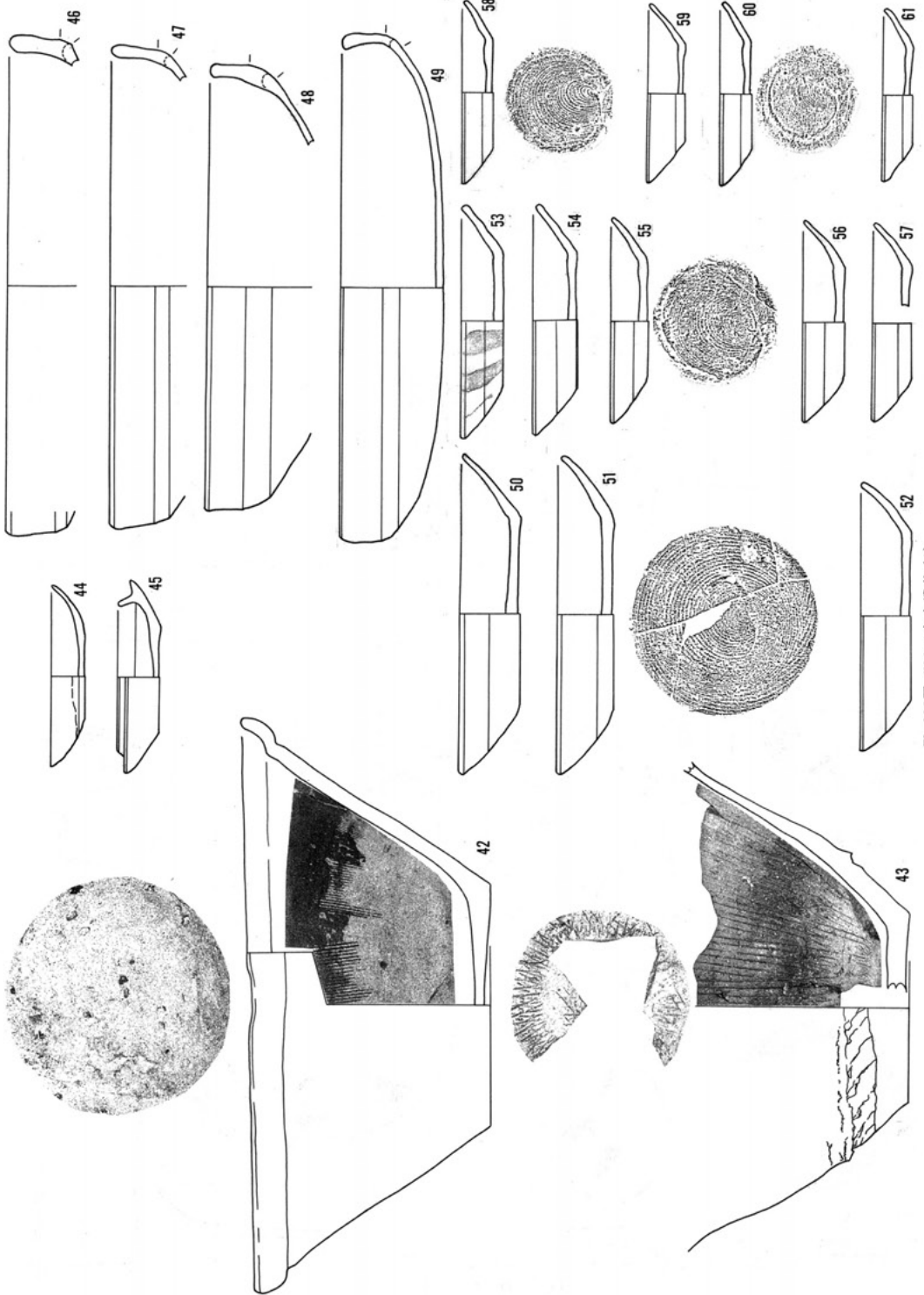
陶器(26-38, 41-43) 26, 27は陶胎染付で釉裏に呉須絵が描かれている。26は焼きが極めて不良である。28は京焼風の平碗でTB-1-cに分けられる。見込みには山水文が鉄絵の具で描かれ高台裏は刻印が施されている。下半が不明瞭で判読できない。上の文字は「福」である。29はTB-1-dである。30はTC-1-cで灰釉が全体に施される。31はTD-1-bで高台裏には楕円枠内に「清閑寺」の刻印が押印されている。高台脇は面取りされている。32はTC-1-uである。緻密な胎土で、体部下半は鉄釉、上半、内面は灰釉が施される。藤澤氏の腰鏝碗の分類では第2型式にあたると思われる。33はTC-1で灰釉が施されている。口縁内面の一部には斜格子状の呉須絵が描かれている。34, 35はTC-1-cである。ともに高台裏まで灰釉が施されている。本類が認められるのはIII期からであるが、F34-11には1点しか認められない。量的に安定して出土するのはIV期以降になるが、初期のIII-IV期は高台裏まで施釉しているのに対し、V期以降は高台無釉のものが多くなり、VI期は全点が無釉のもので構成される。36はTB-2-aである。見込みには銅緑釉、外面上半には灰釉が施されている。37はTB-5-bである。象嵌は比較的明瞭であるが、白土は拭かれていない。砂胎土目積みの痕跡が残り、見込みには砂粒が、畳付には赤褐色の耐火粘土の溶着痕が観察される。高台裏は墨書が認められるが、不明瞭で判読はできない。高台脇は面取りされている。38はTC-9-bである。器面は糸目状の刻みをつけ、その上から鉄釉が施されている。内面は施釉されており、ピン痕が三箇所

第一節 陶磁器・土器



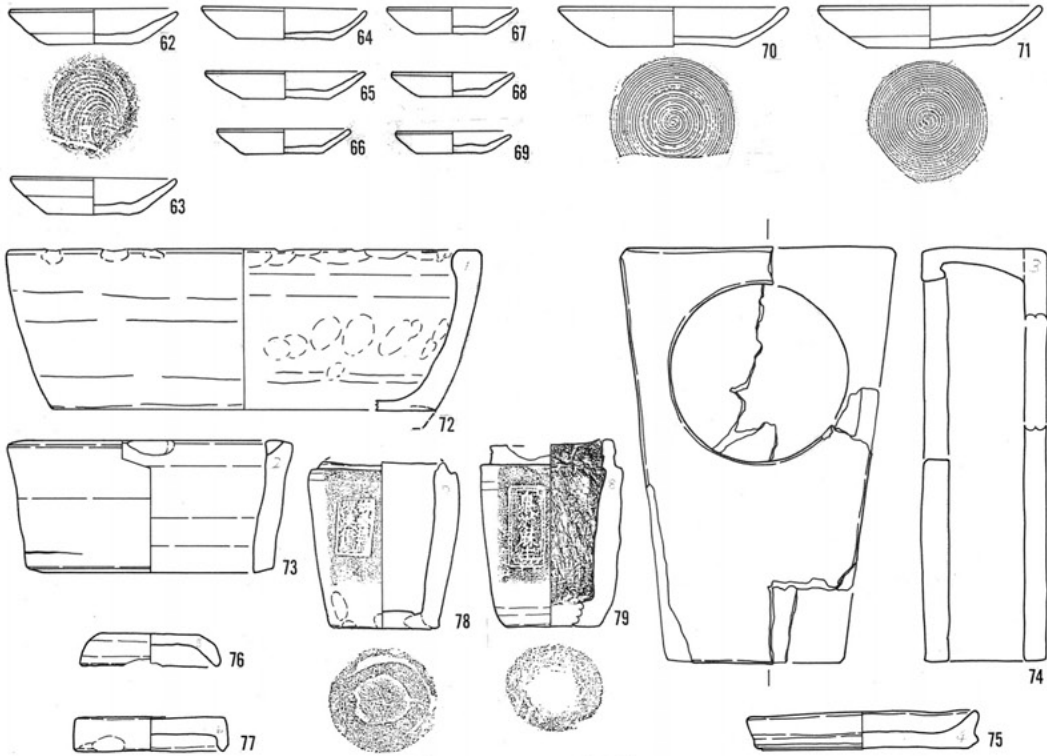
IV-094 図 K30-1出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物

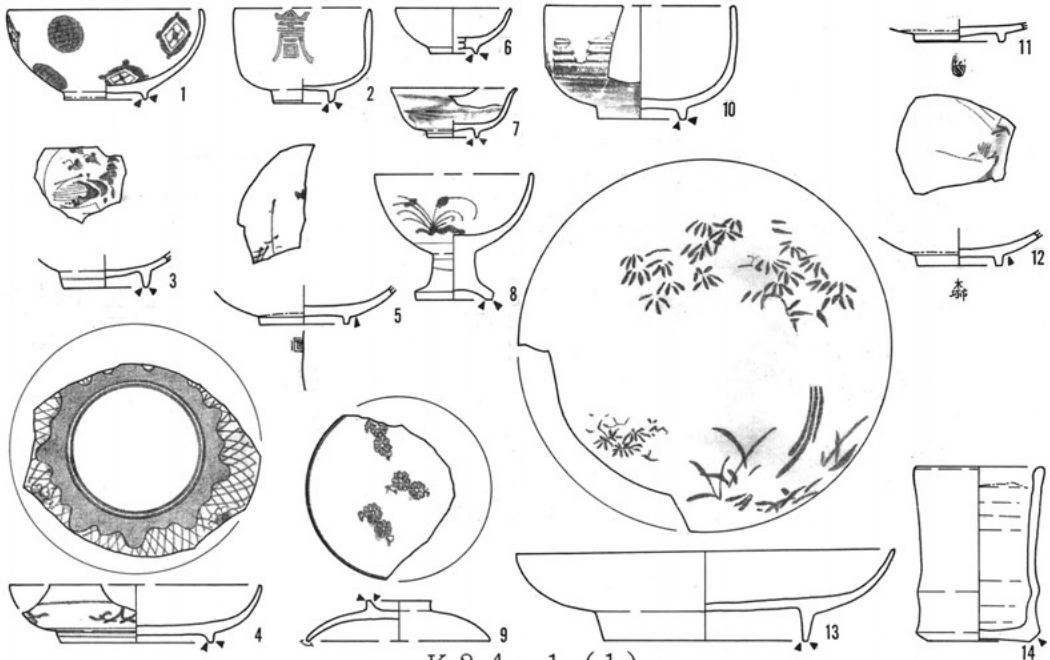


IV-095図 K30-1出土遺物(4)

第一節 陶磁器・土器



K30-1 (5)



K34-1 (1)

IV-096図 K30-1(5)、K34-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

められる。41は TD-29 である。播目は 5条で体部中央に横方向に軽く播目が入る。42は TC-29である。見込み中央と内面の下半の播目は使用により摩滅し残っていない。播目は19条である。43は TD-29 である。播目は 6条である。外面に高台状の張り出しを掻き取った痕跡が認められる。

徳利 40は志戸呂産の徳利で口頸部には茶褐色釉が掛けられ、底部には墨書痕が認められる。最大径は胴下部にあって、底部の外周にはへら削りが施されていない。5合・1升徳利と志戸呂産徳利が10個体ほど出土しているほか、備前産徳利もしくは船徳利と思われるものが僅かながら見られる。2合半徳利も1片のみ認められるが、これは混入と考えられる。

灯火具(44, 45) 44は志戸呂の油皿。灯芯油痕が口唇を全周する。底面へラケズリ調整。45は素焼受付で銀彩が施される。灯火具はこの2点のみである。

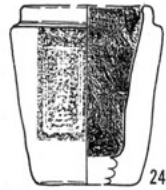
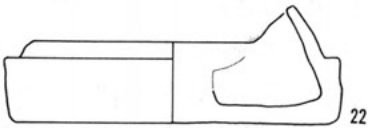
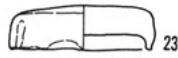
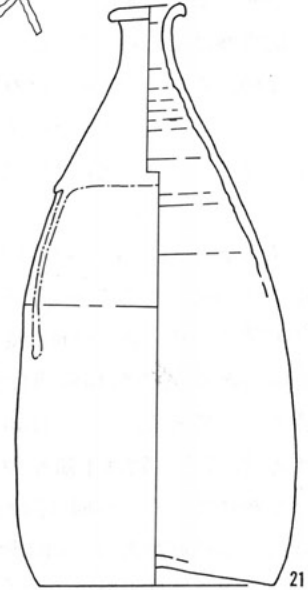
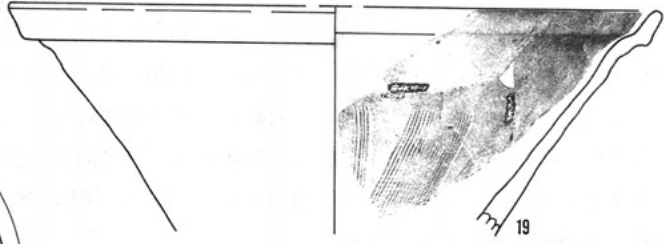
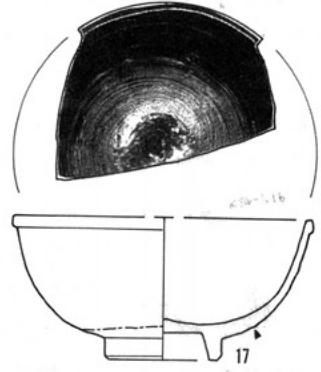
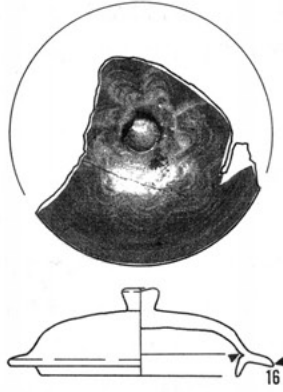
カワラケ(50-71) 上製以外すべて左回転糸切りのカワラケである。図示したものの口径は 6.1-19.6cm。50, 51 の底部の切り離しは左回転でも「離し糸切り」による。他にも大型のカワラケは大概この傾向をもつ。灯芯油痕があるのは53-55, 57, 59-61, 64, 67である。特に53では口縁外側に帯状に連なった油痕が六箇所認められた。70, 71は上製で口径は四寸。二つとも口唇に灯芯油痕が全周する。70, 71は当初から灯火具としての使用は考えられず、転用されたものであろう。これらの底部には「渦糸切り」に似た2号組石の221と同様な調整痕が認められる。また器壁も厚く、それまでの上製のカワラケとは様相が異なり、新しい様相をもつ。この時期ではほかに類例がなく、流れ込みの可能性も否定できない。

カワラケは295点の出土である。出土比率は62%に達する。図示した以外50点の底径がわかる。3.1-5.5cmのもの21点、5.6-9cmのもの28点、11.6-12cmのもの1点の出土である。口径はそれぞれ二寸から三寸前後、三寸前後から四寸七分、六寸五分となろうか。ほぼ二寸から四寸七分まで等質に分布するが、確実に三寸二三分前後のものなく、また四寸七分-六寸五分のカワラケは図示した52以外に認められない。このような構成は F34-11と類似するが、四寸五分前後のものは少なくなる傾向にある。カワラケそのものの形態も F34-11に比べ、器高の高いものが多い。他に上製1点、耳皿1点、流れ込みと思われる右回転の糸切り底のもの1点が出土した。上製1点は器壁が薄く、70, 71とは異なる形態のものである。

焙烙(46-49) 46は口縁にくびれをもち、屈曲部上位にケズリが施される。F34-11の194などに類似した形態である。47も46と基本的に同様である。やはり屈曲部上位にケズリが認められる。F34-11の193に似る。48は口縁が直立し、ケズリが屈曲部に施される。F33-3の104-106などに類似する形態であり、新しい様相をもつ。49は口縁が内湾するなど違いもあるが、ケズリが屈曲部に施されるなど基本的には48と同じ形態の焙烙と考えている。図示したものを含め底部片20点、口縁片27点の確認である。口縁片は46, 47に類似するもの8点、48, 49に類似するもの9点の出土である。

土器(72-75) 72は1類a口に分類される軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は横にミガかかれている。内面は指頭痕が連続しその上がナデられている。底面に砂粒の痕が見られる。口縁には敲打痕がある。73は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。体部は直立し口唇に切り欠きがある。内面には火熱によると思われる白色化が見られる。74は軟質土師質の箱形の製品。板組造り成形である。細長い台形を呈していたと思われ上面には円形の孔が、また台形の短辺にあたる側

第一節 陶磁器・土器



IV-097図 K34-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

面も開口している。円形の孔の周囲の大半は五徳内面のように白色化している。風口と呼ばれるもので、七輪の部分品とされている。75は軟質土師質の皿形の製品。底面に砂粒の痕が見られ、内面および縁はナデられている。用途その他不明である。ほかに30ほどの火鉢類の破片がある。

焼塩壺(76-79) 76はA類に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。下面および側面にはナデが見られる。77はI類1bに分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。内面には極めて細かい布目があるが、大部分がナデられている。78はII類1aに分類される身。2類4の刻印をもつ。口唇部をわずかに欠損する。79はII類1b2に分類される身。3類1bの刻印をもつ。内面にはよじれたような粗い布目が見られる。ほかに77と同形の蓋2, 79と同形の身6がある。

K34-1 (IV-096, 097図) 磁器(1-4, 6-9, 13, 14) 3は明末の青花碗でJA-1に属す。畳付両端は面取りされている。見込みには海老が描かれている。1は碗でJB-1-fに属す。4は皿でJB-2-eに属す。6は小坏でJB-6-aに属す。胎土は灰白色を呈す。7は小坏でJB-6-bに属す。高台はやや内傾する。8は仏飯器でJB-8に属す。胎土は灰白色を呈す。高台裏も施釉されている。二次焼成を受け変質している。9は青磁染付碗の蓋でJB-1-eに属す。外面には青磁釉、内面には透明釉が施され端部には口鏽が施されている。内面にはコンニャク判によって花が施文されている。13は色絵皿でJB-2-cに属す。高台高は18mmと高くやや内傾している。見込みに上絵付けによって草花が描かれているが絵の具は完全に剥げ落ちている。14は青磁香炉でJB-9に属す。内面及び底部は無釉である。2は混入品で本遺構には伴わないものである。

陶器(5, 10-12, 15-19) 5, 12は京焼風の平碗でTB-1-cに属す。5は胎土は灰褐色を呈し、緻密である。畳付は平坦で面取りはみられない。見込みには鉄絵が描かれている。高台裏には図のような刻印が押されている。12は黄白色の胎土である。畳付外面は面取りされている。見込みには鉄絵が描かれ、高台裏には「木弥下」銘の刻印が押されている。10は腰鑄碗でTC-1-uに属す。胴部には平行沈線が巡る。見込みから口縁外側にかけて灰釉が、胴部から底部にかけて鉄釉が施されている。11は京焼系の碗でTD-1-cに属す。胎土は灰褐色を呈し緻密である。高台脇は面取りされている。高台裏には楕円内に「清閑寺」銘の刻印が施されている。15は瀬戸・美濃系の皿でTC-2-eに属す。見込みには鉄絵の具によって型紙摺りの花が描かれている。16は刷毛目蓋でTB-14-aに属す。胎土は淡橙褐色を呈す。山蓋で算盤玉状のつまみを有す。外面には波状の刷毛目が施されている。17は刷毛目鉢でTB-5-aに属す。胎土は暗灰褐色を呈し緻密である。高台脇は面取りされている。見込みには白泥による刷毛目がみられる。18は京焼風の鉢でTB-5-cに属す。胎土は灰白色を呈す。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反するが、体部に二箇所へこみがみられる。見込みには鉄絵の具による山水が描かれ、高台裏には「清水」銘の刻印が施されている。19は瀬戸・美濃系の播鉢でTC-29に属す。口縁は縁帯を有する。播目は1単位18条で構成されている。

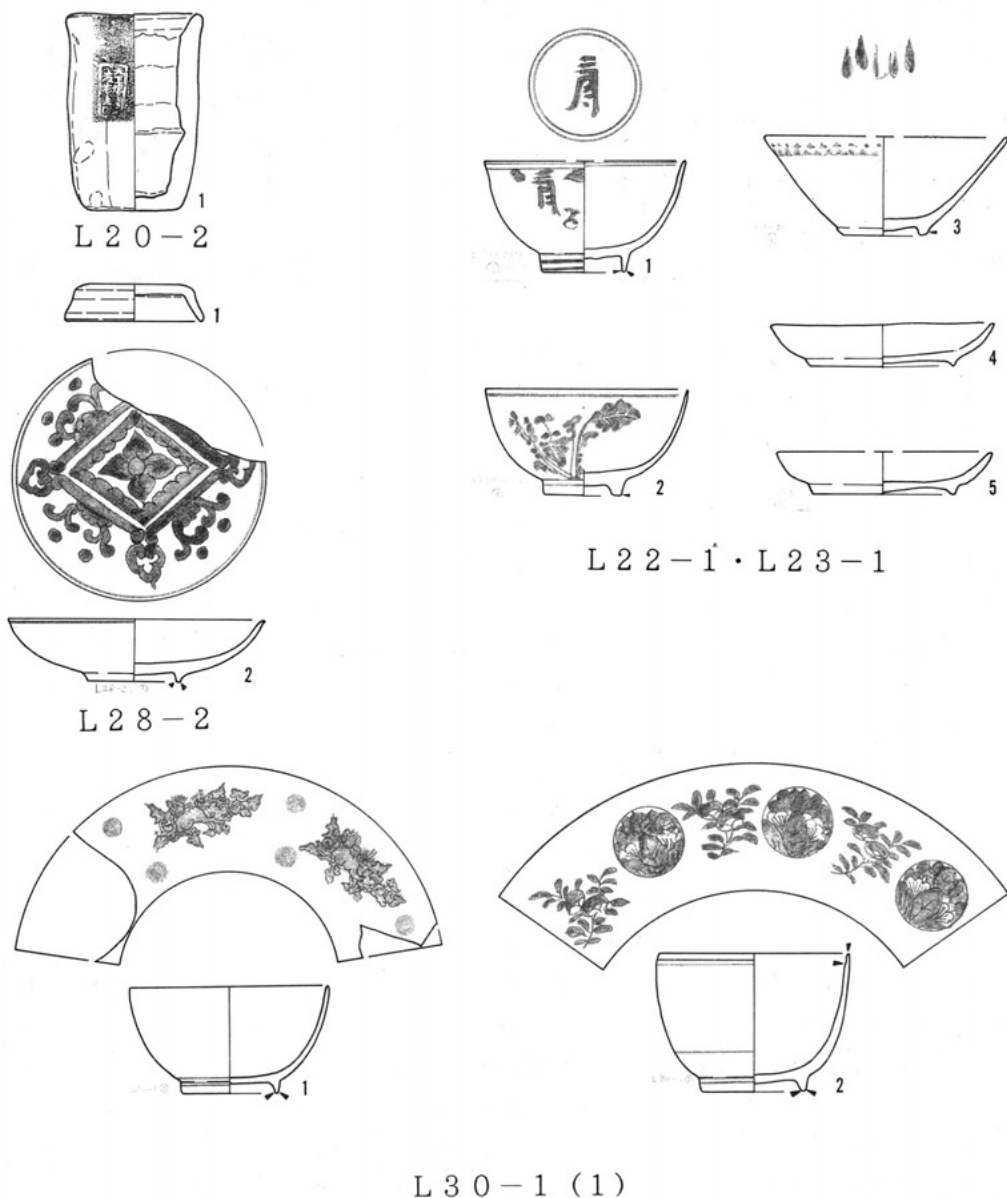
德利(20, 21) 20は瀬戸美濃産の灰釉系2合半德利で、胴部の表裏にはそれぞれ異なるベタ刻の釘書が認められる。最大径は胴部中程にあって紡錘形を呈し、胴下端の釉は丁寧に拭き取られて高台も深く削り込まれている。21は志戸呂産の德利で口頸部には茶褐色釉が掛けられている。口唇部は鐔状に張り出し外縁部が軽く撫でられて整形され、最大径は胴下部にあって底部の外周にはヘラ削りが施されていない。5合・1升德利が50個体弱、志戸呂産德利が20個体強出土している一方、

第一節 陶磁器・土器

2合半徳利は10個体しか見られない。備前産徳利，船徳利かと思われる破片がごく僅かある。

灯火具 22は土師質の瓦燈受け部である。油皿部分を欠く。銀彩のあった可能性がある。

焼塩壺(23, 24) 23, 24 ともに火熱を受けている。23はイ類1cに分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。胎土に極めて細かい雲母粒子がふくまれる。上面は丸く盛り上り，緩やかに側面へと移行する。側面はやや脹らみ，上面側面ともに平滑である。下面には細かい布目が見られる。24



IV-098図 L20-2, L22-1・L23-1, L28-2, L30-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

はII類1 b2に分類される身。3類1 b の刻印をもつ。胎土に砂粒を多く含む。内面には刺し子のあ
る布目が見られる。ほかにII類1 b2の身が1, II類2 b の身が4 点ある。

L20-2 (IV-098図) 焼塩壺 1はI類3に分類される焼塩壺。2類2 a の刻印をもつ。強い
橙色を帯びた褐色を呈する。ほぼ垂直に立ち上がる体部と外反する口縁とをもつ。

L22-1・L23-1 (IV-098図) 磁器(1-3) 1-3は青花碗でJA-1である。1は虫食いが認められる。
2 は高台無釉で、高台脇面取りされている。虫食いは認められない。3は焼きが低火度であったよう
で、やや軟質な感じを受ける。高台無釉である。

陶器(4, 5) 4, 5はTC-2-aで、ともに長石分を含む不透明な白濁した灰釉が掛けられている。
4は高台裏に、5は高台裏と見込みにピン痕が三箇所認められる。

L28-2 (IV-098図) 磁器 2 はJB-2-aに属す。

焼塩壺 1はA類に分類される特異な形態の焼塩壺の蓋。白色を帯びた褐色を呈する。部分的に
橙色を帯びる。雲母をわずかに含む。上面にかすかにムシロ目が見られる。側面および下面にナデ
が入る。

L30-1 (IV-098, 099図) 磁器(1, 2) 1, 2は染付である。1はJB-1-d。絵付けはコンニャク
判と手描きを併用している。2はJB-13-a である。

陶器(3, 4) 3 はTB-1-aである。4はTB-5-bである。象嵌は明瞭で、見込みには砂胎土目の
白砂が円形に六箇所付着している。高台脇は面取りされている。

徳利 5 は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、釘書はない。僅かに口唇部を欠いているが、朝顔
状に開いたその形態から見て、鐙状の張りだし口縁であった可能性が高いものと思われる。最大径
は胴部中程にあって全体に紡錘形を呈し、胴部下端の釉は丁寧に拭き取られて高台は深く削り込ま
れている。志戸呂産徳利および備前産徳利かと思われるものがごく少量見られる。

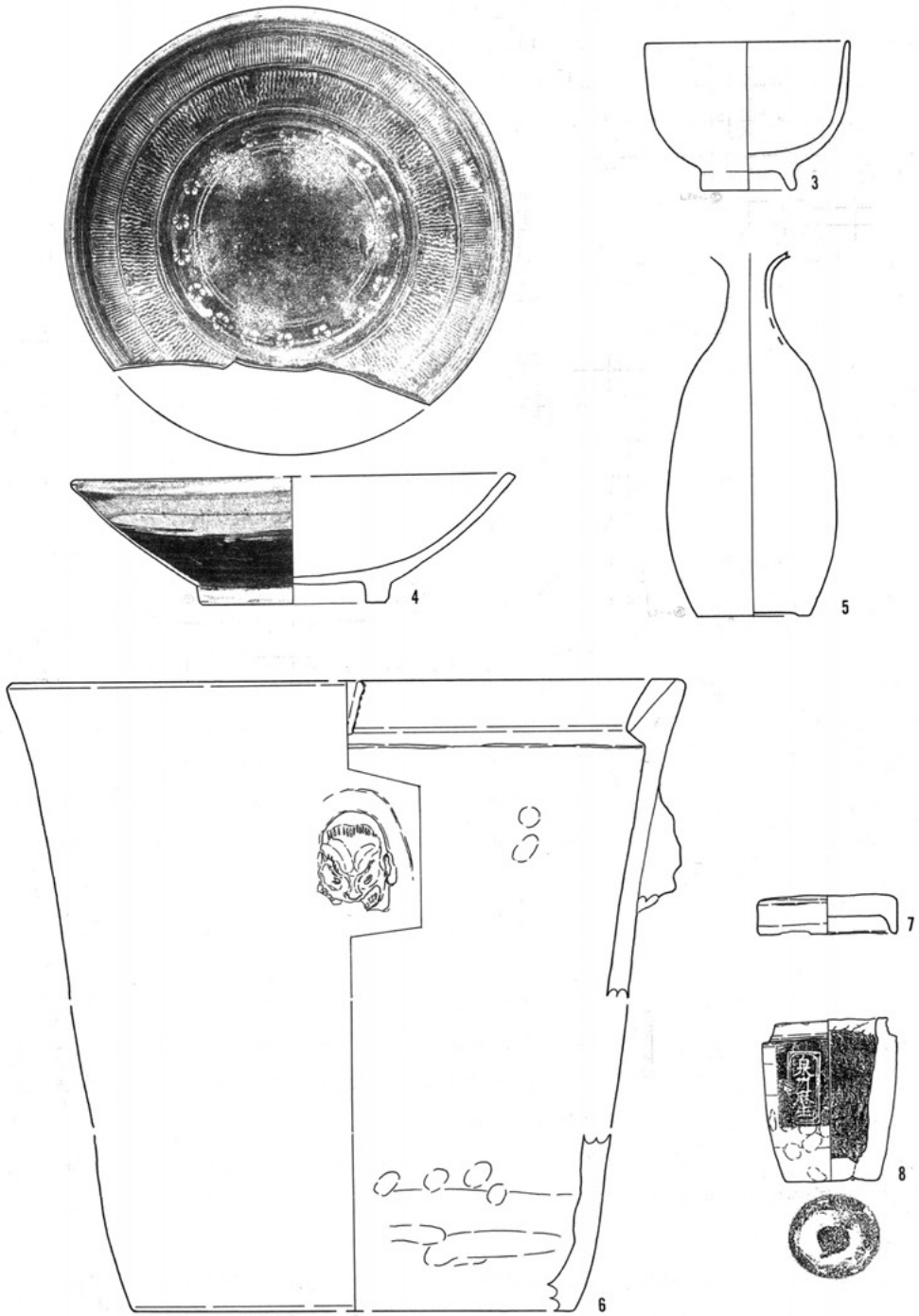
土器 6 はI類b 口に分類される大型の軟質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面上方に
は鬼面の把手が貼付されているが、これは一対のものであったと思われる。この鬼面とほとんど同
一のものが、G32-1の軟質土師質の破片にも見られる。口縁部の凸帯には縦の溝状の切り欠きが設け
られている。凸帯の上面と内面とはよくミガかれており、体部外面は横にケズられ、内面は一部指
頭により押圧され、全面がナデられている。ほかに火鉢類の破片3 個体がある。

焼塩壺(7, 8) 7はI類1 c に分類される焼塩壺の蓋。白色を帯びた肌色を呈する。上面にかすか
にムシロ目が見られる。側面には横の強いナデが見られる。下面には細かい布目が見られる。8はII
類1 b2に分類される焼塩壺。3類1 b の刻印が見られる。体部は均整がとれており、外面には横の
ナデと、多くの指頭痕とが見られる。内面には刺し子のある布目が見られる。

L32-1 (IV-100~110 図) 明末~清初の青花, 17世紀後半の肥前製品を主とした遺物が多量
に出土した。総破片数は約四万点以上である。ほとんどの遺物は二次焼成を受けている。本地点で
はII期に位置付けられる。

磁器(1-104) 1-30, 79は中国からの舶載品である。1-8, 10-12, 14-19は明末~清初の青花皿で
JA-2に属す。1, 2は芙蓉手皿である。畳付は斜めに削られており、砂が付着している。高台裏には
放射状のカンナ痕がみられる。口唇には虫食いがみられる。見込み側面には芙蓉手特有の向日葵

第一節 陶磁器・土器



IV-099図 L30-1出土遺物(2)

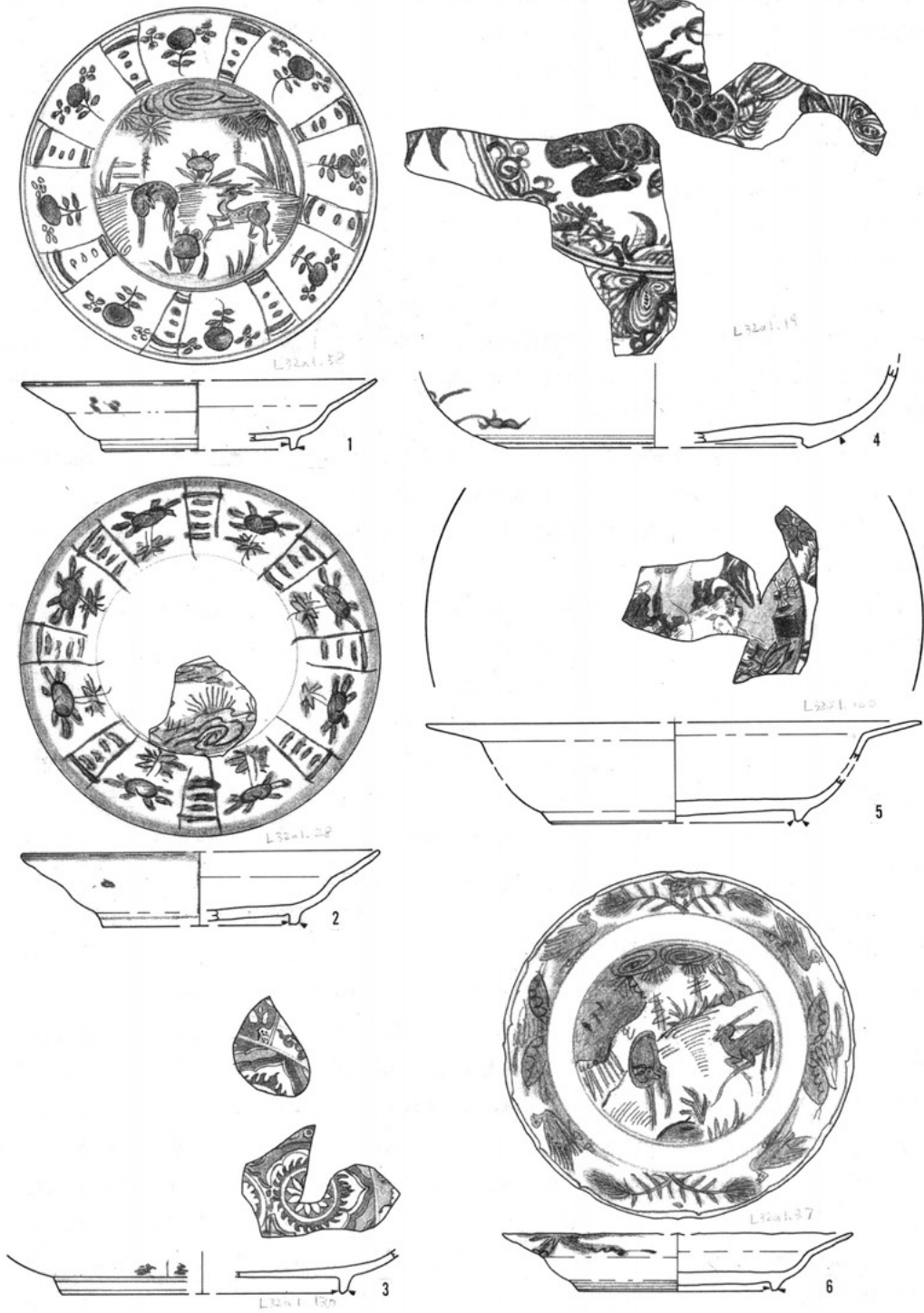
第IV章 江戸時代の遺物

の花と宝寿文が交互に描かれている。1の見込みには鹿が描かれているが、6と類似している。最小個体数は8。3は底部片である。畳付は斜めに削られている。見込みには八宝が描かれている。おそらく芙蓉手であろう。4は碁笥底の皿で底部は無釉である。見込みには、麒麟が描かれている。5は口縁が外折する皿である。畳付は斜めに面取りされている。口唇には虫食いがみられる。見込みには人物が描かれている。6は芙蓉手タイプの皿である。畳付は斜めに面取りされ、多量の砂が付着している。口縁は輪花を形成している。見込みには鹿、側面には水鳥が描かれている。同種のもはローマのイタリア国立東洋博物館に「カラック品」として陳列されている。最小個体数は8。7の畳付は斜めに削り込まれている。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。口唇には虫食いがみられる。見込みには墨弾きと吹き墨の組合せで梅を描いている。高台裏には「大明成化年製」銘が描かれている。最小個体数は5。8の畳付は斜めに面取りされ、高台裏にはカンナ痕がみられる。見込み周囲にはわずかに段を有する。口唇には虫食いがみられる。見込み側面には、海石榴華唐草が描かれている。高台裏には「大明成化年製」銘が描かれている。最小個体数は7。10は口縁がやや外折する皿である。畳付は斜めに削り込まれ高台裏にはカンナ痕がみられる。胎土には所々に気泡がみられそのため釉切れが生じている。口縁内側には雷文が巡っている。

11は八角皿である。ロクロ成形後、型打ちによって八角に成形している。畳付は斜めに面取りされ、砂が溶着している。高台裏には放射状のカンナ痕がみられる。見込みには兎と松が描かれ、側面には算木が描かれている。最小個体数は8。12は小皿である。畳付両脇は面取りされている。底部は肥厚する。見込みには線描によって三友が描かれている。最小個体数は2。14は口唇に口錆が施されている。最小個体数は5。15は底部片である。畳付は斜めに面取りされている。体部は直線的に開くと思われる。見込みには竹が描かれている。16は底部片である。器形は14と同様と思われる。見込みには桃が描かれる。最小個体数は3。17の畳付は両端から面取りされている。胎土が硬質なため高台側面、高台裏にカンナ痕がみられる。見込みには草花が描かれている。最小個体数は23。18は口径に対し高台径が小さい。口縁は8単位の輪花を形成している。畳付には砂が付着し、口唇部には虫食いがみられる。口縁の両側には帯文が施され、見込みには大輪花が描かれている。高台裏には「大明成化年製」銘がみられる。最小個体数は3。19は見込みの深い皿で器形は17と同様である。畳付は斜めに面取りされ、高台内には放射状のカンナ痕がみられる。見込みには草花、口縁内側には雷文が巡っている。高台裏には「大明成化年製」銘がみられる。最小個体数は6。

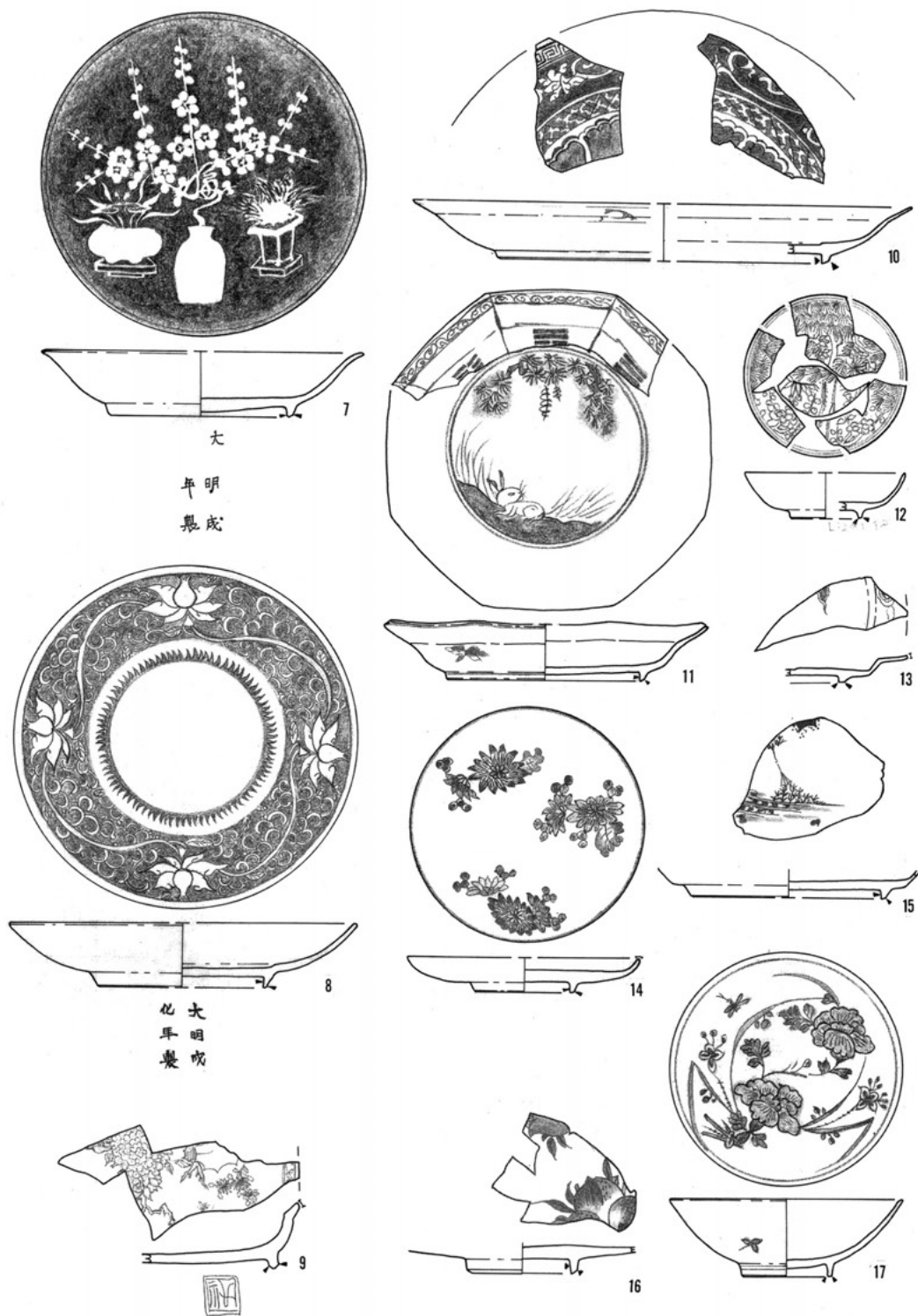
9, 13は色絵皿である。9は図示した以外に破片がなく器形は不明である。畳付は両側から面取りされている。口唇には口錆が施されている。文様は全て上絵付けで見込みには草花、口縁には唐草、高台裏には銘が描かれている。13の体部は直線的に立ち上がり外折する。見込みは中央付近で一段削り込まれている。畳付は斜めに面取りされている。口唇には口錆が施されている。見込みは呉須と上絵を組合せて雲を描いている。21, 24は青花の鉢でJA-5に属す。21は呉須手の鉢で胎土は茶褐色を呈す。高台には砂が多量に付着しており、いわゆる砂高台である。見込みには八宝文が描かれている。24は芙蓉手の鉢である。口縁部は輪花を構成し口唇には虫食いがみられる。25は色絵鉢でJA-5に属す。見込みに牡丹、外面に竹を描いているが二次焼成のため上絵が溶け落ち色調は不明である。28は青花の小坏でJA-6に属す。畳付は両側から面取りされている。高台裏には「片玉」銘が

第一節 陶磁器・土器



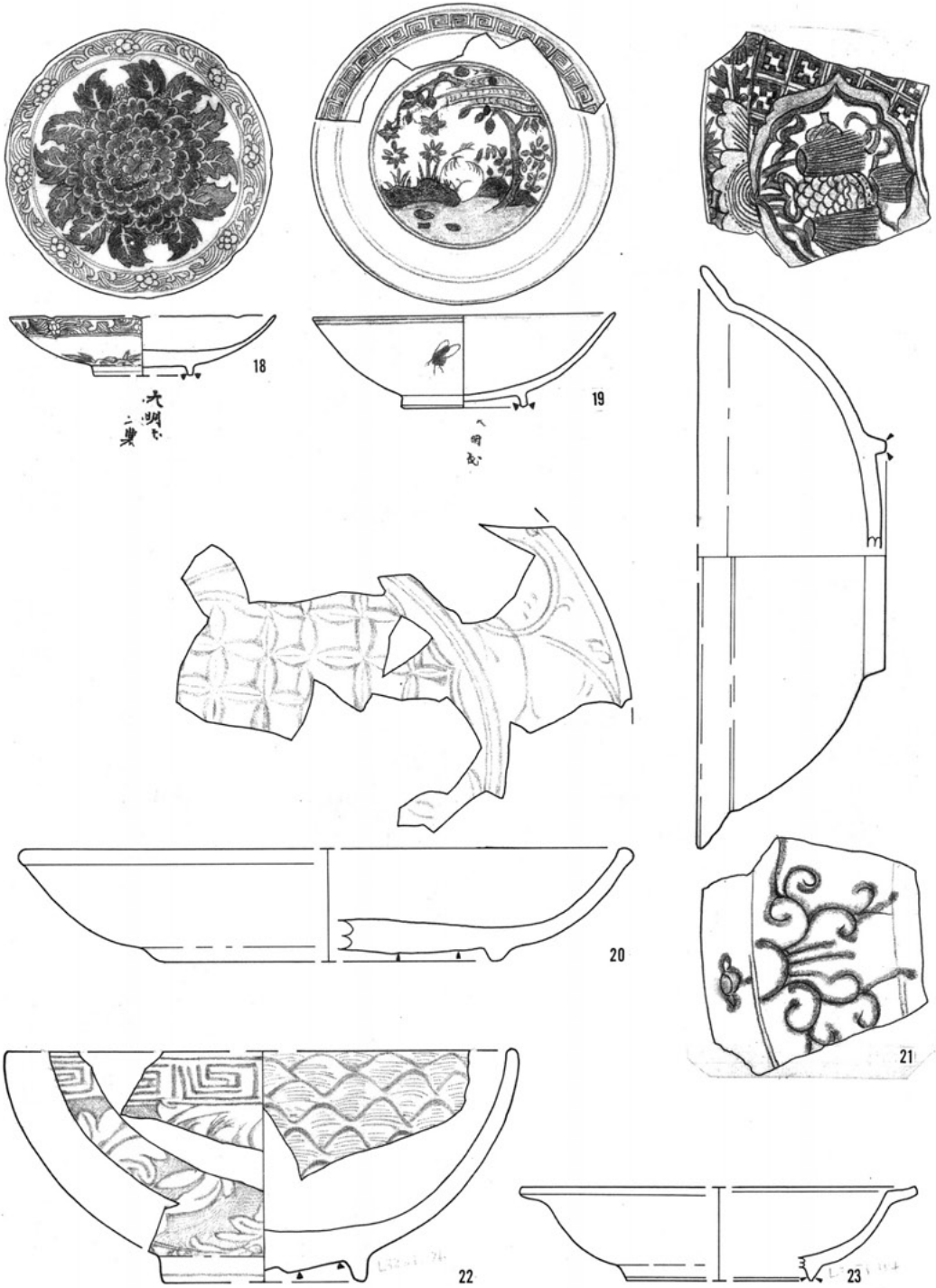
IV-100圖 L32-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物



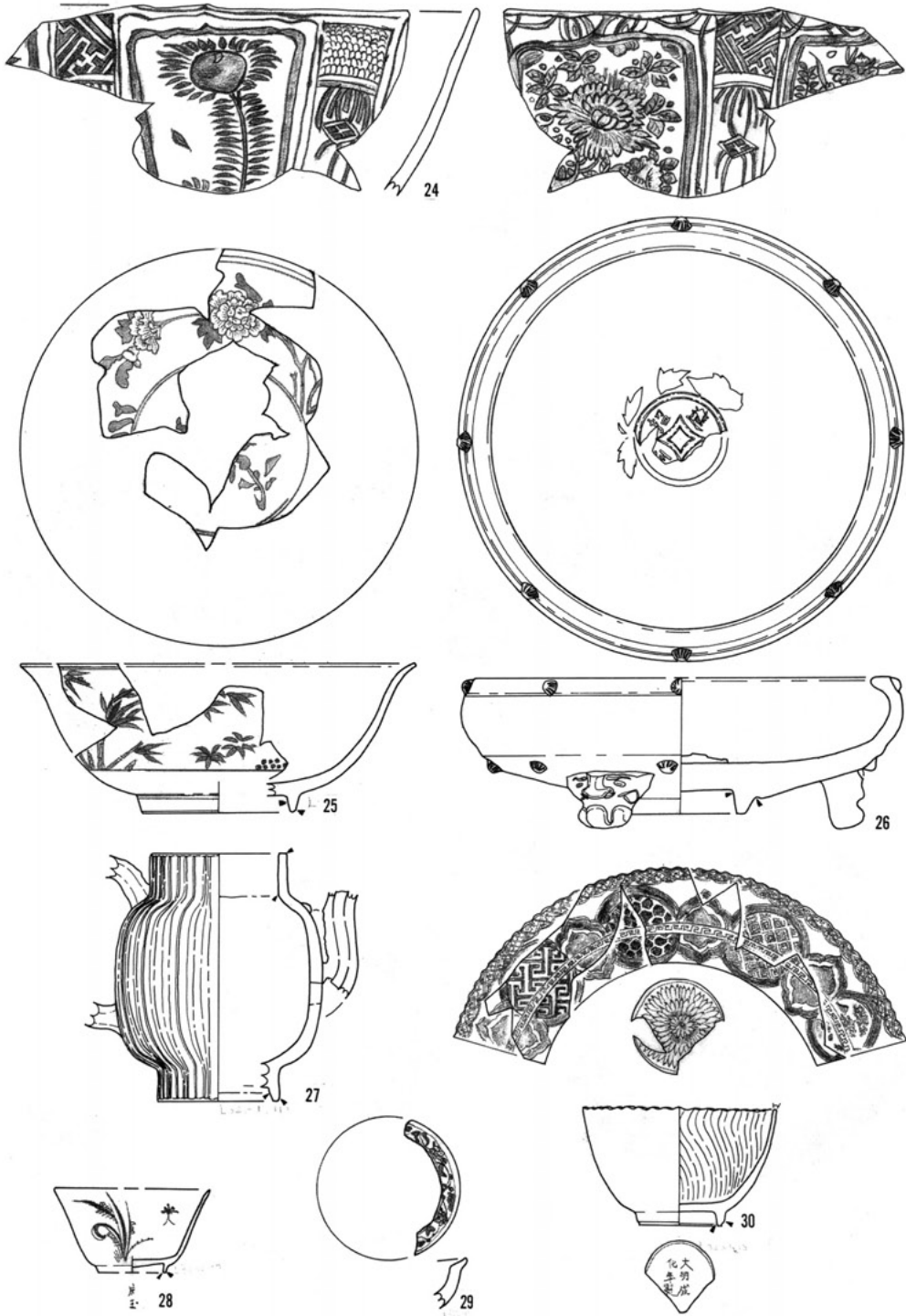
IV-101図 L32-1出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



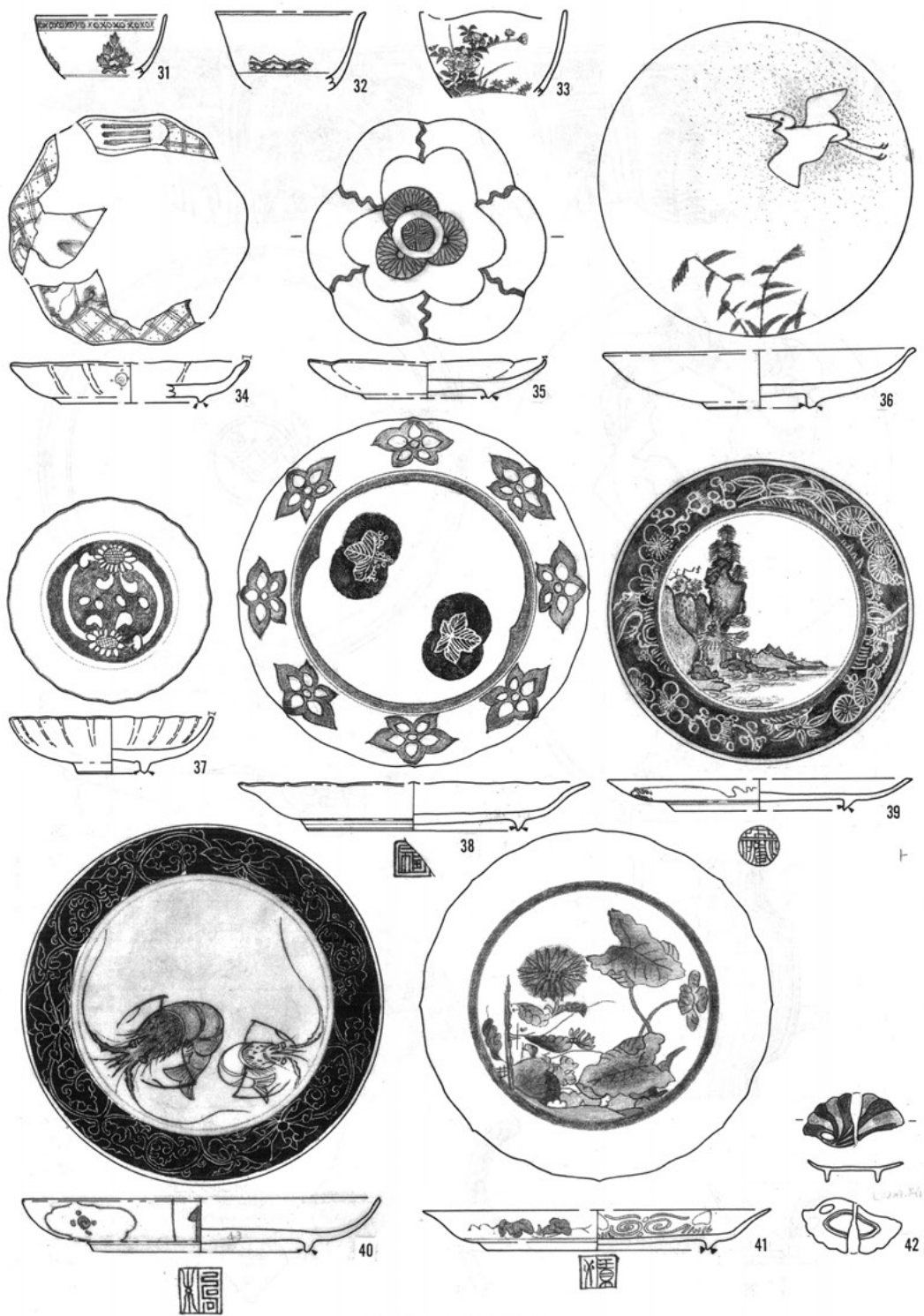
IV-102图 L32-1出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-103図 L32-1出土遺物(4)

第一節 陶磁器・土器



IV-104图 L32-1出土遺物(5)

第IV章 江戸時代の遺物

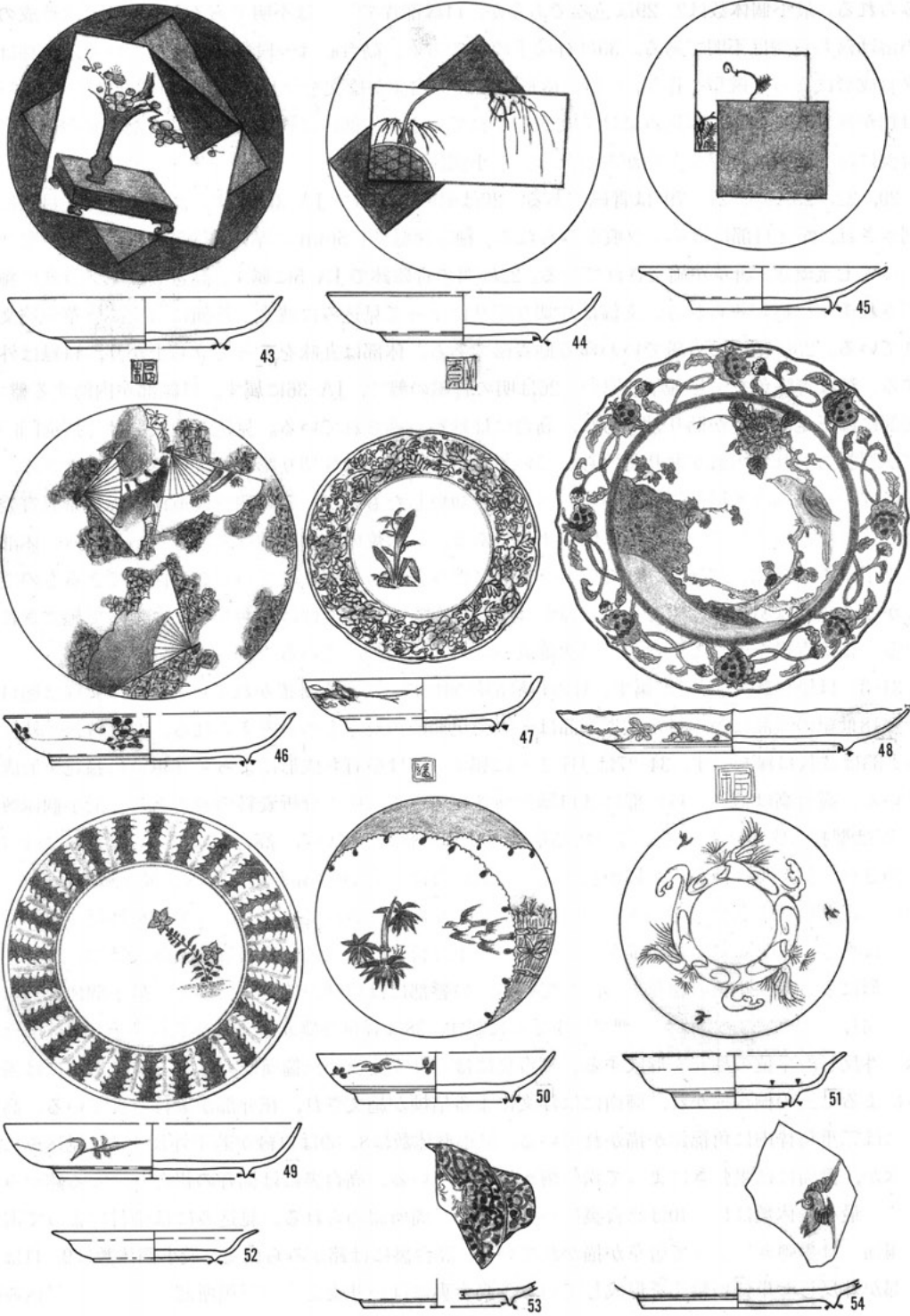
みられる。最小個体数は2。29は色絵であるが、口縁部片で器形は不明である。上絵は二次焼成のため溶け落ち色調は不明である。30は祥瑞手の碗である。高台脇は一段削り込まれている。体部はロクロ成形によって碗型を作り、型打ち成形によって内面が捻文を呈している。口唇部は波状を呈し、口鏽が施されている。見込みには菊文が描かれている。体部には祥瑞文様を描いた丸文が巡り、高台裏には「大明成化年製」銘がみられる。最小個体数は7。

20, 22, 23, 26, 27, 79 は青磁である。20は明の青磁皿でJA-2に属す。高台裏は蛇ノ目状に釉剥ぎされ、蛇ノ目部にはチャツ痕がみられる。釉は深緑で1.5mmと厚い。見込みには片切り彫りによって七宝繋ぎ、唐草が施文されている。22は明の青磁鉢でJA-5に属す。高台裏は蛇ノ目状に釉剥ぎされチャツ痕がみられる。文様は片切り彫りによって見込みに波文、外面に雷文、唐草が施文されている。23は南宋の青磁でいわゆる砧青磁である。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁は外折する。釉は青緑色を呈し釉厚は厚い。26は明の青磁の盤で、JA-36に属す。口縁部が内湾する盤で、底部には三足の獣足が貼り付けられ、高台には鉄釉が施されている。見込み中央には「招進□□」字が型打ちされた円盤が貼り付けられている。その周囲には片切り彫りによる草花が施文され、二次焼成のため釉は光沢を失っている。本製品と類似したものが一乗谷朝倉氏遺跡（福井県教育委員会 1979）より出土している。27は明の水注である。二次焼成のため釉は光沢を失っている。体部には垂下する集合沈線が施文されている。本品に伴う蓋片も検出されているが、図示できるものではなかった。79は明初の青磁である。器形は不明である。体部文様は片切り彫りによって施文されている。釉は青緑を呈しているが、二次焼成のため光沢を失っている。

31-33 は染付碗でJB-1に属す。31の口縁部外側には、○×文が描かれている。この文様は樋口窯など18世紀の製品に多く見られ本製品はその初現期に当たるものと考えられる。32は口縁が外反する。33は波状口縁を呈す。34-37はJB-2-aに属す。34は型打ち成形によって6単位の輪花を形成している。高台高は低い。口唇部には口鏽が施されている。胎土分析資料の22である。最小個体数は2。35は型打ち成形によって二付一組3単位の花卉を形成している。高台高は低い。口唇部には口鏽が施され、見込みには花文が描かれている。高台裏には「大明」銘がみられる。最小個体数は4。36の高台径は口径の三分一と小さい。畳付は両側より面取りされている。口縁でやや外反する。見込みには吹き墨による鷺と笹が描かれている。胎土分析資料の18である。最小個体数は13。37は型打ち成形によって24単位の輪花を形成している。口唇部には口鏽が施されている。最小個体数は4。

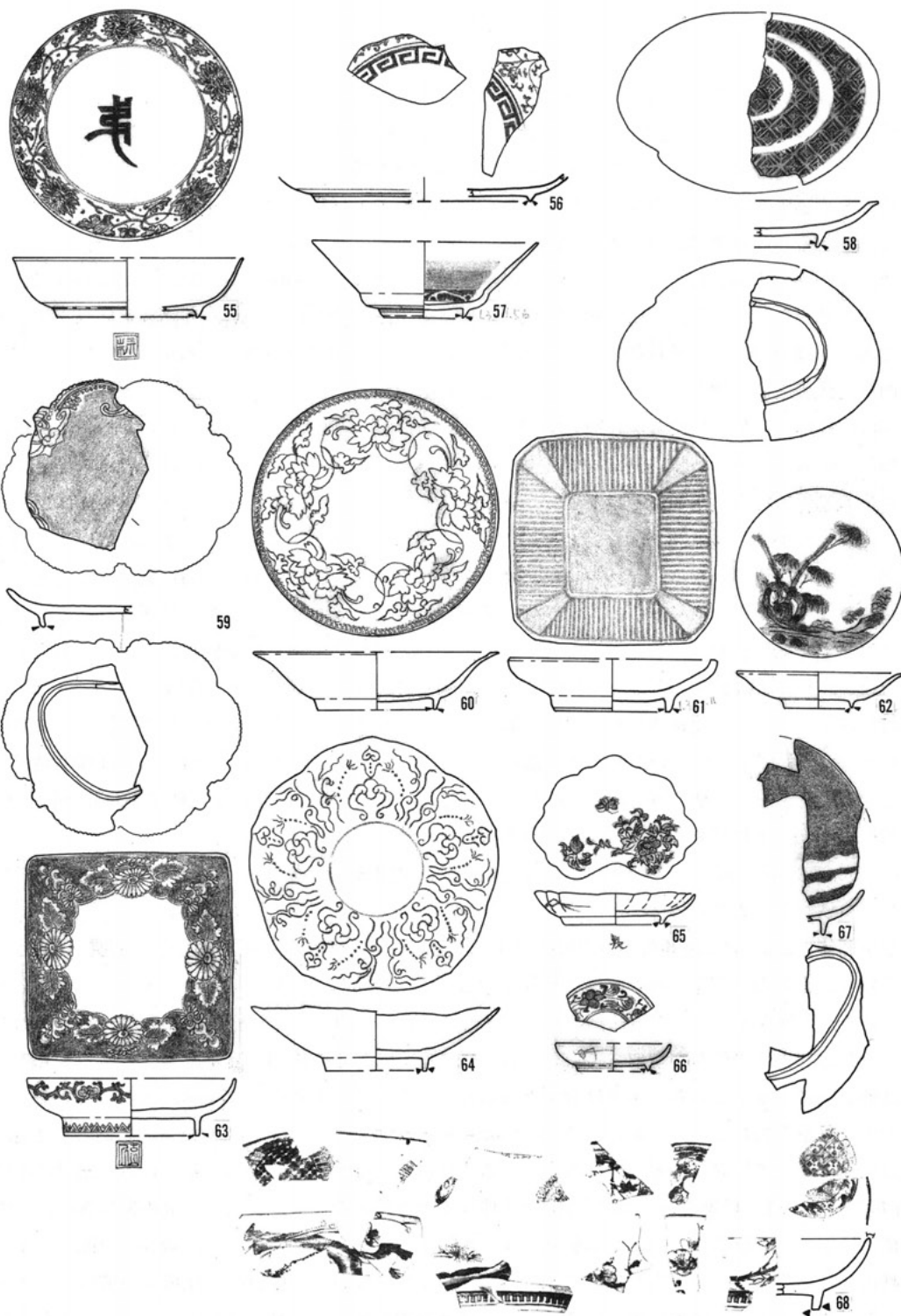
38-41, 43-50, 53-56 は染付皿でJB-2-cに属す。38は畳付外側が削り込まれ段を有す。体部は口縁で外反し8単位の輪花を形成する。高台裏にはハリ支え痕が三箇所認められる。見込みには墨弾きによる七三の桐が描かれ、側面には浮文による桔梗が施文され、花卉部が染付されている。高台裏には二重角枠内に角福銘が描かれている。最小個体数は8。39は口縁が若干外反する。見込みには山水が、側面には墨弾きによって松竹梅が描かれている。高台裏には福寿の組合せによる銘がみられる。最小個体数は14。40は高台裏にハリ支えが三箇所認められる。見込みには染付によって海老が側面には墨弾きによって唐草が描かれている。高台裏には銘がみられる。最小個体数は9。41は口縁部が外反し8単位の輪花を形成している。高台裏にはハリ支え痕が三箇所認められる。見込みには芋の葉が描かれ、側面には型打ちによる陽刻でハートを伴う唐草が施文されている。高台裏には

第一節 陶磁器・土器



IV-105圖 L32-1出土遺物(6)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-106図 L32-1出土遺物(7)

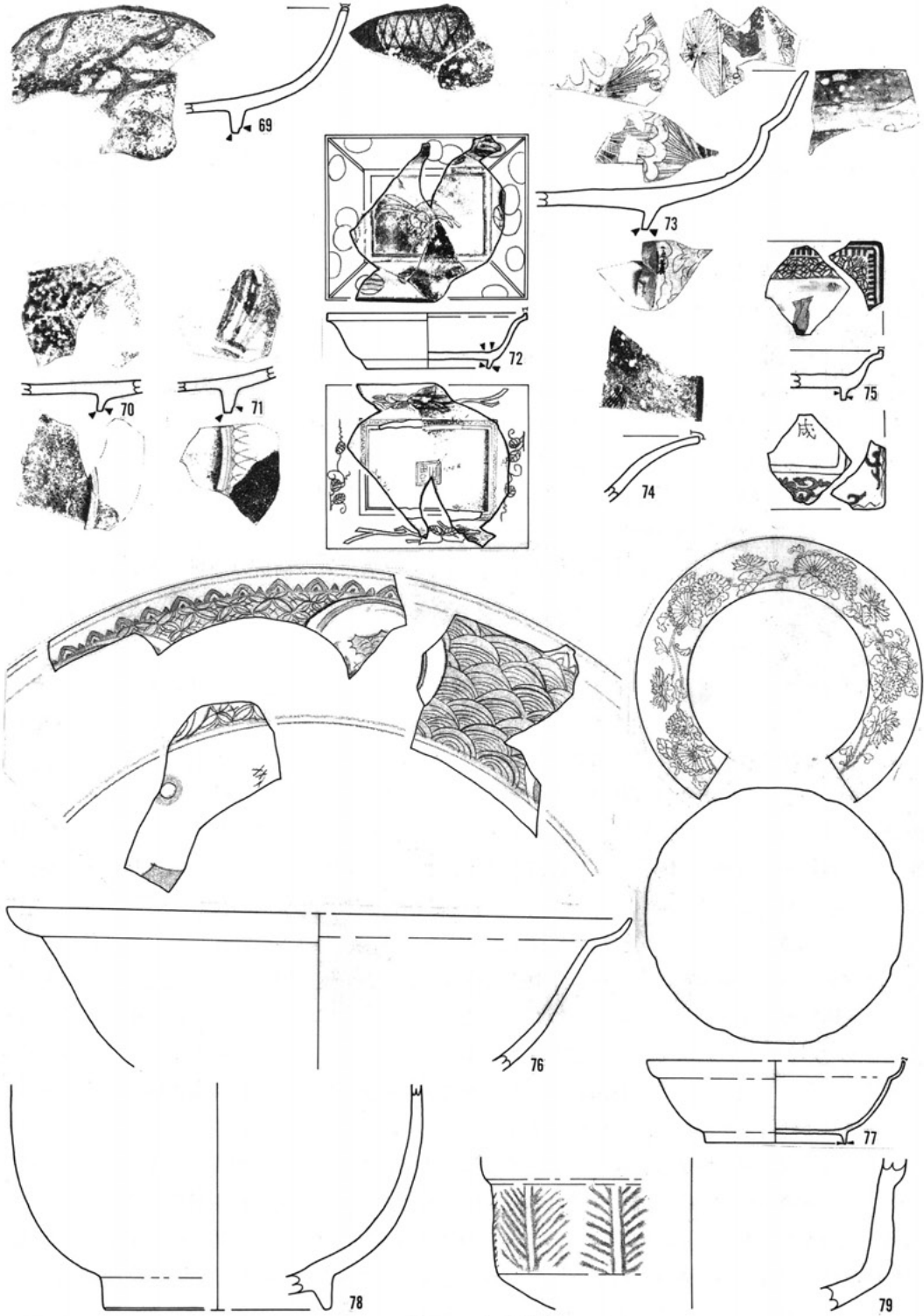
第一節 陶磁器・土器

銘がみられる。本製品と同一のものが楠木谷窯から出土している(大橋 1987a)。胎土分析資料の21である。最小個体数は8。43の高台裏にはハリ支え痕が一箇所認められた。見込みには折紙文様が描かれ、高台裏には一重角枠内に角福銘が描かれている。最小個体数は6。44は高台裏にハリ支え痕が一箇所認められた。見込みには折紙文様が、高台裏には銘がみられる。最小個体数は9。45は高台裏にハリ支え痕が一箇所認められた。見込みには折紙文様が描かれている。最小個体数は13。46は本遺構出土遺物のなかでもっとも多く最小個体数は65である。体部はやや丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。高台裏にはハリ支え痕が三箇所認められた。見込みには扇と七宝繫ぎが、外文様には花を伴う唐草が描かれている。47の口縁は8単位による輪花を形成する。高台裏にはハリ支え痕が一箇所認められる。見込みには蘭が、側面には牡丹唐草が描かれている。外文様は朝顔を伴う唐草である。高台裏には二重角枠内に渦福銘が描かれている。内側面の唐草や銘から本製品は、柿右衛門窯出土の製品に類似するものである。最小個体数は6。

48は口縁部が8単位の輪花を形成している。高台裏にはハリ支え痕が認められる。口唇には口銹を施している。見込みには花鳥文を側面には唐草を描いている。外文様は花を伴う唐草を描き、高台裏には二重角枠内に角福銘が描かれている。最小個体数は5。49は見込みには撫子を側面には雪花文を描く。最小個体数は28。50は高台裏にはハリ支え痕が一箇所みられる。最小個体数は47。53は底部片で変形皿と思われる。見込みには唐草が描かれている。54は底部片で高台裏にハリ支え痕がみられる。55は薄手の皿である。口縁が外反する。高台裏にはハリ支え痕が一箇所みられる。見込みには文字文様が側面には唐草が描かれている。これと同様の文字文様が柿右衛門窯から出土している。高台裏には銘がみられる。最小個体数は6。56は底部片である。51は色絵皿でJB-2-cに属す。高台は内傾している。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされているがそれを隠すように上絵付けが施されている。絵の具は二次焼成のために溶け落ち、詳細は不明である。最小個体数は9。52は瑠璃釉皿である。二次焼成のため釉は溶け落ち、ほとんど素地が露出している。57は染付鉢でJB-5に属す。皿付外側は削り込まれ段を有する。最小個体数は7。

42, 58, 59, 65, 67, 75 は型皿でJB-4-aに属す。42は銀杏形を呈す。本製品の絵付けは2種類あり、口銹があり放射状の区画があるものとないものである。図示したものは後者にあたる。両者の最小個体数は6。58は渦巻状の楕円形を呈す。高台は糸切り細工による貼付高台である。見込みには型打ちによる陽刻で雲と渦巻が施文されている。地文は同じく陽刻で四方纏が施され、ダミをかけている。天神森窯において表採例がある。胎土分析資料の19である。最小個体数は7。59は二弁を一つとした3単位の輪花を型取っている。口縁には型打ちによる陽刻で唐草を施している。見込みには薄瑠璃釉を施している。本来は釉薬と呉須を混ぜたものであるが、本製品は薄瑠璃釉を塗ってその上に釉薬を施したものである。最小個体数は2。65は横から見た花を象ったものである。見込みには花卉にそって放射状の線が陽刻されている。見込みには牡丹と蝶が描かれている。絵付けには2種類あり外文様に松葉を高台裏に「製」銘を伴うものと伴わないものがある。最小個体数は17。消費地では都立一ツ橋高校において本製品の銘をもつタイプの報告例がある(同調査団 1985)。また不動山3号窯物原から銘をもたないタイプが出土している(佐賀県嬉野町文化協会 1979)。胎土分析資料の24である。67は破片数が少ないので詳細は不明であるが、高台は59と同様、ハート形を呈

第IV章 江戸時代の遺物



IV-107図 L32-1出土遺物(8)

第一節 陶磁器・土器

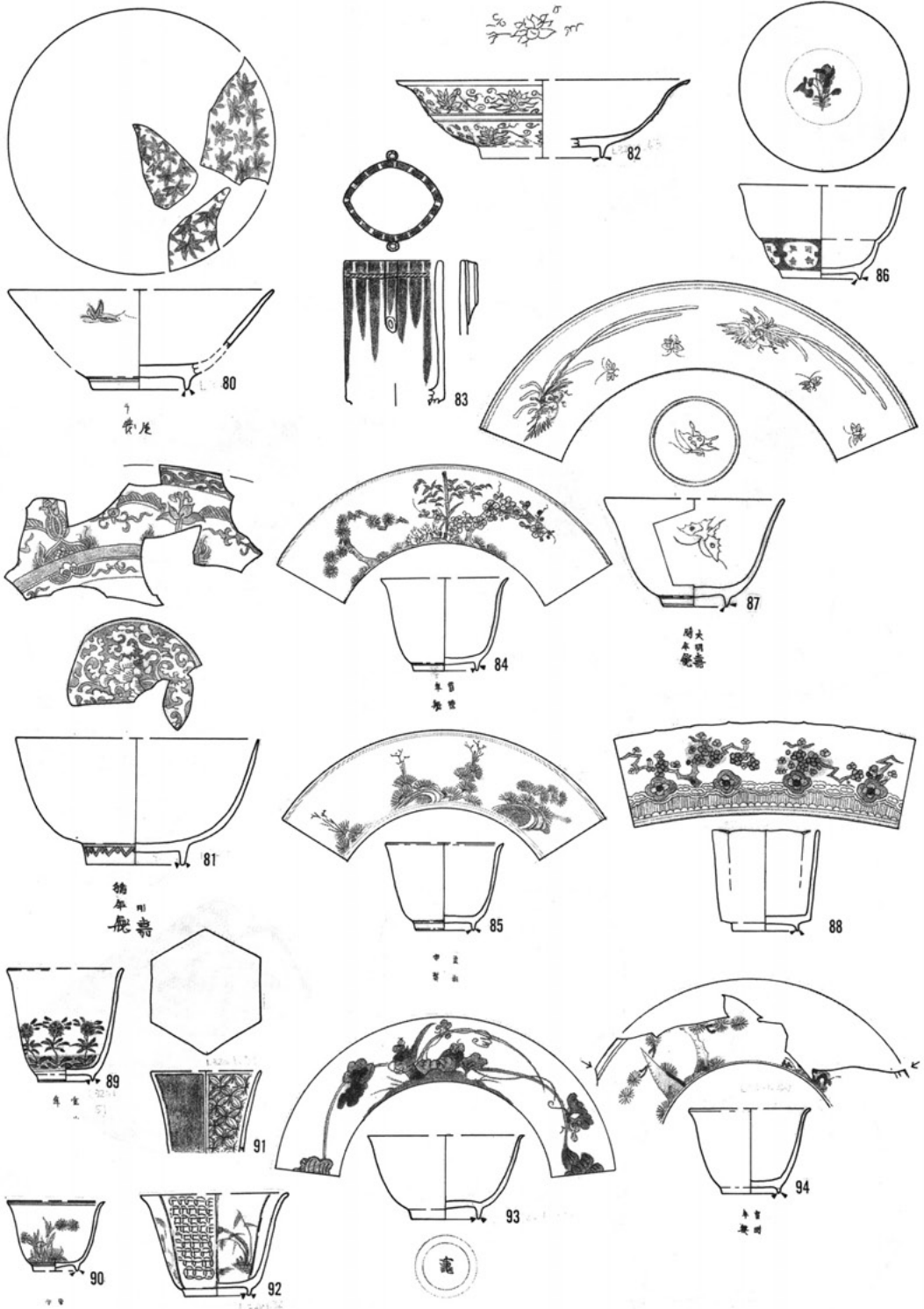
していたものと思われる。見込みには瑠璃釉が施されているが、二次焼成のため変質している。最小個体数は2。75は角皿と思われる。口唇部には口銹が施されている。見込みには人物が描かれている。高台裏には銘があり「成」の字のみ残存しているが、おそらく「大明成化年製」であろう。

60, 64 は白磁皿でJB-2-cに属す。60は口縁が外反し、口縁上には矢羽状の浮線文が巡る。見込みにも陽刻によって牡丹唐草が描かれている。最小個体数は6。64は口縁が5単位の輪花を形成している。見込みには型打ちによる陽刻によって唐草が施文されている。最小個体数は4。61は青磁角皿でJB-4-aに属す。青磁釉は淡青色を呈しているが二次火熱のためつやがない。内側面に型打ちによる陽刻によって集合沈線が施文されている。最小個体数は3。62, 66は染付小皿でJB-3-cに属す。62の高台は細く、畳付には砂が付着している。口縁はやや外反している。見込みには海浜図が描かれている。最小個体数は62が27, 66が3。63はJB-2-dに属す。63は体部は方形に型作りされている。高台は高く畳付は丸く整形されている。釉は畳付際まで施釉されている。見込みには菊文を描き、外文様は花を伴う唐草である。高台裏に銘がみられる。高台のつくりや銘から柿右衛門窯で焼かれた製品と考えられる。最小個体数は20。分析資料の20である。

68-74 は古九谷様式の色絵磁器でJY群に属す。68は「五彩手九谷」の型皿で型打ち成形によって作られている。高台は糸切り細工による貼付高台である。口唇部には口銹が施されている。見込みには型打ち陽刻文と、呉須と上絵を組み合わせた丸文が散らされている。外側面には呉須と上絵を組合せて松竹梅が、高台には櫛目文が描かれている。本製品と類似する色絵素地が楠木谷窯から出土している。胎土分析資料の26である。69は「青手古九谷」の皿片である。畳付は外周が削り込まれ、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部で輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。見込みは緑、茶、黄絵の具によって蔓文が描かれている。外側面は黄絵の具によって埋められ口縁部付近に斜格子の骨書きがみられる。胎土分析資料の1である。70, 71は「青手古九谷」の皿底部片である。70は見込みを黄絵の具、外面を緑絵の具によって埋めているが、意匠は不明である。胎土分析資料の7である。71は高台外周が削り込まれており、肥前の1650年代の製法にあてはまる。二次焼成のため意匠は不明である。外面には斜格子の骨書きがみられる。72は「青手古九谷」の型皿である。型打ち成形によって作られている。見込みは重ね焼きのために、長方形に釉剥ぎされている。黄、青、赤、緑絵の具によって見込みには兎、丸文を描き、外側面には折枝、蔓文が描かれ、高台裏には二重角枠内に角福銘がみられる。最小個体数は4。胎土分析資料の6である。73は「青手古九谷」で兜鉢と呼ばれる器形で、見込み底部と体部の境に段を有するが、これは山辺田3号窯出土の色絵素地片にみられる技法である（有田町教育委員会 1980）。見込みは上絵の具が溶け落ち、松葉を抽象化した放射状の骨書きが露出している。内側面には花小紋が描かれ黄絵の具で埋められている。外側面には唐草が描かれ、緑絵の具で埋められている。胎土分析資料の2である。74は「青手古九谷」の口縁部片で外反している。口唇部には口銹が施されているが内側に片寄っている。見込みには黄、青絵の具で文様が描かれているが意匠は不明である。胎土分析資料の5である。

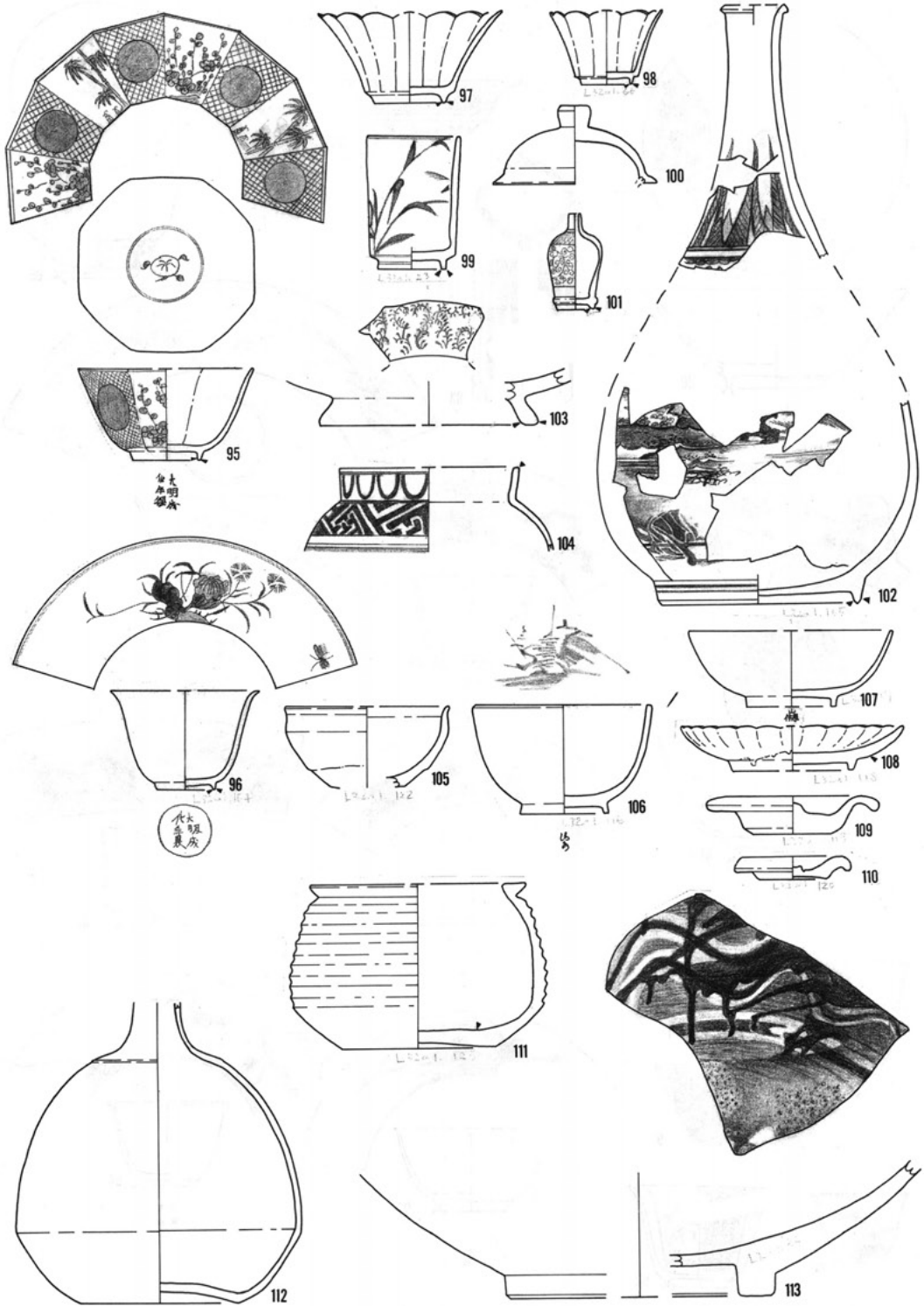
76, 80, 81は染付鉢でJB-5に属す。76は大型の鉢で口縁は外曲する。体部には七宝繫文と青海波文が描かれている。80は体部は直線的に拡がる。見込みには紅葉が描かれている。高台裏には「□徳□製」銘がみられる。おそらく「宣徳年製」であろう。81は全体に薄作りである。見込みには牡

第IV章 江戸時代の遺物



IV-108図 L32-1出土遺物(9)

第一節 陶磁器・土器



IV-109図 L32-1出土遺物(10)

第IV章 江戸時代の遺物

丹唐草，外文様は八宝が描かれている。高台には鋸歯状文が巡り，高台裏には「大明嘉晴年製」銘がみられる。77，78は白磁の鉢でJB-5に属す。77は口縁は8単位の輪花を形成する。口唇には口銹が施されている。見込みには型打ちによる陽刻で，菊唐草が施文されている。最小個体数は7。78は大型の鉢で見込みが深い。高台脇が面取りされている。82は瑠璃釉鉢でJB-5に属す。全体に非常に薄作りで口縁は外反する。見込み，外面には釘彫で法相華唐草を施文し，その上に瑠璃釉が施されている。瑠璃釉は二次焼成のためにほとんどが溶け落ち若干痕跡をとどめているにすぎない。最小個体数は2。

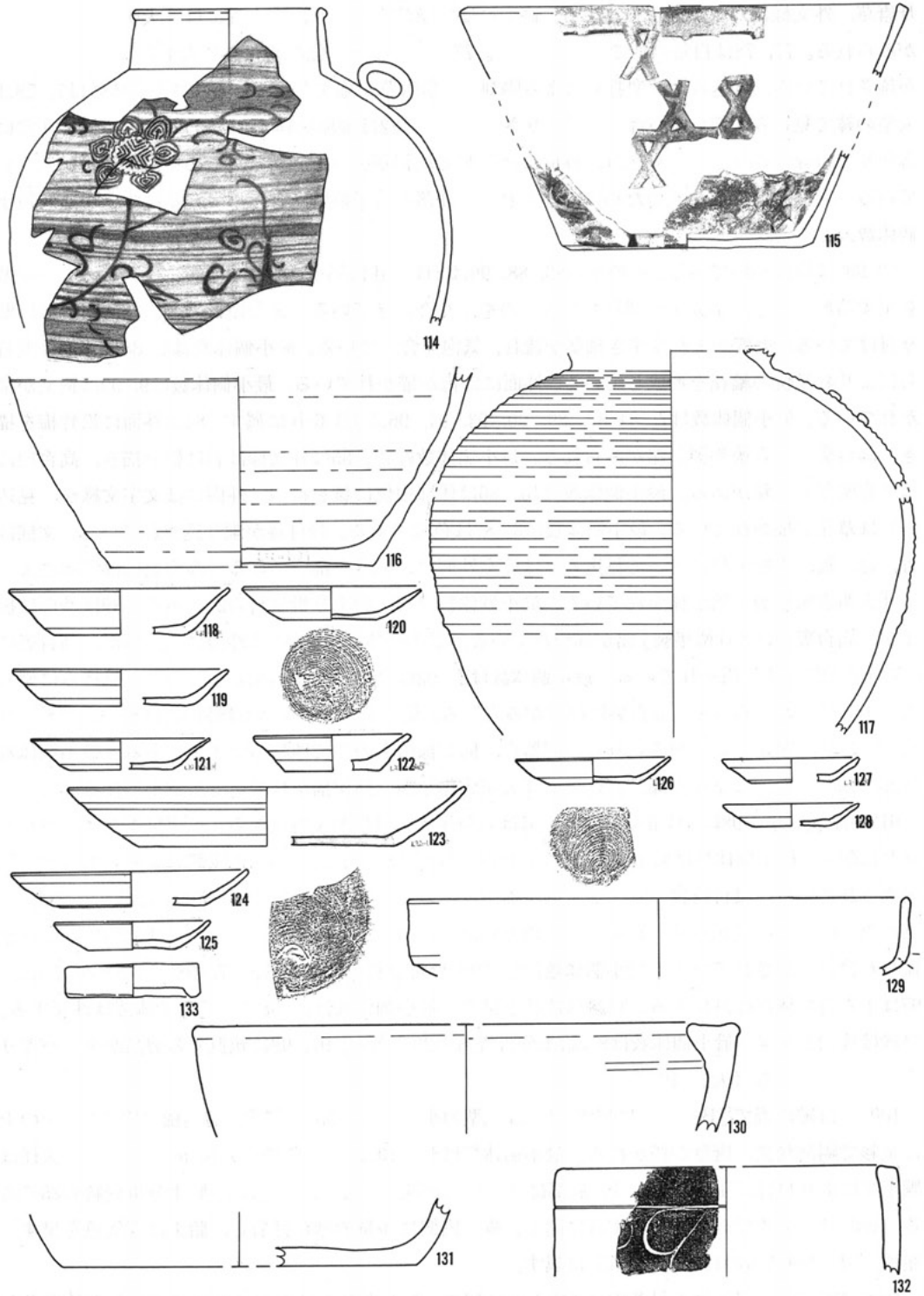
83-99は染付小坏である。そのうち83，88，99はJB-6-dに属す。83は断面形がラグビーボール型を呈す筒形である。半分ずつ型打ちしたものを貼り合わせている。また筒形の装飾を一対口縁に貼り付けている。火度が上がりすぎ釉薬が流れ，気泡を含んでいる。最小個体数は4。88は体部は型打ちにより4単位の輪花を形成している。外面には梅が描かれている。最小個体数は9。99は篋文が描かれている。最小個体数は7。84-87，89，90，93，94，96はJB-6-bに属す。84は外面に松竹梅を描き，高台裏に「宣徳年製」銘がみられる。最小個体数は12。85は外文様は岩に松を描き，高台内には「宣明年製」銘がある。最小個体数は16。86は体部中位に稜を持つ。外面には文字文様が，見込みには草花が描かれている。最小個体数は5。87は色絵である。畳付脇が削り込まれている。文様は青，緑，黄，赤絵の具によって見込みには蝶を外面には鳳凰を描いている。高台裏には呉須によって「大明嘉晴年製」銘が描かれている。最小個体数は17。胎土分析試料の27である。89は外面に撫子が，高台裏には「宣徳年製」銘が描かれている。最小個体数は4。90は外面にタンポポ，高台裏に「宣□年（製）」銘が描かれている。最小個体数は2。93は高台はやや内傾している。見込みには型打ちによる浮文がみられる。高台裏には銘がみられる。最小個体数は6。94は外面には松が描かれ，高台裏には「宣明年製」銘がみられる。同器形，同文様のもので2種類のサイズがある。最小個体数は26。96は外面には草花と蝶，高台裏に「大明成化年製」銘が描かれている。最小個体数は7。

91，92，95，97，98はJB-6-eに属す。91は六角坏で口縁はやや外反する。七宝繫ぎと塗り潰しを交互に配す。最小個体数は3。92は八角坏で口縁が外反する。一面おきに七宝繫ぎが型打ちによって陽刻されている。染付は笹一竹一梅一柳が描かれている。最小個体数は6。95は色絵八角坏である。高台裏には「大明成化年製」銘をもつものと無銘のもの2種類がある。中国嘉晴期の赤玉文を模倣した絵付けがされている。最小個体数は9。胎土分析資料の28である。97，98は白磁小坏である。97は十六角で体部は外反する。口縁は波状を呈す。最小個体数は3。98は十二角で体部は外反する。口縁は波状を呈す。最小個体数は8。胎土分析資料の23である。97，98に類似する製品がダンバグリ窯で出土している（大橋 1984b）。

100は白磁の蓋でJB-14-bに属す。101は瓶型の小物でJB-35に属す。瑠璃釉が施され，その上に金彩で鋸歯状文，唐草が描かれる。最小個体数は4。102は染付瓶でJB-10-aに属す。最大径は胴下半にあり口縁は玉縁状を呈す。肩部には山形文が巡る。最小個体数は2。胎土分析資料の25である。103は底部片で高台は八の字状に開く。畳付内側に多量の砂が付着し，胎土は青灰色を呈す。産地不明。104は壺の口縁でJB-15に属す。

陶器(105-117) 105は天目茶碗でTC-1-aに属す。胴上半から見込みにかけて天目釉が施釉され

第一節 陶磁器・土器



IV-110 Ⅱ L32-1出土遺物(11)

第IV章 江戸時代の遺物

ている。106は京焼風の碗でTB-1-bに属す。胎土は淡褐色である。体部には鉄絵によって山水が描かれている。高台裏には「清水」銘の刻印が施されている。107は京焼風の平碗でTB-1-cに属す。高台脇は面取りされている。高台裏には刻印が施されている。108は菊皿でTC-2-kに属す。灰釉が施されている。109, 110は落とし蓋でTC-14-aに属す。109には鉄釉が施されている。111, 116は備前系の甕でTE-26に属す。111は胎土は暗灰褐色を呈す。体部はやや内湾し口縁で外折する。113は肥前系の鉢でTB-5-aに属す。見込みに砂目痕が認められる。見込みは白泥によって刷毛目が施され、鉄釉が流し掛けされている。114は二彩唐津の壺でTB-15に属す。白土と銅緑釉を施し、牡丹唐草を彫っている。肩部には輪状の把手が五箇所貼り付けられている。115は鉢である。底部から直線的に開き、胴部には斜格子状の透かしを施している。藁灰釉が施されている。産地不明。117は備前系の壺でTE-15に属す。体部には明瞭なロクロ痕が巡り、肩部には丸状の粘土紐が貼り付けられている。

徳利 112は備前産の徳利と考えられる。H29-1の15同様胎土は黒褐色で堅く焼き締まっており、肩部には浅い削り込みが認められる。形態的には最大径が胴下部にあってベタ底であり、いわゆる尻張り徳利に近いものとなっている。ほかに船徳利がごく僅かながら認められる。

カワラケ(118-128) 118-120は右回転糸切り底のカワラケである。121, 122もおそらく右回転糸切りによる。123-128は左回転の糸切り底。よくわからないが、124, 127も形態から判断して左回転の糸切り底となろう。123の口径は約八寸、他は三寸五分-五寸であるが127, 128は二寸八分である。灯芯油痕は120, 124のみに認められる。120は口唇を全周する。J31-1と同様、左右両回転の糸切り底が共伴する事例である。両者には口縁形などに違いがあり、右回転のカワラケは口縁が外反する傾向にあり、色調も明らかに異なっている。右回転のものは赤褐色である。図示した以外のカワラケは72点の出土である。陶磁器に比べ極端に低い数値である。共伴した可能性もある手捏ね1点、上製6点、耳皿1点を含んでいる。陶磁器と同様、破片のほとんどは二次焼成を受けていた。二次焼成のためよくわからないが、ほとんどは左回転の糸切り底らしく右回転によるものは確実に4点のみである。127, 128のような小型の製品の存在も注目された。

焙烙 129の推定口径は30cm。口縁にくびれをもち、ケズリが屈曲部上位に施される。F34-11の193と類似した形態である。

土器(130-132) 130, 131は同一個体の口縁および底部の破片と考えられる。全体に強い火熱を受けており、色、表面の詳しい観察は不可能である。1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類と思われる。輪積み成形である。外面には横のミガキが施され、内面は横のナデが見られる。底面には砂粒の痕が見られる。132は1類bないしは2類aに分類されると思われる硬質瓦質の火鉢類。口縁部の小破片である。外面は口縁下に沈線が入り、沈線から口縁上面にかけて念入りのミガキが施され、沈線の下にはやはり沈線による文様が見られる。ほかに火鉢類の小片3個体がある。

焼塩壺 133はイ類2に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈し、胎土には雲母が含まれる。下面には粗い布目が見られる。

L34-1 (IV-111, 112図) 多量の陶磁器が出土しており、V期に位置付けられる。

磁器(1-10, 12, 13) 7は明末の青花碗でJA-1に属す。高台裏には銘がみられる。1, 3-5は染付碗である。1はJB-1-fに属す。高台高は低い。3, 4はJB-1-gに属す。胎土は灰白色を呈す。4は量

第一節 陶磁器・土器



IV-111圖 L34-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

付に砂が付着している。コンニャク判により松、鶴が描かれている。高台裏には「大明年製」の崩し字が描かれている。5はJB-1-dに属す。高台裏に銘がみられる。2は染付鉢でJB-5に属す。6, 8は皿である。6は見込みにコンニャク判により五弁花を描き、側面には唐草とコンニャク判による桐が描かれている。高台裏には銘がみられる。8は口縁は輪花を形成する。見込みには手描きによる五弁花を描く。高台裏には二重角枠内に渦福銘がみられる。9は仏飯器でJB-8に属す。胎土は灰白色を呈す。高台は蛇ノ目状で底部は無釉である。10は蓋物の身でJB-13-aに属す。体部は腰が張っている。12は蓋物の蓋でJB-14-cに属す。ドーム状の蓋で端部はやや外反する。13は丸碗の蓋でJB-1に属す。つまみ内には「大明成化年製」銘が、内面は二重圏線内に手描きによる五弁花がみられる。

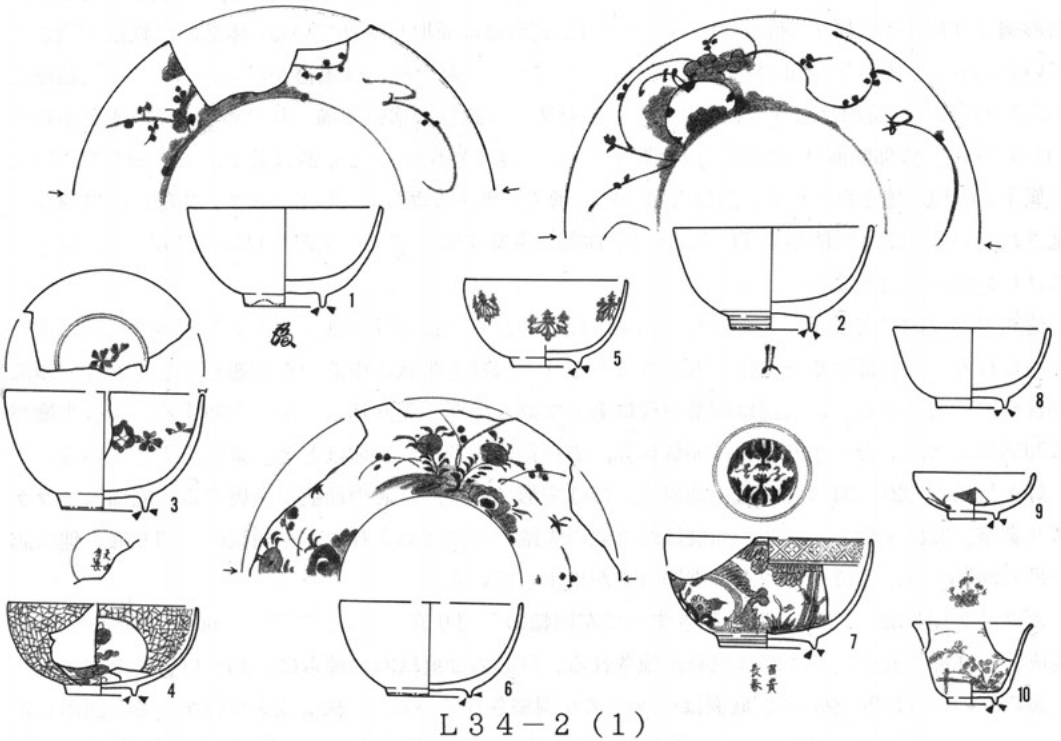
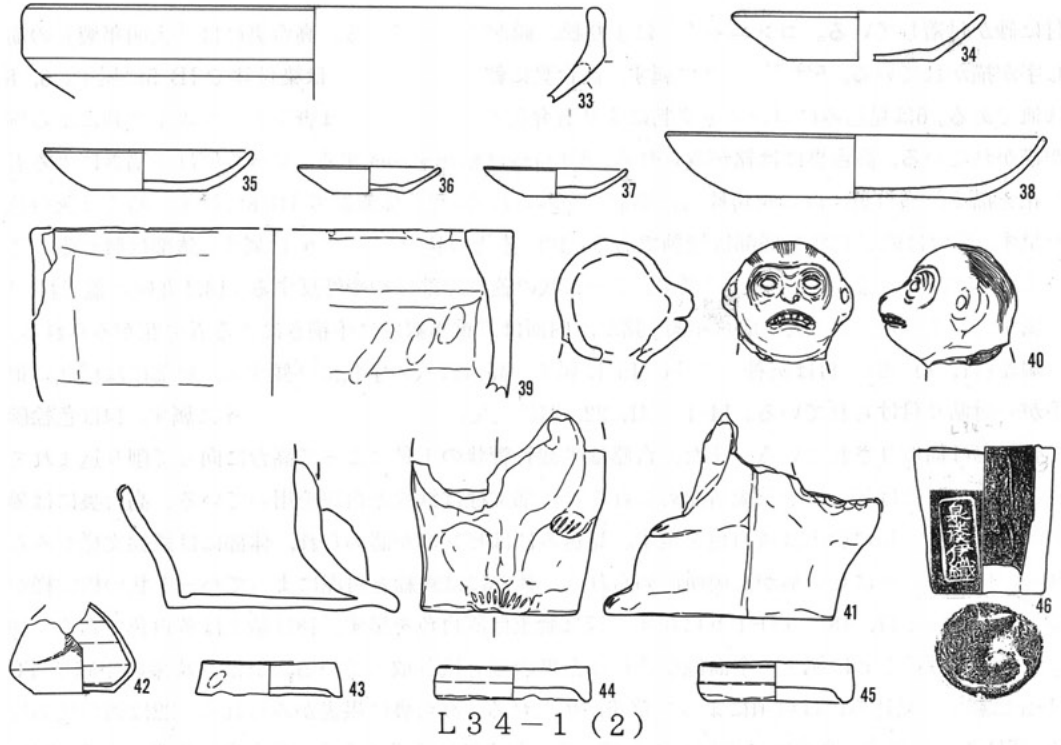
陶器(11, 14-29) 11は灰釉壺でTC-15に属す。高台は八の字状に外傾する。肩部には橋状の把手が一對貼り付けられている。14-19, 21, 22, 24は碗である。14-16はTD-1-iに属す。14は色絵碗で豊付脇は面取りされている。また高台脇は半截竹管状の工具によって高台に向って削り込まれている。見込みにはピン痕が三箇所認められる。体部文様は鉄絵と白泥を用いている。高台裏には墨書がみられる。15の胎土は黄白色を呈す。見込みにはピン痕が認められ、体部には鉄絵文様がみられる。16は見込みにピン痕が三箇所認められる。体部には鉄絵と白泥によってハート状の松文様が描かれている。17, 18はTD-1-bに属す。17は胎土は灰白色を呈す。18は胎土は黄白色である。19は灰釉碗でTC-1-cに属す。全面施釉され高台裏の釉を拭き取っている。21は京焼風の平碗でTC-1-nに属す。見込みには呉須によって草花が描かれる。高台裏に墨書がみられる。22は碗の底部片で、TD-1-cに属す。高台脇は面取りされている。胎土は灰白色である。高台裏に墨書がある。24は筒形碗でTD-1-jに属す。胎土は灰白色を呈す。高台脇は面取りされている。体部には鉄絵が施されている。20は小坏でTC-6に属す。灰釉が施されている。高台裏には墨書がみられる。23は灰釉皿でTC-2-eに属す。器形は大きくひずんでいる。見込みに鉄絵の摺絵が描かれている。25は灰釉小鉢でTC-5に属す。体部断面は二段角の四角形を呈し、口縁で外反する。26, 27は蓋である。26はTC-14-cに属す。灰釉が施されている。27はTD-14に属す。28は仏飯器でTC-8に属す。体部には呉須絵が施されている。29は灰釉鉢でTC-5に属す。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。見込みにはピン痕が三箇所認められる。

徳利 30は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に僅かながら化粧掛けが施されており、ベタ刻の釘書が認められる。口唇部は小さく折り返されてちょうど鏢状と帯状の中間的な形態を示しており、頸部は長く撫で肩である。最大径は胴部中程にあつて高台は深く削り込まれやや内傾する。2合半徳利は20個体ほど、5合・1升徳利は90個体強、志戸呂産徳利は50個体ほどと多量に出土している。

灯火具(31, 32) 31は志戸呂の油皿で、ほぼ完形であり、灯芯の油痕が全周する。底面はヘラケズリ調整。32は完形で、灯芯の油痕は灯心立の先端のみに認められる。左回転の糸切り底。他に志戸呂の油皿3点、素焼受付2点、乗燭1点が出土している。

カワラケ(34-38) 上製の38を除きすべて左回転の糸切り底である。口径は7.9cm-13.8cm。34は焼成後の底部穿孔があり、35は銀彩が施される。灯芯の油痕は34に疎らに、35が口唇を全周する。上製の38の口径は20.8cmで、底面はヘラケズリ調整されている。二次焼成を受けている。図示したものを含めカワラケは105点の出土である。出土比率の25.5%にあたる。墨書1点、上製3点、銀彩

第一節 陶磁器・土器



IV-112 図 L34-1(2)、L34-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

5点も含まれる。底径のわかるもの40点のうち、半数は3.6-5cmに分布する。口径は二寸五分-三寸前後となろうか。他に5.6-7.5cmの間に入るものが12点ある。口径三寸五分-四寸七分前後と考えられる。明らかに六寸以上の底部片も7点確認されている。小型品が多く、分布の状況はF33-3に近い。

焙烙 33の口径は31.8cm、口縁のみ三分一残存。口縁が直立し屈曲部下位にケズリが施される。G26-1の33、34とほぼ同じ形態である。底部片は29点、口縁片は43点出土している。33と同形態のものが30点を占める。他にF33-3の104-106に類似した口縁片も4点ほどみられる。

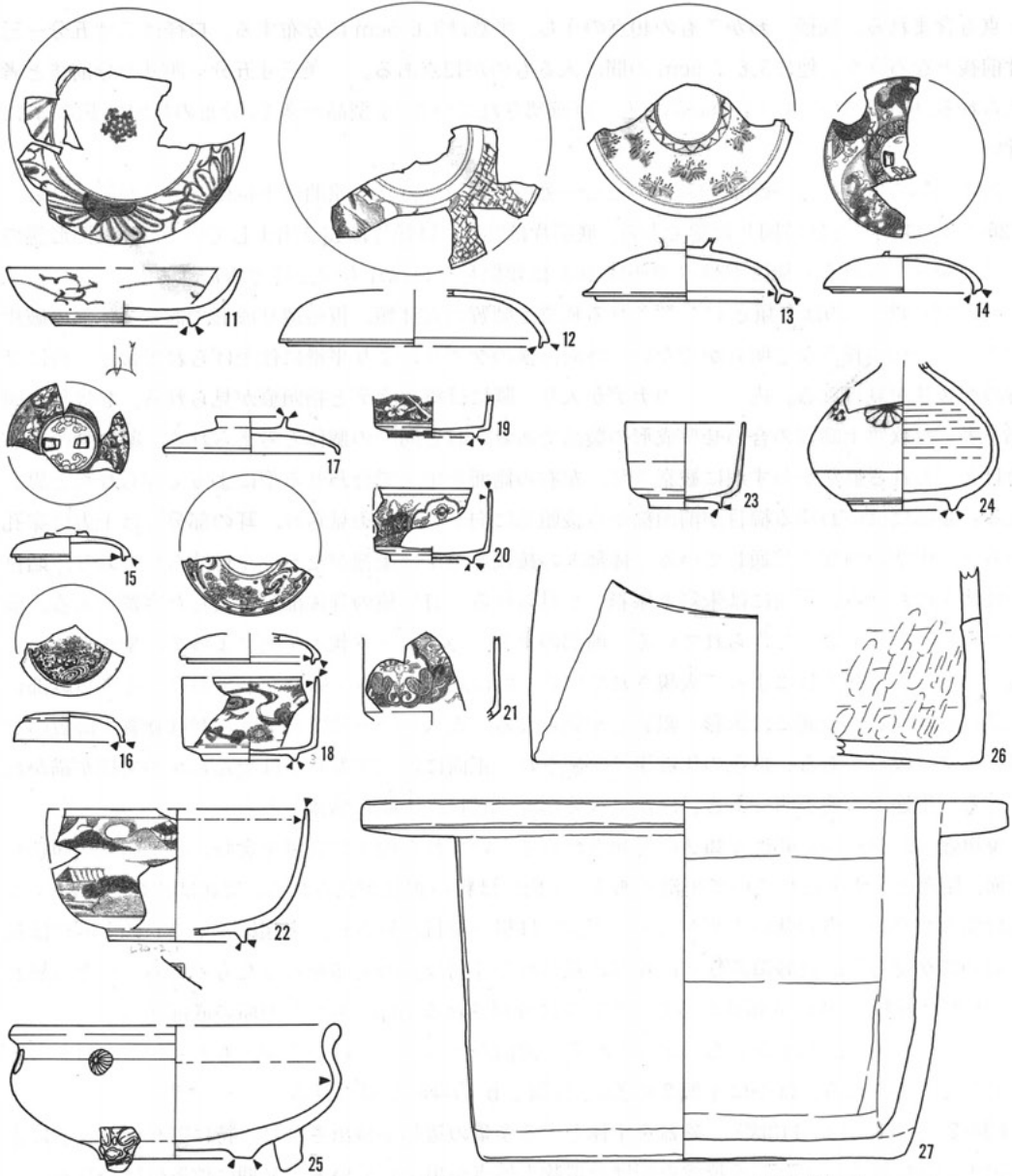
土器(39-42) 39はI類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。体部の破片であり、一辺の長さなど明らかでない。外面は横のケズリにより平滑に仕上げられており、角には縦のケズリが見られる。内面は横のナデが入り、隅には縦のナデと指頭痕が見られる。40は猿の頭部を表した軟質土師質の合わせ型成形の製品である。41と同一の個体と考えられる。額に型の合わせ目と思われる痕跡がわずかに観察され、左右の側面を中央で合わせる型によって作られたと思われる。頭部にはいわゆる櫛目が前頭部から後頭部に向かって3条見られ、耳の部分には上方に穿孔があり、中空の内部に貫通している。体部との接続部分には条線がたくさん付けられており、貼付の技法を窺わせる。表面には朱彩と銀彩とが見られる。41は猿の身体部分を表した容器である。前後を合わせる型によって作られている。前部の手と足の指はへら状の工具によって、型から外した後につけられた刻み目によって表現されている。背は後方に大きく張りだしており、その口縁部には敲打痕が巡る。表面には朱彩と銀彩とが見られる。火入れの一種であろう。42は軟質土師質の容器。ロクロ成形である。白色の化粧掛けが施され、正面には文字もしくはなんらかの文様が描かれている。用途その他不明である。ほかに火鉢類8、風口4、十能1個体がある。

焼塩壺(43-46) 43-45はI類2に分類される蓋。いずれも胎土に雲母を含む。43は側面が傾斜し上面、側面ともナデられていて平滑である。下面には粗い布目が見られる。突起は比較的細い。44、45は側面が垂直で横の強いナデが入る。下面には粗い布目が見られ、突起は太い。44の上面には長方形の枠が見られ、真砂遺跡などに類例の見られる「鷲坂」の刻印をもったものであったとも思われる。46はII類2 b2に分類される身。2類5に分類される刻印をもつ。内面の底部から上三分一のところ段があり、わずかに布目が見られる。前面がケズられてはいるが、もともとは布目をもっていたと考えられる。ほかにI類2の蓋6、II類2 bの身8が見られる。

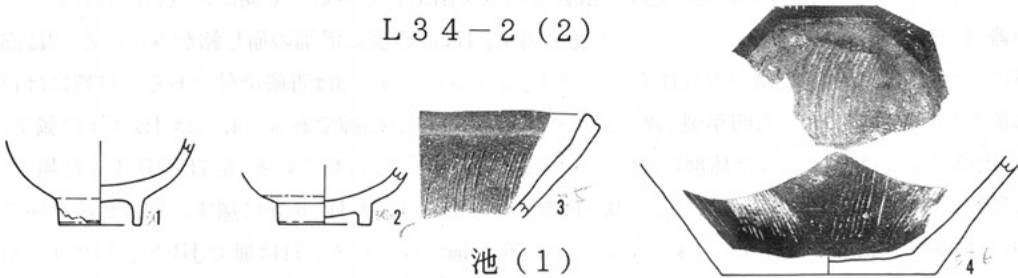
L34-2 (IV-112, 113図) 磁器を主体とする多量の遺物が検出された。特に蓋物のセットによる出土が目につく。また二次焼成を受けた遺物も何点か出土している。V期に位置付けられる。

磁器(1-25) 1-8は碗である。1, 2はJB-1-gに属す。1は高台裏に渦福の崩し銘がみられる。2は高台裏に「大明年製」の崩し銘がみられる。3, 8はJB-1-dに属す。3は青磁染付である。口唇には口銚が施され、高台裏には「大明年製」銘が描かれている。8は白磁碗である。4, 5はJB-1-fに属す。4は二次焼成を受けている。5は体部にコンニャク判による桐を散らしている。6, 7はJB-1-eに属す。高台裏に「富貴長春」銘が描かれている。9, 10は小坏である。9はJB-6-aに属す。10は色絵小坏でJB-6-bに属す。見込みと外面に上絵付けにより草花が描かれている。11は皿でJB-2-gに属す。胎土は灰白色を呈し見込みにはコンニャク判による五弁花が描かれ高台裏には「大明年製」の崩し銘

第一節 陶磁器・土器



L 34-2 (2)



池 (1)

IV-113图 L34-2(2)、池(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

が描かれている。12-17 は蓋である。12は JB-14 に属す。つまみの形態は欠損のため不明である。22の蓋である。14, 15は色絵の蓋で JB-14-c に属す。14は21の蓋になる。二次焼成を受けて詳細は不明であるが、外面に呉須と色絵を組合せて唐草を描いている。15は19の蓋になる。呉須と色絵を組合せて唐草を描いている。13, 17は JB-14-a に属す。13は摺絵にダミを施した五三の桐が描かれている。17は白磁の蓋である。16は合子の蓋で JB-18 に属す。型打ちによる陽刻で草花を施し、ダミを掛けている。18-22は蓋物である。18-21は JB-13-b に属す。19-21は色絵である。21は二次焼成を受けている。22は JB-13-a に属す。高台裏には銘がある。23は白磁の小坏で JB-6-d に属す。体部中に1条の微隆線が巡る。24は油壺で JB-12 に属す。二次焼成を受けている。25は青磁の香炉で JB-9 に属す。底部には獣面の脚が三脚貼り付けられている。高台幅は広く畳付には鉄錆を施している。

土器(26, 27) 26は2類 a に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。窓と思われる切り込み部の縁辺の破片が見られる。外面は縦方向のミガキによって平滑に仕上げられており、内面は指頭による押圧の後、横にナデられている。27は1類 d に分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。足はない。体部外面は横および縦のケズリで平滑に整えられている。内面は各面の周囲がナデられ、その内側には横のナデが見られる。底面外側にはコビキ痕が見られる。口縁部の上面と側面には銀彩が施されており、内面の上から 3cm ほどの部分にも及んでいる。

池 (IV-113, 114図) 寛永六年(1629)の紀年銘のある木札を含む多量の木製品とともに70kgを越える膨大な量のカワラケが出土している。この調査地点のなかでは、珍しい17世紀前半のまとまった資料ではあるが、既に種々のところでも述べているように、きわめて特殊な性格の遺物群である。儀礼的な宴会の後始末の一括廃棄の資料と考えるのが妥当であろう。その宴会は当時の将軍であった「家光」と前の将軍「秀忠」の『御成』に関係するものである可能性が高い。

大量の白木の箸と白木の折敷を主にした木製品およびカワラケ、これは当時の最高の儀礼的な宴会の食器のセットである。しかもそれをすぐに一括廃棄して、一度しか使わないという性格のものである。そうしたものが具体的な姿で現われた意義はきわめて大きなものがある。ここの遺物のあり方を一般化することは、その遺物群の性格からいってできないが、当時の宴会のあり方の一端に触れることのできる遺物群である。木製品の項とあわせて読んでいただきたい。

陶器(1-6) 1は灰釉碗の底部片である。TC-1に属す。全体に貫入がはいる。2は天目茶碗の底部片で TC-1-a に属す。3は信楽系の播鉢で TD-29 に属す。胎土には白色砂粒を多量に混入する。播目は6条 1単位である。4は瀬戸・美濃系の播鉢の底部片で TC-29 に属す。播目は13条 1単位である。5は唐津系の鉄絵皿で TB-2-c に属す。見込みには六箇所の砂目痕が認められる。6は瀬戸・美濃の皿で TC-2に属す。見込みには鉄絵によって渦巻が描かれている。胴部から見込みにかけて長石釉が施されている。

カワラケ(7-48) 表にもあるようにカワラケの実測総重量は70.115kgである。計測できた個体は634である。計測したものは底から口縁まであり、口縁がほぼ四分一以上ある個体である。遺構の項でも述べているように、カワラケは池の西側に折り重なって出土したもので、それをブロック毎に取り上げたものである。ブロック毎に接合し、それぞれのブロック毎に個別別をしてから計測をしているので、ブロックのなかで同一個体を再度計測していることはまずない。

第一節 陶磁器・土器

型作りカワラケ -----	585
ロクロ成形カワラケ -----	25
いわゆる「へそカワラケ」-----	24
計測総数 -----	634

1. 型作りカワラケ

口径 110mm A :108	90×108 = 9720g
口径 110mm C : 48	90× 48 = 4320g
口径 115mm A' : 45	95× 45 = 4275g
口径 115mm B : 42	95× 42 = 3990g
口径 115mm C' : 22	100× 22 = 2200g
口径 115mm C'' : 42	100× 42 = 4200g
口径 120mm E : 72	105× 72 = 7560g
口径 120mm F : 63	110× 63 = 6930g
口径 135mm : 85	145× 85 =12325g
口径 145mm : 38	150× 38 = 5700g
口径 155mm : 13	180× 13 = 2340g
口径 170mm : 7	260× 7 = 1820g

2. ロクロ成形カワラケ

口径 100mm : 1	60× 1 = 60g
口径 105mm : 7	70× 7 = 490g
口径 115mm : 9	85× 9 = 765g
口径 135mm : 8	135× 8 = 1080g

3. いわゆる「へそカワラケ」

口径 115mm : 21	95×21 = 1785g
口径 135mm : 1	105× 1 = 105g
口径 150mm : 2	125× 2 = 250g

計算による重量 -----	69915g
実際の計量による重量 -----	70115g
その差 -----	200g

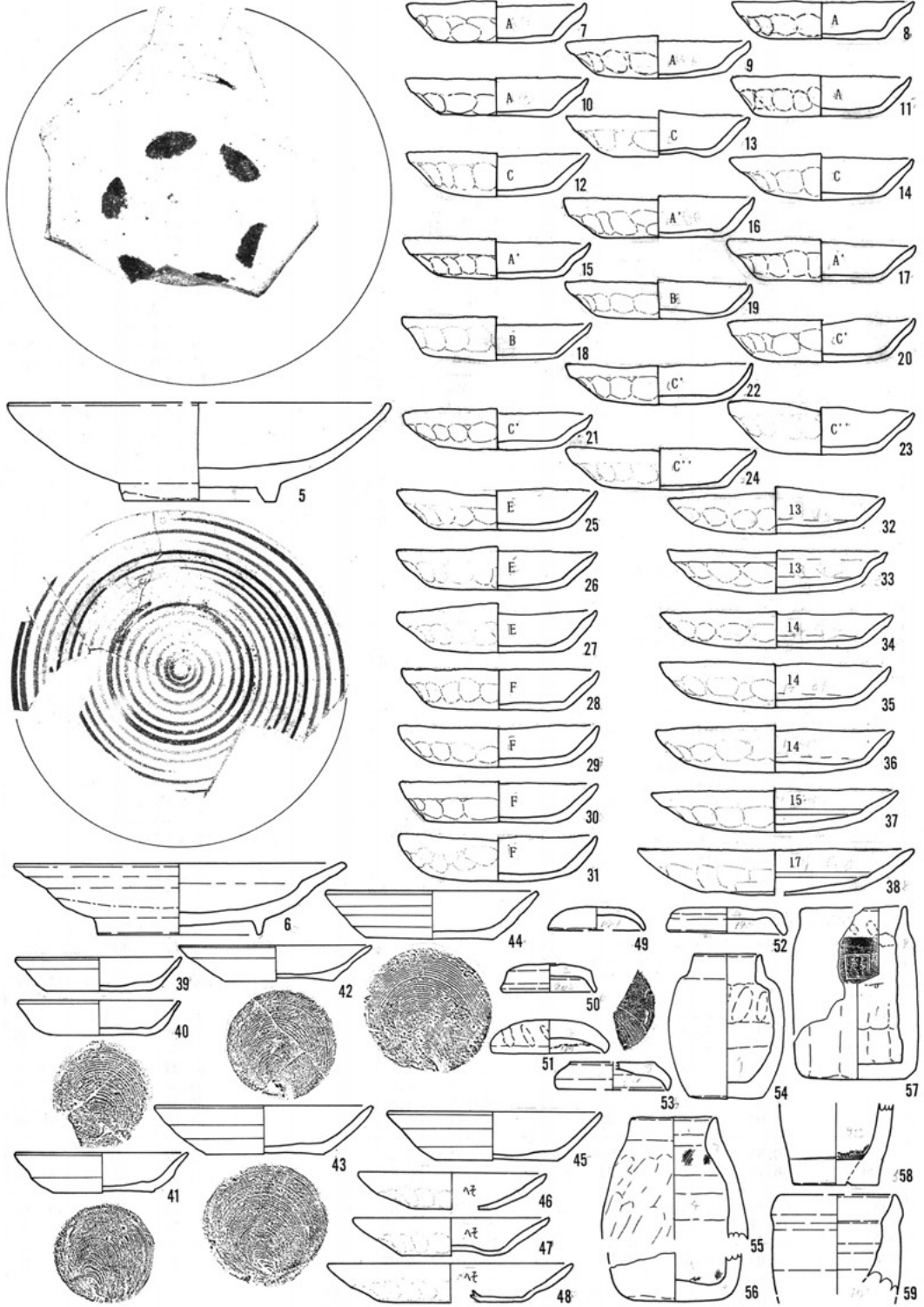
590頁の表にも見られるように、計測した634のカワラケのうち、ロクロ成形のものは25(3.9%)でしかなく、「へそカワラケ」は24(3.8%)である。他の585(92.3%)は型作りの可能性の強いものである。口径110mm, 115mm, 120mm, 135mm, 145mm 前後のものが主体となっており、これに155mm, 170mm 前後のもの若干が加わる。口径110mm 前後のもの156, 115mm 前後のもの151, 120mm 前後のもの135, 135・145mm 前後のものを合わせた数は123になる。若干のバラツキはあるが、ほぼ1:1:1:1の比率になろう。

これらの型作りと考えられるカワラケを口径、底径、高さ、内面の底径、内面の斜辺の長さ、底の厚さ、重量について計測し、口唇外面、外面の調整、内面の調整、底の内面の調整、底の調整、胎土について観察した。これらの要素を総合して、口径、内面の底径、内面の斜辺の長さを主要な要素としてグループ化した。これらの要素の計測値の平均と標準偏差および観察した結果を590頁の表に、それぞれの属性を写真16, 17に掲げる。

口径110mm 前後のものは観察した諸要素で対照的な二つのグループに分離できる。A とするものとC とするものである。A は口径が111mm をやや越え、内面の底径が70mm, 内面の斜辺の長さが26mm 前後であり、比較的完全な円形をしており、外面の調整は余りなされず、おそらく型に粘土を押しつけた時に付いた指の痕かと思われる凹凸がよく残っているものである。内面の底には、型からはずした後で濡れた布でナデるのであろうが、その痕がはっきりしている。底には製作の過程で付いた繊維の痕がいずれのグループのものにも少々は見られるが、A ではこれがほとんど消されずにそのまま残されている。要するに整形と調整がきわめて粗雑なグループである(7-11)。

C とするものは口径が111mm ほどで、内面の底の径が64mm, 内面の斜辺の長さが30mm をやや

第IV章 江戸時代の遺物



IV-114図 池出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器

		数量	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	内径 (mm)	底厚 (mm)	内長 (mm)	重量 (g)	
110	A	計	108	111.6±0.8	75.6±1.8	24.1±0.8	70.0±0.0	4.0±0.5	25.8±0.6	90.0±5.6
		完	26	111.5±0.9	76.8±2.1	24.3±1.0		4.0±0.5	26.0±0.6	90.2±4.7
		破	82	111.7±0.8	75.2±1.4	24.0±0.8		4.0±0.5	25.7±0.5	
	C	計	48	111.3±1.0	69.9±1.2	26.2±0.9	63.8±0.6	4.0±0.6	30.6±0.6	90.5±5.0
		完	19	111.4±0.9	70.0±1.2	25.9±1.1	64.0±0.0	4.3±0.6	30.7±0.7	91.9±4.9
		破	29	111.2±1.0	69.8±1.2	26.4±0.8	63.7±0.8	3.8±0.5	30.6±0.5	
115	A'	計	45	115.6±0.7	76.0±2.6	24.5±0.8	70.0±0.0	4.0±0.5	27.0±0.9	94.1±5.8
		完	11	115.3±0.5	76.5±2.9	24.5±0.8		4.2±0.6	26.9±0.8	94.2±8.0
		破	34	115.7±0.7	75.8±2.3	24.5±0.8		3.9±0.4	27.0±1.0	
	B	計	42	115.9±0.5	81.5±1.7	24.8±0.8	76.0±0.0	4.2±0.5	28.4±1.0	96.7± 9.1
		完	12	115.8±0.6	82.0±2.6	24.9±1.0		4.1±0.6	28.9±1.1	97.5±15.5
		破	30	115.9±0.5	81.3±1.2	24.7±0.6		4.2±0.5	28.2±0.9	
	C'	計	22	114.2±1.3	74.5±2.6	24.9±0.9	67.9±0.9	4.5±0.8	26.7±1.0	101.5± 8.8
		完	10	114.0±1.2	75.0±2.9	24.9±0.8	68.0±0.0	4.9±0.6	26.3±0.9	100.0±10.5
		破	12	114.3±1.4	74.0±2.4	24.9±1.0	67.8±0.6	4.1±0.8	27.1±1.0	
	C''	計	42	115.5±0.8	74.0±1.6	25.4±0.9	68.0±0.0	4.0±0.6	29.3±1.0	99.1±7.4
		完	16	115.3±0.7	74.6±2.0	25.6±1.0		4.4±0.5	29.1±0.9	99.5±8.6
		破	26	115.6±0.8	73.9±1.2	25.3±0.8		3.8±0.5	29.4±1.0	
120	E	計	72	121.8±0.6	80.0±1.6	24.6±0.9	73.8±0.5	4.1±0.5	28.8±1.2	106.7± 6.2
		完	21	121.3±0.9	79.9±2.1	24.8±0.8	73.4±0.5	4.2±0.4	29.5±1.0	103.6± 8.5
		破	51	122.0±0.3	80.0±1.4	24.5±1.0	74.0±0.4	4.1±0.5	28.6±1.5	
	F	計	63	122.1±0.7	83.1±1.6	24.9±1.1	80.0±0.0	4.1±0.7	27.9±0.8	108.5± 8.8
		完	13	122.1±0.8	84.3±2.3	24.8±1.3		4.4±1.0	28.1±0.5	111.7±15.3
		破	50	122.1±0.7	82.8±1.3	24.9±1.0		4.0±0.6	27.9±0.8	
135	計	85	134.9±1.0	98.0±2.2	24.5±1.3	92.2±1.6	4.2±0.6	25.7±1.7	147.5± 9.1	
	完	14	135.6±0.9	99.1±1.6	25.1±1.1	93.0±1.5	4.5±0.7	25.7±1.6	135.0± 0.0	
	破	71	134.7±1.0	97.7±1.8	24.4±1.4	92.0±1.5	4.2±0.6	25.7±1.7		
145	計	38	144.2±0.9	107.9±1.9	24.3±1.4	102.3±2.0	4.5±0.6	25.8±1.6	150.0±16.3	
	完	8	144.0±0.0	108.0±2.1	22.6±0.5	102.8±1.0	4.5±0.5	25.1±1.4	162.5±31.8	
	破	30	144.3±1.0	107.9±1.9	24.8±1.3	102.1±2.2	4.5±0.6	25.9±1.7		
155	計	13	153.2±1.0	115.1±3.5	25.0±1.4	110.2±2.1	4.3±0.5	26.5±1.4	180	
	完	1	154	110	25	110	5	26		
	破	12	153.2±1.0	115.5±3.3	25.0±1.4	110.2±2.2	4.3±0.5	26.3±1.4		
170	計	7	170.9±1.6	125.9±1.2	29.0±1.2	121.1±1.6	4.7±0.8	28.4±2.4	260	
	完	1	170	125	30	120	5	30		
	破	6	171.1±1.7	126.0±1.3	28.7±1.2	121.3±1.6	4.7±0.8	28.2±2.5		

		口縁		外面		内面底		底部		胎土		
		ナ	デ	ケ	ズリ	平	滑	凹	凸	平	滑	
		ナ	デ	ケ	ズリ	平	滑	ナ	デ	凹	線	
		平	滑	纖	維	痕	砂	礫	泥	礫		
110	A	60.2%	39.8%	12.9%	87.1%	11.2%	88.8%	-	4.0%	96.0%	90.7%	9.3%
	C	83.3%	16.7%	91.7%	8.3%	91.7%	8.3%	-	70.8%	29.2%	12.5%	87.5%
115	A'	44.4%	55.6%	33.3%	66.7%	31.1%	68.9%	-	35.6%	64.4%	55.6%	44.4%
	B	71.4%	28.6%	81.0%	19.0%	61.9%	38.1%	-	51.2%	48.8%	16.7%	83.3%
	C'	45.4%	54.5%	22.7%	77.3%	63.6%	36.4%	-	40.9%	59.1%	54.5%	45.5%
	C''	69.0%	31.0%	92.9%	7.1%	78.6%	21.4%	-	69.0%	31.0%	9.5%	90.5%
120	E	70.8%	29.2%	88.9%	11.1%	87.5%	12.5%	-	68.6%	31.4%	15.3%	84.7%
	F	58.7%	41.3%	88.9%	11.1%	74.2%	25.8%	-	45.2%	54.8%	19.0%	81.0%
135		65.9%	34.1%	81.2%	18.8%	87.1%	12.9%	54.1%	74.1%	25.8%	2.3%	97.6%
145		78.9%	21.1%	86.8%	13.2%	76.3%	23.7%	36.8%	71.1%	28.9%	0.0%	100.0%
155		100.0%	0.0%	92.3%	7.9%	100.0%	0.0%	23.1%	61.5%	38.5%	0.0%	100.0%
170		100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%

IV-1表 池出土の「かわらけ」の属性

第IV章 江戸時代の遺物

越える。高さもやや高いもので、生乾きの時に手でつまんだためか、一方向の径が短くなり、楕円形になっているものが多いという特徴をしている。外面の調整はよくなされ、指の痕はほとんど見ることができないほど平らにされている。内面の底も調整がなされ平らであるし、底の繊維の痕も消えてしまっているものが三分二以上もある。丁寧な調整がされているグループである(12-14)。

口径115mm 前後のものは四つのグループに分けることができる。A'、B、C'、C"である。C'とC"は一つにすることも可能かとも思われるが、計測した結果は内面の斜辺の長さなどに若干の差があること、観察した結果では、外面の調整などにやや差のあるものがあることなどから、分離したが、一つのグループ内の変異としてとらえることも可能であろう。

A'とするものは、口径が115-116mm、内面の底の径が70mm、内面の斜辺の長さが27mm ほどのもので口径、内面の斜辺の長さなどが若干大きいのを除くと、A ときわめてよく類似している(15-17)。観察した諸要素でも、A の特徴とした調整が粗雑な傾向がここにも見られる。粗雑な要素としてあげた外面の調整、内面の底の調整、底を調整しないことなどがA ほどの高率ではないが、三分の二近くの個体に認められる。口径が大きいいためか重量も若干重い。A との差は計測値、特に口径と内面の斜辺の長さにあるということもいえよう。底と斜辺の間の角度も類似しており、口径が大きくなった分、斜辺が若干長くなったともいえよう。内面の底の径は一致している。この点はC とC'・C"の違いと異なるところである。同一のグループ内の変異である可能性もかなりある。

B とするものは、口径が116mm 弱で、内面の底の径が76mm、内面の斜辺の長さが28mm 前後のもので(18, 19)、口径110・115mm のもののなかでは、最大の内面の底の径をもっている。観察した諸項目を見ると比較的丁寧な調整がなされている。

C'とC"は先にも触れているように多くの共通点をもっている。計測した項目のほとんどで大きな差はない。口径はC'(20-22)が114mm、C"(23, 24)が115.5mm、内面の底の径は両者ともに68mm で、内面の斜辺の長さはC'が27mm弱、C"が29mm、高さはC'が25mm弱、C"が25.5mmほどで、C"が一回り大きい。高さが大きくなっただけ、口径も大きくなったと考えることもできよう。観察した項目では、若干の差が認められる。C'は外面の調整、底の調整などでC"と比較すると粗雑な点が多い。内面の底の径が一致しているところから見ると、AとA'との関係に近いということもできようか。

口径が120mm 前後のものは、二つのグループに分けることができる。E と F である。E とするものは、121mm 強の口径、74mm 前後の内面の底の径、29mm 前後の内面の斜辺の長さがあり、調整はおおむね良好なグループである(25-27)。形態はA のグループに類似する。

F とするものは、口径が122mm、内面の底の径が80mm、内面の斜辺の長さが28mm ほどのグループであり、調整は良好なものが多い。形態的な特徴としては、底が丸みをもっていて、胴部と底との境がはっきりしないものが多いことがあげられよう(28-31)。このような特徴は口径120mm 以下の他のグループには見られない。むしろ口径が135mm 以上のカワラケの形態と類似する。

口径が110mm から120mm のものの胎土は、大きなものになると径 5mm にもおよぶ砂礫を含むことがあるように精選されたものではなく、またA としたグループに典型的に見られるように、調整も粗い。いかにも一時に大量に作ったという印象の強いものである。しかしながら、内面の底の径はそれぞれのグループ毎に見事なまでに一致している。カワラケを効率よく一時に大量生産しよ

第一節 陶磁器・土器

うとすれば型作りがもっとも効率のよい方法であろう。内面の底の径の大きさの一致、内面の形態の一致、外面の指の痕、こうした要素は型作りされたことを示していよう。色もグループ毎に若干の違いがある。基本的には、褐色をしているものが多いが、A と A' のグループでは明るい、赤褐色に近い色のものが多いのにたいし、C・C'・C" のグループでは、くすんだ、やや暗い色をしているものが多い。B のグループも暗い色のものが多い。E・F は A・A' グループに類似するやや赤味を帯びた明るい色のものが多い。F には若干白みを帯びているものが散見される。口径が135mm 以上のもは例外なく、白い、明るい色をしており、砂礫の混じることがほとんどない精選された胎土で作られているのと大きな違いである。基本的な製作技法には全くといってよいほど差がないのに、胎土と色には大きな違いがある。

口径が135mm 以上のもは計測した項目、観察した項目から、口径の同じもののなかに、差を見出すことはできなかった。口径135mm(32, 33), 145mm(34-36), 155mm(37), 170mm(38)を中心にしてほとんどバラツクことなく集中しているし、他の計測項目でも、集中度は高い。標準偏差 1mm 前後の値がほとんどである。口径120mm 以下のものと同じように型作りされていたものと考えられる。口径135mm 以上の個体では F のグループの形態上の特徴としてあげた底が丸くなる傾向がはっきりする。ほとんどのものの底は丸く、底の境がはっきりしない。それとともに内面の底の周囲に凹線が入るものが見られるようになることである。凹線が入らないとしても、その部分が若干くぼんだようになっているものがほとんどである。これは型から外したあとでつけられている。機能上の問題と関連するのであろうか。胎土の違い、色の違い、凹線の存在、こうした差は口径120mm 以下のものと135・145mm のものが、別の機能をもっていたのではないかと思わせる。155mm, 170mm のものは例外的な存在であろう。

ロクロ成形のもの(39-45)、いわゆる「へそカワラケ」(46-48)は少数であるが、胎土、色とも型作りと考えているカワラケとは全く異なる。生産過程が異なっていたことを示していよう。ロクロ成形のものは全例右回転の糸切り底である。灯火具として使用したことを示すであろう口縁の灯芯の痕は一例だけ破片に付いている。ほかに金箔の付いている破片が一例ある。

590 頁の表にもあるように、実測した重量と、測定したカワラケの個数にそれぞれのグループのカワラケの重量の平均値を乗じたものを加算した重量との間にほとんど差はない。実測した重量が70.115kg であり、平均値に個数を乗じて、加算した重量が69.915kg である。70kg のものに対して、200g の差でしかない。このことは推定した個数が実際に池のなかにあったものにかかなり近いことを示していよう。

さきに、口径110mm のもの、115mm のもの、120mm のもの、135mm+145mm のものの個数にほぼ1 : 1 : 1 : 1 の関係があるとしている。またその数は150 を前後するものである。木製品を見ると折敷の部分でもっとも数の多いものは120 を若干下廻る。白木の箸が標準的な八寸のものが、やはり150 膳をやや下廻る数である。こうしてみると、150 を前後する数数というのが一つの数値として浮び上がってくる。一つの折敷に、一膳の箸と四種の大きさの異なるカワラケが載るといった形が推測される。計測をすれば、口径110mm, 115mm, 120mm のものを識別することは簡単であるが、一見してこれらを判断することはかなり困難である。これら三種のの大きさのものは別種の

第IV章 江戸時代の遺物

ものとして認識されていたかどうか疑問もある。径四寸ほどのカワラケ三枚と径四寸五分から五寸弱の色のやや白いカワラケ一枚とするのが妥当なのかもしれない。一人につき折敷が一つならば150人前後の、二の膳まで付いて、一人につき折敷二つならば、70-80人前後の人数の宴会の後始末をこの池に投げ込むことによりしたのであろう。当然のことながら、『御成』に関連するかと思われる宴会の全ての食器の後始末をここにしたものではない。そのごく一部のものであろう。

このような形でカワラケがかたまって、水に関連するところから出土する例は葛西城の濠址（長瀬 1975）などでも確認されている。宴会の後始末をこのような水に関連するところにつける習慣があったのでたのであろうか。

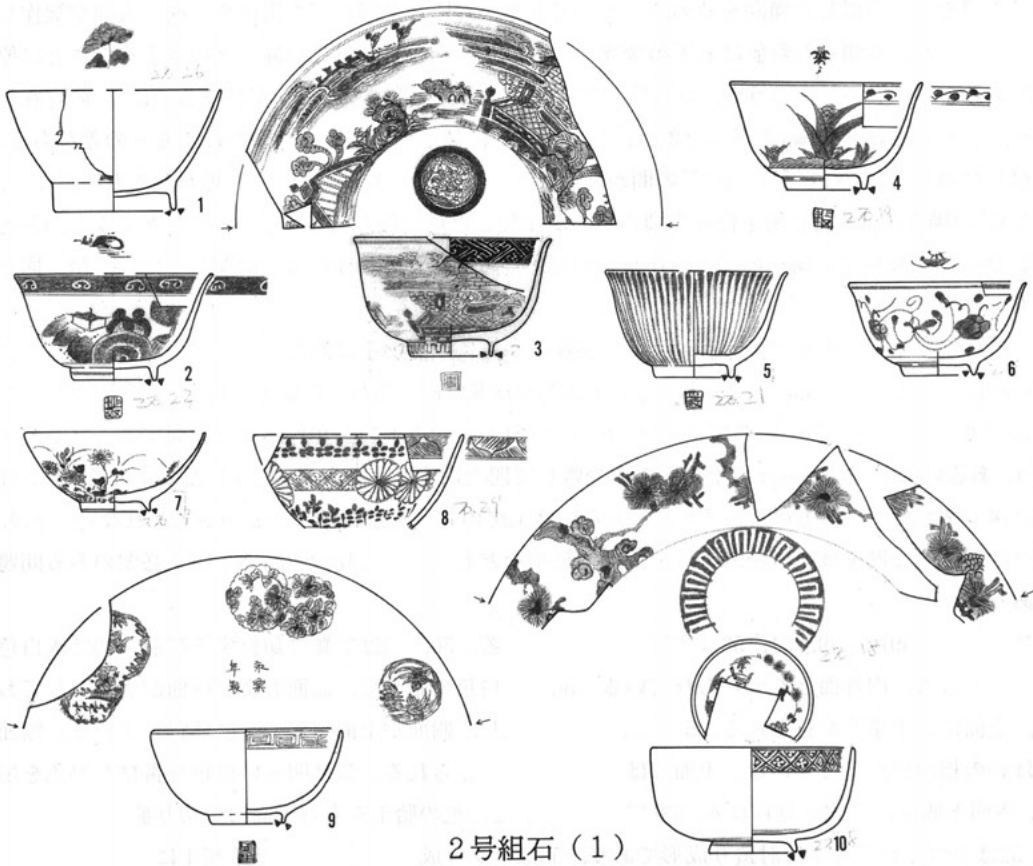
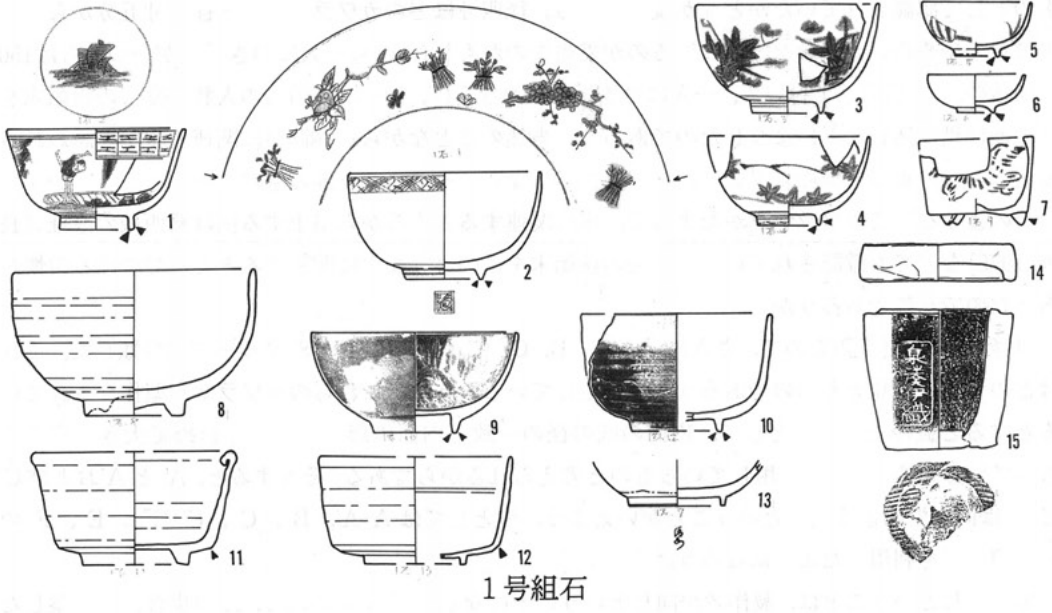
口径120mm以下のもので、さきにA, A', B, C, C', C'', E, Fの8グループに分類した。これはどのような意味をもつのであろうか。推定しているように、これらのカワラケが型作りされているとすると製作上の特性として、内面の底の径の一致と内面の形の一致はきわめて大きな意味をもっている。同一の型を使用しているものと考えられるからである。そうすると、AとA'およびC'とC''は同じ型による製品ということがいえよう。型としてはA・A', B, C, C'・C'', E, Fの六種類の型を利用したことになろう。

型が同じということは、製作者が同じということになるのであろうか。A・A'の場合には観察した項目の間でも、類似した傾向を認めることができる。おそらく同じ型を用いて、同じ人間が製作したのであろう。計測した数値に若干の変異のあるのは、その日の気分の違いというようなことに原因があるのではないであろうか。C'・C''の場合にはいささか微妙である。気になるのはCの存在であり、C'とC''の間には、観察した項目において、特に外面の調整、底の調整にかなりの差がある。観察した項目では、むしろCとC''の間が近い。それが個人のクセに基づくと思われるものだけに、C'とC''の場合には、同じ型を使って別の工人が作製した可能性もある。もしそうだとすると、CとC''は別の型を使って、同一の工人が作製した可能性も出てくる。他のものに関しては同じ型、同じ工人の作製であろう。

この時期のカワラケがどのようにして、製作者から使用者の手にわたっていたのかを、具体的に明らかにすることは、現状ではできない。全体的な印象、特に色および胎土の様相を見ると、A・A'・Eのグループ、B・C'・C'・C''のグループ、Fと口径135mm以上のグループに三大別することができよう。あるいはFと135mm以上のものを分離して四大別するかである。こうした要素は原材料、焼成と深く関わっているものである。あるいは工房の違いを意味しているのかもしれない。今後、個々の具体的な例を地道に積み上げ、流通の様相なども考慮に入れつつ詰めていく必要のある問題であろう。

焼塩壺(49-59) 49, 51, 52はA類に分類される蓋。50, 53はA類に類似する製品。49は灰白色の胎土をもち、内外面ともナデられている。50は灰白色の胎土で、側面および内面がナデられており、上面には手掌痕が見られる。51は強い橙色を呈し、側面が上面へ緩やかに移行している。側面には斜の指頭痕が巡っている。上面には砂粒の付着が見られる。52は明るい橙色を帯びた褐色を呈し、内面と側面にナデが見られる。53は褐色を帯びた白色の胎土をもち上面に糸切り痕が見られる。49-52は手づくねもしくは肘造り成形であり、53はロクロ成形である。54はI類1に分類される身。

第一節 陶磁器・土器



IV-115図 1号組石、2号組石(1) 出土遺物・

第IV章 江戸時代の遺物

刻印は認められない。部分的に橙色を帯びる白色の胎土をもつ。胴張りの体部と、強く屈曲して張りだす肩部、垂直に立ち上がる口縁部とをもつ。55はI類1に分類される身。灰白色の胎土をもつ。内面頸部付近に布目の圧痕が点々と見られる。刻印は認められない。56は55と同一個体もしくは同一の分類項目に属すると考えられる個体の底部片である。布目の圧痕が点々と見られる。57はI類3に分類される身。2類1に分類される刻印をもつ。頸部に指頭痕が連続する。底面にムシロ状の圧痕が見られる。58は板造り成形の底部。明るい橙色を呈する。底面に粘土塊が一つ入り、内面には縫い目が見られる。59はロクロ成形の焼塩壺に類する製品の破片である。明るい橙色を呈する。増上寺子院群遺跡に類似の製品が見られる。ほかにA類の蓋12、I類の身50がある。身のうち8点には2類1に分類される刻印が捺されていたと思われる。

1号組石 (IV-115図) 1号組石からは陶磁器を中心として比較的まとまった量の遺物が出土している。年代的にはやや幅を有するものの17世紀末から18世紀の前半の枠内には押しえられるであろう。本地点ではV期に位置する。

磁器(1-6) 磁器は6の他すべて染付である。1はJB-1-nである。他に同期の遺物が検出されておらず、流れ込みであろう。2はJB-1-eである。高台裏に二重角枠内渦福銘が描かれている。3、4はJB-1-gである。ともにコンニャク判と手描きを併用して絵付けされている。5、6はJB-6-aである。6は白磁である。

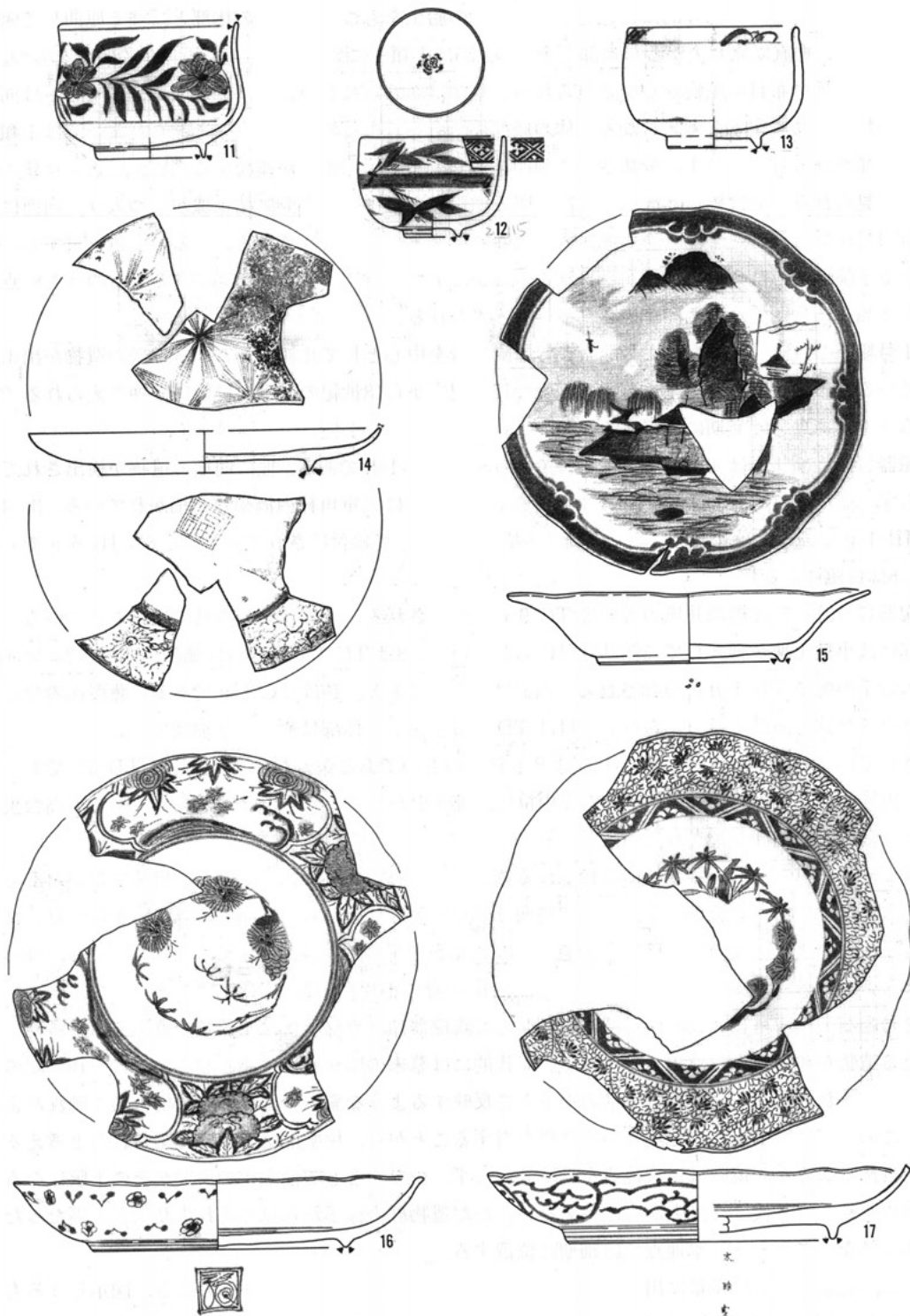
陶器(7-13) 7は御深井風の香炉でTC-9-cに分類される。文様は鉄絵の具で摺絵されている。底部には小粘土塊が脚として3個貼り付けられている。8はTC-1-cで高台は無釉である。9は唐津系の蛸手の碗でTB-1-dに分類される。内面は刷毛目である。10はTC-1-uである。藤澤氏の分類では第4型式に当たると考えられる。11はTD-9-bである。体部はやや開き加減で、高台脇も面取りされていない。同類のF34-11の135よりも後出のものであるかもしれない。12はTD-32であろう。内外面に柿釉が施されている。内面中位に沈線が引かれている。13はTB-1-bである。高台裏には「清水」の刻印が押されている。

焼塩壺(14, 15) 14はI類2に分類される蓋。灰白色を帯びた褐色を呈する。橙色を帯びた部分もある。胎土に雲母を含む。上面および側面はよくナデられている。下面には、粗い布目が見られる。15はII類2 b2に分類される身。橙色を帯びた褐色を呈する。外面はよくナデられている。底面にはスグレ状の圧痕が見られる。ほかにII類2 bの身の小片1がある。

2号組石 (IV-115~130 図) 本組石からは陶磁器類、カワラケ、土器類、焼塩壺など多種にわたる遺物が非常に多量に出土している。年代的には幕末の頃がその中心となるが、17~18世紀のものも含まれており、一時期の生活のセットを反映するような資料ではない。遺構の項で触れたようにこの組石は富山藩との地境という性格を有することから、屋敷廃絶と共に廃棄されたと考えるのが自然であるが、遺物は二次焼成を受けておらず、少なくとも明治元年の火災がその下限になるものの明確な実年代は文献上からは追えない。ただ遺物群の様子から見てそれより大きく隔たった年代ではないであろう。本地点ではVIII期に位置する。

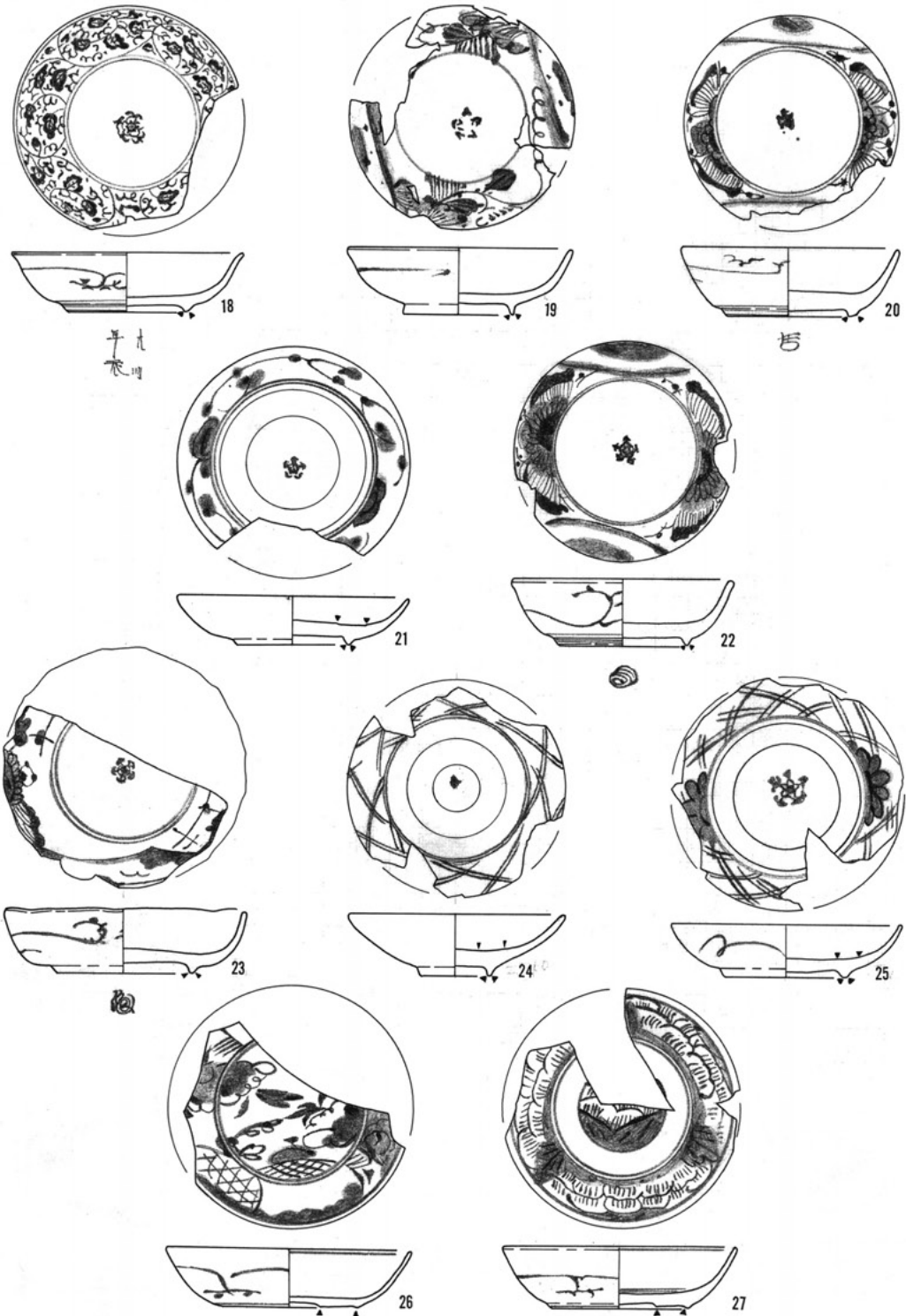
土器、焼塩壺ともに多量に出土している。土器では、硬質瓦質の製品が多いこと、図示しうるものがなかったが、ロクロ成形の小型の土師質の火鉢類の多いことが特徴である。焼塩壺は各種のもの

第一節 陶磁器・土器



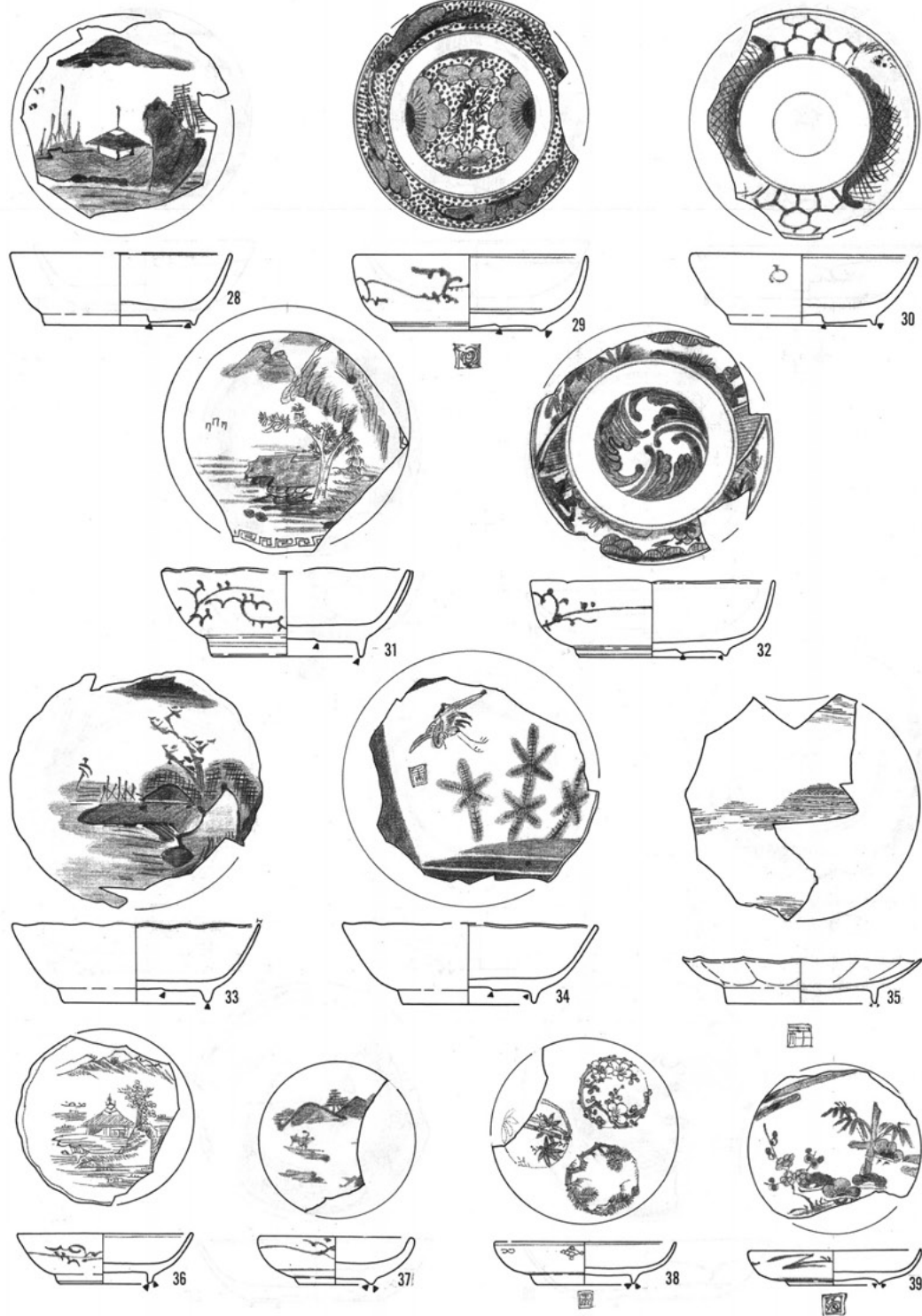
IV-116図 2号組石出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物



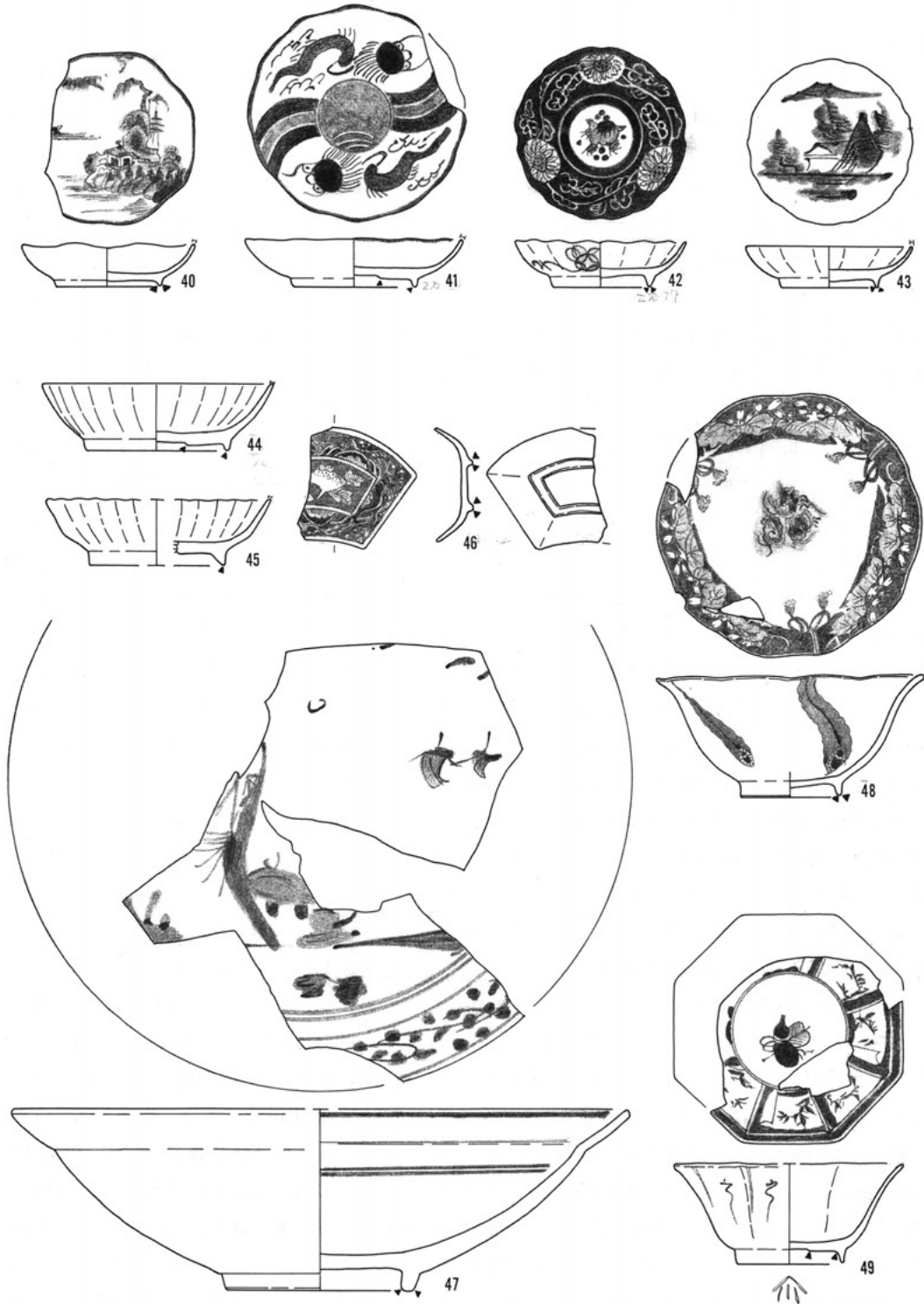
IV-117図 2号組石出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器



IV-118图 2号组石出土遗物(4)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-119図 2号組石出土遺物(5)

第一節 陶磁器・土器

のが見られたが、刻印をもたない板作り成形のもの存在が、この成形方法によるものの終末期の姿を示すものとして注目される。

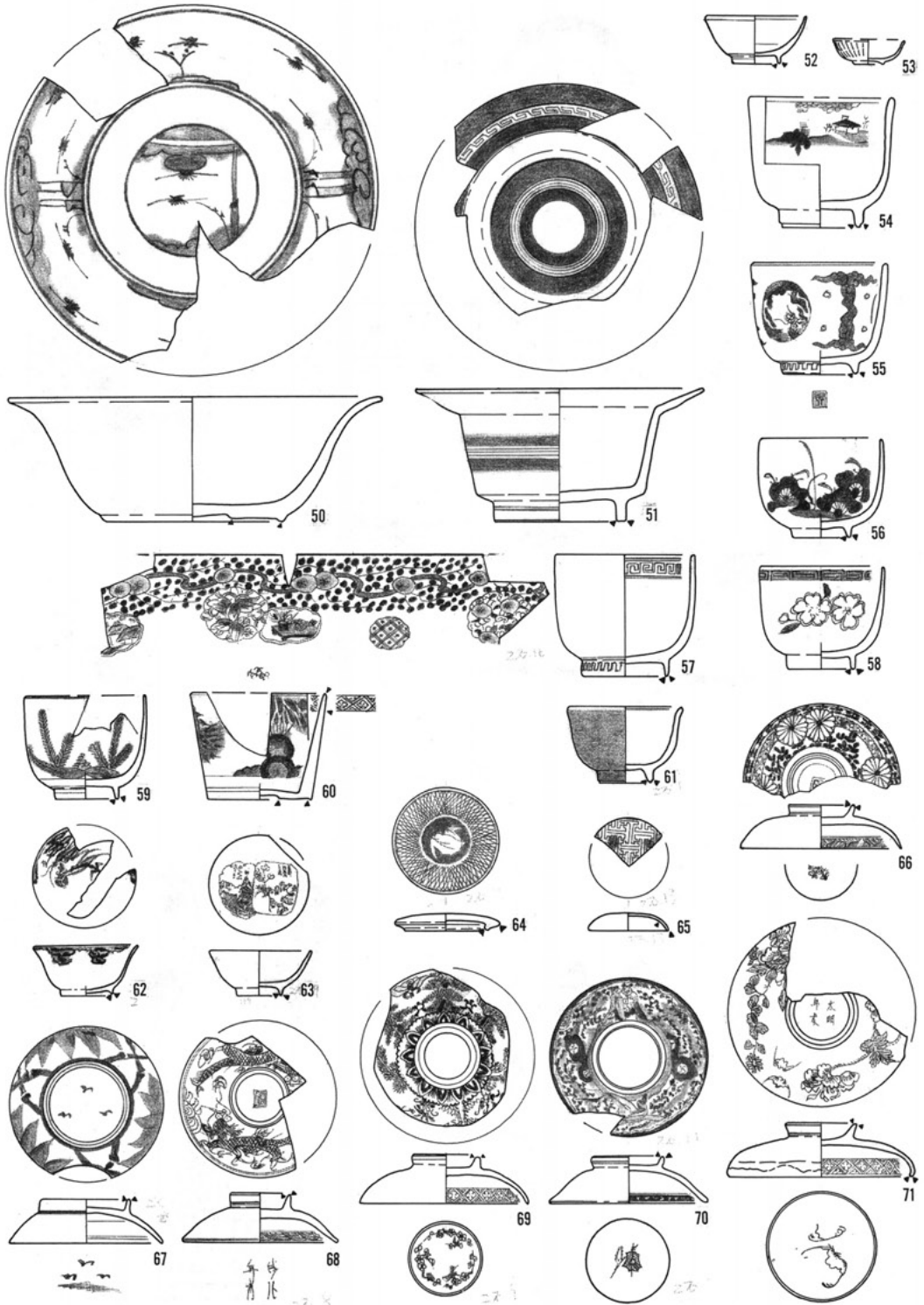
磁器(1-12, 14-18, 20-88) 1-10, 12 は染付碗である。1は JB-1-m で蓋は散見されるが本類の碗は組石でこれ 1点しか見られない。2, 4-6は JC-1-d である。4は絵付けの線が明瞭で輸入呉須を使用していると思われるが、2, 5, 6は瀬戸・美濃地方の地呉須を使用している。3は JB-1-n である。見込み口縁部の帯文は紗綾形に墨弾きで描かれている。胎土、呉須の発色などは良好である。7は JC-1-f である。呉須の発色は鮮やかで、輸入呉須を使用している。8は本遺構中の66とセットである。碗の欠損面には漆継ぎの痕跡が見られることや、蓋の内面には手描き五弁花が、高台状のつまみの中には、二重角枠内に渦福が描かれており、18世紀前葉の製品であると考えられる。9は JC-1-a である。絵付けは輸入呉須を用いており、見込みには「永楽年製」、高台裏には二重角枠内角福の銘が描かれている。焼き継ぎ痕が認められる。10は JB-1-q である。11は染付の蓋物で、JB-13-d に分類される。12は JB-1-h である。見込み中央には手描き五弁花が描かれている。

14は色絵、15-18, 20-35, 41は染付皿である。14は古九谷様式の皿で JY-2 に分類される。口唇部には口銹が施され、高台裏にはハリ支えが認められる。文様は見込みに放射状の細線描が描かれ、緑で塗り潰される。外面は唐草文が描かれ、黄で塗り潰される。高台裏は緑で塗り潰されるが、中央に二重角枠内角福が銘されている。二次焼成を受けている。分析試料の 9番である。15-18は JB-2-e である。15は見込み口縁付近には墨弾きで絵付けされ、また焼き継ぎ痕が見られ、高台裏には焼き継ぎ印の点が三つ付けられている。ハリ支えが四箇所認められる。16は高台裏には二重角枠内渦福の銘が描かれ、ハリ支えが五箇所認められる。漆継ぎ痕が見られる。年代的には18世紀のものであると思われる。17は欠損しているが「太明成化年製」が銘されていると考えられる。18は見込み中央にコンニャク判五弁花が描かれている。20, 22, 23は JB-2-g, 21, 25 は JB-2-m, 24は JB-2-l, 26, 27-30, 32 は JB-2-j, 31, 33, 34は JB-2-i, 35は JB-2-c である。20-25まではコンニャク判五弁花が描かれている。31は高台裏に墨書が書かれているが、判読はできない。33, 41は口唇部に口銹を施している。34, 41は絵付けに墨弾きが認められる。35は型打ちで高台裏には角福銘が描かれている。ハリ支えが一箇所認められている。

36-40, 42, 43 は染付小皿で、36, 40, 42, 43は JB-3-b, 37, 39は JB-3-a, 38は JC-3-b である。36は清朝磁器の影響と見られる細線描で絵付けされている。39は二重角枠内渦福の銘が描かれている。40, 43は口唇部に口銹が施されている。42は墨弾きで絵付けされている。44, 45は白磁皿で JB-2-i に分類される。口唇部には口銹が施される。46は染付型皿で高台も型で作られている。JC-4 に分類される。見込み中央の花文、外周部の波濤文は浮文になっている。47は染付大皿で JB-2-a に分類される。口縁文様に蔓草文が描かれている。この手の皿は17世紀に山辺田窯で多量に焼成されている。

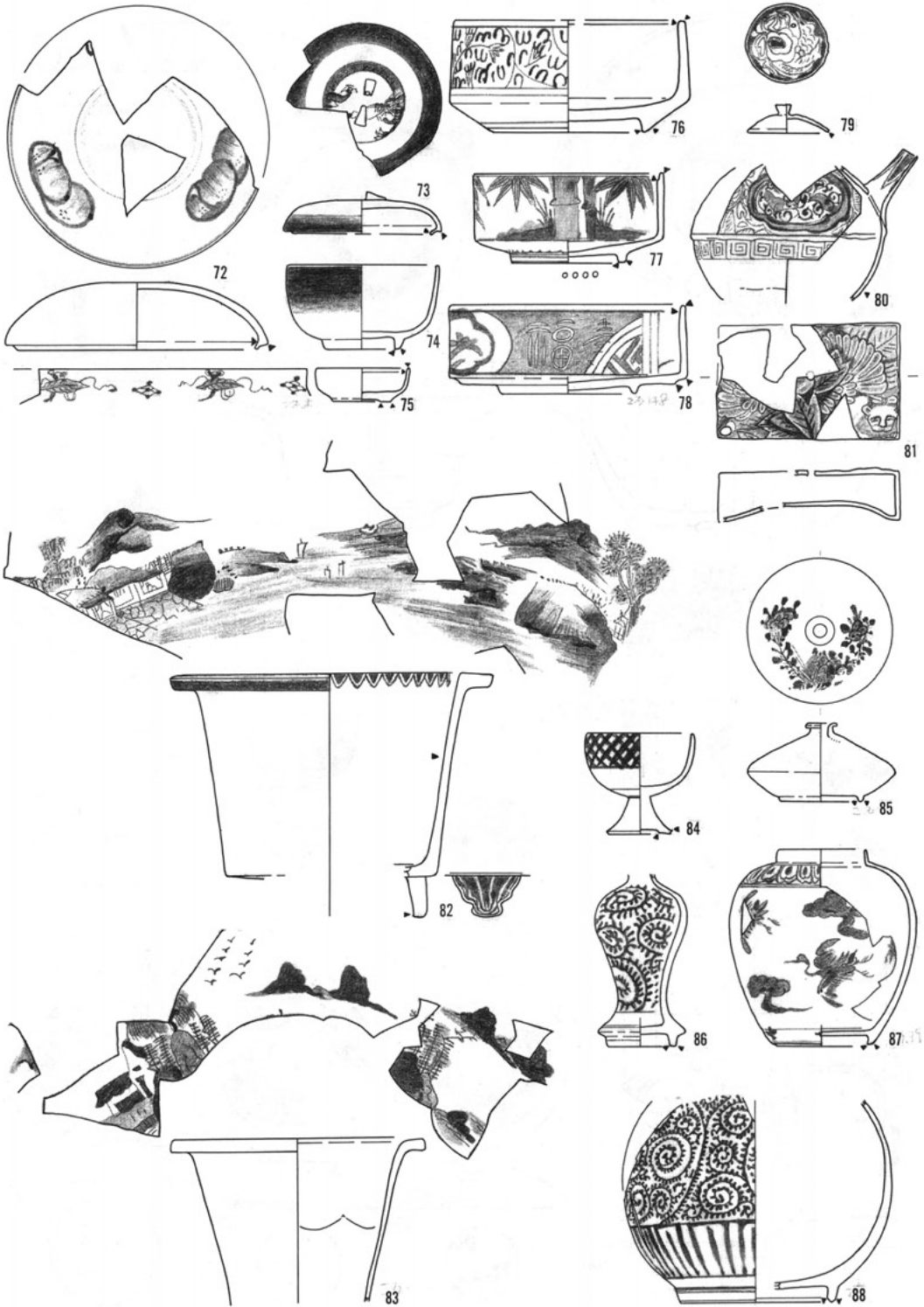
48, 49, 51は染付、50は青磁染付の鉢で JB-5 に分類される。48, 49は焼き継ぎがされ、49には焼き継ぎ印が記されている。49, 50は蛇ノ目凹形高台である。52は染付で JB-6-a である。53は白磁で JB-17 である。54は器面が黄釉、見込みが染付で、JC-1-e である。焼き継ぎがされている。55は染付で JB-1-o に分類される。見込み口縁部帯文は雷文が描かれている。56は JC-1-e である。染付で呉須は地呉須を使用している。57は染付で JB-1-o である。胎土、呉須の発色は良好である。58は色

第IV章 江戸時代の遺物



IV-120図 2号組石出土遺物(6)

第一節 陶磁器・土器



IV-121图 2号组石出土遗物(7)

第IV章 江戸時代の遺物

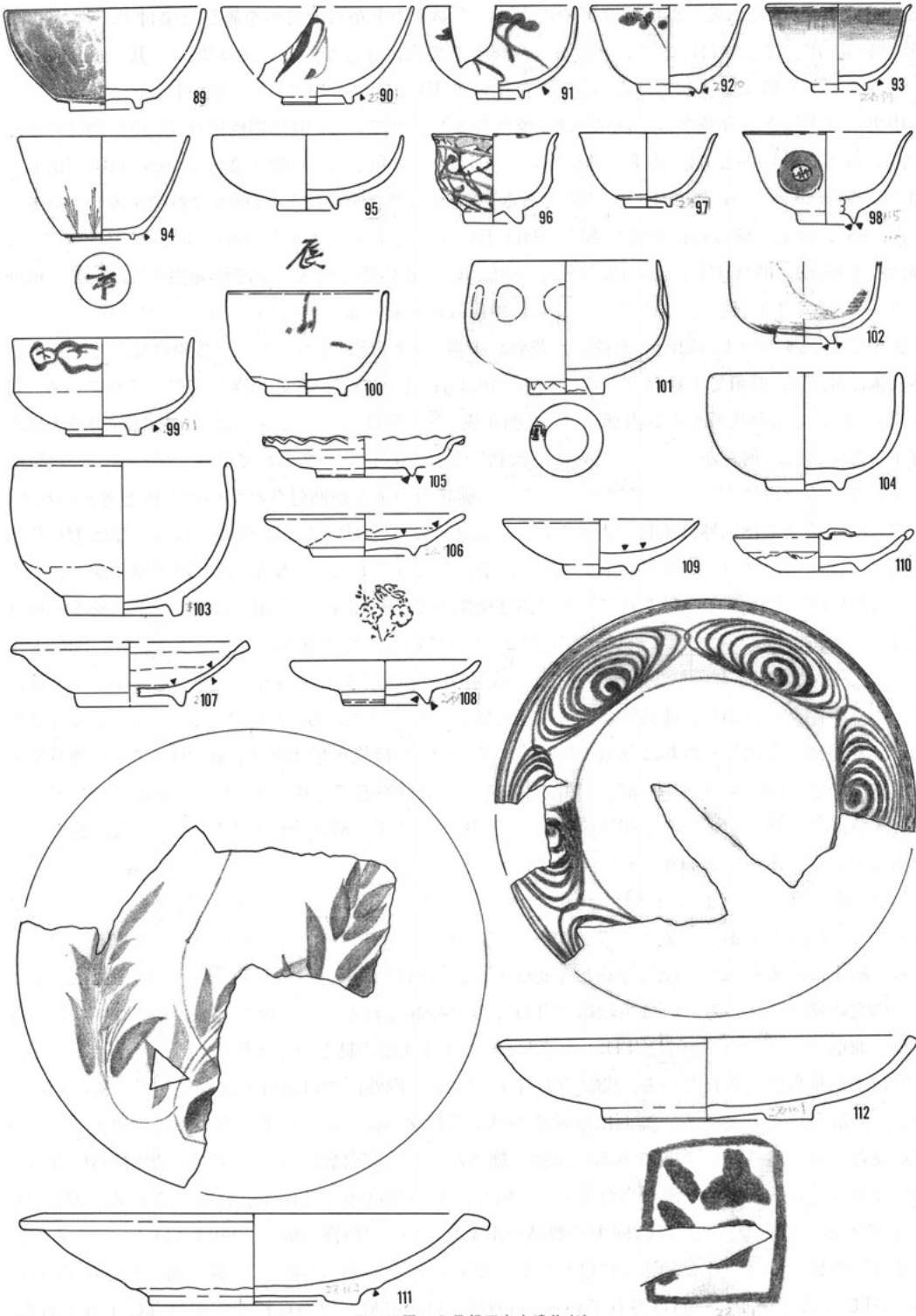
絵の碗で JC-1-e である。器面口縁部の雷文は、毛彫りの上から地呉須を施した染付で、花文は朱、黄、呉須を用いて上絵付けしている。葉は墨弾き? で白抜きしている。59は染付で JC-1-e である。毛彫りの上から呉須を施している。60は染付猪口で JB-7-a に分類される。蛇ノ目凹形高台で、見込み中央には手描き五弁花が描かれている。焼き継ぎがされている。61は器面瑠璃釉、内面染付の小坏で、JC-6-b である。62, 63は薄手の端反小坏で JC-6-b に分類される。62は染付で、63は白玉を用い細線で上絵付けしている。65は JB-18 の蓋である。型で紗綾形文を浮文とし、所々に呉須を流している。

64, 66-72は蓋で69以外は染付である。64は JB-14-i である。66は本組石の 8 とセットである(詳細は 8 を参照)。67は JB-1-m の蓋である。68は JC-1-d の蓋で輸入呉須で細線描されている。内面中央には「成化年製」銘が、高台状のつまみの中には角福銘が描かれている。69は JB-14-a である。染錦手で高台状のつまみ周囲の連続した花卉状の帯文と図版上方の三本の三蓋松は染付で、それ以外は朱、黄、緑、呉須で上絵付けされている。70は JB-1-n の蓋である。焼き継ぎがされている。71は JB-14-a で高台状のつまみ内部には「太明年成」銘が付けられている。蓋の口縁付近の最大径を有する部分では、何らかの目的のために二次利用されたく、磨られて磨耗している。二次焼成を受けている。72は JB-14-c で破損の位置から橋状のつまみが貼付されていたものと考えられる。

73-78 は蓋物で78以外は染付である。73, 74はセットで、JB-13-a に分類される。75は JB-13-a で高台は幅広の蛇ノ目高台風に作られている。76, 77は JB-13-c である。77は焼き継ぎがされており、高台裏に焼き継ぎ印が付されている。78は染錦手で JB-13-c に分類される。上下の線と枠線は染付でそれ以外は赤、緑、黄、呉須で上絵付けされている。焼き継ぎがされている。79, 80はセットで、JC-16 に分類される。型で作られており、胴部の最大径を有する部分で接合している。文様は型によって浮文を表出し、地呉須で圏線、花文様などを描いている。81は JB-19 である。文様は型によって浮文を表出し、のちに呉須で染付している。82, 83は染付植木鉢で、JC-21 である。地呉須を使用している。84は染付で JB-8 に分類される。85は染付油壺で、JC-12 である。胴部中位の最大径を有する部分で接合している。86は染付で、JC-10-b である。87は染付で、JC-15 である。地呉須を使用している。内面にも施釉。88は染付で、JB-10-a である。

陶器 (13, 19, 89-109, 111-159) 13 は太白手で TC-1-h である。地呉須を使用している。19は太白手で TC-2-h である。見込み中央の五弁花はコンニャク判である。89は刷毛目碗で TC-1-s である。胎土は暗灰褐色で、硬質な感じを受ける。高台無釉である。90は TC-1-g で器面には鉄絵の具で柳文が描かれている。91は色絵碗で TD-1-b に分類される。朱、緑で上絵付けされている。高台脇は面取りされている。92は TD-1-f である。文様は鉄絵の具と白土で梅文様が描かれている。内面は白土が釉裏に塗られている。93は TD-1-e である。内外面の口縁付近に緑釉が流し掛けられている。94は TD-1-d である。器面には鉄絵の具で若杉文が描かれている。高台裏に墨書で「次」の字が見られる。95は TD-1-h である。灰釉が施されており高台裏には「辰」の字の墨書が見られる。96は TH-1 である。高台は渦巻高台である。97は灰釉の端反碗で TD-1-g に分類される。98は TC-1-y である。勇右衛門窯にはほぼ同手の製品が出土している(藤澤 1987)。99は TD-1-i である。器面は鉄絵の具で絵付けされ見込みにはピン痕が認められる。高台は幅広で、脇は面取りされている。100は TC-1-d で呉須で絵付けされている。口唇部には敲打痕が認められる。101は TC-1-p である。

第一節 陶磁器・土器



IV-122図 2号組石出土遺物(8)

第IV章 江戸時代の遺物

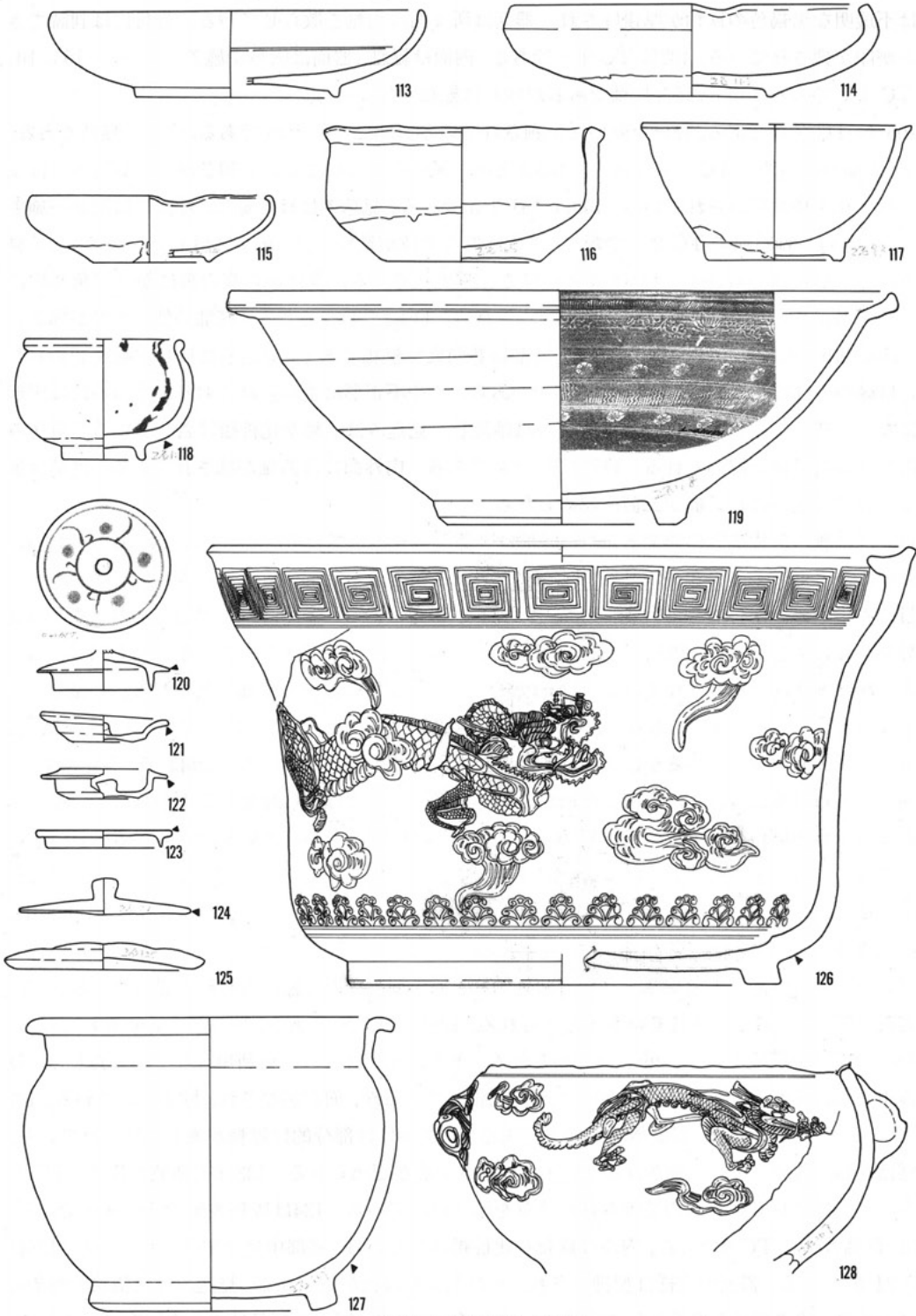
釉は不透明な黒褐色の鉄釉が厚掛けされ、器面は所々凹み白釉を散らせている。畳付には判読できないが印が押されている。102は TC-1-r である。内面は緑釉、器面は灰釉が施されている。103, 104 は TC-1-c である。103は高台無釉であるが104 は施釉されている。

105 は TC-2-n である。畳付を除いて全釉されている。106は TC-2-m である。底部は無釉である。107は灰釉の輪剝鉢で TC-5-c である。108は御深井風の皿で TC-2-e に分類される。見込みには鉄絵の具で花文様が摺絵されている。109は TB-2-a である。見込みには銅緑釉、外面には灰釉が施されている。111 は石皿で TC-2-f である。文様は柳文で枝が鉄絵の具、葉が呉須で描かれている。見込みにピン痕が認められる。112は馬ノ目皿で TC-2-g である。畳付から高台裏にかけて角枠内に「治」の墨書が見られる。内面にピン痕が認められる。113は TD-2 である。底部の他、灰釉が施される。114, 115は灰釉鉢で TC-5-f である。底部は碁笥底で無釉である。見込みにはピン痕が認められる。口縁の一部は凹んでいる。116は TC-9 である。やや不正形に歪められており、平面的には円形ではない。器面上半および口唇部は灰釉の緑釉流し、見込みは灰釉が化粧掛けされている。見込みにはピン痕が三箇所認められる。117は TC-23 である。内外面には餡釉が施されている。底部は無釉である。見込みはピン痕が三箇所認められる。

118 は柿釉の灰釉流しの鉢である。口縁部は外側に折り返している。ここでは TC-5 に分類する。119 は TB-5-b である。象嵌は比較的明瞭で、白土も拭き取られている。見込みには七箇所の砂胎土目積みの際の砂が付着している。120は TZ-34-c の蓋である。器面に白土を施したのち鉄絵の具と緑釉で絵付けしている。121は TC-14-a である。器面には灰釉が施されている。122は TC-14 である。器面には鉄釉が施されている。123は TD-14 で、器面には灰釉が施されている。平蓋でつまみがない。124 は TC-14 である。器面には灰釉が施されている。125は TE-14 で、器面外周には糸目、つまみは欠損しているが橋状のものが貼付されていたと推定される。126は TC-5-g である。器面および口唇部には緑釉、内面には灰釉が施されている。文様は口縁部の雷文が刻文で、龍、雲はレリーフ状の貼付である。畳付、見込みには窯積みの際のトチの溶着痕が認められる。見込み中央には径1.2cmの孔が穿たれ、植木鉢として再利用されている。127は TC-26-b である。器面は柿釉の灰釉流し、内面は柿釉のみ掛けられている。見込みにはトチの溶着痕が認められる。128は TC-5-d である。器面は緑釉で、内面は鉄釉を化粧掛けしている。胴部上半に一对の獣面把手が貼付されている。文様は龍、雲はレリーフ状の貼付である。上部欠損面は揃えるためと思われる敲打痕が見られ、なにかに再利用されていると考えられる。129は TE-26 である。堅く焼き締められている。

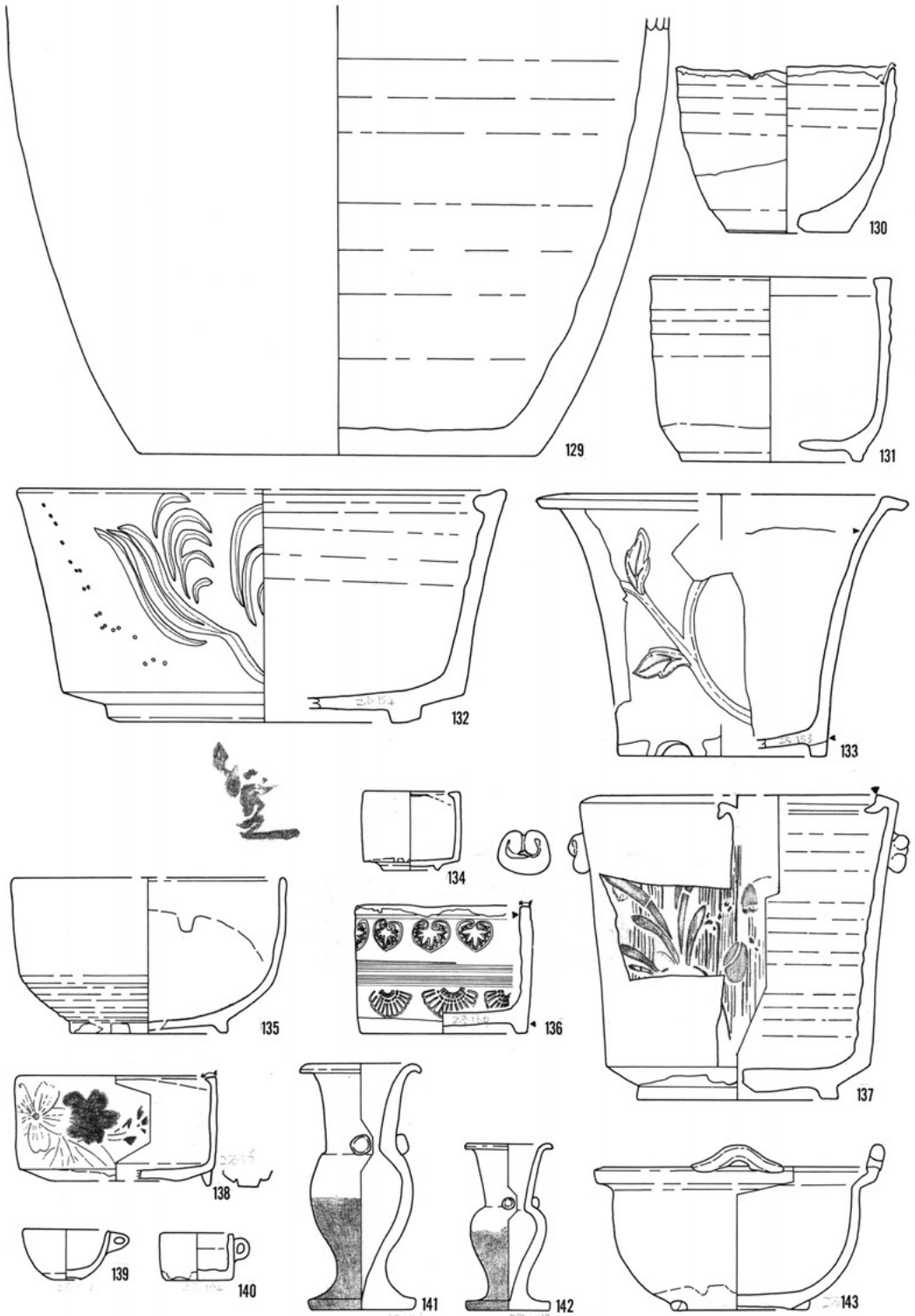
130-131 は半胴甕で、TC-26-a に分類される。ともに植木鉢として再利用されているらしく、見込み中央部に孔が穿たれている。130は上部が欠損しているが、面が調整され、揃えられている。132は TC-5-e である。内面、器面体部下端まで灰釉で、器面には部分的に緑釉が流しかけられている。文様は沈線、刺突によって施される。見込みにはトチ痕が認められる。133は灰釉植木鉢で、TC-21 である。文様はレリーフ状の型押しされた蔓草を貼り付けている。134は灰釉香炉で TC-9-a である。135は鉄釉香炉で TC-9 である。内面は鉄釉を化粧掛けしている。底部中央は穿孔されている。136は TC-24-a である。器面の文様は型押しされ、その上より緑釉が施される。見込みには輪状の溶着痕が認められ、他の製品を直重ねて窯積みしたと考えられる。同手の製品は勇右衛門窯で見られる。

第一節 陶磁器・土器



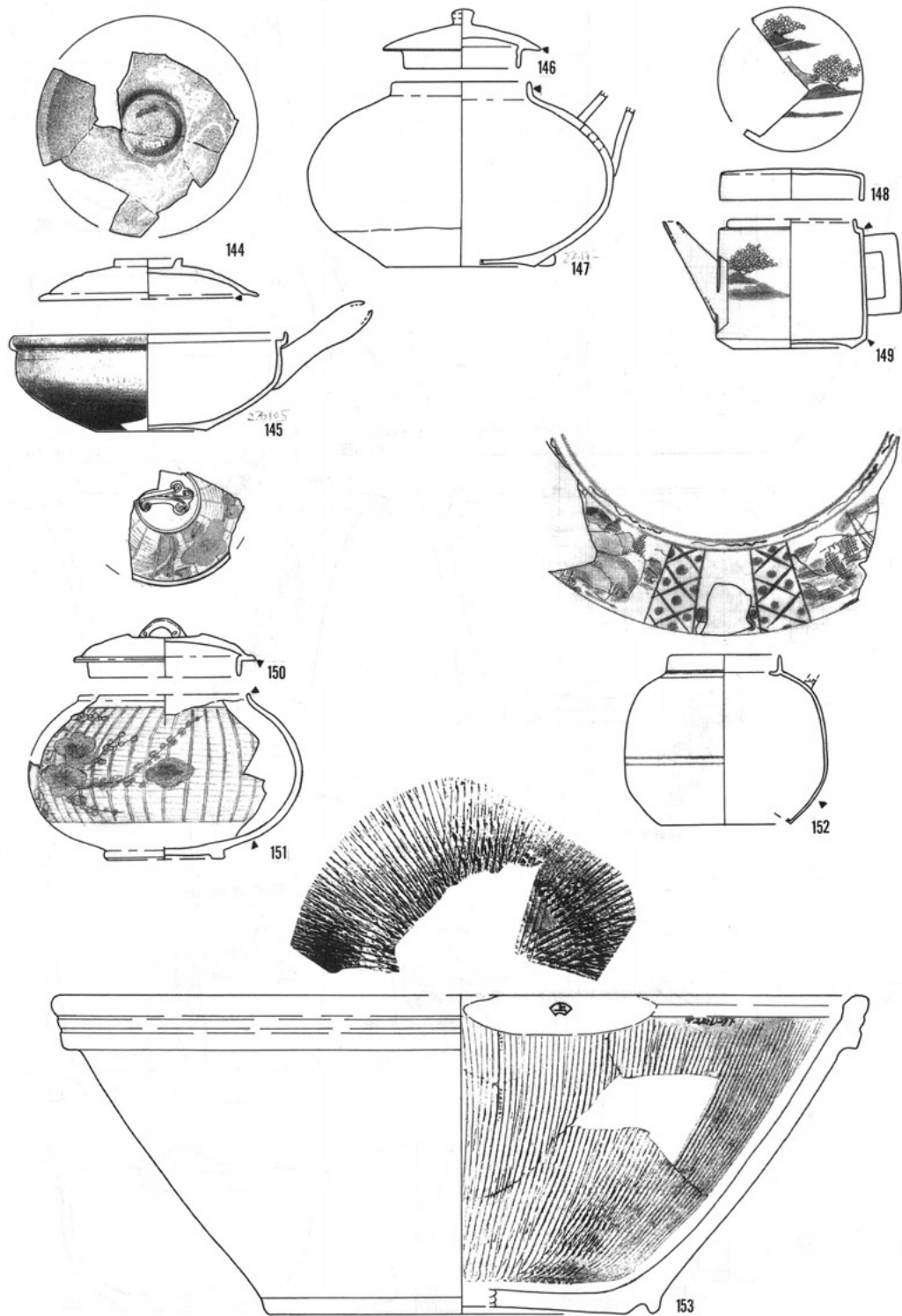
IV-123图 2号组石出土遺物(9)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-124図 2号組石出土遺物(10)

第一節 陶磁器・土器



IV-125圖 2号組石出土遺物(11)

第IV章 江戸時代の遺物

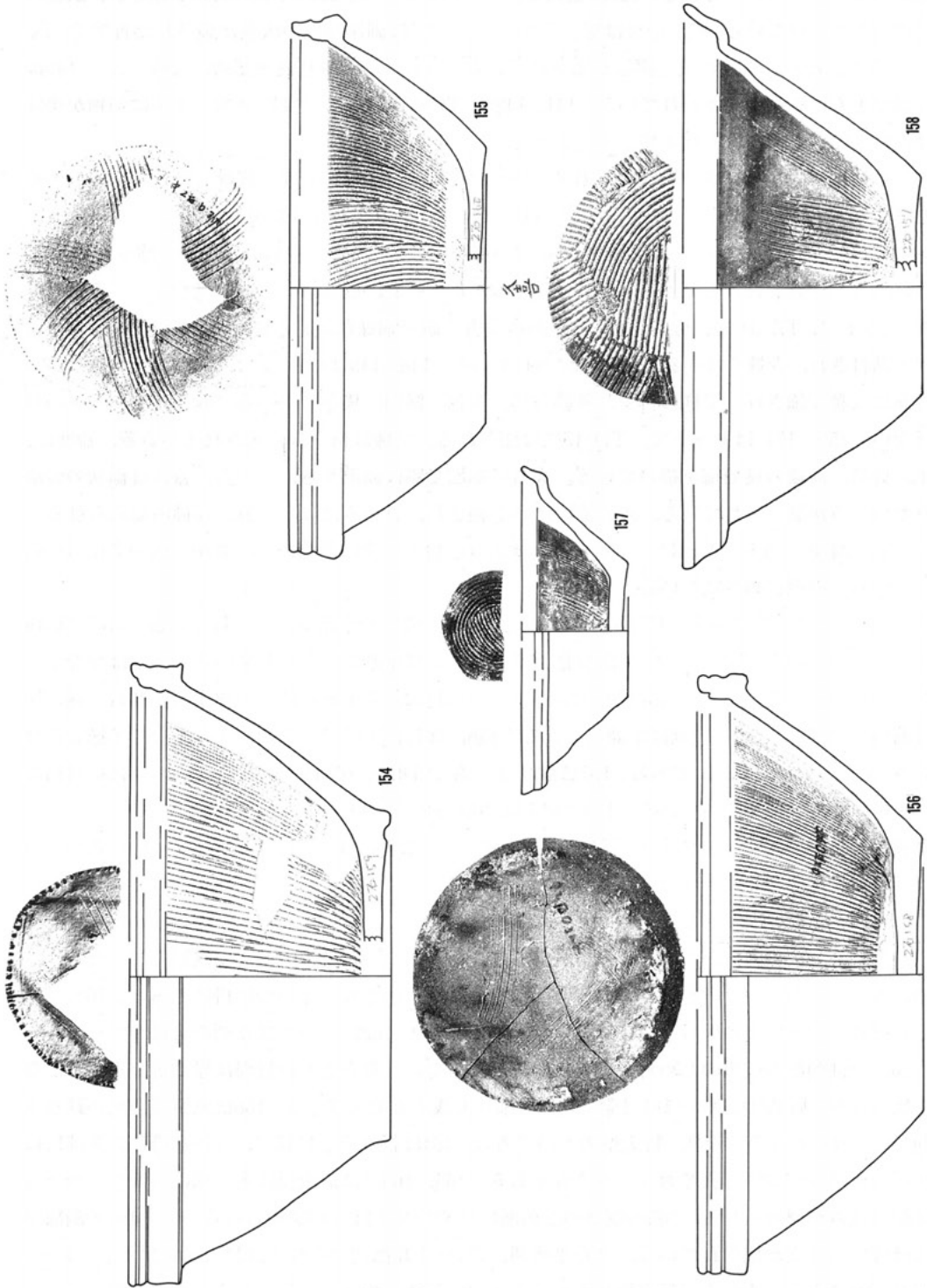
口唇部には敲打痕が認められる。137は蓋物で、TC-13類である。御深井風の灰釉が施され、鉄絵の具で摺絵が施されている。底部中央は穿孔されている。138は御深井風の灰釉が施された香炉で、TC-9-cである。器面は鉄絵の具で摺絵が施されている。口唇部には敲打痕が認められる。139, 140はTC-30でともに灰釉が掛けられている。141, 142はTC-11である。上半に灰釉, 下半に柿釉が掛け分けられ、頸部下端には小粘土塊が貼付されている。

143は柿釉鍋で、TZ-33-aに分類される。口唇には2個の橋状の把手, 底部には3個の小粘土塊が貼付されている。底部はススが付着している。144, 145はTZ-33-dに分類される。144は上部にカナナ痕が付けられ, その上から白土で草花文が線描きされている。内面には灰釉が施される。145は体部にカナナ痕が付けられ, 内面には鉄釉が施されている。底部にはススが付着している。146, 147はセットで、TZ-34-aに分類される。いわゆる青土瓶で銅緑釉が施される。底部には3個の小粘土塊が貼付され, 少量ではあるがススが付着している。148, 149はセットで、TD-27に分類される。内外面に灰釉が施され, 文様は白土, 鉄絵の具, 黄釉, 緑釉で描かれている。底部無釉でススの付着はない。150, 151はセットで、TD-15に分類される。文様は格子状に施されている蓋, 器面に, 白土, 呉須, 鉄絵の具で梅を描いている。高台は幅広で脇は面取りされている。蓋には橋状の装飾されたつまみが貼付されている。内外面に灰釉が施され, 見込みにはピン痕が三箇所認められる。152はTZ-34-cである。絵付けは丁寧にされており, 白土の上に鉄絵の具, 黄釉, 緑釉で山水が描かれている。内面施釉されている。

153-156はTE-29である。153は播目は9条で見込みのやや内側から引かれている。口部に扇面内に「上」の刻印が押されている。154は播目は7条で体部下端から引かれている。上端はなでて丁寧揃えられている。155より後出的である。155は播目は11条で26単位で一周する。播目上端の揃えは弱い。底部に「久喜」の刻印が認められる。156は播目は9条で, 上端は丁寧になで揃えられている。157, 158はTC-29である。157は播目は18条で1単位の間隔は開いている。158は播目14条で1単位の間隔はやや開いている。159は刷毛目の爛徳利で、TC-10に分類される。

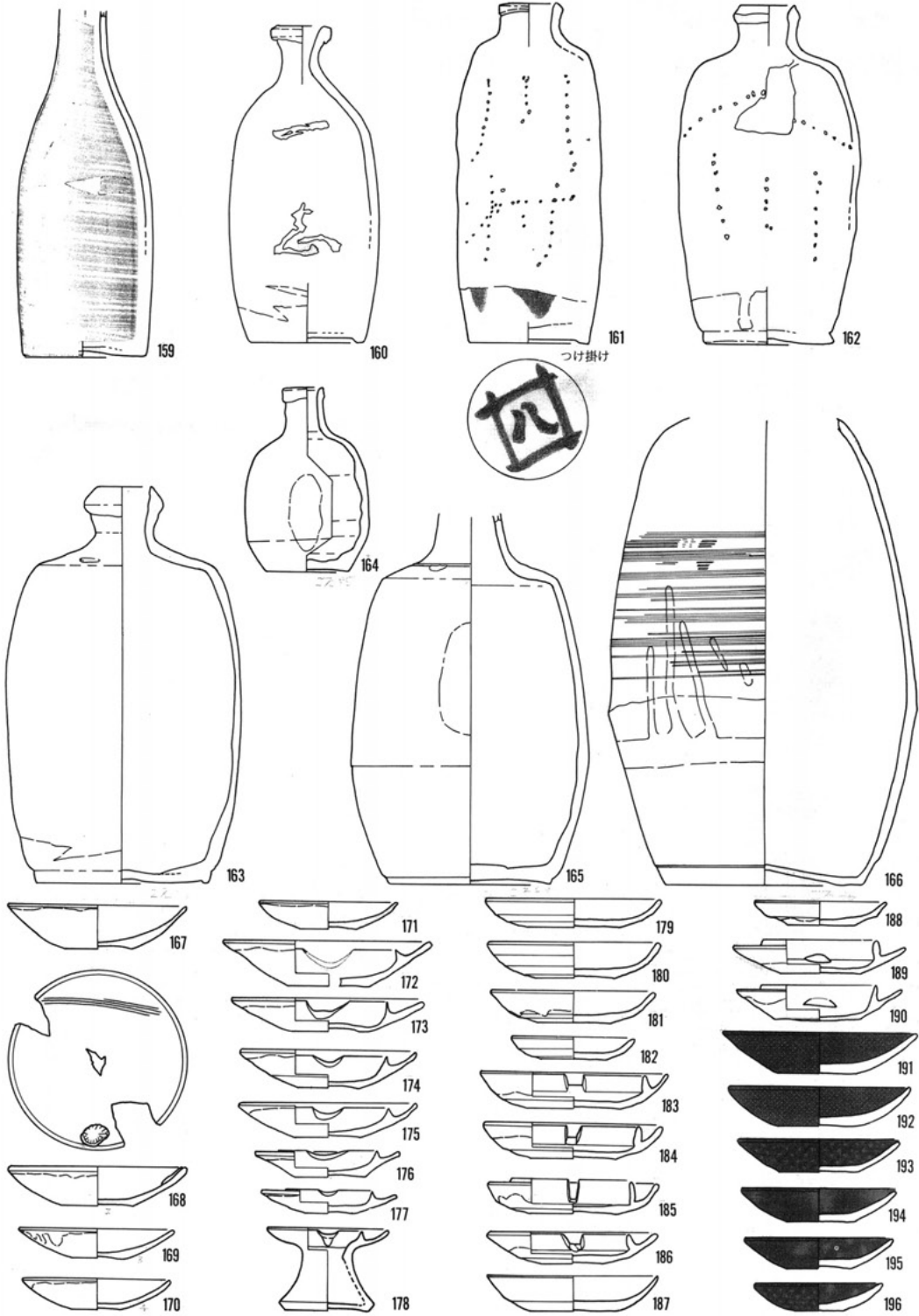
徳利(160-166) 160, 161は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利である。160ではベタ刻の釘書が認められる。口唇部は薄めに折り返されて頸部がくびれ, 撫で肩で胴部はまだ丸みを帯びている。胴部下端の釉の拭き取りも丁寧で, 高台は深く削り込まれている。161では点刻の釘書のほか底部と胴部下端の無釉部分に墨書痕が認められる。胴部下端の墨書痕についてはおそらく点刻を墨でなぞった際のはみだしであろうと考えられる。口唇部は薄めに折り返されて寸胴つけ掛けである。162, 163はそれぞれ瀬戸美濃産の灰釉系5合徳利, 1升徳利である。162については点刻の釘書が認められるが, 163では胴部の破損のため釘書の有無は確認できない。双方とも口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり, 肩部は張ってほぼ寸胴, 高台の削りも浅く雑である。164-166は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で, それぞれ小型, 大型, 特大型のものである。164は折り返し口縁で, 丸みを帯びた胴部には2箇所にくぼみが設けられており, ベタ底である。165, 166では最大径は胴下部にあって, 胴下端には削り込みが認められる。165の胴部の2箇所にはやはりくぼみが認められる一方, 166の胴部中程には浅い糸目文が施されている。2合半徳利, 5合・1升徳利がそれぞれ膨大な量出土しており, 算定は不能である。また志戸呂産徳利もおそらく400個体へのぼると思われる。瀬戸美濃産鉄釉系

第一節 陶磁器・土器



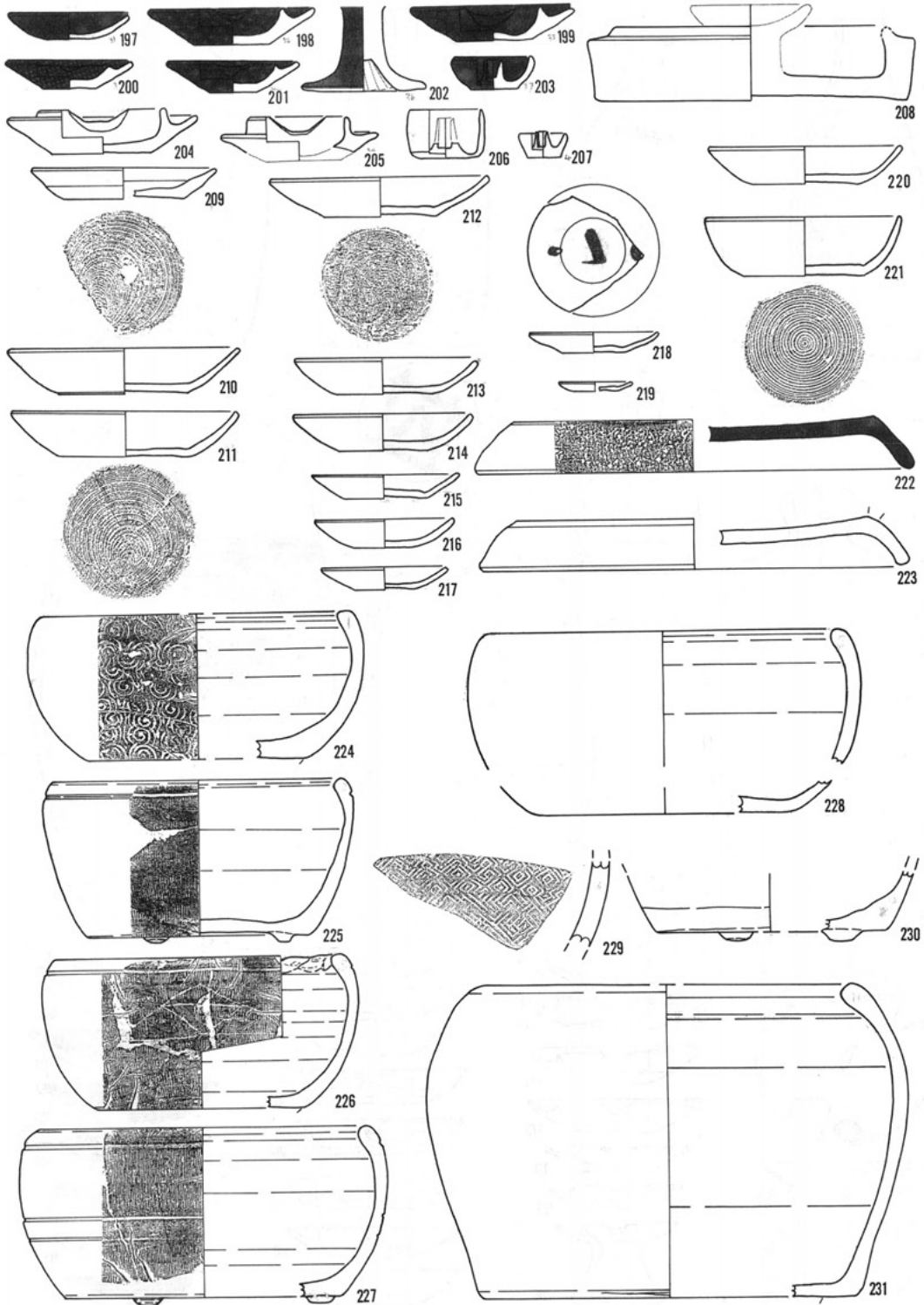
IV-126図 2号組石出土遺物(12)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-127図 2号組石出土遺物(13)

第一節 陶磁器・土器



IV-128図 2号組石出土遺物(14)

第IV章 江戸時代の遺物

徳利も60個体ほど見られるほか備前産徳利かと思われるものも少量が認められる。

灯火具(167-208) 遺構の項で分かる通り灯火具は複数の時期にまたがり、数量的にも豊富である。図示したものの口径は二寸五分—三寸, 三寸五分—三寸九分に集中する傾向がある。167-178は灰釉系である。167-171は油皿。灯芯の油痕は169, 170 が口唇を全周, 168が疎らにめぐる。168にはピン痕はないが、口唇内側に菊? の貼花および見込みに櫛目がつく。他の油皿にはピン痕が認められる。172-176は受付。175のみに灯芯の油痕? がわずかに認められる。178は有脚受付。179-186は鉄釉系である。179-182は油皿。180-182は見込みに重ね焼きの痕跡がある。底面はすべてヘラケズリ調整が施される。183-186は受付。すべて完形もしくはそれに近い。186は色調および底径が小さいなど形態も異なり、時期が異なるらしい。他にも鉄釉系の灯火具がある。110がそれである。瀬戸・美濃製品で削り込み高台とつまみを特徴とする。18世紀前半の資料とされる(藤澤 1989)。187-190は志戸呂系である。187, 188は油皿。187の底面はヘラケズリ調整され, 188は糸切り痕を残す。おそらく右回転によると思われる。灯芯の油痕は187 は口唇を全周し, 188が疎らに付着する。189, 190は受付。191-201 は透明釉であり, 191-197は油皿。灯芯油痕は191, 192, 194 が口唇を全周, 196にはなく, 他は疎らに付着する。すべて左回転糸切り底である。198-201は受付。灯芯の油痕? は198, 201に疎らに認められる。いずれも左回転糸切り底である。202は脚部のみの有脚受付。理由は分からないが灰釉・透明釉とも有脚受付が少ないのが2号組石の灯火具の特徴である。203は乗燭。灯心立の先端のみ灯芯油痕が認められる。左回転の糸切り底である。

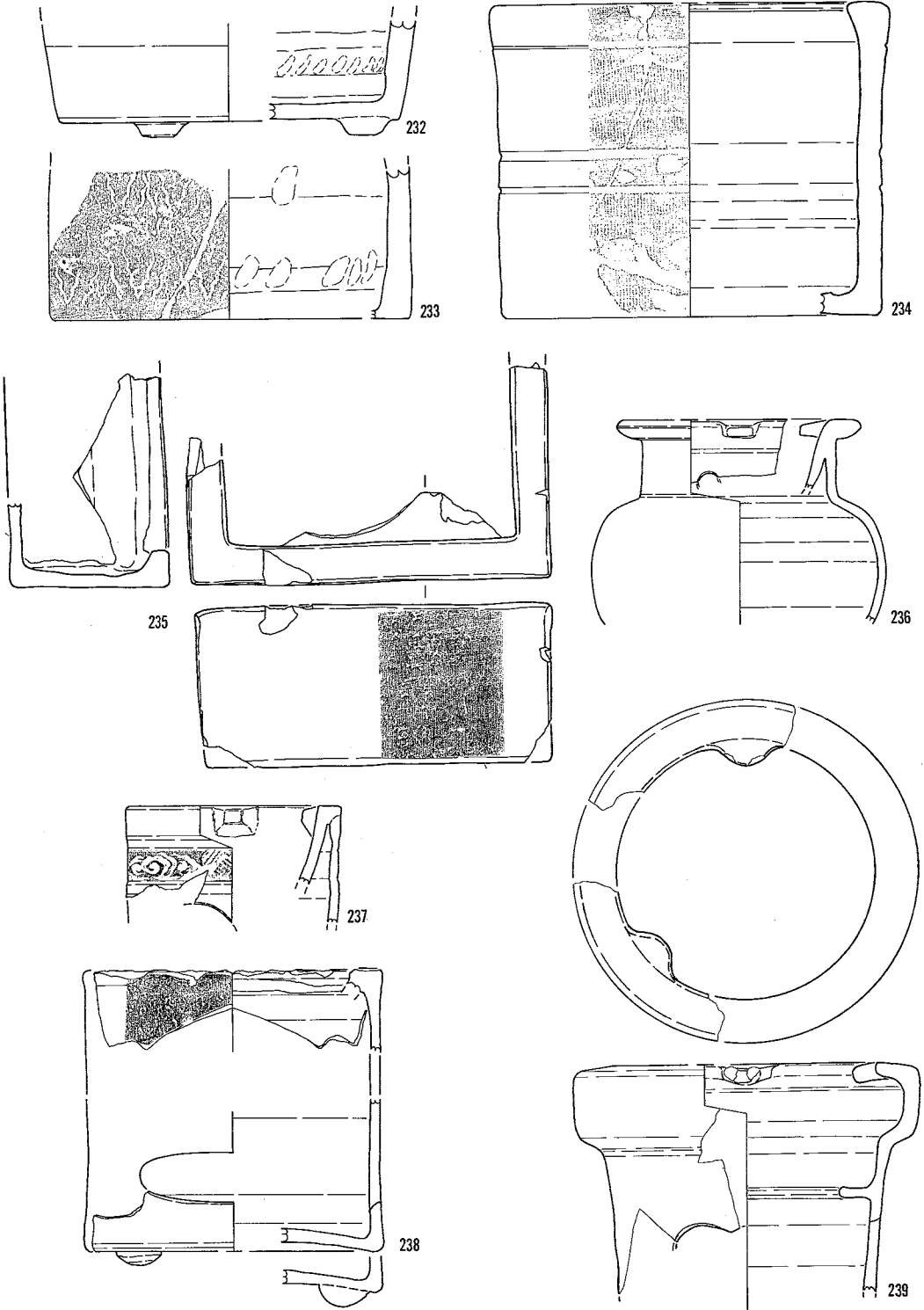
204-208 は素焼系である。204, 205は受付。204は確実に銀彩が施される。左回転の糸切り底。205は器面の剥落が激しく不明である。206, 207は乗燭。206は灯心立を欠く。207の灯心立の先端のみに灯芯油痕が認められる。206は底面ヘラケズリ調整。207は左回転の糸切り底である。208は瓦燈受け部。内部の油皿を欠く。

図示したものを含め、灯火具は127 点の出土である。さまざまな種類があるが、灰釉と透明釉が大半を占める。それぞれ49点, 40点の出土である。鉄釉, 素焼, 志戸呂がこれに続く。鉄釉以下の大半はおそらく流れ込みによるものと考えている。器種別では、油皿がもっとも多く確認されている。灰釉の場合、33点が油皿であった。他でもこの傾向は追認され、使用頻度あるいは破損度などの違いを反映しているのかもしれない。

カワラケ(209-220, 243) 209のみ右回転糸切り底のカワラケである。ほかのものとは伴わず、おそらく流れ込みであろう。210-218は左回転糸切り底。219ははっきりしない。214, 216には銀彩, 218には底面に墨書「中」がある。219には焼成前の径 4mm の穿孔がある。灯芯の油痕は209, 212, 219 にはなく, 他はすべてに見られる。特に210, 214-216, 218 は口唇を厚く全周する。220, 221, 243は上製。灯芯油痕の付着はない。220は底面ヘラケズリ調整。221は椀形であり、底面に「渦糸切り」に似た調整痕がある。ただし糸切りによるのではなく、おそらくヘラ? によるものと思われる。243は221よりさらに器高が高くなった形態である。底面も221と異なり、ヘラケズリ調整が施される。

221, 243 は図に描かれた形態のみ注目すれば、それぞれ『貞丈雑記』(伊勢貞丈 一膳部の部—1843『東洋文庫』446 平凡社 1985:169-170)で引用する『神道類聚名目抄』掲載の“手壺”と“小壺”に類似する。この観点でいうなら220 は皿形であり、“平賀”となろうか。これら三器種は

第一節 陶磁器・土器



IV-129図 2号組石出土遺物(15)

第IV章 江戸時代の遺物

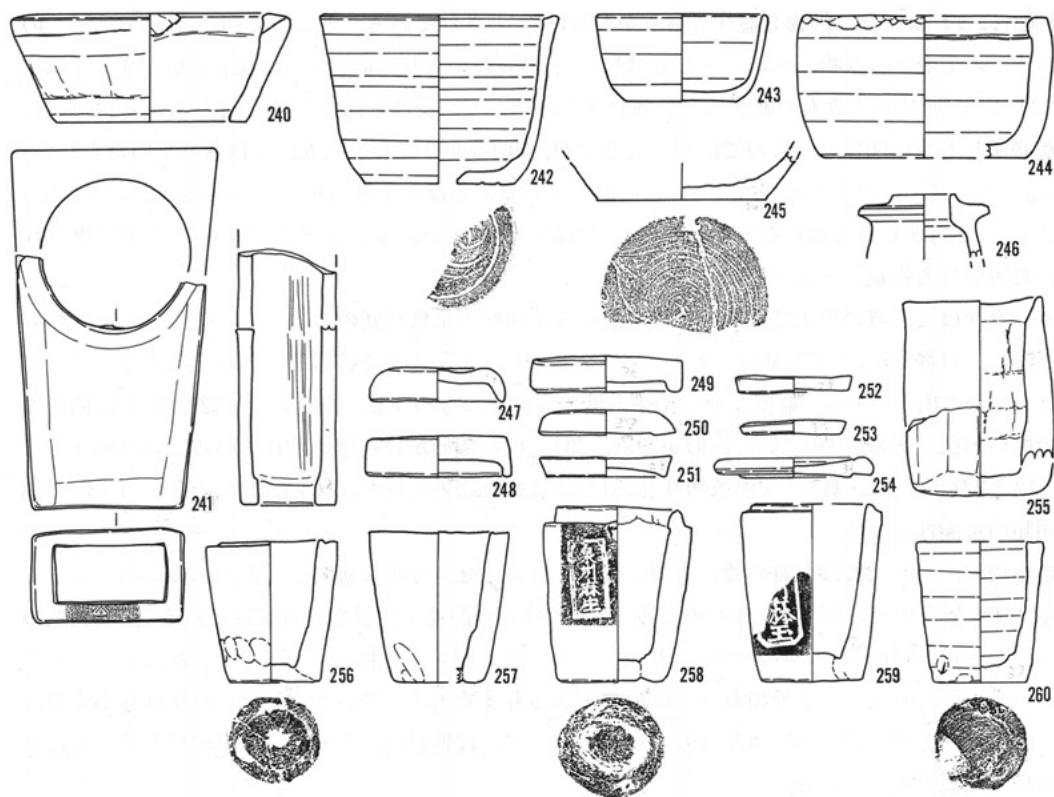
『雑記』によれば“神に供物を盛りて奉るかわらけ”とされている。ところで同じ“へいこう”の項に“この手壺という物、へいこうなるべし”との記載があり、同じく『雑記』が引用する『風呂記』には“御通りのく貴人の御前へ召し御酒下さるをいう>盃は平高也”との記載もある。へいこうが必ずしも盃に関係したものではないようだが、神前ばかりでなく貴人にも供されていたらしい。“小壺”、“平賀”に関する記事はなく、したがって筆者の想像にすぎぬが、あるいは220, 243は“へいこう”と考えられる221などとセットになり酒肴を盛られ、宴会などで“貴人”などに供されていた可能性も指摘できよう。

カワラケは235点の出土である。底径のわかる左回転の糸切り底のものでは、底径3.6-4cmのものが多く、口径8cm(二寸七分)前後のカワラケと思われる。ここで特徴的なのは上製のカワラケである。48点の出土である。器壁が薄くやや内湾する形態のもの8点、他はすべて220, 221に似た器壁の厚い形態である。220に似た皿形が29点、221に似た椀形が11点確認されている。11点のうち1点を除き221と同様、底面に「渦糸切り」に似た調整痕が認められた。「渦糸切り」のない1点は243と同類の可能性もある。

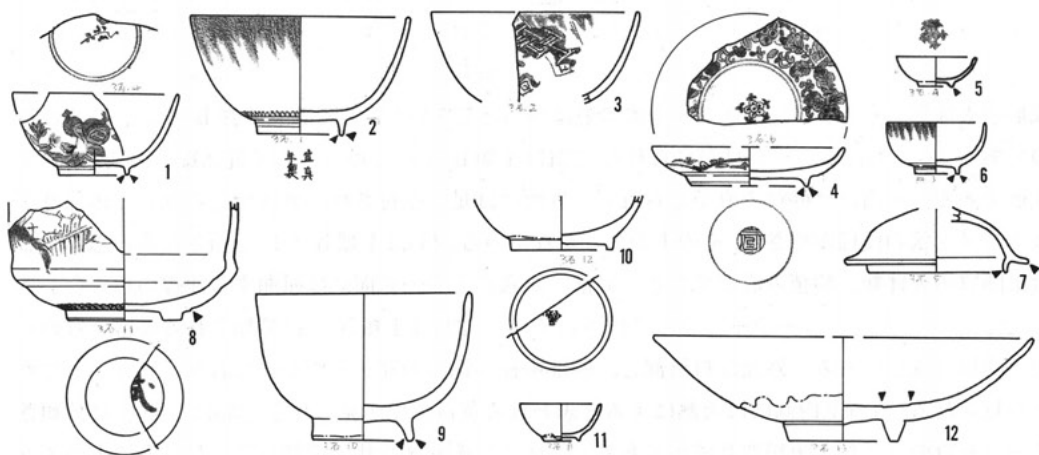
焙烙(222, 223) 222は瓦質の蓋。表面に炭素を付着させ、その後研磨し光沢のある器面となっている。細かなチリメン状?の模様もめぐる。瓦質火鉢との関連が注目される資料である。器面調整のありかたから比較的新しい時期の蓋と考えている。223は通常土師質の蓋である。ほぼ完形であるが、つまみ部分を欠く。2号組石からは焙烙・蓋とも多数出土している。ただしいずれも小片である。ほぼ19世紀代に位置づけられるものが多かったが、17世紀代、あるいは18世紀代と考えられる焙烙片も多数出土している。

土器(224-242, 244-246) 224-228は1類aイに分類される小型軟質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。224の底面には糸切り痕に類する痕跡が見られる。他のものの底面にはコビキ痕が見られる。外面は224では渦巻文が連続しており、225-227ではトビガンナ、228では全面がミガかれている。いずれも口唇部はミガかれており、上端には敲打痕が連続している。228の口縁部内側は、火熱によるものであろうか、黄白色変している。226の体部には三鱗紋が刻書されている。229は硬質土師質のロクロ成形の製品の胴部片である。表面は斜の雷文がおそらくローラーによって捺され、その上ミガかれている。比較的大型の火鉢類、風炉の類の破片であろう。230, 232は軟質土師質の輪積み成形の火鉢類。底部の破片であり、全体の姿は判然としないが、おそらく1類bイに分類されるものであろう。底面にはチヂレ目が見られる。231は1類bイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。底面には砂粒の痕が見られる。底面には足の貼付された痕跡が見られる。体部外面にはチリメン状の模様が捺され、その上ミガかれている。233は1類bハに分類されると思われる軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。底部のみ残存する。側面には屈曲する沈線の組み合わせられた文様が、おそらくはローラーによって捺されている。234は1類bハに分類される硬質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。外面は口唇部と、胴部中程の沈線の間がミガかれており、残りはトビガンナが見られる。口唇部内側には火熱によると思われる黄白色化が見られる。235は1類cに分類される硬質瓦質の火鉢類。板組造り成形である。外面にはチリメン状の模様が捺され、その上ミガかれている。内面は縦にナデられており、口縁部下と底部近くでは横の強いナデが見られる。底面

第一節 陶磁器・土器



2号組石 (16)



3号組石 (1)

IV-130図 2号組石(16)、3号組石(1) 出土遺物

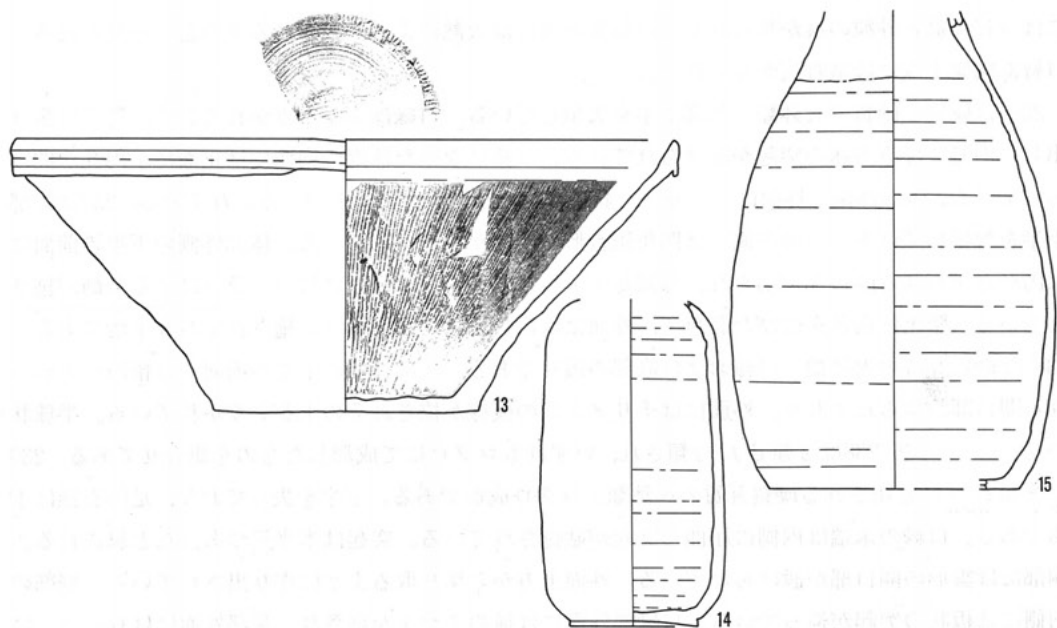
第IV章 江戸時代の遺物

にはコビキ痕と砂粒の痕が見られる。口唇部内側には火熱によると思われる黄白色化が見られる。口唇部内側上端には敲打痕が見られる。

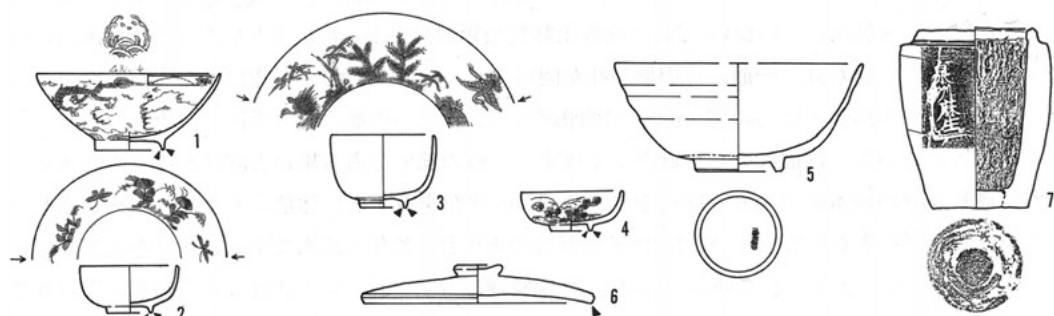
236 は硬質土師質の火鉢類。体部下半を欠損している。口縁はよくミガかれており、鏝状に張り出し、内側には直方体の突起が設けられている。二重になった体部の内側には正面に小円孔が開けられている。体部外側の外面にはチリメン状の模様が捺され、その上がミガかれている。237は体部下半を欠損している。口縁内側には四角錐台形の突起が設けられている。体部外側の下半の前面には円形と思われる開口部が切られ、周囲がナデられている。口縁下にはローラーによる装飾が施されている。胎土は白色を帯びた肌色で、外面には白色粘土の化粧掛けが施されており平滑である。238 は硬質瓦質の火鉢類。口縁および底部の破片である。体部外側の下半の前面には楕円形と思われる開口部が切られており、外面にはチリメン状の模様が捺されその上がミガかれている。半球状の足をもつ。236-238は2類dに分類され、いずれもロクロにて成形したものを組合せてある。239は2類cに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。下半を失っており、足の有無は不明である。口縁の末端は内側に屈曲し突起が貼付されている。突起は本来三つあったと思われる。胴部には雲形の開口部が設けられている。外面上方から切り取るように作り出されている。胴部の内側には板状の突起が巡っている。口縁部外面には横のミガキが施され、胴部外面にはローラーによると思われる格子状の装飾がありその上に横のミガキが施されている。240は軟質土師質の五徳。口唇に切り欠きがある。体部外側には板状の工具を押し引きした整形痕が残り、その上がナデられている。内面は白色化していない。241は軟質土師質の箱形の製品。板組造り成形である。細長い台形を呈していたと思われ、一面には円形の孔が開いており、また台形の短辺にあたる面も開口している。この面に山形の下に三の字を配した刻印がある。外面の円形の孔の周囲と粘土板の接合部はよくナデられている。内面はコビキ痕をよく残す。七輪の部分である風口と呼ばれるものである。242 は硬質瓦質の植木鉢である。底面中央に焼成前の穿孔を有する。体部はやや開き気味に立ち上がり、内側に傾斜する口唇をもつ。244は硬質瓦質の火入れ。輪積み成形である。底部を欠損している。内外面とも横にナデられている。口縁上端は敲打痕が巡っている。245は軟質土師質の容器底部でロクロ成形である。明るい褐色を呈し、底面には回転糸切り痕が見られる。用途その他は不明である。246は軟質土師質の製品である。表面に透明釉が掛かっている。灯火具の一種とも思われるが用途・性格など不明である。このほか火鉢類の破片が80個体以上ある。

焼塩壺(247-264) 247-254は蓋である。247はア類に分類され、白色を帯びた肌色を呈する。内面はよくナデられており上面は指頭による押圧を受けてくぼんでいる。248はイ類1cに分類される。橙色を帯びた肌色を呈する。上面、側面ともに平滑で、内面には細かい布目が見られる。249はイ類2に分類される。胎土に細かい雲母を含み、上面側面ともに平滑で、内面には細かい布目が見られる。250はイ類1dに分類される。やや橙色を帯びた褐色である。上面は平滑で、弧を描いてなだらかに側面へ移行する。下面は浅く窪み、そこに細かい布目が見られる。上面、側面の部分が型に入れられて成形されたものと思われる。251はイ類1eに分類される。橙色を帯びた褐色を呈する。上面に手掌痕が見られ下半は整っている。型に入れて成形されたと思われる。252、253はウ類に分類される。ともにやや赤みを帯びた褐色を呈する。252は上面に手掌痕が見られ下半は整っている。型

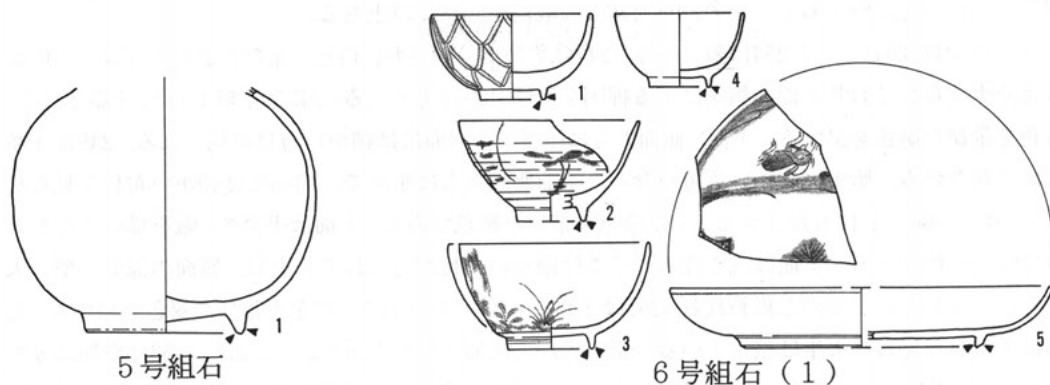
第一節 陶磁器・土器



3号組石 (2)



4号組石



5号組石

6号組石 (1)

IV-131図 3号組石(2)、4号組石、5号組石、6号組石(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

に入れて成形されたと思われる。小さいことと突起が見られないことを除けば251に極めて類似している。252は上面に手掌痕が見られ、底面および側面には布目が見られる。254はオ類に分類される。ロクロ成形である。明褐色を呈する。上面と下面はくぼんでいる。上面の縁辺には1条の沈線が巡っている。

255はI類3に分類される身。大きく欠損しており刻印は見られない。体部外面は橙色であり、内面は桃色を帯びている。体部は垂直に立ち上がり頸部にくびれはない。256はII類2 b1に分類される身。刻印をもたない。胎土に雲母を含み橙色を帯びた褐色を呈する。257はII類2 cに分類される身。胎土に雲母を含み褐色を呈する。刻印はなく、内面はケズられている。258はII類1 b2に分類される身。3類1 bの刻印をもつ。橙色を帯びた肌色を呈する。体部上半に横のナデが見られる。内面はよじれたような粗い布目が見られる。259はII類2 aに分類される身。3類4の刻印をもつと思われる。胎土は大きな雲母粒子を含み、橙色を帯びた褐色を呈する。はっきりとは観察できないが底面に入れられた粘土塊のまわりに粘土紐が巡っているようである。内面は底部付近が平滑で、その上に粗い布目が見られる。260-262はIII類eに分類される身。いずれも刻印をもたない。260はやや橙色を帯びた褐色を呈する。胎土にわずかに雲母粒子が含まれる。261は褐色を呈する。262は橙色を帯びた褐色を呈し体部下方に焼成後の穿孔を有する。263はIII類cに分類される身。刻印はない。わずかに橙色を帯びた褐色を呈する。264は鉢形2種の焼塩壺。底面は平坦で体部と底部の境は面取りがなされている。体部は垂直に立ち上がる。口縁上面は平坦で内面の体部と底部の境には縫い目が見られる。胎土はやや橙色を帯びた肌色である。ほかに各種の蓋30、I-III類の身90がある。

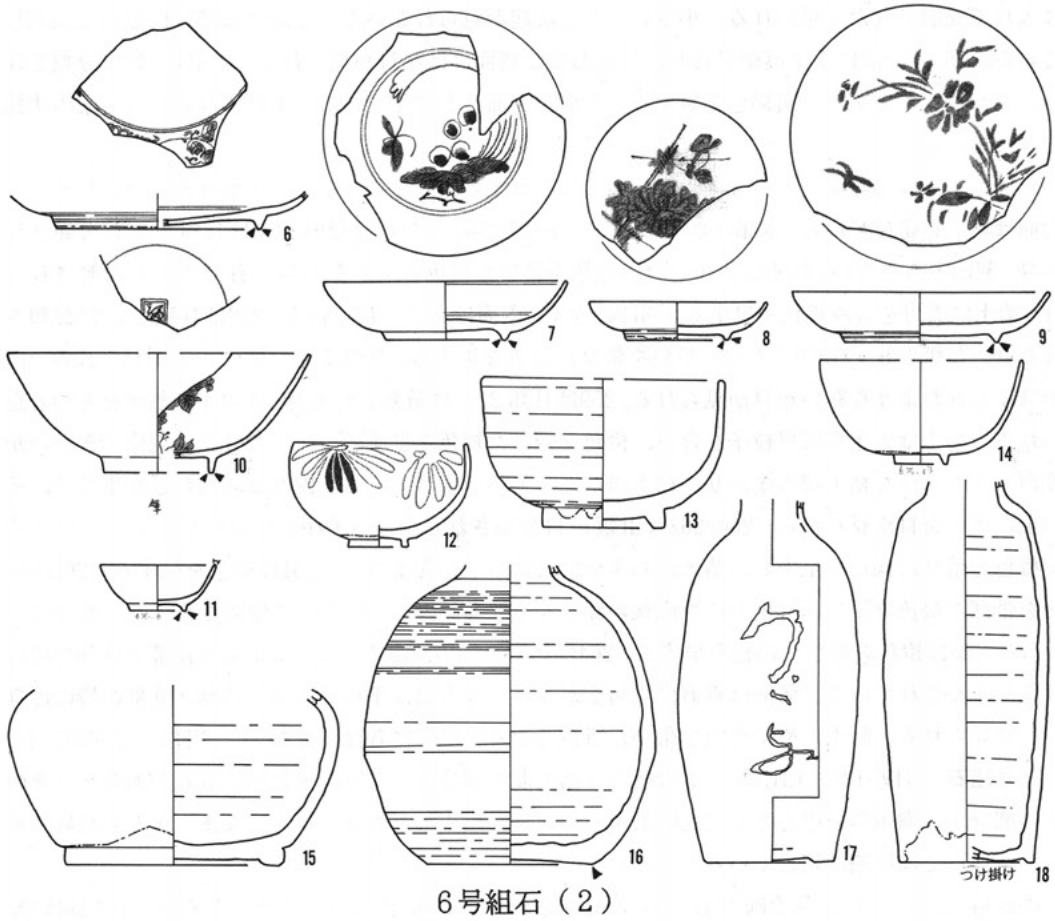
3号組石 (IV-130, 131図) 3号組石は南と北の部分からなり、年代的にも差があるが、その北の部分から陶磁器を中心として比較的多くの遺物が出土しており、年代的なまとまりも良好である。本地点ではIII期に属している。

磁器(1-7, 11) 1は色絵碗でJB-1-cに分類される。圏線、内文様は染付であるが、主文様は朱、青、緑、呉須で上絵付けされている。2-6は染付である。2はJB-1-dに分類される。絵付けには摺絵が用いられている。銘は「宣真年製」である。6号組石出土遺物との遺構間接合する資料である。3はJB-1-dである。摺絵が用いられているが、通常の摺絵とは異なり白土が充填されている。4はJB-3-cである。見込みには手描き五弁花が描かれている。二次焼成を受けている。5はJB-17である。見込みにはコンニャク判五弁花が記される。6はJB-6-aである。7は白磁で、JB-14の蓋である。11は白磁紅皿で、JB-17に分類される。

陶器(8-10, 12-13) 8はTD-1-iである。灰釉が施され器面には鉄絵の具で文様が描かれている。高台は幅広の蛇ノ目高台風で、脇は面取りされている。高台脇には放射状の刻みが認められ、見込みにはピン痕が見られる。高台裏には墨書が書かれている。9は灰釉碗でTB-1-aに分類される。10はTB-1-bである。高台裏には「小松吉」の刻印が認められる。12はTB-2-aである。内面には銅緑釉、外面には灰釉が施される。13はTD-29である。播目は9条である。

徳利(14, 15) 14は備前産の徳利と考えられ、暗褐色の胎土が堅く焼き締められている。口頸部を欠くものの全体の器形はほぼ直方体と見ることができ、いわゆる角徳利に近い形態であるが、ただし全ての角は丸みを帯びて作られており、その周辺にはおそらく装飾用と思われる若干の線刻も

第一節 陶磁器・土器



6号組石 (2)



7号組石 (1)

IV-132図 6号組石(2)、7号組石(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

認められる。高台は削り出されている。15は志戸呂産の徳利で口頸部には茶褐色釉が掛けられている。最大径は胴下部にあって底部外周にはへら削りが施されていない。2合半徳利，5合・1升徳利，志戸呂産徳利，それに備前産徳利が少量ずつ出土している。

4号組石 (IV-131図) 磁器(1-4) 1-4は染付である。1はJB-1-pである。文様は清朝磁器の影響であろうと考えられる細線描で描かれている。2-4はJB-6-aである。

陶器(5, 6) 5はTD-1-cである。高台裏には「粟田口」の刻印が押されている。二次焼成を受けている。6はTC-14-eである。器面には鉄釉が施されている。

焼塩壺 7はII類1 b2に分類される身。3類1 bの刻印をもつ。体部外面には横のナデが見られる。内面には刺し子のある粗い布目が見られる。

5号組石 (IV-131図) 磁器 1はJB-15であろうと思われるが、低火度焼成のため陶器質になっている。

6号組石 (IV-131図) 6号組石中より多量の遺物が出土しているが、構築年代が時間幅を有すると考えられ、遺物も時期的なまとまりは見せていない。II-VIII期までの遺物が見られる。

磁器(1-11) 1, 2は染付碗でJB-1-gに分類される。胎土，呉須の発色とも不良である。3はJB-1-dである。4は白磁小坏でJB-6-aに分類される。5は青花皿でJA-2に分類される。高台裏は削りのカンナ痕が認められ、畳付は砂が付着している。6は染付皿でJB-2-cである。高台裏には二重角枠内渦福の銘が描かれている。L32-1の47と同手である。二次焼成を受けている。7は染付でJB-2-aである。8は染付でJB-3-aである。コンニャク判で絵付けされている。9は色絵皿でJB-2-cに分類される。上絵はほとんどが流失しており確認できないが、朱，青，緑を使用していたと思われる。10は染付でJB-5である。11は白磁小坏で口唇部に口銹が施される。

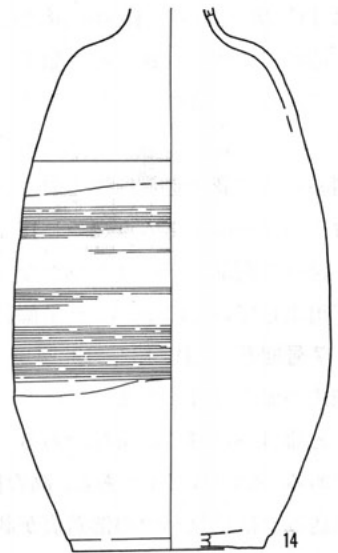
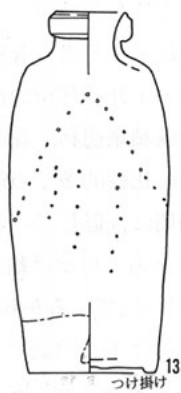
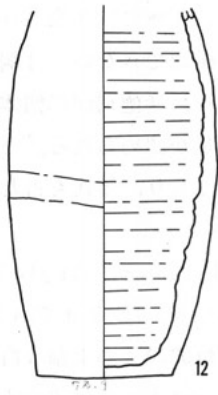
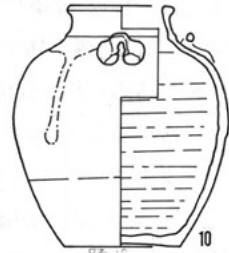
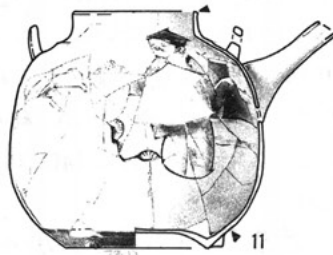
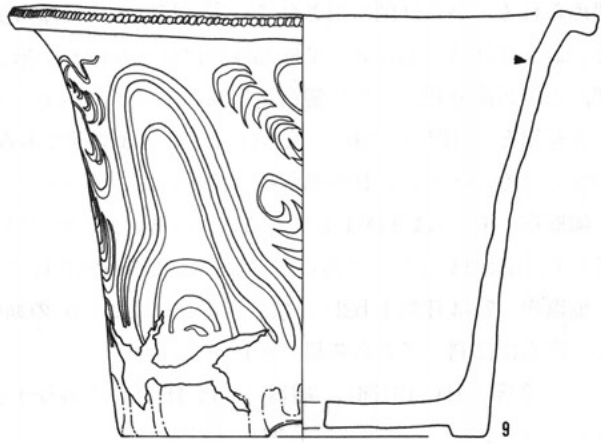
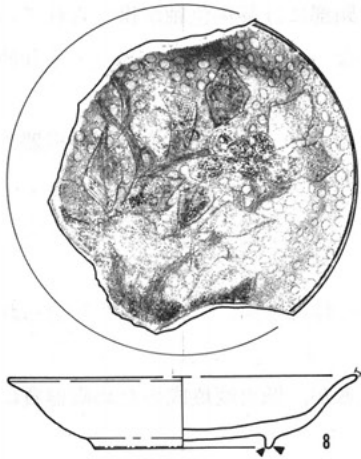
陶器(12-15) 12は京焼を模した瀬戸・美濃の碗で、朱，緑の絵の具で上絵付けされている。TC-1-mである。13はTC-1-cである。高台無釉である。14はTD-1である。灰釉が施されている。15はTC-28である。鉛釉が掛けられている。

徳利(16-18) 16はその胎土，釉調等から瀬戸美濃産の鉄釉系徳利かと思われるが、口頸部を欠いており、胴部中央が強く張る。その器形から壺である可能性も否定できない。胴上部には浅い糸目文が施されておりベタ底である。17, 18は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利である。17ではベタ線刻の釘書が認められ、撫で肩で胴部はまだ丸みを残している。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られており高台の削り込みも深い。18では胴部の破損により釘書の有無については確認できない。寸胴つけ掛けで胴部の下端は無釉になっている。5合・1升徳利が30個体ほど、志戸呂産徳利が15個体ほど出土しているほか、2合半徳利，瀬戸美濃産鉄釉系徳利，備前産徳利も少量が認められる。

7号組石 (IV-132, 133図) 7号組石からは比較的多くの遺物が出土しており、年代も古九谷様式の皿以外はまとまっている。本地点ではVIII期に位置している。

磁器(1-8) 1-7は染付である。1はJC-1-dである。呉須は輸入呉須を使用している。2はJB-1-fである。3はJB-2-iである。高台裏には墨書が書かれているが判読はできない。4はJB-3-aである。見込みには三足ハマの溶着痕が認められる。5はJB-1-nの蓋である。低火度焼成のため上釉は白濁しており呉須の発色は不良である。6はJC-6-aである。7はJC-6-aである。8は古九谷様式の皿で

第一節 陶磁器・土器

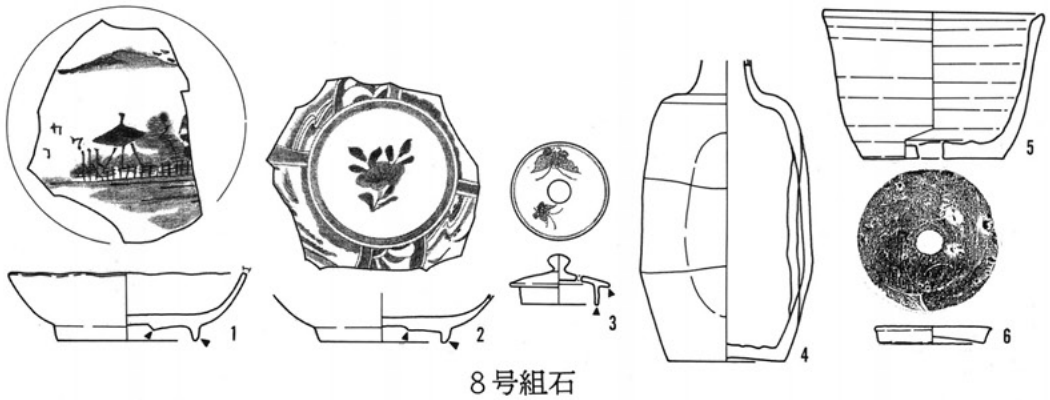


IV-133図 7号組石出土遺物(2)

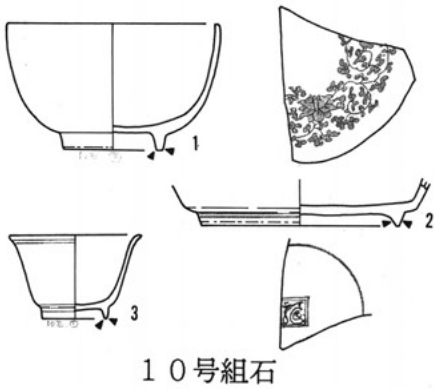
第IV章 江戸時代の遺物

ある。見込み文様は牡丹が描かれ、花びらに紫、葉に緑の絵の具が用いられ、地文様は文様は花小文で埋めつくし、黄絵の具を掛けている。外側面は波状渦巻文を上下二段に描き、緑の絵の具で埋めている。高台裏には二重角枠内に角福銘を有し、枠内を黄、周囲を緑の絵の具で埋めている。ハリ支えが一箇所認められ、口唇には口錆が施される。再興九谷の製品である可能性もある。分析試料の13である。

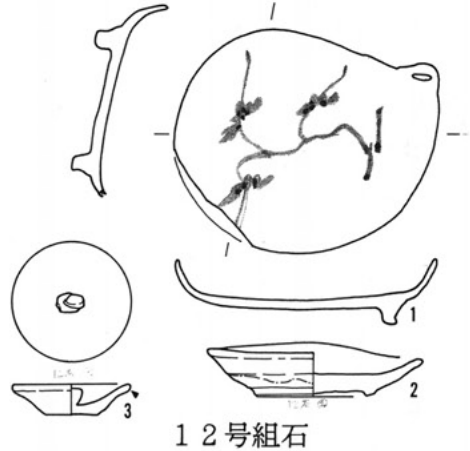
陶器(9-11) 9は緑釉の植木鉢で、TC-21である。器面には沈線で文様が施されている。10は TD-15である。胴部上半には鉄釉、下半には灰釉が掛け分けられている。肩部には橋状の把手が貼付されている。11は TZ-34-c である。文様は丁寧に描かれており、鉄絵の具、緑釉、鉄釉で翁を描いている。底部にはススが附着している。



8号組石



10号組石



12号組石



I区1号溝



IV区7号溝

IV-134図 8号組石、10号組石、12号組石、I区1号溝、IV区7号溝出土遺物

第一節 陶磁器・土器

徳利(12-14) 12は口頸部を欠いているがおそらく徳利様の容器であったかと思われる。胎土は肌理が粗く茶褐色釉が施されている。産地等については不明である。13は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で、点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。14は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で、特大型のものである。最大径は胴下部にあって胴下端には削り込みが認められ、また胴部の中程には浅い糸目文が施されている。2合半徳利が50個体ほど、5合・1升徳利が150個体ほどと大量に出土している一方、志戸呂産徳利、瀬戸美濃産鉄釉系徳利は少量が見られるのみである。

8号組石 (IV-134図) 磁器(1-3) 1-3は染付である。1, 2はJB-2-iである。1は口唇部に口銹が施され、高台裏には判読はできないが墨書が書かれている。3はJC-16の蓋である。呉須は輸入呉須を使用している。

徳利 4は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で、このタイプとしては中型のものであるが、やや小振である。肩部は張って胴部中程には2箇所にくぼみが設けられており、ベタ底である。2合半徳利が20個体ほど、5合・1升徳利が40個体ほど出土している一方、志戸呂産徳利、瀬戸美濃産鉄釉系徳利は少量が見られるのみである。

土器 5は硬質瓦質の植木鉢である。底面中央に焼成前の穿孔を有する。体部はやや開き気味に立ち上がり、内側に傾斜する口唇をもつ。

焼塩壺 6はイ類1eに分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。上面に手掌痕が見られ下半は整っている。型に入れて成形されたと思われる。

10号組石 (IV-134図) 磁器(2, 3) 2, 3は染付である。2はJB-2-dである。胎土、絵付け、呉須の発色ともに良好で、ハリ支えが一箇所認められる。銘は二重角枠内渦福である。これらよりおそらく南川原窯ノ辻窯あたりで製造された製品であると考えられる。二次焼成を受けている。3はJB-6-bである。

陶器 1はTB-1-aで高台は断面台形を呈しており、全体的にやや小型である。京焼風陶器のうち呉器手と称されるもののうちもっとも新しい時期の製品であると思われる。

12号組石 (IV-134図) 陶器(1-3) 1は茄子を模した型皿で底部に三足が付されている。見込みには鉄絵の具で松の文様が施されている。2はTC-2-cである。見込みには直重ねの痕跡が認められる。3はTC-14-aである。器面には灰釉が施される。

I区1号溝 (IV-134図) 陶器 1はTE-35である。底部は回転糸切り痕が認められる。胴部上半まで透明釉が施される。

IV区7号溝 (IV-134図) 焼塩壺 1はイ類1cに分類される蓋。明るい黄褐色を呈する。上面および側面は剥落が激しい。下面には細かい布目が見られ、突起の下端におよぶ。

3 設備管理棟地点の遺構出土の陶磁器・土器

V36-4 (IV-135図) 磁器(1-6) 1, 2は染付, 3は青磁染付の碗でJB-1-dに分類される。2は手描きに摺絵を併用しており銘は「太明年製」が付されている。3は器面に青磁釉が施され、内面、高台裏は透明釉が掛けられている。口唇部には口銹が施されている。4は染付でJB-3-bに分類され

第IV章 江戸時代の遺物



IV-135図 V36-4, W33-1, W35-1(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器

る。口唇部には口銹が施されている。おそらく流れ込みであろう。5は染付鉢でJB-5である。胎土、呉須の発色は不良である。6は白磁の小坏でJB-6-bである。口唇部は削り込んで、輪花にしている。

陶器(7-11) 7は三島手の碗である。器面は土筆文、波状の連続文が象嵌されている。器面は釉部分が灰褐色、露胎部分が褐色を呈する。釉は透明釉であると思われる。高台脇は面取りされている。産地は肥前か?。8は不透明な黒色の鉄釉が施される碗でTD-1に分類される。器形はTD-1-dと同様である。9, 10はTB-1-aで灰釉が施されている。京焼風碗で呉器手と称される一群である。11はTB-1-cで見込みは鉄絵の具で鳳凰が描かれている。高台脇は面取りされており、裏には「清水」の刻印が押されている。

徳利 12は釉調、胎土等から瀬戸美濃産の鉄釉系徳利と思われるが、化粧掛けが施されていること、底部内面が削られていわゆる碁笥底風になっていること、胴部にくぼみが認められないこと、頸部がラッパ状に開いていることなど、他に比して相違点も少なくない。2合半徳利、5合・1升徳利がそれぞれ20個体強出土しているほか、志戸呂産徳利もごく少量ある。

焼塩壺(13, 14) 13はII類1aに分類される身。半分強の残存で刻印の部分に欠損している。外面に指頭痕が見られる。底面外側にムシロ状の圧痕が見られる。14はII類1b2に分類される身。3類1bの刻印をもつ。比較的均整がとれた体部と、粗い布目の見られる内面とを持つ。このほか軟質土師質の火鉢類の小片が数点、II類およびIII類の焼塩壺の身の小片が1点ずつ見られる。

W33-1 (IV-135図) 陶器(1, 2) 1はTD-1で内外面に灰釉が施されている。胎土は灰褐色で硬質な感じを受ける。高台には窯積めの際の溶着痕が四箇所認められる。2は鉄釉が施されている蓋である。胎土は軟質で燈褐色を呈している。産地は不明。

焙烙 3は瓦質である。おそらく内耳をもつ形態である。口縁がわずかにくびれるが、H28-2・3の3とは異なり、内側に屈曲をもたずほぼ直線的な立ち上がりとなる。口縁下半の指頭による圧痕も認められない。なお同じ個体の底部片も出土している。他に土師質の焙烙の口縁片も出土。口縁下半にケズリをもちF34-11の191に類似した形態である。

W35-1 (IV-135, 136図) 磁器(1-3) 1-3は染付である。1は蓋物で、JB-13-bに分類される。2はJB-3-aである。胎土、呉須の発色は不良である。見込み文様は手描きとコンニャク判を併用し中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。3はJB-2-eである。ハリ支えが一箇所認められる。

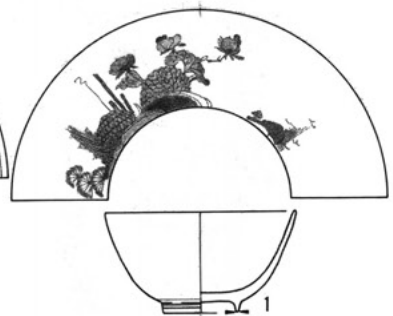
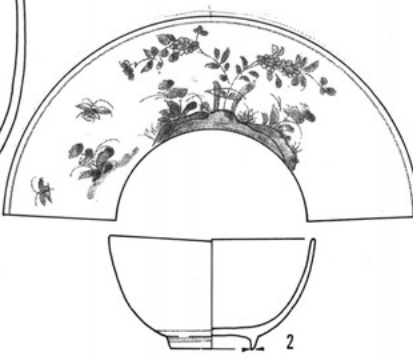
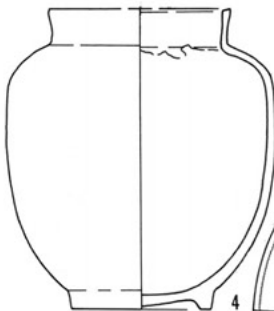
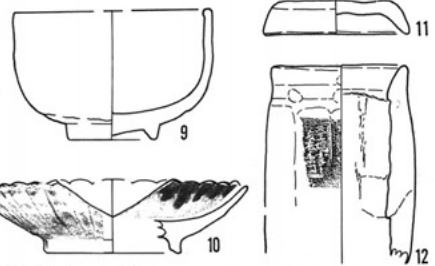
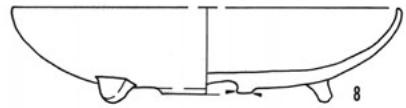
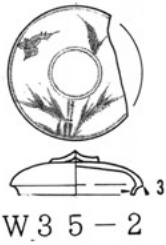
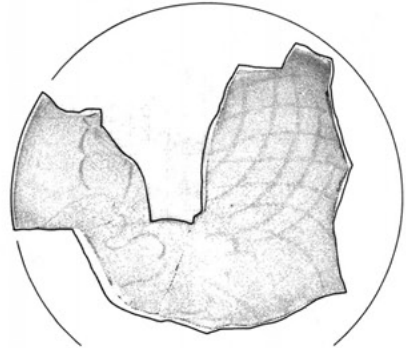
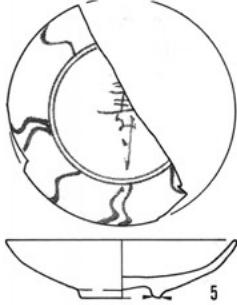
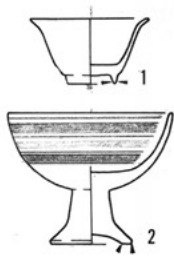
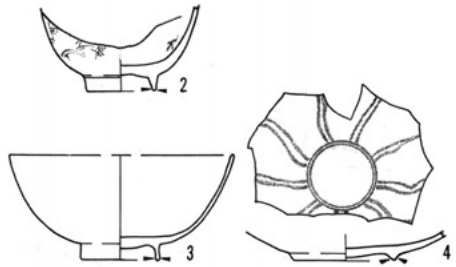
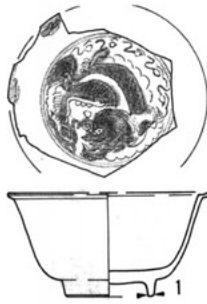
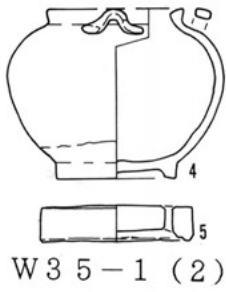
陶器 4は灰釉の双耳壺で、TC-15である。

焼塩壺 5はI類2に分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。胎土に雲母の細粒を含む。上面および側面にナデが見られる。下面には粗い布目が見られる。周縁から1cmほどのところに直径4mmの小孔が貫通している。そのすぐ脇に0.5mmほどの円錐形の孔も見られる。こちらは貫通しておらず、深さは3cmほどである。いずれも焼成後の穿孔である。このほか軟質土師質、硬質瓦質の火鉢類の小片が2, 3点見られるのみである。

W35-2 (IV-136図) 磁器(1-3) 1は白磁小坏でJB-6-bに分類される。2は染付仏飯器でJB-8である。3は染付蓋で、JB-14-cに分類される。つまみは山形に装飾された橋状のものが貼り付けられている。

W36-3 (IV-136図) 磁器(1-8) 1, 2は青花碗で明末の景德鎮の製品であると考えられる。と

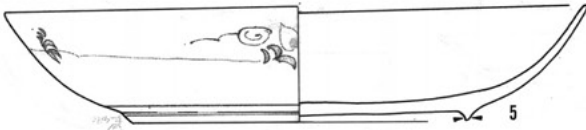
第IV章 江戸時代の遺物



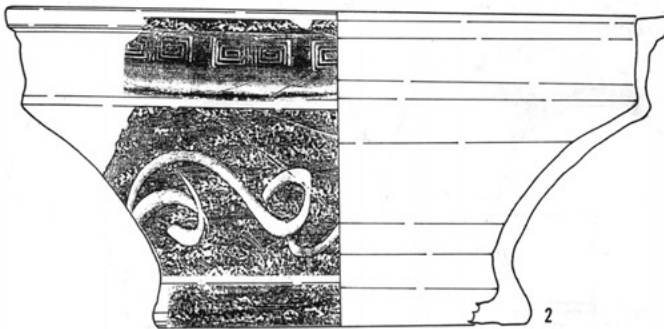
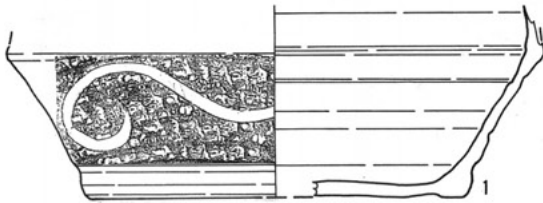
W36-4 (1)

IV-136図 W35-1(2)、W35-2、W36-3、W36-4(1)出土遺物

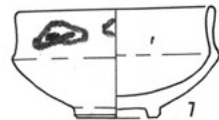
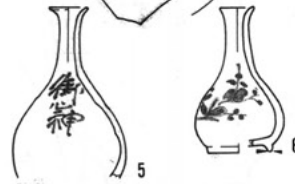
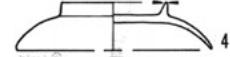
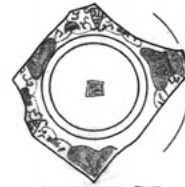
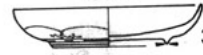
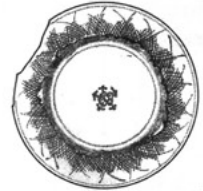
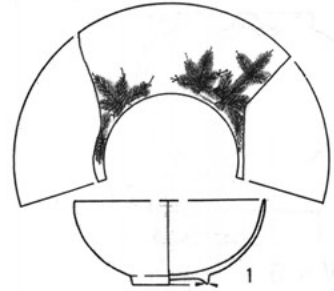
第一節 陶磁器・土器



W36-4 (2)



W36-15



X34-2 (1)

IV-137圖 W36-4(2)、W36-15、X34-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

もに作りがややラフで、呉須の発色、絵付けは不良である。所々に釉切れが認められる。2は量付に耐火砂が付着している。JA-1である。3は白磁碗でJB-1-cに分類される。4, 5, 7は染付, 6は白磁でJB-2-aに分類される。4, 5はともに胎土、呉須の発色は不良である。6は内文様が型で草文風に浮文にしており、口唇も輪花にしている。7は胎土、呉須の発色は良好である。8は青磁の盤。JB-36である。見込みはへらで草文が片彫りされている。初期の青磁は、波佐見の三股古窯、三股青磁窯、木場山窯などで良質のものが多く出土しており、これもそのあたりの製品であるかもしれない。

陶器(9, 10) 9はTC-1である。やや長石分を含む灰釉が施される。10はTC-2-kである。外側面にはしのぎが密に見られ、口縁より緑釉が流し掛けられている。

焼塩壺(11, 12) 11はA類に分類される蓋。赤みを帯びた橙色を呈する。下面には部分的に粗い布目が見られる。下面および側面に弱いナデが入る。12はI類3に分類される身。2類2aの刻印をもつ。胎土に砂粒が多く見られる。内面は白色の強い桃色、外面は橙色を呈する。このほか土器は古いタイプに属すると思われる軟質瓦質の火鉢類の破片が1点見られ、焼塩壺はA類の蓋が2点とI類の身の破片が4点見られる。17世紀代後半の良好なセットといえよう。

W36-4 (IV-136, 137図) 磁器(1-3, 5) 1, 2は染付碗でJB-1-cに分類される。1はこの時期のみの特徴としてとらえられる二重圏線が高台裏に巡る。呉須の発色、胎土とも良好である。3は白磁でJB-6-aである。5は染付大皿でJB-2-cに分類される。外側面の文様は一本線の連続花唐草文である。大橋氏の研究によれば、梅花唐草文様以前に長吉谷窯、柿右衛門窯で裏文様の主となっていた文様で(大橋 1988)、この分類のうち本例は柿右衛門窯e類としたものに類似している。ハリ支えが認められる。

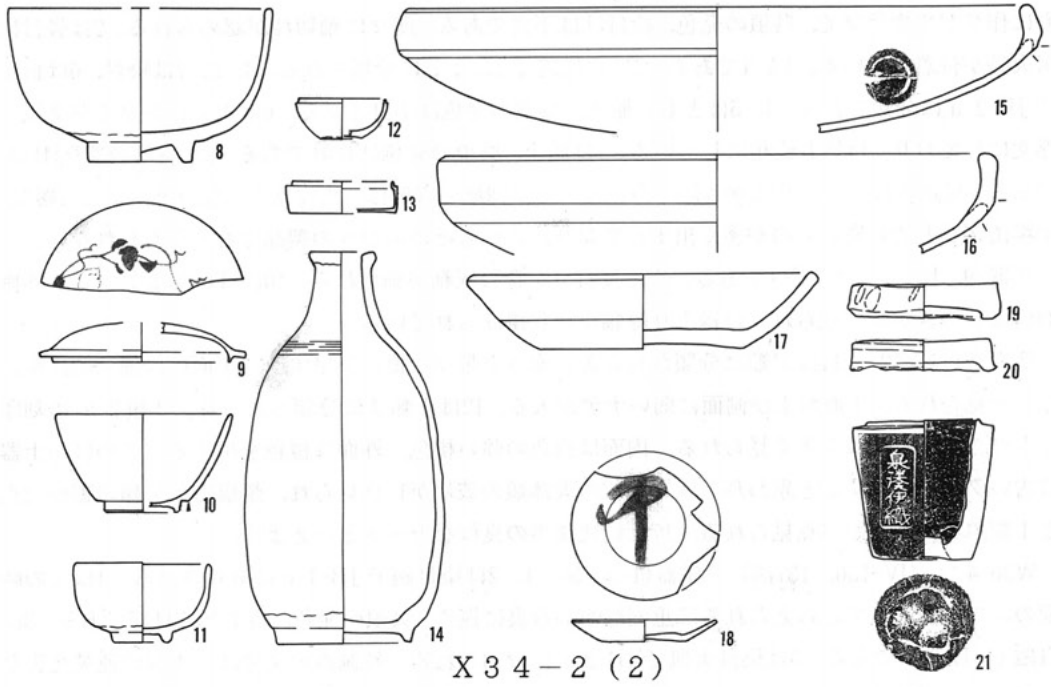
陶器 4は胴上半～口縁部にかけて鉄釉の施された壺で、TF-15に分類される。

W36-15 (IV-137図) 土器(1, 2) 1, 2は軟質瓦質の大型の鉢。ロクロ成形である。内外面ともやや紫色を帯びた濃い褐色を呈し、胎土には細い植物の茎状の炭化物が含まれている。底面周縁部は強くナデられてくぼみが巡っている。接地面には砂粒の痕が見られる。両者とも底部から口縁にかけての体部にはローラーによると思われる、粗いチリメン状の凹凸がつき、さらに断面半円形の沈線が横のS字、もしくは逆S字状の模様を描く。口縁部には雷文がやはりローラーにより捺されている。口唇部外側にも粗いチリメン状の凹凸が見られる。口唇部に敲打痕などみられない。火鉢の一種と考えられるが、色合、胎土、器形、文様など、本地点出土の火鉢類のなかでは特異なものである。在地産のものではなく、他地域からの移入品であるかもしれない。この他に土器、焼塩壺とも見られず、類似の2点がこの遺構からのみ見られることも注目される。

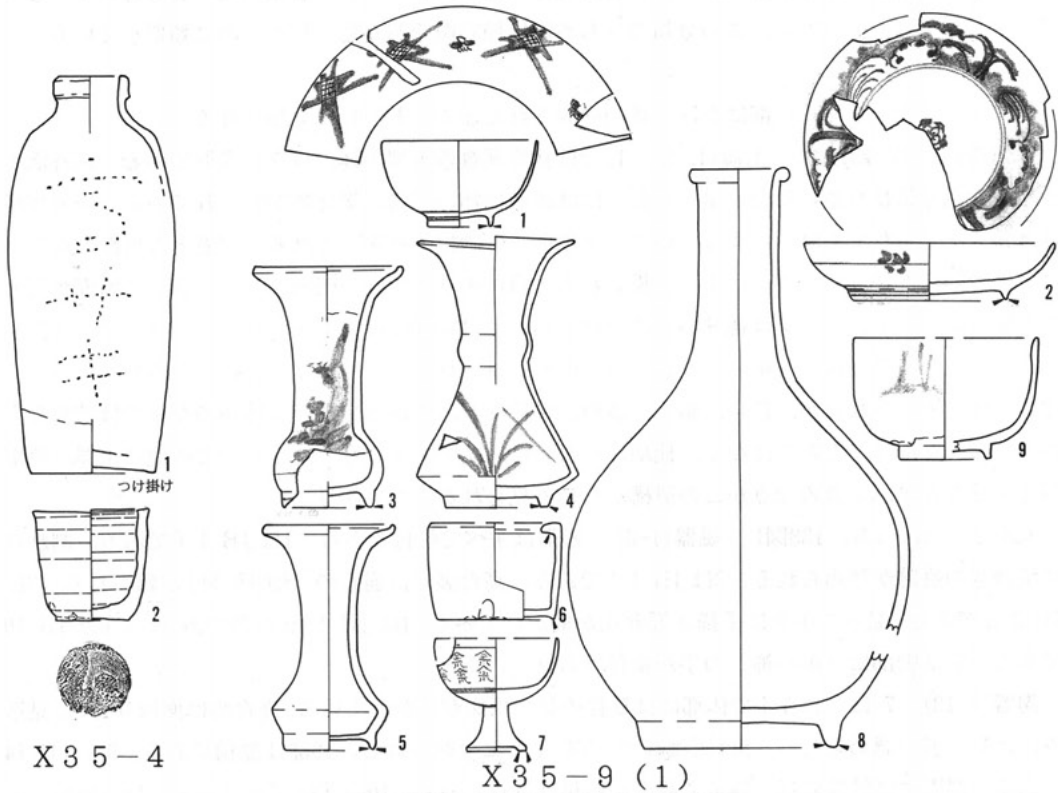
X34-2 (IV-137, 138図) 磁器(1-6) 磁器はすべて染付である。1はJB-1-fである。割れ口に漆継ぎの痕跡が認められる。2はJB-1-lである。高台裏には崩しの「大明年製」が銘される。3はJB-3-aである。見込み中央に手描き五弁花が描かれている。4はJB-1-mの蓋である。5, 6はJB-10である。5は胴部に「御心神」の字が染付けられている。

陶器(7-13) 7はTD-1-iで体部には鉄絵の具で松文が描かれている。高台脇は面取りされ、見込みにはピン痕が認められる。8は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。9はTD-14である。器面には鉄絵の具、呉須で蔓文が絵付けされている。10はTD-1-dである。11は灰釉の小

第一節 陶磁器・土器



X 3 4 - 2 (2)



X 3 5 - 4

X 3 5 - 9 (1)

IV-138図 X34-2(2)、X35-4、X35-9(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

坏でTC-6に分類される。二次焼成を受けている。12, 13はTD-18である。薄づくりで灰釉が施されている。ともに底部は無釉である。

徳利 14は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施され、胴部を破損しているため釘書の有無については確認できない。口唇部はちょうど鐔状と帯状の中間的な形態を示しており、最大径は胴部中程にある。高台は深く削り込まれてやや内傾する。2合半徳利が20個体ほど、5合・1升徳利が40個体ほど出土している他、志戸呂産徳利もやはり40個体ほどが認められる。

カワラケ(17, 18) 17の切り離しは左回転の「離し糸切り」による。18も左回転による。底面に「中」の墨書がある。灯芯油痕は付着しない。他に12点の出土。うち2点に銀彩が施され、油痕も口唇を全周していた。

焙烙(15, 16) 15は底面の一部を欠くがほぼ完形である。口縁は短く完全に内湾しケズりは屈曲部下位をめぐる。刻印も施される。径2.4cm。H22-1の1のそれと同形である。口縁形、色調などはいくぶん異なっている。16のケズりは屈曲部下位に施されるが、15と異なり口縁が直立する。形態と大きさはG26-1の33-35に類似する。ほかに15と類似する口縁片が1点出土している。

焼塩壺(19-21) 19はI類2に分類される蓋。やや橙色を帯びた褐色を呈する。胎土にわずかに雲母を含む。上面および側面は丁寧にナデられ、平滑である。側面に指頭痕が見られる。下面には粗い布目が見られる。側面下端は斜めに削がれたように押圧されている。20はI類1dに分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。突起の下端は外側にめくれたように開いている。21はII類2bロに分類される身。2類5の刻印をもつ。胎土の雲母は多量かつ大粒である。内面の底部近くは平滑で、その上にはケズリが見られる。

X35-4 (IV-138図) 徳利 1は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて、寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利、5合・1升徳利がそれぞれごく僅か見られるのみである。

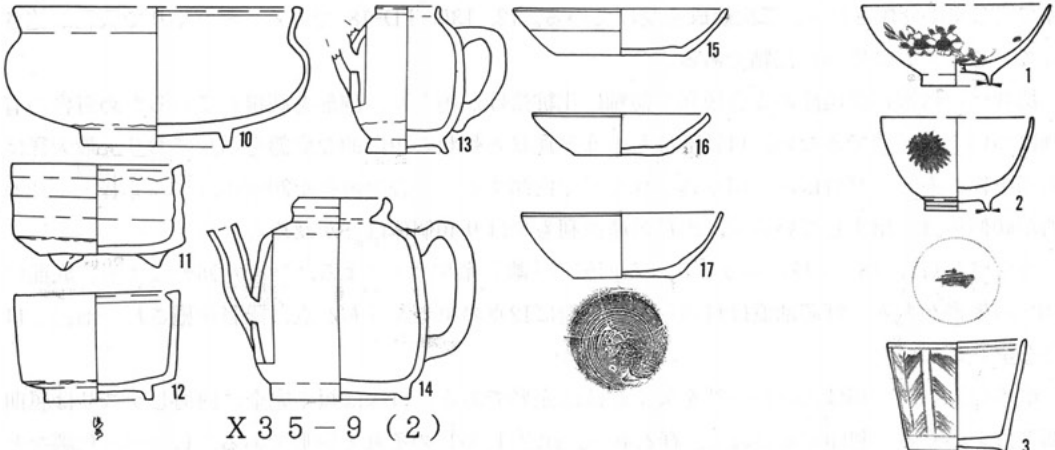
焼塩壺 2はIII類dに分類される身。刻印はない。底面の回転糸切り痕は左回転である。糸切り痕の上にムシロ状の圧痕が見られる。

X35-9 (IV-138, 139図) 本遺構中よりの遺物はいずれも二次焼成を受けており、火災の後の一括廃棄が想定される。

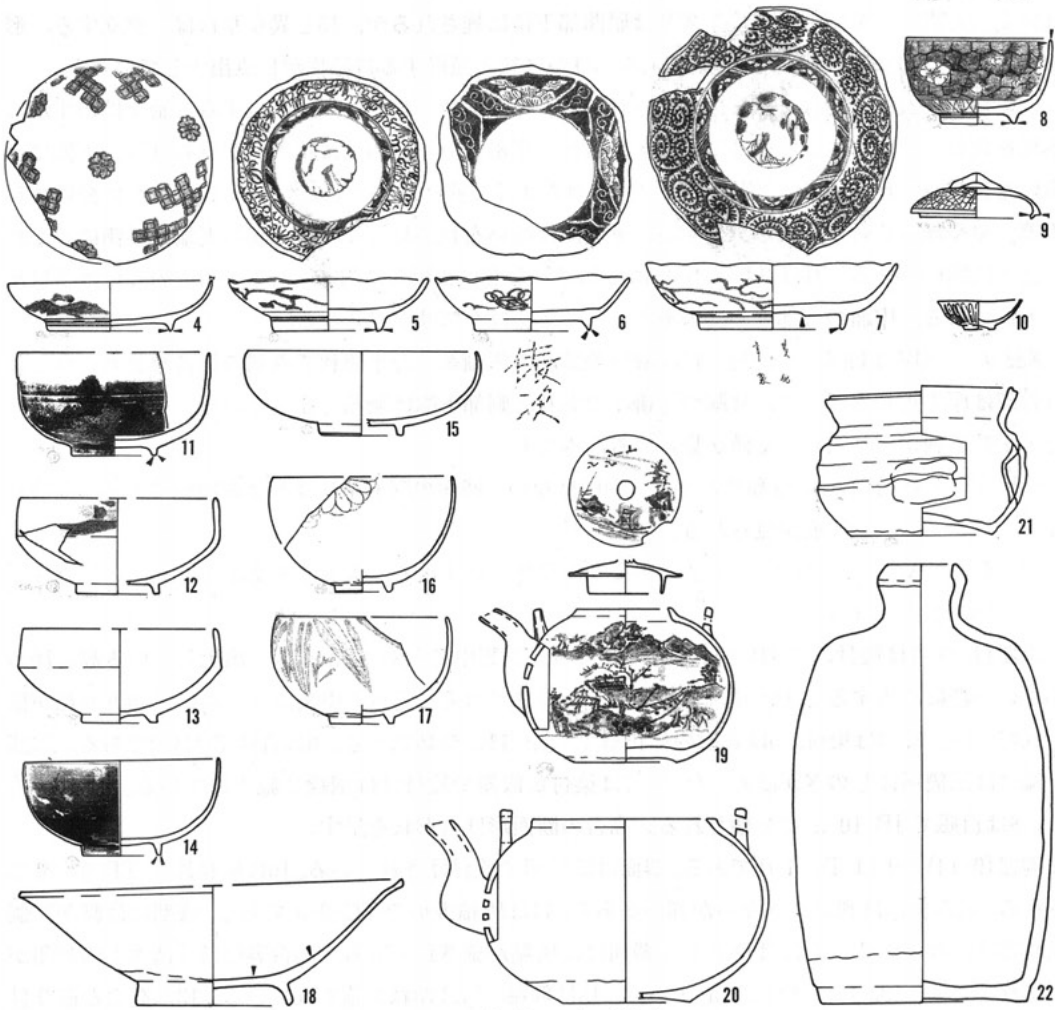
磁器(1-8) 1は染付碗でJB-1-dに分類される。同類中でK30-1より多く出土している高台径の小さい一群に該当する。2は染付皿でJB-2-eに分類される。見込み中央にコンニャク判五弁花が描かれている。3, 4は染付、5は青磁の仏花器で、JB-11に分類される。6は青磁でJB-9である。体部下端には三箇所にしのぎが認められる。7は染付仏飯器で絵付けは摺絵で施されている。JB-8である。8は白磁でJB-10-aに分類される。高台の断面形は台形状を呈す。

陶器(9-14) 9はTC-1-dである。器面には呉須で絵付けされている。10は灰釉鉢でTD-5に分類される。高台裏には判読できないが刻印がある。11は灰釉香炉でTC-9-aである。底部には脚が3個貼り付けられている。12はTD-9-bで器面には灰釉が施されておる。高台裏には「清水」の刻印が押されている。13, 14はTC-27-aである。13は鉄釉、14は鉛釉が施されている。13は高台が貼り付けられている。

第一節 陶磁器・土器



X 3 5 - 9 (2)



X 3 6 - 1 (1)

IV-139 图 X35-9 (2)、X36-1 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

カワラケ(15-17) 15は口径に比べ底径の大きい器形である。15, 16はともに左回転糸切り底。17は上製のいわゆる“手壺”に似た器形とは異なるが、碗型のカワラケである。糸切り離しのカワラケのなかでこれほど碗であることが明らかなのはこれ以外にはない。左回転糸切り底。これらのカワラケは二次焼成を受け、また灯芯油痕も認められない。他にカワラケは5点の出土。すべて二次焼成を受けている。

X36-1 (IV-139, 140図) 磁器(1-10) 磁器は10を除いて染付である。1はJC-1-fである。呉須の発色は明瞭である。2はJB-1-gである。絵付けはコンニャク判を用いている。胎土、呉須の発色は不良である。3はJB-7-aである。底部は無釉である。4はJB-3-aである。見込み文様はコンニャク判を用いている。口唇部には口錆が施されている。5, 6はJB-3-bである。ともに型作りで、輪花にしている。6は絵付けに墨弾きが用いられており、高台裏には「依次」の列点の釘書が彫られている。7は輪花皿でJB-2-iに分類される。高台裏には「成化年製」銘が描かれている。8はJB-13-aである。9はJB-14-cで橋状のつまみが貼付されている。10は白磁でJB-17である。

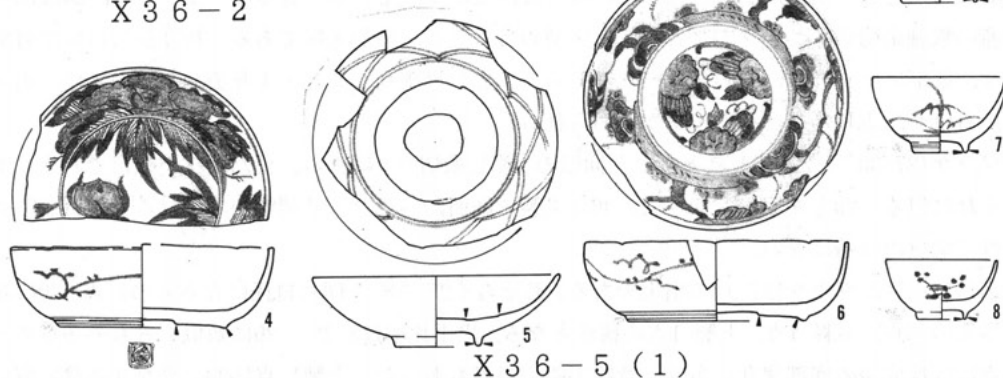
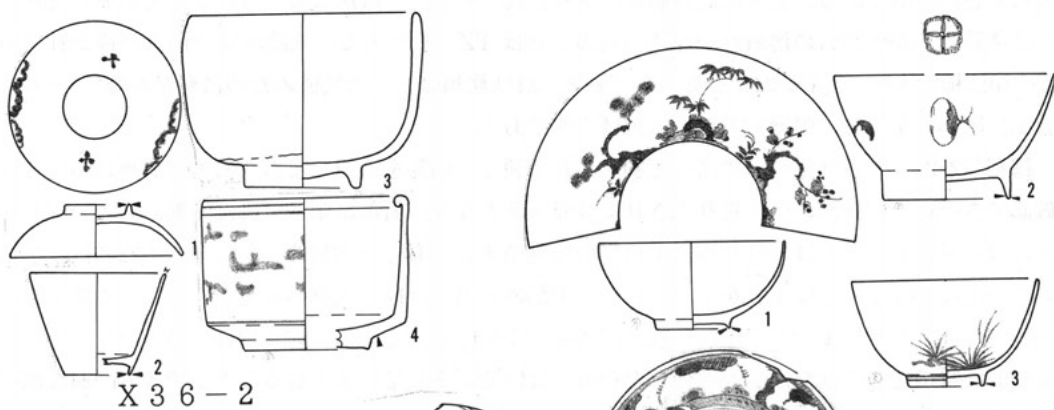
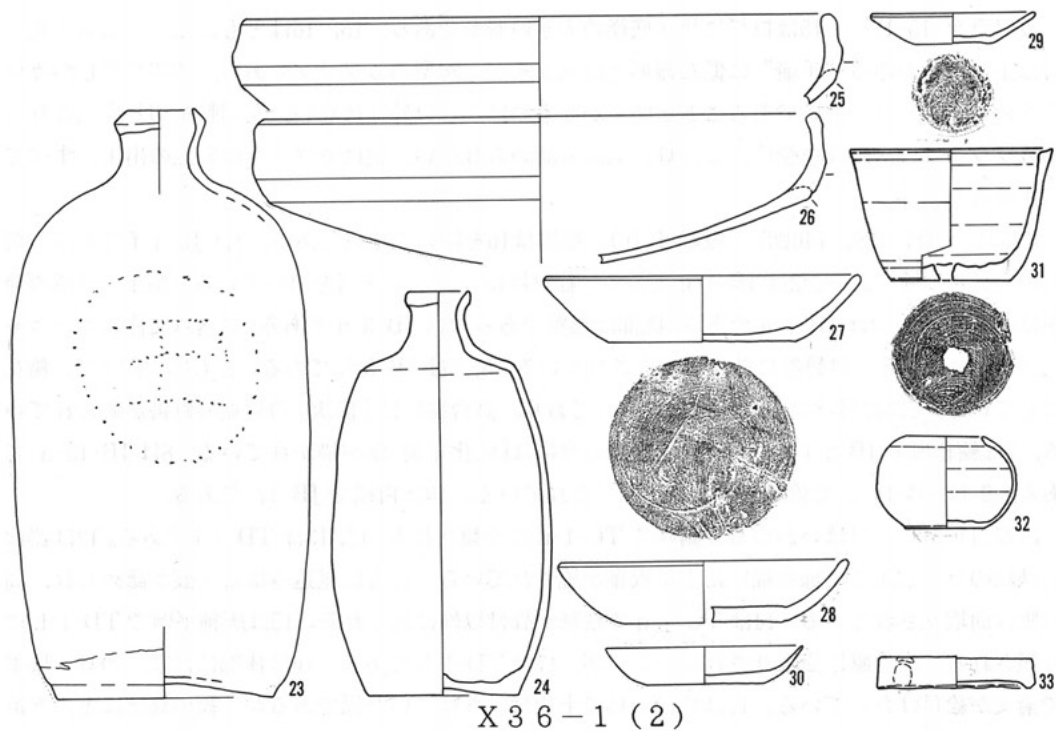
陶器(11-21) 11はいわゆる腰錆碗でTC-1-uに分類される。12, 13はTD-1-iである。12は器面に鉄絵の具と白土で文様を描いた上に灰釉が施されている。ともに見込みはピン痕が認められ、高台脇は面取りされている。14はTC-1-qで錆釉が畳付以外に施される。15は灰釉平碗でTD-1-hに分類される。高台脇は面取りされている。16, 17はTD-1-bである。16は体部には鉄絵の具、呉須で菊文が絵付けされている。17は色絵の具で上絵付けされていた様であるが、絵の具はほとんど流失して色は不明である。ともに高台脇は面取りされている。18は灰釉鉢でTC-5-cである。見込みには窯積めの際の高台の溶着痕が認められる。19はTZ-34である。鉄絵の具で山水が描かれている。20は柿釉土瓶で、TZ-34に分類されている。21は鉄釉壺で二次焼成のために釉が剥離している。胎土は灰褐色を呈し、堅緻である。産地は不明である。

徳利(22-24) 22は瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利で、胴部を破損しており釘書の有無については確認できない。口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり、肩部は張ってほぼ寸胴、高台の削り込みは浅く雑である。23はやはり瀬戸美濃産の灰釉系徳利であるが容量的にはおそらく22のほぼ2倍の2升程度になるのではないと思われる。胴部の表裏には同じ点刻の釘書が認められるほか、底部と雑な拭き取りによってできた胴部下端の僅かな無釉部分に釘書と同じ内容の墨書が見られる。形態的な特徴としてはただ胴部が伸びたのみでほぼ22に準じていると見ることができる。24は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利でこのタイプとしては中型のものだが、やや大振である。折り返し口縁で肩部が張り、胴部にはくぼみが認められベタ底である。2合半徳利、5合・1升徳利が15個体ほど出土しているほか、志戸呂産徳利も少量が認められる。

カワラケ(27-30) 27, 28はともに左回転の「離し糸切り」による。また胎土が緻密であり、上製のそれに似る。29も左回転糸切り底。30は上製で底面にヘラケズリ調整が施される。なお27-30には灯芯油痕の付着はない。

図示した以外カワラケは7点の出土である。おそらく27, 28と同じ口径になるもの1点、29に類似するもの6点、銀彩1点、上製1点の構成となる。出土比率は8.2%。29に類似するもの6点のうち1点には焼成後の底部穿孔があり、意味不明の墨書もあった。上製1点は30と異なり器壁の薄い

第一節 陶磁器・土器



IV-140 图 X36-1(2)、X36-2、X36-5(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

形態であり、おそらく流れ込みによる。点数が少なく、大型と小型のカワラケで構成される点が注目される。

焙烙(25, 26) 25, 26 は外面にくびれがあり、25は屈曲部から上位にかけ、26は屈曲部上位にケズリがめぐる。一見するとF34-11の191, 192などに類似した形態である。ただしF34-11には口縁が内湾するものではなくすべて直立し、これほど底部が下に張り出すものはない。図では判断しにくい、E22-1の51, 52 の口縁上部にもわずかなくびれがあり、さらに口縁は内湾する形態である。この点から判断し、E22-1の51, 52 は口縁が短くなり、内湾の角度がきつくなった25, 26 をさらに発展させた形態と考えている。したがって25, 26 はE22-1 以前に位置することになる。25, 26にもっとも近いのはF33-3 もしくは新しくともG26-1 の一群の焙烙と考えている。

底部片は37点の出土である。出土比率の23.4%。口縁片は図示した以外14点の出土である。25, 26に類似したものの5点、F33-3の103に類似したものの2点、K30-1の47に類似したものの4点、F34-11の195に類似したものの13点の出土となる。蓋片は9点の出土である。焙烙のみを注目すれば陶磁器類およびカワラケとはまた別の年代が示される。陶磁器類、カワラケの一部には18世紀前半に位置づけられるものもあり、あるいはこれらとともに流れ込みによるものであろう。

土器(31, 32) 31は硬質瓦質の植木鉢。底面中央に焼成前の穿孔を有する。底面の回転糸切り痕は左回転である。32は軟質土師質の無頸壺。ロクロ成形である。判然としなないが底面に回転糸切り痕が見られる。外面はよくナデられ平滑である。内面から口縁部外側まで黒色化している。火入れの類と思われるが、性格等不明である。このほか軟質土師質の火鉢類の破片が3個体分ある。

焼塩壺 33はI類2に分類される蓋。やや白色を帯びた橙色を呈する。胎土に雲母を含む。上面および側面はナデられ平滑である。下面周縁部には粗い布目が見られるが、中央部を中心にほぼ全面に粗い砂、小砂利の痕が見られる。このほかII類の身が3点、III類の身が1点見られるが、いずれも小片である。

X36-2 (IV-140図) 磁器(1, 2) 1は染付で、JB-14-aである。2は白磁猪口でJB-7-bである。口唇部には口錆が施される。

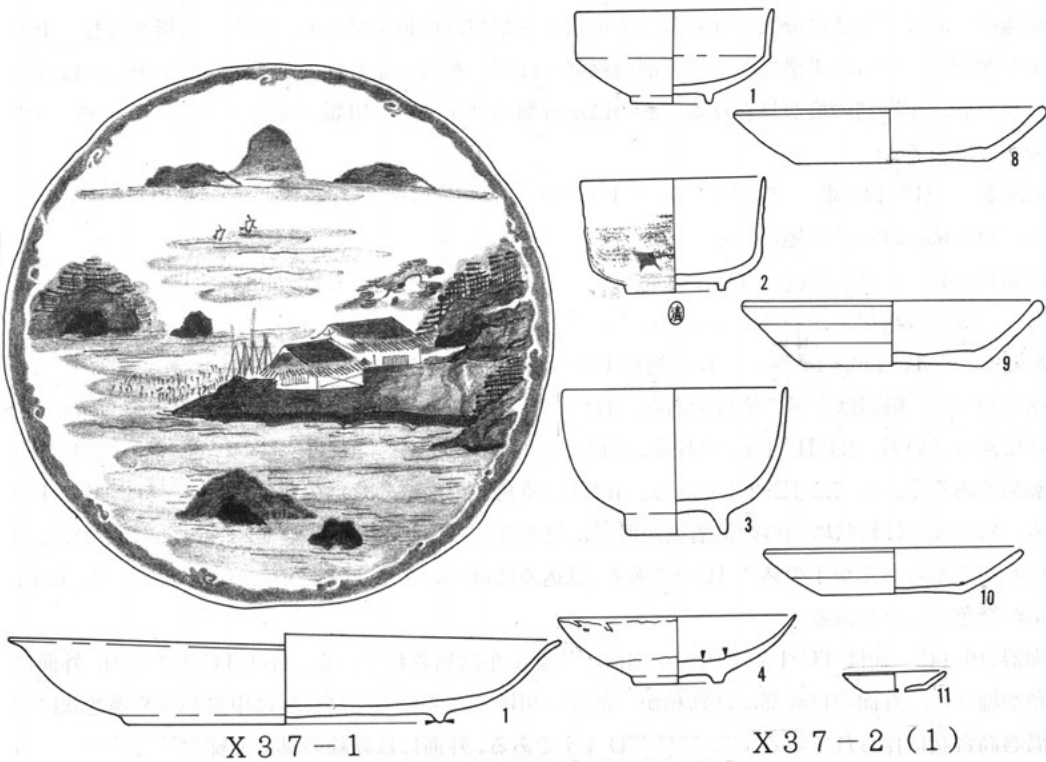
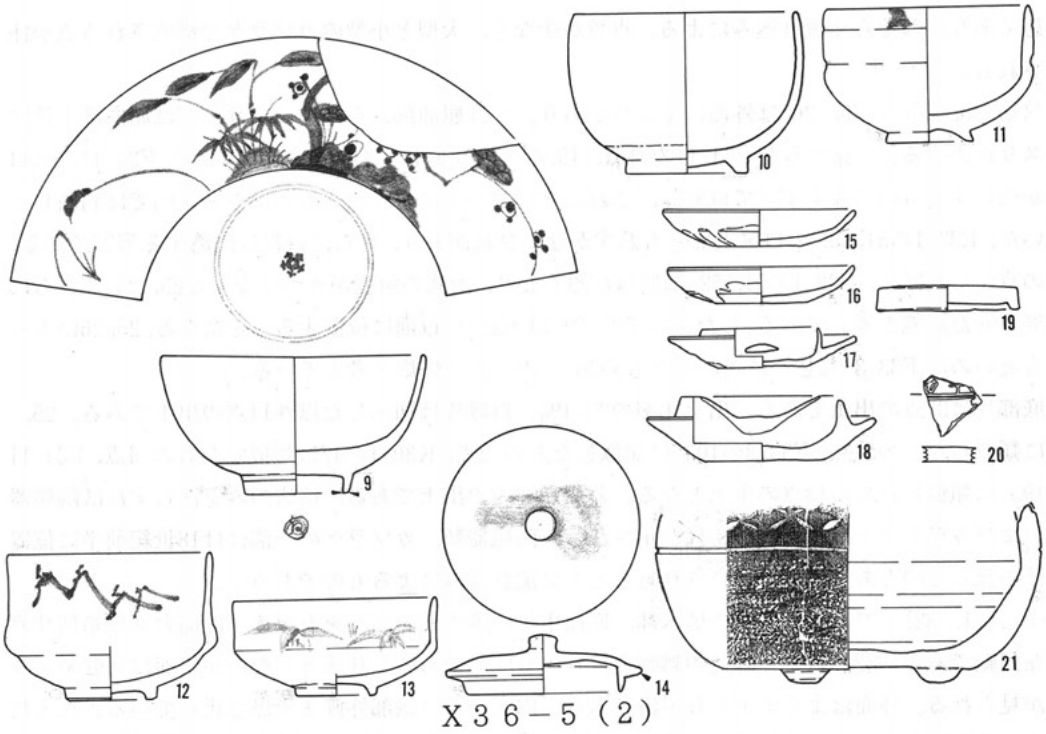
陶器(3, 4) 3は灰釉碗でTC-1-cに分類される。底部は無釉である。4は陶胎染付で、TB-9-aである。高台は幅広で、脇は面取りされている。二次焼成を受けている。

X36-5 (IV-140, 141図) 18世紀後半から19世紀初頭の遺物を主体とする。

磁器(1-9) 磁器はすべて染付である。1はJB-1-fである。低火度焼成のため、器面は細かい白斑状に濁っている。2はJB-1-mである。焼成は良好である。3はJB-1-cである。年代的には17世紀の製品であろう。4, 6はJB-2-jである。4には二重角枠内に略した渦福が銘される。5はJB-2-1である。輪割部には輪状に高台の溶着痕が明瞭に認められる。7, 8は小坏でJB-6-aに分類される。9はいわゆるくらわんか手の鉢でJB-5である。見込みにはコンニャク判五弁花が描かれている。胎土、呉須の発色は不良である。

陶器(10-14) 10はTC-1-cで灰釉が内面と体部上半に施されている。11はTC-1-fで内、外面に灰釉が施され、外面の口縁部には鉄釉が一部流し掛けられている。高台裏は中央がやや渦巻状に尖り渦巻高台状に作られている。12, 13はTD-1-iである。外面には鉄絵の具で文様が絵付けされてお

第一節 陶磁器・土器



IV-141 圖 X36-5(2)、X37-1、X37-2(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

り、見込みはピン痕が認められる。高台脇は面取りされている。14は TC-14 である。灰釉に呉須釉が流し掛けられている。

灯火具(15-18) 15, 16は志戸呂油皿。ともに灯芯油痕が口唇を全周し、底面にヘラケズリ調整がされる。17は志戸呂受付。油の流れ口は2孔ある。15, 16と同様、底面はヘラケズリ調整。油痕の付着はない。18は素焼受付。左回転の糸切り底。銀彩が施される。他に志戸呂油皿 5点、同じく志戸呂受付 1点、透明釉油皿口縁片 1点の出土である。透明釉油皿片は流れ込みの可能性が高い。

土器 21は1類 a イに分類される硬質瓦質の火鉢類。輪積み成形である。底には細かい砂粒の痕があり、口縁下には沈線が巡り、その上にハの字を上下に組合せた文様が連続し、沈線の下には粗いチリメン状の文様が施されている。口唇部には敲打痕が連続する。内面には無数の細い擦痕がある。このほかに硬質瓦質、軟質土師質の火鉢類の破片が4個体分見られる。

焼塩壺(19, 20) 19はイ類 1 d に分類される蓋。やや桃色を帯びた褐色を呈する。胎土にはごく微量の雲母を含む。下面には布目が見られる。20は表面に文字様の刻印と思われるもののある板状の製品である。胎土は肌色、白色の粒子を含む。焼塩壺の蓋と思われるが、これまでに知られているもののなかにはこれに合致する刻印をもったものはない。このほかに焼塩壺は見られない。

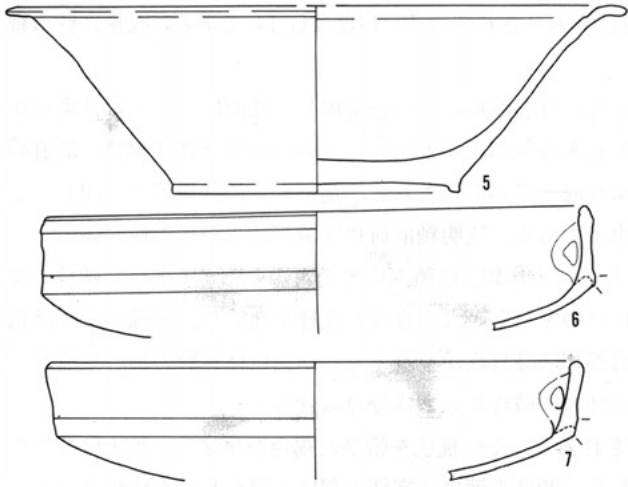
X37-1 (IV-141図) 磁器 1は染付輪花大皿で、JB-2-eに分類される。絵付けには雲形の縁文様に墨弾きを用い、海浜図を描いている。高台裏にはハリ支えが六箇所認められ、後の釘書が列点状に角枠内「治」が彫り付けられている。焼き継ぎの痕跡が明瞭に認められる。

X37-2 (IV-141, 142図) 陶器(1-5) 1は TC-1-v である。灰釉と柿釉が碗の半分ずつ掛け分けられている。2は TC-1-u である。体部中央付近は所々凹みが見られ、高台裏には楕円内に「清」の刻印が中央に押されている。藤澤氏の腰鎗碗の分類では第2型式に該当するものと考えられる。刻印については瀬戸の空兵衛窯で正円内ではあるが「清」の刻印を有する製品が確認されている。器形的特徴や体部に凹みが見られる事も類似しており、年代的にはほぼ同じととらえて大過ないと考える。3は TB-1-a である。畳付を除いて灰釉が施される。4は TB-2-a である。見込みには銅緑釉、外面には灰釉が施されている。5は TC-5-a である。底部を除き灰釉が施され、見込みには鉄釉が流し掛けられている。高台、見込みにはトチの溶着痕が認められる。

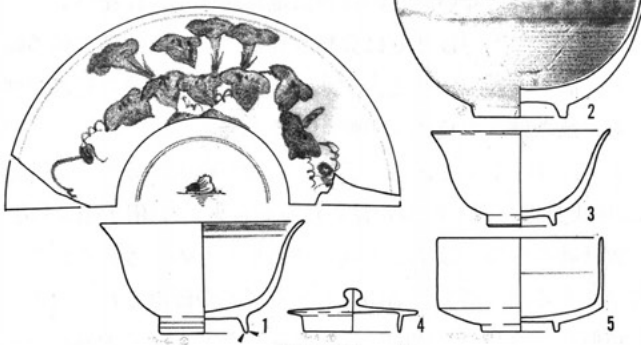
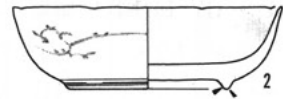
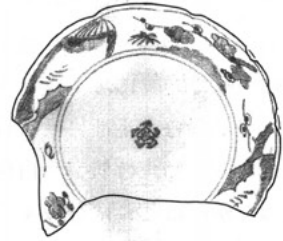
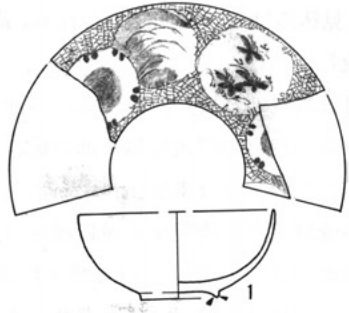
カワラケ(8-11) 8, 9はともにほぼ完形であり、左回転の「離し糸切り」による。9は器高が高く器壁も厚いが、ほぼ同形態であり胎土も緻密である。灯芯油痕は付着しない。10も8, 9と同様、左回転の「離し糸切り」による。ただし8, 9ほど胎土は緻密ではない。11は焼成後の底部穿孔のあるカワラケで、左回転糸切り底。E34-3の5などと類似した形態であり、灯火具として同じ用いられ方をされたのであろう。油痕は口唇の一部および内面全体に広がる。図示した以外カワラケは5点の出土である。10と類似するもの4点、11に類似するもの1点の出土である。

焙烙(6, 7) 6, 7とも内耳をもつ焙烙である。両者ともに口縁が高くほぼ直立し、くびれも認められる。ケズリは屈曲部上位に施され、底面は平らである。器形の類似から二つは同時期と考えられる。しかし細かく見れば違いも認められる。意識的なものかはわからないが、6の口縁の外面には稜線が、内面には沈線がめぐり、さらに器壁の厚さ・胎土も異なるようである。6, 7とも内耳は痕跡を残すのみであるが、内耳は底までとどかず、口縁に対応させて取り付けられている。内耳内

第一節 陶磁器・土器



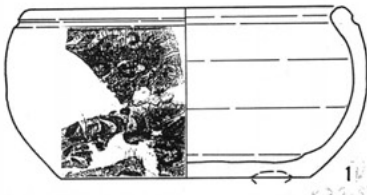
X37-2 (2)



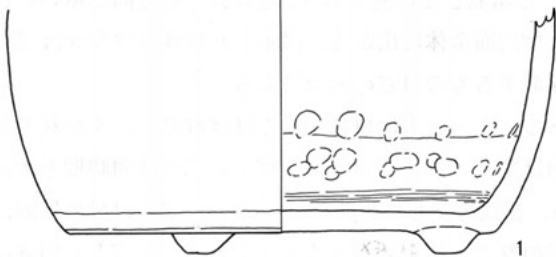
X37-4



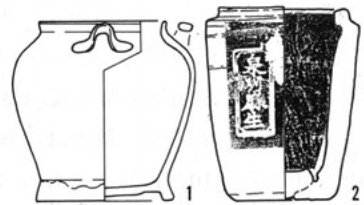
X37-6



X37-5



X38-1



Y33-1



IV-142图 X37-2(2)、X37-4、X37-5、X37-6、X38-1、Y33-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

部は空洞である。内耳のみは F34-11の199 と類似した形態である。底部片はいくつか出土しているが、接合しないものの6, 7 と同一個体と思われ、またこれ以外に口縁片の出土はなかった。

X37-4 (IV-142図) 磁器 1 は JC-1-d である。呉須は地呉須を使用している。

陶器(2-5) 2はいわゆる鎧手碗で TC-1-r である。内面および器面口縁部は緑釉、器面は灰釉が掛けられている。3は灰釉端反碗で TD-1-g に分類される。全体に貫入が認められる。4は TZ-34 の蓋である。団子状のつまみが貼付されている。5は TD-32 である。灰釉が施され、内面には鉄絵の具で目盛りと思われる線が描かれている。高台脇は面取りされている。

X37-5 (IV-142図) 土器 1 は 1類 a イ に分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形で、体部外面には唐草状の文様が捺されている。口唇部には沈線が巡り、その上はよくミガかされている。口唇部上端には弱い敲打痕が巡っている。底面にはコビキ痕が見られる。このほか硬質瓦質、軟質土師質の火鉢類の破片が各 1点見られる。

X37-6 (IV-142図) 磁器(1, 2) 1, 2 は染付である。1は JB-1-f である。2は JB-2-g である。見込み中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。胎土、呉須の発色は不良である。

陶器 3 は TC-1-l で内外面には灰釉が施され、外面は呉須、鉄絵の具で絵付けされている。底部は無釉である。

X38-1 (IV-142図) 土器 1 は 1類 a ロ に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形で、上半を欠損している。体部外面は横にナデられ平滑である。体部内面、底部付近にはおそらく工具によるとと思われる櫛目が巡りその上方には指頭痕が見られる。底面外側にはチヂレ目が見られる。このほかに土器は見られず、II類の焼塩壺の身の小片が見られるのみである。

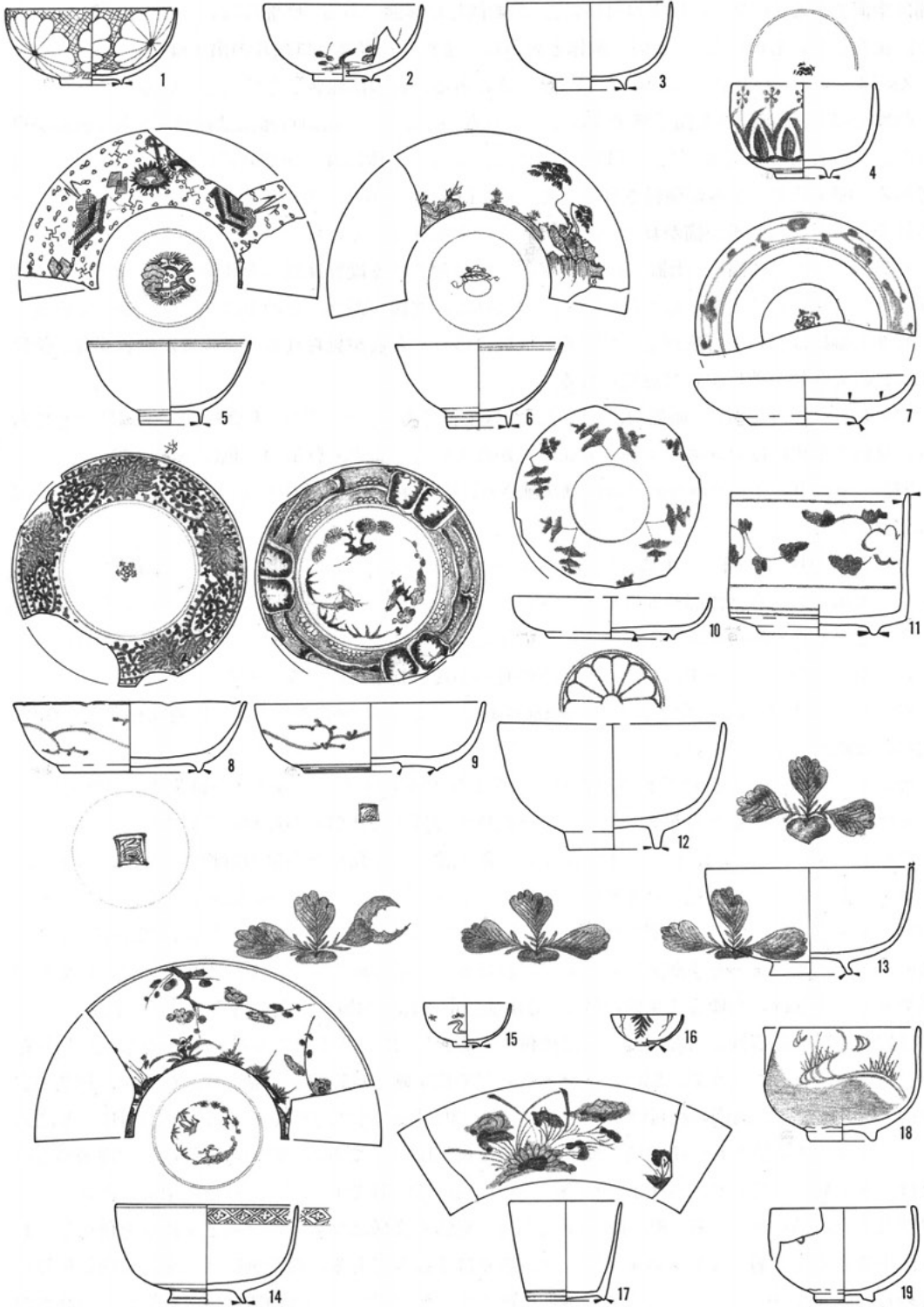
Y33-1 (IV-142図) 陶器 1 は鉄釉双耳壺で、TC-15に分類される。二次焼成を受けており、内面には鉄が付着している。

焼塩壺 2 はII類 1 b2に分類される身。3類 1 b の刻印をもつ。蓋受けの屈曲部が鈍角をなす。内面には刺し子のある布目がある。ほかには軟質土師質の火鉢類の小片が1点見られる。

Y34-4 (IV-143~147 図) 本遺構からは陶磁器、土器類など多量の遺物が出土し、時期的にも前代以前のものが若干見られる程度で比較的まとまりを見せ、中央診療棟地点の E22-1 とともにVI期の遺物群の指標として位置付けられる。遺物群の特徴としては E22-1 と同様徳利が前代より飛躍的に量が増加している事があげられる。これは瀬戸・美濃産のみならず、志戸呂産についても同様である。本期はいわゆる広東碗(JB-1-m)出現以前の比較的短い期間であろうと思われる。

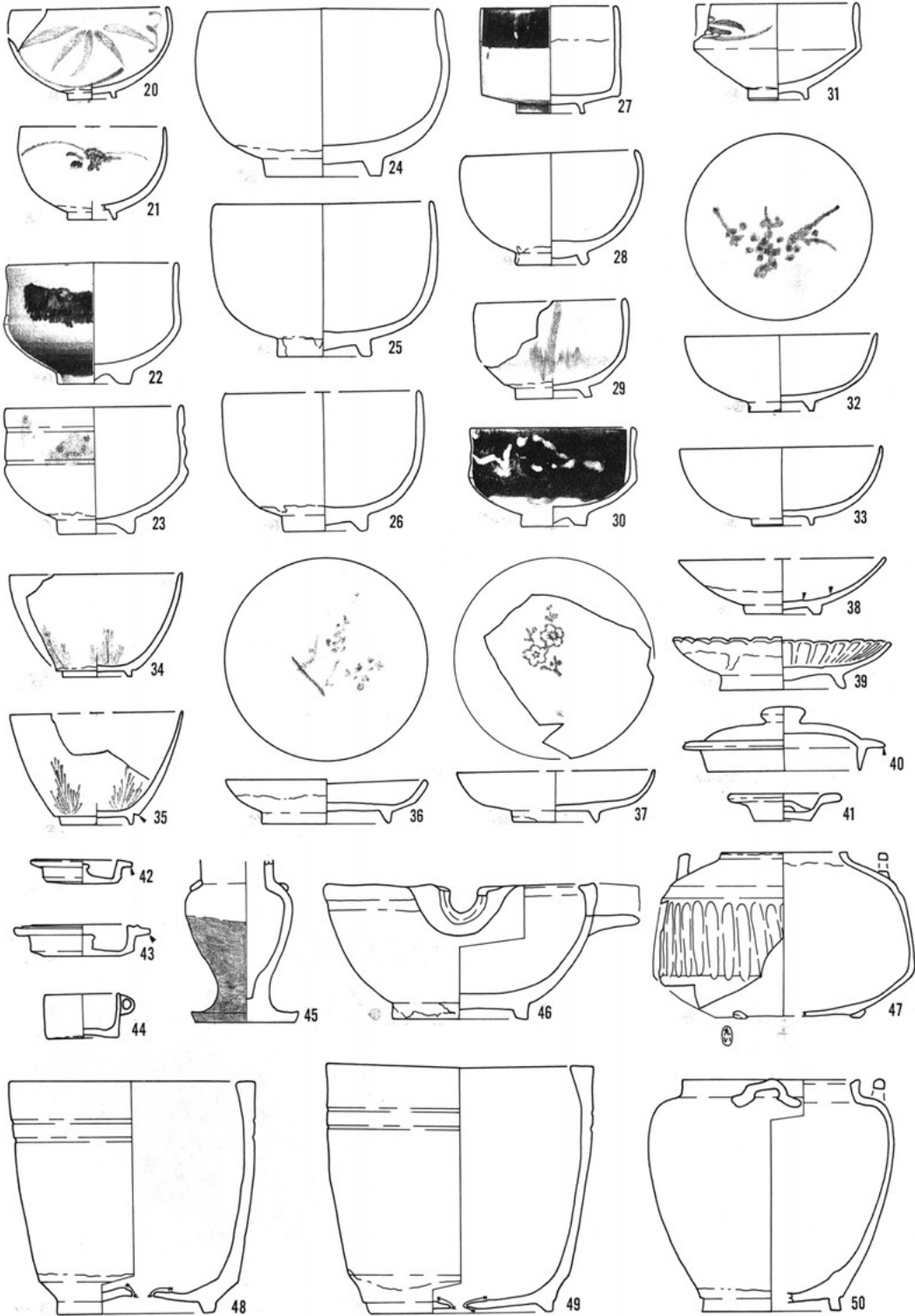
磁器(1-17) 磁器は3, 12, 15 の他は染付である。1, 2は JB-1-f である。1の割り菊文は18世紀後半以降に流行したようで、肥前の広瀬向2号窯で広東碗出現以前から見られ、筒形碗、初期の広東碗、小丸碗などが同様の絵付けがなされている。3は青磁染付で JB-1-e である。4は JB-1-h である。見込みには手描き五弁花が描かれている。5, 6は JB-1-i である。内面の絵付け法が従来のものとは大きく異なっており、JB-1-m のそれと類似する。7は JB-2-m である。見込み中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。8は JB-2-e である。見込み文様はコンニャク判と手描きを併用しており、中央五弁花と菊花はコンニャク判、タコ唐草は手描きである。高台裏には二重角枠内渦福銘が認められる。9, 10は JB-2-j である。本期に出土する蛇ノ目凹形高台の皿はいずれも高台の高さが

第一節 陶磁器・土器



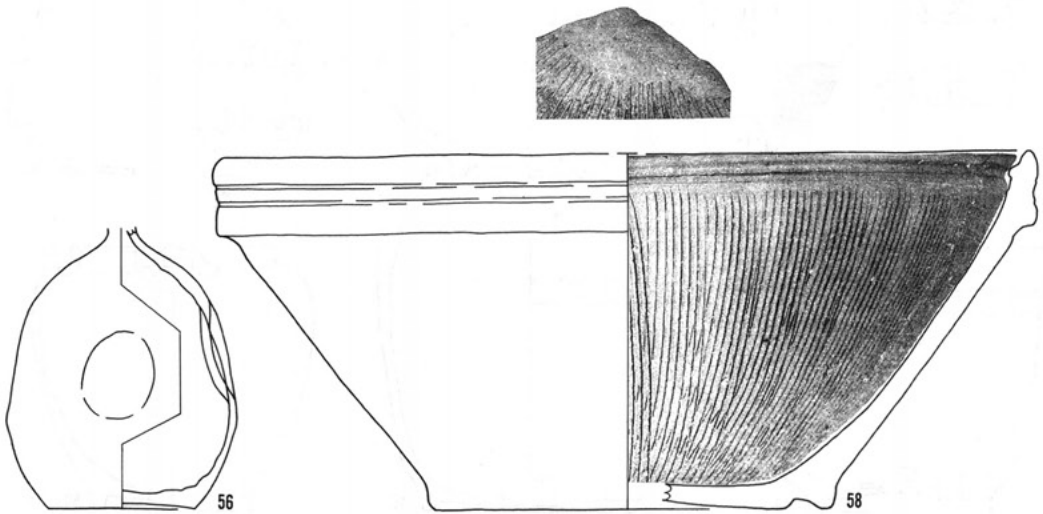
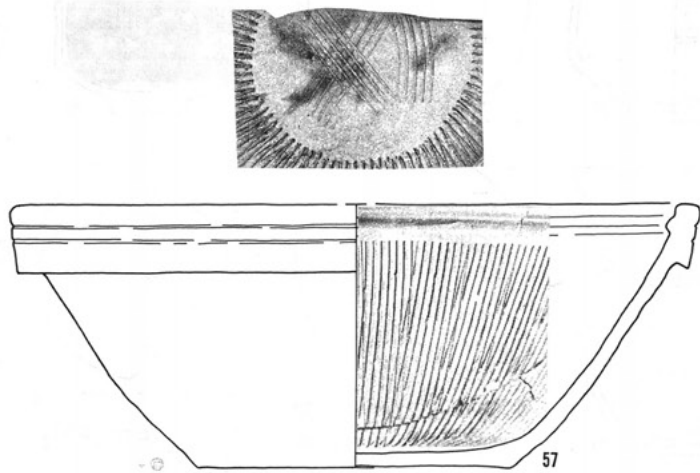
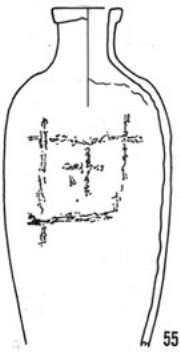
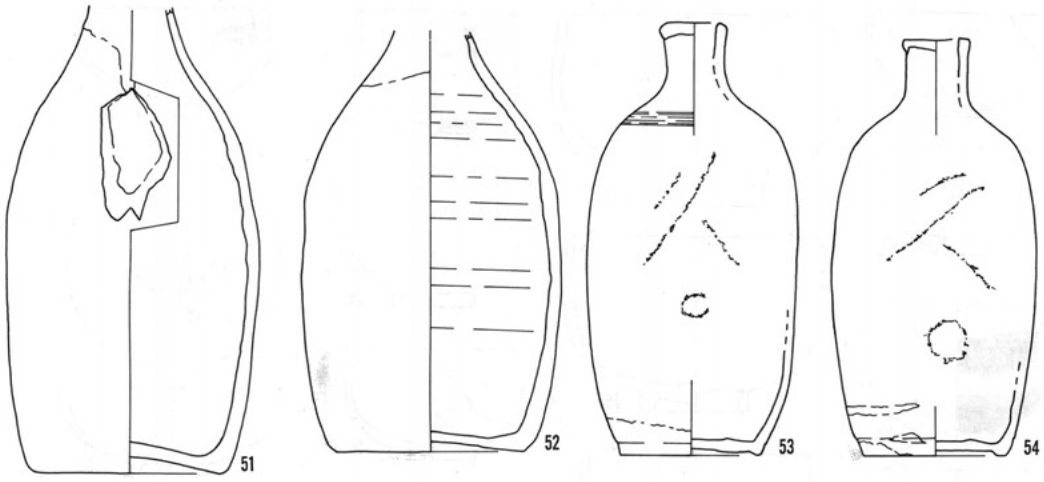
IV-143 圖 Y34-4 出土遺物 (1)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-144図 Y34-4出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-145図 Y34-4出土遺物(3)

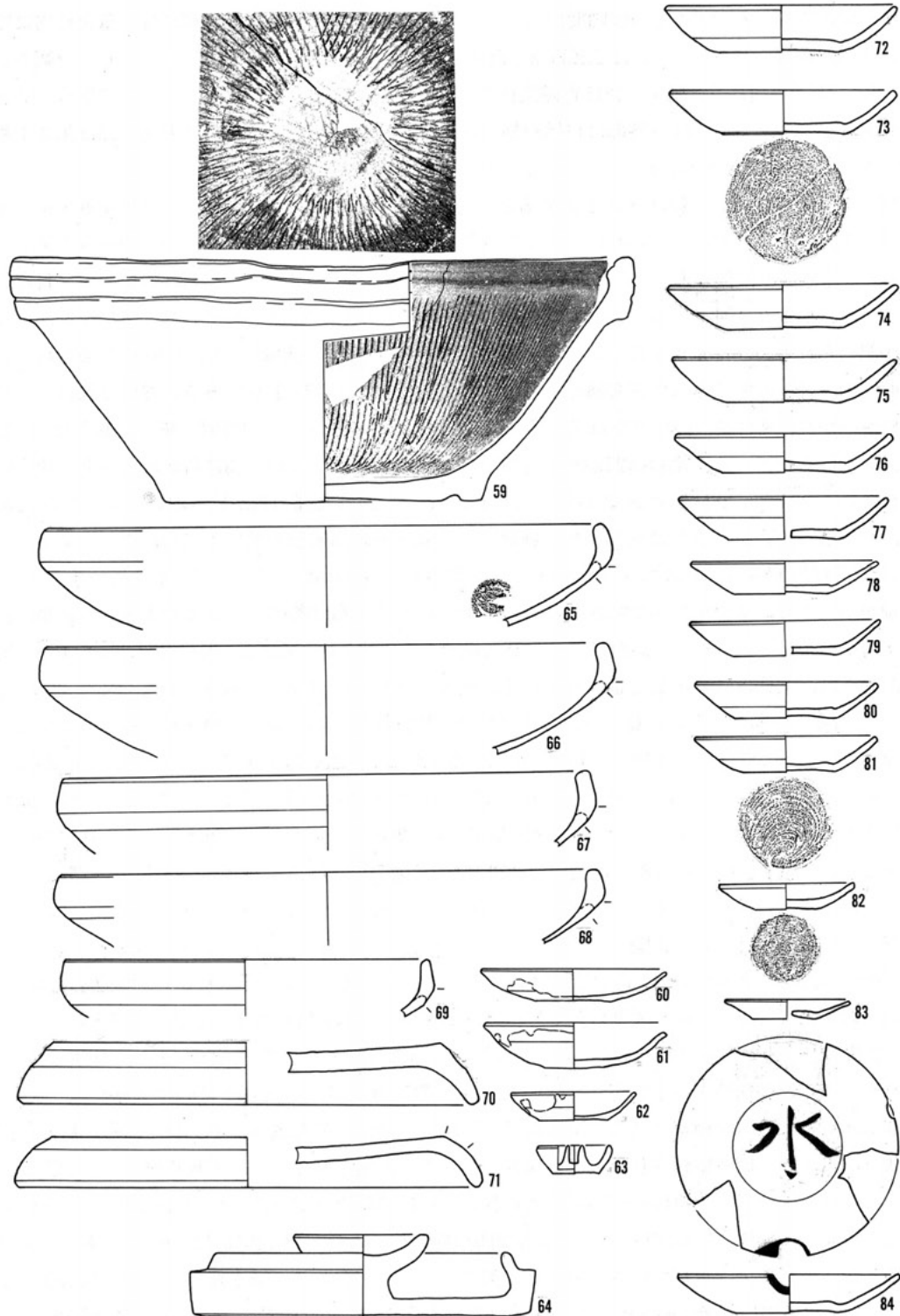
第IV章 江戸時代の遺物

低い。本類で高いタイプのもはⅧ期に入ってから認められている。9は高台裏には二重角枠内に略した渦福銘が描かれている。10は AE35-3と遺構間接合している。11は蓋物で、JB-13-bに分類される。12-14は鉢で JB-5に属す。12は青磁染付で見込み中央には菊花文が描かれている。胎土、呉須の発色は不良である。13は口唇部に口銹が施される。15, 16は JB-17 に分類される。15は朱で上絵付けされているが、絵の具はほとんど剥落している。17は JB-7-b である。

陶器(18-50, 57-59) 18は TD-1-a である。内外面に白土を施した後、外面には黒化粧土を刷毛目風に重ね塗り、その上より絵付け部分にはさらに白土を施して、呉須と鉄絵の具で文様を描いている。全体に丁寧に作られ、高台は丸く削られている。19は TD-1 である。高台は幅広の蛇ノ目高台風で、脇は面取りされている。内面及び外面体部下端まで灰釉が掛けられており、全体に細かい貫入が認められる。20は京焼を模したと考えられる瀬戸・美濃系の色絵碗で TC-1-m に分類される。器面は朱、緑? の色絵の具で笹文様を上絵付けしている。21は TD-1-b である。器面は鉄絵の具で文様が描かれ、高台脇は面取りされている。22, 23は TC-1-f である。内外面に灰釉が施され、鉄釉が流し掛けられている。高台は22が断面方形で渦巻高台状を呈するが、23は角が取られ丸く仕上げられている。24-26, 28は灰釉碗で TC-1-c に分類される。24は底部の釉が拭き取られているが、25, 26, 28は無釉である。本類は底部施釉一施釉後拭き取り一底部無釉の順で年代的に推移するようである。27は鉄釉と鍍釉の掛け分け碗で TC-1 に分類される。29は御室写しで TC-1-d に分類される。灰釉が掛けられ、文様は呉須で描かれている。30はいわゆる拳骨茶碗で、漆黒の不透明な鉄釉に白釉が所々に飛ばされている。高台は蛇ノ目高台風である。TC-1-p である。31は TD-1-i である。灰釉が施され、文様は鉄絵の具で描かれている。底部は無釉で高台脇は面取りされている。32は TC-1-n である。灰釉が施され、見込みには花は呉須、枝は鉄絵の具で梅文が描かれている。全体にラフな作りである。33は灰釉平碗で、TD-1-h に分類される。高台脇は面取りされている。34, 35はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-d に分類される。若杉文は呉須と鉄絵の具を併用して描かれている。高台脇は面取りされている。36, 37は御深井風の皿で、TC-2-e に分類される。36は見込みに鉄絵の具で花文様が摺絵され、ピンの溶着痕が三箇所認められる。底部は無釉で、高台裏、外側面には判読はできないが墨書が書かれている。37は見込みに呉須で花文様が摺絵されている。底部は施釉している。

38は TB-2-a で内面には銅緑釉、外面には灰釉が施されている。39は TC-2-1 である。釉は灰釉のみで内面は型押しされている。高台は貼り付けられており、見込みにはピン痕が三箇所認められる。外側面のしのぎはない。40は灰釉の蓋で、TC-14-c である。41は灰釉の落とし蓋で、TC-14-a である。橋状のつまみが貼付されている。42, 43は鉄釉の施された落とし蓋で、TC-14-a に分類される。花をかたどった装飾つまみが貼付されている。44は TC-30 である。底部を除いて灰釉が施される。底部は回転糸切り痕が観察される。45は柿釉、灰釉掛け分けの仏花器で、TC-11 である。肩部に団子状の粘土塊が二箇所貼付され、底部は回転糸切り痕が観察される。46は灰釉片口鉢で、TC-23 である。見込みにはトチの痕跡が三箇所認められる。47は鉄釉土瓶で胴部には縦方向にしのぎが連続して施される。底部には楕円内に「丸い」? の刻印が押されている。48, 49は TC-26-a である。48は柿釉、49は鉄釉が掛けられている。ともに底部中央に小孔が穿たれ、植木鉢として二次利用されている。48は口唇部に、49は内面にトチの溶着痕が認められる。50は灰釉壺で、TC-15 に分類される。

第一節 陶磁器・土器



IV-146圖 Y34-4出土遺物(4)

第IV章 江戸時代の遺物

57-59 は TE-29 である。播目は57から 8条, 8条, 9条が1単位で, 59は一周26単位である。播目の上部は57はなでられて揃えられているが, 58, 59はなでが弱く揃えるまでは至っていない。縁帯も57は他の2点より張り出しが強調され, 後出的な様相を示している。

徳利(51-55) 51, 52は志戸呂産の徳利で口頸部には茶褐色釉が掛けられている。双方ともに底部外周にはヘラ削りが施されている。53, 54は瀬戸美濃産の灰釉系5合徳利で, 点刻の釘書が認められる。口唇部は帯状に小さく折り返され, 肩部はまだ張っていないが寸胴に近付いており, 高台の削り込みは浅く雑になっている。55は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で線刻の釘書が認められる。口唇部は薄めに折り返されて頸部はまだ長く, 最大径は胴上部にある。56は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で容量的には中型のものと言えようが, 胴部は比較的強く丸みを帯びた形態となっており, 頸部のくびれも大きい。胴部には2箇所にくぼみが認められベタ底である。5合・1升徳利と志戸呂産徳利がそれぞれ300個体以上出土している一方, 2合半徳利は25個体ほどが認められるに過ぎない。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利もごく僅かが見られるのみである。

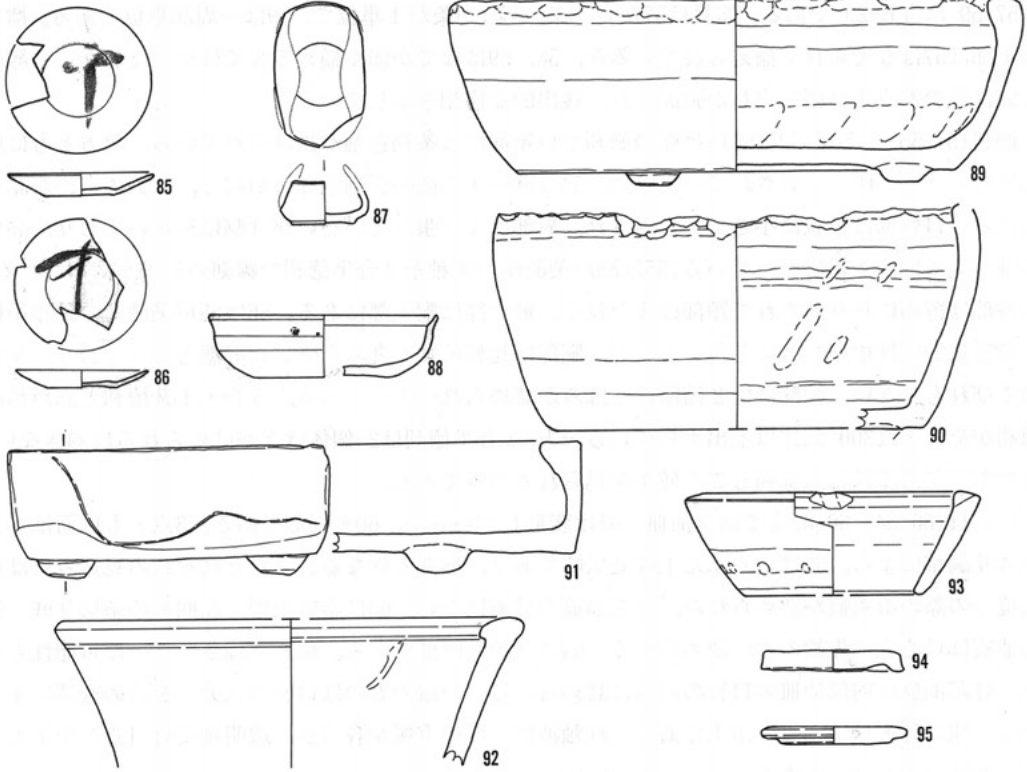
灯火具(60-64) 60-62まで鉄釉油皿。61は変形しているが, 60と同形である。3点とも底面はヘラケズリ調整による。62はいくぶん上げ底気味であり, 形態も異なる。またそれぞれの見込みには重ね焼きの際の溶着痕が認められた。灯芯油痕の付着はない。63は素焼乗燭。左回転の糸切り底。灯芯油痕は灯心立の先端のみに認められる。64は瓦燈受け部である。銀彩が施されていた可能性もある。灯芯油痕は内部油皿の口唇の両端に認められる。一端のものは口唇の三分一を占め底部にまで及ぶ。他に灯火具は3点の出土である。鉄釉油皿, 素焼乗燭が各1点, 透明釉受付1点の出土となる。鉄釉系が主体を占める。

カワラケ(72-87) 72-77の口径は12.8-14.1cm。6点とも灯芯油痕が付着する。特に72, 74, 76は口唇を全周する。すべて左回転の糸切り底であるが, 73, 76は「離し糸切り」による。77には焼成後の穿孔が底部に二箇所認められる。78-81の口径は11.2-11.4cm。灯芯油痕は81では口唇を全周するが, 78, 80はまばらに認められる。すべて左回転の糸切り底である。82, 83はともにほぼ完形であり口径8cm前後。左回転の糸切り底である。それぞれに灯芯油痕も認められ, 82には銀彩も施される。83は底部に穿孔があり二次焼成も受けている。また油痕以外に全面にわたって煤も付着している。

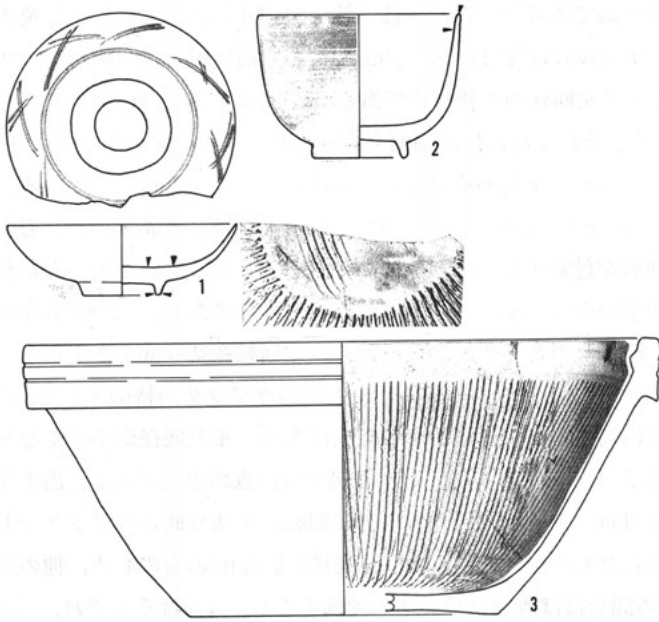
84-86まで墨書のあるカワラケである。84の底部に「水」の字がある。口縁に焼成後の半月形の打ち欠きがあり, この周辺のみ灯芯油痕が付着する。この部分に灯芯を立て掛けていたのかもしれない。85, 86はともに底部に「中」の字がある。85の「中」は86に比べ稚拙である。二つとも左回転糸切り底。灯芯油痕の付着はない。87は耳皿であるが口縁を欠く。左回転糸切り底である。

ほぼE22-1と近い内容をもつカワラケである。この時期のやや大型のカワラケの特徴として, 口縁が直線的なものが多くなり, 明確に内湾するものは減少する傾向にある。また底径が小さくなりF34-11などに比較して器高も高くなるようである。カワラケは全部で117点の出土である。出土比率の25.5%を占める。手捏ねの口縁片1点, 上製4点以外すべて左回転の糸切り底のカワラケである。そのうち底径のわかるものは図示したものを含め27点あり, 底径3.6-4cmのもの4点, 他のほとんどは5.1-7.5cm前後にあり, この間をほぼ等質に分布する傾向をもつ。口径はそれぞれ, 二寸五分, 三寸五分-四寸六分前後となろうか。E22-1から出土したのとほぼ同じ大きさのカワラケが出

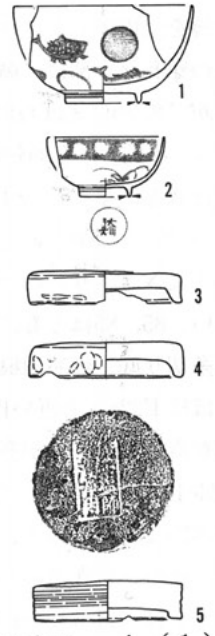
第一節 陶磁器・土器



Y34-4 (5)



Y34-5



Y35-4 (1)

IV-147 図 Y34-4(5)、Y34-5、Y35-4(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

土したことになる。

焙烙(65-71) 65, 66はほぼ同じ形態である。65に丸に一の字の刻印がある。径2.2cmであり、X34-2のそれに比べわずかに小さい。67, 68の口径は65, 66よりいくぶん小型である。69はこの頃からはっきりする小型の焙烙である。ただし類例は多くはない。70, 71は蓋でともにつまみを欠く。なお2点とも裏面全体に煤が付着する。

この遺構出土の焙烙の特徴として、口縁が短く内湾しケズリが確実に屈曲部下位をめぐる点が挙げられる。ただし65, 66のように内湾がはっきりしているのもあるが、68のように口縁が長く屈曲の度合いも弱い焙烙も確認されている。65, 66よりいくぶん古い様相を残している。69は小型の焙烙であるが、基本的には上述の焙烙と変わりが無い。E22-1の焙烙と同じ類型に分類されるが、概して口縁が長く、ケズリの位置もわずかに異なるようである。AD35-2と同様、いくぶん古い様相をもつようである。図示したものを含め、底部片は28点、口縁片11点が出土している。小型の焙烙は69の1点のみ、他は65-68に似た大型焙烙の口縁片である。蓋は他に5点出土している。

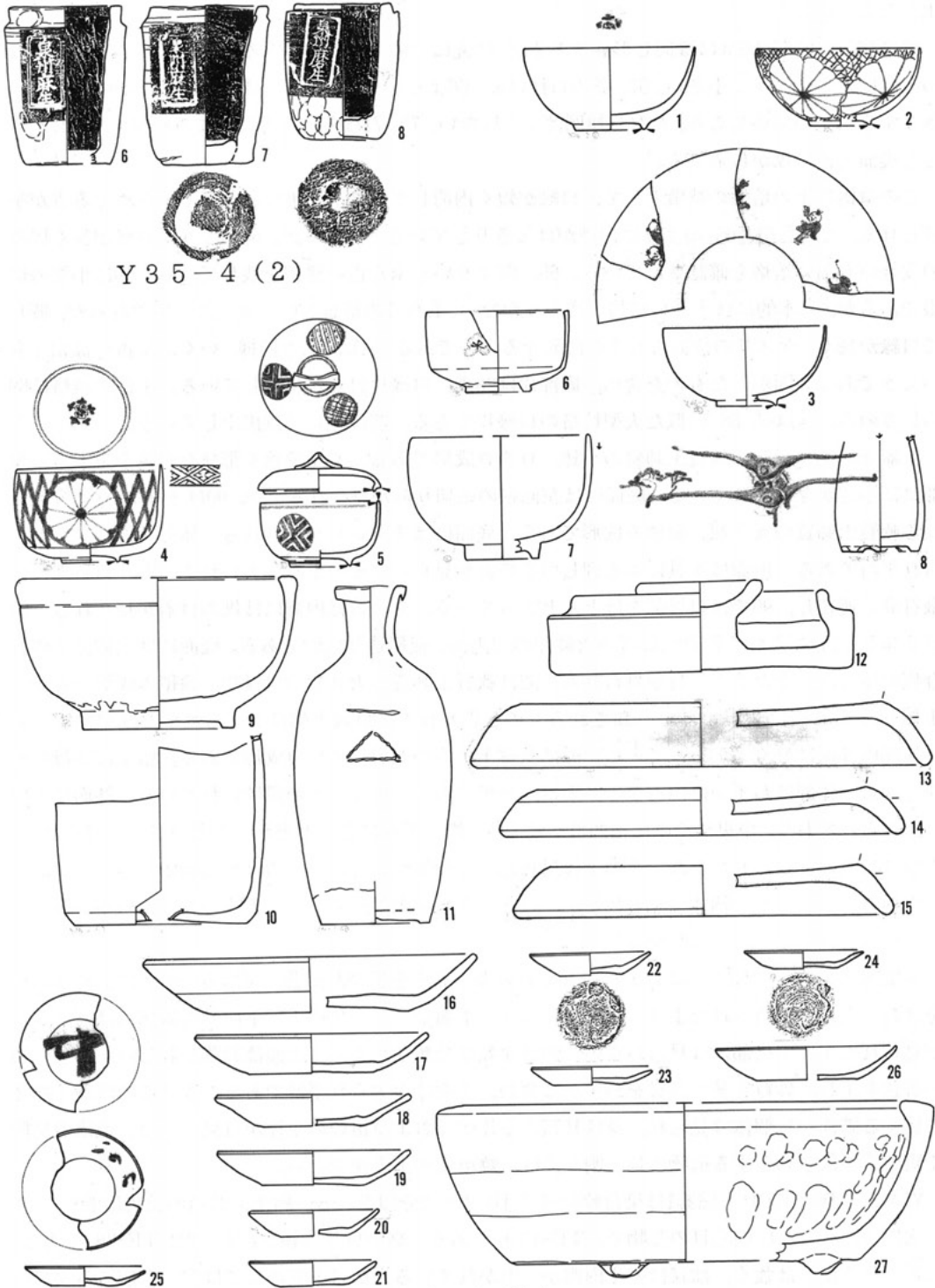
土器(88-93) 88は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。やや橙色を帯びた褐色を呈する。頸部には小孔が穿孔されている。底面には左回転の糸切り痕が見られる。89, 90は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。底面にはチヂレ目が見られる。体部外面はよくケズられ平滑である。内面は工具による押し引きの痕が見られ、その上をナデられている。口唇部には敲打痕が連続し、90では口唇部をほとんど失っている。89の口縁内側には煤の付着が見られる。91は2類bに分類される軟質土師質の火鉢類の突出部。板組造り成形である。底面には主体部との接合痕が見られ、またチヂレ目が見られる。92は軟質土師質の火鉢類の口縁片。輪積み成形である。1類bロもしくは2類cイに分類されるものと思われる。口縁上端はケズられており平滑であるが体部内外面は軽くナデられている。93は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。胎土に雲母の細粒を含む。体部はわずかに内湾する。上端は平坦であり、切り欠きが設けられている。外面は丁寧にナデられており、中央やや下に指頭痕が巡る。下端に工具によると思われる弱い櫛目が見られる。内面は白色の皮膜におおわれ、その下は黒色化して剥離が著しい。このほか3個体分の十能の破片と火鉢類の口縁片が2個体分見られたが、いずれも軟質土師質であり、上述の分を含め本遺構では瓦質は見られないという特徴がある。

焼塩壺(94, 95) 94はI類1dに分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。胎土に雲母の細粒を含む。上面が圧迫されたようにへこんでおり、下面がさがっている。下面の周縁部には粗い布目が見られるが、中央部には見られない。95はO類に分類される蓋。上面は剥落が著しい。白色の強い肌色を呈し、砂粒を多く雲母をわずかに含む。下面はナデられ平滑である。蓋はこのほかI類2に属する破片が1個体分見られ、身はII類の小片が3およびIII類の小片が1見られた。遺構の規模や陶磁器をはじめとする遺物の量の割りには、焼塩壺の出土が少ない。

Y34-5 (IV-147図) 磁器1は染付輪剝皿でJB-2-1に分類される。胎土、呉須の発色は悪い。

陶器(2, 3) 2は刷毛目の蓋物で、TB-13-bである。高台裏も施釉される。3はTE-29である。縁帯の張り出しは強く、擋目はやや内側から引かれている。擋目上端のなでは弱く、揃えるまでは至っていない。外側面の削りも弱い。

第一節 陶磁器・土器



Y35-4 (2)

Y36-2 (1)

IV-148 圖 Y35-4 (2)、Y36-2 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

Y35-4 (IV-147, 148, 201図) 磁器(1, 2, 9-11) 1は染付碗でJB-1-gに分類される。魚文はコンニャク判を使用している。2は染付小坏でJB-6-aに分類される。口縁部文様は摺絵した後にダミを充填している。銘は崩れた「大明年製」である。9はいわゆるくらわんか碗でJB-1-gである。10は色絵碗でJB-1-eである。内外面は染付と朱の上絵付を帯状に交互に描いている。11は染付碗でJB-1-gである。文様はコンニャク印で描かれている。

陶器(12, 13) 12は刷毛目の蓋でTB-14-aに分類される。高台状のつまみを有す。13はTE-29に分類される。摺目は11条でやや内側より引き上げられている。上端のナデは弱い。

焼塩壺(3-8) 3, 4はI類1bに分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。下面には細かい布目が見られる。3の上面にはスノコ状の圧痕が観察される。4は上面がナデられ、側面には指頭痕が連続する。5はI類2に分類される蓋。やや赤みを帯びた肌色を呈する。胎土にわずかに雲母の細粒を含む。上面は少々剥落しているが、6類1の刻印が捺されている。下面には粗い布目が見られる。6, 7はII類1b2に分類される身。3類1bの刻印をもつ。6と7とでは刻印の字体が異なる。6は立ち上がりのはっきりした大きめの口縁を持ち、内面には目の粗い刺し子のある布目が見られる。7は頸部の屈曲が鈍角をなし上端のつぶれたような口縁をもち、粗い布目の見られる内面をもつ。このほか同種の器形をもつと思われる破片が1点見られる。8はII類1cに分類される身。3類2の刻印をもち強い橙色を呈する。蓋受けの直下には5条の微隆起線が巡る。底部付近には、指頭痕が多く見られる。口縁は厚く、その上面はやや内側に傾斜する。内面の上から四分三付近まで細かい刺し子のある布目が見られ、その下は平滑である。底面外側は、粘土塊を詰めた後を拭うようにナデられている。このほか同種の器形・刻印をもつものが1点見られる。類例の稀な刻印である「御壺塩師 難波浄因」が捺された蓋、「泉州麻生」の模倣であるとされる「泉州磨生」が2点、「泉州麻生」と一緒に出土した点で、注目される遺構である。

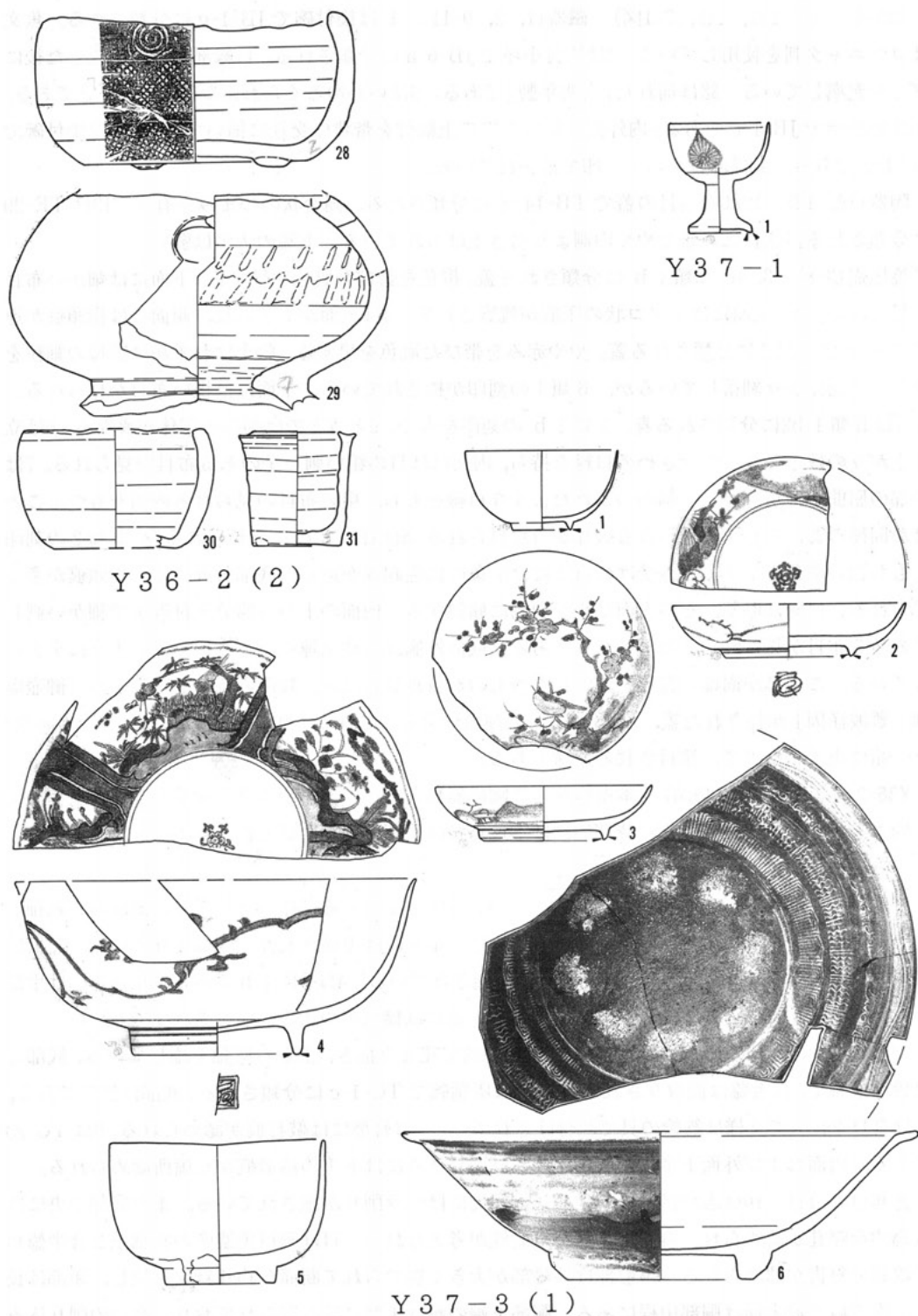
Y36-2 (IV-148, 149図) 本遺構からは陶磁器類のほか、土器、カワラケなど多種の遺物が比較的まとまって出土している。時期的には本地点ではV期-VI期に見られるものが混ざって出土している。

磁器(1-5) 1は青磁染付で他は染付である。1はJB-1-gである。作りはラフで、器面の青磁釉は釉際が肥厚し、全面に小気泡が浮んでいる。見込み中央には手描き五弁花が描かれている。2, 3はJB-1-fである。3は口唇部、高台外周に金箔が施されている。4はJB-1-hである。見込みには手描き五弁花が描かれている。5はJB-13-aである。蓋には橋状のつまみが貼付されている。

陶器(6-9) 6はTD-13で文様は白土と鉄絵の具で花文を描き、上から灰釉を施している。底部と口唇は無釉で、高台脇は面取りされている。7は灰釉碗でTC-1-cに分類される。底部は無釉である。8はTD-24-bで文様は鉄絵の具で絵付けされている。口唇部には敲打痕が認められる。9はTC-23である。内面および外面下半まで灰釉が施され、見込みにはトチの溶着痕が三箇所認められる。

徳利(10, 11) 10は志戸呂産の徳利で底部外周にはへう削りが施されている。また底部中央には人為的な穿孔が認められ、再利用された可能性が考えられる。11は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で線刻の釘書が認められる。口唇部は外縁部が大きく撫でられて断面が釣針状を呈し、頸部は長く、撫で肩で最大径は胴部中程にある。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られており、高台の削り込み

第一節 陶磁器・土器



IV-149 圖 Y36-2(2)、Y37-1、Y37-3(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

も深い。5合・1升徳利が80個体ほど、志戸呂産徳利が100個体ほどとそれぞれ大量に出土している。2合半徳利は10個体ほどが認められるに過ぎない。

灯火具 12は土師質の瓦燈受け部である。灯芯?の油痕は蓋受けの口唇内側に三箇所見られる。他に12とセットになるとと思われる瓦燈頭部片、志戸呂油皿、素焼き受付が出土している。

カワラケ(16-26) 16, 17には灯芯油痕の付着はないが、16の内面全体に煤が付着する。左回転の糸切り底である。ただし16は「離し糸切り」による。18, 19の口径11.8cm。ともに左回転の糸切り底である。油痕は18が口唇の二箇所に、19は口唇を全周する。20-23の口径7.2-7.9cm。20の底部には焼成後の穿孔が認められる。油痕は20にはないが、21は口唇を半周し内外面とも底部にまで及ぶ。21-24には灯芯油痕の付着するものはない。25は墨書のあるカワラケである。口縁内側に「いのめ」?, 底部に「中」の字がある。油痕の付着はない。20-25まで左回転糸切り底である。26は上製である。底面へラケズリ調整。器壁が薄く、上製のなかでも古い形態のものである。

カワラケは全部で39点の出土である。出土比率の30%。図示したものを含め上製のカワラケ 4点、それ以外は左回転の糸切り底のカワラケである。うち底径のわかるもの21点。17点は3.6-4.5cmの範囲内である。すなわち口径二寸五分前後に集中する。この時期以降小型の製品が多くなり、17-19のような四寸前後のカワラケはあまり目立たなくなる傾向にある。

焙烙(13-15) 蓋のみを図示した。すべてつまみを欠く。13, 14の裏面全体に煤が付着するが、15にはない。蓋は他にもう1点出土している。焙烙は底部片 2点、口縁片 4点の出土である。口縁片は E22-1 出土のものに似る。

土器(27-30) 27は1類 a ロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は横のミガキが施され、内面は指頭による押圧の上がナデられている。底面外側にはチゲレ目が見られる。口縁部内側に煤が付着する。28は1類 a イに分類される硬質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。口縁外面下に沈線が巡りその上には同心円状の文様が、沈線の下には斜格子の文様がおそらくはローラーによって施されその上面がミガかれている。底面にはコビキ痕が見られる。口唇部は敲打痕が連続する。口縁部内側に煤が付着する。29は軟質瓦質の輪積み成形の製品で、上下とも欠損しており、全体の姿は明らかでない。体部外面は横のミガキが施され、光沢をもつ。内面は中ほどに工具の押し引きが横に施されその上面がナデられている。通気孔状の孔の存在から、行火の一種とも思われるが、煤の付着など見られず、用途性格などは明らかでない。30は軟質土師質の火入れ。ロクロ成形である。体部外面には横の念入りのミガキが施され平滑である。底部はややあげ底となるようである。口唇部には敲打痕が連続する。口縁内面にはわずかに煤の付着が見られる。このほか 2個体分の土師質火鉢類の口縁部片が見られる。

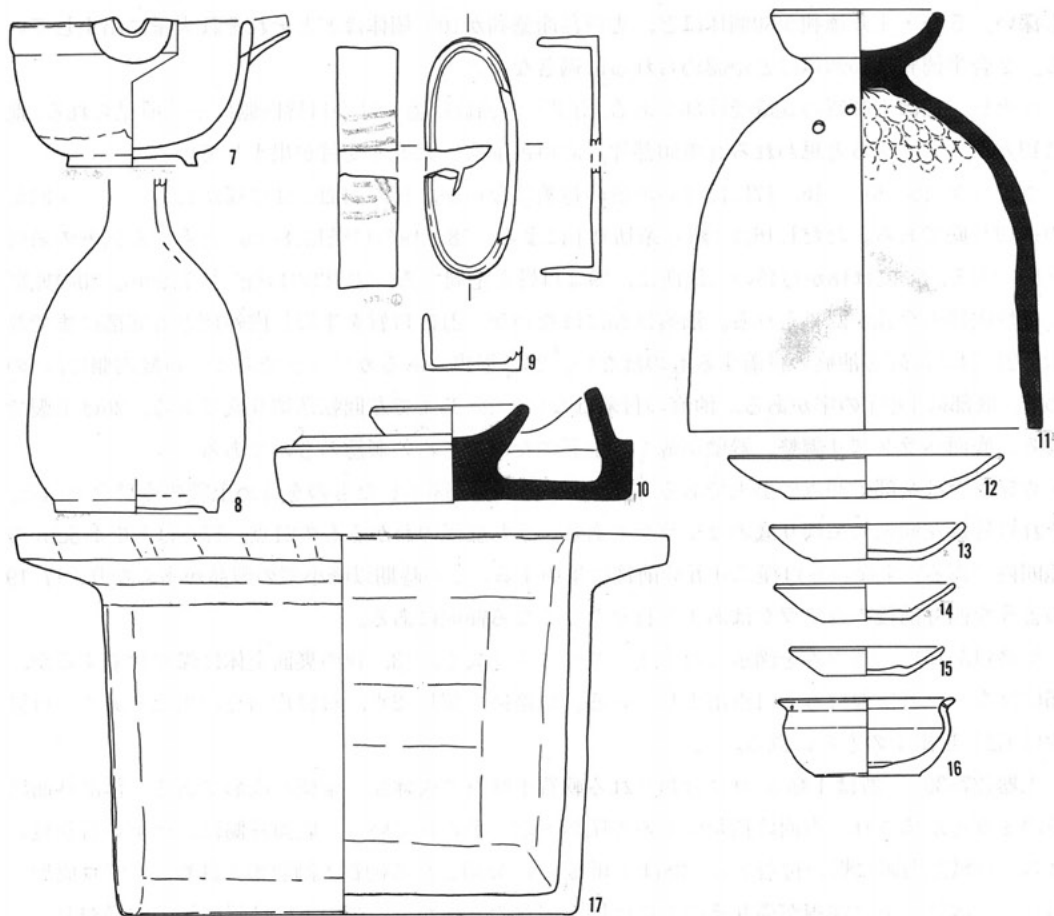
焼塩壺 31はⅢ類 b に分類される身。刻印はない。橙色を帯びた褐色を呈する。底部はわずかに絞られている。底面には左回転の糸切り痕が見られる。このほかⅠ類 2 の蓋およびⅢ類の身の小片が見られる。

Y37-1 (IV-149図) 磁器 1 は JB-8 である。文様はコンニャク判で絵付けされている。

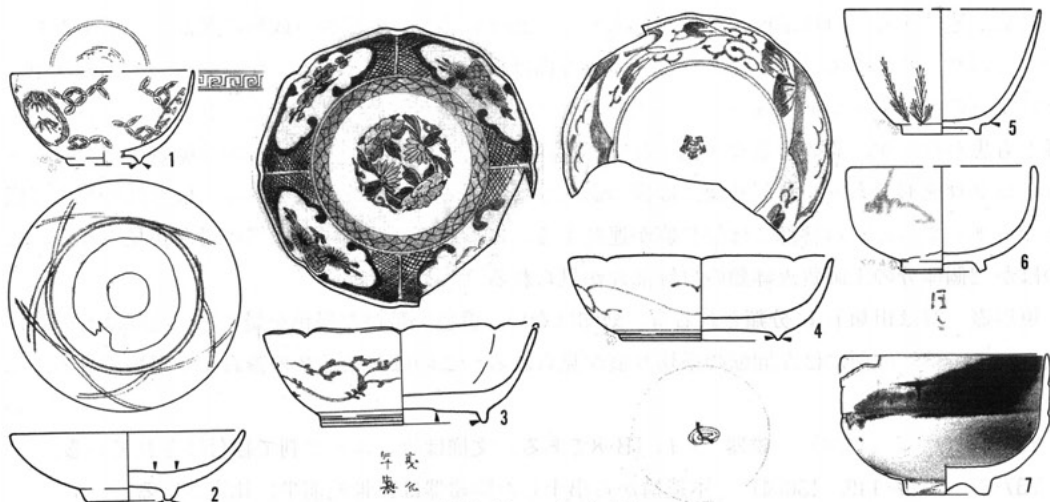
Y37-3 (IV-149, 150図) 本遺構から出土した陶磁器は18世紀前半に比定される。

磁器(1-4) 1は白磁碗で JB-1-e である。2は染付で JB-2-g に分類される。見込み中央にはコン

第一節 陶磁器・土器



Y37-3 (2)



年
或
集
化

Y37-4 (1)

IV-150 図 Y37-3 (2)、Y37-4 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

ニャク判五弁花が記されている。胎土、呉須の発色は悪い。3はJB-2-eでハリ支えが一箇所認められる。漆継ぎの痕跡が認められる。4はJB-5である。見込みは手描き五弁花、高台裏には二重角枠内渦福銘が描かれている。

陶器(5-7, 9) 5は灰釉碗でTC-1-cである。底部無釉である。6は三島手の鉢でTB-5-bに分類される。象嵌はラフで、型押しは弱く、白土の拭き取りも丁寧ではない。見込みには砂胎土目の痕跡である砂が八箇所付着しており、高台脇は面取りされている。体部下半には鉄釉が化粧掛けされている。7はTC-23である。内面、外面上半に灰釉が施され、見込みには三箇所のトチの溶着痕が認められる。9はTC-25である。器面両側には鉄絵の具で文様が描かれている。

徳利 8は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に薄い化粧掛けが施されベタ刻の釘書が認められる。口唇部を欠くが頸部は長く撫で肩で、最大径は胴下部にある。高台はほぼ垂直に深くしっかりと削り込まれている。5合・1升徳利が20個体ほど出土しているほか、2合半徳利、志戸呂産徳利も少量が認められる。

灯火具(10, 11) 10は瓦質の瓦燈受け部である。灯芯の油痕は内部の油皿の口唇に一箇所認められる。油皿の形態がいくぶん他とは異なり、脚が短いのが特徴である。11は10とセットになる瓦燈頭部である。10と同じく瓦質である。灯芯の油痕が頂部油皿の口唇に認められる。上方には空気取り入れ用の孔が二つ穿たれる。また内面上部には成形の際の指頭による圧痕が認められる。10とともに銀彩が施されていた可能性がある。他に灯火具の出土はない。

カワラケ(12-15) 12の口径14.8cm。底径が大きく器高の低いカワラケである。13-15の口径8.8-10.5cm。13には銀彩が施される。4点とも左回転の糸切り底である。灯芯の油痕は12になく、13、15は口唇を全周し、14には疎らに付着している。他にカワラケは11点の出土している。底径のわかるものは2点しかなく、2点とも12に類似した形態である。

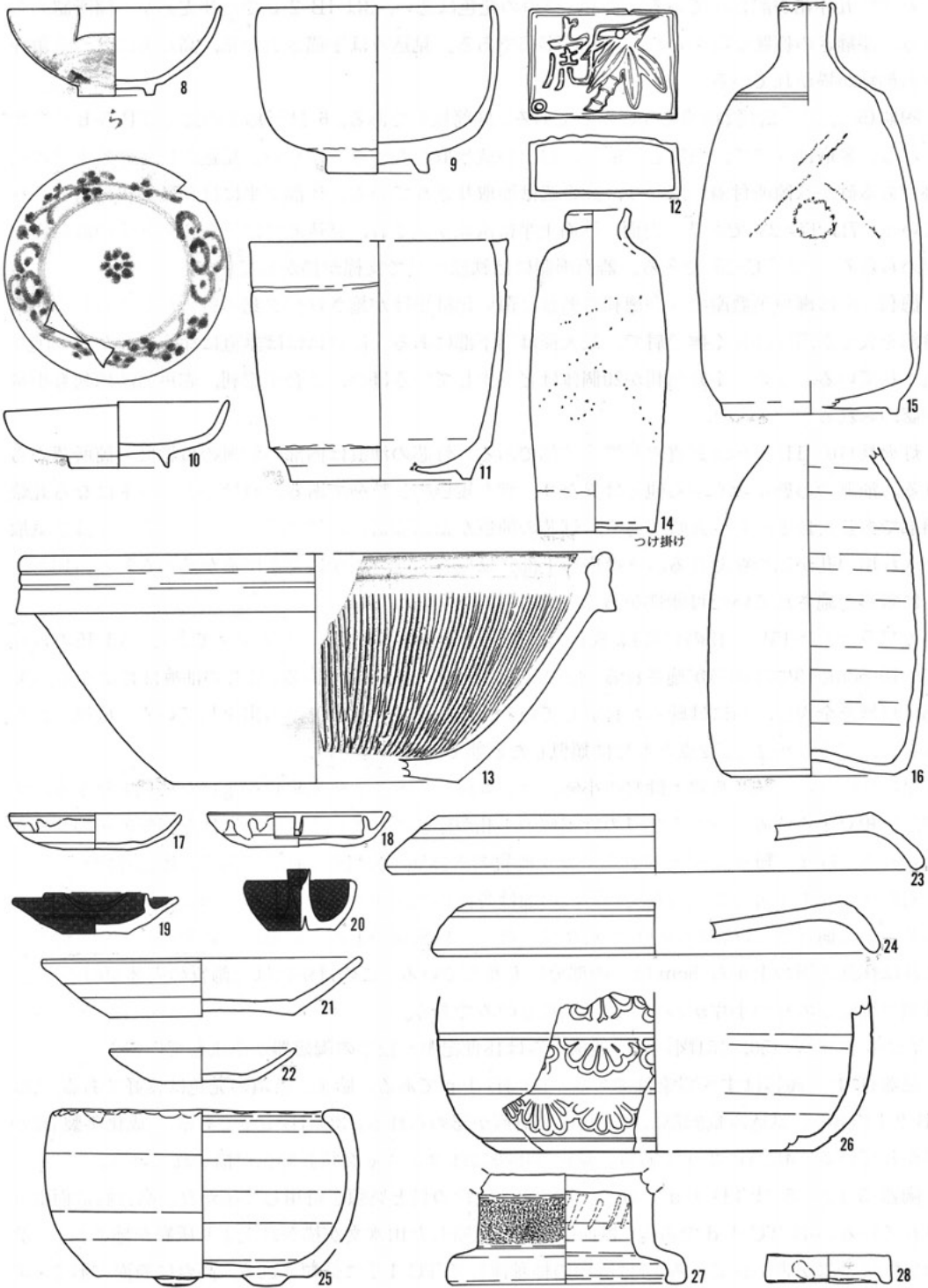
土器(16, 17) 16は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。やや橙色を帯びた褐色を呈する。頸部には相対する位置に2および1の計3個の小孔が穿孔されている。底面には左回転の糸切り痕が見られる。17はI類dに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。体部外面は横および縦のケズリで平滑に整えられている。内面は各面の周囲がナデられ、その内側には横のナデが見られる。底面外側には細かい砂粒の痕が見られる。口縁部の上面と側面には銀彩が施されており、これは体部内面の上から5cmほどの部分にも及んでいる。このほかには土師質の火鉢類の小片と、II類の焼塩壺の身の小片がわずかに見られるのみである。

Y37-4 (IV-150, 151図) 本遺構からは18世紀中～後半の陶磁器が出土している。

磁器(1-4) 磁器はすべて染付である。1はJB-1-pである。胎土、呉須の発色は良好である。2はJB-2-1である。見込み輪剝部には輪状の溶着痕が認められる。3はJB-2-jである。「成化年製」銘が描かれている。4はJB-2-gである。見込み中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。

陶器(5-12) 5はTD-1-dである。若杉文は鉄絵の具と呉須を併用して描かれ、高台脇は面取りされている。6はTC-1-dである。器面には呉須で略した山水文が描かれ上より灰釉が施される。高台裏には墨書が書かれている。7は灰釉の柿釉流しでTC-1-fに分類される。高台は断面方形で、渦巻高台風に削られている。8は刷毛目碗でTC-1-sに分類される。高台裏には墨書が書かれている。

第一節 陶磁器・土器



IV-151図 Y37-4出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

9は灰釉碗でTC-1-cである。底部は無釉である。10は太白手の皿で呉須で絵付けされている。畳付以外全釉している。TC-2-hに分類される。11はTC-26-aで柿釉が施されている。底部中央は穿孔され、植木鉢として二次利用していたと考えられる。12は灰釉の水滴でTC-19である。型作りで、文様は笹文と「虎」の字を浮文にしている。13はTE-29である。播目は8条1単位で、その上端はなで揃えられている。縁帯も尖っている。

徳利(14-16) 14は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。15は瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利で線刻の釘書が認められる。口唇部は帯状に小さく折り返され、肩部は張りはじめて寸胴に近付いており、高台の削り込みは浅く雑になっている。16は志戸呂産の徳利で底部の外周にはへら削りが施されている。5合・1升徳利が160個体ほど、志戸呂産徳利が80個体ほどとそれぞれ大量に出土している。2合半徳利は15個体ほどあるに過ぎない。瀬戸美濃産鉄釉系徳利はごく僅かである。

灯火具(17-20) 17, 18は鉄釉系で、17は油皿、18は受付である。ともに完形であり、灯芯油痕の付着もない。底面にへラケズリ調整が施される。19, 20は透明釉の受付、乗燭である。灯芯油痕は20の灯心立の先端のみに付着する。2点とも左回転糸切り底である。なお20の底面には、使用時の固定のためとされる断面三角形の刺突による凹みがある。灯火具は以上4点のみの出土であるが、鉄釉と透明釉のみで構成される点が注目される。

カワラケ(21, 22) 21, 22はともに左回転の糸切り底。ただし21は「離し糸切り」による。22は銀彩が施されていた可能性があり、流れ込みによるものかもしれない。22のみ灯芯油痕が全周する。21にはない。カワラケは9点の出土である。6点は二寸五分前後のカワラケである。出土点数が少なく、小型のカワラケを主に大型のカワラケを伴う点は新しい様相を示している。

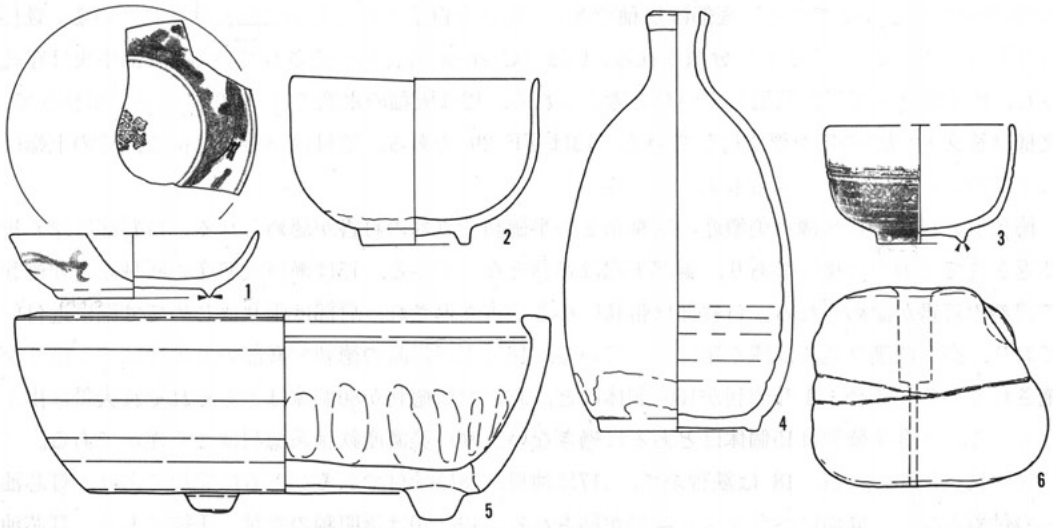
焙烙(23, 24) 23, 24は蓋である。ともにつまみを欠く。裏面に煤は付着していない。蓋は他にもう1点出土している。焙烙は底部片2点、口縁片1点の出土である。口縁片はE22-1出土のものに類似しており、蓋よりも古く位置付けられるであろう。

土器(25-27) 25は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面には横のケズリが見られ平滑で表面に銀彩が施されている。底面にはムシロ状の圧痕が見られる。口唇部には敲打痕が連続し、口縁内側にはわずかに煤の付着が見られる。26は1類aイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。上半を欠損する。体部外面には沈線とその間に半分の菊花をかたどった文様が陰刻されその上面がミガかかっている。底面には砂粒の痕がわずかに見られる。内面底部付近には火箸によると思われる縦の擦痕が見られる。27は硬質瓦質のロクロ成形の製品。全体の姿は明らかでないが、底部の台の部分の破片と思われる。外面には粗いチリメン状の凹凸が見られる。外側に張りだした接地部分の外面はミガかかされており、内面には主体部との接合の際の痕であろう、工具による押し引きが横に見られる。用途その他不明である。このほかには土師質および瓦質の火鉢類の小片が2個体、土師質の植木鉢が1個体見られる。

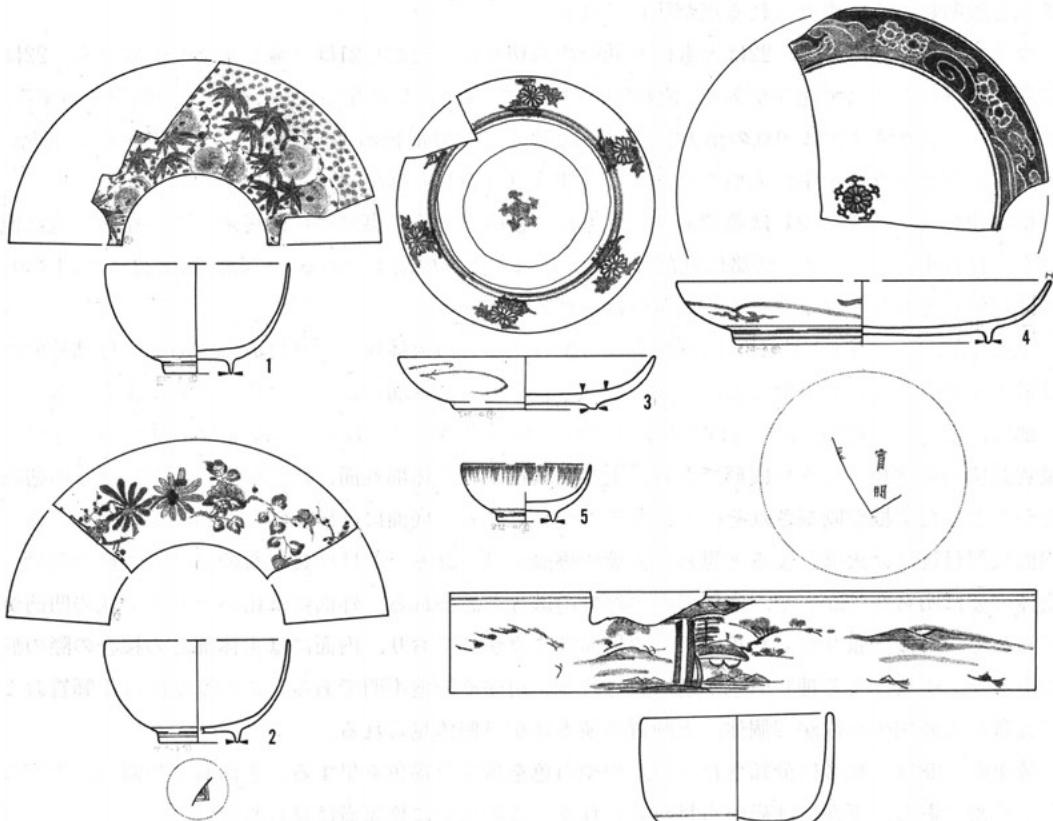
焼塩壺 28はイ類2に分類される蓋。やや白色を帯びた褐色を呈する。上面および側面はナデられ、平滑である。下面には粗い布目が見られる。このほかに焼塩壺は見られない。

Z34-4 (IV-152図) 磁器 1はJB-2-gである。見込み中央にはコンニャク判五弁花が描かれ

第一節 陶磁器・土器



Z 3 4 - 4



Z 3 5 - 4 (1)

IV-152圖 Z34-4、Z35-4(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

ている。低火度焼成のため呉須の発色、上釉の透明感は極めて悪い。胎土は灰褐色を呈している。

陶器(2, 3) 2は灰釉碗でTC-1-cに分類される。底部は無釉である。二次焼成を受けている。3はいわゆる腰鏝碗でTC-1-uに分類される。藤澤氏の分類では第4～5型式あたりに相当するであろう。二次焼成を受けている。

徳利 4は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に化粧掛けが施され、釘書は認められるものの胴部を破損しているため判読はできない。口唇部は小さく帯状に折り返されて頸部はまだ長く、撫で肩で最大径は胴部中程にある。高台は深く削り込まれてやや内傾する。ほかには2合半徳利、5合・1升徳利、それに志戸呂産徳利がごく少量認められるのみである。

土器(5, 6) 5は1類 a ロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。底面にはチヂレ目が見られ、わずかに砂粒の痕も見られる。体部外面は横にケズられ、平滑で表面に赤彩が見られる。内面には指頭による押圧が連続し、その上を丁寧にナデである。6は焼けた粘土塊というべきものである。壁土に似たスサの入った土でできたやや下膨れの不整形の塊の周囲に、針金を巻いたような凹が巡っている。上面から直径2cm弱の円筒形の孔が中央まで達し、そこから直径4mmほどの細い孔が反対側まで貫通している。跳ね釣瓶の錘などとして布などに包まれ、針金で巻かれ棹の末端に釘などで留められた粘土の塊が焼けたものであるかもしれない。このほかに土師質の火鉢類の小片が少々見られる。

Z35-4 (IV-152, 153, 201図) 磁器(1-5, 8) 磁器は8の他すべて染付である。1はJB-1-gである。コンニャク判と手描きを併用している。2はJB-1-eである。高台裏には二重角棹内渦福と思われる銘が認められる。3はJB-2-mである。見込み文様、中央の五弁花にはコンニャク判が用いられている。4はJB-2-eである。見込み中央にはコンニャク判五弁花、主文様は墨弾きの技法が用いられている。銘は「宣明年製」と思われ、ハリ支えが認められる。5は小坏でJB-6-aである。8は白磁壺でJB-15である。内外面に釉が施されている。

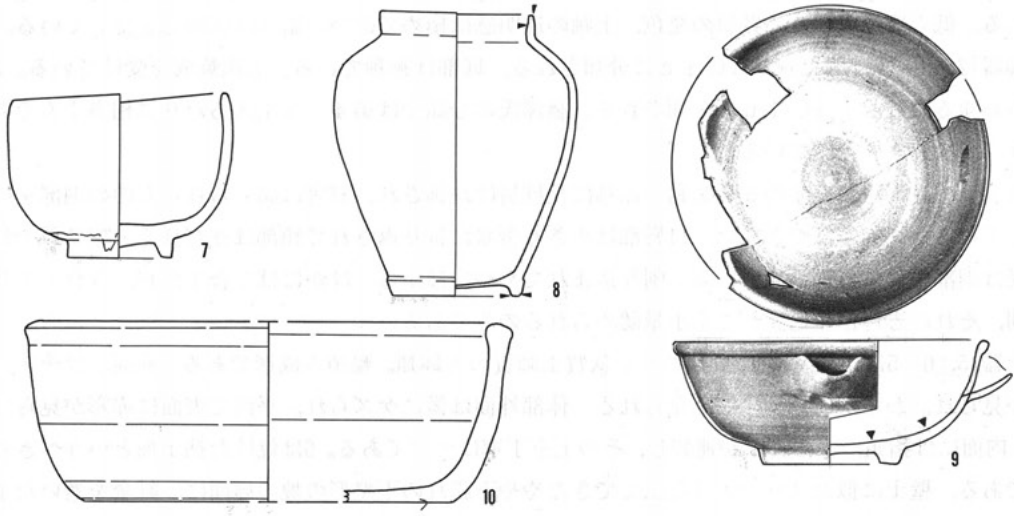
陶器(6, 7, 9) 6は陶胎染付でTB-1-fに分類される。7は灰釉碗でTC-1-cで、底部は無釉である。9は刷毛目の片口鉢で、TB-23に分類される。高台は幅広で蛇ノ目高台風に作られており、脇は面取りされている。見込みは蛇の目釉剥ぎがされ、輪割部には墨書の痕跡が認められる。

土器(10-12) 10, 11は1類 a ロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。いずれも体部外面は横にケズられて平滑で赤彩が施されている。10は直立気味の体部をもつ。内面は丁寧にナデられている。底面外側には粗いムシロ状の圧痕が見られる。11の内面は指頭による圧痕が連続し軽くナデられている。底面にはチヂレ目が見られる。口唇部には敲打痕が連続する。12は1類 b イに分類される軟質土師質の大型の火鉢類。輪積み成形である。体部外面上方の相対する位置に一对の把手を持つ。外面は丁寧にケズられ平滑である。内面も丁寧にナデられている。底面にはチヂレ目が見られる。このほか土師質の火鉢類の小片が4個体分見られる。

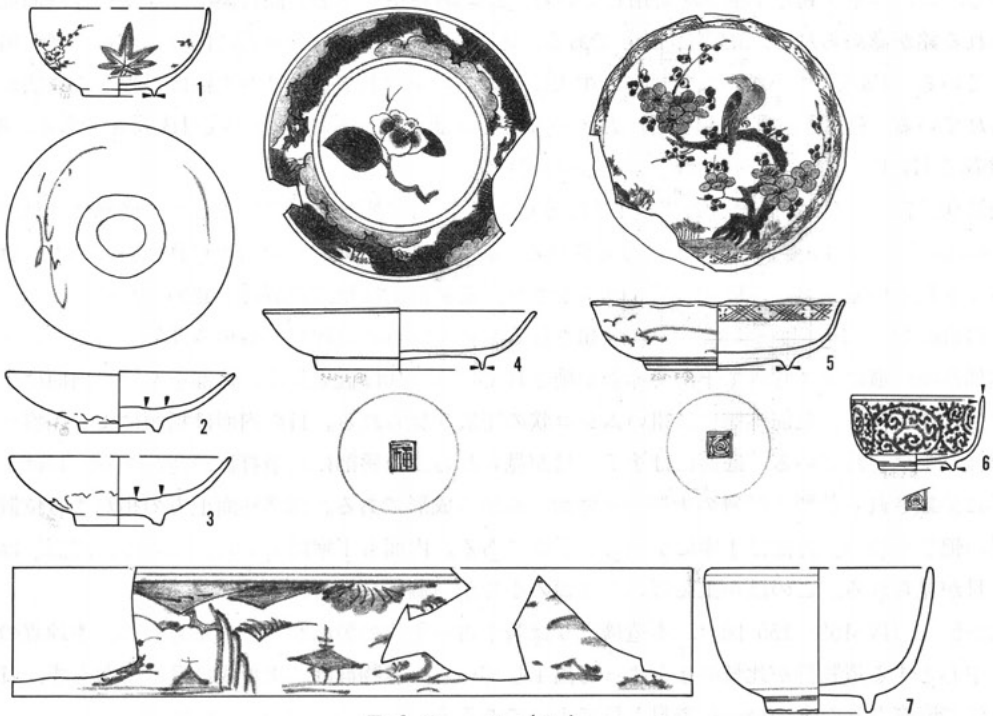
Z35-5 (IV-153～155 図) 本遺構よりは若干古い年代の製品が見られるものの、本地点のV期を中心とする遺物群が比較的まとまって出土している。遺物群は二次焼成は受けておらず、日常の生活で廃棄されたものの一括資料と見てよいであろう。

磁器(1, 2, 4-6) 磁器はすべて染付である。1はJB-1-fである。2はJB-2-kである。輪割、露

第一節 陶磁器・土器



Z35-4 (2)



Z35-5 (1)

IV-153 图 Z35-4(2)、Z35-5(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

胎部は赤褐色を呈し、呉須の発色は悪い。4は JB-2-c である。高台裏には角椀内角福銘が描かれ、ハリ支えが一箇所認められる。5は輪花皿で、JB-2-e に分類される。高台裏には二重角椀内渦福銘が描かれている。6は JB-13-a である。二重角椀内渦福銘が描かれている。

陶器(3, 7-13) 3は TB-2-a である。見込みは銅緑釉、外面は灰釉が施される。7は陶胎染付碗で TB-1-f に分類される。8は刷毛目碗で TB-1-d である。9は TD-1-c である。内面、外面体部下端までは灰釉が施される。高台脇は面取りされている。10, 11は灰釉碗で TC-1-c に分類される。ともに底部は無釉である。12は型皿で TC-2-i に分類される。底部は無釉である。13は TE-29 である。摺目は12条で1単位で、各単位は若干間隙を有する。摺目の上端はなでて揃えられている。器面の削りは下半まで行なわれ、明瞭な痕跡が認められる。

徳利(14, 15) 14は志戸呂産の徳利で底部の外周にはへら削りが施されている。15は瀬戸美濃産の5合徳利で鉛釉に薄い化粧掛けが施され、ベタ刻の釘書が認められる。口唇部はちょうど鏢状と帯状の中間的な形態を示しており、頸部は長く撫で肩で最大径は胴部中程にある。高台は深く削り込まれてやや内傾する。ほかには2合半徳利が10個体弱、5合・1升徳利が30個体ほど、志戸呂産徳利が15個体ほどある。

灯火具 16は土師質の瓦燈受け部である。中央の油皿を欠く。明らかに銀彩が施される。灯火具はこれ1点のみの出土である。

カワラケ(18-21) 18は左? 回転の糸切り底。おそらく「離し糸切り」によると思われる。19も左回転の糸切り底。18, 19には灯芯油痕は特に認められないが、19の内外に煤が多量に付着する。20, 21はともに左回転の糸切り底。20には墨書「中」がある。21は耳皿である。ほぼ完形であり、長軸8cm。底部には穿孔があるが意識的な打ち欠きではない。注目すべきことにこの耳皿の口唇両端には灯芯油痕が付着する。耳皿は“箸置”として用途が限定されているが、灯火具として転用された例である。この耳皿の存在から通常のカワラケのなかにも本来の用途から離れ、灯火具として二次利用されたものがあったことが容易に想像される。

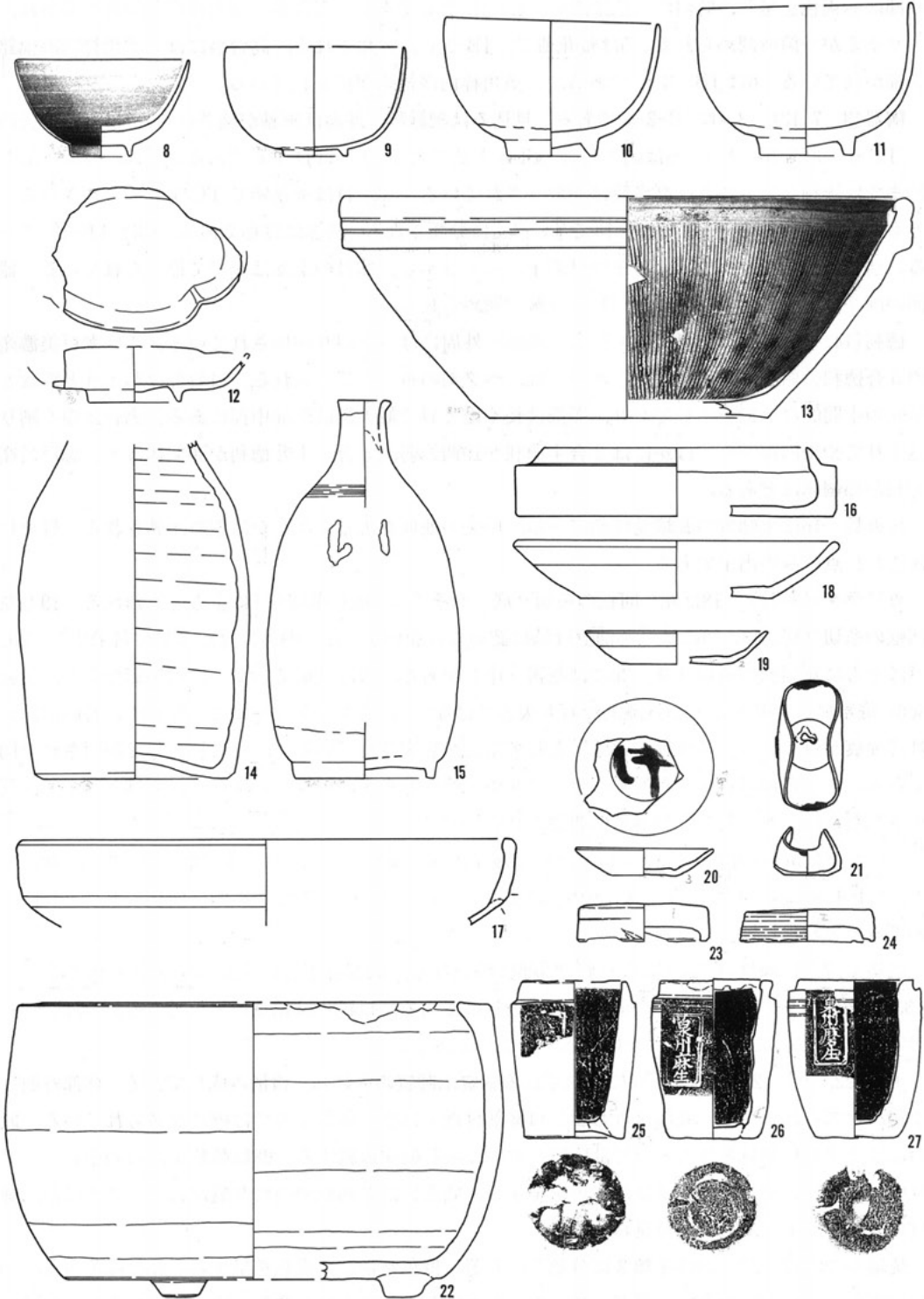
カワラケは52点の出土。出土比率の26.7%を占める。底径のわかるものは図示したものを含め11点。4.1-4.5cmが4点、6.1-8cmが6点の出土となる。口径二寸五分から四寸前後のカワラケに対応すると思われる。

焙烙 17の口縁は直立しケズリは屈曲部に施される。底部も下方に向かって大きく張り出す。F33-3の104, 107などに似る。底部片27点の確認である。口縁片は13点の出土である。2点は不明、他はF33-3の102-108のどれかに対応する破片である。

土器(22, 28) 22は1類a口に分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は丁寧にケズられている。底部付近および口縁部付近では横、体部下方では縦にケズられている。底面にはチヂレ目が見られる。口唇部内側を中心に敲打痕が連続する。28は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。やや赤色を帯びた褐色を呈する。底面には左回転の糸切り痕がある。このほか土師質の火鉢類の小片が3個体分見られる。

焼塩壺(23-27) 23, 24はイ類2に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。23では黄白色の部分が斑に、練り込みのように混ざっている。胎土にわずかに雲母を含む。側面はナデられ、24では

第一節 陶磁器・土器



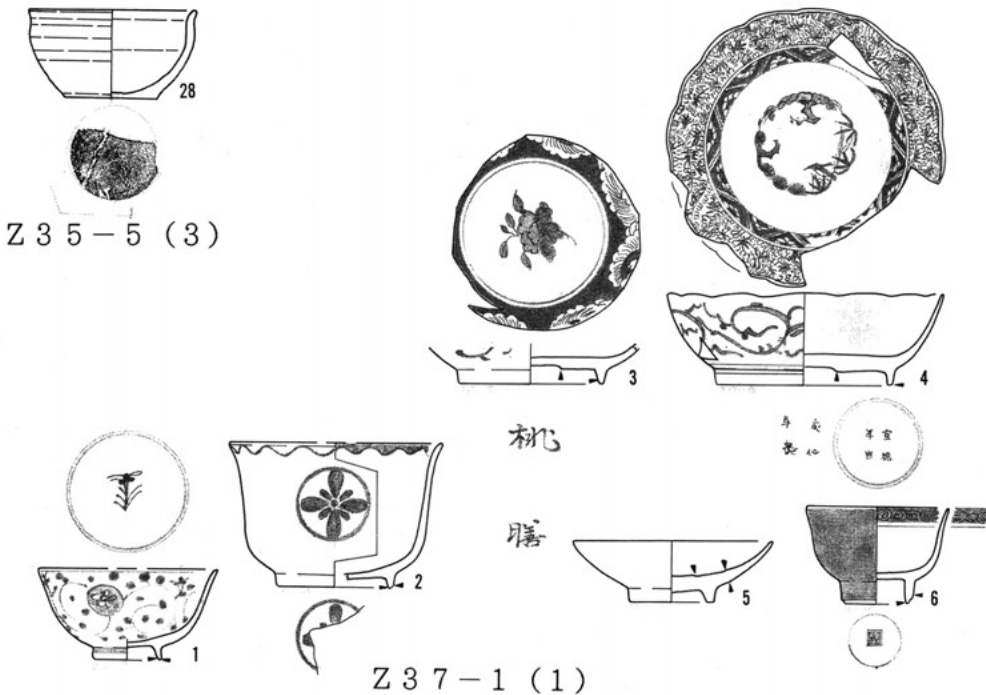
IV-154图 235-5出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

条線が入る。下面には粗い布目が見られる。25はII類2 a に分類される身。特異な形態で、刻印があるが、枠と字の一部が辛うじて見える程度で、判読はほとんど不可能である。胎土は黄白色の部分が斑に混ざっており、わずかに雲母を含む。23に対応する身であろう。底面は薄く、指頭により挟られている。内面下三分一ほどが平滑でその上には粗い布目が見られる。26はII類1 b2に分類される身。3類1 b の刻印をもつ。口唇部は大きくやや外反気味である。わずかに桃色を帯びた肌色を呈する。口縁下に 3-4条の条線が巡る。内面は刺し子のある粗い布目が見られる。27はII類1 c に分類される身。3類2 の刻印をもつ。強い橙色を呈する。蓋受けの直下には 5条の微隆起線が巡る。口縁は厚くその上面はやや内側に傾斜する。内面の上から四分三付近まで細かい刺し子のある布目が見られ、その下は平滑である。底面外側は粘土塊を詰めた後を拭うようにナデてあり、わずかにムシロ状の圧痕が見られる。このほかII類の小片が 2点見られる。

Z37-1 (IV-155, 156図) 本遺構からは幕末を中心とした新しい時期の遺物群が出土しているが、それ以前のものも少量混入している。遺物はいずれも二次焼成は受けていない。本地点ではVIII期に位置する。

磁器(1-7) 磁器は 5, 6の他は染付である。1はJC-1-dである。呉須は地呉須を用いており、濃い青に発色している。2はJB-1-nである。焼成がやや甘いせいか胎土は軟質な感じを受け、器面全体に貫入が認められる。3, 4はJB-2-iである。3は高台裏の輪剝部に意味は不明であるが「桃膳」の墨書が見られる。4は輪花にしており、高台裏には「成化年製」の銘が描かれている。5は白磁の輪剝皿で、JB-2-kに分類される。底部は無釉である。6はJC-6-bである。外面には瑠璃釉、内面及

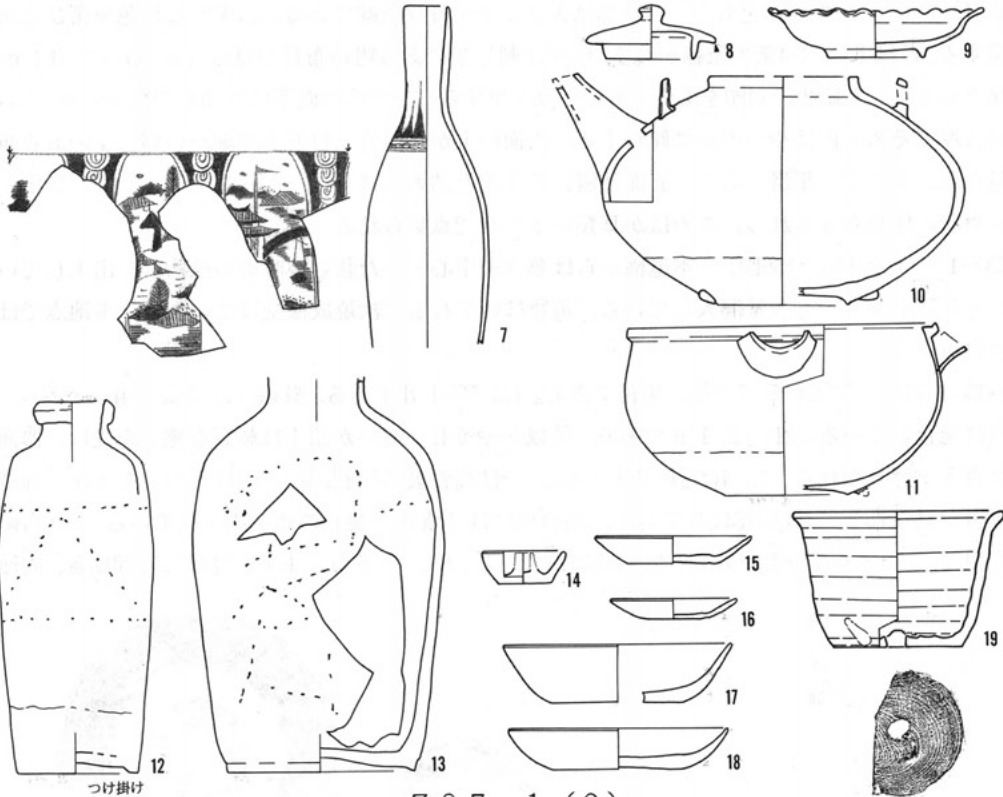


IV-155図 Z35-5(3)、Z37-1(1)出土遺物

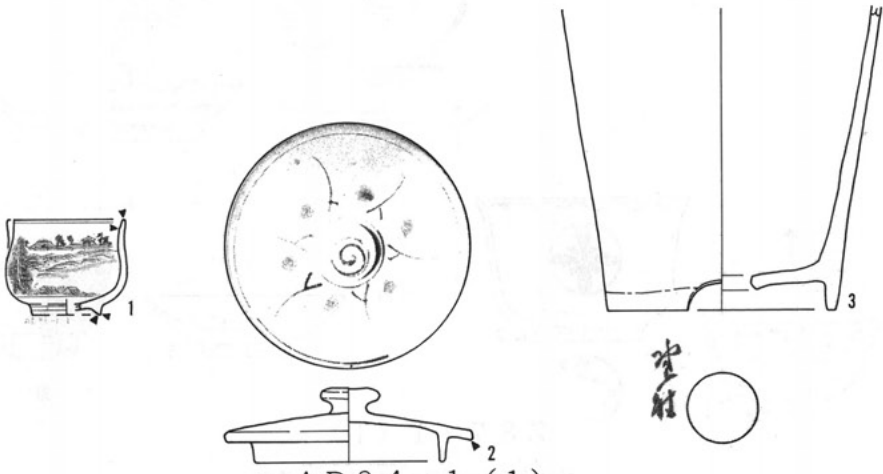
第一節 陶磁器・土器

び高台裏には透明釉が施されている。見込み帯文は毛彫りの上にダミをぬっている。7はいわゆる爛徳利で、呉須は輸入呉須を使用している。JC-10-d である。

陶器(8-11) 8はTZ-34-aの蓋である。9は灰釉ひだ皿でTC-2-nである。見込みには三箇所のピン痕が認められる。10はTZ-34-aである。把手は三角の山形で、底部には団子状の小粘土塊が3



Z 3 7 - 1 (2)



AD 3 4 - 1 (1)

第IV章 江戸時代の遺物

個貼付されている。底部にはススが付着している。11は灰釉の行平鍋で、TZ-33-bである。底部には団子状の小粘土塊が3個貼付され、ススが付着している。

徳利(12-13) 12は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。13は瀬戸美濃産の灰釉系1升徳利で点刻の釘書が認められる。肩部は張り最大径は胴上部にあり、高台の削り込みは浅く雑である。2合半徳利が50個体ほど、5合・1升徳利が150個体ほどと大量に出土している。志戸呂産徳利は小量が認められるのみである。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利も僅かながら見られる。

灯火具 14は素焼の乗燭である。中央の灯心立を欠く。左? 回転の糸切り底。他に透明釉受付の底部片が出土している。

カワラケ(15-18) 15, 16は左回転の糸切り底。17, 18は上製。底面はヘラケズリ調整が施される。灯芯油痕は15の口唇の両端に付着する。16-18にはない。2号組石のカワラケの項で説明したように17, 18はそれぞれ『貞丈雑記』のいう“手壺”, “平賀”の類に似る。ただし2号組石の220, 221に比べて特に口唇の器壁が薄くまた17の碗型の底面の調整の仕方などに違いもある。あるいは時期差を反映しているかもしれない。

カワラケは図示したものを含め19点の出土である。15, 16に似た小型のカワラケ7点、口径六寸前後の大型と考えられるもの2点、17に似た上製の碗型が3点、18の皿形が7点の出土である。碗・皿とも底部の調整や口縁形など、17, 18に似る。

土器 19は硬質瓦質の植木鉢。ロクロ成形である。底面には焼成前に設けられた孔がある。左回転の糸切り痕も見られる。このほか土師質の火鉢類の小片1, 瓦質の火鉢類の小片2, III類の焼塩壺の小片1が見られる。

AD34-1 (IV-156図) 磁器 1は蓋物でJB-13-dに属す。

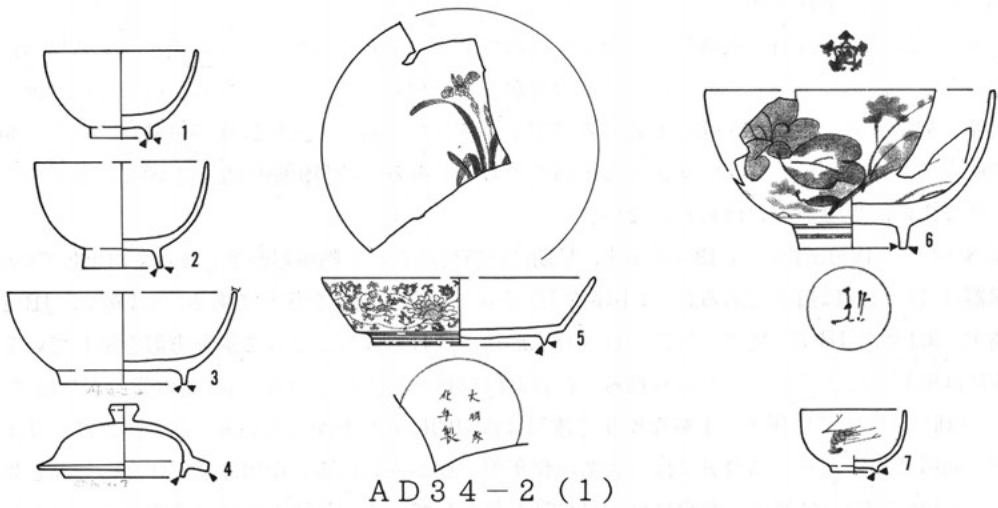
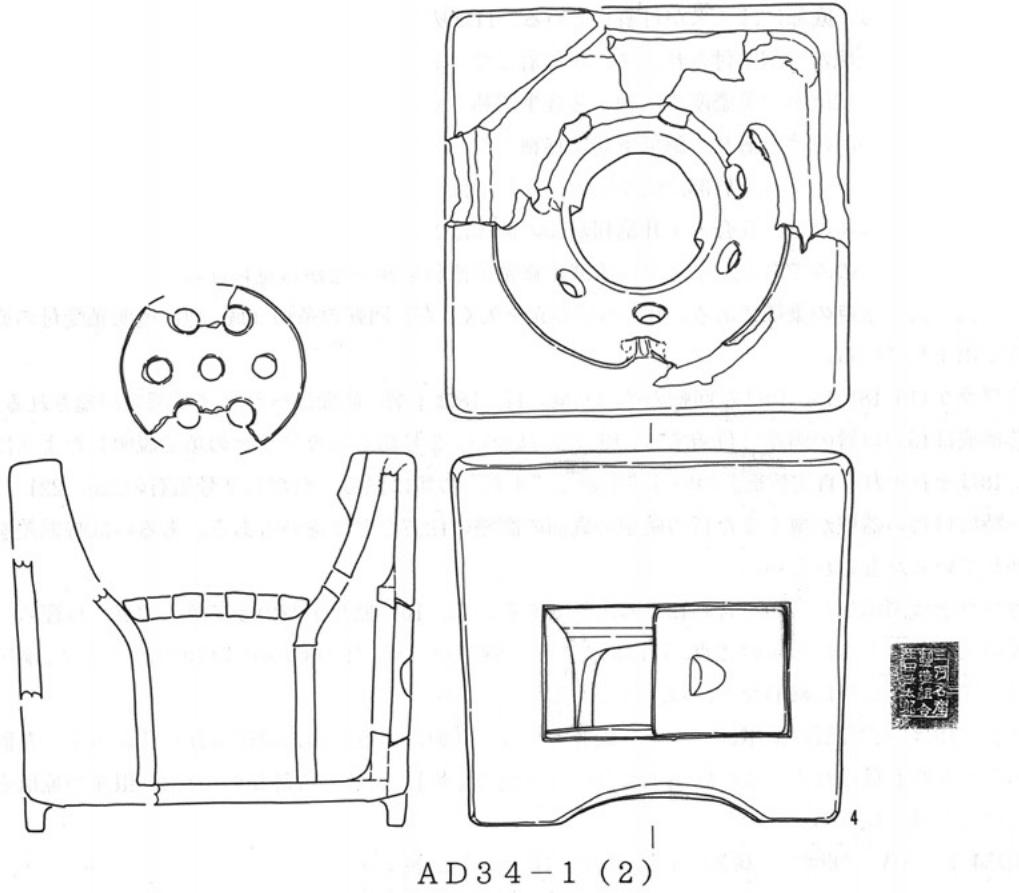
陶器(2, 3) 2は蓋でTZ-34-cに属す。白泥を施したうえに鉄絵の具と緑絵の具によって花卉状の文様を描いている。3は植木鉢でTZ-21に属す。胎土は燈白色を呈し、微砂粒を含む。長石釉が施されている。産地不明。

土器 4は硬質土師質の火鉢類。板組造り成形である。橙色を帯びた濃い褐色を呈する。体部は二重になっている。下半の正面には長方形の窓があり引戸がはめこまれている。引戸の裏には「三河名産 製造組合 生田政太郎」と読める刻印が捺されている。上面には煤が付着している。明治期の所産であり、刻印からわかるように三河産のものである。「鍋物焜炉」などと呼ばれるものである。他に土器、焼塩壺などは見られない。

AD34-2 (IV-157図) 18世紀前半, V期に位置付けられる陶磁器がまとまって出土している。

磁器(1-7) 1-4は白磁である。1は小坏でJB-6-aに属す。粗雑な作りである。2は碗で、JB-1-dに属す。3は鉢でJB-5に属す。体部はロクロ成形後の型打ち成形によって隅丸方形を呈している。内面には型打ちによる陽刻文がみられる。口唇には口鏽が施されている。4は壺の蓋でJB-15に属す。5は皿でJB-2-dに属す。丁寧な作りで体部は直線的に立ち上がっている。高台裏にはハリ支え痕が一箇所認められる。高台裏には「大明成化年製」銘がみられる。南川原窯ノ辻窯の製品と思われる。6は鉢でJB-5に属す。高台には多量の砂が付着している。見込みには二重圏線内にコンニャ

第一節 陶磁器・土器



IV-157圖 AD34-1(2)、AD34-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

ク判による五弁花が、高台裏には「大明年製」の崩し銘が描かれている。7は小坏でJB-6-aに属す。体部には海老が描かれている。

陶器(8-15) 8, 9は小坏でTC-6に属す。8の胎土は黄白色で底部以外に灰釉が掛けられている。9は灰褐色の胎土を呈し、底部以外に灰釉が施されている。体部には呉須絵がみられる。10, 12は京焼風の碗である。10はTB-1-bに属す。高台裏に「森弥下」銘の刻印が押されている。12は平碗でTB-1-cに属す。11は腰鏝碗でTC-1-uに属す。体上部から見込みにかけて灰釉がそれ以外に鉄釉が施されている。体部には平行沈線が巡るが、その上から灰釉に変わる。13はTD-1-iに属す。胎土は淡褐色である。見込みにはピン痕が認められる。体部には鉄絵の具と白泥によって文様が描かれている。14は水滴でTC-19に属す。型打ち成形によるもので雲型を呈している。上面には松が浮文によって描かれている。15は仏花器でTC-11に属す。体部はラッキョウ形を呈し口縁は朝顔状に開く。底部には糸切り痕が残る。釉は鉄釉と灰釉の掛け分けで、底部の釉は拭き取られている。底部には墨書がみられるが、判読できない。

AD35-1 (IV-158図) 磁器(1-3) 1-3は瀬戸・美濃系の磁器である。1は染付端反碗でJC-1-dに属す。高台脇は面取りされている。外面には花と文字が描かれている。2は小皿でJB-3-bに属す。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。口縁は相対する二辺を削り取っている。見込みには呉須によって達磨が描かれているが線は細くはっきりしている。3は青磁の植木鉢でJC-21に属す。釉は淡緑色を呈し底部、内面は無釉である。

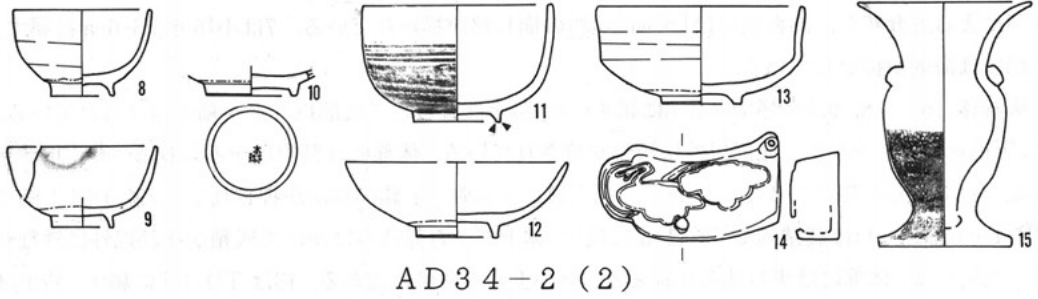
陶器 4は瓶でTZ-10に属す。産地は不明である。胎土は橙褐色を呈す。外面にはうのふ釉が施され、内面には鉄釉が施されている。

AD35-2 (IV-158~160 図) 染錦, 京焼系の色絵碗などV期を代表する遺物が多量に出土している。

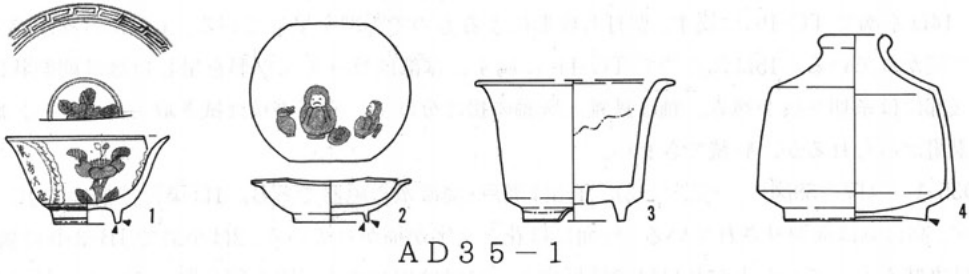
磁器(1-7) 1は染錦手の筒形碗でJB-1-kに属す。高台は外傾している。2は鉢でJB-5に属す。畳付には砂が多量に付着している。見込みには、二重圏線内にコンニャク判による五弁花が描かれている。高台裏には渦福銘がみられる。3, 4は白磁の紅皿でJB-17に属す。型打ち成形によって外面は菊花状を呈している。5は瓶でJB-10-aに属す。胎土は灰白色を呈す。畳付は両脇が面取りされており砂が付着している。6, 7は小坏でJB-6-aに属す。高台断面は逆三角形を呈している。

陶器(8-27) 8, 9は瀬戸・美濃系の碗である。8はせんじでTC-1-lに属す。底部以外に灰釉が施されている。9はTC-1-qに属し鏝釉が施されている。体上部には平行沈線が数条巡る。10-18は京焼系の碗である。10, 11, 13-16はTD-1-bに属す。10は黄白色の胎土で高台脇は面取りされている。11は灰白色の胎土で高台脇は面取りされている。14, 15は鉄絵碗である。胎土は14が灰白色, 15が黄白色を呈すが、ともに緻密である。高台脇は面取りされている。13, 16は色絵碗である。胎土はともに黄白色を呈し緻密である。高台は面取りされている。赤, 緑絵の具により草花を描いている。12, 18はTD-1-cに属す。体部は腰が張っている。体部には鉄絵の具と呉須により文様が描かれている。17は平碗でTD-1-hに属す。胎土は灰褐色を呈し緻密である。高台脇は面取りされている。見込みには上絵付けによって竹, 松が描かれているが、絵の具はほとんど剥げ落ちており色調は不明である。19は輪剝鉢でTC-5-cに属す。灰釉が施されているが、見込みが蛇ノ目状に釉剥ぎされ

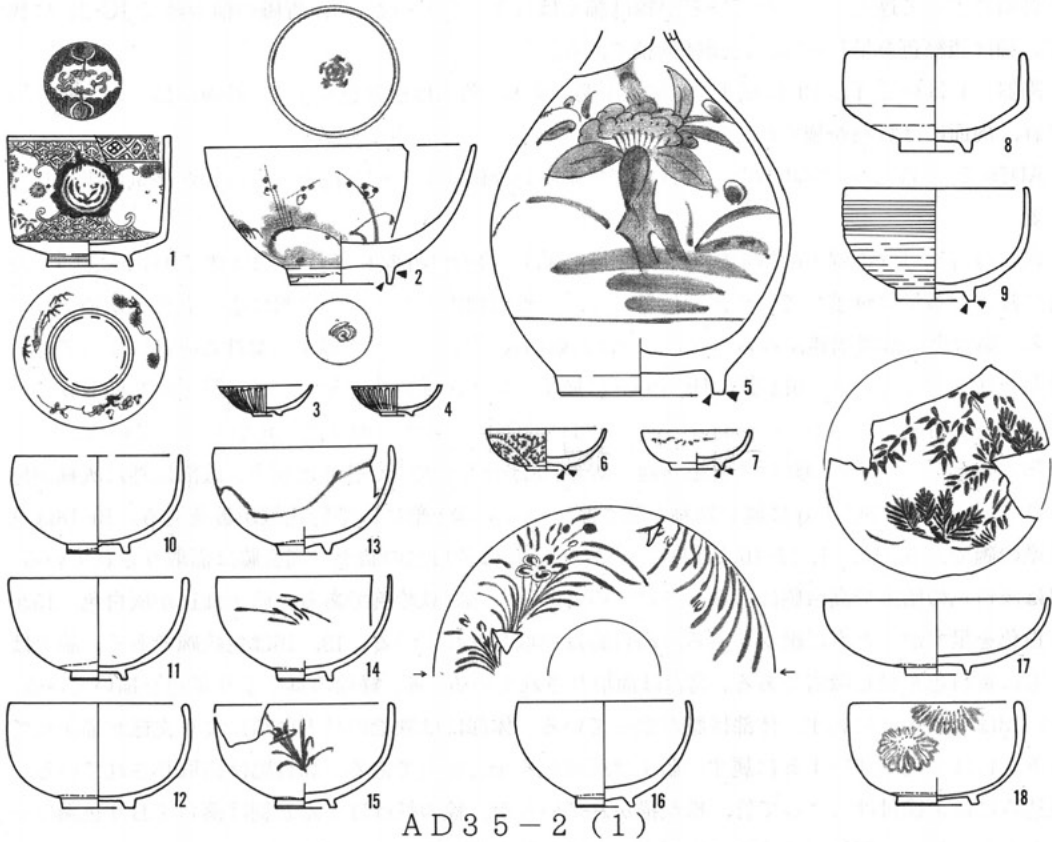
第一節 陶磁器・土器



AD34-2 (2)



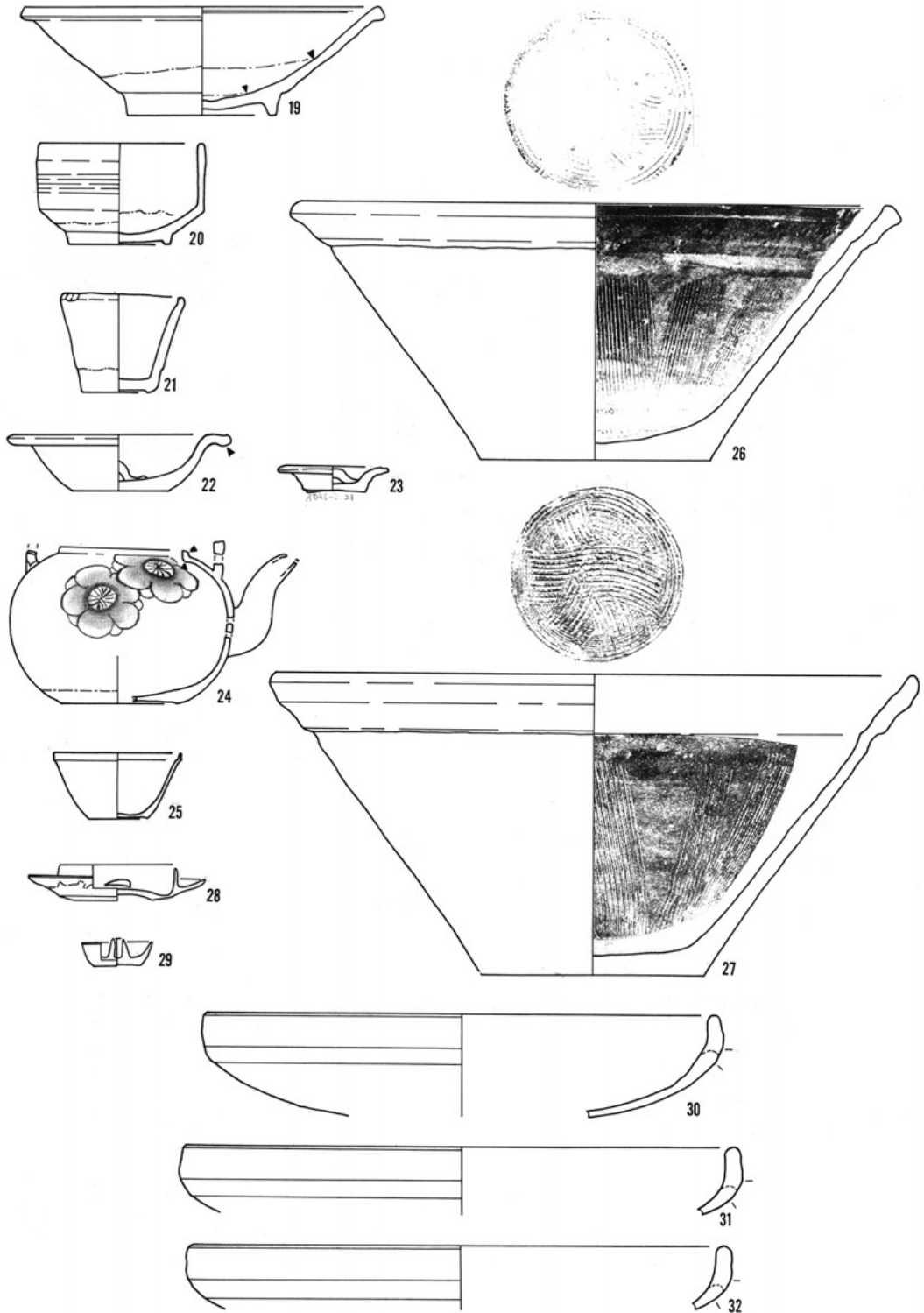
AD35-1



AD35-2 (1)

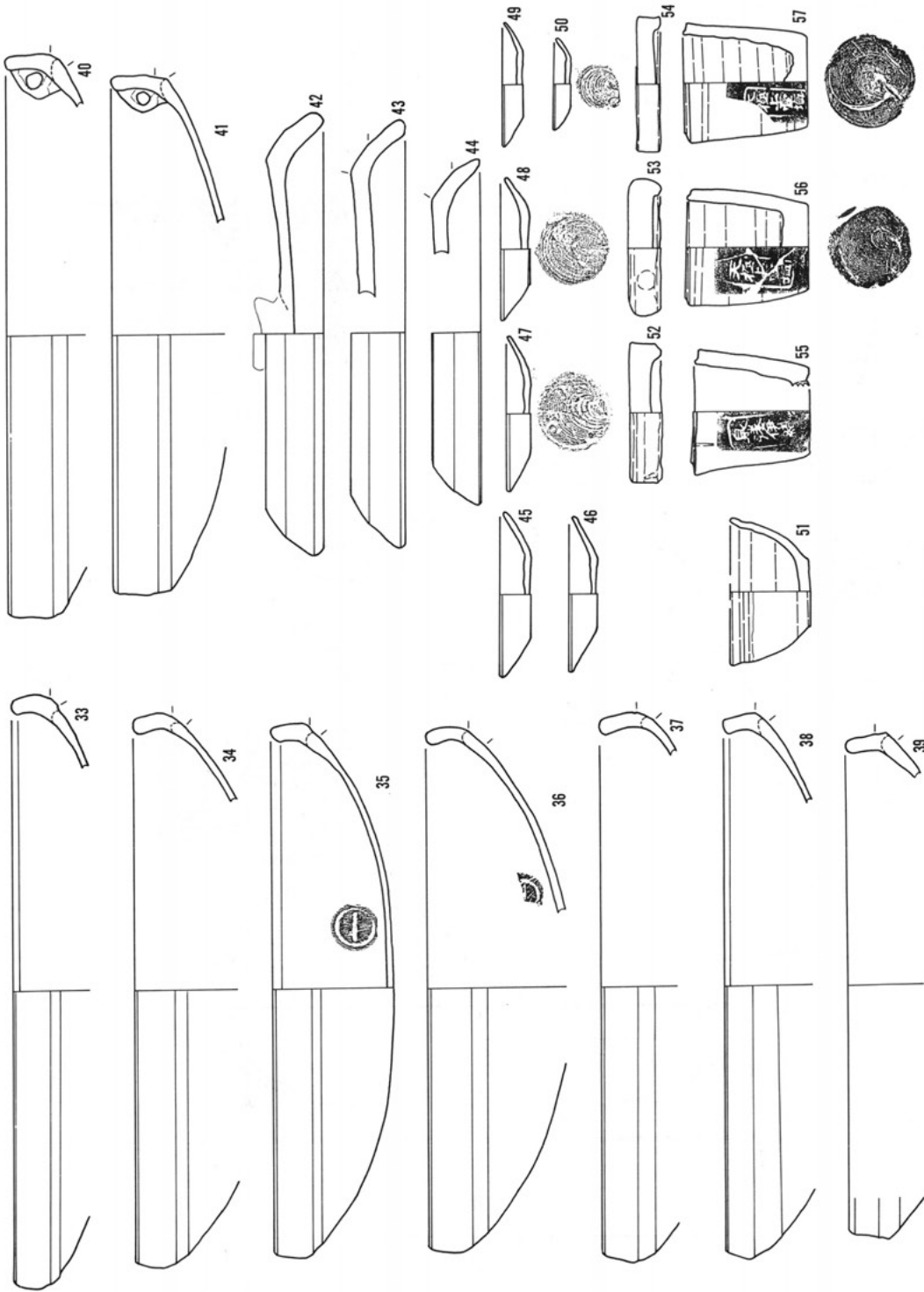
IV-158图 AD34-2(2)、AD35-1、AD35-2(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物



IV-159図 AD35-2出土遺物(2)

第一節 陶磁器・土器



IV-160区 AD35-2出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物

ている。20は香炉でTC-9に属す。体部には数条の沈線が巡っている。錆釉が掛けられている。21は小鉢でTC-5に属す。型打ち成形により口縁は二段角の方形を呈する。底部へ移行するにつれて丸味を帯び、底部は円形を呈しているが、ロクロを使用していないため歪んでいる。灰釉が施されている。22, 23は落とし蓋である。TC-14-aに属す。凹み内に橋状のつまみを有し、裏面には糸切り痕を残す。表面には灰釉が施されている。24は土瓶でTZ-34に属す。胎土は灰白色を呈し緻密である。注口部の穿孔は梅花状に六箇所を数える。体部には鉄絵の具、呉須、白泥によって花文が描かれている。25はTE-35に属す。薄手で丁寧な作りである。体部には火襷がみられる。26, 27は瀬戸・美濃系の播鉢でTC-29に属す。口縁は縁帯を呈し、2条の微隆帯を伴う。26では1単位15条の播目が施され、底部の播目は磨耗してほとんど残っていない。27では1単位11条の播目が施されている。底部と体部の境目を円形に施文することによって区画し、底部には放射状に施文されている。

灯火具(28, 29) 28は志戸呂受付。底面はヘラケズリ調整が施される。29は素焼秉燭。灯芯の油痕は灯心立の先端のみに認められる。底面の磨耗がはげしく不明であるが、おそらく左回転糸切り底。他に鉄釉油皿1点が出土している。

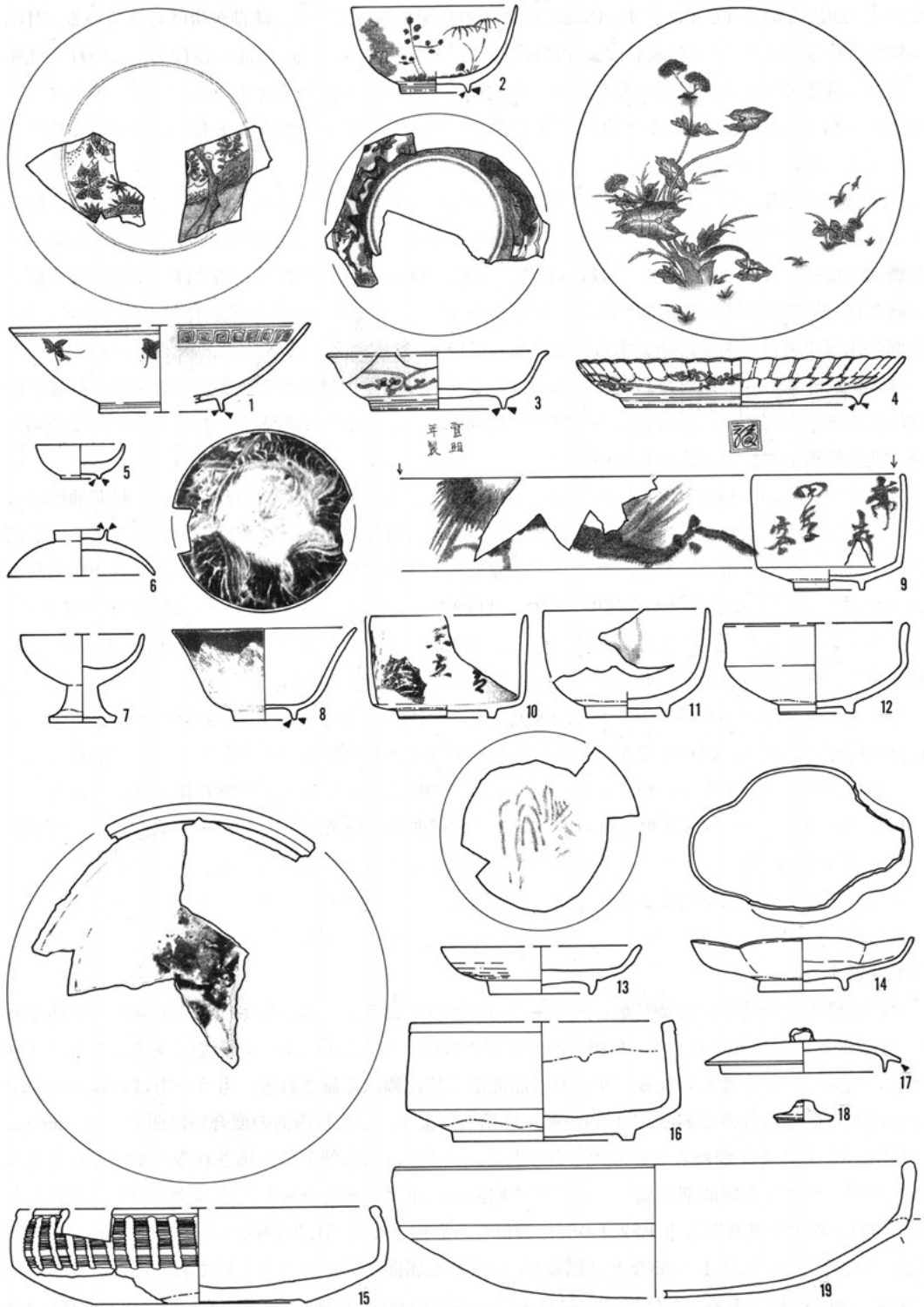
カワラケ(45-50) 45-47は三寸強の口径である。3点とも完形もしくはそれに近い。灯芯油痕は47が口唇を全周し、45が疎らに、46には付着しない。47には銀彩が施されていた可能性もある。器高が低く底面が丸みを帯びるなど、45, 46とは器形もわずかに異なっている。48には明らかに銀彩が施される。45-47に比べ器壁が全体的に厚く、口唇から見込みにかけてのラインはなだらかである。カワラケというよりこの時期以降顕著になる透明釉油皿の器形に近い。49, 50の器形も45, 46と同様である。灯芯油痕はない。45-50まですべて左回転糸切り底である。

カワラケは全部で26点の出土である。出土比率は8.1%。上製を1点含む。糸切り底の25点のうち15点の底径がわかり、13点までが3.6-4.5cmに集中する。口径は二寸五分から三寸一分前後となる。小型のカワラケが多く、出土比率も低い点はこの時期としてはやや特異な出土状況である。

焙烙(30-44) 30の口縁は短く直立し、ケズリが屈曲部に施される。E22-1の54に類似した形態である。ほぼ同時期ととらえてよいが、細かに観察すると違いも認められる。一つは器壁が厚い点であり、また観察の結果屈曲部下位のケズリが雑なことも示される。さらにもっとも大きな違いは内湾の度合いが緩く、直立に近い立ち上がりを示している点である。そしてこの様相は以下の焙烙にも共通する。

この遺構出土の焙烙は口縁形から大きく二つに区分される。一つは口縁がほぼ直立する形態であり、31, 32がそれに相当しよう。G26-1の34などの口縁がさらに短くなった形態である。あるいは直接的に発展したとも考えられる。ケズリは屈曲部下位に幅広く施される。もう一方は口縁がいくぶん内湾する形態のものである。33-39がそれに相当しよう。ただし内湾の度合いは弱く、35, 36のように31, 32とあまり変わらないものも含まれる。ケズリは屈曲部下位に施されるのがほとんどである。ただしケズリを屈曲部に施した例(37)や屈曲部の上下にそれを施し角を強調した?例(39)もある。39のこの角を削り取るとE22-1の52に類似した形態となる。31, 32同様ケズリは幅広い。33, 34はE22-1の50, 38もE22-1の55などに似るが、いずれも屈曲が弱くケズリも雑であることが観察されている。30と同様である。また35, 36には丸に一の字の刻印が認められている。35の刻印の径は2.4

第一節 陶磁器・土器



IV-161圖 AD37-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

cmであり、焙烙自体にはわずかの違いもあるがX34-2の15と同形である。36の刻印はそれに比べ、やや小さいようである。形状的には33がもっとも大型であり、口径35.4cm、他は30-33.2cmの間にある。さらに内耳をもつ焙烙も確認されている。40、41がそれである。口縁は厚くほぼ直立し、ケズリは40が屈曲部に、41が上位に施されている。出土状況から考えて上記した焙烙と共伴関係にあると考えている。口縁が高く、ケズリも屈曲部下位にない点が注目された。口縁が高いのは内耳に対応し、それにしたがってケズリの位置が決定したと考えている。少なくともこの時期、内耳の有無で焙烙が作り分けられていた可能性もある。この時期としては他に類例はなく貴重な資料となる。なお内耳内部は空洞であった。42-44は蓋である。3点ともつまみを欠く。なお42のみ裏面にわずかに煤が付着する。蓋は他に8点の確認がある。

以上述べたようにこれらの一群の焙烙はほぼE22-1と併行するとしてよいが、口縁形などに違いも認められ、E22-1よりいくぶん古い段階に位置づけられる可能性がある。焙烙の底部片は158点出土している。出土比率の53.9%を占めている。先に述べたカワラケと同様に、他のこの時期の廃棄のパターンとは異なったあり方を示している。一般に焙烙は火鉢とともにそれほど高い出土比率を示すものではないが、この遺構にかぎってこのような高い数値を得ている。図示したものを含め焙烙の口縁片は47点の出土である。30に類似したもの2点、他は31-38に類似する。ほぼこの時期の一括資料となる。個々の焙烙の残存状況とも合わせ考えると、形のある焙烙を意識的に捨て去った特異な廃棄の状況が浮かび上がってくる。

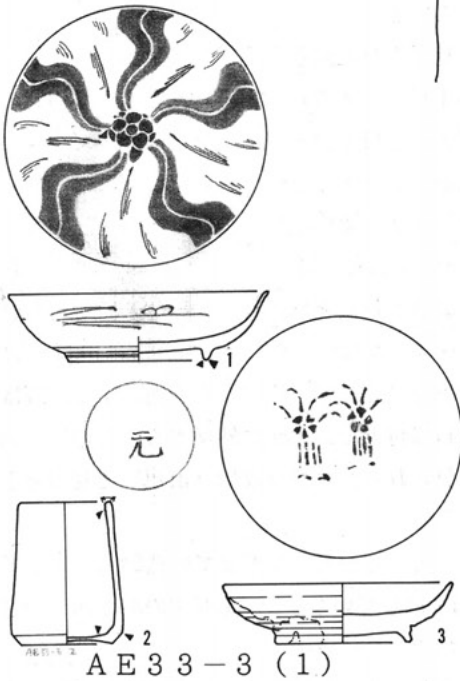
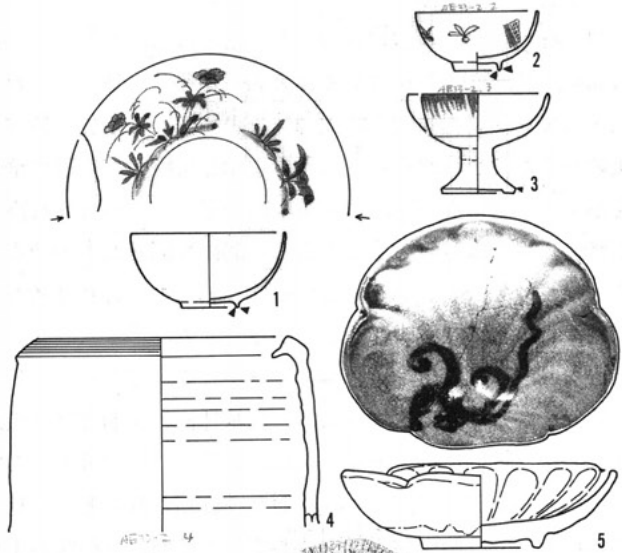
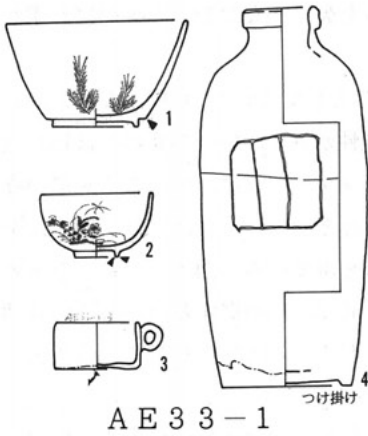
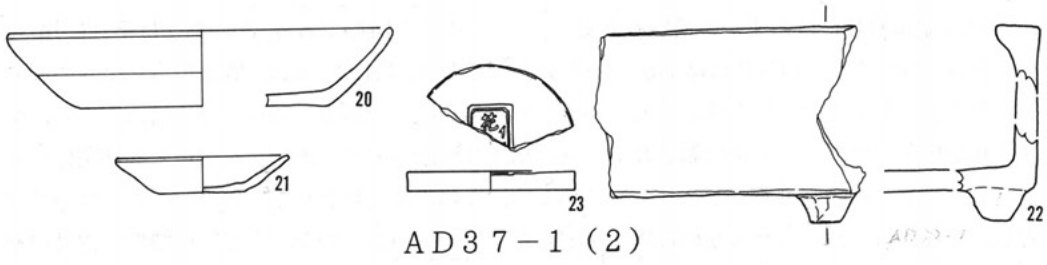
土器 51は軟質土師質の小鉢。ロクロ成形である。わずかに橙色を帯びた褐色を呈する。底面には左回転の糸切り痕が見られる。口縁外側の屈曲部には墨が塗布されている。このほか土師質の火鉢類の小片2個体分、十能、風口の破片各1個体分が見られる。

焼塩壺(52-57) 52、53はI類2に分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。下面には布目が見られる。52は胎土に雲母を多く含む。上面には板状の工具でケズられたと思われる、同心円状の条線が見られる。側面は丁寧になでられている。53は胎土に雲母を含む。上面が側面になだらかに移行する、丸みを帯びた形態をもつ。突起は下端から側面にかけて押しつぶされたようになっている。側面には指頭痕が見られる。54はI類1dに分類される蓋。濃い桃色を帯びた褐色を呈する。下面には粗い布目が見られる。上面の周縁および側面はなでられている。55はII類2b2に分類される身。2類5の刻印をもつ。外面は板状の工具によって調整されたと思われる、縦位の凹が見られる。内面の下三分一ほどが平滑でその上は布目のうえにケズリがはいっている。56、57はIII類aに分類される身。4類2の刻印をもつ。56は明るい褐色を呈し底面が厚く体部がやや内湾する。57は橙色を帯びた褐色を呈し、体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でわずかに外反する。このほか54と同形の蓋の破片および、II類2に属する小破片が1点見られる。ロクロ成形(III類)で刻印をもつ焼塩壺の身が2点見られる点で注目される。

AD37-1 (IV-161, 162図) III期の遺物を中心に出土しているがII-V期までの遺物も混入している。II期の遺物のほとんどは二次焼成を受けている。図示はしていないがAE36-8の3と同一の青磁皿や、三島手の鉢、見込みに五弁花を有する皿なども出土している。

磁器(1-7) 1は明末の青花皿でJA-2に属す。高台は外傾し、高台外側及び高台裏にカンナ痕がみ

第一節 陶磁器・土器



IV-162図 AD37-1 (2)、AE33-1、AE33-2、AE33-3 (1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

られる。口唇には虫食いがある。見込みには草木、口縁内側には雷文、外側面には蝶を描き、高台裏には二重圏線が巡る。L32-1の19と同一の製品であるが出土遺構の所属する藩が異なることより比較的多量の点数が輸入されたことが考えられる。2は碗でJB-1-dに属す。高台は若干内傾する。外側面に手描きによる草花とコンニャク判による松が描かれている。3, 4は染付皿である。3はJB-2-eに属す。口縁は外反し輪花を形成する。外文様の唐草は縁取られている。高台裏には一重圏線内に「宣明年製」銘がみられる。4はJB-2-dに属す。ロクロ成形の後型打ちによって二段の輪花を形成する。高台断面は逆三角形を呈す。高台裏にはハリ支え痕が認められる。外文様はハート唐草文が、高台裏には二重角枠内に渦福銘が描かれている。二次焼成を受け釉調は変質している。AE35-11, AD34-2と遺構間接合し最小個体数は6を数える。本製品はハート唐草文、渦福銘の文様や、体部の型打ちから柿右衛門古窯や南川原窯ノ辻窯の製品と共通する点が多い。しかし高台形態は逆三角形を呈し長吉谷窯の製品に共通する。柿右衛門古窯の中でも古い段階に位置するのだろうか。5-7は白磁である。5は小坏でJB-6-aに属す。6はJB-14-aに属す。7は仏飯器でJB-8に属す。脚下半部は無釉である。

陶器(8-18) 8は刷毛目碗でTB-1-dに属す。胎土は燈褐色で緻密である。薄手で丁寧に作られ口縁は外反する。内外面ともに白土による打刷毛目を施している。9, 10は京焼系の筒形碗でTD-1-jに属す。黄白色の胎土で高台脇は面取りされている。10に対し9の高台は小さい。体部には鉄絵の具と呉須によって木と文字が描かれている。11は御室茶碗でTC-1-dに属す。底部無釉。体部には呉須によって山水が描かれている。12はTD-1-iに属す。高台脇は面取りされている。見込みにはピン痕が認められる。底部無釉。13は鉄絵皿でTC-2-eに属す。見込みに鉄絵の具を用い、型紙摺りによって文様が施されている。14はTC-2-iに属す。ロクロ成形の後、体部は型打ちによって木瓜形に作出されている。灰釉が施されている。15は灰釉鉢でTC-5に属す。体部は屈曲して立ち上がる。また竹細工を模した編み込み模様が丸ノミ彫りと細沈線の組合せによって施文されている。見込みには鉄絵が施されている。16は香炉でTC-9-bに属す。鉄釉が施されている。17, 18は蓋である。17はTF-14に属し、表面に鉄釉が施されている。また中央にはねずみ状のつまみが貼り付けられている。18はTC-14-cに属し、裏面には糸切り痕を残す。素焼きと思われる。

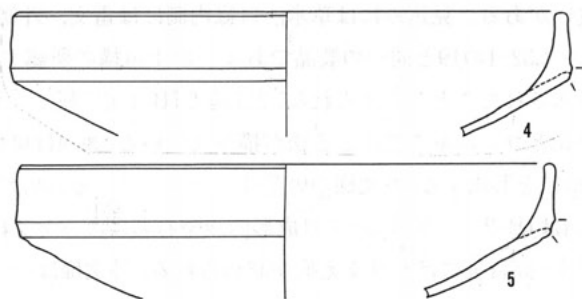
カワラケ(20, 21) 灯芯の油痕は21の口唇の一端のみに認められる。20は左? 回転の「離し糸切り」、21は「まわし糸切り」による。カワラケは他に5点確認されている。1点は三寸五分前後、4点は21と同様な三寸前後のカワラケである。

焙烙 19は四分一の残存であるが、底部まで確認できた。口縁は高く直立し、ケズリが屈曲部に施される。F33-3の104に類似した形態である。他に口縁片は6点確認されている。19と同様なもの5点、F33-3の102に類似したもの1点の出土である。底部片も他に2点確認されている。F33-3に併行すると考えられる一群の焙烙である。

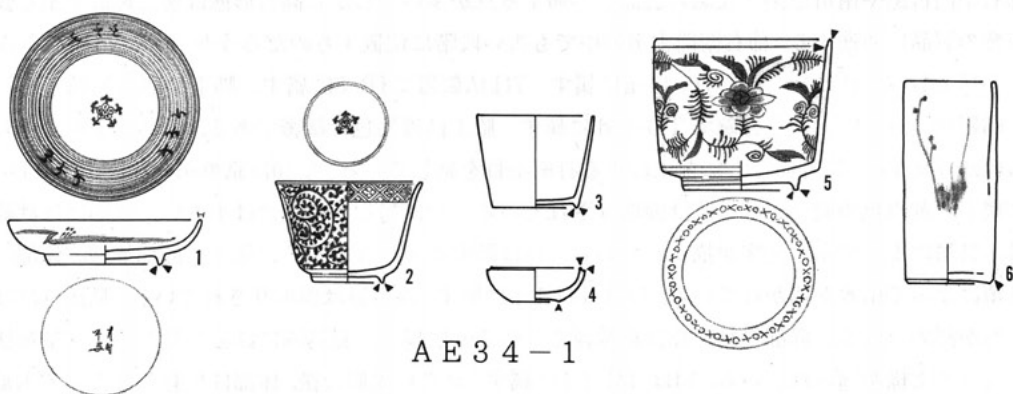
土器 22は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。体部外面は横のナデが施され平滑で、口縁上面から側面にかけて黒色の強い銀彩が施されている。内面は横に軽くナデられている。底面外側にはコビキ痕がわずかに残り、その上をナデである。このほか4個体分の土師質火鉢類の小片が見られる。

焼塩壺 23はエ類に分類される蓋。6類3に属すると思われる刻印をもつ。橙色を帯びた肌色を

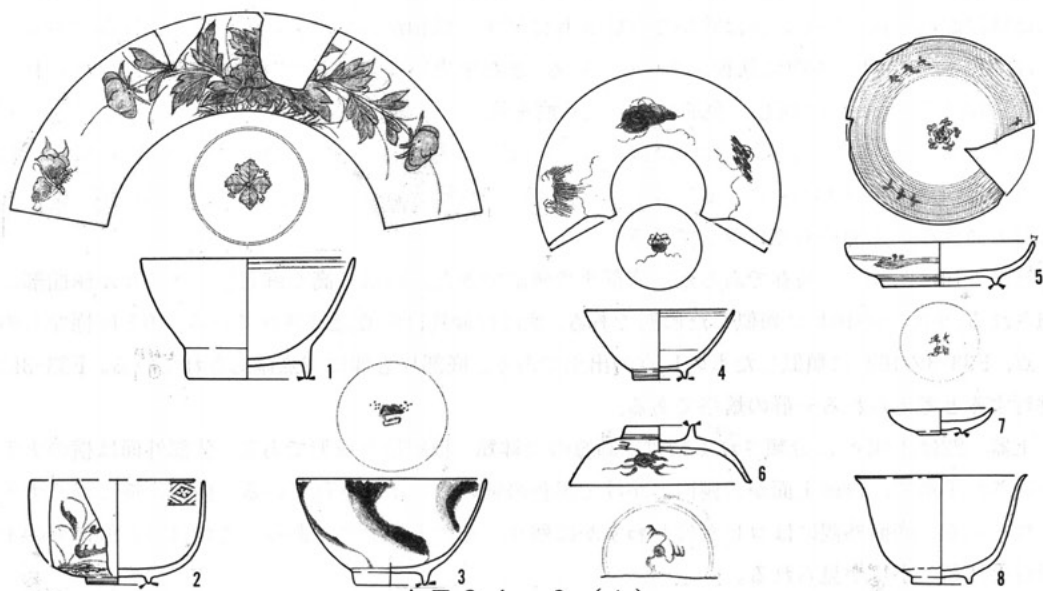
第一節 陶磁器・土器



AE33-3 (2)



AE34-1



AE34-3 (1)

IV-163圖 AE33-3(2)、AE34-1、AE34-3(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

呈する。このほかイ類 1 c 蓋の小片が見られる。

AE33-1 (IV-162図) 磁器 2 は小坏で JB-6-a に属す。

陶器(1, 3) 1は小杉茶碗で TD-1-d に属す。胎土は黄白色を呈し硬質である。体部に鉄絵の具によって若杉文様が描かれている。3は餌入で TC-30 に属す。灰釉が施されている。底部は無釉で糸切り痕が残る。

徳利 4 は瀬戸美濃産の灰釉系 2 合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2 合半・5 合・1 升徳利が少量ある。

AE33-2 (IV-162図) 磁器(1-3) 1は碗で JB-1-f に属す。高台断面は逆三角形を呈す。2は色絵小坏で JB-6-a に属す。黒、赤絵の具により羽子板、羽根が描かれている。3は仏飯器で JB-8 に属す。粗雑な作りで脚部は無釉である。

陶器(4-6) 4は瀬戸・美濃系の製品で火鉢類ではないかと思われる。両面ともに鉄釉が施され外面はうのふ釉が流し掛けされている。5は型皿で TC-2-i に属す。ロクロ成形の後に体部が型打ちされている。見込みには鉄絵の具によって蔓文が描かれている。底部以外に灰釉が施されているが口縁に一部緑釉の流し掛けがみられる。6は播鉢で TE-29 に属す。胎土は燈褐色を呈し白色微粒を多量に含んでいる。内面には 9 条 1 単位の播目が上から下へ左回りで施されている。底部は十字状に施されている。

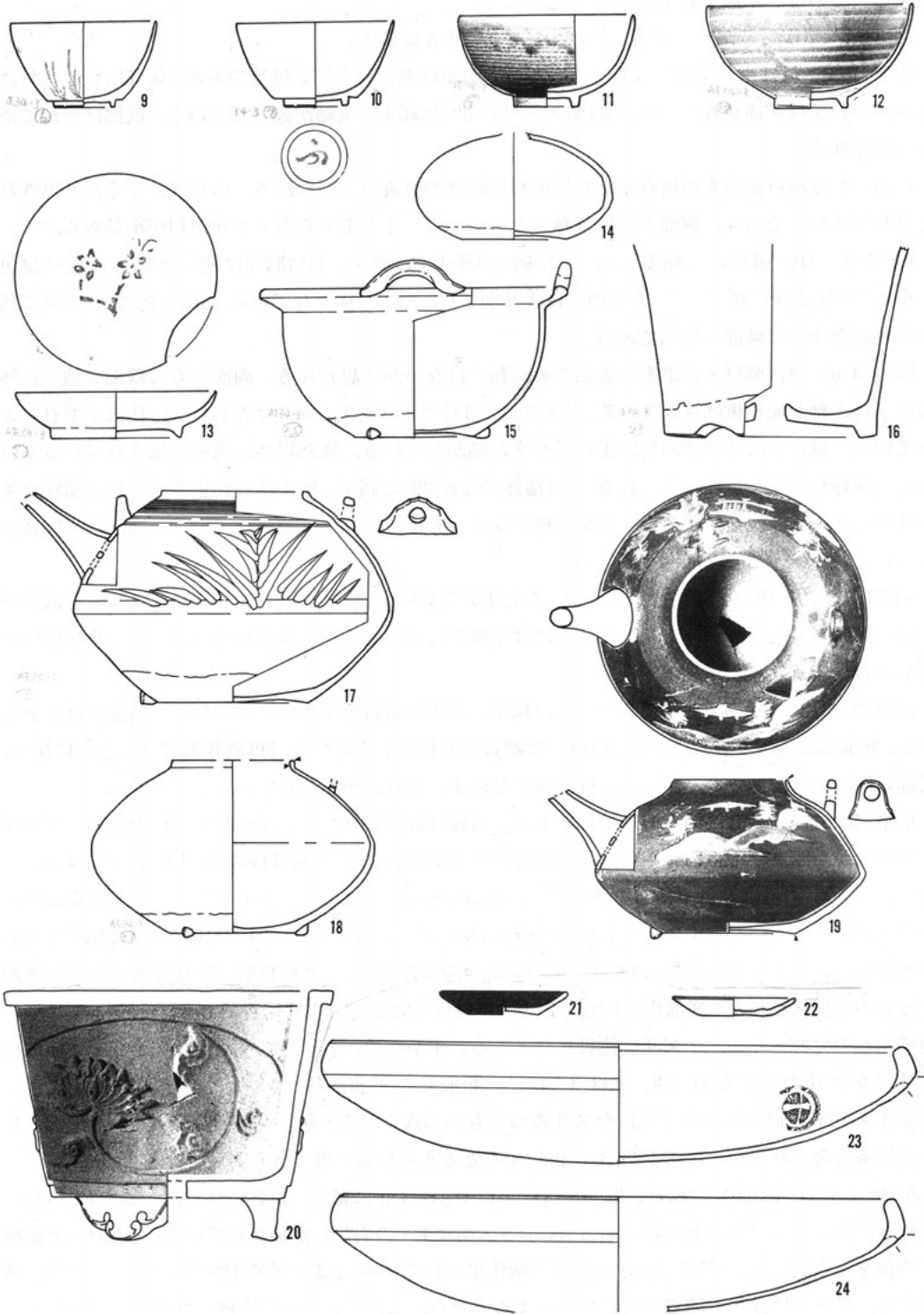
AE33-3 (IV-162, 163図) 磁器 1 は染付皿で JB-2-g に属す。口縁はやや外反する。高台裏には一箇所ハリ支え痕がみられ、見込みには墨弾きによって花文が描かれている。高台裏には「元」銘がみられる。

陶器(2, 3) 2は灰落として TD-24-b に属す。胎土は黄白色できめはやや粗い。断面形は台形を呈し、底部脇は面取りされている。口唇には顕著な敲打痕がみられる。3は鉄絵皿で TC-2-e に属す。底部以外に灰釉が施され、見込みには型紙摺りによって鉄絵が描かれている。

焙烙(4, 5) 4, 5 は同形態の焙烙である。口縁は高く直立し、わずかなくびれをもち、ケズリは屈曲部から屈曲部上位に施される。口縁形のみを注目すれば、F34-11の194, 195 に類似する。ただし194, 195 の底部が低平であるのに対し、4, 5のそれは深く下方に張り出している。屈曲部付近の器壁が異常に厚いなど違いもあるが、全体から見ればむしろ F33-3 の102, 104 などに類似した形態となる。詳しくはわからないが、このような器壁の厚さとケズリの位置とにはなんらかの関連があるものと推察される。底部片は10点である。口縁片は図示した以外14点である。ほぼ4, 5 に似た形態のものであったが、ケズリに注目したところわずかな違いも認められた。4, 5と同様に屈曲部上位にケズリのつくもの 3点、F33-3の104 に類似した屈曲部にケズリのつくもの6点、同じく F33-3 の105 類似の屈曲部下位にケズリのつくもの 3点となる。他に不明 2点がある。形態的に異なる焙烙も含まれるが、ほぼ F33-3 に併行すると考えられる一群である。

AE34-1 (IV-163図) 磁器(1-3, 5) 1は小皿で JB-3-a に属す。口唇には口錆が施されている。見込みには手描きによる五弁花、高台裏には「大明年製」の崩し銘が描かれている。AE34-4と遺構間接合をする資料で、AE34-4からはもう 1 個体出土している。2は小坏で JB-6-b に属す。口縁は外反する。見込みには二重圏線内に手描きによる五弁花、口縁内側には四方襷、外側面には縁取りの

第一節 陶磁器・土器



IV-164圖 AE34-3出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

ないタコ唐草が描かれている。AE34-4と遺構間接合をする。3は白磁の猪口でJB-7-bに属す。AE34-2と遺構間接合をする。5は蓋物でJB-13-bに属す。高台付根脇には○×文様が描かれている。

陶器(4, 6) 4は合子でTD-18に属す。底部は無釉である。6は花生けでTD-22に属す。円筒形の花生けで底部脇は面取りされている。体部には鉄絵の具と呉須によって花文が描かれている。AE34-4と遺構間接合をする。

AE34-3 (IV-163, 164図) 本遺構中からはややまとまった量の遺物が出土しており、年代的にも本地点でⅦ期としているJB-1-m(広東碗)出現以降瀬戸・美濃の新製物がみられないという極めて限定された時期幅を有する遺物群である。遺物群は二次焼成は受けていない。

磁器(1-7) 1-6は染付, 7は白磁である。1は広東碗でJB-1-mである。絵付けは細かく、骨書やグミは丁寧で、見込み中央には小印が描かれているなど初期的な様相を呈している。2はJB-1-hである。本類は本期以降見られない。3, 4はJB-1-iである。3は捻花文が描かれているが、初期の広東碗に多用された文様であり、年代的には同時期に生産された製品であろう。5はJB-3-aである。口唇部には口鏽が施され、「大明年製」の銘が描かれている。AE34-1の1とは銘の字体や外側面文様が同じで、組であったと考えられる。6はJB-14-aである。7は紅皿でJB-17に分類される。生掛けで釉際には釉溜りが認められる。

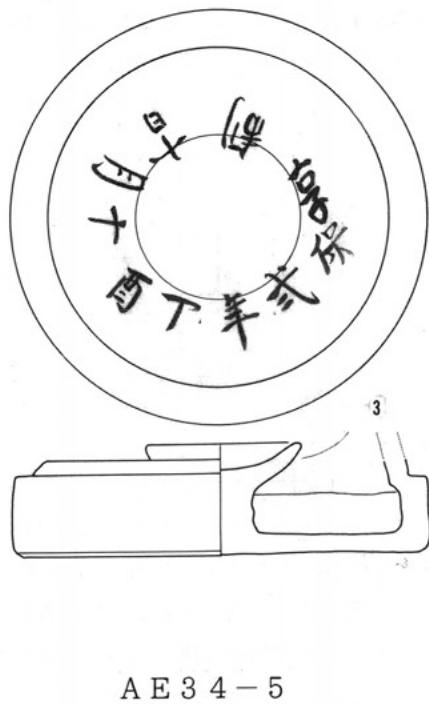
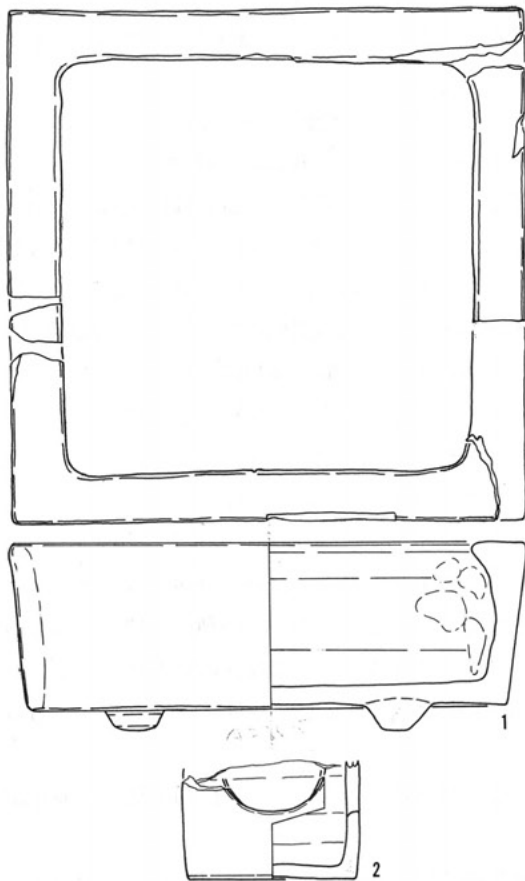
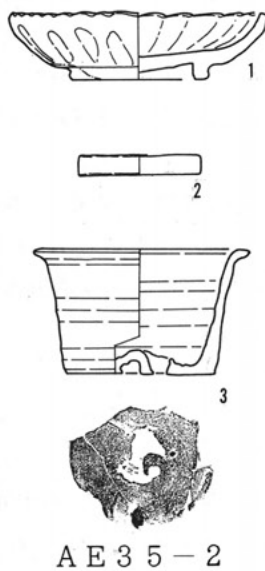
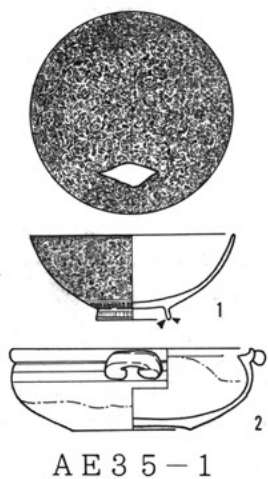
陶器(8-20) 8は灰釉端碗でTD-1-gである。細かい貫入が全体に認められる。9, 10は小杉茶碗でTD-1-dに分類される。9は鉄絵で若杉文様が描かれているが、10は絵付けはされていない。高台裏には「ふ」の字の墨書が書かれている。11は鎧手碗でTC-1-rである。器面は施文後に灰釉、内面は緑釉が施されている。12は刷毛目碗でTC-1-sである。器面は渦巻状の、内面には打刷毛目が施されている。13は御深井風鉄絵皿でTC-2-eに分類される。見込みには鉄絵の具で草花文が摺絵されている。また見込みには三箇所ピンの溶着痕が認められる。底部無釉である。14は柿釉油壺で、TC-12に分類される。底部にはススが付着しており油壺としての他に別利用されていたのかも知れない。15は柿釉鍋で、TZ-33-aである。柿釉は見込み、器面体部下半まで施され、見込みにはピン痕が認められる。底部にはススが付着している。16はTC-21である。器面には灰釉が施され、底部中央は径21mmの孔が穿たれている。また底部外周の高台風の突帯には水の排出のために二箇所にアーチ状の削り込みがされている。17-19はTZ-34である。土瓶は本期から安定して出土しており、煎茶の流行と関係するのであろう。17はしのごで草文様を刻んだ後、鉄釉、内面鉄釉の化粧掛け、18は内外面灰釉、19は外面錆釉、内面灰釉が施されている。19は白土、銅緑釉、呉須、黄釉で山水文が上絵付けされている。ともに底部にはススが付着している。20は素焼きの植木鉢である。器面には同期の遺物群が出土したAE35-3の14と同様の手法で花唐草文が貼り付けられており、あるいは瀬戸・美濃系の製品であるかもしれない。

灯火具 21は透明釉油皿。左回転の糸切り底。灯芯油痕は付着しない。他に同形態の油皿片が2点出土している。

カワラケ 22には灯芯油痕は付着しない。左回転の糸切り底。カワラケは1点の出土である。

焙烙(23, 24) 23は完形, 24もそれに近い。大きさもほぼ同様であるが、形態も類似する。口縁は深く湾曲し、ケズリは屈曲部下位に施される。E22-1の一群に類似するが、口縁が短くなり、口縁

第一節 陶磁器・土器



IV-165图 AE34-5、AE35-1、AE35-2出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

の屈曲もさらに強まっている。もっとも大きな違いは、全体的に丁寧なつくりになっている点である。E22-1の一群はケズリの部分などやや角張っている部分があるが、23, 24ではそれがなく滑らかなラインである。E22-1よりやや後続する一群であると考えている。なお23には丸に一の字の刻印が認められている。刻印の径2.3cm。X34-2の15およびAD35-2の23と同形である。他に口縁片は8点確認されている。すべて23, 24に類似した形態である。底部片も多数確認されているが、ほとんどは24に伴うものと考えられる。

AE34-5 (IV-165図) 灯火具 3 は土師質の瓦燈受け部である。口径22cm。上方へ向かう蓋受けを欠くが、ほぼ完形である。灯芯油痕は付着していない。この瓦燈には墨書があり、字は油皿を取り巻きまく見込みに書かれている。「享保貳年丁酉十月十日制」と読むことができ、享保二年(1717)以降用いられた瓦燈であることが理解された。絶対年代のわかる貴重な資料である。遺跡内ではこの時期の瓦燈の出土が多い。また瓦燈には銀彩の痕跡が残っているのもあり、銀彩のあるものが通常の形態と思っていたが、この墨書の存在によって銀彩の施されていない瓦燈の使用も推察できるようになった。ただしこれに伴う頭部は出土せず、他の灯火具の出土もない。

土器(1, 2) 1は1類cに分類される軟質土師質の火鉢類。板組造り成形である。外面は横および縦の丁寧なケズリで平滑に整えられている。表面と上面には黒色を帯びた銀彩が施されている。内面は横にナデが走り、とくに底付近で顕著である。隅には指頭による圧痕が顕著である。底面外側にはチヂレ目が見られる。2は軟質土師質の輪積み成形の製品。やや橙色を帯びた褐色を呈する。足をもたず、円形もしくは半円形をなしていたと思われる窓の一部がある。体部外面は縦のミガキで平滑に整えられ、その上に銀彩が施されている。底面外側にはチヂレ目がわずかに残り、その上がナデられている。火入れの類と思われる。このほかには1類dの土師質火鉢類の破片1個体分とII類の焼塩壺の小片1点が見られる。

AE35-1 (IV-165図) 磁器 1 は瀬戸・美濃系の摺絵の碗である。両面ともに唐草の摺絵が描かれているが、外面は外周の三分一を1単位とする扇形の型紙で施文されている。内面はその上に底部に丸形の型紙を利用している。

陶器 2 は鍋でTZ-33-aに属す。小型の鍋で口縁外側に把手が貼り付けられている。体部から内面にかけて灰釉が施されている。

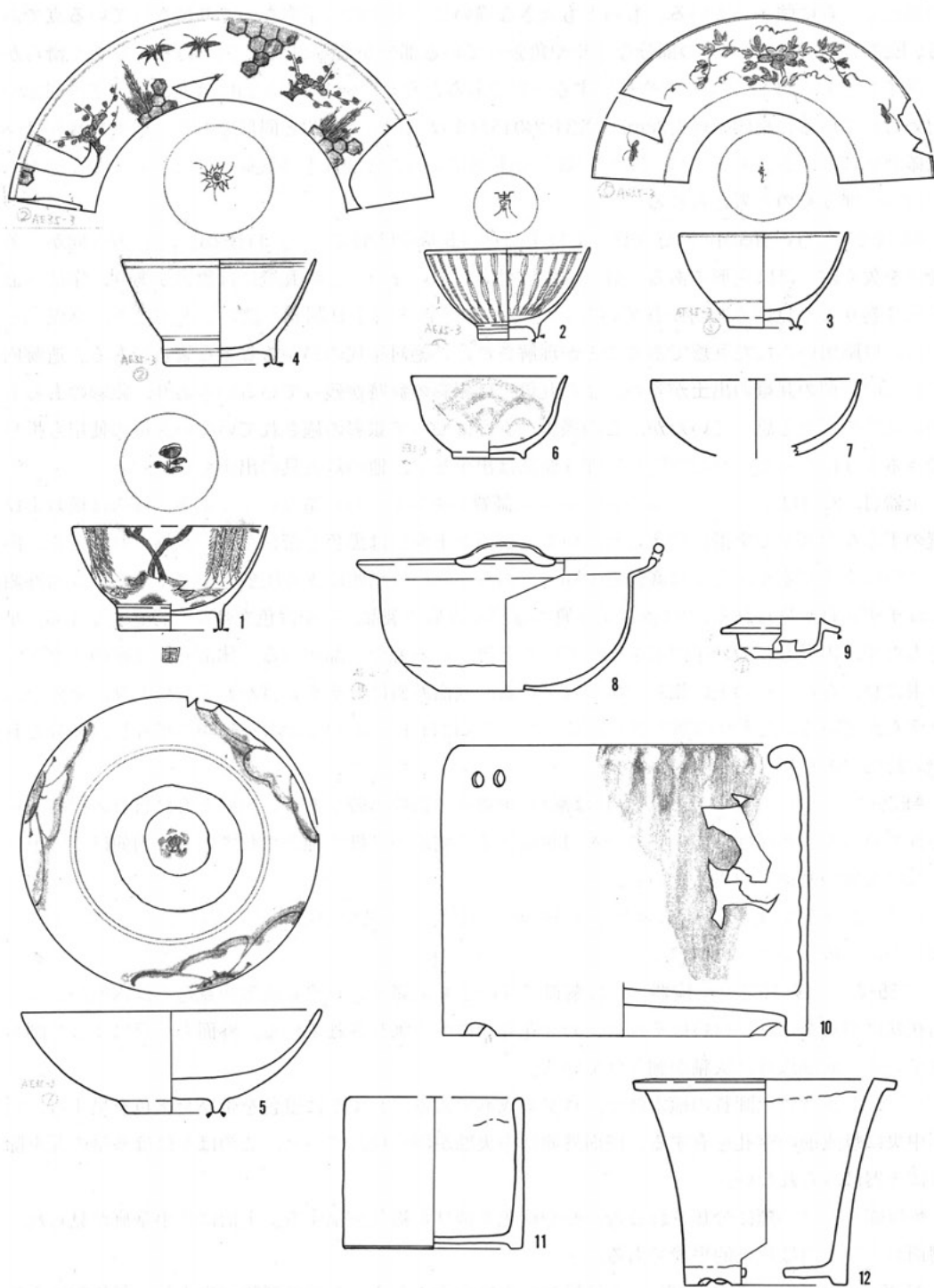
AE35-2 (IV-165図) 陶器 1 は菊皿でTC-2-kに属す。ロクロ成形後見込みは内型によって菊花状に型打ちされ、口唇はそれにあわせ花卉状にへら削りされている。外面もへらによって削られている。底部以外に灰釉が施されている。

土器 3 は軟質土師質の植木鉢で、ロクロ成形である。わずかに橙色を帯びた褐色を呈する。底面中央に焼成前の穿孔を有する。底面外側は中央部が深く抉れている。このほかには多量の瓦を除けば土器はみられない。

焼塩壺 2 はウ類に分類される蓋。やや橙色を帯びた褐色を呈する。上面には手掌痕が見られ、側面および下面は比較的平滑である。

AE35-3 (IV-166, 167図) 本遺構中からはややまとまった量の遺物が出土し、年代的にも集中しており、本地点ではVII期としている遺物群が出土している。本期は年代幅が短いせいも遺構数

第一節 陶磁器・土器



IV-166圖 AE35-3出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

は少なく、本遺構の他に AE34-3, AE39-1があるのみである。遺物群は二次焼成は受けていない。

磁器(1-5) 磁器はすべて染付である。1, 4は広東碗で JB-1-m である。絵付けは精緻で、見込みの小印、1の高台裏の銘などは初期的な様相が窺える。2, 3は小広東碗で JB-1-i に分類される。2の連鎖文や見込み小文は初期の広東碗にも施された文様であり、年代的には同時期に生産された製品であろう。5は JB-5 である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、中央にはコンニャク判五弁花が描かれている。波佐見諸窯の製品と推定され、胎土、呉須の発色は不良である。

陶器(6-15) 6は灰釉端反碗で TD-1 である。器面の文様は貫入を黒色に変化させて浮き立たせている。7は灰釉平碗で TD-1-h である。8は柿釉鍋で TZ-33-a に分類される。釉調は柿釉と言うよりも鉄釉に近似している。底部にはススが付着している。9は鉄釉の落とし蓋で、TC-14-a である。つまみはボタン状の物を上に折り曲げて皿状にしている。10は火鉢で TC-31 である。器面、口縁部は白釉に柿釉流し掛けで、口縁部付近には径 9mm の孔が二箇所並列に穿たれている。底部は無釉で、対称的に 8.5cm 間隔で径 5mm の小孔が二箇所穿たれている。また、底部外周の高台風の突帯は四箇所のアーチ状の削り込みがされている。11は灰釉の火入れで TD-24-a に分類される。口唇部には敲打痕が認められる。灰釉は器面のみには施されている。12-14は植木鉢で TC-21 である。12は鉄釉、13は灰釉、14は唐草文を貼り付けた後、やや鉄分を含む灰釉が施されている。ともに底部外周の高台風の突帯には水の排出のために 12, 13 は一箇所に、14は三箇所に削り込みがされている。15は鉄釉の播鉢で TB-29 である。播目は 12条 1 単位で、見込み中央より引き上げられており見込みには重ね焼きの際の高台の溶着痕が明瞭に認められる。高台を有し、畳付には砂が多量に付着している。胎土は堅緻で赤褐色を呈する。

徳利(16-19) 16, 17は瀬戸美濃産の灰釉系 2 合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。18, 19は瀬戸美濃産の灰釉系 5 合徳利と 1 升徳利でいずれにも点刻の釘書が認められる。双方とも口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり、肩部は張ってほぼ寸胴、高台の削り込みも浅く雑である。2 合半徳利が 60 個体ほど、5 合・1 升徳利が 40 個体ほどと多量に出土している。志戸呂産徳利はごく僅かしかない。

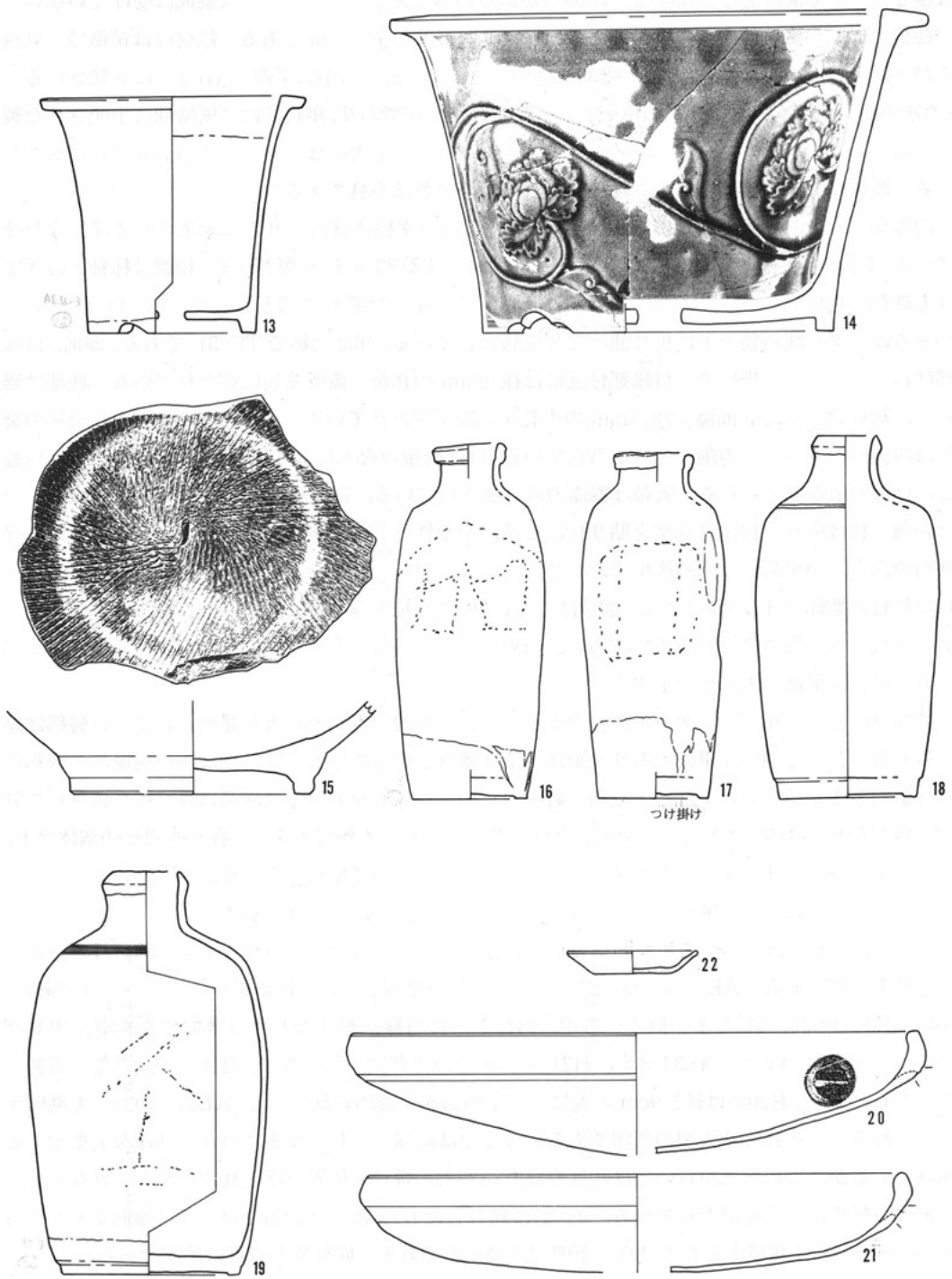
カワラケ 22には灯芯油痕はない。左回転の糸切り底。カワラケは 2 点のみの出土である。

焙烙(20, 21) 20, 21はともに口縁は深く湾曲し、ケズりは屈曲部下位に丁寧に施される。他のつくりも丁寧である。AE34-3の23, 24と共通する焙烙である。器形はわずかに異なるようである。20は AE34-3の23, 24 とよく似ているが、21はさらに口縁が短くなり、口縁形のみを取り出せば H21-2 の79とより近い。AE34-3から H21-2 への変遷を想定しているが、21はこの間を繋ぐ資料とも考えられる。なお20には径 2.9cm の丸に一の字の刻印が認められている。AE34-3の23にも刻印が認められるが、それより大型の刻印である。ここでは時期が新しくなるにつれ、刻印が大型化する傾向にあるが、この観点からいえば20はやはりいくぶん新しく位置づけられるのかもしれない。

他に口縁片は 7 点確認されている。20, 21に類似したもの 3点、AD35-2の一群に類似するもの 1 点、G26-1の33に類似するもの 1点、不明 2点の出土である。底部片も 7点の確認である。

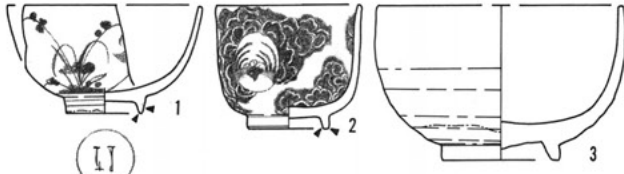
AE35-5 (IV-168図) 磁器(1, 2) 1は碗で JB-1-g に属す。胎土は灰白色で粗雑な作りである。高台裏には「大明年製」の崩し銘が描かれている。2は JB-1-o に属す。体部と口縁内側に墨弾

第一節 陶磁器・土器

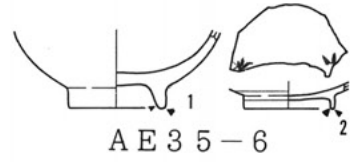


IV-167図 AE35-3出土遺物(2)

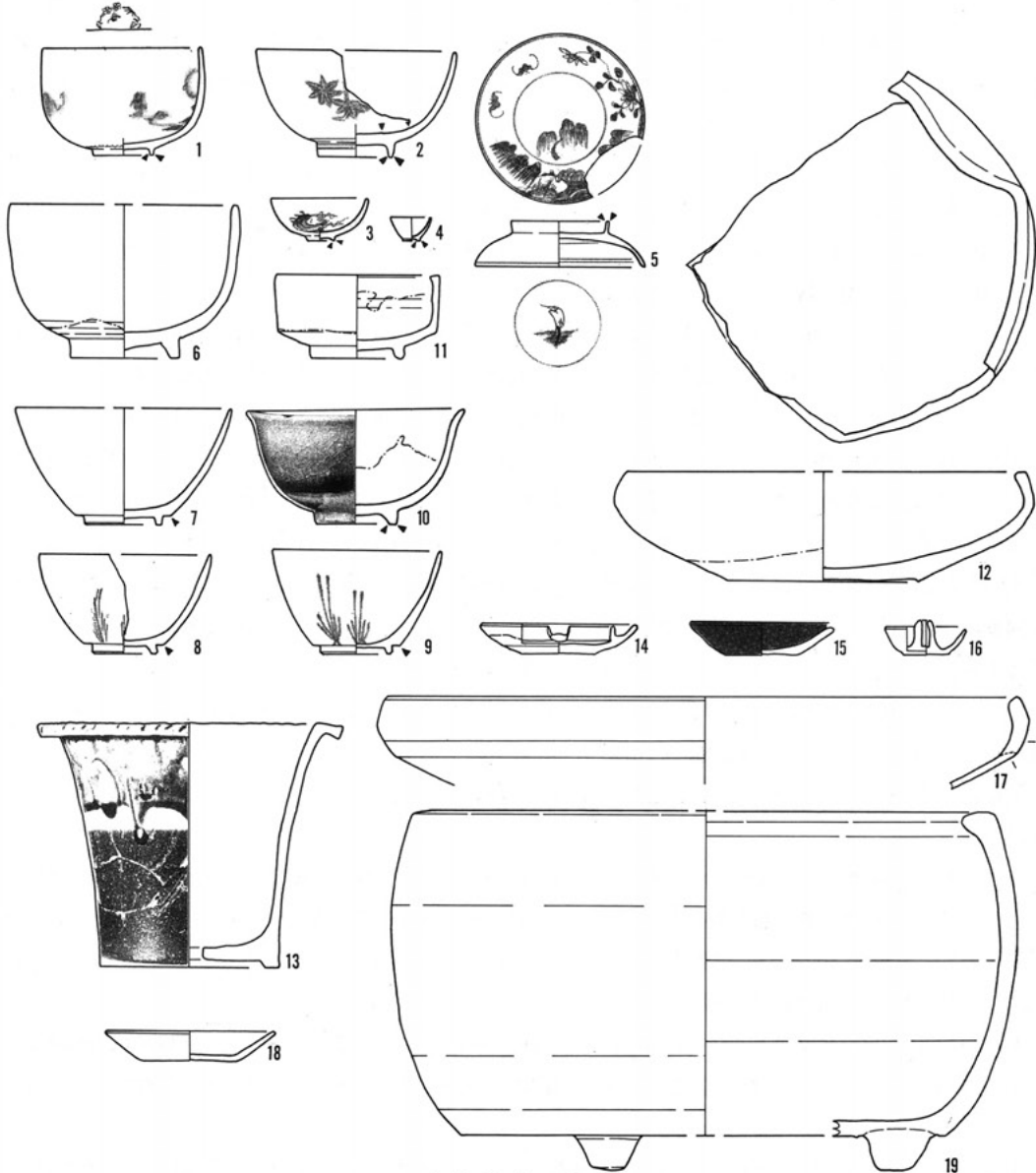
第IV章 江戸時代の遺物



AE35-5



AE35-6



AE35-11

IV-168 図 AE35-5, AE35-6, AE35-11 出土遺物

第一節 陶磁器・土器

きによる雲形文が描かれている。

陶器 3 は瀬戸美濃系の丸碗で TC-1-c に属す。灰釉が施されているが底部は無釉である。

AE35-6 (IV-168図) 磁器 2 は碗の底部片で JB-1-c に属す。高台裏には二重圈線が施されている。二次焼成を受けている。

陶器 1 は呉器手の碗で TB-1-a に属す。高台はやや外傾し、高台裏も施釉されている。

AE35-11 (IV-168図) 磁器(1-5) 1は小丸碗で JB-1-j に属す。高台付根脇には鋸齒状文が巡り、見込みには丸文状の松竹梅が描かれている。2は碗で JB-1-g に属す。見込みは蛇ノ目状に剥がされている。体部はコンニャク判によって紅葉が描かれている。3は色絵小坏で JB-6-a に属す。体部に赤絵の具によって海老が描かれている。4は白磁の小物である。JB-35 に属す。5は広東碗の蓋で JB-1-m に属す。内面には鷺が描かれている。

陶器(6-13) 6 は灰釉碗で TC-1-c に属す。底部は無釉である。7-9は小杉茶碗で TD-1-d に属す。高台脇は面取りされている。8, 9の体部には鉄絵の具によって若杉文様が描かれている。10は瀬戸・美濃系の碗で TC-1 に属す。太白碗と思われる。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。素地の上に白泥を施した後、透明釉を施しているが上半部は薄瑠璃様の呉須を混入する釉を流し掛けしている。畳付無釉。11は香炉で TC-9-a に属す。高台をもち、底部、内面は無釉である。12は水盆で TC-5-f に属す。底部は碁筈底状を呈し体部は内湾して口縁にいたる。口縁は部分的にへこみを有している。見込みにはピン痕が認められる。底部周辺以外に灰釉が施されている。13は植木鉢で、TC-21 に属す。体部は外反して立ち上がり口縁は外折する。口縁には斜行する刻文が巡り体部には沈線によって流水文が施文されている。釉は体下半部に錆釉を施し口縁から緑釉を流し掛けしている。

灯火具(14-16) 14は鉄釉受付。底面へラケズリ調整。内口縁の口唇に溶着痕が認められる。15は透明釉油皿。灯芯油痕は口唇に疎らに付着する。器面の剥落が激しくはっきりしないがおそらく左回転の糸切り底。16は素焼乗燭。油痕は灯心立の先端に認められる。左回転の糸切り底。他は全て透明釉である。油皿の底部片1, 他は受付と乗燭の口縁片である。

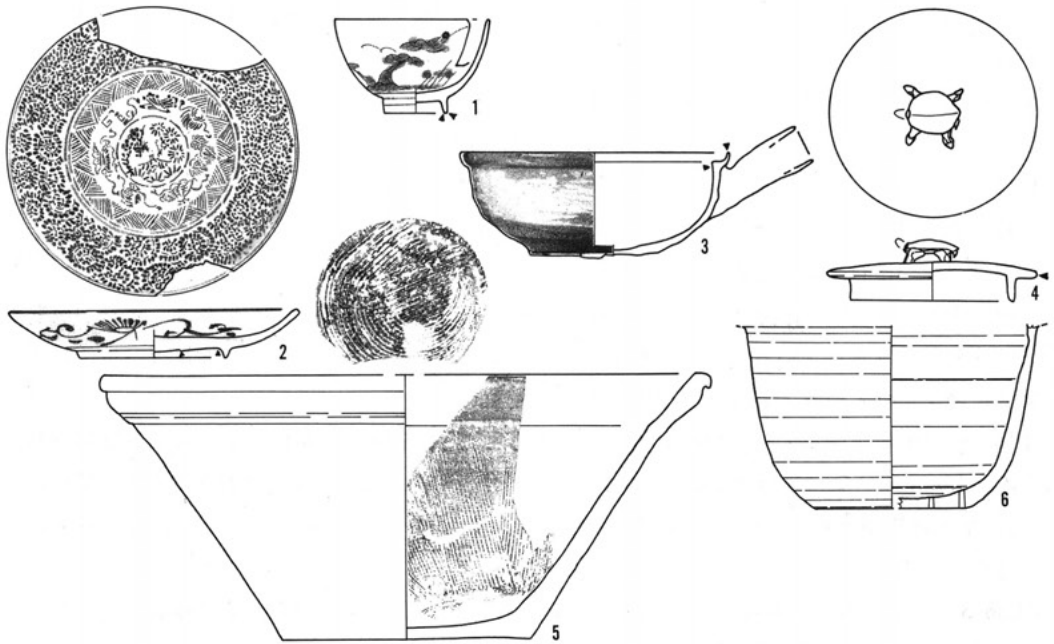
カワラケ 18は左回転の糸切り底。灯芯の油痕は付着しない。他に13点出土している。上製 1点銀彩のもの 1点が含まれる。他は全て左回転の糸切り底である。1点のみ口径が一寸六分のものも含まれるが、他はすべて三寸以上のカワラケである。なかには六寸以上と考えられるカワラケも 1点確認されている。

焙烙 17は口縁が深く湾曲しケズリも屈曲部に施されるが、口縁が幅広いのが特徴である。また注意して観察すると、接合部以外に口縁にもう一段屈曲のあることが分かる。詳しくは AE39-1 の項で述べるが、AE39-1の30-34 に類似し、Y34-4の67などから発展した形態であると考えている。時期的には AE39-1, AE34-3に併行する。

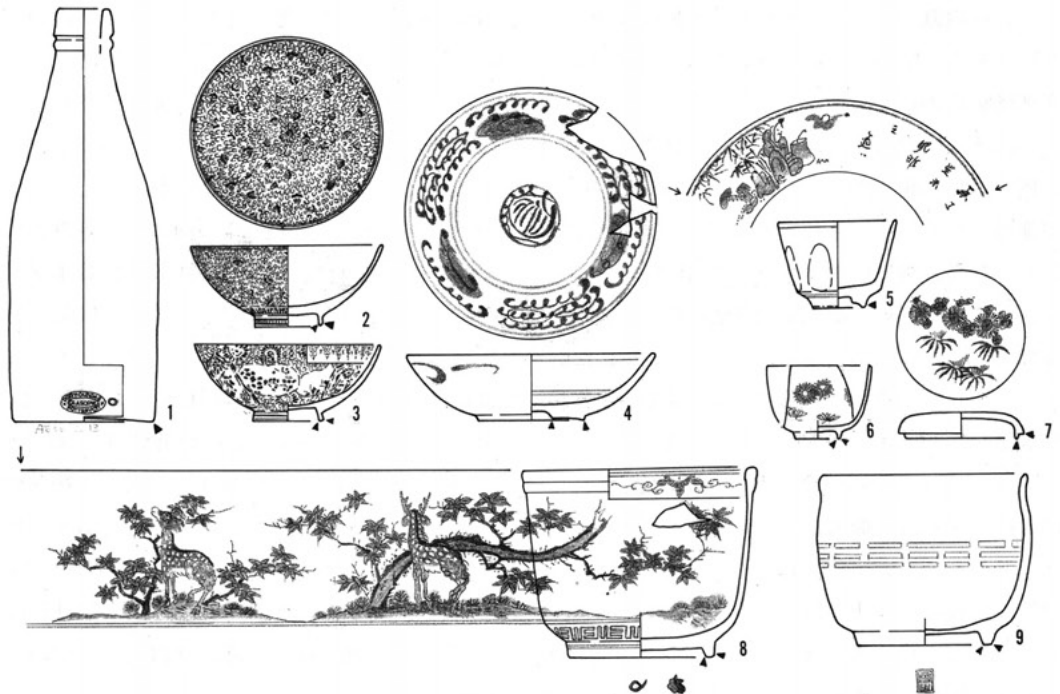
他に口縁片は23点確認されている。F33-3の一群に類似のもの 5点を含む。うち 1点は AE33-3の4, 5 と同形態である。17に類似のもの 8点, AE34-3の23, 24に類似のもの8点, 不明2点となる。底部片は32点の出土である。

土器 19は 1類 a ロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。底面にはチヂレ目が見られる。体部外面は横にケズられ平滑で、全面に暗褐色の塗料が見られ、部分的に赤漆と思われる

第IV章 江戸時代の遺物



AE36-1



AE36-3 (1)

IV-169図 AE36-1, AE36-3 (1) 出土遺物

第一節 陶磁器・土器

る塗彩が見られる。内面は横の丁寧なナデが見られる。口縁上面の内側はこすられたように塗料が剥がれている。

AE36-1 (IV-169図) 磁器(1-2) 1は碗でJB-1-gに属す。2は瀬戸・美濃系の皿で、JC-2-aに属す。底部は蛇ノ目凹形高台である。見込み文様は型紙摺りによるものだが側面は扇形の型で4単位に摺り分けられ、見込みは丸い型で摺られている。接合面に焼き継ぎ痕がみられ、底部蛇ノ目部に焼き継ぎ屋の印が書かれている。

陶器(3-5) 3は行平鍋でTZ-33-bに属す。見込みにはピン痕がみられる。手は円筒形を呈している。釉は体部にハケで白泥を施したうえに掛けられている。4は蓋でTD-14に属す。亀を型取ったつまみが貼り付けられている。内面は無釉である。5は播鉢でTC-29に属す。播目は1単位17条で左回りに施文されている。底部は1単位の直線と丸である。

土器 6は軟質土師質のロクロ成形の容器。内外面ともに透明釉が掛かっている。釉は部分的に緑色を呈している。底には直径3-4mmの小孔が多数見られる。底は火を受けたと思われ、黒色化している。植木鉢の類とも思われるが、底が焼けていることなどからあるいはなんらかの調理具であったとも思われる。

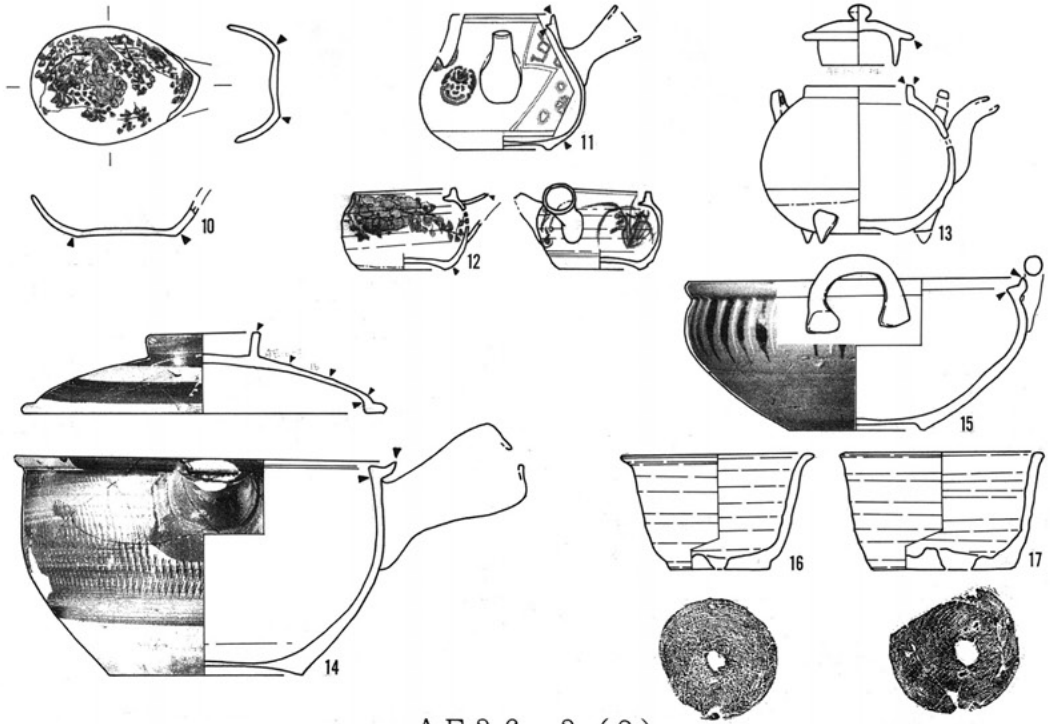
AE36-3 (IV-169, 170図) 本遺構からはコバルトで施文された瀬戸・美濃磁器が主体となって出土した。IX期に位置付けられよう。その他に1のウイスキー瓶やパリ製の歯ブラシ(IV-231図)の出土が注目される。

磁器(2-12) 2, 3はコバルトを顔料とした染付摺絵碗でJC-1-fに属す。2は内外両面に、3は外面と口縁内側に施文されている。外面は3単位、3の口縁内側は5単位で施されているが2の内面は不明である。4は皿でJC-2-aに属す。底部は蛇ノ目凹形高台を呈している。5は小坏でJC-6に属す。底部は幅広の蛇ノ目凹形高台風で無釉である。体部は型打ち成形によって七角形に面取りされている。6は色絵小坏でJB-6-aに属す。体部には呉須と赤絵の具によって菊花を描いている。7はJC-18に属す。焼き継ぎ痕がみられる。8は香炉である。JC-9に属す。高台裏は蛇ノ目凹形状を呈しているが施釉されている。体部の文様はコバルトと思われ、鮮明に発色している。接合面には焼き継ぎ痕がみられ高台裏には焼き継ぎ屋の印が書かれている。9は青磁香炉でJC-9に属す。体部には算木が浮文されている。高台裏には透明釉が施され、銘が描かれている。10は蓮華でJC-20に属す。底部は無釉である。見込みにはコバルトによって草花が描かれている。11, 12は急須でJC-16に属す。ともに注口部の穿孔は七箇所である。底部と蓋受けは無釉で体部にはコバルトによって文様が描かれている。

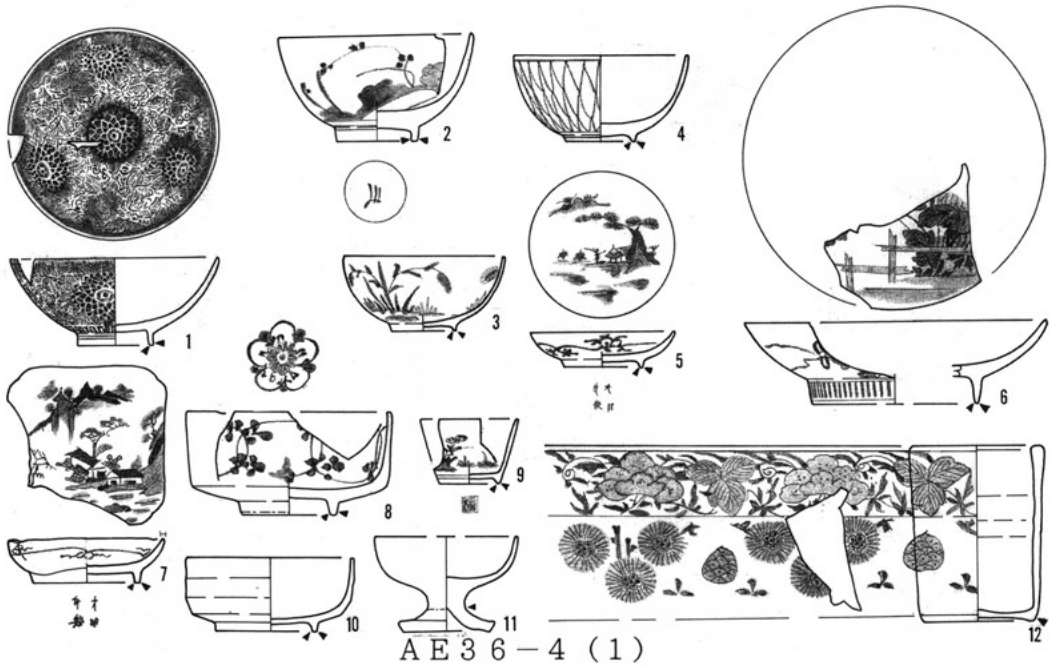
陶器(1, 13-15) 1はイギリス製のウイスキー瓶である。底部脇には「PORT-DUNDAS POTTERY GLASGOW」銘の刻印が押されている。13は土瓶でTZ-34に属す。胎土は赤褐色で注口部の穿孔は三箇所である。体部には鉄釉が施されている。14は行平鍋で、TZ-33-dに属す。体部、蓋ともにカンナ痕が巡る。鉄釉が施されている。底部にはススが付着している。15は鍋でTZ-33-aに属す。胎土は灰白色を呈し硬質である。口縁脇には一対のアーチ状の釣手掛けが貼り付けられている。見込みには三箇所のピン痕が認められる。底部は無釉で体上半部には白泥と鉄絵の具によって縞模様が施文されている。底部にはススが付着している。

土器(16, 17) 16, 17は軟質土師質の植木鉢である。ロクロ成形である。いずれも底面中央に焼

第IV章 江戸時代の遺物



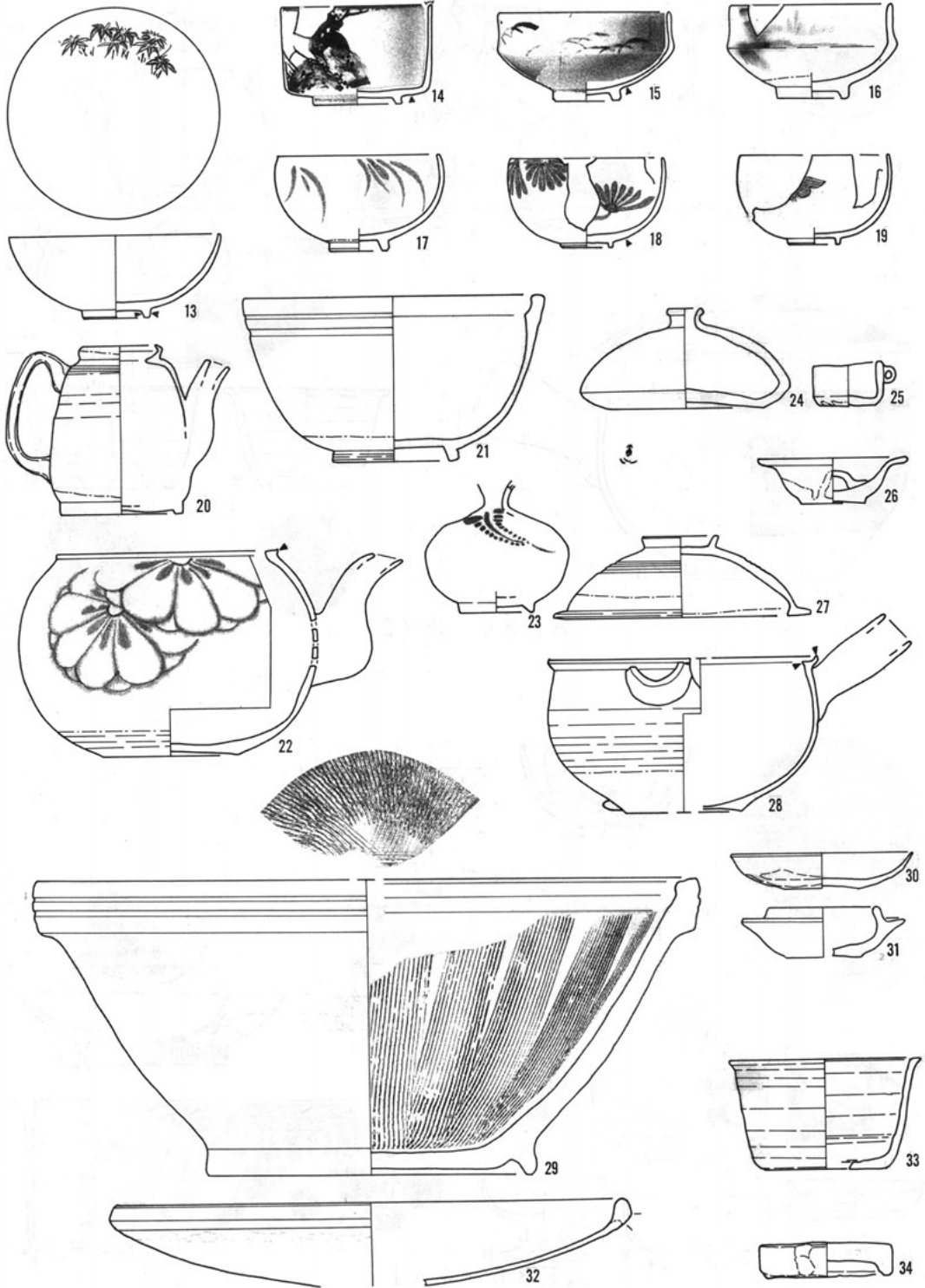
AE36-3 (2)



AE36-4 (1)

IV-170図 AE36-3(2)、AE36-4(1)出土遺物

第一節 陶磁器・土器



IV-171圖 AE36-4出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

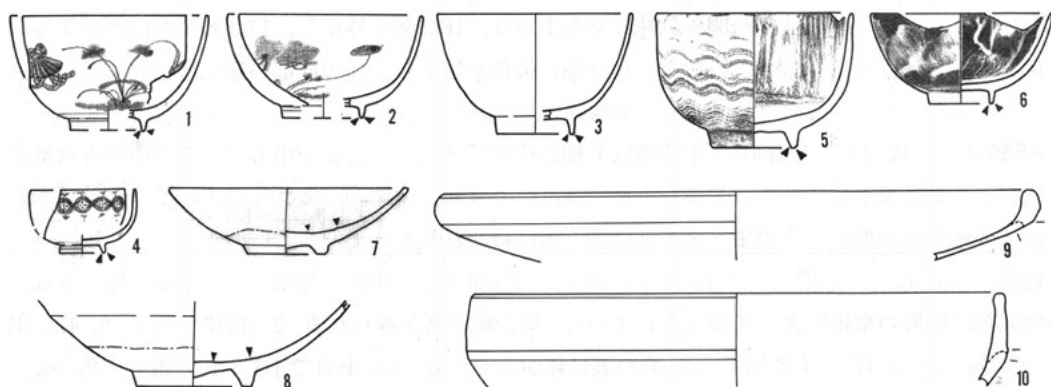
成前の穿孔をもつ。体部はやや開き気味に立ち上がり、16は強く外反し、17はわずかに外反する口縁部をもつ。16は橙色を帯びた肌色を、17は強い橙色を呈する。16の底部の穿孔は指先にてなされたことが観察される。このほかに土器、焼塩壺は見られない。

AE36-4 (IV-170, 171図) 本遺構はV期に位置付けられる遺物が中心で、その中でも京焼系の陶器が多量に出土している。しかし上部の攪乱により新しい時期の遺物も混入していた。1, 8, 28はその例でその他の遺物のまとまりとは全く別に扱われるものである。

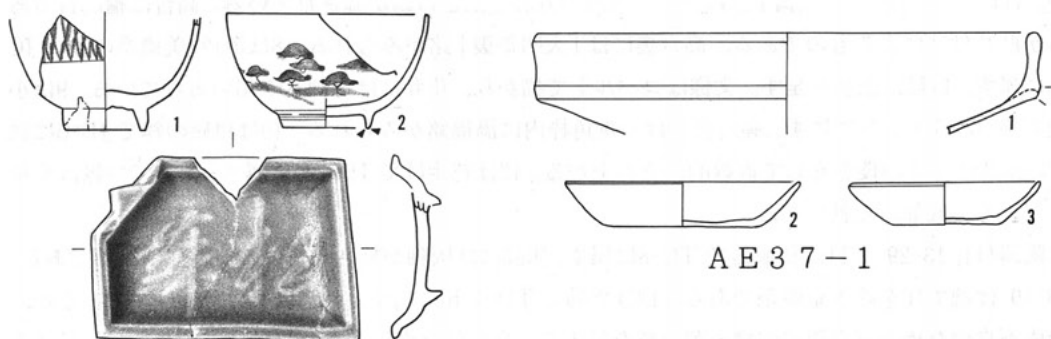
磁器(1-10, 12) 1は摺絵碗でJB-1-pに属す。内外面とも3単位に分割された摺絵が施文され、内面底部は円形の型紙によって施文されている。焼き継ぎ痕がみられる。2-4は染付碗で、2, 4はJB-1-gに属し、3はJB-1-fに属す。2は高台裏に銘がみられる。5は小皿でJB-3-aに属す。高台裏には「大明年製」銘がみられる。6は鍋島様式の皿片でJB-2-nに属す。高台の櫛歯は縁取られていない。7は型皿でJB-4-aに属す。口唇は二段角の方形を呈し口鏽が施されている。高台は輪高台であるが貼り付けによるものである。高台裏には「大明年製」銘がみられる。8は瀬戸・美濃系の鉢でJC-5に属す。口縁は波状を呈す。文様はコバルトで描かれ、花卉には墨弾きが用いられている。9は小型の猪口でJB-7-bに属す。高台裏には二重角枠内に渦福銘がみられる。10は白磁の鉢でJB-5に属す。体部は3条の稜を介して直線的に立ち上がる。12は花生けでJB-22に属す。筒形で口縁はやや肥厚する。底部は無釉である。

陶器(11, 13-29) 11は仏飯器でTC-8に属す。体部には灰釉が施されているが脚部は無釉である。13-19は碗で16を除き京焼系である。13は平碗でTD-1-hに属す。胎土は灰白色で硬質であるが、焼成不良のため高台周辺が橙～黄白色を呈する。高台脇は面取りされ畳付は無釉である。見込みには呉須と鉄絵の具によって笹文が描かれている。14は筒形碗でTD-1-jに属す。胎土は灰白色を呈し硬質である。高台脇は面取りされている。鉄絵の具によって口唇には口鏽が、体部には木が描かれている。15はTD-2-iに属す。胎土は灰白色を呈し硬質である。高台脇は面取りされ、見込みには三箇所ピン痕が認められる。体部には鉄絵の具と白泥によって文様が描かれている。17-19は丸碗でTD-1-bに属す。胎土は黄白色を呈す。17, 18は体部に上絵付けが施されているが、絵の具は剥げ落ちており色調は不明である。19は鉄絵文様が施されている。16はせんじでTC-1-lに属す。体部には鉄絵の具と呉須によって山水?が描かれている。20は水注でTC-27-aに属す。体部には鉄釉が施されている。21は片口鉢でTC-23に属す。口縁内側に突帯を有す。見込みには三箇所のピン痕が認められる。灰釉が施されている。22は土瓶で、TZ-34に属す。脚はない。注口部の穿孔は六箇所である。体部には鉄絵の具によって菊花が描かれている。底部にはススの付着がみられる。23, 24は油壺である。23は瀬戸・美濃系でTC-12に属す。全面施釉され、畳付には溶着のための釉、素地の剥落がみられる。24は備前系でTE-12に属す。底部に刻印がみられる。25は餌入でTC-30に属す。底部には糸切り痕が残る。体部には把手が貼り付けられ、灰釉が施されている。26は落とし蓋でTC-14-aに属す。凹み部分には橋状のつまみが貼り付けられ裏面には糸切り痕が残る。表面には灰釉が薄く施されている。27, 28は行平鍋でTZ-33-bに属す。底部脇三箇所に脚が貼り付けられているがいずれも接地していない。見込みにはピン痕が認められる。29は播鉢でTE-29に属す。底部には外傾する高台を作り出している。口縁は2条の沈線を伴う縁帯と、内側の突帯によって形成されている。

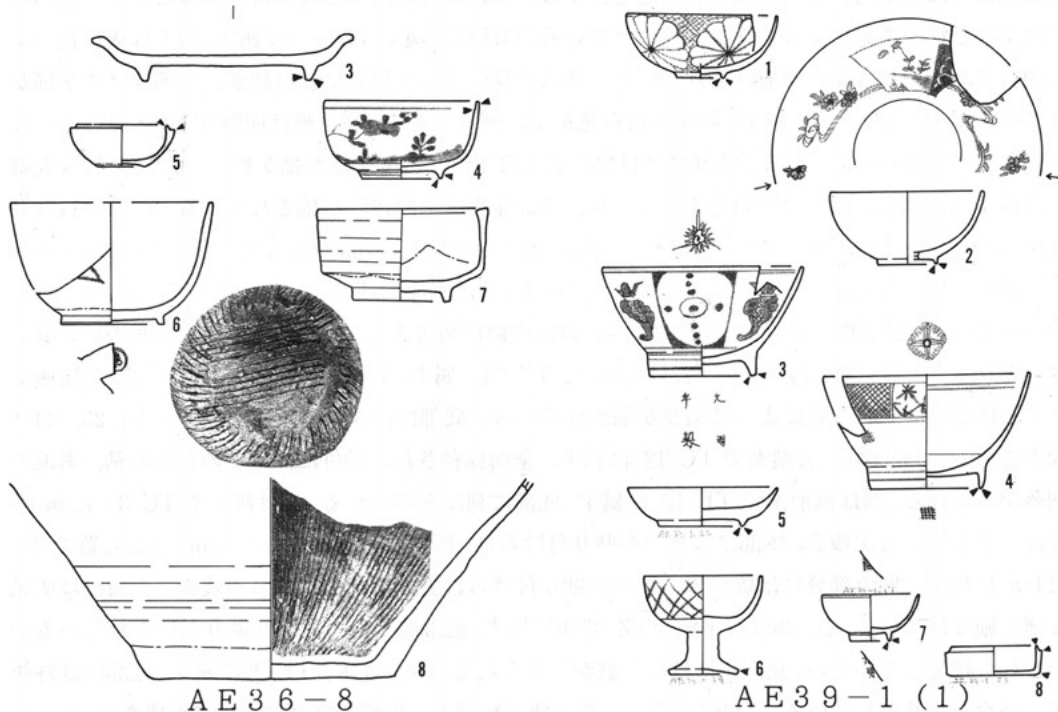
第一節 陶磁器・土器



AE36-5



AE37-1



AE36-8

AE39-1(1)

IV-172 Ⅱ AE36-5, AE36-8, AE37-1, AE39-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

播目は1単位14条で左回りで施文されている。底部は1単位12条の播目で放射状に施文されている。

灯火具(30, 31) 30は志戸呂油皿。底面にヘラケズリ調整が施される。31は素焼受付。銀彩が施される。油痕は認められないが、煤が素地内部にまでしみ込んでいる。左回転の糸切り底。他に透明釉有脚受付の脚部が出土している。

焙烙 32はほぼ完形であり、底面まで様相がわかる。H21-2の79を発展させた形態と考えられる。口縁はさらに短くなり、断面形は三角となる。器面は平滑であり丁寧な調整が施されている。この点は H21-2 の79と同様である。AE36-5の9と同じくここで確認されたもっとも新しいタイプの焙烙である。ただしこの焙烙は他の遺物に伴うものではなく、おそらく流れ込みによるものであろう。他に口縁片は27点確認されている。X36-1の25, 26に類似するもの14点, F33-3の104に類似するもの4点, 同じくF33-3の106に類似するもの3点, AE39-1の30に類似するもの1点, 不明6点の出土である。底部片は28点の確認である。

土器 33は軟質土師質の植木鉢である。底面中央に焼成前の穿孔を有する。外面の下から三分一ほどまでの部分は灰白色、それ以上は橙色を帯びた肌色である。こうしたことからこの植木鉢が棒積みすなわち、入れ子にされて焼成されたことが推定される。

焼塩壺 34はイ類2に分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色を呈する。胎土に雲母を含む。下面には粗い布目が見られる。側面に指頭痕が見られる。このほかに土器、焼塩壺は見られない。

AE36-5 (IV-172図) 磁器(1-4, 7) 1, 2は染付碗でJB-1-dに属す。コンニャク判と手描きを組合せて描かれている。3は白磁の碗でJB-1-dに属す。4は小坏でJB-6-aに属す。7は白磁皿でJB-2-kに属す。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ底部は無釉である。見込みには畳付の溶着痕がみられる。

陶器(5, 6, 8) 5, 6は刷毛目碗でTB-1-dに属す。5は厚手でやや腰が張っている。外面には波状の刷毛目が施され、内面は打刷毛目である。6は両面ともに打刷毛目である。8は見込み銅緑釉皿の底部片でTB-2-aに属す。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ、底部は無釉である。

焙烙(9, 10) 9はAE36-4の32と同じ形態の焙烙である。口縁の断面は三角であり器面全体は丁寧な調整が施されている。10は器高が高く、口縁は直立し、ケズリは屈曲部から屈曲部下に施される。また残存部分から推定すると、底面は下に向かって深く張り出している。F33-3の104-108などに類似した形態となる。

口縁片は他に20点確認されている。不明4点を除き、10と同様F33-3の一群、もしくはK30-1の46, 47などに類似した形態である。このことから9は他の遺物に伴うものではなく、流れ込みの可能性が強い。なお底部片も20点確認されている。

AE36-8 (IV-172図) 磁器(1-4) 1, 2は染付碗である。1はJB-1-bに属す。釉は生掛けで高台内は無釉である。体部には一重の網目文が描かれている。2はJB-1-dに属す。畳付釉際の処理が甘い。3は青磁の型皿でJB-4-aに属す。型打ち成形によって作られ、高台は糸切り細工による貼付高台である。高台裏にはハリ支え痕が一箇所認められる。見込みには文字文様が浮文によって描かれている。同手の製品がAD37-1からも出土している。4は蓋物でJB-13-aに属す。

陶器(5-8) 5は合子でTD-18に属す。丁寧な作りで底部、蓋受けは無釉である。6は京焼風の碗でTB-1-bに属す。高台径は広く、高台裏には一重丸内に「清」の刻印が施されている。体部には

第一節 陶磁器・土器



IV-173図 AE39-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

鉄絵文様が施されている。7は香炉でTC-9-aに属す。灰釉が施されている。8は播鉢でTD-29に属す。胎土は赤褐色を呈し砂粒を多量に混入している。側面の櫛目は1単位7条で右回りに25単位施されている。底部では1単位6条の櫛目が二本平行に施文されている。

AE37-1 (IV-172図) カワラケ(2, 3) カワラケは2点のみの出土である。灯芯油痕は2が疎らに、3が口唇を全周する。ともに左回転の糸切り底。特に2の底径が大きいのが特徴である。左回転の仲間でも古い形態に属する。

焙烙 1は口縁にくびれをもち、ケズリは屈曲部上位をめぐる。口径も小さく、AE36-5の10などに比べ底部も深いものとはならない。ほぼF34-11の191などに類似した形態となろう。他にF34-11の194類似の口縁片も出土している。底部片は1点の確認であるが、1に伴うものらしい。

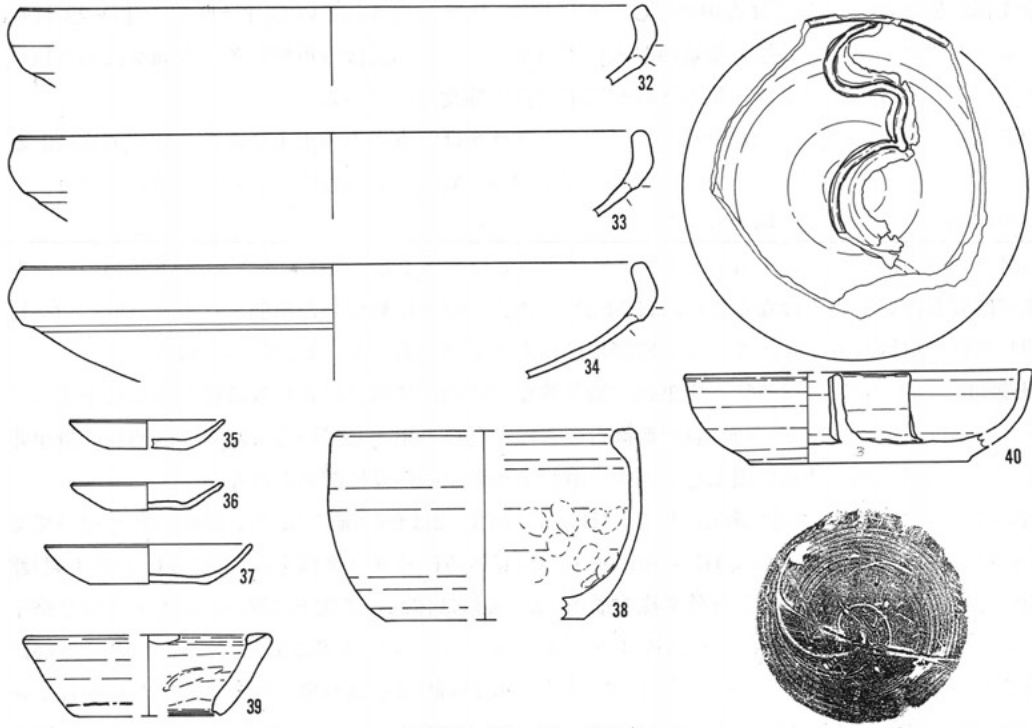
AE39-1 (IV-172~174 図) 広東碗、柳茶碗などVII期に位置付けられる遺物が多量に出土している。図示はしなかったが、蛇ノ目凹形高台の青磁染付皿も出土している。陶器では徳利の量が非常に多く、小杉茶碗も多量に出土している。瀬戸・美濃系の磁器は認められない。

磁器(1-12, 19) 1-4は碗である。1, 2はJB-1-fに属す。2は色絵碗で赤、黒、緑絵の具を用いて文様を描いている。3, 4は広東碗でJB-1-mに属す。3は見込みに花卉状文様を高台裏には「大明年製」銘を描いている。4は見込みには花卉状文様を描き、高台裏には体部の帯文下に描かれたものと同じ格子目が描かれている。5は白磁の小皿でJB-3-bに属す。6は仏飯器でJB-8に属す。粗雑な作りで底部は無釉である。7, 19は小坏でJB-6-aに属す。7の見込みには福字が、高台裏には「大明」銘が描かれている。19は焼成不良のため釉に多量の白斑が認められる。8は白磁の合子でJB-18に属す。底部は無釉である。9は蓋物でJB-13-aに属す。体部は腰が張り丸文を散らしている。10は広東碗の蓋でJB-1-mに属す。両面に広東碗特有の文字文様が描かれている。つまみ内にも銘が描かれている。11は小坏でJB-6-bに属す。口縁が外反する。見込みには手描きによって五弁花が描かれている。12は猪口でJB-7-bに属す。見込みには手描きによる五弁花、高台裏には二重角枠内に渦福銘が描かれている。

陶器(13-18, 20-24) 13, 14は柳茶碗でTC-1-gに属す。胎土は灰褐色を呈し硬質である。体部には鉄絵の具によって柳文様が描かれている。14の高台裏には同心円状に集合沈線が施されている。15, 16は小杉茶碗でTD-1-dに属す。胎土は黄白色で緻密である。高台脇は面取りされている。16には鉄絵の具による小杉文様が描かれている。17は瀬戸・美濃系の京焼風色絵碗でTC-1-mに属す。京焼系の丸碗に比べ素地のきめが粗く軟質で器厚も厚い。高台はやや外傾するが、脇の面取りはみられない。体部に緑絵の具によって草が描かれている。18は京焼系の碗でTD-1に属す。体部は丸く膨らみ口縁で外反する。釉は白泥を施したうえに掛けられている。20は京焼系の小坏でTD-6に属す。体部には鉄絵の具と呉須によって文様が描かれている。21は香炉でTC-9-aに属す。底部は無釉で高台裏に墨書がみられる。22, 23は半胴甕で、TC-26-aである。錆釉が施されている。22の底部は穿孔され植木鉢として再利用されている。23は見込みに三箇所が目痕がみられ、口唇の一部にも溶着痕がみられる。24は水甕でTC-5-eに属す。見込みには三箇所が目痕がみられる。体部には太沈線による渦巻文様と刺突文が施されている。部分的に鉄釉を掛けたうえに灰釉を施している。底部無釉。

徳利(25, 26) 25, 26は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。25では口唇部は薄めに折り返されて頸部はまだ長く、最大径は胴上部にある。胴部下端の釉は拭き取られてい

第一節 陶磁器・土器



AE39-1(3)



AF35-1(1)

IV-174图 AE39-1(3)、AF35-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

るものの、高台の削りは浅く雑である。26では口唇部の折り返しはやや厚く、頸部も短く、寸胴に近付いている。胴部下端はつけ掛けのため無釉である。2合半徳利、5合・1升徳利がそれぞれ130個体ほど出土している。志戸呂産徳利はごく僅かで、瀬戸美濃産鉄釉系徳利は1片のみである。

灯火具(27-29) 27, 28は透明釉である。27は油皿, 28は有脚受付である。27に灯芯油痕が疎らに付着する。左回転の糸切り底。29は素焼の有脚受付。銀彩が施される。他に透明釉が2点出土している。1点は油皿, 他はカンテラの一種かと考えられる底部片であるが明確ではない。

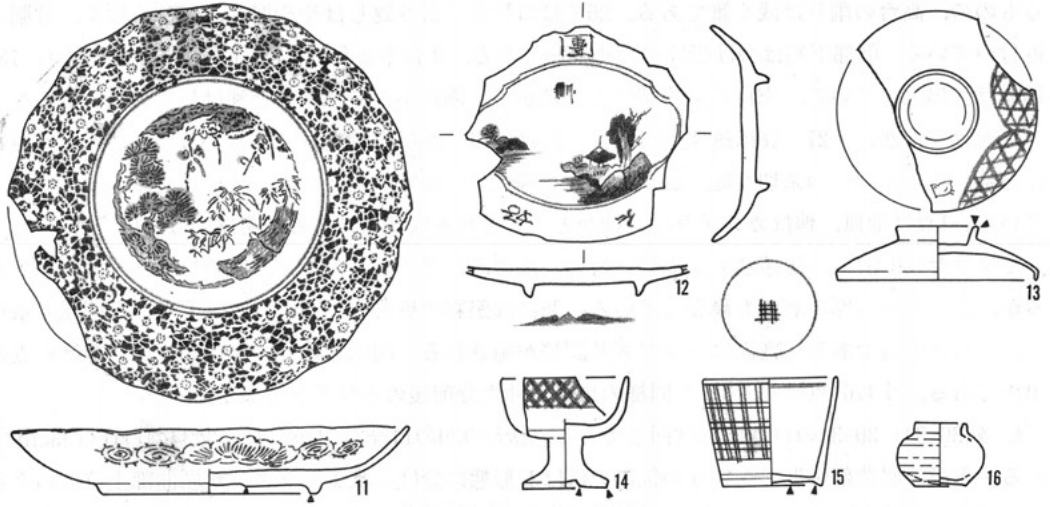
カワラケ(35-37) 灯芯油痕は35の口唇の一端のみに認められる。35, 36の口径はほぼ同じであるが、35の器壁は厚く形態も異なっている。35には銀彩の痕跡が認められた。ともに左回転の糸切り底。37は上製である。底面にヘラケズリ調整が施される。図示したものを含めカワラケは8点の出土である。うち6点は35, 36と同様の口径二寸六分前後のカワラケである。

焙烙(30-34) 30-34の口径はほぼ同じである。最大の30の口径34.2cm, 最小の34の口径は33cmである。下段の屈曲部付近のケズリの位置ではほぼ3形態に分けられる。ケズリが屈曲部上位にめぐるもの(32), 屈曲部にめぐるもの(30, 34), 屈曲部下位にめぐるもの(31, 33)の3形態である。器面の調整やケズリの仕方などはよく類似しており、これらの焙烙はほぼ同時期に位置づけられると思われる。器形の点では32はE22-1の50, 52に、30, 34はAE35-11の17に、わずかに違いもあるが31, 33はAE34-3の24にそれぞれ類似している。32とE22-1の50, 52を比較すると、32の口縁の方が薄くなり器面の調整も丁寧であることが理解される。したがってAE39-1出土の一群の焙烙はAE34-3, AE35-11同様、ほとんどがE22-1に後続すると考えられる。

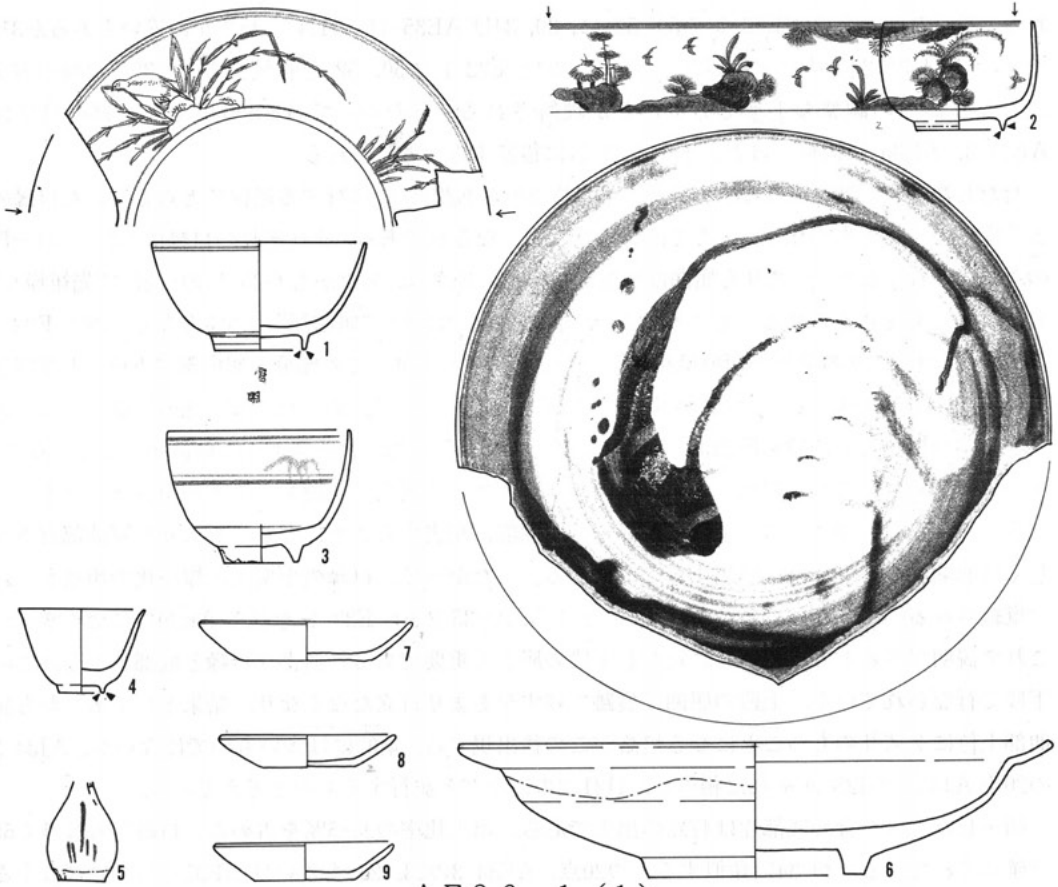
ただし次の点が問題となる。すなわちAD35-2からE22-1に移行する過程でとらえられた口縁のより深い内湾化と短小化が、ここでは認められなくなる点である。それぞれの口縁はE22-1の一群のそれより高くなり、ケズリも屈曲部や屈曲部上位に施され、あたかもG26-1の一群に“先祖帰り”したようにもとらえられる。ところでこの一群の焙烙ではその“屈曲部”が問題となる。32とE22-1の50, 52のケズリの位置の類似は指摘したが、E22-1では単にこの部分を屈曲部“下位”と説明している。E22-1の50, 52では口縁の屈曲がケズリを挟んで二段認められたが、他の一群の焙烙との形態上の類似から上の段を屈曲部としたため、ケズリも必然的に屈曲部下位に位置することになる。30-34の口縁も注意して観察すると、ほぼケズリを挟んで屈曲が二段あることが明らかになる。この点からいうなら30-34でも上の段が従来の屈曲部に相当することになり、ケズリも屈曲部直下もしくは屈曲部のやや下方に位置することになる。したがって、口縁の小型化・短小化の現象もこれで継続されるのではないだろうか。いまのところ、AD35-2からE22-1を経てAE39-1に至る変遷がこれで説明できると考えている。ただし下段の屈曲も重要である。何より口縁と底部の接合はこの下段で行なわれている。上段の屈曲は痕跡を残すがあまり目立たなくなり、結果としてあたかも屈曲部上位にケズリのもつことになる焙烙がこの後出現する。量的には多いものではないが、AJ34-2の20やAJ35-1の123がそれに相当し、H21-2の79などと並行するものと考えている。

図示したものを含め底部片は47点の出土である。出土比率の24.5%を占める。口縁片も数多く50点確認されている。30-34に類似するもの20点、AE34-3の23, 24あるいはAE35-3の20に類似するもの26点、AD35-2の31に類似するもの1点、小型でAE34-3の23, 24に類似するもの1点、不明2

第一節 陶磁器・土器



AF35-1(2)



AF36-1(1)

IV-175 図 AF35-1(2)、AF36-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

点である。

土器(38-40) 38は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面は横にケズられ、墨と思われる黒色の塗料が塗布されている。内面には夥しい指頭痕が見られ、その上面がナデられている。39は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上端は平坦であり、切り欠きが設けられている。外面は丁寧にナデられている。内面は火熱による白色の皮膜に覆われている。40は軟質土師質のカワラケ様の容器。体部はロクロ成形であり、内側に褶曲する仕切りが設けられている。この仕切り自体もロクロ水挽き痕に似た横の細かい条線が観察され、あるいはロクロ成形のカワラケ状の製品を一旦つくって、それを利用したものであるかもしれない。胎土に雲母を含む。底面には、「離し糸切り」の技法による回転糸切り痕が見られる。このほかに土器はなく、焼塩壺イ類2の蓋の小片1, III類の焼塩壺の小片5が見られるのみである。

AF35-1 (IV-174, 175図) 本遺構の出土遺物は近・現代の製品で緑化クロムの染付線をもつものが半数以上を占める。「好仁會」のほか「東大醫院」銘も多い。

磁器(1-15) 1-8は碗である。1-3は端反碗である。1, 3は肥前系でJB-1-nに属す。2は瀬戸・美濃系でJC-1-dに属す。ともにコバルトによって、文様が描かれている。3は内側面に「財団法人好仁會」と描かれている。4-6は瀬戸・美濃系の飯碗でJC-1-fに属す。5は6の蓋である。4は6に比べ高台が高く外傾する。コバルトによって文様が描かれているが、5, 6のつまみおよび高台裏に同一の銘がみられる。6は二次焼成のため釉が変質している。7は碗でJC-1に属す。口縁外側に緑化クロムによって二条の線が描かれている。高台裏には「日陶製」のゴム印が押されているが、これらは1904年に設立された日本陶器株式会社の製品であることを示す(加藤唐九郎 1972)。8は湯呑碗でJC-1に属す。口縁外側には緑化クロムによって二条の線と「會」が書かれている。欠損のため断言はできないがおそらく「好仁會」と描かれていたのだろう。高台裏にはゴム印により「美濃窯業製, MINO YOUNGYO LTD」と扇子のマークが押されている。これらは大正14年に設立された美濃窯業株式会社の製品で陶磁器生産が戦中下の統制を受ける以前の昭和初期の製品である。9, 10は小皿でJC-3-aに属す。9の見込みには陰刻による文様にダミが掛けられている。10の口縁の内側には緑化クロムにより二条の線が施され高台裏には「日陶製」のゴム印が押されている。11は蛇ノ目凹形高台の皿でJC-2-aに属す。口縁は8単位の輪花を形成している。文様は全て型紙摺りによるもので見込み側面の型紙は7分割されたものである。焼き継ぎによる補修痕がみられ、高台裏には焼き継ぎ屋の印が描かれている。12は皿でJB-2に属す。ロクロ成形の後、体部を木瓜状に型打ち成形している。見込み、外側面ともに3の碗と同じ文様が描かれ、同時に注文したものであろう。13は蓋でJC-14に属す。14は仏花器でJB-8に属す。豊付幅が広く凹み部分は施釉されている。15は猪口でJB-7-aに属す。蛇ノ目の無釉部に窯道具の溶着痕がみられる。

陶器 16は小物でTE-35に属す。底部には、糸切り痕がみられる。体部に鉄釉が薄く施されている。

AF36-1 (IV-175, 176図) 磁器(1-5) 1-3は碗である。1, 2はJB-1-cに属す。1は文様が線描のみで描かれている。高台裏には「宣明」銘がみられる。2は腰が張っている。3はJB-1-bに属す。釉は生掛けで高台は無釉である。4は白磁の小坏でJB-6-bに属す。5はミニチュアの瓶でJB-35に

第一節 陶磁器・土器

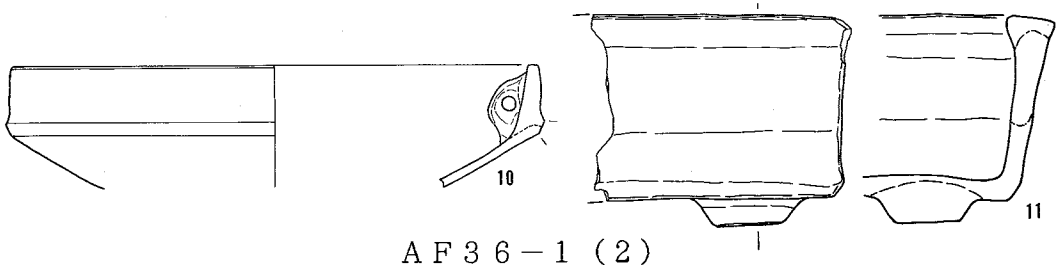
属す。底部には糸切り痕を残す。釉は生掛けである。

陶器 6 は鉢で TB-5-a に属す。窯積みは砂胎土目によるもので、見込みには砂が溶着し、畳付は剥落している。見込みには刷毛目が施され鉄釉と銅緑釉が流し掛けされている。

カワラケ(7-9) 図示したものの口径は三寸強。7には灯芯油痕はなく、8は口唇を全周、9は一部分のみ認められる。7は AE37-1の2, 3 に似た形態である。8, 9はわずかに器高が異なるが底径が大きく、ほぼ同じ形態である。3点とも左回転の糸切り底である。他に 6点の確認である。二寸五分前後のもの 3点, 8, 9に類似するもの 2点, 7に類似したもの 1点の出土である。カワラケの様相は H29-1 に似ており、ほぼ17世紀後半に位置付けられる。

焙烙 10は内耳を持つ焙烙である。底部を欠くが、口縁はほぼ半周する。内耳は二つ確認されている。配置から考えて内耳は 3個ついていたらしい。口径28cm。口縁は直立し、ケズりは屈曲部から屈曲部上位をめぐる。AE33-3の4 に類似した器形であるが、口径が小さく胎土・作りも貧弱である。むしろ AE37-1の1 に類似した形態である。ほぼ F34-11かそれ以前に位置付けられると考えられる。底部片もいくつか出土しているが、10に伴うものであるらしい。口縁部片の出土はない。

土器 11は 1類 c に分類される軟質瓦質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われるが一辺の長さは不明である。外面は剥落が激しいが、辛うじて横のケズりが観察しうる。また底面と交わる部分は強くケズられて面を構成している。内面は横にナデが走り、隅では縦にナデが加えられている。底面外側にはコビキ痕が見られる。足は接地面が擦り切られたようになっており、安定を保つための加工と思われる。このほか軟質瓦質の火鉢類の破片が1 個体、I類に属す焼塩壺の身の小片が 1点見られるが、これらはいずれも比較的古い、おそらくは17世紀代後半に属するものである。



AF36-1 (2)

IV-176図 AF36-1出土遺物(2)

4 給水設備棟地点の遺構出土の陶磁器・土器

AJ33-1 (IV-177図) 本遺構中からは周囲の AJ34-1・2, AJ35-1 と同様おびただしい量の遺物が確認されており、数量的な事と時期的にもまとまりを有する点で幕末の良好な資料といえよう。本遺構と先に挙げた 3遺構はともに切り合い関係にあり、遺物群の出土状況、組成、内容等がほとんど同様であるので、詳細はもっとも遺物量が多い AJ35-1に掲載し、他の3 遺構は目に付いた遺物や時期を代表していると考えられる遺物のみを選択して掲載したにとどめた。遺物は二次焼成は受けていない。本地点ではVIII期に位置する。

第IV章 江戸時代の遺物

磁器(1, 3) 1はJC-1-cである。呉須は濃青色に発色し、地呉須を用いていると考えられる。3はJC-1-dである。器面は口縁部帯文は墨弾き、下半は毛彫りの手法が用いられる。

陶器(2, 4, 5) 2はTD-1-gである。灰釉が施され、全体に細かい貫入が認められる。4は御深井風の水注で、TC-27-bである。胴部には鉄絵の具で花文が摺絵されている。底部は無釉。5は柿釉鍋で、TZ-33-aに分類される。底部にはススが多量に付着している。内面にはピン痕が認められる。

徳利 6は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利が600個体以上、5合・1升徳利が300個体以上ときわめて大量に出土している。志戸呂産徳利は少量が認められるのみである。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利も20個体ほどが見られるに過ぎない。

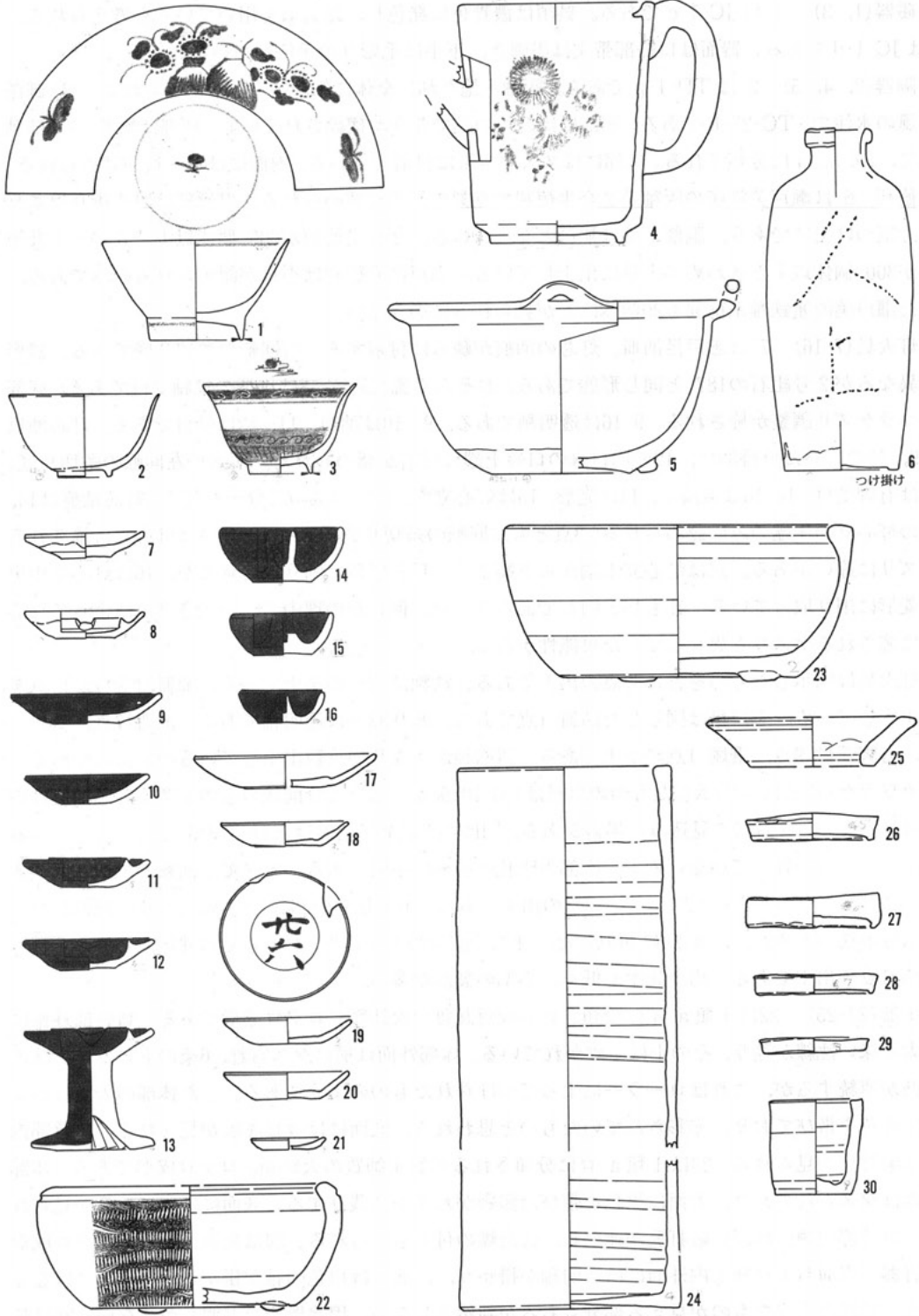
灯火具(7-16) 7は志戸呂油皿。灯芯の油痕が疎らに付着する。右回転の糸切り底である。器形は異なるが2号組石の187と同じ形態である。おそらく流れ込み。8は小型の鉄釉受付である。底部にヘラケズリ調整が施される。9-16は透明釉である。9, 10は油皿, 11, 12は受付である。灯芯油痕は9, 10の口唇に痕跡的に、12の内口縁の口唇上端に付着が認められた。すべて左回転の糸切り底。13は有脚受付。14-16は乗燭で、14は完形。15は灯心立を、16は口縁の二分一を欠く。灯芯油痕は14, 16の灯心立の先端のみに認められる。3点とも左回転の糸切り底。なお14と16には灯心立に施されるケズリに違いがある。14は灯心立上端から下端まで「U」字形に削り取られるが、16は灯心立中央を菱形に削り取っている。15も16と同じであるらしい。何らかの理由(工人・大きさ?)によって灯心立に施されるケズリも異なっていた可能性がある。

灯火具は図示したものを含め37点の出土である。鉄釉は2点の出土である。油皿, 受付が1点ずつ出土している。志戸呂は図示した油皿1点である。残り33点は透明釉である。油皿17点, 受付3点, 有脚受付9点, 乗燭1点の出土である。透明釉がかなりの点数出土しているのが特徴である。

カワラケ(17-21) 図示したものの口径は4.6-10.9cm。二寸五分前後のものが多く灯芯油痕はいずれにもない。なお19の見込みに墨書がある。「廿六」と読める。21はE34-3の5と同じ形態であるが、三分一しか残っていないので、底部の穿孔の有無は不明である。すべて左回転の糸切り底である。図示したものを含めカワラケは17点の出土である。出土比率の2%にすぎない。17に類似した三寸六分前後のもの2点, 18-20に類似した二寸六分前後のもの14点, おそらく六寸以上と考えられるもの1点の出土である。出土比率が低く、小型の製品が多い。

土器(22-25) 22は1類aイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。口唇部外側には太く深い沈線が巡り、その上はミガかれている。体部外面は横にケズられ、6条のトビガンナ状の凹凸が連続するが、これはローラーによってつけられたものようである。また体部の表面はわずかに赤色を帯びており、赤彩されていたものと思われる。底面にはコビキ痕が見られる。口唇部内側に敲打痕が見られる。23は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面はケズられており、表面に黒色を帯びた銀彩がわずかに残存する。底面にはコビキ痕が見られる。口唇部内側には弱い敲打痕が連続し、また煤の付着も見られる。24は軟質土師質のロクロ成形の容器。内面および底部内外面には透明釉が掛かり、外面には白色の釉が掛かる。釉の下にはなんらかの模様のようなものが見える部分もあるが判然としない。用途機能など明らかでない。25は軟

第一節 陶磁器・土器



IV-177図 AJ33-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

質土師質の五徳。輪積み成形である。上端は平坦であり切り欠きの部分は残存していない。外面は丁寧にナデられている。内面は火熱による白色の皮膜に覆われている。このほか硬質瓦質の火鉢類が2 個体分と軟質土師質の火鉢類が10個体分見られる。土師質の製品の中には風炉と思われるものの口縁部片を含む大小の火鉢類である。

焼塩壺(26-30) 26はI類2に分類される蓋。桃色を帯びた褐色を呈する。胎土にわずかに雲母を含む。上面は側面と鋭角をなし、中央の盛上るやや特異な形態をもつ。下面には粗い布目が見られる。27はI類2に分類される蓋。やや赤みを帯びた褐色である。胎土に雲母を含む。下面には粗い布目が見られる。28はI類1 e に分類される蓋。わずかに橙色を帯びた褐色を呈する。29はウ類に分類される蓋。濃い桃色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面および側面は比較的均整がとれている。30はIII類 e に分類される身。刻印はない。胎土に微量の雲母を含む。このほか2 点のウ類の蓋と10点ほどのIII類の身の小片が見られる。

AJ34-1 (IV-178, 179図) 本遺構中からは陶磁器類、土器類、カワラケ、灯火具等多種の遺物が多量に確認されており、時期的にもまとまりを有する。遺物は二次焼成は受けていない。本地点ではVIII期に位置する。

磁器(1-4) 1は青花皿でJA-2に分類される。高台裏には高台に沿って三箇所の窯道具の溶着痕が認められる。痕跡はハリ支えと同様であるが中国の磁器はハリ支えはなく、また施されている部位が違うため性格を異としていられる。高台裏には「富貴佳器」の銘が描かれている。焼き継ぎされており、高台裏に「平」の焼き継ぎ印が記されている。皿は明末の特徴が認められ伝世品が19世紀に焼き継ぎされたものと考えられる。2はJC-1-eである。地呉須を使用している。3はJB-1-mである。作り、絵付けはラフで、胎土、呉須の発色は悪い。4は染付仏飯器でJB-8に分類される。

陶器(5, 7) 5はTE-29である。播目は見込み中央は7単位を放射状に、体部は13条1単位で、22単位で一周している。底部と体部の境より引き上げられ口縁部はなで丁寧揃えられている。縁帯は部分的に面取りされているが、それ以外では張りは顕著である。外側面の削りは認められない。本類ではもっとも新しく位置付けられるものであろう。7はいわゆる爛徳利で、TD-10に分類される。口縁から頸部に緑釉が流し掛けられている。底部脇は面取りされている。

徳利 6は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書がある。口唇部は厚く折り返され寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利がおそらく500 個体以上、5合・1升徳利が300 個体以上ときわめて大量に出土している。志戸呂産徳利は少量が認められるのみである。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利も20個体ほどが見られるに過ぎない。

灯火具(8-18) 8-11は灰釉系である。8は油皿。口唇外側の釉の施されない部分に灯芯油痕が付着する。また見込みに3単位の櫛目とピン痕が認められる。9, 10は同じ形態の受付である。油痕は9の内口縁の口唇と釉の施されない裏面全体に認められる。単独で油皿として用いられた可能性のある受付である。3点とも完形であり底面はへラケズリ調整がなされる。11も灰釉系であるが、8-10と生産地が異なり瀬戸・美濃製品とされる。油皿に受け皿を接合させた陶胎の灯火具である。類例は多くはない。釉は重ね焼きのためか油皿口唇および受け皿裏面には施されない。油皿口縁は外反するが、口唇は平らでありやや内側に折り曲げられている。口唇には灯芯油痕もある。受け皿の口唇

第一節 陶磁器・土器



IV-178図 AJ34-1出土遺物(1)

第IV章 江戸時代の遺物

もやや内側に折り曲げられ、底面は削り込み高台となる。裏面には油痕も認められる。18世紀中葉の製品とされている（藤澤 1989）。12, 13は鉄釉。同じく瀬戸・美濃製品である。12は油皿, 13は受付である。ともに灯芯油痕は付着せず、底面にヘラケズリ調整が施される。13の受付は2号組石の183-185に比べ、底径が極端に小さいものとなり、鉄釉受付でも新しい形態に属するものである。14-18は透明釉である。14は油皿。灯芯油痕が疎らに認められる。15, 16は受付。灯芯油痕は15の器面全体に認められる。直接“油皿”として用いられた可能性がある。また理由はわからないが、内口縁の口唇が部分的に削り取られていた。17は有脚受付。油痕が口唇の一端に認められる。18は乗燭。完形である。灯芯油痕は灯心立の先端のみに認められる。有脚受付を除きすべて左回転の糸切り底である。

灯火具は図示したものを含め24点出土している。灰釉・鉄釉は図示したもの6点の出土である。銀彩の施された素焼受付も1点出土している。他はすべて透明釉である。油皿3点, 受付4点, 有脚受付9点, 乗燭2点の出土である。AJ33-1同様、透明釉が非常に多いのが特徴である。

カワラケ(19, 20) 19, 20は2点とも完形に近い。ともに灯芯油痕が口唇を全周する。口唇などに違いも認められるが、底径が小さく、2点とも透明釉油皿の器形に近い。19には銀彩が施され、20もその可能性がある。あるいはもっとも新しい形態のカワラケであるのかもしれない。他には六寸以上と考えられる大型のカワラケ底部片が出土しているにすぎない。出土比率は0.4%である。

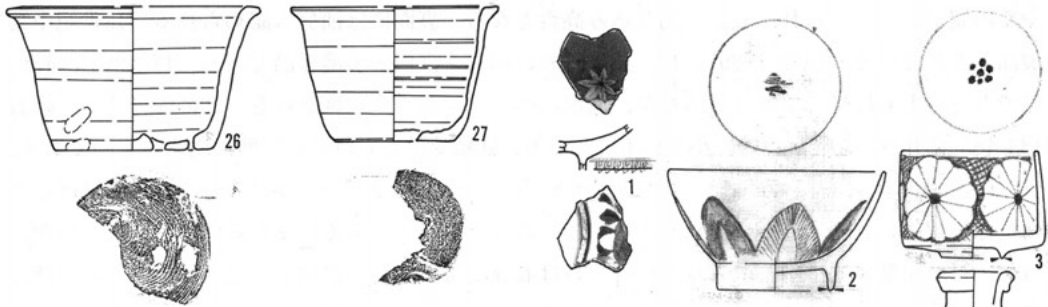
焙烙(21, 22) 21の口縁は湾曲せず直立するが、ケズリは屈曲部下位に施され、器壁も薄く調整も丁寧である。H22-1の79などと対をなす小型の焙烙と考えている。22は蓋。つまみを欠くがおそらく径3cmほどの小型のつまみがついていた可能性がある。時期が新しくなるにつれ、つまみが小型化する傾向にあるようである。他に焙烙の底部片は8点出土している。口縁片は多く29点の出土である。21に類似のもの1点, H22-1の79に類似のもの13点, AJ34-2の20に類似のもの2点, 口縁がいくぶん長いAL37-1の96に類似のもの11点, 不明2点の出土である。蓋も7点出土している。

土器(23-27) 23は1類bイに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面は横のミガキが施され平滑である。内面も比較的丁寧にナデ調整されている。底面には砂粒の痕が見られる。24は軟質土師質の五徳。輪積み成形である。上端は平坦であり切り欠きが設けられている。外面は丁寧にナデられている。表面にわずかに漆喰と思われる白色の物質が付着している。内面は火熱による白色の皮膜に覆われ、その下は黒色化している。25は硬質瓦質の火入れ。ロクロ成形である。底部付近の破片であるが体部外面にトビガンナ状の模様が施されていることが観察できる。底面にはコビキ痕が見られる。26, 27は軟質土師質の植木鉢である。27は底面中央に焼成前の穿孔が一つあるが、26は焼成後の穿孔を中央からはずれた位置に二つ有する。このほか軟質瓦質の火鉢類の破片2個体分, 軟質土師質の火鉢類の破片5個体分, III類の焼塩壺の身の破片1点が見られる。

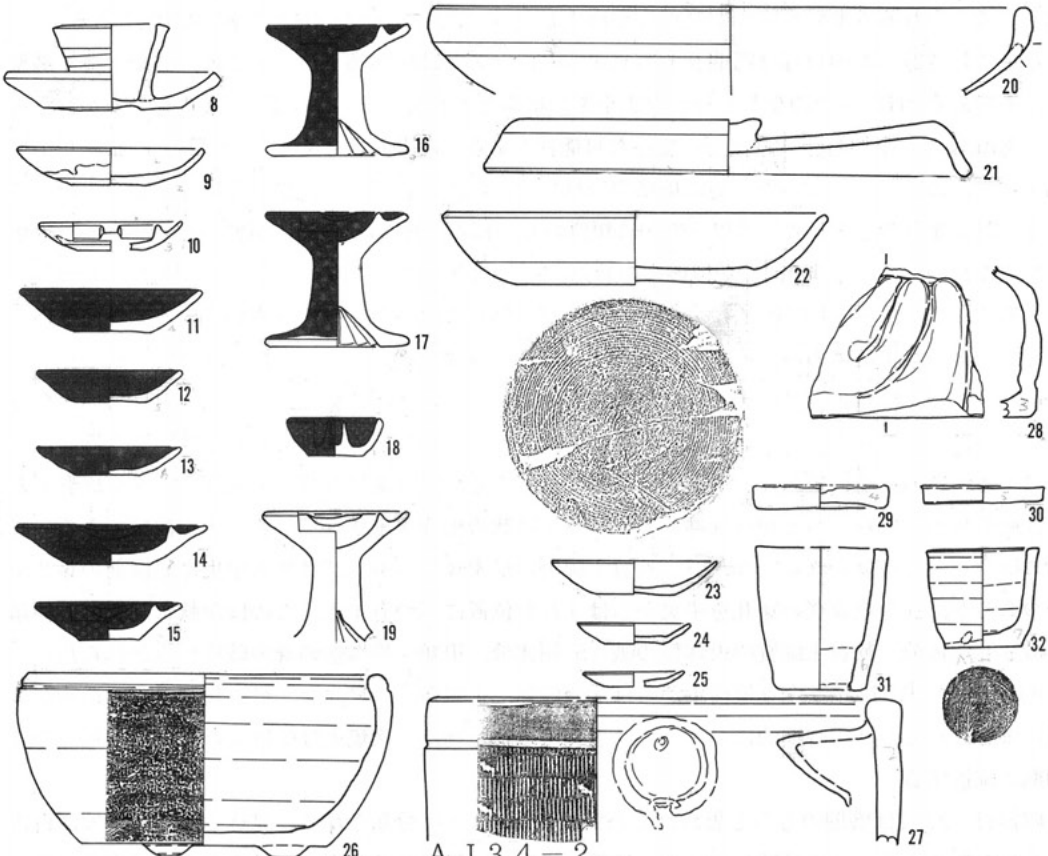
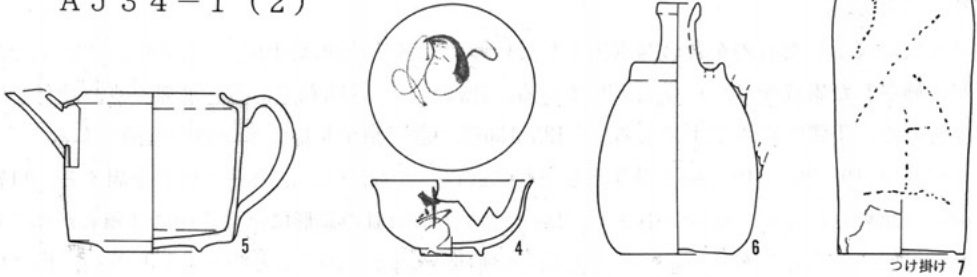
AJ34-2 (IV-179図) 本遺構中からは陶磁器類, 土器類, カワラケ, 灯火具等多種の遺物が多量に確認されており, 時期的にもまとまりを有する。遺物は二次焼成は受けていない。本地点ではVIII期に位置する。

磁器(1, 2) 1は盛期のものと思われる色鍋島でJB-2-nに分類される。見込みは薄瑠璃地に白抜きされた紅葉を朱で上絵付けしている。通常の鍋島とは異なり外側面は牡丹唐草文の三方割, 高台

第一節 陶磁器・土器



A J 3 4 - 1 (2)



A J 3 4 - 2

IV-179図 AJ34-1(2)、AJ34-2出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

は花卉? 状の連続文が描かれている。2は JC-1-c である。焼き継ぎの痕跡が明瞭に観察される。

陶器(3-5) 3は太白手で TC-1-i に分類される。胎土は灰褐色で呉須は地呉須を使用している。4は灰釉鉄絵碗で TD-1 に分類される。底部は無釉である。5は鉄釉の水注で TC-27-b に分類される。底部と内外面には多量のススが付着している。

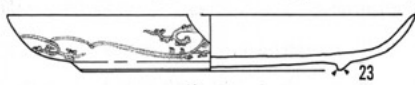
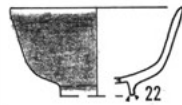
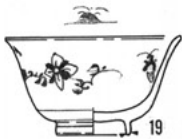
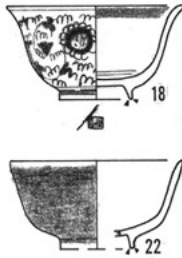
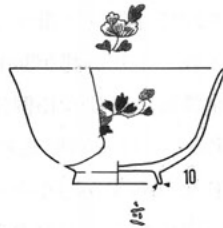
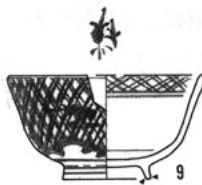
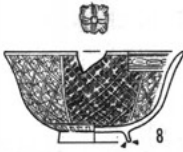
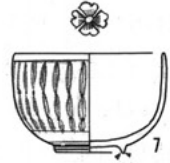
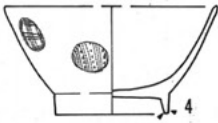
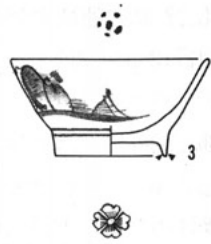
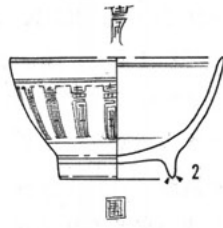
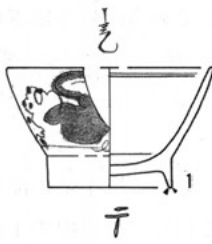
徳利(6, 7) 6は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利で容量的には小型の部類に属する。肩部にはおそらく零受けのためかと思われる浅い溝が環状に回っており、その中の1箇所には空気穴が設けられている。またこの空気穴の開いている側の胴上部には把手が付けられている。胴部にはくぼみは見られない。いわゆるぺこかん徳利、備前写と呼ばれる鉄釉系徳利の中でも6のようなタイプのものを特に油徳利と呼ぶことがあるようである。7は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。2合半徳利がおそらく600個体以上、5合・1升徳利が300個体以上ときわめて大量に出土している。志戸呂産徳利は少量が、瀬戸美濃産鉄釉系徳利も15個体ほどが見られるに過ぎない。

灯火具(8-19) 8はAJ34-1の11と同形態の灯火具である。油皿に受け皿を接合させた灰釉系の灯火具である。AJ34-1の11よりわずかに小さい。釉は油皿口唇および受け皿裏面には施されない。口縁と受け皿のつくりも同様である。裏面のみ油痕が認められる。9, 10は鉄釉。9は油皿, 10は受付である。9の口唇のみ灯芯油痕が付着する。ともに底面はヘラケズリ調整による。9, 10とも底径が小さいものとなり、AJ34-1の13同様、鉄釉系の中でも新しい形態に属すると考えられる。なお9の見込みに重ね焼きの痕跡が認められる。11-18は透明釉である。11-13は油皿。3点ともほぼ完形であり灯芯油痕もそれぞれの口唇ばかりではなく器面内外面に及ぶ。14, 15は受付、ともに灯芯油痕は認められない。16, 17は有脚受付。口径は同じであるが、器高がわずかに異なる。油痕の付着はない。18は乗燭。灯芯油痕は灯心立の先端にのみわずかに認められる。16, 17を除きすべて左回転の糸切り底である。19は素焼有脚受付である。油痕は器面内外面のところどころに認められる。なお二次焼成を受けているため、銀彩が施されていたかどうかは不明である。灯火具は図示したものを含め38点の出土である。灰釉系は図示した1点のみであるが、他に受付の口縁片も出土している。鉄釉は油皿5点、受付2点の出土である。そしてここでも透明釉がもっとも多く出土している。油皿14点、受付6点、有脚受付9点、図示した乗燭1点の出土である。19以外、素焼受付も1点出土している。

カワラケ(22-25) いずれにも灯芯の油痕はない。22の切り離しは左回転の「離し糸切り」による。25はAJ33-1の21と同形態のカワラケである。23-25は左回転の糸切り底である。カワラケは12点の出土。出土比率の1.8%にすぎない。図示した以外はすべて、三寸前後のカワラケである。

焙烙(20, 21) 20の器壁は薄く調整も丁寧な焙烙である。ただし口縁は直立しケズリは屈曲部上位に施される。AE39-1で説明したようにこの焙烙は屈曲部が問題である。口縁中位にも別の屈曲が痕跡的に認められるが、この屈曲が本来の屈曲部と考えている。この時期この屈曲部下段の下段の屈曲が目立つため、あたかも口縁が直立しケズリが屈曲部上位に施された焙烙が出現するように思えるのである。21は蓋で径3.4cmのつまみがある。他に焙烙の底部片は45点出土している。出土比率の6.5%を占めるにすぎない。口縁片は26点の出土である。口縁片は20に類似のもの5点、H22-1の79に類似のもの6点、口縁形はわずかに異なるがAL37-1の96に類似のもの6点、AJ34-1の21に

第一節 陶磁器・土器



大
明
化

AJ35-1(1)

大
明
化

IV-180 圖 AJ34-4, AJ35-1(1) 出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

類似したもの 1点、F33-3の一群に類似し流れ込みと考えられるもの 5点、不明 3点の出土である。蓋も他に2点の出土、つまみのみのものも2点確認されている。2点のつまみは21に似る。

土器(26-28) 26は1類 a イに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。口縁部外側には沈線が巡り、その上の口唇部には弱いミガキが施されている。沈線の下体部外面にはローラーによるチリメン状の凹凸がつけられている。底面にはコビキ痕が見られる。内面にはわずかに漆喰と思われる白色の物質が付着している。27は2類 a に分類されと思われる硬質瓦質の火鉢類の口縁部片。輪積み成形である。内面には乳房状の大きな突起が貼付されている。突起は中空で下面、体部と接する部分に孔が開いている。体部外面口縁部の下には幅の広く浅い沈線が走り、その上は口縁上面までよくミガかれている。沈線の下にはローラーによるトビガンナ状の凹凸がつけられている。28は軟質土師質の型作り成形の製品。表面には型に押し込まれた際に生じたと思われる細かい亀裂が見え、わずかに布目も観察できる。赤色の塗料も塗布されていたと思われる。内面はほとんど全面を指頭による圧痕が覆っている。側面を型にて作ったのち、底面を貼付し外側の接合部がケズられたものと思われる。小破片で全体の姿は明らかでないが他遺跡(真砂遺跡)の類例から見て達磨の形の火入れの一部と思われる。このほか4個体分の軟質土師質の火鉢類の破片が見られる。

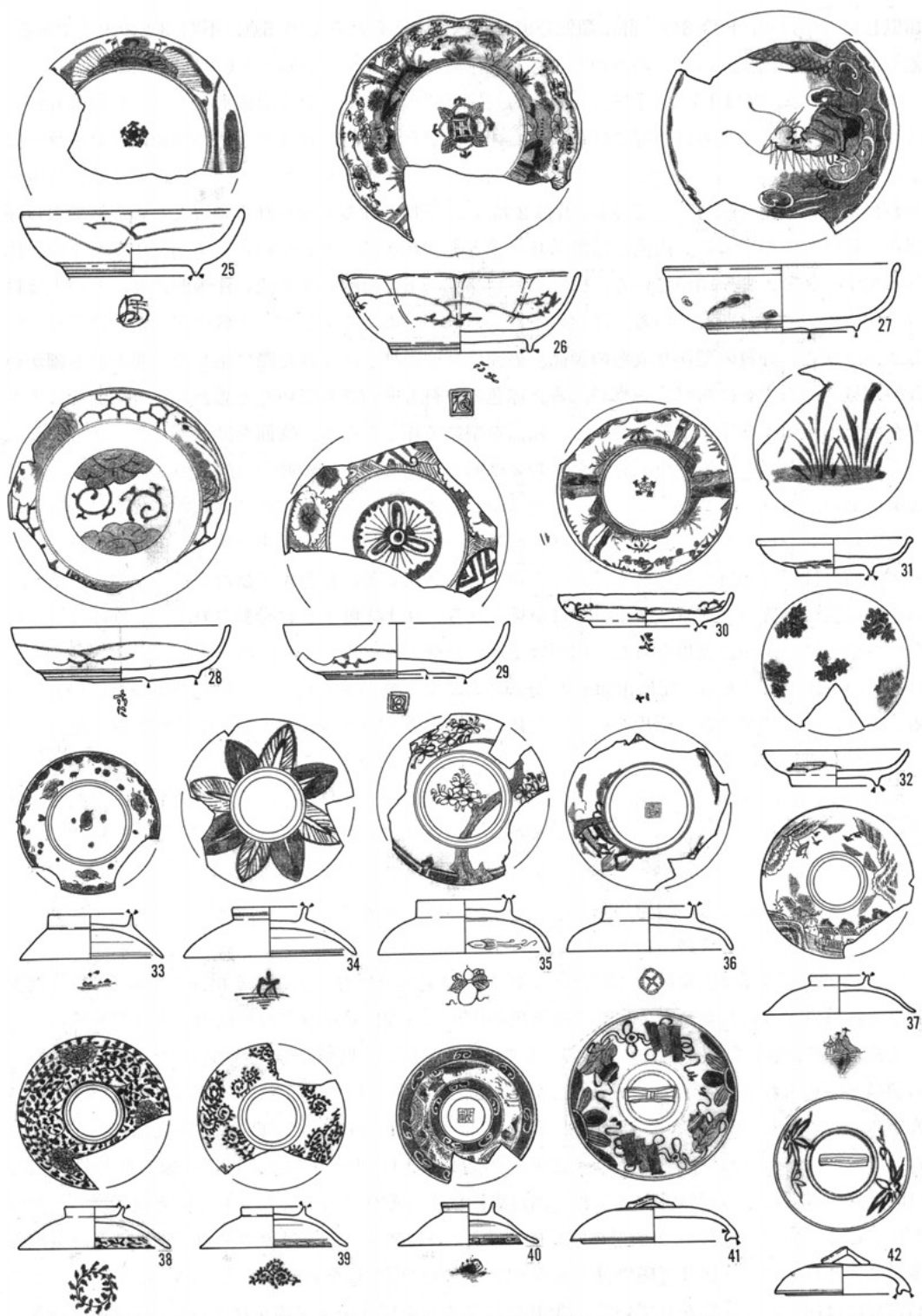
焼塩壺(29-32) 29はイ類 1 e に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。上面を欠損している。下面には粗い布目が見られる。30はウ類に分類される蓋。橙色を帯びた褐色を呈する。胎土にわずかに雲母を含む。下面には粗い布目が見られる。31はII類 2 c に分類される身。刻印は見られない。胎土にわずかに雲母を含む。内面は下から三分一ほどのところに段をもち、その上はケズられ、その下は平滑である。32はIII類 d に分類される身。刻印をもたない。橙色を帯びた褐色を呈する。このほかにイ類の蓋の小片が4点、ウ類の蓋の小片が3点、II類の身の破片が3点、III類の身の破片が12点見られる。

AJ34-4 (IV-180図) 陶器 1 は灰釉双耳壺でTC-15に分類される。肩部には2個の橋状把手が貼付されている。高台裏には判読できないが墨書が認められる。

AJ35-1 (IV-180~185 図) 本遺構からはVIII期に位置する遺物が多量に出土している。磁器では瀬戸・美濃系の製品も多量に出土している。出土磁器底部片数は500弱を数え、量、まとまりともにこの時期の良好な資料である。

磁器(1-55) 1-5は広東碗でJB-1-mに属す。1は見込みに寿の崩し銘が描かれている。焼き継ぎによる補修痕がみられ高台裏には焼き継ぎ屋の印がある。2は見込みには外面の文字文様を簡略化した文様が、高台裏には銘が描かれている。3は灰褐色の胎土で呉須の発色も悪い。おそらく波佐見系の製品と考えられる。見込みには五弁花を略した文様が描かれている。4は見込みに三足ハマの溶着痕がみられる。6は薄手の碗でJB-1-fに属す。7は小丸碗でJB-1-jに属す。体部文様は小広東にみられる幾何文が施されている。8-11は肥前系の端反碗でJB-1-nに属す。11は口縁で直立する。10, 11には焼き継ぎによる補修痕がみられ、高台裏にはそれぞれ「六一」「九七」と焼き継ぎ屋の印が施されている。12-22は瀬戸・美濃系の端反碗でJC-1-dに属す。胎土はガラス質で釉には微細気泡が多量に含まれている。16は青磁染付である。22は外面に瑠璃釉を施している。12-14, 17, 18, 20の高台裏には同一の銘が描かれている。13-15には墨弾きを伴う帯文が描かれている。17は焼き継ぎに

第一節 陶磁器・土器



IV-181图 AJ35-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

よる補修痕がみられ、高台裏には朱によって「二」と書かれている。

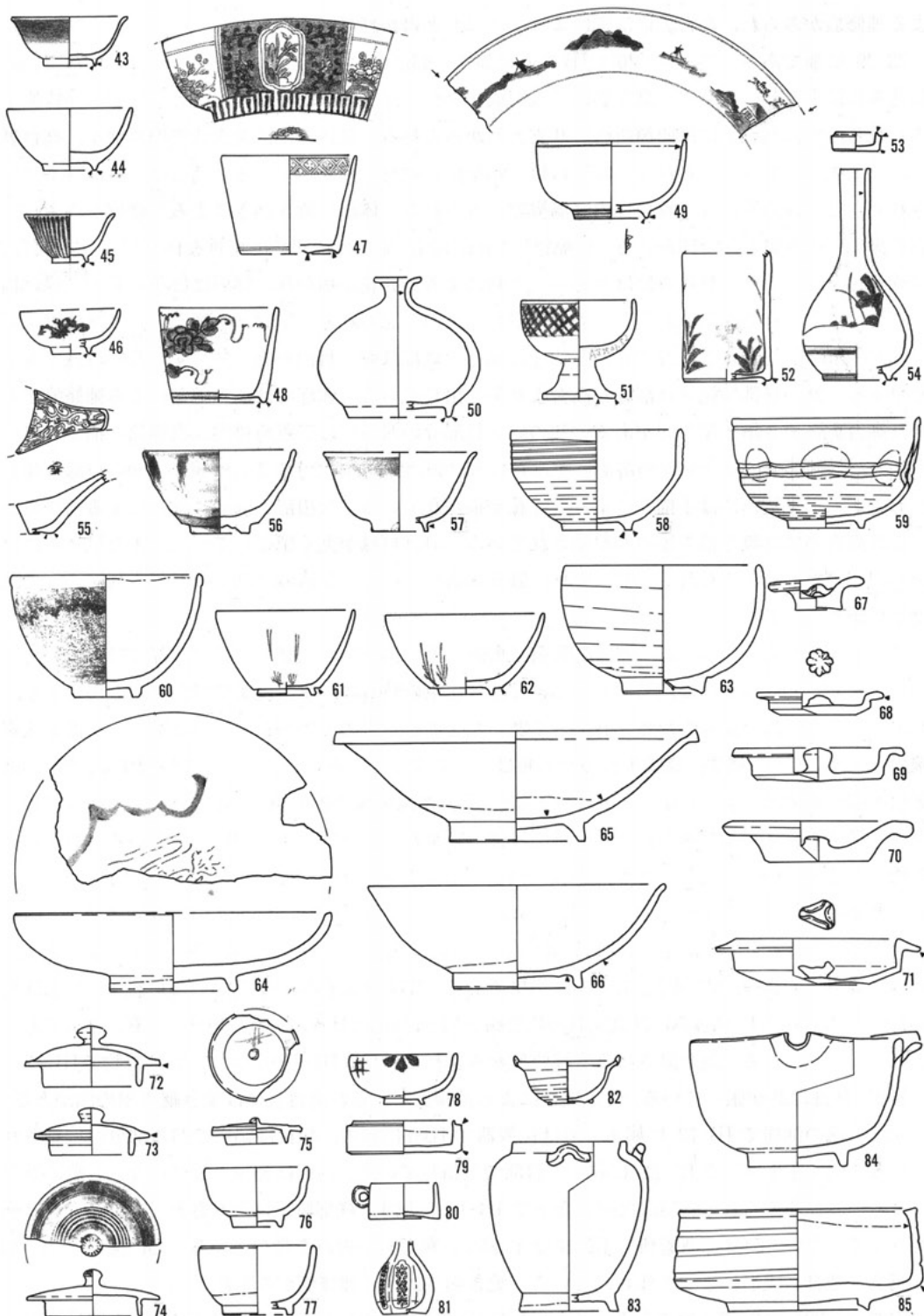
23-29 は皿である。23, 24, 26は JB-2-e に属す。23は高台裏に五箇所のハリ支え痕がみられる。見込みには丸文状の松竹梅、高台裏に「太明成化年製」銘がみられる。体部に焼き継ぎの補修痕がみられる。24は高台裏には四箇所のハリ支え痕がみられる。見込みには丸文状の松竹梅が、高台裏には「太明年製」銘がみられる。26は口縁が10単位の輪花を形成している。高台は丁寧にく丸く整形されている。高台裏には二重角枠内に渦福銘がみられる。体部に焼き継ぎによる補修痕がみられ、高台裏には焼き継ぎ屋の印がある。25は JB-2-g に属す。胎土は灰褐色で粗雑な作りである。畳付には砂が付着している。見込みにはコンニャク判による五弁花が描かれ、側面には花卉状の文様が描かれている。高台裏の銘はおそらく渦福の崩れたものと思われる。胎質、文様などより波佐見系長尾本窯の製品と思われる。27-29は JB-2-j に属し、底部は蛇ノ目凹形高台を呈す。27の口縁は丸く肥厚する。28の底部は蛇ノ目部分が高台より張り出している。体部には焼き継ぎによる補修痕がみられ高台裏に焼き継ぎ屋の印がある。29の蛇ノ目部分の凹みには二重角枠内に渦福銘が描かれている。また無釉部分にはチャツの溶着痕がみられる。30-32は小皿で JB-3-a に属す。30の口縁は輪花を形成する。見込みには手描きによる五弁花が描かれている。欠損部には焼き継ぎによる補修痕がみられ高台裏には焼き継ぎ屋の印が施されている。31は口縁が丸く肥厚している。また見込みには同心円状の整形痕がみられる。32は畳付に砂が溶着している。見込みにはコンニャク判によって紅葉が描かれている。

33-42 は蓋である。33, 35, 36は肥前系広東碗の蓋で JB-1-m に属す。33の体部はほぼ直線的に開くが、35, 36は緩やかに内湾する。35の文様は広東碗特有のつまみ内まで描かれるものであり、36のつまみ内には銘がみられる。おそらく2の銘を崩したものと思われる。34は瀬戸・美濃系広東碗の蓋で JC-1-c に属す。焼成不良のため釉は白くくすんでいる。つまみはやや外傾する。37-39は肥前系端反碗の蓋で JB-1-n に属す。40は瀬戸・美濃系端反碗の蓋で JC-1-d に属す。両面に墨弾きを伴う帯文を描き、つまみ内には端反碗の身にみられたものと同じの銘が描かれている。41, 42は蓋物の蓋で JB-14-c に属す。ともに橋状のつまみを有するが、41では上面にリボン状の浮文を施し、42では微隆帯状の浮文を施している。43-46は小坏である。43は口縁が外反し JB-6-c に属す。44, 46は JB-6-a に属す。44は白磁であり、46はコンニャク判によって海老が描かれている。45は瀬戸・美濃系の小坏で JC-6-b に属す。47, 48は猪口である。47は染錦手の猪口で JB-7-a に属す。底部は蛇ノ目凹形高台を呈す。見込みには丸文状の松竹梅を描き、外面には赤、青、黄絵の具と金彩によって窓絵文様が描かれている。焼き継ぎによる補修痕がみられる。48は JB-7-b に属す。49は蓋物で JB-13-a に属す。体部は腰が張っている。焼き継ぎによる補修痕がみられ高台裏には焼き継ぎ屋の印がある。

50は白磁の油壺で JB-12 に属す。51は仏飯器で JB-8 に属す。畳付は幅広で凹み部分は施釉されている。52は花生け? で JB-22 に属す。肩部で欠損している。内面は施釉されていない。焼き継ぎによる補修痕がみられる。53は白磁の合子で JB-18 に属す。底部脇は面取りされており、底部は施釉されていない。54は神酒徳利で JC-10-c に属す。釉はやや青みを帯びている。55は蓮華で JC-20 に属す。型打ち成形によって作られている。焼き継ぎによる補修痕がみられる。

陶器(56-90) 56-63は碗である。56は TH-1 に属す。胎土は灰白色で硬質である。高台脇は面取り

第一節 陶磁器・土器



IV-182图 AJ35-1出土遺物(3)

第IV章 江戸時代の遺物

され、高台裏は渦巻状のヘラ削りが施されている。釉はうのふ釉に鉄釉を流し掛けしたものであろう。深川窯で同様の製品が焼かれている。57は TD-1-e に属す。高台は外傾し高台脇は面取りされている。体部は丸味をもって立ち上がり口縁で外反する。釉は緑釉と灰釉の掛け分けである。58, 59は TC-1-q に属す。ともに錆釉が斑に掛けられている。58は半筒形を呈し、体部には平行沈線が巡る。59は腰が張っている。体部には平行沈線が巡り、へこみを有す。60は産地不明の碗で TZ-1 に属す。胎土は淡褐色を呈し、きめはやや粗く微砂粒を多量に含むが硬質である。高台脇は面取りされている。口縁には灰釉が帯状に施され、体部には鉄釉が薄く掛けられている。61, 62は小杉茶碗で TD-1-d に属す。胎土は灰白色を呈す。体部には鉄絵の具によって小杉文様が描かれている。61の高台は外傾し、脇は面取りされている。63は灰釉碗で TC-1-c に属す。底部が穿孔されており植木鉢として再利用されたのだろう。64-66は鉢である。64は TC-5-b に属す。全体に丁寧な作りである。釉は御深井釉が施され畳付は無釉である。見込みには鉄絵の具によって手描きと摺絵で文様が描かれている。口唇には全面的に敲打痕がみられる。二次焼成を受け全体にススが付着している。65は TC-5-c に属す。灰釉が施されているが、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。底部は無釉である。66は灰釉鉢で TC-5 に属す。見込みにはピン痕が認められる。見込みには鉄釉が施され、高台裏も施釉されている。

67-75 は蓋である。67-71は落とし蓋で TC-14-a に属す。67は橋状のつまみを有し、表面には灰釉が施されている。裏面には糸切り痕を残す。68は菊花状のつまみを有し、表面には柿釉が施されている。69は算盤玉状のつまみを有し全面に鉄釉が施されている。70はボタン状のつまみを有し表面に灰釉が薄く施されている。裏面には糸切り痕を残す。二次焼成を受け変質している。71は汁次の蓋で TC-27-b に属す。胎土は灰褐色で硬質である。裏面は無釉である。簡単に装飾されたつまみを有す。72, 73, 75は京焼系の蓋で TD-14 に属す。72, 73は山蓋で胎土は黄白色を呈し緻密である。頂部に団子状のつまみを有す。裏面は無釉である。75は平蓋で胎土は灰白色を呈す。表面中央には団子状のつまみを有し鉄絵文様が描かれる。裏面は無釉である。74は TC-14-c に属す。表面には平行沈線が巡りつまみ上面には菊花文様が型打ちされている。表面には鉄釉が施されている。

76-78 は小坏である。76は瀬戸・美濃系で TC-6 に属す。底部以外に灰釉が施されている。77, 78は京焼系で TD-6 に属す。胎土は灰白色を呈し緻密である。77は高台径が大きく高台脇は面取りされている。灰釉が施され底部は無釉である。78は色絵小坏で体部には赤、緑絵の具によって上絵付けされている。底部無釉。79は合子で TD-18 に属す。胎土は黄白色で非常に緻密である。底部無釉である。80は餌入で TC-30 に属す。粘土紐の貼付による把手を有す。灰釉が施されているが底部は無釉で糸切り痕を残す。81, 82はミニチュアで TC-35 に属す。81は瓶のミニチュアで型打ち成形によって全体の半分を作り出し貼り合わせている。体部の横断面は六角形を呈す。緑釉が施されている。82は鍋のミニチュアで鉄釉が施されている。83は壺で TC-15 に属す。高台は外傾し肩部には一対のアーチ状把手が貼り付けられている。体部には鉄釉が施されているが口唇部では拭き取られ溶着痕が認められる。底部は無釉である。84は片口鉢で TC-23 に属す。見込みには三箇所ピン痕が認められる。灰釉が施され底部は無釉である。

85, 87は香炉で TC-9-a に属す。高台を有し体部はやや内傾して立ち上がる。85は体部に螺旋状

第一節 陶磁器・土器



IV-183図 AJ35-1出土遺物(4)

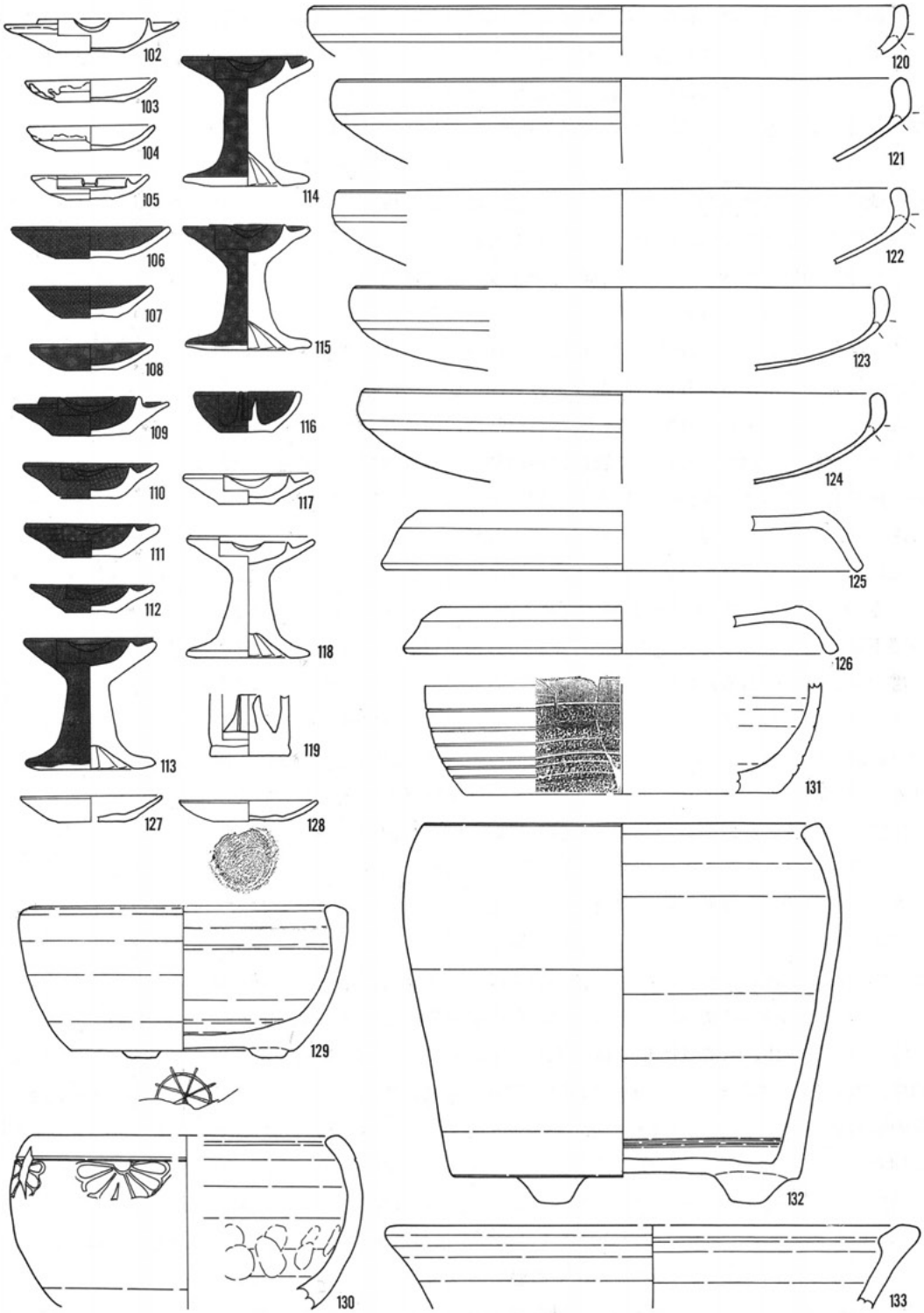
第IV章 江戸時代の遺物

の沈線が巡る。86は植木鉢で TC-21 に属す。底部は穿孔されているが高台は削り取られていない。体下部に刻印による雷文が巡る。緑釉が施されている。88は火入れで TC-24-a に属す。体部はわずかに内傾している。体部には鉄絵文様が描かれ長石釉が施されている。底部、内面は無釉である。口唇には顕著な敲打痕がみられる。89は半胴甕で TC-26-a に属す。胎土は黄白色を呈しきめが粗く軟質である。錆釉が施され底部は無釉である。90は花生けで TD-22 に属す。胎土は淡橙褐色を呈しやや軟質である。断面形は半円形を呈し表面には型打ち成形によって竹籠文様を表現している。裏面は平坦であるが壁掛のための孔が上部に穿たれている。釉は表面に灰釉が薄く掛けられている。

徳利(91-101) 91-97 は瀬戸美濃産の灰釉系 2 合半徳利である。91ではベタ～線刻の釘書が認められる。罌状の口唇部は水平に大きく張り出しほぼ正円に近く、型押しして整形されたかのようなものである。頸部から肩部にかけての形も独特で、逆ラップ形にすばまりながら引き上げられている。胴部はまだ丸みを帯びており高台の削り込みも深い、つけ掛けされているために胴部下端の 5mm くらいが無釉のまま残されている。こうした特徴の組み合わせはごく珍しく、注目される。92では線～点刻の釘書が認められる。口唇部は外縁部が大きく撫でられて断面が釣針状を呈し、頸部は長く撫で肩で最大径は胴部中程にある。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られており、高台の削り込みも深い。93ではやはり線～点刻の釘書が認められる。口唇部は薄めに折り返されて撫で肩であり、胴部はまだ丸みを帯びている。胴部下端の釉は雑に拭き取られていて、高台の削り込みは浅くなっている。94, 95, 97では点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。96でも点刻の釘書が認められるが、口唇部の折り返しが薄目で胴部下端の釉も雑ではあるが拭き取られている。高台の削り込みは浅い。98は瀬戸美濃産の鉄釉系徳利でこのタイプとしては中型の容量のものである。折り返し口縁で肩部が張り、胴部の 2 箇所にはくぼみが設けられていてベタ底である。99は瀬戸美濃産の灰釉系 5 合徳利で線～点刻の釘書が認められる。口唇部は小さく帯状に折り返されて頸部はまだ長く、撫で肩で最大径は胴部中程にある。高台は深く削り込まれてやや内傾する。100は瀬戸美濃産の灰釉系 5 合徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて算盤玉状となり、肩部は張ってほぼ寸胴、高台の削り込みも浅く雑である。101は瀬戸美濃産の灰釉系 1 升徳利で線～点刻の釘書が認められる。口唇部はちょうど帯状と算盤玉状の中間的な形態を示しており、撫で肩で最大径は胴下部にある。高台は浅く雑に削り込まれている。2 合半徳利がおそらく 1000 個体以上、5 合・1 升徳利が 500 個体以上と膨大な量が出土している。志戸呂産徳利は 10 個体ほど、瀬戸美濃産鉄釉系徳利は 25 個体ほどしかない。

灯火具(102-119) 102は灰釉油皿。底部はヘラケズリ調整による。103-105まで鉄釉。103, 104は油皿, 105は受付である。103, 104はほぼ同形態であり、底部はヘラケズリ調整による。重ね焼きの際の溶着痕が 103 が底部に、104が見込みに認められる。105は AJ34-2の10と同形態であり、新しい時期の受付である。以上の 4 点には灯芯油痕は認められない。106-116まで透明釉である。106-108は油皿。灯芯油痕は 106 は器面内外面に、107, 108は口唇に付着する。109-112は受付である。4点ともほぼ完形である。111, 112の口唇のみにわずかに灯芯油痕が認められる。109も透明釉であるが赤色ではなく橙色である。底径も大きく形態も異なっている。111の器壁はやや厚いが、110-112はほぼ同形態と考えている。113-115は有脚受付である。3点とも同形であり、ほぼ完形である。油痕の

第一節 陶磁器・土器



IV-184図 AJ35-1出土遺物(5)

第IV章 江戸時代の遺物

付着はない。116は乗燭。灯芯油痕は灯心立の先端のみわずかに認められる。有脚受付を除きすべて左回転の糸切り底である。117-119は素焼である。117は受付。形態は110、111と類似する。また胎土もよく似ている。118は素焼有脚受付である。灯芯油痕の付着はなく銀彩の痕跡もない。形態は113-115とまったく同じである。117同様、胎土もよく似ている。透明釉を施す以前の素焼の段階の、あるいは意識的に施されなかった可能性すらある。119は乗燭の一種と考えられるが、口縁が欠けているため全容は不明である。全体に粗雑なつくりであるが、灯心立のつくりは116などと同様である。器面内外面に油痕が付着していた痕跡がある。流れ込みの可能性が強い。117とともに左回転糸切り底。

灯火具は図示したものを含め78点の出土である。透明釉は62点を占める。内訳は油皿11点、受付26点、有脚受付22点、乗燭3点の出土である。ここでも透明釉の圧倒的多数が示される。他は鉄釉7点、灰釉2点、志戸呂1点、素焼6点となる。なお鉄釉は油皿3点、受付4点、灰釉は2点とも受付である。119とともに志戸呂もおそらく流れ込みによると思われる。

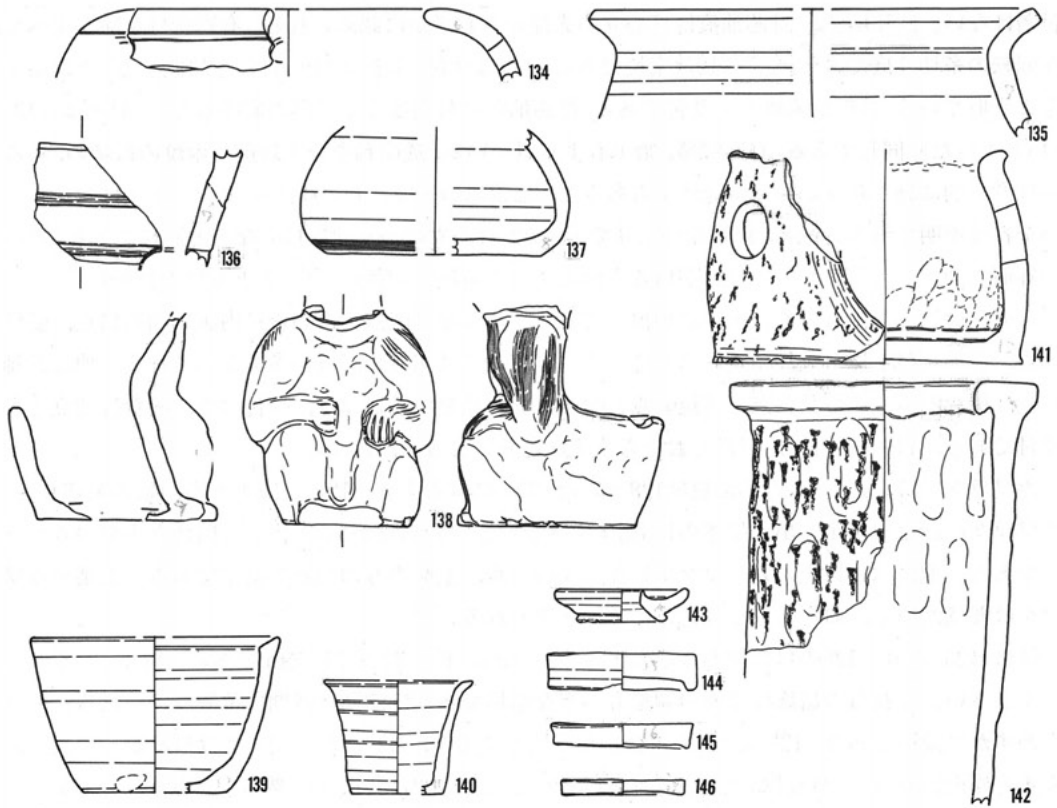
カワラケ(127, 128) 灯芯油痕は128のみわずかに付着する。127, 128とも左回転の糸切り底。カワラケは22点の出土。出土比率の1.8%にすぎない。うち15点が127, 128と同様な小型のカワラケである。他に六寸以上のカワラケが1点、不明2点、上製のもの2点の出土である。上製のカワラケは器壁が薄く、おそらく流れ込みによると思われる。

焙烙(120-126) 120の口径がもっとも大きく37.8cm。他は34.8-31.6cmである。123, 124がいくぶん小さい。これらの焙烙は器面の調整も丁寧な焙烙でありほぼ同一時期に位置づけられる。ただしわずかに違いもある。120-122まで口縁が短く内湾するが、これに対し123では口縁がやや長く直立する傾向にある。124も123と似るが口縁が短く、120-122に共通する要素も認められる。ケズリの位置などに違いもあるが、123はAJ34-2の20とほぼ同形態の焙烙である。すでに述べているので繰り返さないが、これらはAE39-1の一群から発展したと考えられる焙烙である。したがって少なくとも一段階新しい形態の焙烙であると考えている。ここでは120-122の口縁が短いタイプとこのタイプの確実な共伴関係を指摘しておきたい。125, 126は蓋である。これらの蓋は器面調整が荒く、胎土も上記の焙烙とは異なり、大きな隔りがある。

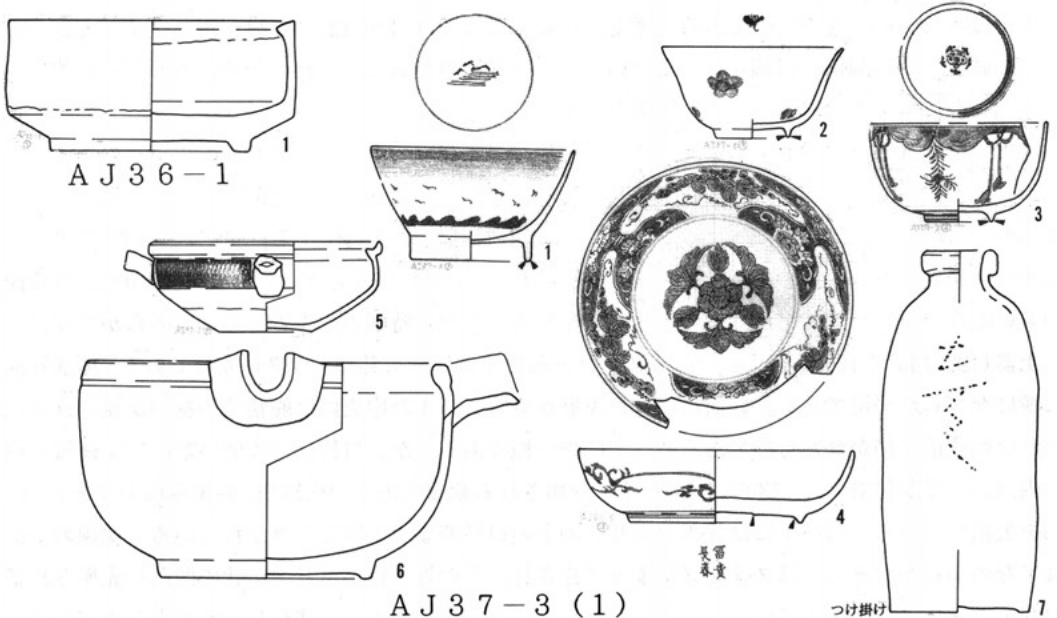
他に焙烙の底部片は50点出土している。口縁片も多く42点の出土である。すべて小片のみであった。F33-3に類似したもの3点、AE39-1に類似したもの5点、120-126に伴う小型のもの4点、123に類似のもの3点、不明4点、他はすべて120-122に類似したものである。量的には123のタイプは少ない傾向にあるようである。蓋は他に18点出土している。ほとんどは125, 126に類似した器面の荒い破片であったが、平滑なものも1点含まれる。ただし時期差によるものかは明らかでない。

土器(129-143) 129は1類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。体部外面は横にケズられ平滑である。底面にはコビキ痕が見られ、また中央には舵輪状の線刻が見られる。これは焼成前に描かれたものであるいは窯印の一種であろうか。口唇部には弱い敲打痕が連続し口縁内側には煤が付着する。130は1類aイに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。底部を欠損している。口縁下には沈線が巡りその上の口唇部まで丁寧にミガかれている。沈線の下には半分の菊花がおそらくはスタンプによって捺され、その外は粗いチリメン状の凹凸が充填されており全面が横にミガかれている。体部内面下半には指頭による圧痕が連続し、その上がナデられて

第一節 陶磁器・土器



AJ35-1 (6)



AJ37-3 (1)

IV-185図 AJ35-1(6)、AJ36-1、AJ37-3(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

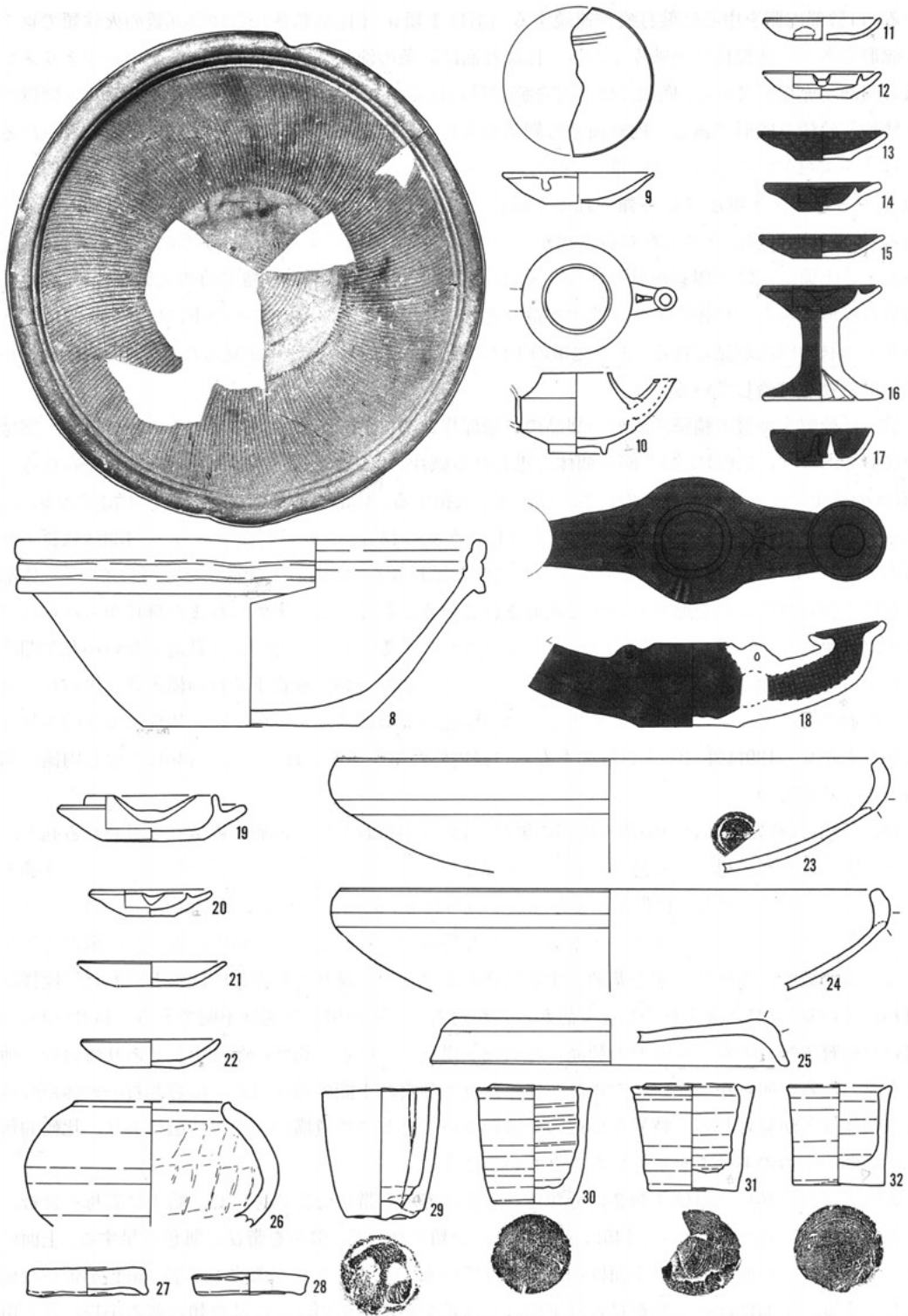
いる。口唇部内側を中心に敲打痕が連続する。131は1類 a イに分類される硬質瓦質の火鉢類でロクロ成形である。底部付近の破片である。体部外面は5条の沈線が巡り、その間をミガキやチリメン状の凹凸が充填している。底面にはコビキ痕が見られる。132は1類 b イに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。内外面とも剝落が著しい。内面の底部付近には工具によると思われる櫛目状の条線が横に走る。口唇部には敲打痕が見られる。口縁内側に煤の付着が見られる。133は1類 b ロもしくは2類 c イに分類されると思われる軟質土師質の火鉢類の口縁部片。輪積み成形である。体部外面は横にケズられ口縁上面から内面にかけての肥厚する部分は丁寧にミガかれている。外面から上面にかけて銀彩が見られる。134は1類 b イに分類される硬質瓦質の火鉢類の口縁部片。輪積み成形である。口縁直下には沈線が巡りその上は丁寧にミガかれ、その下にはローラーによるチリメン状の凹凸が見られる。また沈線の下に直径 1cm ほどの小円孔が見られる。内面にはタール状の炭化物が付着している。

135 は軟質土師質の輪積み成形の製品の口縁部片。明褐色を呈する。外反する口縁であり、甕様の器形であろう。136は 135 と同一個体と思われる破片。3条の沈線と、小円孔の一部が見られる。137は軟質土師質の輪積み成形の容器。口縁部を欠損する。体部外面は横にケズられ平滑である。内面は軽くナデられ、火を受けたと思われる黒色化が見られる。火入れの類であろう。138は軟質土師質の火入れ。L34-1に類例のある猿を象ったものと思われる。頭部および爪先を欠損している。体部は型にて作られたものを貼り合わせて成形されている。表面はよくナデられまた櫛目が入れられて体毛が表現され、へら状の工具で指などを作り出している。右手の部分には貫通しない小孔が開けられている。全面に赤彩および銀彩が施されている。139, 140は軟質土師質の植木鉢と思われるロクロ成形の製品。いずれも底面を欠損しており穿孔の部分は残存していない。体部はやや開き気味に立ち上がり、139は外反する口縁部をもち口縁内外に墨が塗布されている。140は肥厚し内側に傾斜する口唇をもつ。

141, 142 は軟質土師質の輪積み成形の製品。141は円形および三角形の通気孔と思われる孔と、大きく開いた円形と思われる窓を持つ。体部外面にはローラーによると思われる八字を基調とした模様が施され、内面には指頭による圧痕が見られる。底面にはチヂレ目が見られる。142はほぼ直立する体部と、内外に張り出し、上面の平坦な鏝状の口縁とをもつ。体部は木の幹に似た大きなくぼみが連続し、外面は丁字を基調とする模様のスタンプを繰り返押しつけたと思われる模様に覆われている。141は火入れの類とも思われるが両者ともその用途機能は不明である。143は中央の開いた軟質土師質のロクロ成形の製品。透明釉が掛かっている。鏝状の張り出しがあり燭台の一種とも思われるが明らかでない。このほかには軟質土師質の十能の破片 1点、硬質瓦質の火鉢類の破片 2個体分とが見られる。特異な形態の土器の多いことがこの遺構の一つの特徴であり、比較的新しい時期の土器のあり方を示したのもといえよう。

焼塩壺(144-146) 144はイ類 2 に分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈し、胎土に雲母を含む。下面には粗い布目が見られる。145はイ類 1 e に分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。上面には手掌痕が見られ側面および下面は均整がとれている。146はウ類に分類される蓋。橙色を帯びた桃色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面はくぼんでいる。このほかにはウ類の蓋の小片 2 点とⅢ

第一節 陶磁器・土器



IV-186図 AJ37-3出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

類の身の小さな破片が11点見られる。144を除けば蓋，身とも時期的にまとまっている。

AJ36-1 (IV-185図) 陶器 1 は灰釉香炉でTC-9-aに分類される。外面，口唇部に灰釉が施される。

AJ37-3 (IV-185, 186図) 本遺構中からは多量の遺物が多種にわたり出土している。時期的なまとまりも良好で本地点ではⅧ期に位置する。

磁器(1-4) 磁器はすべて染付である。1はJB-1-mである。2はJC-1-dである。地呉須を使用している。3はJB-1-hである。見込み中央には手描き五弁花が描かれている。4はJB-2-jである。高台裏には「富貴長春」銘が描かれている。作り，絵付けは丁寧で，胎土，呉須の発色も良好である。

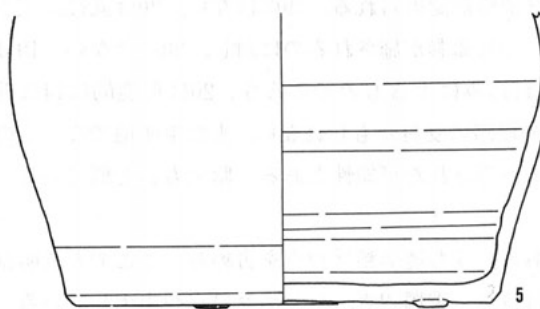
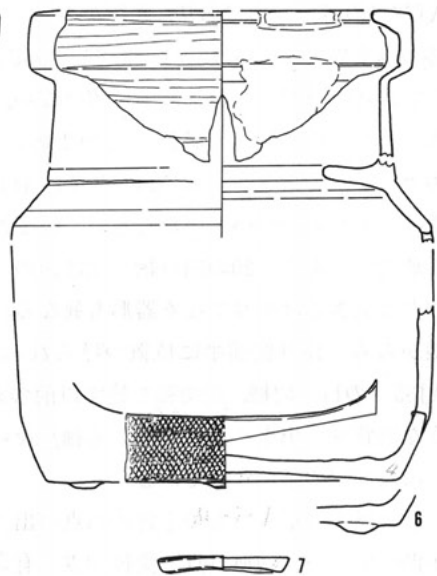
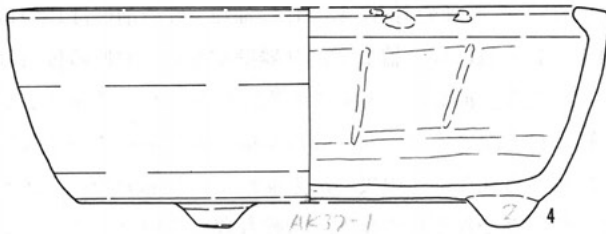
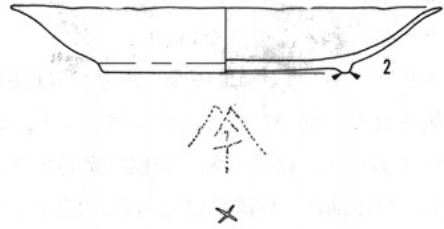
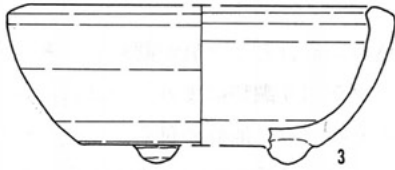
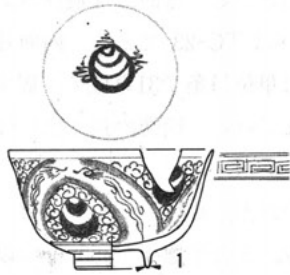
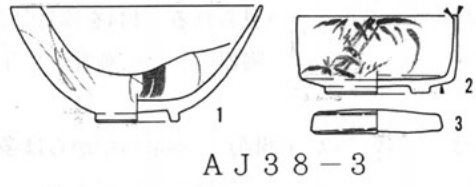
陶器(5, 6, 8) 5は鉄釉行平鍋で，TZ-33-dに分類される。器面には飛びカンナで連続した縦の削りが刻まれている。底部にはススが付着している。6はTC-23である。内面及び外面体部下半まで灰釉が施されている。8はTE-29である。掃目は1単位11条で31単位で一周する。底部と体部の境より引き上げられ，口縁部はなで丁寧揃えられている。縁帯の張り出しは顕著で外側面の削りは認められない。底部にはススが付着している。

徳利 7 は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で点刻の釘書が認められる。口唇部は厚く折り返されて寸胴つけ掛けであり，胴部下端は無釉となっている。2合半徳利が350 個体以上，5合・1升徳利が300 個体以上と大量に出土している。志戸呂産徳利はごく少量，瀬戸美濃産鉄釉系徳利は10個体ほどが見られるに過ぎない。

灯火具(9-20) 9, 10は灰釉である。9は油皿。見込みに箇所とピン痕が認められる。表面口唇の釉が施されない部分に灯芯油痕が付着する。底部はヘラケズリ調整による。10はおそらくカンテラの種類であろう。把手を欠くが他は完存する。注口の先端のみに油痕の付着が認められた。11, 12は鉄釉。11は油皿，12は受付である。2点とも油痕の付着はなく底部はヘラケズリ調整による。12はAJ33-1の7と同形であり，底径が小さい。13-18は透明釉である。13, 15は油皿。灯芯油痕は15の口唇のみ全周する。14は受付である。AJ35-1の111とほぼ同じ器形であり器壁が厚い。油痕の付着はない。16は有脚受付。油痕の付着はない。17は乗燭。油痕は灯心立の先端ばかりでなく全体に広がる。また器面の剥落も激しい。透明釉は有脚受付を除きすべて左回転の糸切り底である。18は双口のカンテラであるが一方の口を欠く。油痕は認められない。中央の油を溜めていた部分の口には蓋受けがあり蓋がついていたらしい。把手は二つつきそれぞれの孔には銅線も残っていた。19, 20は素焼受付である。20の内口縁と受け皿の一部に油痕が認められる。19にはない。20は底径が大きく19とは大きさばかりでなく器形も異なる。また10に銀彩が施されるのに対し，20にはない。19は形態からみて18世紀前半に位置づけられる。流れ込みによるものであろう。20は形態的に14に近くAJ35-1の117 同様，透明釉を施す以前の素焼の段階の受付かもしれない。また生産地でなくこのような消費地で出土することは，施釉しないまま使用された可能性もある。胎土も14と似ている。ともに左回転の糸切り底である。

灯火具は図示したものを含め45点の出土である。うち透明釉は34点を占める。ここでも透明釉が圧倒的に多い。油皿11点，受付9点，有脚受付11点，乗燭2点，カンテラ1点が出土している。他は鉄釉4点，灰釉3点，志戸呂1点，素焼3点の出土である。なお鉄釉は油皿1点，受付3点，灰

第一節 陶磁器・土器



AK37-1

IV-187图 AJ38-1、AJ38-3、AK37-1出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

釉は油皿，受付とも各1点の出土である。志戸呂は19と同様，流れ込みによるものであろう。

カワラケ(21, 22) 21, 22は口径三寸前後のもので灯芯油痕は22の口唇の一部に付着する。22には銀彩も施されており，21と器形が異なる。透明釉油皿の器形に近い。ともに左回転の糸切り底である。図示したものを含めカワラケは10点の出土。出土比率のほぼ2%である。うち6点が21と，1点が22と似る。22と類似したものはやはり銀彩が施される。他の4点は明らかに口径六寸五分以上の大型のカワラケの底部片である。うち3点は同一個体と思われる。

焙烙(23-25) 23, 24は口縁がともに内湾し器面調整も丁寧である。また胎土・色調もよく似ている。ほぼ同一時期に位置づけられよう。ただし違いも認められる。口縁の幅の違いであり23が幅が狭いのに対し，24のそれは広く湾曲の程度もきつい。23はH21-2の79，AE34-3の23, 24に似ており，また24はAE39-1の一群の焙烙に似る。この違いが口縁の屈曲部に関連することはAE39-1の項でわずかが触れている。すなわち23は屈曲部直下に，24は屈曲部下方にケズリが位置する形態である。上下二段の屈曲のうち24では下段の屈曲の重要性が高まり，このような器形が出現したと考えている。ともかくここではこの両者の共存を指摘しておきたい。なお23の内側底面に丸に一の字の刻印がある。径2.4cm。AE34-3の23と同じ大きさであり形態も類似する。25は蓋である。つまみを欠く。他に焙烙の底部片は12点出土している。図示した以外口縁片は17点の出土である。23に類似するもの13点，24に類似するもの4点の確認である。23に類似するものが多いようである。この点は他の遺構でも同様であった。

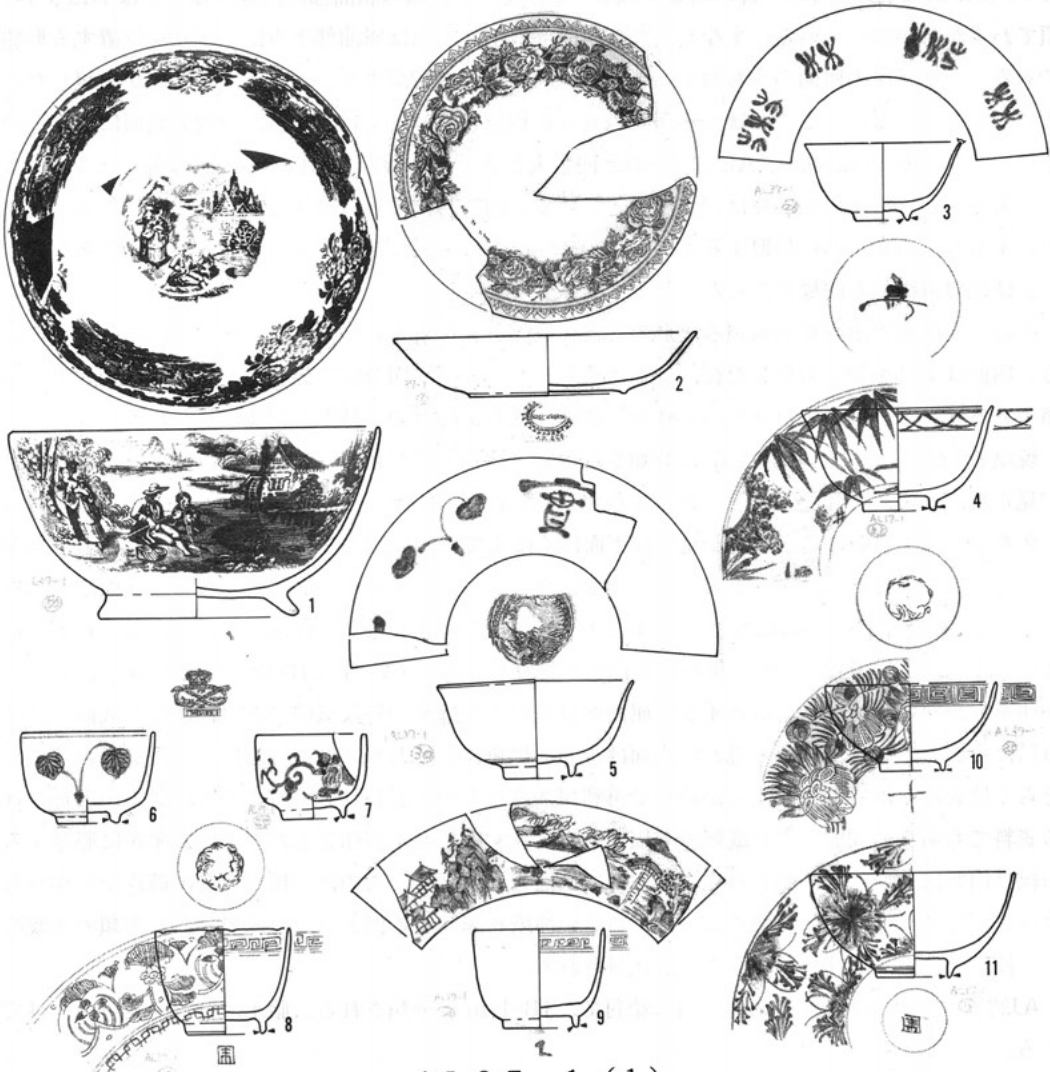
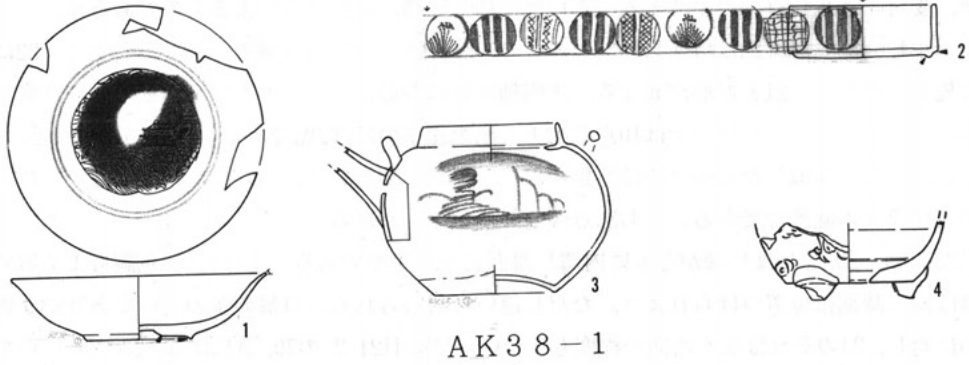
土器 26は軟質土師質の輪積み成形の容器。底部を欠損する。体部外面は横にケズられ平滑である。内面は工具を押し引きした後，軽くナデられている。内面全面に黒色化が見られる。火入れの類であろう。このほか硬質瓦質の火鉢類1個体，軟質土師質の火鉢類3個体が見られる。

焼塩壺(27-32) 27はI類1dに分類される蓋。桃色を帯びた肌色を呈する。下面には粗い布目が見られ，また火を受けたと思われる黒色化が見られる。28はウ類に分類される蓋。橙色を帯びた桃色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面はくぼんでいる。29はII類2cに分類される身。刻印をもたない。体部表面は剝落が著しい。内面は削られているがわずかに布目が残る。底面にムシロ状の圧痕が見られる。30はIII類bに分類される身。刻印をもたない。体部下半がややふくらんでいる。内外面および底面に漆喰と思われる白色の物質が付着している。31はIII類bに分類される身。刻印をもたない。体部下半にわずかに屈曲が見られ上半はやや外反気味である。体部と底面がほぼ直角に交わる。火を受けたと思われる内面は全面に黒色化しており，外面も斑に黒色化している。おそらくは火にかけられてなんらかの形で再利用されたものと思われる。27の蓋との対応が考えられる資料でもある。32はロクロ成形の焼塩壺の身に類する製品。刻印をもたない。わずかに肥厚する口縁は内側に向かって傾斜し直立する体部は底面と直交する。このほかIII類の身の破片が2片見られる。板作り成形であるII類のもっとも新しい段階と思われる例とロクロ成形であるIII類の比較的古い段階の例とが相伴していることが注目される。

AJ38-1 (IV-187図) 磁器 1は染付で，JB-1-mに分類される。胎土，呉須の発色は不良である。

AJ38-3 (IV-187図) 陶器(1-2) 1はいわゆる柳茶碗でTC-1-gに分類される。文様は鉄絵の

第一節 陶磁器・土器



IV-188図 AK38-1、AL37-1(1)出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

具で施される。2は TD-13-c である。体部には鉄絵で笹文が描かれており底部と口唇部は無釉である。高台は蛇ノ目高台で、脇は面取りされている。

焼塩壺 3 はウ類に分類される蓋。やや橙色を帯びた桃色を呈する。上面に手掌痕がある。

AK37-1 (IV-187図) 磁器(1, 2) 1, 2 は染付である。1は JB-1-n である。2は輪花皿で JB-2-e に分類される。見込み外周の枠文様は墨弾きで施され、なかには海浜図が描かれている。ハリ支えが四箇所認められる。高台裏には列点状の釘書で山笠に十の字が刻まれている。焼き継ぎがされており、高台裏には十字状の焼き継ぎ印が描かれている。

土器(3-6) 3, 4は1類 a ロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。外面は横にケズられ、弱いミガキが施されている。底面外側にはチヂレ目が見られる。体部内面は、3では丁寧になでられており、4では板状の工具を押し引きした痕が見られその上面がナデられている。5は軟質土師質の火鉢類。口縁部を欠損しているが、1類 b イに分類されると思われる。輪積み成形であり、上半部はロクロの回転力を利用して挽きあげられている。体部内外面は丁寧にナデられている。底面外側には砂粒の痕が見られる。足がきわめて矮小でほとんど痕跡的である。6は2類 c ロに分類される硬質土師質の火鉢類。ロクロ成形である。口縁部、頸部、底部の破片である。口縁部はコの字状に屈曲し、頸部内側には庇状の突起が付く。底には粗いスグレ状の圧痕が見られる。口唇部内側には突起が貼付されたと思われる痕跡が残っている。体部外面は下半には斜格子のローラーによる凹凸が付けられた上からミガかれており、上半は横の粗いミガキが見られる。口縁部上面は丁寧にミガかれている。内面の庇状の突起より上には漆喰と思われる白色の物質が薄く付着している。このほかに軟質土師質の火鉢類の小片5が見られるのみである。

焼塩壺 7はウ類に分類される蓋。やや橙色を帯びた桃色を呈する。上面に手掌痕がある。

AK38-1 (IV-188図) 磁器(1, 2) 1, 2 は染付である。1は JC-2-a である。見込みは波濤文を型押しし、上より呉須を施している。口唇部には口鏽が施される。2は JC-13 で重箱風に重ねるタイプのものである。

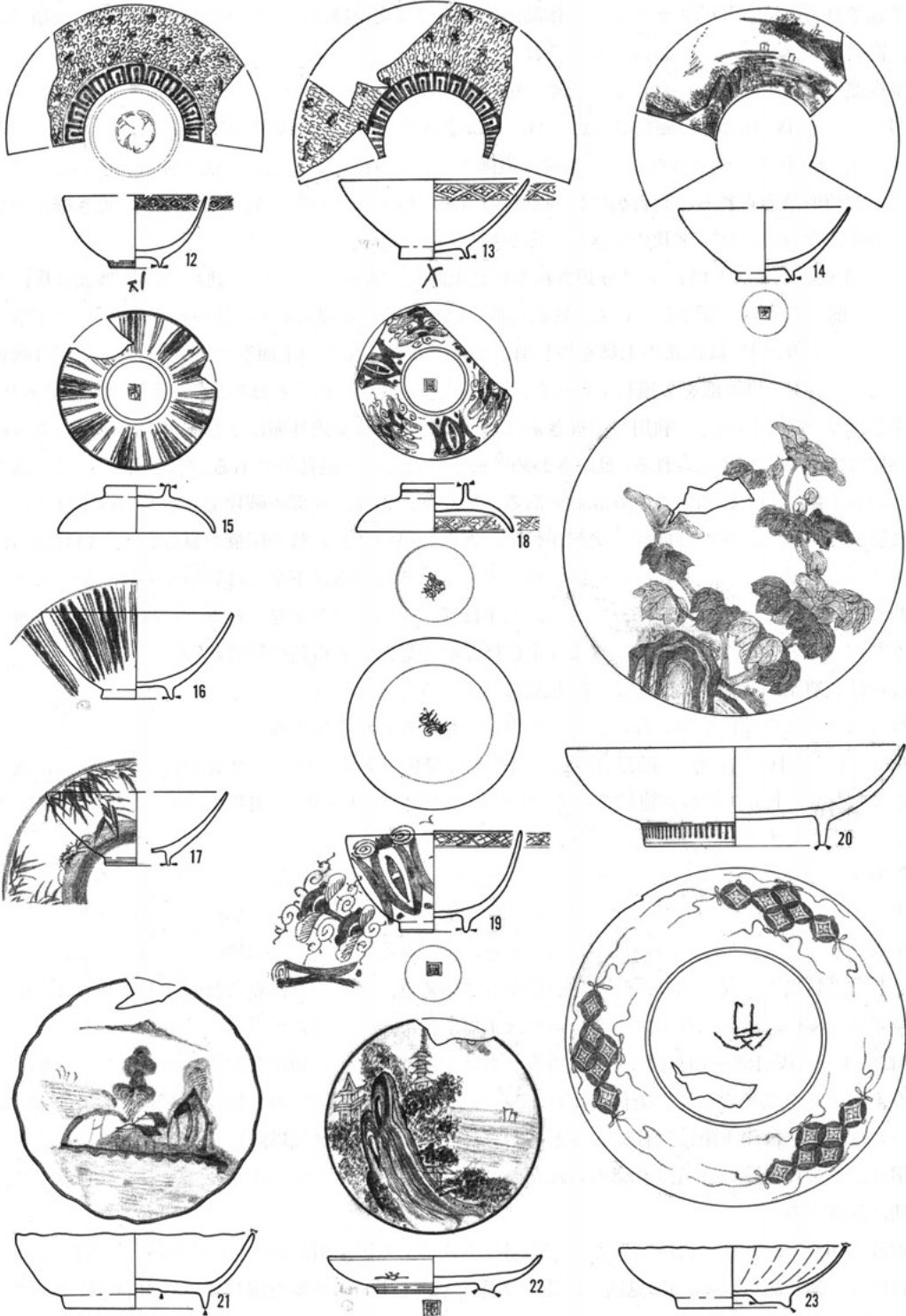
陶器 3 は TZ-34 である。呉須で白土の上より絵付けされている。

土器 4 は軟質土師質の植木鉢。ロクロ成形である。底部中央には円形の孔が開いており、三つの足をもつ。体部には細かい模様が線刻されその上から全面に透明釉が掛かっている。土製の植木鉢としては特異な形態であり、透明釉の掛かっている点、線刻のある点で言えば上製であり、磁器の植木鉢の模倣と考えられる。このほかには土器、焼塩壺とも見られない。

AL37-1 (IV-188~194 図) 本遺構中からは陶磁器類、土器類などが多量に出土しており、年代もまとまりを見せている。染付の顔料にはコバルト（ここでは呉須と比較する意味で用いる）が用いられ、遺物群の下限は近代に入ると考えられるが、明治20年代以降に流行するとされている型紙摺り、銅版絵付け等は1点も認められないことは注目しなくてはいけないであろう。本地点ではIX期に位置する。

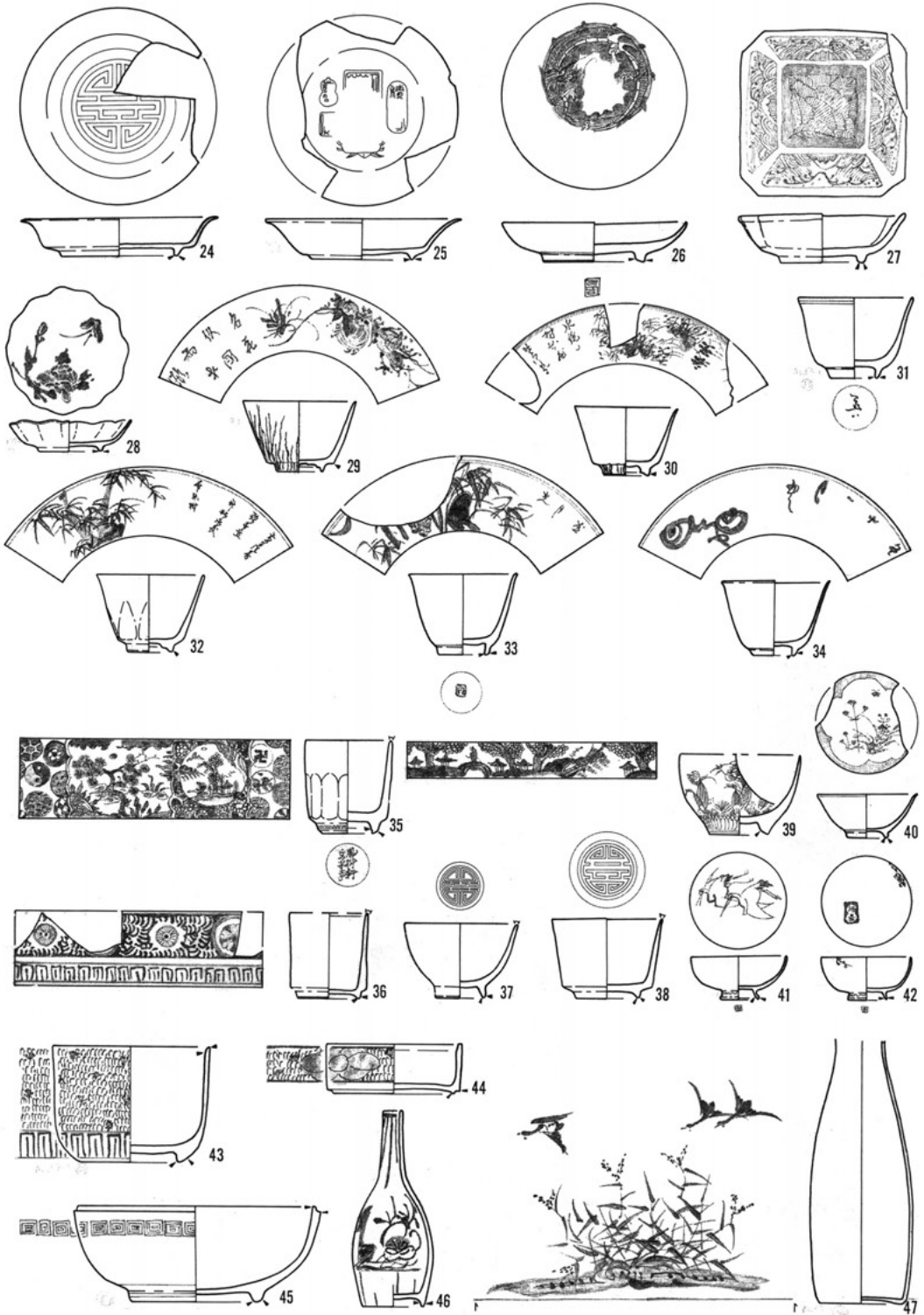
磁器(3-63) 3-19は染付碗である。3-5は JC-1-d である。3, 4はコバルトを顔料として用い、3は口唇には口鏽が施される。5は見込みに龍の文様を型押しし、地呉須を施している。6は JC-1-e である。文様は毛彫りの上より地呉須を施している。7-9は JB-1-o である。8は絵付けに清朝磁器の影響

第一節 陶磁器・土器



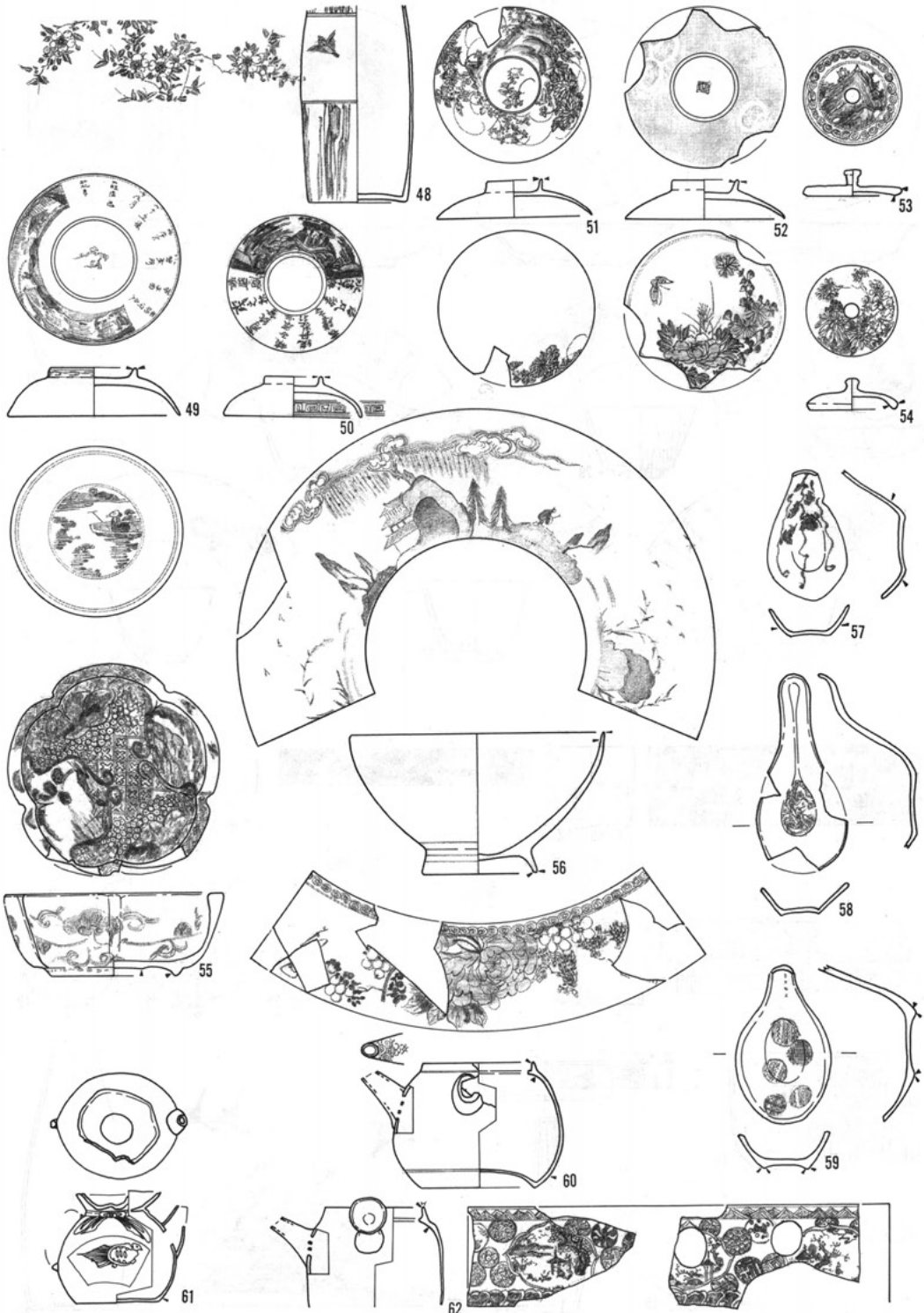
IV-189圖 AL37-1出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-190図 AL37-1出土遺物(3)

第一節 陶磁器・土器



IV-191圖 AL37-1出土遺物(4)

第IV章 江戸時代の遺物

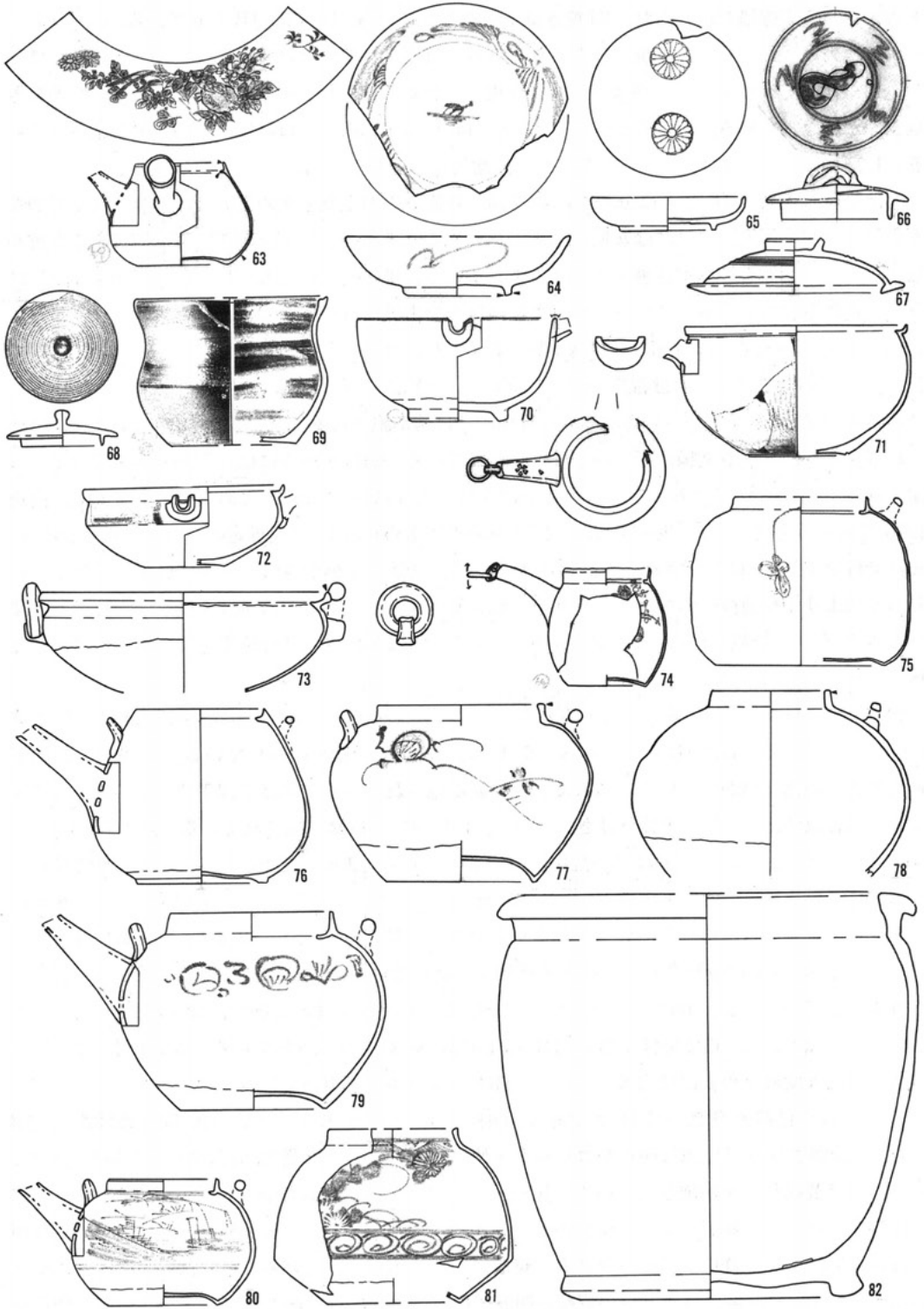
と考えられる細線描が用いられ、9は焼き継ぎが施されている。10-12はJB-1-eである。いずれもコバルトを用いられ、10と12は焼き継ぎされている。11の口唇部には口銹風にコバルトが施されている。13-17はJC-1-fであり顔料はコバルトが用いられる。13は焼き継ぎがされており「×」の焼き継ぎ印が施されている。15、16はセットである。14-17の口唇部には口銹風にコバルトが施されている。18、19はセットでJC-1-aに分類される。顔料はコバルトが用いられている。

20は染付の鍋島でJB-2-nに分類される。器形、外側面の七宝繋ぎ文の三方割や櫛高台は定形的なものであるが全体的に絵付けは盛期の鍋島と比較してラフである。七宝繋ぎ文や櫛高台には骨書が無く、見込み文様もダミが骨書を所々はみ出している。年代的に降るものであろう。同手の鍋島は文京区真砂遺跡でも出土している。高台裏には釘書で山笠に万の字が刻まれている。21は染付皿でJB-2-iに分類される。口唇部には口銹が施される。22はコバルトを顔料として用いられる染付皿でJC-2-cに分けられる。高台は幅広の蛇ノ目高台で、口唇部には口銹風にコバルトが施されている。23は白磁の皿でJC-2-cに分類される。口唇部には口銹が施される。24、25は白磁でJC-3-aに分類される。ともに見込み文様は型で押し付けられている。24は見込みには「壽」の字を文様化した印を押しつけてつけられている。これは当時好評を博した土岐市肥田の壽文皿（一の瀬 1966，内田 1986）であらうと考えられ、生産年代の上限は1855年に求められる。年代推定の有力な資料とならう。26は染付でJC-2-cに分類される。高台は幅広で22と類似するが本例は絵付けに呉須を使用しているので22よりやや前段階の製品であらうか。焼き継ぎがされており二次焼成を受けている。27は染付型皿でJC-4に分類される。焼き継ぎがされている。28は型押し染付輪花小皿でJC-3である。顔料はコバルトである。

29-34は染付小坏でJC-6-bに分類される。いずれもコバルトを顔料としている。29、30、32は底部無釉である。35、36はJB-6-cである。35は染付で祥瑞風に絵付けられている。高台裏には「鳳樹軒文米吉」の銘が描かれている。口唇部には口銹が施されている。36は染錦手で下半の櫛歯状の連続文と圏線以外は赤、朱で上絵付けされている。口唇部には口銹が施されている。37はJC-6-a、38はJC-6-cである。ともに24と同様見込みには「壽」の字を文様化した印が施され、口唇部には口銹が施されている。39は染付小坏でJC-6-aに分類される。高台は幅広である。40は色絵でJC-6-bに分類される。見込みは朱、黄、呉須で花文が上絵付けされている。41、42は白玉で細線文様が施されるものでJC-6-aに分類される。高台の櫛形文と銘は染付、42の「坂長」銘は金字である。41は焼き継ぎされている。43、44は顔料がコバルトを使用している染付の蓋物で、43がJB-13、44がJB-13-dに分類される。45は染付蓋物で、JB-13-aである。焼き継ぎされている。46は染付でJC-10-cである。低火度のため表面は白濁している。顔料はコバルトを用いている。

47、48は染付爛徳利で、JC-10-dである。顔料はコバルトを用いている。49、50は染付蓋で、JB-14-aに分類される。51、52は顔料がコバルトを使用している染付の蓋で、51はクロムと銅を併用し、52の器面は黄褐色の釉が施されている。JC-1-fの蓋であらう。53は染付で、JB-16の蓋である。54は顔料がコバルトを使用している染付の蓋で、JC-16に分類される。55、56は染付鉢でJB-5に分類される。55は文様は祥瑞風であるが過火度焼成のため呉須が流れている。高台は低いタイプの蛇ノ目凹形高台で、輪割部にはチャツの痕跡が明瞭に観察される。57、58はJC-20である。57は顔料が

第一節 陶磁器・土器



IV-192図 AL37-1出土遺物(5)

第IV章 江戸時代の遺物

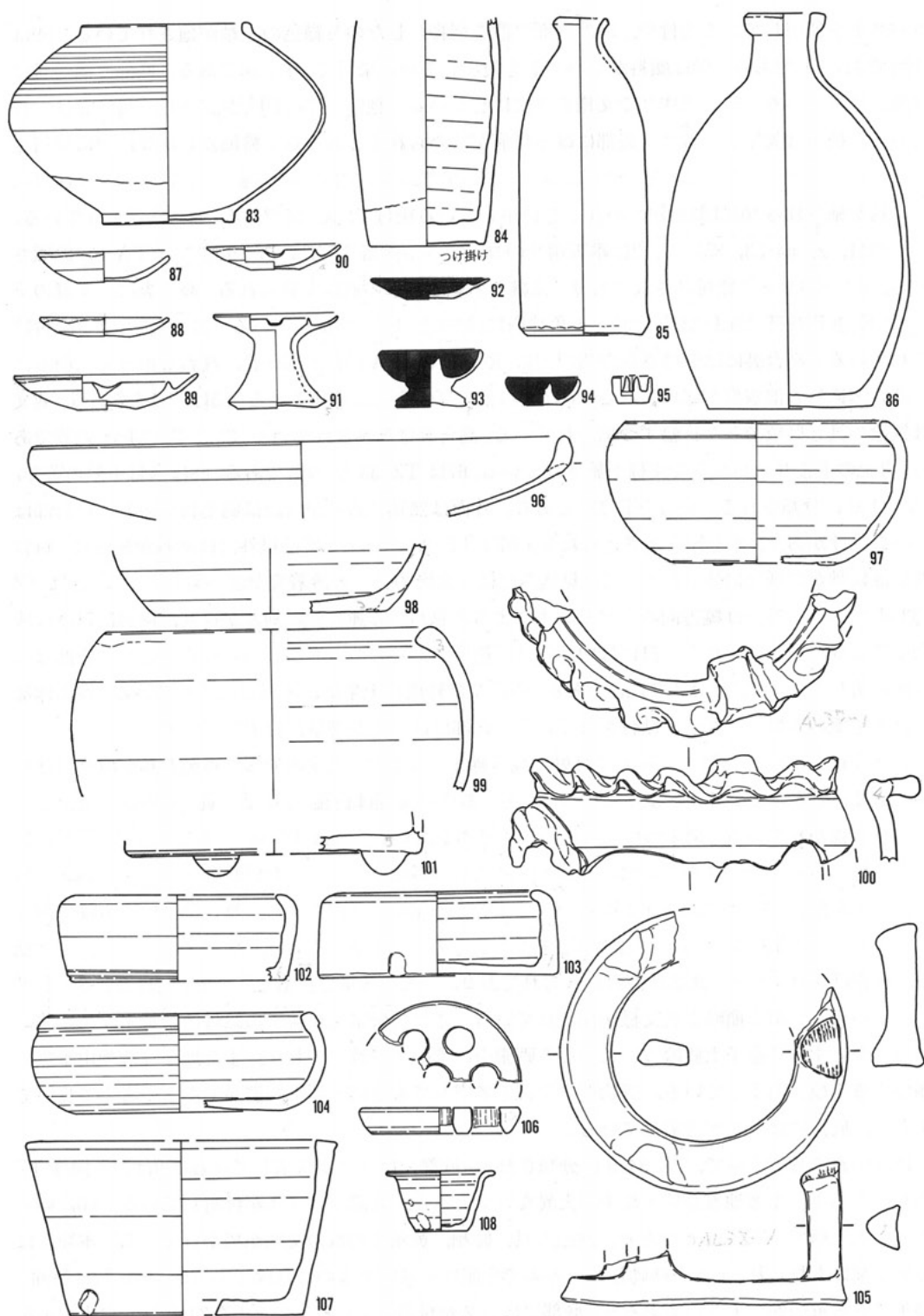
コバルトを使用している染付で、58は内面に龍を型押ししたのち緑色の上釉が施されている。59は染付でJB-20である。60は顔料がコバルトを使用している染付で、JC-16である。底部は渦巻状に沈線が巡っている。61は型作りで文様を浮文にしている。釉は上半に鉄釉が施され、掛け分けられている。把手は欠損しており、底部には布目痕が認められる。おそらく醬油差しかなにかに使用されていたものと考えられる。62は染付急須で、JB-16である。文様は祥瑞写しで、口唇部及び注口部に口銹が施される。63は顔料がコバルトを使用している染付で、JC-16である。焼き継ぎされている。

陶器(1, 2, 64-83, 85) 1, 2は銅版刷りのヨーロッパ陶器で、1はTA-5に、2はTA-2に分類される。1はコバルトで絵付けされており、漆継ぎと焼き継ぎの痕跡が見られる。高台裏には王冠の下に「P.K.」「PRIZE MEDAL」「1851」と角枠内に「MILLER」と描かれている。2は黒インクで絵付けされている。高台裏には装飾された楕円内に「ROSE WREATH」と描かれ、高台に沿って三箇所小さい窯道具の溶着痕が認められる。64は太白手でTC-2-hに分類される。65はTD-2である。菊文は鉄絵の具と呉須で各々1輪ずつ描かれている。高台裏は施釉されている。66はTZ-34-bの蓋である。白土の上よりコバルトで文様が施されている。67はTZ-33-bの蓋である。68は糸目土瓶の蓋で、TZ-34-dに分類される。69はTE-13である。外面は無釉であるが内面は刷毛目である。口唇部は小さな受けがあり、蓋を伴うと考えられる。70はTC-23である。底部以外には灰釉が施され、口唇部には鉄釉が口銹風に施されている。見込みには三箇所のピンの溶着痕が認められる。71, 72はTZ-33-dである。外面は縦方向のトビガンナによると思われる連続した刻みが巡り、内面は71には灰釉、72には鉄釉が施される。71には内面には三箇所のピンの溶着痕が認められる。ともに底部はススが付着している。73はTZ-33-aである。内面及び外面の上半には灰釉が施されている。外面体部には把手風の装飾が二箇所に貼付されている。底部にはススが多量に付着している。

74はTI-16である。胎土は極めて良好に焼き締まっており、把手の先端は可動な輪が取り付けられており、吊ることができるようになっている。器面の文様は白釉、緑、青、黄、赤の絵の具によって草花が描かれている。把手の桜花は透かし彫りされている。75はTI-34である。胎土、絵付けは74と同様である。全体に小さな凹みが認められ注口の裏側に貼付された橋状把手の下には暗印で楕円内に「萬古」、さらに陽印で正円内に「日本有節」の印が押されている。焼き継ぎによる補修がされている。76はTZ-34である。器面は長石分の含まれると思われる不透明な白釉が、内面には灰釉が化粧掛けされている。底部は高台が作られており、ススが多量に付着している。77はTZ-34-bである。白土と呉須で簡略な花文様が描かれている。これは柳宗悦が益子の絵付け師皆川マスに筆で描かせたとする「益子土瓶絵づくし」なる画帳中の梅絵と一致しており、また地藏院窯や山本窯に類似する土瓶が出土している。遺物群の年代を考慮しても笠間・益子の製品であると考えて良いであろう。底部にはススが付着している。

78はいわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類される。底部にはススが付着している。79は77と同様TZ-34-bである。生産地も笠間・益子で大異なideであろう。底部にはススが付着している。80はいわゆる山水土瓶で、TZ-34-cである。鉄絵の具、緑釉、黄釉で山水の文様が描かれている。本類ははじめ信楽にも見られ、工人が移動しているので生産地を限定するのは危険であるが、年代的に笠間・益子である可能性が大きいであろう。底部にはススが付着している。81はTZ-34-bで、白土の上か

第一節 陶磁器・土器



IV-193図 AL37-1出土遺物(6)

第IV章 江戸時代の遺物

らコバルトで絵付けされている。底部にはススが付着している。82は柿釉の大甕でTC-26-b に分類される。見込みには八箇所のトチの溶着痕が認められる。83はTD-15である。器面には灰釉が施され薄く不明瞭であるが鉄絵の具と白土で花文らしき文様が描かれている。内面は灰釉が化粧掛けされている。2号組石の151と同一系譜上にあると思われる。85はいわゆる爛徳利で、TD-10である。銅緑釉が施されている。底部は無釉で脇は面取りされている。

徳利(84, 86) 84は瀬戸美濃産の灰釉系2合半徳利で胴部の破損により釘書の有無については確認できない。寸胴つけ掛けであり、胴部下端は無釉となっている。86は口唇部の周辺および内側の全面に透明釉が施されているのみで、外面部のほとんどが無釉の徳利である。胎土は淡褐色を帯びている。口唇部は厚目に折り返され、頸部は短い筒状、胴部は中程が強く張って整った器形を示している。底部は所謂ベタ底である。墨書等は少なくとも現状では認められない。産地等については不明である。2合半徳利、5合・1升徳利がそれぞれ130個体ほど出土している。志戸呂産徳利はごく小量が、瀬戸美濃産鉄釉系徳利は15個体ほどが見られるに過ぎない。

灯火具(87-95) 87-91まで灰釉である。87, 88は油皿、ともに完形であり、灯芯油痕が表面の釉が施されない口唇に付着する。見込みにピン痕が認められる。底部はヘラケズリ調整が施される。口径は同じであるが、器高が異なっている。89, 90は受付。両者ともほぼ完形である。灯芯油痕もそれぞれの表面口唇の一端に付着する。底面はヘラケズリ調整による。91は有脚受付。口唇の一部を欠くが、ほぼ完形である。92-94は透明釉である。92は油皿、油痕の付着はなく左回転の糸切り底。93, 94は乗燭。93は脚のつく乗燭である。かなり使い込まれたらしく油痕は灯心立ばかりではなく、器面内外面に及ぶ。94の油痕は灯心立の先端のみ認められる。ともに左回転の糸切り底。95は素焼乗燭。94と同様、油痕は灯心立の先端のみに認められる。左回転の糸切り底らしい。灯火具は図示したものを含め16点の出土である。ここでは灰釉系が多いようであり、時期差を反映しているとも考えられる。油皿 4点、受付 3点、有脚受付 2点の出土である。他は透明釉の油皿 1点、有脚受付 3点、乗燭 2点、素焼乗燭 1点の出土となる。

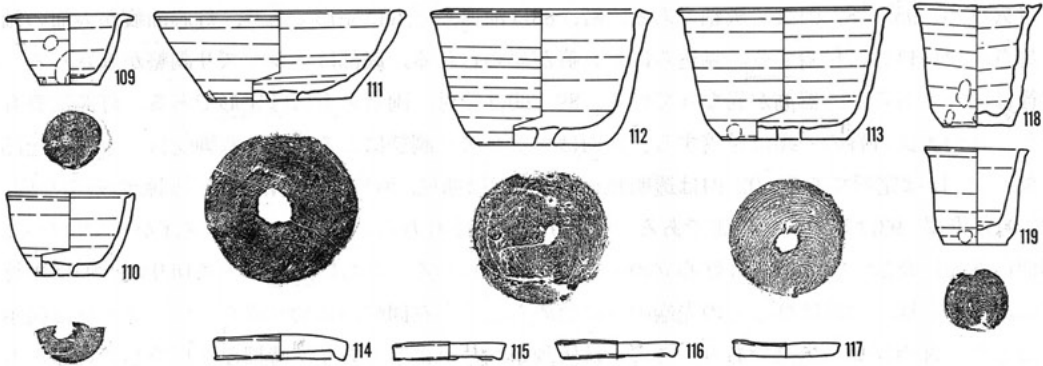
焙烙 96の口径は33cm。H21-2の79を発展させた形態であり、口縁がさらに短くなり断面は三角形に近い。AE36-4の32やAE36-5の9と同じ形態である。ここでは最末期に位置づけられる焙烙である。他に底部片は9点、口縁片は16点確認されている。F33-3に類似のもの2点、AE39-1に類似のもの2点、96類似のものは14点の確認である。うち2点は小型の焙烙である。点数が少なく明確ではないが、96類似のものがある程度まとまって確認されており、やはりこのタイプのまとまりで一段階を画するものと考えている。

土器(97-113) 97は1類aイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。部分的に褐色を帯びている。口唇外側には沈線が巡りその上はミガかれている。体部外面は横にケズられている。底面は平滑にナデられている。98は1類aイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。外面は横にケズられ、その上にローラーによると思われるトビガンナ状の凹凸がつけられている。底面にはコビキ痕が見られる。99は1類bイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。口唇部上端には擦痕が連続する。体部外面はチリメン状の凹凸が、おそらくはローラーによってつけられその上をミガかれている。100は硬質瓦質の火鉢類の口縁部片。輪積み成形である。口縁

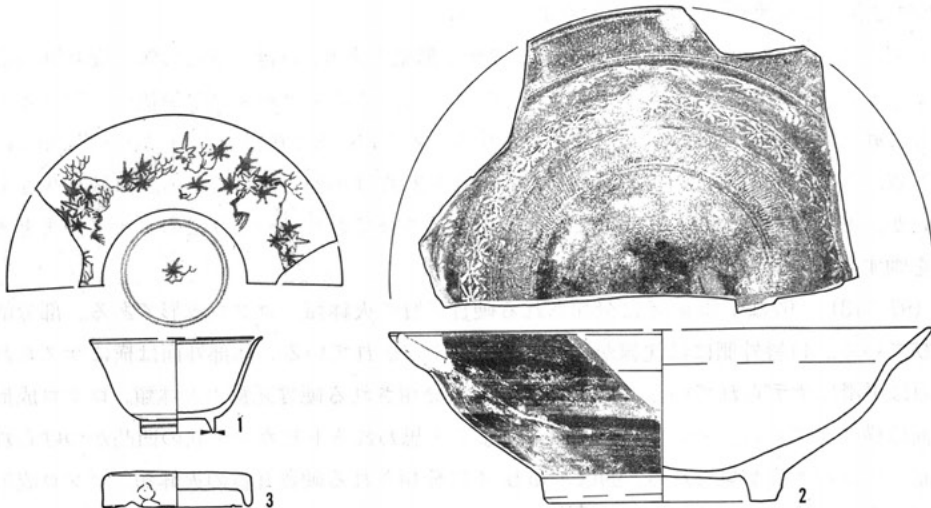
第一節 陶磁器・土器

部下の二箇所雲形の窓が切り開かれており、一方の窓の周囲と口縁部には粘土紐が指の腹で断続的に圧迫して貼付してある。また口縁部上面に直方体の突起が一箇所貼付されている。口唇部内側には粘土を折り曲げたことを窺わせる小亀裂が連続する。内面は横にナデられており、火を受けたためであろう白色化している。類似の破片が他に1個体分見られる。101は硬質土師質の火鉢類の底部片。ロクロ成形である。体部はほとんど残存しないが、表面にはチリメン状の凹凸がつけられ、その上がミガかれている。底面には半球状の足が見られ、また砂粒の痕が観察される。

102-104はロクロ成形の軟質土師質の容器。透明釉がかかる。底面には糸切り痕が見られる。これらは火入れの類とも思われるが、口縁部に敲打痕が見られないこと、火を受けたような痕跡のないことなどから建水の類と考えられる。同様のものが他に4点見られる。105は硬質瓦質の五徳。柱の上面には刻みが施されている。円環の下面および柱の背にはコビキ痕が見られる。瓦質という材質だからであろうが、軟質土師質の五徳とは基本的に形態が異なる。106は軟質土師質の焜炉用のさな(目皿)。断面は台形であり上面が火を受けたものであろう、白色の皮膜に覆われている。円孔が



AL37-1(7)



J38-5

IV-194図 AL37-1(7)、J38-5出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物

四つ見られるが元来八つあったものであろう。107は硬質瓦質の植木鉢。ロクロ成形である。底面中央には焼成前の穿孔がある。類例のなかではもっとも大型である。108は硬質瓦質の、109は軟質土師質の小型の鉢。ロクロ成形である。両者ともほぼ同一の器形で底に穿孔はないが、110と比較して植木鉢と考えるのが妥当であろう。ほぼ同一の器形、大きさでありながら瓦質と土師質との差があることは技術系統の問題から注目に値しよう。110、111は硬質瓦質の、112、113は軟質土師質の植木鉢。ロクロ成形である。底面中央には焼成前の穿孔がある。このほかに硬質瓦質の火鉢類数個体、軟質土師質の火鉢類10個体以上、瓦質・土師質の植木鉢数点など多くの土器が見られる。火鉢類、植木鉢をはじめ多様な製品が数多く見られ、近世のもっとも新しい段階の一つの示準となる遺構と考えられる。

焼塩壺(114-119) 114はI類1dに分類される蓋。やや赤みを帯びた肌色を呈する。下面には粗い布目が見られる。115、116はI類1eに分類される蓋。115は橙色を帯びた桃色を、116は桃色を帯びた褐色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面および側面は比較的均整がとれている。117はウ類に分類される蓋。赤みを帯びた褐色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面および側面は比較的均整がとれている。118、119はIII類dに分類される身。刻印はない。118は桃色を帯びた褐色を、119は橙色を帯びた桃色を呈する。ともに体部の底部付近が強く絞られる。このほか4点のウ類の蓋と8点のIII類の身の小片が見られる。焼塩壺のもっとも新しい段階の一群を示す資料である。

5 共同溝建設地点などの遺構出土の陶磁器・土器

J38-5 (IV-194図) 磁器 1はJC-1-dである。呉須は地呉須を使用している。

陶器 2はTB-5-bである。見込みの象嵌は型押しは深い、白土の充填は雑である。中央には砂胎土目積みの砂が付着している。体部下半には鉄釉が化粧掛けされている。

焼塩壺 3はI類1bに分類される蓋。橙色を帯びた肌色を呈する。上面、側面はナデられ、側面には指頭痕が見られる。下面には細かい布目が見られる。このほか硬質瓦質の火鉢類の破片が2個体見られる。

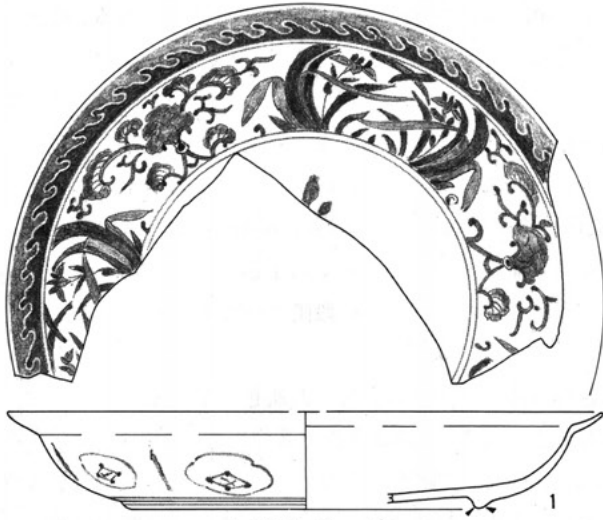
AE40-1 (IV-195図) 磁器 1は染付大皿でJB-2-eに分類される。口縁部の波濤文は墨弾きされている。

U48-2 (IV-195図) 磁器(1-3) 1は染付皿でJB-2-iに分類される。高台裏に「俵次」の釘書が刻まれている。2は染錦手の合子で、JB-18に分類される。文様は染付に金、朱で上絵付けされている。3は染付でJC-1-eである。

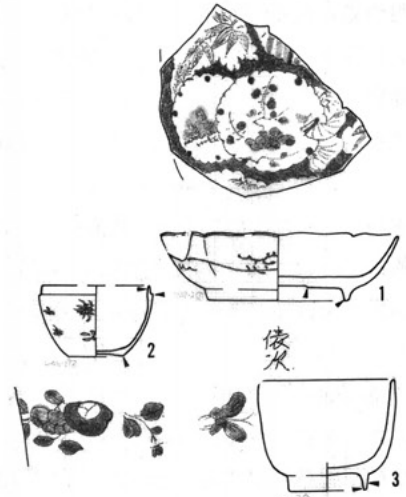
U48-3 (IV-195図) 土器 1はI類aロに分類される軟質土師質の火鉢類。輪積み成形である。体部外面は横にケズられ平滑である。足は矮小でいわば痕跡的である。口唇部は内側に大きく張り出し、内面に煤が付着している。底面には砂粒の痕が見られる。体部内面は横にナデられている。

V46-3 (IV-195図) 磁器(1-4) 1-4は染付である。1はJC-3-bである。高台裏に「俵次」の釘書が刻まれている。2はJC-1-eである。3は植木鉢で、JC-21に分類される。呉須は地呉須を使用している。4はJB-13-cである。焼き継ぎで補修されている痕跡が認められる。

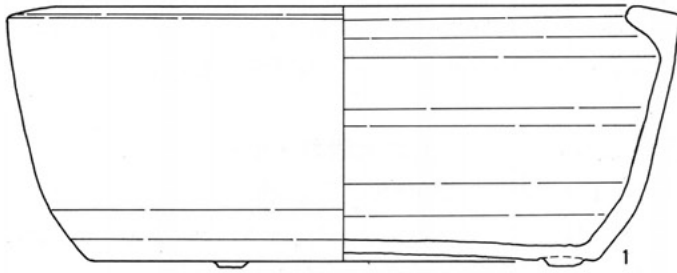
第一節 陶磁器・土器



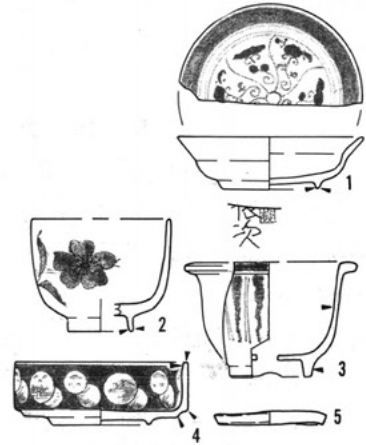
AE40-1



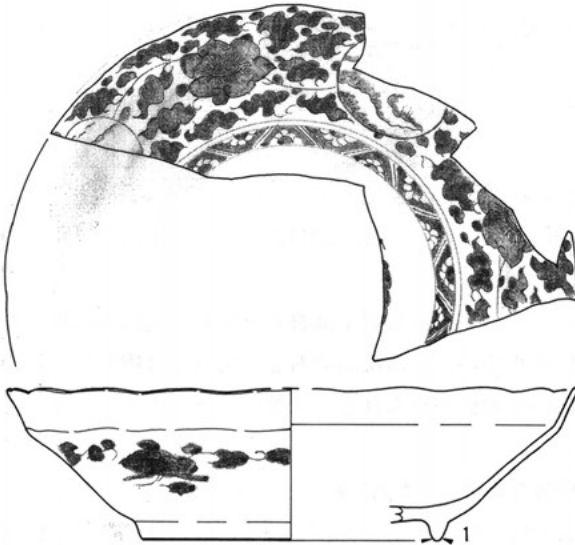
U48-2



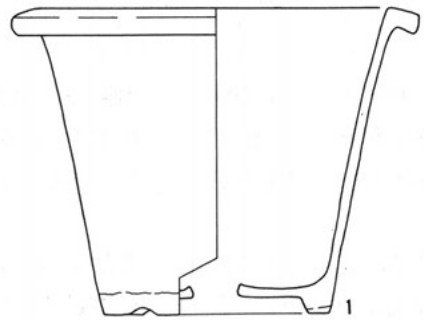
U48-3



V46-3



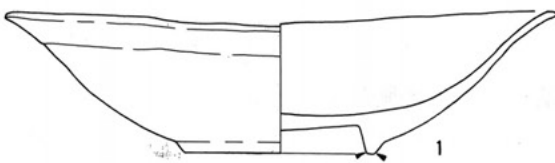
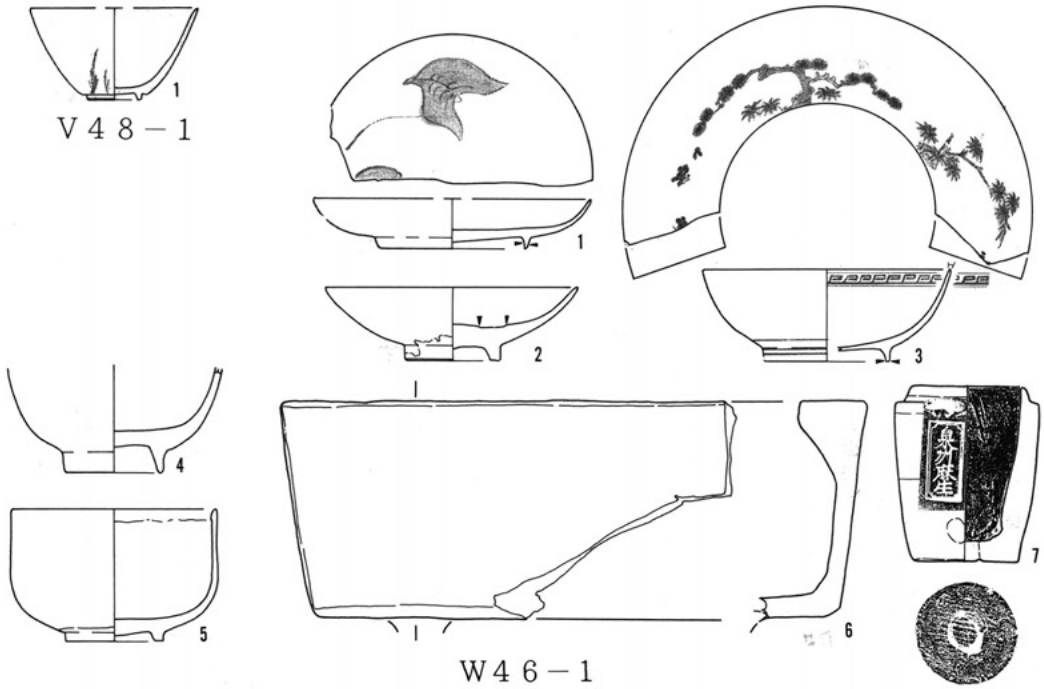
V46-20



V47-8

IV-195図 AE40-1、U48-2、U48-3、V46-3、V46-20、V47-8出土遺物

第IV章 江戸時代の遺物



Y48-1

IV-196図 V48-1、W46-1、Y48-1、AH33-1出土遺物

第一節 陶磁器・土器

焼塩壺 5 はウ類に分類される蓋。濃い桃色を呈する。上面には手掌痕が見られ下面および側面は比較的均整がとれている。このほか土器、焼塩壺とも見られない。

V46-20 (IV-195図) 磁器 1 は染付皿で JB-2-e に分類される。焼き継ぎで補修されている痕跡が認められる。

V47-8 (IV-195図) 陶器 1 は TC-21 である。器面、口縁部には灰釉が施されている。底部中央には径25mm の孔が穿たれている。

V48-1 (IV-196図) 陶器 1 はいわゆる小杉茶碗で TD-1-d に分類される。鉄絵の具で若杉文が描かれているがかなり雑である。

W46-1 (IV-196, 200図) 本遺構よりややまとまった量の遺物が出土している。II期に相当する。

磁器(1-3) 1は染付磁器で JB-2-c に分類される。漆継ぎの痕跡が認められる。2は青磁蛇ノ目釉剃ぎの皿で JB-2-k である。底部は無釉である。3は染付鉢で、JB-5である。口唇部には口鏽が施されている。二次焼成を受けている。

陶器(4, 5) 4は京焼風陶器のうち呉器手と呼ばれているもので、TB-1-a に分類される。内外面に灰釉が施される。5は TF-1 である。器面には鉄釉、内面には鉄釉の化粧掛けが施される。あるいは香炉の可能性もあろう。

焙烙 8 は内耳のある焙烙である。口縁は高く内湾し外面にはわずかなくびれも認められる。ケズリは屈曲部をめぐる。内耳は口縁から底部にかけて貼り付けられ、内耳内部は空洞である。口縁はこれほど内湾しないが、内耳の貼り付けおよびケズリの位置など G20-2 の47と似る。他に G20-2 の45と似た口縁片が 2点出土しており、8より古く位置付けられよう。

土器 6 は 1 類 c に分類される軟質瓦質の火鉢類。板組造り成形である。四辺形を呈していたと思われるが、一辺の長さは不明である。外面は横を基本とする丁寧なケズリで平滑に整えられ、その上に弱いミガキが施されている。内面は横に丁寧なナデが走り、隅では縦にナデが加えられている。底面外側は軽くナデられており、砂粒の痕跡がわずかに見られる。

焼塩壺 7 は II 類 1 b1 に分類される身。3 類 1 b の刻印をもつ。体部は均整がとれており、外面は横にナデられている。内面の縫い目は比較的細かく、底面内側には布目が見られる。底面外側にムシロ状の圧痕が見られる。このほかには同形の身が 1 点見られる。

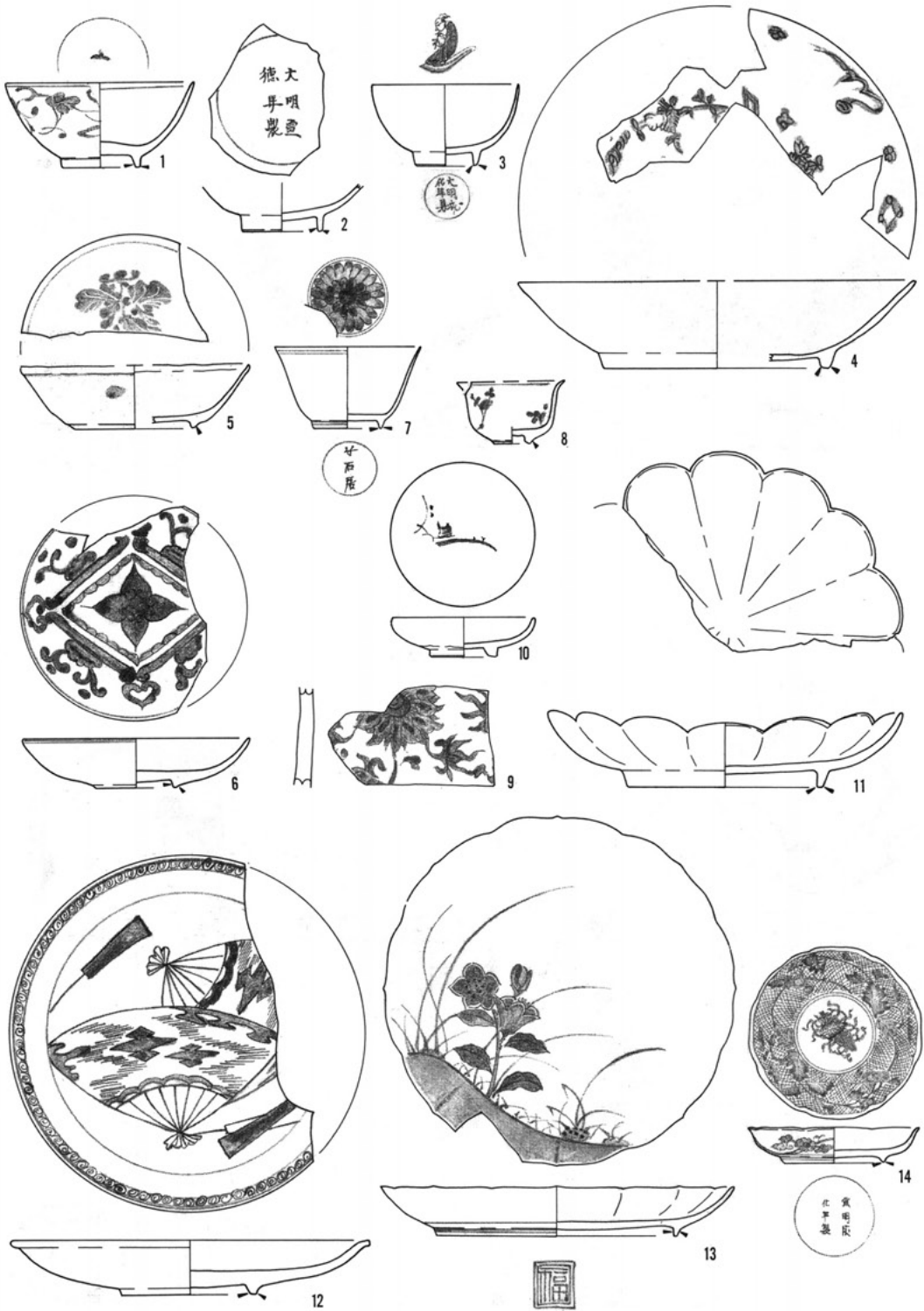
AH33-1 (IV-196図) 焼塩壺 1 はウ類に分類される蓋。桃色を帯びた肌色を呈する。上面には手掌による押圧により起伏が激しい。下面および側面は比較的均整がとれている。ほぼ同形の蓋の小片が 1 点見られる。

Y48-1 (IV-196図) 磁器 1 は染付芙蓉手の大皿で JB-2-a に分類される。胎土、呉須の発色はやや悪い。

6 各調査地点遺構外出土の陶磁器・土器

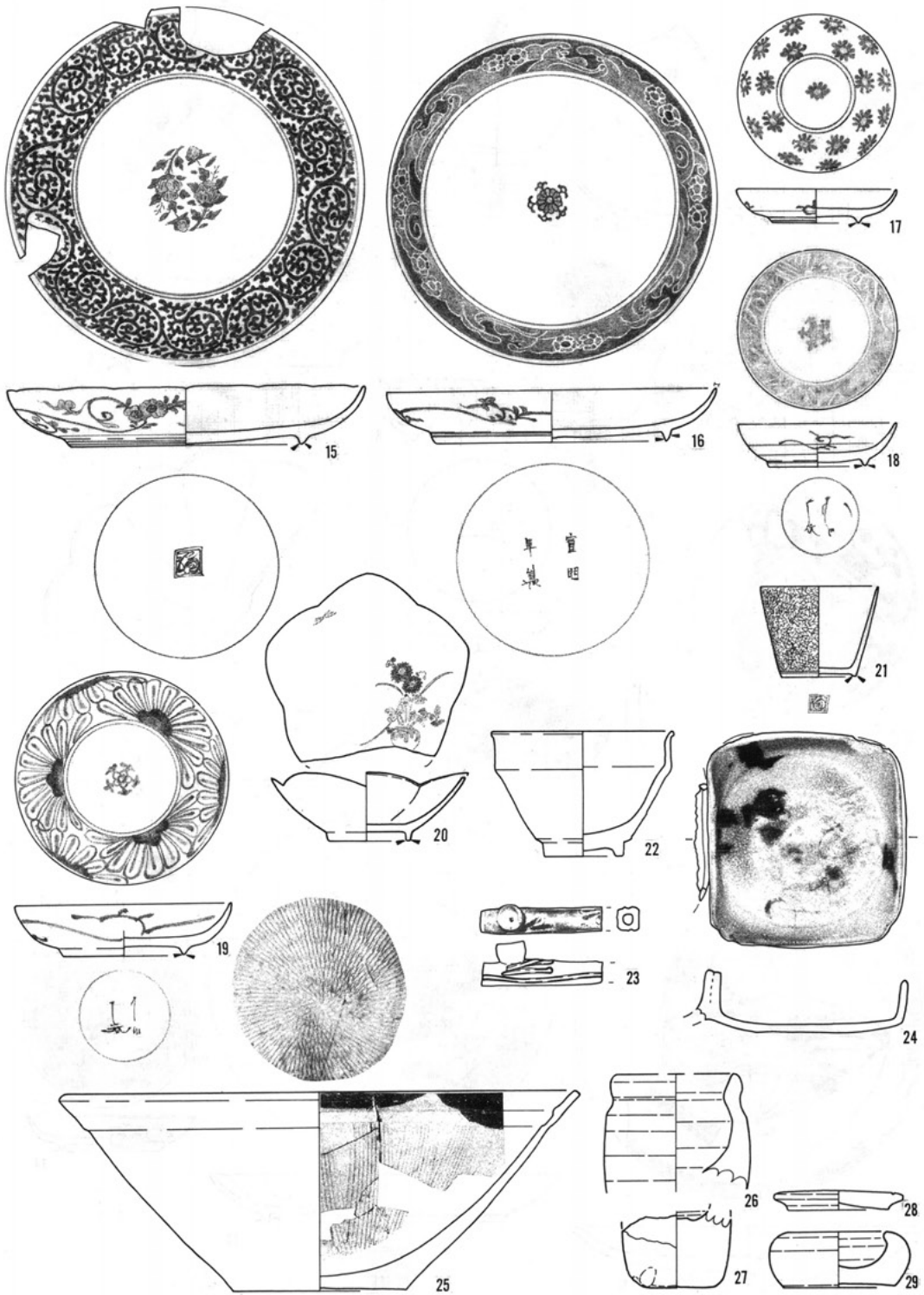
中央診療棟建設地点遺構外 (IV-197, 198図) 磁器(1-9, 12-21) 1-5, 7-9は舶載磁器で時期は明末のものと考えられる。1-3は青花碗で JA-1 である。1は粗悪な製品で、胎土、呉須の発色は不

第IV章 江戸時代の遺物



IV-197図 中央診療棟地点遺構外出土遺物(1)

第一節 陶磁器・土器



IV-198圖 中央診療棟地点遺構外出土遺物(2)

第IV章 江戸時代の遺物

良である。見込み中央はやや隆起し、口唇部には虫食いが見られる。2は池周辺の自然堆積層の上面より出土し、池とほぼ同時期になると考えられる。表面には釉切れが見られる。3は「大明成化年製」銘が描かれ、口唇部には虫食い認められる。4はいわゆる呉須赤絵と呼ばれる色絵磁器であるが、胎土は悪く、釉も厚く施されている。文様は呉須と青絵の具で上絵付けされ、畳付は茶褐色の粗砂粒が多量に付着している。5は富田川河床遺跡などで出土している墨弾きで白抜きされた野菜文の皿でJA-2に分類される。底部は無釉で口唇部には虫食い認められる。7, 8は青花小坏でJA-6に分類される。7の銘は「竹石居」で、これまでの報告では長崎県岩下遺跡の1例のみである。本地点では小坏のほかに皿に同銘が付されているものも検出されている。8は底部無釉である。9は青花大壺で、JA-15である。下の欠損面は壺の接合部であることを窺わせる。

6, 12は染付皿で、JB-2-aに分類される。ともに呉須の発色は良好で、畳付には白砂が付着している。13-19, 21は重機で表土剥ぎ中に検出された一括遺物で、すべて4-6個のセットで出土した。13は輪花の染付皿でJB-1-cに分類される。銘は二重角枠内角福で、高台裏には三箇所ハリ支えが認められる。おそらく長吉谷窯あたりの製品であると考えられる。14は輪花の染付小皿でJB-3-cである。銘は「宣明成化年製」である。15は輪花の染付皿でJB-1-eに分類される。銘は二重角枠内渦福で、高台裏には五箇所ハリ支えが認められる。見込み中央の花文様は摺絵で絵付けられている。16は染付皿でJB-1-eに分類される。銘は「宣明年製」で、高台裏には四箇所ハリ支えが認められる。見込み文様は墨弾きで絵付けられ、中央五弁花はコンニャク判である。口唇部には口銹が施される。17, 18は染付小皿でJB-3-aに分類される。見込み文様は17がコンニャク判、18が外側が不明瞭ではあるが墨弾き、中央五弁花はコンニャク判で絵付けられている。18は略した「大明年製」銘が描かれている。19は染付でJB-2-gである。略した「大明年製」銘が描かれている。20は柿右衛門様式の鉢でJB-5である。乳白手の生地に、朱、黄等で花と蝶文が上絵付けされている。割れ口には漆継ぎの痕跡が認められる。21は染付猪口でJB-7-bに分類される。6個体検出しているが図示した二重角枠内渦福銘のほかに「大明成化年製」銘のものも混入しており、2セット以上の存在が確認されている。

陶器(10, 11, 22-25) 10はTD-2である。高台は蛇ノ目高台で、脇は面取りされている。見込みには鉄絵で山水文が描かれ、三箇所のピン痕が認められる。底部は無釉である。11は花卉状に型作りされた皿で、白釉が厚く施され、大きめの貫入が全体に認められる。畳付には白色の砂粒が付着している。生産地は不明である。22は白天目でTC-1-bに分けられる。釉は長石釉である。23は織部のきせるである。きせるの脇、上部には竹管によるしのぎが花卉状に施され、上より緑釉が掛けられている。きせるの先端は閉塞されていない。24は織部の向付けである。欠損しているため全体の器形は不明であるが隅丸方形の皿が2個体貼り付けられていたと考えられる。見込みには鉄絵の具で文様が施され、所々に緑釉が流し掛けされている。25は播鉢である。胎土は炆器質で極めて堅緻である。播目は11条1単位で、見込み中央から引き上げられている。口唇部には鉄釉が施され、底部は回転糸切り痕が認められる。生産地は不明。

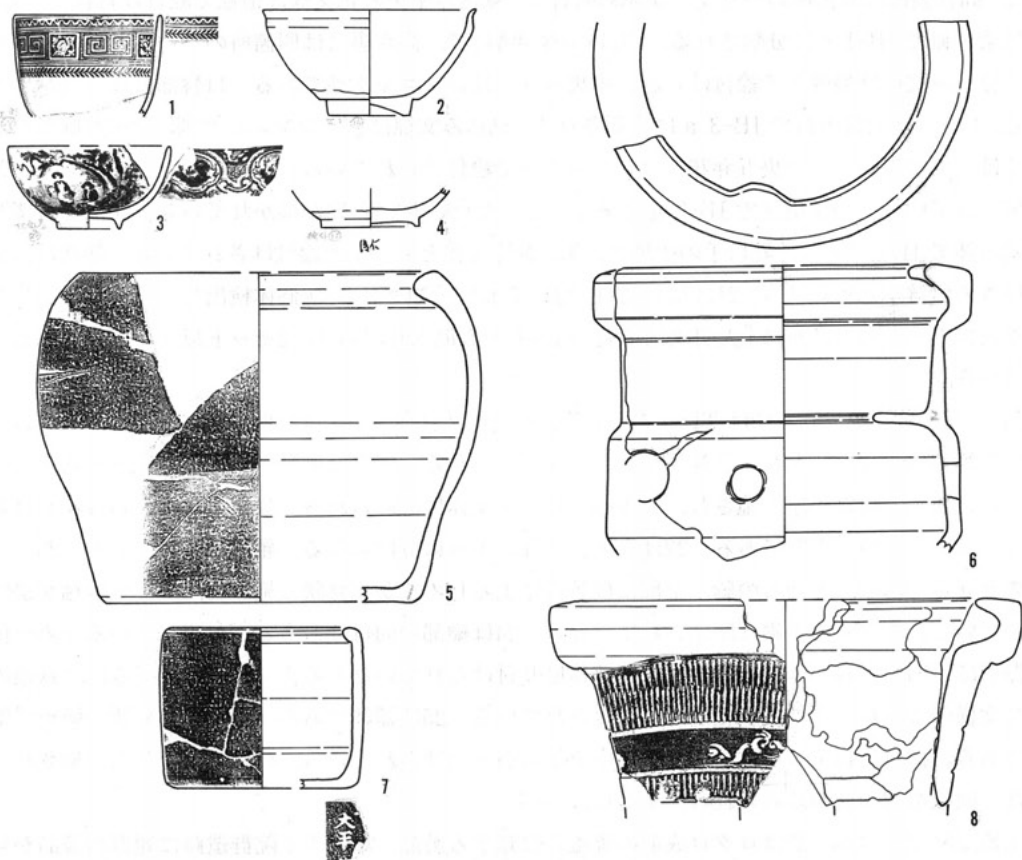
土器(26, 27) 26, 27はロクロ成形の焼塩壺に類する製品。増上寺子院群遺跡に類似の製品が見られる。明るい橙色を呈する。26は口縁から底部にかけての破片で、「池」出土のものと同類似する。

第一節 陶磁器・土器

6号組石の上段の周辺よりの出土である。27はやや小振りではあるが底部の破片である。きわめて厚く、底面は打ち欠かれたように敲打痕が覆っている。H28区周辺よりの出土である。

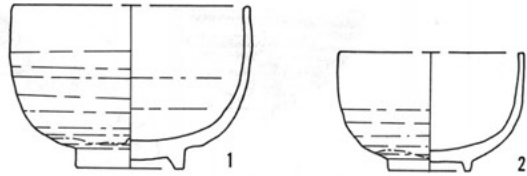
焼塩壺(28, 29) 28はオ類に分類される蓋。6類2の刻印をもつ。ロクロ成形である。灰色がかった白色の胎土を持つ。表面はミガかれたように平滑である。刻印は異なるが、渡辺誠氏の分類によるC類と同形である(渡辺 1983)。調査区中央の表土の下の堆積層中よりの出土である。29は鉢形3類に分類される身。刻印は見られない。黄白色の緻密な胎土を持つ。渡辺誠氏の分類によるL類と同形である(渡辺 1983)。氏によればこのタイプの出土は京都に限られ、東京ではこれまで知られていないという。調査区中央南端の、ローム直上まで攪乱を受けた部分よりの出土である。

設備管理棟・給水設備棟遺構外 (IV-199 図) 陶器(1-4) 1, 3はヨーロッパの銅版摺り陶器でTA-1に分類される。1は黒インクで、3はコバルトで絵付けされている。3はAL37-1の1とは大, 中, 小の3点セットであろうと思われ、本例はもっとも小型の碗になると考えられる。2は天目茶碗で、TC-1-aに分類される。高台は中央を削り込み、鉄釉で化粧掛けされている。口縁の屈曲は弱く幅は狭い。4は京焼風陶器でTC-1-bである。ただ印銘が「仁清」とあり、肥前にこの刻印が認められていないので限定はできないであろうが、刻印の位置、字体より仁清の模作であると考えられる。

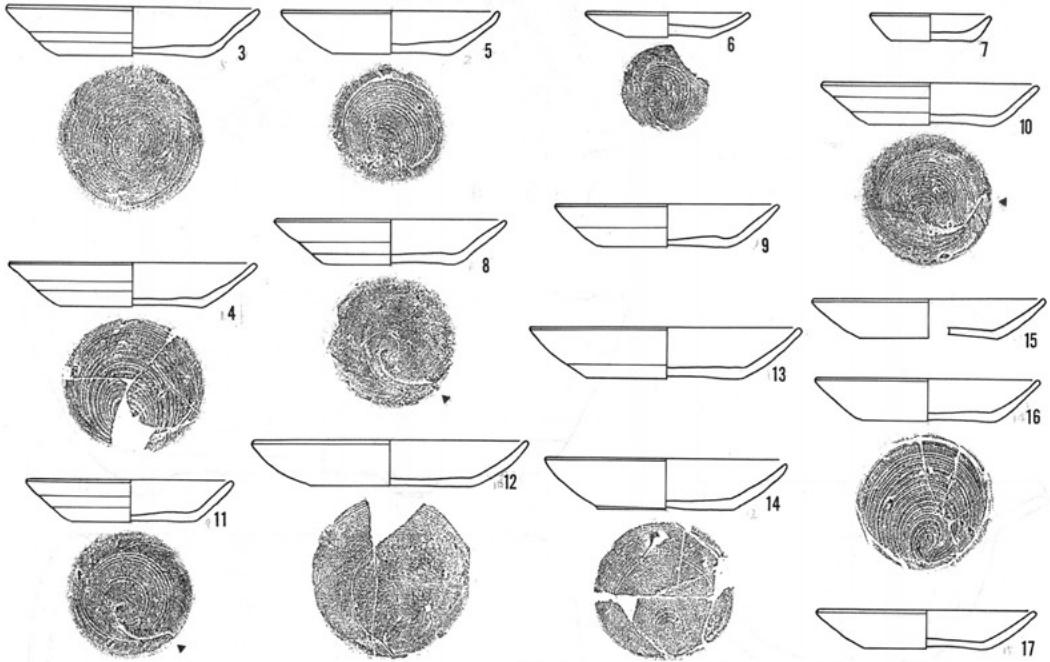


IV-199図 設備管理棟地点・給水設備棟地点遺構外出土遺物

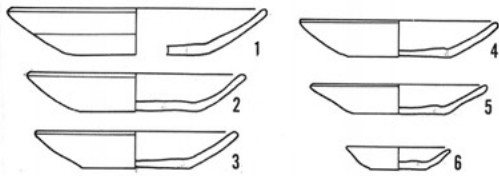
第IV章 江戸時代の遺物



C 2 6 - 2



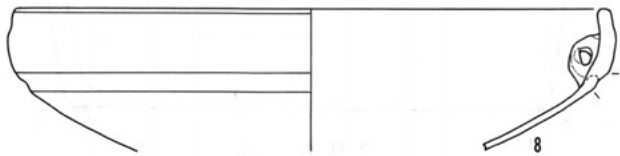
D 3 5 - 1



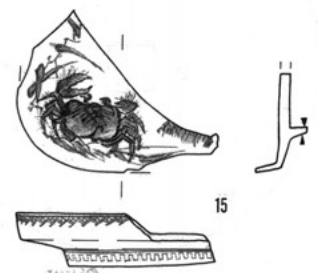
G 3 3 - 5



F 3 3 - 3



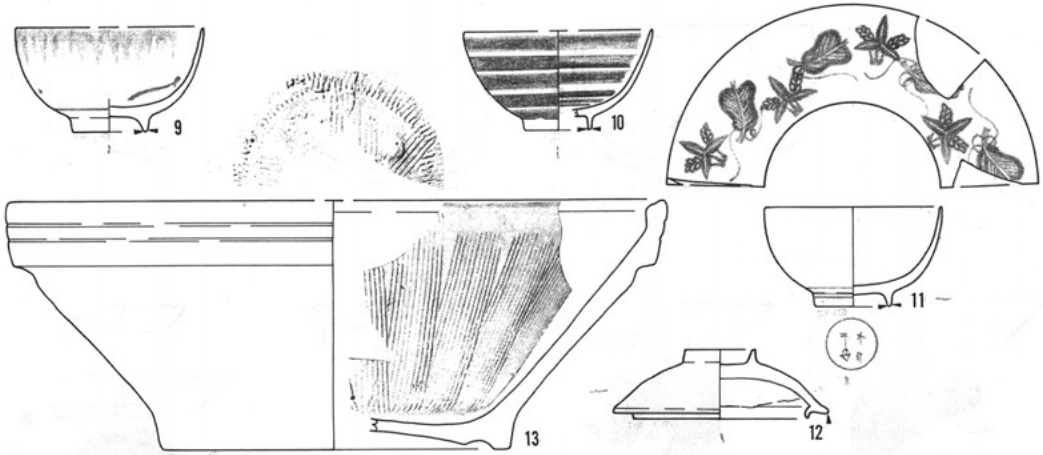
W 4 6 - 1



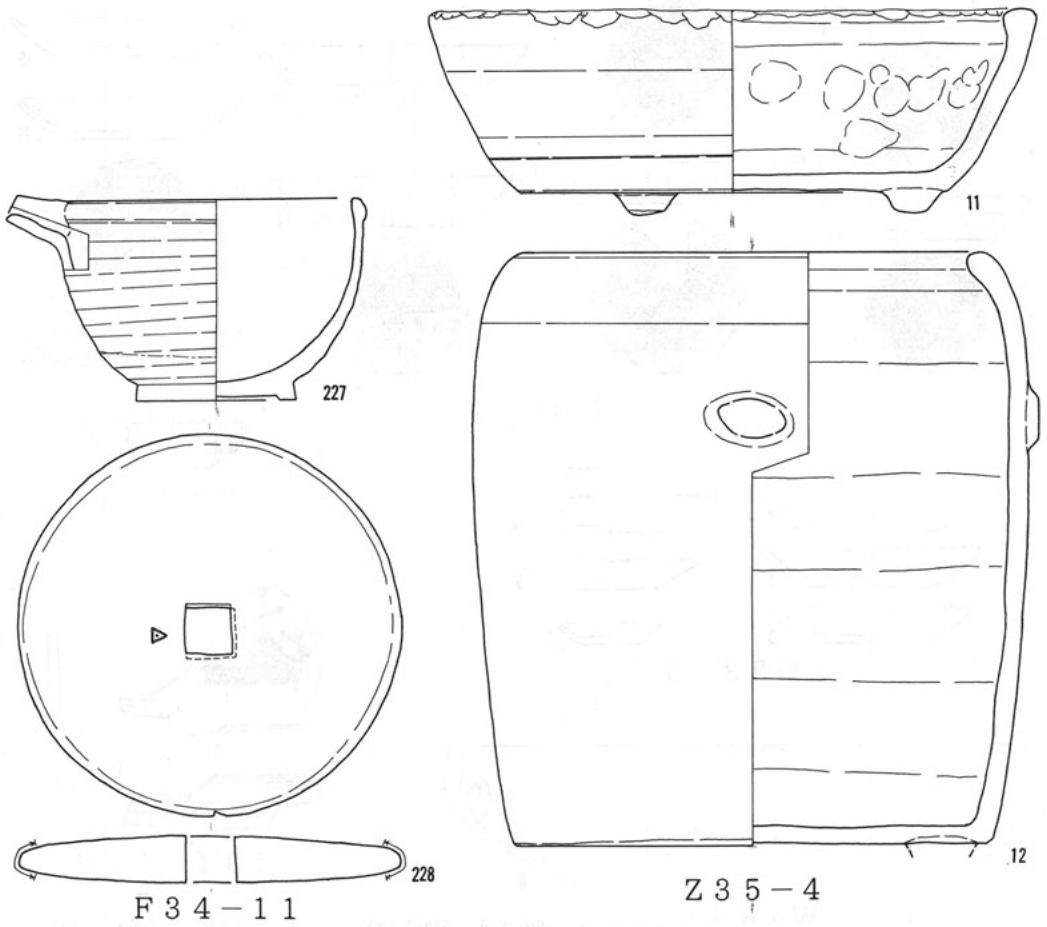
J 3 1 - 1 · 2

IV-200図 C26-2、D35-1、F33-3、G33-5、J31-1、W46-1出土遺物（追補）

第一節 陶磁器・土器



Y 3 5 - 4



IV-201 図 F34-11、Y35-4、Z35-4出土遺物（追補）

第IV章 江戸時代の遺物

土器(5-8) 5は1類bイに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。口唇部上端には擦痕が連続する。体部外面はチリメン状の凹凸がおそらくはローラーによってつけられ、その上をミガかかっている。底面にはコビキ痕が見られる。給水設備棟地点西側の攪乱中よりの出土であるが、AL37-1出土の99と同一個体である。6は2類cロに分類される硬質土師質の火鉢類。ロクロ成形で、体部の底状の突起の下側には円形の孔が二つ見られる。口唇部内側には突起が貼付されている。体部外面は横の条線に覆われている。口縁部上面は丁寧にミガかれており、煤が付着している。給水設備棟地点西側の攪乱中よりの出土である。7は硬質瓦質の火入れ。ロクロ成形である。体部外面はチリメン状の凹凸がおそらくはローラーによってつけられ、その上をミガかかっている。底面には砂粒の痕が見られ、周縁部には「大平」の刻印が見られる。口唇部に敲打痕は見られず、弱い擦痕が連続する。給水設備棟地点西側の攪乱中よりの出土である。8は2類cロに分類される硬質瓦質の火鉢類。ロクロ成形である。上面から側面にかけて丁寧にミガかかっている。外面には2本の太くて浅い沈線が巡り、その間に唐草のような模様がスタンプによって入れられ、そのまわりがミガかかっている。この文様帯の上下には、トビガンナ状の縦の凹凸が、ローラーによってつけられている。内面には、漆喰が厚く付着している。給水設備棟地点東側の表土中よりの出土である。近代以降の所産と思われる。

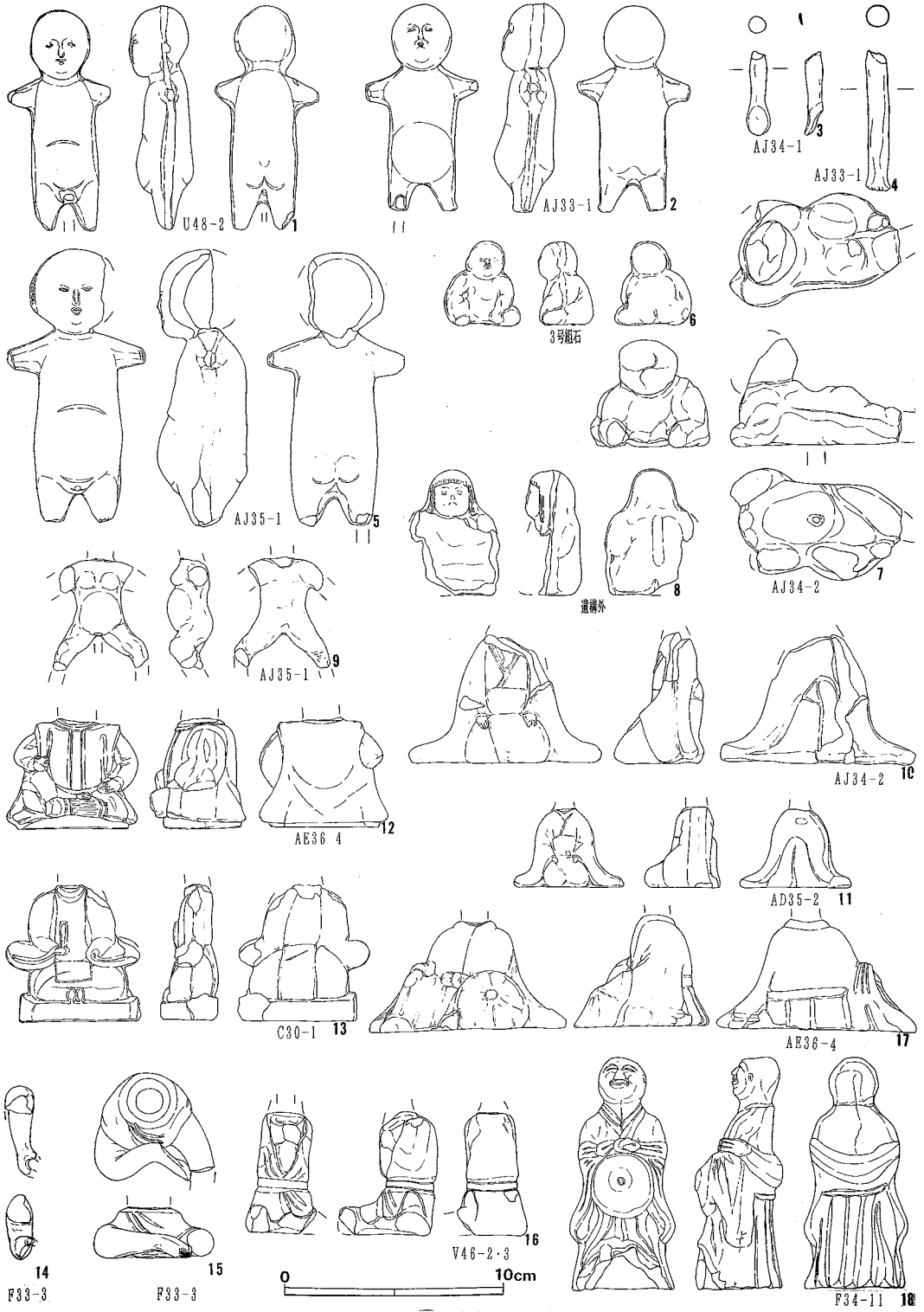
第二節 各地点出土玩具類

主として土製の、非実用的な用途の考えられる製品と、用途性格の不明な製品などについて報告する(IV-202~208 図)。なお特に記したものを以外は、軟質の土師質であり、橙色もしくは橙色を帯びた褐色を呈する。

人形(1-57) ここでいう人形は、人間および動物をモチーフとしたものである。ただし、人間をモチーフとしたもの(1-29)の中には舟(28)や亀(29)と思われるものの上に人間が乗るものも含んでいる。1, 2, 5-7は裸形の乳児を象ったものである。合わせ型成形である。1, 2, 5は正立し、球形で毛髪の無い頭部、下腹の膨らんだ胴部、付け根のみの四肢とをもつほぼ同形のものである。中空で側面に型の合わせ目が観察できる。いずれも右足の末端に穿孔をもちこれは他の例においても同様である。1は下肢付け根の中央の前後にも穿孔をもつ。表面に白色の物質が付着している。これらはその形態から「孕み人形」、「裸人形」と呼ばれ、あるいは小児の墓から出土することから「友引人形」とも呼ばれるという(加納 1989, 嶋根 1989)。3, 4は棒状の製品で、粘土紐の末端を3は篋状につぶし、4は刻み目を連続させてそれぞれ手足を表してある。前記「裸人形」の四肢とされるものであり4は2と同遺構よりの出土である。6は右足を立て膝にしてあぐらをかいており中実で側面に型の合わせ目が観察できる。頭髪は表現されていない。7は腹ばいになっており、中実で側面および頸部に型の合わせ目が観察できる。頭部顔面および右足を除く四肢末端を欠く。頭髪は表現されていなかったようである。臍の位置に穿孔をもつ。

8は座位の小児を象ったものである。中空の合わせ型成形である。体部前面を欠損している。残存する背面からみると裸形であったと思われる。髪は禿(カムロ)にしている。口を一字に結んで

第二節 各地点出土玩具類



IV-202图 各地点出土玩具類(1)

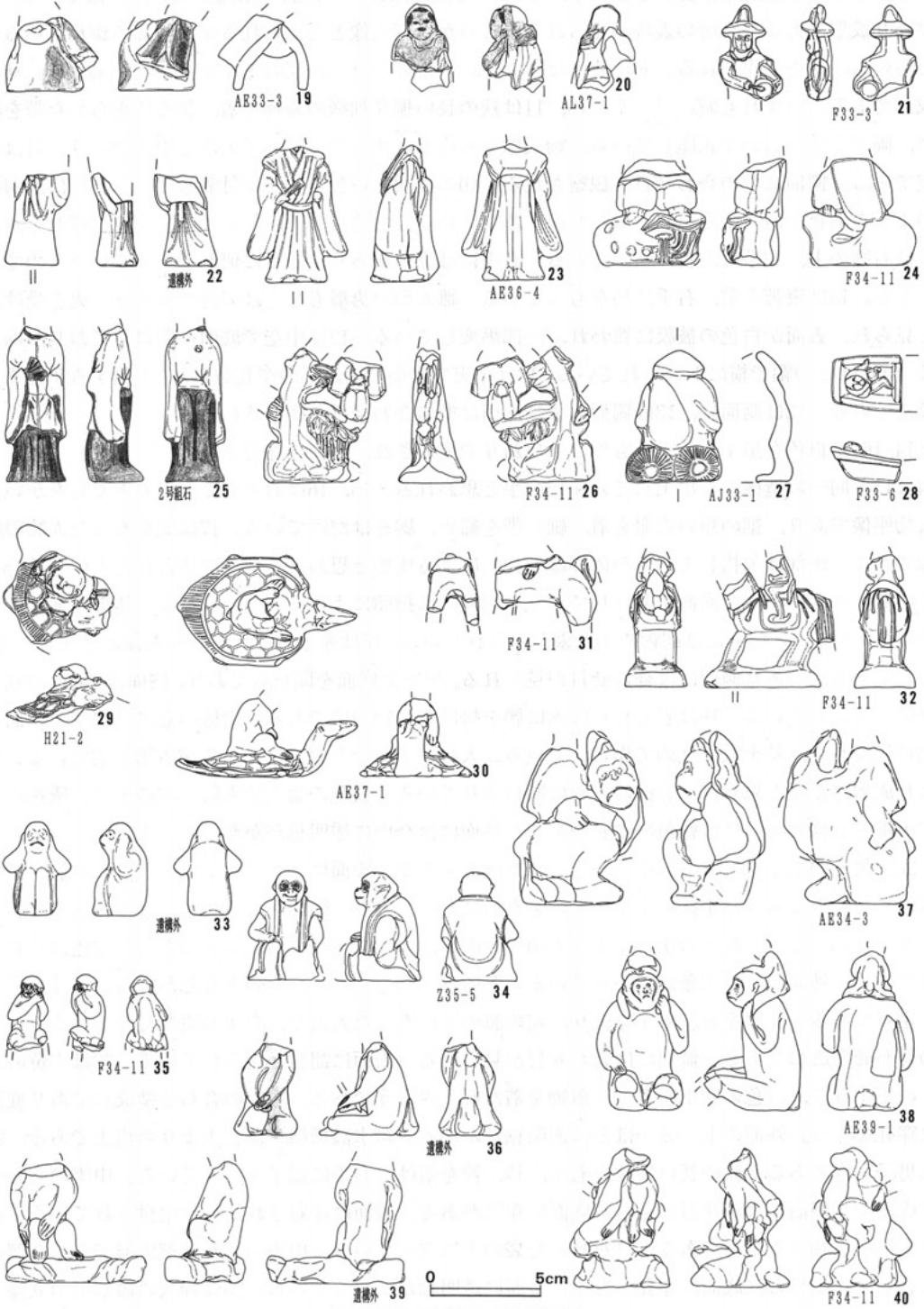
第IV章 江戸時代の遺物

おり、あるいは金太郎を表したものであろうか。9は頭部および四肢の末端を欠いた裸像である。手びねり成形である。乳房の表現の見られるところから婦人像と考えられるが、腹部の膨れているところから妊婦とも思われる。下肢付け根の中央に穿孔をもつ。10-13は着衣の座像である。合わせ型成形である。いずれも頭部を欠く。10、11は袂の長い振り袖様の着物を着、後ろに垂らした帯を締め、両手を膝において正座している。婦人像であろう。10は11に比べて大きく中空であり、11は中実である。側面に型の合わせ目が観察される。10の表面に白色の物質が付着している。12は陣羽織のような着物を着、腿立を高く取った袴を覆っている。右膝を立て、左足は身体の前に横たえ、右手は右膝の上、左手は左脇に当てている。右手には穿孔があり、ここに何かをもっていたものであろうか。13は束帯を着、右手に笏をもっている。雛人形の男雛もしくは天神であろう。火を受けたと見られ、表面が白色の被膜に覆われ、一部黒変している。12は中空で底面が開口しており、内面は2cmほどの幅で横にケズられている。13は中実で底面に円錐形の穿孔があり、欠損する頸部まで及んでいる。12は側面に、13は側面および内面に型の合わせ目が観察される。

14-16は白色を呈する胎土をもつ。手びねりで成形され、その後加刀されて形づくられている。14は15と同一の遺構から出土しており15の手と思われる。15、16はおそらく同形のあぐらをかいた人物座像であり、裾の短い衣服を着、細い帯を締め、胸をはだけている。17は笠をもった人物の座像である。頭部は欠損しているが体部は型押しによる成形と思われ、別々に作られたものを接合している。体部は中空で底面を開口しており、内面には指頭による圧痕が見られる。体部外面には胡粉が見られ、笠の部分には胡粉の下に墨が塗られている。18は笠をもった僧形の人物の立像である。合わせ型成形であり側面には合わせ目が見られる。中空で底面を開口しており、内面は3cmの幅で横にケズられている。19は岩もしくは木に腰を掛けた人物の像である。岩様のものは中空で底面が開口しており、粘土板を丸めて作られている。人物は上半身を欠損しているが着物を着ている。型押し成形によると思われる、岩様のものに貼付されている。白色の胎土で人物の左の裾には灰色の、右の裾と岩様のものには緑色の塗彩がある。外面には全面に透明釉がかかっている。

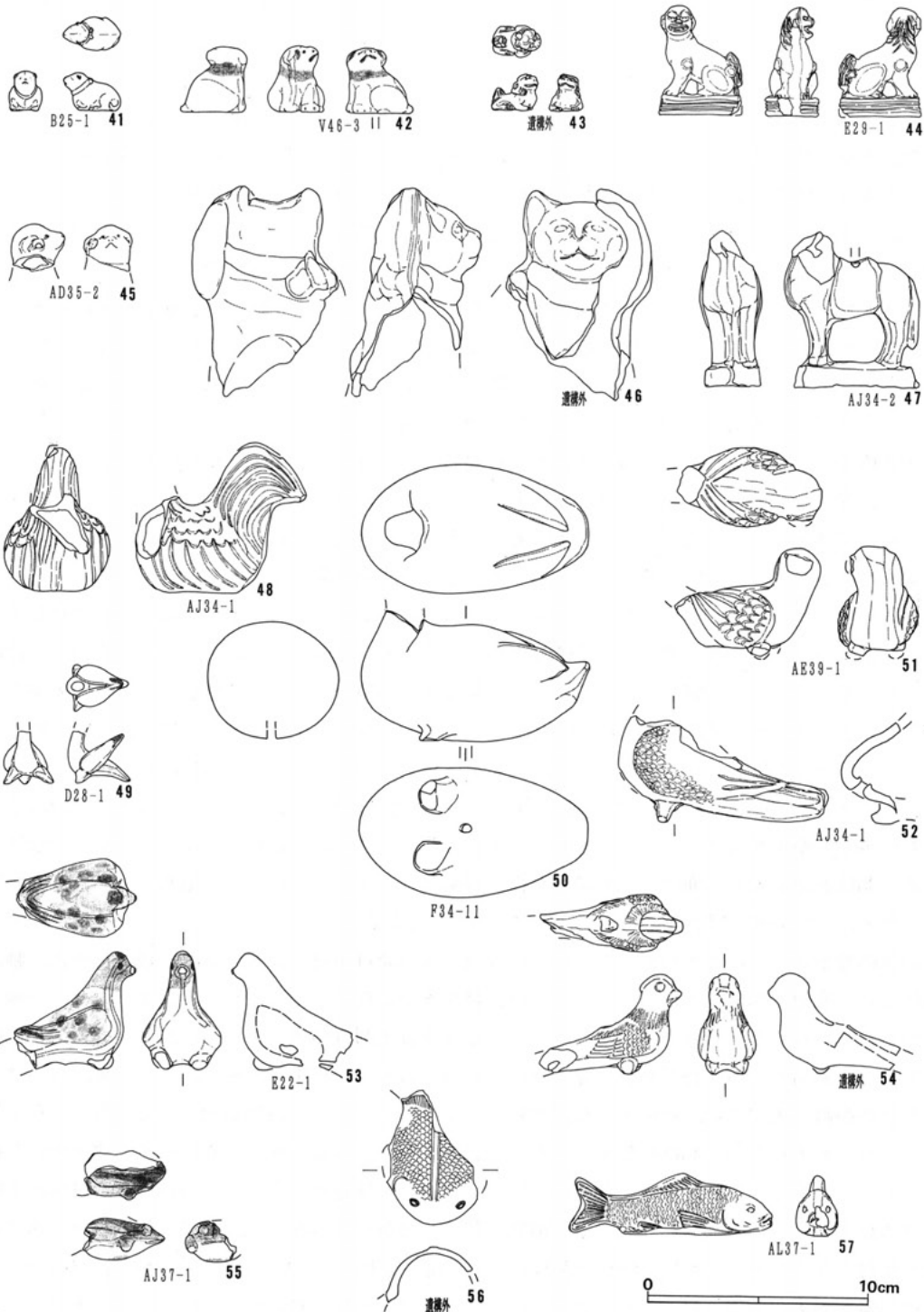
20は男子の上半身である。中空の合わせ型成形である。側面に合わせ目が見られる。右肩を肌脱ぎにして右手にもった手拭のようなものを左肩にかけている。顔面から右腕にかけて白色の塗彩があり、そのうえから褐色の塗料でまげと頭髮、両眼、口を描き、手拭のようなものは緑色に塗彩されている。外面には透明釉がかかっている。芝居の人物を表現したものとも思われる。21は男子の上半身である。洋服を着、帽子を被り、左の脇の下にもった太鼓を、右手の撥で打っている。中実の合わせ型成形である。側面には合わせ目が見られる。表面に胡粉が塗られている。22は立位の人物の下半身で、白色の胎土をもつ。着物を着た婦人のようである。中空の合わせ型成形であり底面に穿孔をもつ。外面の上二分一ほどに透明釉がかかる。給水設備棟東側表土よりの出土である。23は男子立像である。袂の長い着物を着て、袴、袴を着け、右手に扇子をもっている。中実の合わせ型成形で、側面に合わせ目が見られ底面に穿孔がある。表面は赤彩され胡粉が塗付されている。24は立位の人物の下半身である。口を縛った袋の上に立っている。中実の合わせ型成形である。側面に合わせ目が見られ底面に穿孔をもつ。表面に透明釉がかかっている。25は婦人の磁器製の立像である。中実の合わせ型成形で、背面、右肩下に穿孔がある。頭部および左手を欠損している。袂の

第二節 各地点出土玩具類



IV-203圖 各地点出土玩具類(2)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-204図 各地点出土玩具類(3)

第二節 各地点出土玩具類

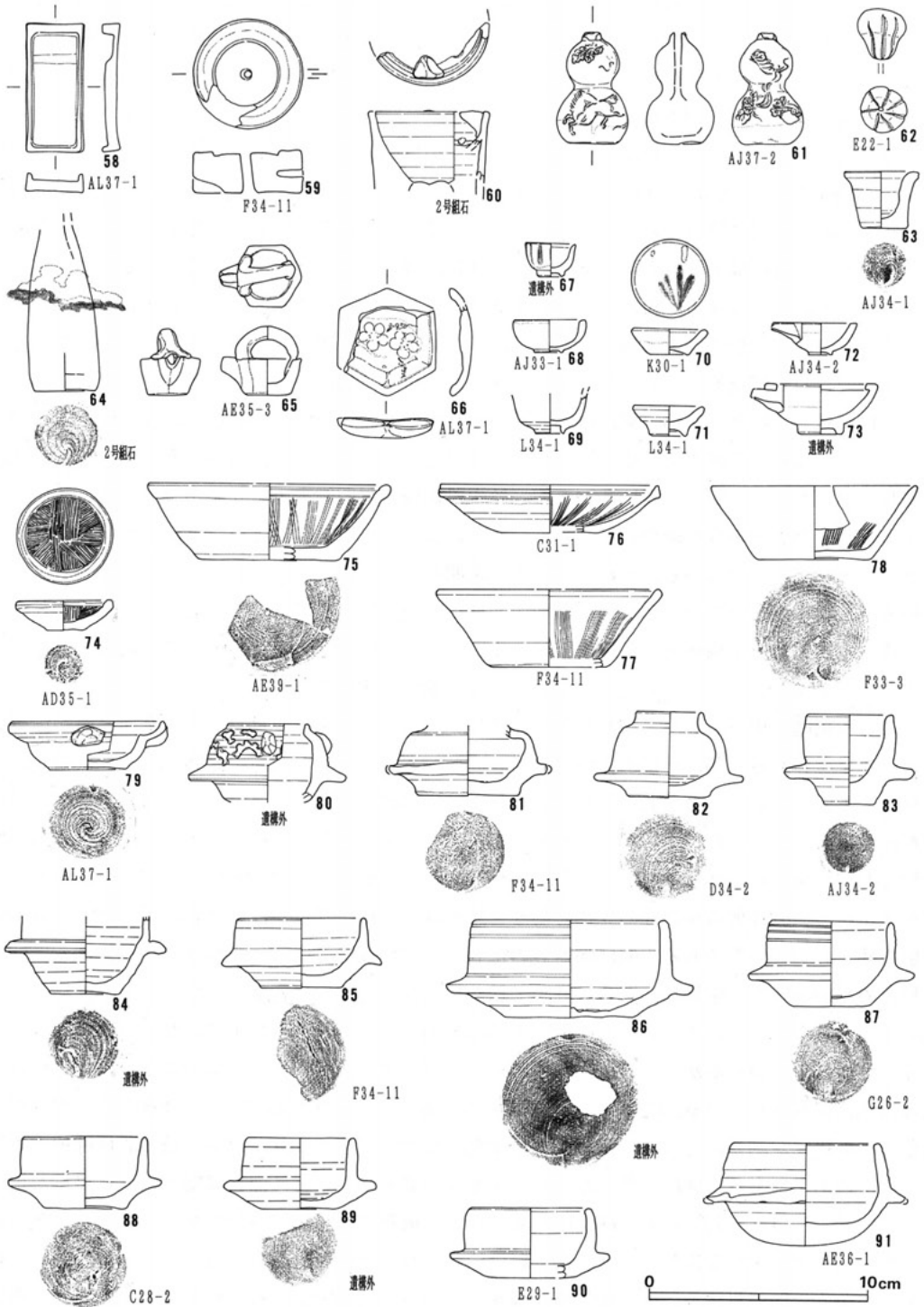
長い着物を着、裾の長い袴を着け、開いた扇を右手にもつ。袴と扇、袂の前面、首の回りが赤彩され、黒色の顔料で着物のひだや模様が描いてある。底面には釉がかかっている。

26は松と思われる樹木の枝の上に乗る人物である。直衣と思われる衣服を着、右手に開いた扇をもっている。中実の合わせ型成形で、側面と底部に合わせ目が見られ、底部に穿孔をもつ。扇と松の葉、下草の笹の葉が濃緑色の顔料で彩色され全面に透明釉がかかっている。27は合わせ型成形の人物立像の背面である。大きな帽子か笠を被り、左肩に袋を担いで二つの米俵の上に立っている。表面に白色の物質が付着している。大黒天を表したものと思われる。28は舟に乗った人物である。上下に合わせられた合わせ型成形であろう。人物は鱸にすわって天を仰いでいる。舟は舳先がないが、猪牙舟であると思われる。舟の後部側面に穿孔がある。舟の中の仕切の上面が緑色に彩色され全面に透明釉がかかっている。29は亀の背に乗る童子である。型押し成形であり、下面はくぼんでいて指頭による圧痕が覆っている。童子は着物を着、帯を背中で結んでいる。童子の手足と顔には白色の、衣服には黒褐色の泥絵の具と思われる物質が残っている。

30は亀の背に乗る猿である。亀の体は型押し成形、亀の首と猿とは手びねり成形にて作られている。31は背中に猿の座っていたと思われる犬である。手びねり成形である。表面に透明釉がかかっている。32は猿もしくは人間の乗った馬である。中実の合わせ型成形である。馬の前後および底面に合わせ目があり、底面に穿孔がある。馬の蹄に黒色の塗彩があり全面に透明釉がかかっている。33は磁器製の座位の猿。合わせ型成形である。底面は釉がかかっておらず、穿孔と合わせ目が見られる。猿は袖の無い衣服を着け、両手で耳を押さえている。衣服には緑色の、口には赤色の上絵がつけてある。いわゆる「聞かざる」であろう。34は座位の猿。左足の大部分と左手右足の先端を欠損している。合わせ型成形で側面の合わせ目がケズられ、底面に穿孔がある。猿は袖の無い羽織りのような衣服を着け右足を立て膝にして、その上に右手をついている。表面に胡粉が塗付されている。35、36、38-40は手びねり成形の猿。35は口を押さえており、「言わざる」であろう。37は子猿を背に乗せ烏帽子を被り、38は子猿を肩ぐるましており、39、40は岩のようなものの上に腰掛けている。38は顔面を除く全面に、35、40は全面に透明釉がかかっている。36は給水設備棟地点東側表土よりの、39は設備管理棟地点 Y・Z35 区よりの出土である。

41は陶器製の犬。中空の合わせ型成形で、底面に合わせ目が見られる。青みを帯びた灰色の釉が掛けられ、底面の釉は拭き取られている。首に紐が巻かれ背中に結び目がある。鼻と両耳が鉄釉で彩色され、両目が黒色の釉で表現されている。42は軟質土師質の犬。中空の合わせ型成形で、底面に穿孔が、側面と底面に合わせ目が見られる。全面に白色の化粧掛けが施され、目、鼻、耳、口が赤褐色の顔料で表現され、その上から透明釉がかかっている。43、44は狢犬。ともに薄い橙色を帯びた白色の胎土をもつ。43は呷形で四肢を折り曲げて座り、底面を除く全面に赤色の漆が塗付されている。手びねり成形したものに加刀している。中央診療棟地点中央西よりのいわゆる斑状の土層よりの出土である。44は阿形で台の上で前肢を伸ばし後肢を折り曲げて腰を降ろしており全面に胡粉が塗付されている。中実の合わせ型成形であり底面に穿孔が、側面と底面に合わせ目が見られる。45は陶器製の犬の頭部。目が鉄釉で表現され褐色を帯びた灰色の釉が掛けられている。中空の合わせ型成形で右の耳と目の間に穿孔がある。根付けもしくは水滴であるとも思われる。46は猫。右手

第IV章 江戸時代の遺物



IV-205図 各地点出土玩具類(4)

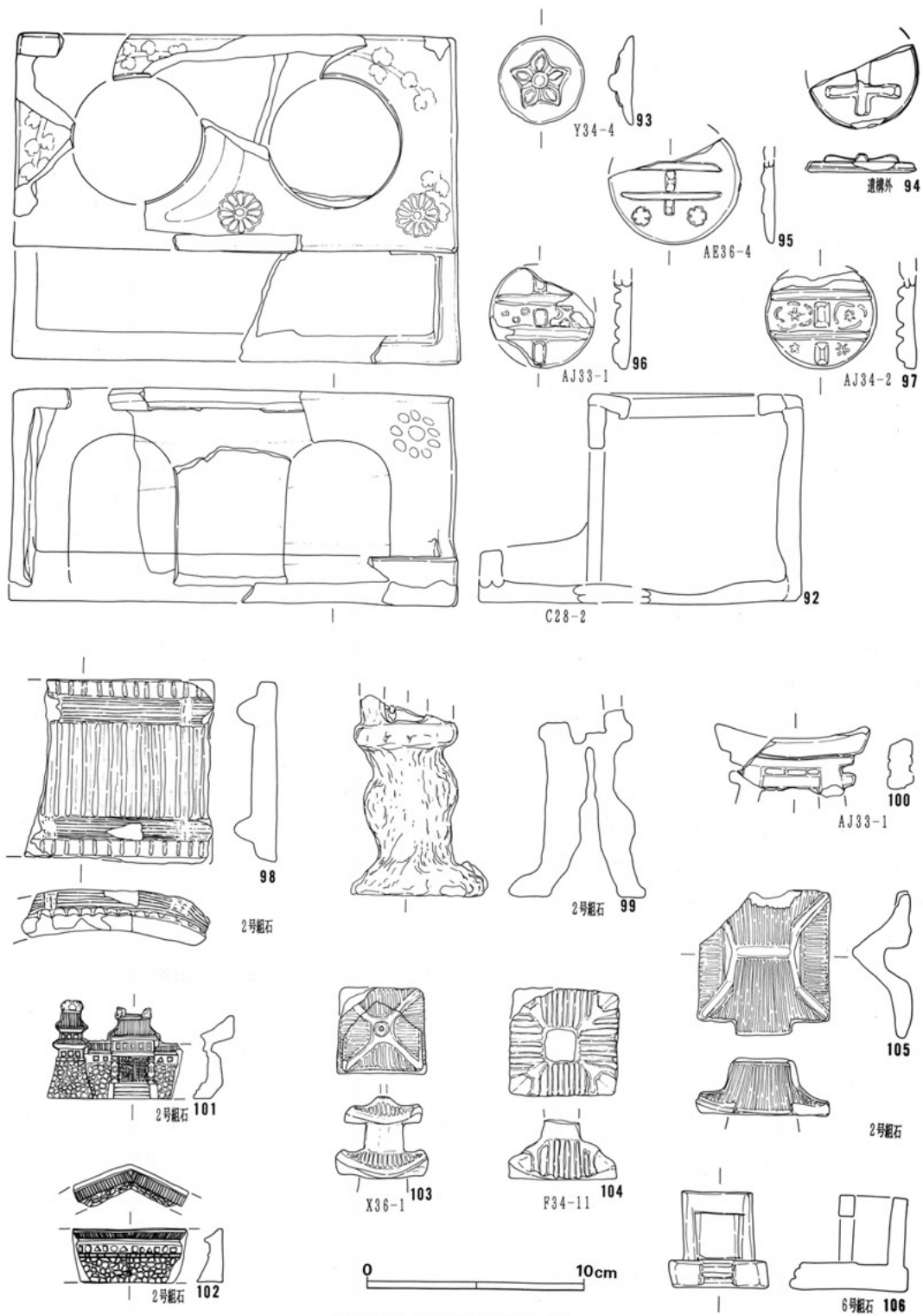
第二節 各地点出土玩具類

を頭部の横につけた「招き猫」であろう。中空の合わせ型成形である。給水設備棟地点西側表土よりの出土である。47は鞍をつけた馬。頭部を欠損している。中空の合わせ型成形であり前後に合わせ目が見られる。鞍の上には穿孔があり、底面には指頭による圧痕が見られる。台の側面は墨が塗付され、体部には白色の物質が全面に付着している。

48はチャボと思われる鶏。頭部を欠損している。中空の合わせ型成形であり前後に合わせ目が見られる。底面には穿孔があり白色の物質が全面に付着している。49-53は鳩と思われる鳥。49は陶器製で底面を除く全面に黄白色の釉がかかっている。手びねり成形である。50は中空の合わせ型成形と思われるが、表面は丁寧にナデであって合わせ目は見られない。底面に穿孔がある。中に石のようなものが入っており振ると鈴のように音がするが、意識的なものかどうかはわからない。51は中実の合わせ型成形で全面に透明釉がかかっており、翼の部分を中心に緑色の釉が吹き掛けてある。52は中空の合わせ型成形である。翼の下に穿孔があり白色の物質が全面に付着している。53は笛である。目を鉄釉で描き、頭部、翼に白色と緑色の彩色がある。全面に透明釉がかかっている。54はキジと思われる鳥の意匠の笛。中空の合わせ型成形であり白色の胎土をもつ。吹き口はともに尾部であり、53は下面に、54は上面に孔がある。給水設備棟地点西側表土よりの出土である。55は蛙。上下に合わせた中空の合わせ型成形である。背面は緑色と黒色、腹面は白色と緑色に彩色され、トノサマガエルを表したものと思われる。全面に透明釉がかかっている。56はデフォルメされているが鯛と思われる魚。中空の合わせ型成形であろう。白色の胎土をもち内外全面に胡粉が塗られている。給水設備棟地点東側表土よりの出土である。57は鯉。中実の合わせ型成形である。

ミニチュア(58-106) ここで言うミニチュアは、器物や建築物を縮小して表現したものであり、ままごとや箱庭に用いられたと思われる。58は硯。底面にコビキ痕が見られる。全面に墨が塗付されていたと思われる。59は石臼の上臼。ロクロ成形である。中央と側面に穿孔がある。供給孔は見られず、下面には糸切り痕があって目は見られない。60は七輪もしくは涼炉。ロクロ成形であり突起が貼付されている。褐色を帯びた白色の胎土をもつ。61は瓢箪。白色の胎土で、中空の合わせ型成形であり上端から穿孔されている。外面には馬と蔓草が裏表に線描される。下から1cmの所まで緑釉がかかる。62は何らかの棒の先端の飾りと思われる。縦に刻みがいり表面が赤彩される。63は植木鉢。ロクロ成形である。64は陶器製の徳利。ロクロ成形で底面に糸切り痕が見られる。外面に褐色の釉がかかり、暗褐色、黄色、緑色で松が描かれている。口唇部を欠損する。65は銚子。白色の胎土をもつ。注ぎ口のついた六角形の体部は型押し成形されこれに手びねりで弦がつけられている。内面に透明釉がかかる。66は六角形の皿。型押し成形で、内面に花型の浮文がある。口縁と花は白色に塗彩されている。67-69は碗。67は白色の胎土で型押し成形である。底部を除く内外面に白色の化粧掛けが施され、側面に濃青色と暗褐色の縦線が交互に入れられる。給水設備棟地点東側表土よりの出土である。68は白色の胎土をもち型押し成形である。外面口縁部と内面に緑釉が掛けられている。片口とも思われる。69は陶器製でロクロ成形である。内外面に褐色を帯びた緑色の釉がかかる。薄手で丁寧な作りである。70、71は浅鉢。ロクロ成形である。白色の胎土をもち黄褐色の釉がかかる。70の見込みには緑釉で草が描かれている。72、73は片口。白色の胎土をもち型押し成形である。外面口縁部と内面に緑釉が掛けられている。73は口唇部が内側に強く屈曲し注ぎ口の

第IV章 江戸時代の遺物



IV-206図 各地点出土玩具類(5)

第二節 各地点出土玩具類

上が橋状につながる。給水設備棟地点東側表土よりの出土である。74-78は播鉢。ロクロ成形である。74, 75は透明釉がかかる。76は焼き締めで表面に赤褐色の釉がかかる。

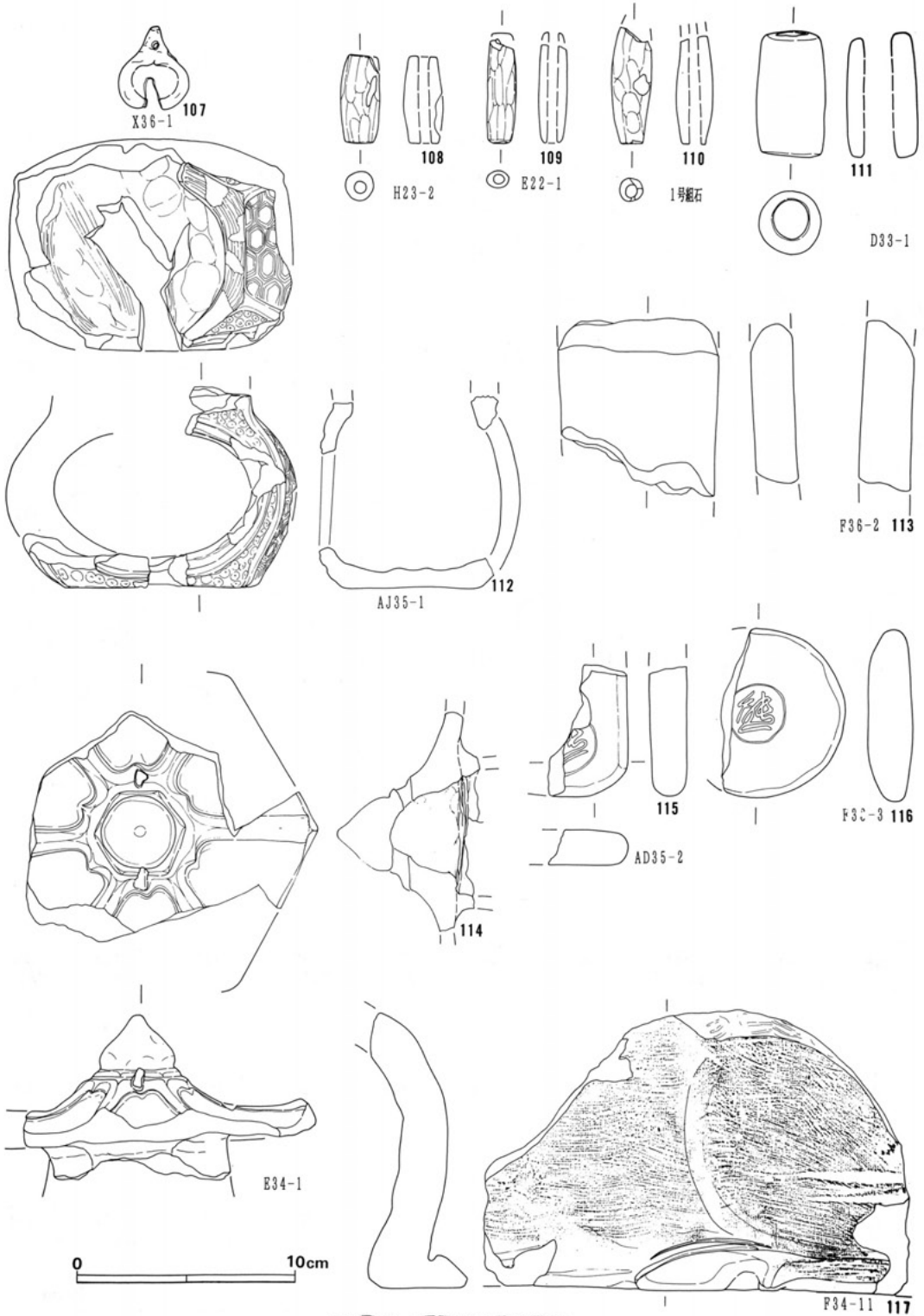
79は土鍋。ロクロ成形で把手が貼付される。80-82は茶釜。ロクロ成形である。80には把手が貼付されている。体部上半にはスタンプによる装飾が見られ、その上から黒色の強い銀彩が施される。中央診療棟地点遺構外よりの出土である。81の体部上半にも黒色の強い銀彩が見られる。83-91は羽釜。ロクロ成形である。形態的には様々なヴァリエーションが見られるが、直立する口縁部を特徴とする。内面には透明釉がかかり、外面は鏝の上面以上に褐色の釉がかかる。91は丸底で糸切り痕はない。83, 87, 91の体部外面の上半には銀彩が、88と90の体部外面の上半には赤彩が見られる。85, 88の底面外側と90の内面には火を受けたと思われる黒変が見られる。84, 86, 89は中央診療棟地点遺構外よりの出土である。92は竈。板組造り成形である。直方体を基本とし正面に突出部がある。上面に二つの円孔があげられ、正面にはこれに対応するように焚き口がある。双房形と呼ばれるものである(中西 1989)。表面はミガかれており、赤色の塗彩と銀彩が見られる。体部上面に菊花のスタンプ文が見られ、色は飛んでしまって判然としないが上面および正面に菊花と枝、葉の上絵が付けられていたようである。類例は真砂遺跡から出土しており、白金館址遺跡における出土の報告もある。また新宿区一行院でも墓地改葬の際出土したという(中西 1989)。これらと比較すると本例はスタンプ文や絵付けの見られる点などかなり上製のものと思われる。

93-97は蓋。型押し成形で、いずれも底面には手掌痕が見られる。93はつまみが中央にあり、その周囲に星形の装飾がある。茶釜の蓋であろう。94-97は「キ」の字の形に突起がある。95, 97には花の、96にも判然としないが装飾が見られる。羽釜の蓋であろう。94は給水設備棟地点東側遺構外よりの出土である。98は橋。瓦質の型押し成形である。99は石燈籠。瓦質の合わせ型成形で、底面が開口している。石製品に類似のものがある(IV-229図)。100は鳥居。中実の合わせ型成形である。101, 102は城門と城壁。焼締めの型押し成形である。胎土は緻密でチョコレート色を呈す。103, 104は塔。型押し成形したものを重ねておりつなぎ目には櫛目が入れている。105, 106は家屋。105は型押し成形された屋根の部分であり、下半を欠損している。入母屋で庇が張りだしている。神社か寺であろう。106は型押し成形されたものを接合し加刀して成形されている。祠か寺と思われる建物の下半である。

その他の土製品(107-117) ここでは主として実用的な色合いの強い製品と用途の判然としない製品とを扱う。107は鈴。白色の胎土をもち、手びねり成形により中空に作られ、その後穿孔と切り込みが入れられている。残存しないが鳴子として小石などが入れられていたと思われる。108-111は土錘。重量は108が10.8(12)g, 109が6.5(8)g, 110が12.7(14)g, 111が59gである。()内は推定重量である。近世の所産であるという保証はないが、形態的に古代のものと区別がつかないため、便宜的にここに集めてある。芯の回りに粘土を巻き付けて成形されている。108-110は紡錘形にケズられている。113は鞆(フイゴ)の羽口。芯の回りに粘土を巻き付けて成形されている。下半は火を受けて溶解し、黒変している。

112は輪積み成形された製品。上半を欠損しているが、残存部は胴の張った六角柱を呈していたと思われ、一面には円孔が見られる。外面には亀甲と小円の押し型文が施されている。ミニチュア

第IV章 江戸時代の遺物

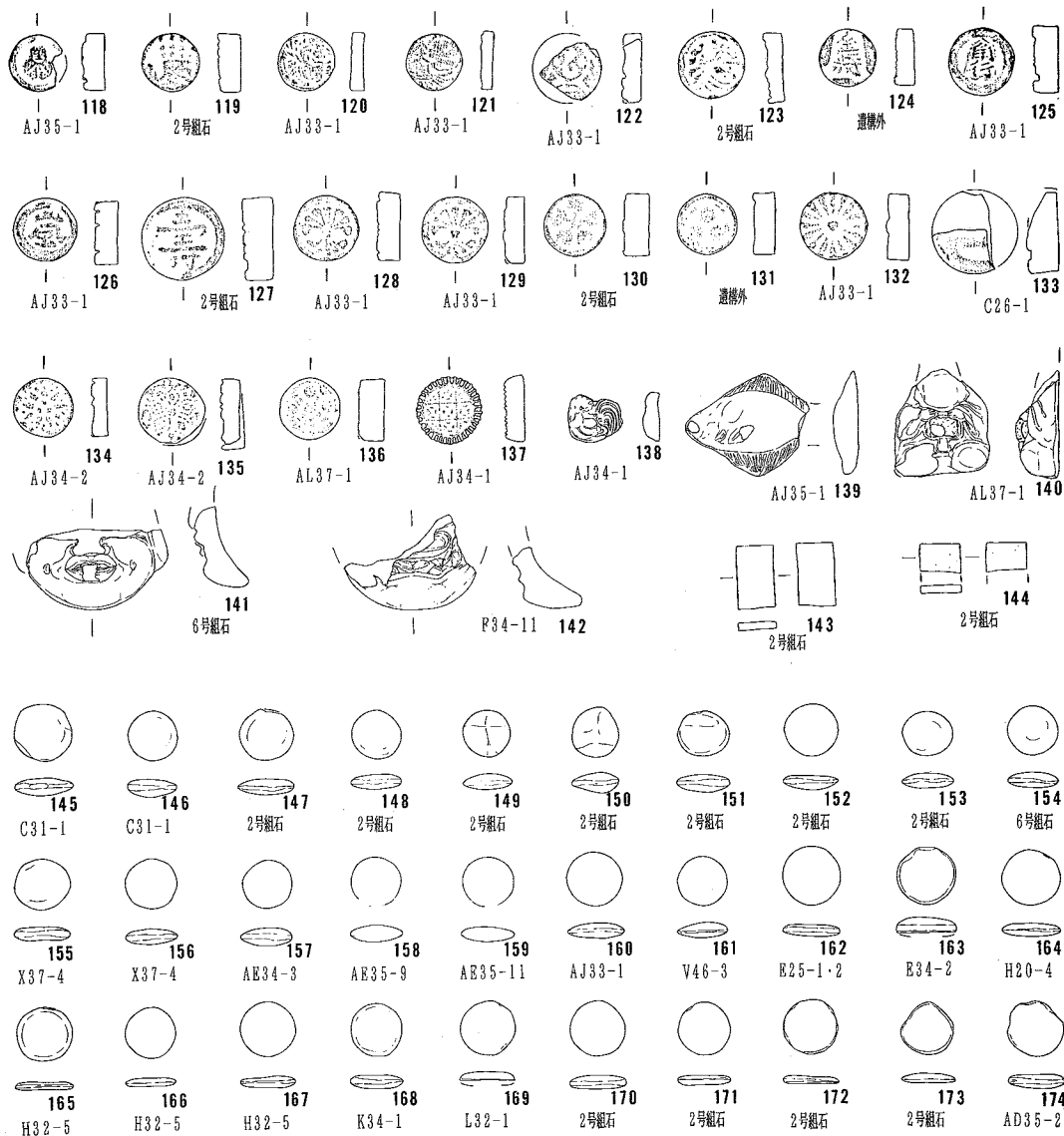


IV-207図 各地点出土玩具類(6)

第二節 各地点出土玩具類

の石燈籠の類であったとも思われるが、用途性格など明らかでない。114は吊り燈籠。上端の擬宝珠型の基部に一對の孔が明けられ、孔の周りには緑錆の付着が見られる。また内面には煤の付着が見られ、銅線で吊り下げられて実際に用いられていたものと思われる。

115, 116 は温石(オンジャク)であろう。115は隅丸長方形の板状を呈し、116は円形で中央がやや盛り上がっている。ともに火を受けたと思われる変色が見られる。115には複数の、116には一つの刻印があるが、両者とも同じ刻印で、丸の中に「熊」もしくは「能一」の入ったものである。また、こうした土製の温石は麻布台遺跡、三栄町遺跡、東京大学構内の法学部4号館・文学部3号館



0 10cm

IV-208図 各地点出土玩具類(7)

第IV章 江戸時代の遺物

地点でも見られるが、麻布台例には意味不明の浮彫が、後二者には本例とは異なる刻印が見られる。一方本例に見られる刻印は東京大学構内遺跡の理学部7号館地点より出土した焙烙に見られるものと同一のものでありこの製品の性格を考える上で注目される。117は動物の一部。輪積み成形である。下面が開口していたものと思われる。表面には無数の櫛目が入られ、体毛を表している。他の玩具に比べて大型であり、置物か子供の治癒のまじないに用いられたという撫で牛のようなものであったと思われる。

泥面子，基石ほか(118-174) 118-137は泥面子。本地点で出土した泥面子の全てを図示した。型押し成形と思われるが、底面や側面に粘土板を金属の筒で抜いたような痕が見られる。118は達磨、119は手のひら、120はかんかんのう、121は纏、124、125は将棋の駒、126は「嵐」の文字、127は「壽」の文字をモチーフとし、128、129は「結綿」、130は「梅鉢」、131は「三巴」、132は「菊花」、133は「丸に二引竜」の紋が描かれている。134-137は幾何学的な装飾である。122、123のモチーフは不明。137は側縁に刻みがある。124、131は給水設備棟西側遺構外よりの出土である。

138は芥子面子。チャボと思われる鶏。139はカレイを、140は打出の小槌を持った人物を、141、142は人面の下半を表す。139-142は型押し成形されており、裏面には指頭痕がある。143、144は南鐐二朱銀の土製模造品。表面には銀彩が残る。実物の表面にある「銀座常売」の「座」の字が変えてありまた判然としないが、裏面にある文字も変えてあるようである。多くの遺跡に類例がある。

145-174は基石。145-161は土製、162-174は石製である。土製のは表面に指紋や手掌痕が見られる。表面に墨や白色の物質の付着の見られるものもある。石製のは黒色、灰褐色の二色が多い。なお、2号組石からは262点の土製の基石が出土している。

図示した玩具類の出土遺構に伴伴する陶磁器から推定される年代はIV-2表のとおりである。

小括 本地点より出土した玩具類は約560点にのぼる。ただし、この数の中には2号組石より集中して出土した土製の基石が262点含まれており、図示したものはこれを除く約300点のほぼ半数にあたる174点である。これらは全体の形を窺うことのできるものを抽出したものであるが、ここに見られる様相は本地点における玩具類のほぼ全般的な傾向を示していると考えられる。これらのうち遺構出土で陶磁器から推定される年代の明確なものについて、人形、ミニチュア、泥面子、基石をその年代とともにまとめると以下ようになる。

陶磁器からの年代	人形	ミニチュア	泥面子	基石	合計
II期	0	0	0	4	4
III期	9	7	2	1	19
IV期	0	2	0	0	2
V期	8	4	0	3	15
VI期	1	1	0	0	2
VII期	2	1	0	0	3
VIII期	13	15	16	11	45
IX期	2	4	2	0	8

遺構の数の違いや、各時期の長さなどを考慮しても、III期、V期、VIII期に多く、特にVIII期に大き

第二節 各地点出土玩具類

遺構名	陶磁器から推定される年代	人形	ミニチュア	泥面子	碁石	その他
B25-1	18世紀後半	41				
C26-1	VIII期			133		
C28-2	III期		88, 92			
C30-1	19世紀	13				
C31-1	17世紀末～18世紀、19世紀		76			
D28-1	18世紀前半	49			145, 146	
D33-1	V期後半					111
D34-2	17世紀末～18世紀初頭		82			
E22-1	VI期	53	62			109
E25-1・2	18世紀前半				162	
E29-1	17世紀末～18世紀前半	44	90			
E34-1	V期後半					114
E34-2	V期後半				163	
F33-3	V期前半	14, 15, 21	78			116
F33-6	?	28				
F34-11	III期	18, 24, 26 31, 32, 35 40, 50	59, 77, 81, 85, 104	142		117
F36-2	17世紀末～18世紀初頭					113
G26-2	17世紀後半		87			
H20-4	17世紀中葉				164	
H21-2	VIII期	29				
H23-2	?					108
H32-5	II期				165-167	
K30-1	IV期		70			
K34-1	V期				168	
L32-1	II期				169	
L34-1	V期後半		69, 71			
1号組石	V期					110
2号組石	VIII期	25	60, 64, 98, 99, 101, 102, 105	119, 123, 127, 130, 143, 144	147-153, 170-173	
3号組石	III期	6				
6号組石	III期		106	141	154	
X36-1	18世紀末～幕末		103			107
X37-4	18世紀末～幕末				155, 156	
Y34-4	IV期		93			
Z35-5	V期	34				
AD35-1	明治		74			
AD35-2	V期	11, 45			174	115
AE33-3	18世紀前半(～後半)	19				
AE34-3	18世紀前半～19世紀初頭	37			157	
AE35-3	18世紀末～19世紀初頭		65			
AE35-9	18世紀(?)				158	
AE35-11	18世紀後半				159	
AE36-1	18世紀、明治		91			
AE36-4	V期	12, 17, 23	95			
AE37-1	18世紀前半	30				
AE39-1	VII期	38, 51	75			
AJ33-1	VIII期	2, 4, 27	68, 96, 100		120-122, 125, 126, 128, 129, 132	160
AJ34-1	VIII期	3, 48, 52	63		137, 138	
AJ34-2	VIII期	7, 10, 47	72, 83, 97		134, 135	
AJ35-1	VIII期	5, 9			118, 139	112
AJ37-1	-	55				
AJ37-2	19世紀		61			
AL37-1	IX期	20, 57	58, 66, 79		136, 140	
U48-2	19世紀(幕末まで)	1				
V46-2・3	19世紀(幕末まで)	16, 42				161

IV-2表 図示した玩具類出土遺構

第IV章 江戸時代の遺物

な集中が見られることが指摘されよう。泥面子には時期的に特にはっきりとした集中が見られる。すなわちⅢ期に見られる人面の2点(141, 142)は大型で泥面子の範疇には入らないのでこれを除けば、遺構から出土した全18点のうち2点がⅨ期の明治時代に属し、残りの16点はいずれもⅧ期の19世紀前半から幕末にかけての時期に属するのである。

18世紀末から19世紀にかけての近世後半に、玩具類が増加することは他の遺跡においても観察されるところである。本地点でも1遺構当たりの玩具類の出土量を見ると、Ⅷ期以前ではF34-11のように規模が大きく、陶磁器をはじめ遺物の絶対量の大きい遺構を除けば、あとは2, 3点ずつの出土であるが、Ⅷ期では特に給水設備棟地点のAJ33-1などにおいて、陶磁器の量や遺構の大きさに比して多量の玩具類が見られる。

Ⅲ期とⅤ期に玩具類が多く見られることはこの地点における一つの特徴であるが、Ⅲ期の大半を占めるF34-11では、人形の中に透明釉のかかったものが見られることから、後世の遺物の混入も考慮されるべきであろう。事実陶磁器全般や土器、焼塩壺では時期的に集中しているものの、徳利では混入が指摘されている。このほか基石ではⅤ期までに石製のものが、Ⅵ期以降に土製のものが多く、また前述したように2号組石に大量に集中していることが注目される。

このように玩具類においては時期的なあり方に強い集中が見られるが、また遺跡ごとのありかたの違いも注意されねばならない。本地点と同じ大名屋敷の遺跡である真砂遺跡からはきわめて多様かつ多量の玩具類が出土しており、遺構の時期や規模を考えてもその優越が認められる。大名屋敷の中で、玩具類が多く出土するというのもつ意味や、屋敷内における出土位置についても検討されねばなるまい。

(小川 望)

第三節 各地点出土瓦

瓦は各調査地点から多量に出土し、そのすべてについての詳細な検討は不可能であった。またまとまった資料は必ずしもないので、それぞれの種類について一定の基準のもとに集成し、それらについて検討を行なった(IV-209~218 図)。したがって数量的な検討は行なっていない。図示したのは各分類項目の形態や特徴をもっとも典型的に表していると思われる例を抽出したものである。なお軒平瓦、軒棧瓦の分類、道具瓦の名称をはじめ多くを加藤晃氏に負っている。また軒平瓦、軒棧瓦は範型を含め加藤氏により差異の認定されたものを1点ずつ図示した。それらの詳細は御殿下記念館地点の報告書のなかで加藤氏が述べるので、ここではその例外的なものを報告する。

軒丸瓦(1-47) 軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部とからなるが、ここではその瓦当部に注目して分類・検討を行なった。瓦当部の文様には1.梅鉢紋、2.連珠三巴紋、3.その他が見られた。以下そのおのおのについて概観する。

1. 梅鉢紋(1-19) 梅鉢紋は前田家の紋であるが、その紋は家系によりいささか異なっていたと言われる。すなわち加賀前田家は「剣梅鉢」、大聖寺前田家は「棒梅鉢」(瓜実梅鉢とも)、富山前田家は「丁字梅鉢」と呼ばれるものである。これは萼(ガク)の部分(=剣)の形態の違いによるものである。したがって、梅鉢紋の瓦当部は中心が観察できる破片を検討の対象とした。

第三節 各地点出土瓦

A 一軸（花卉と中心を結ぶ線）と剣がないもの（「星梅鉢」）

花卉の断面が台形のもの(1)

花卉の断面が弧を描くもの(2)

B 一軸があり、剣のないもの

花卉の断面が台形のもの

a 瓦当部直径が大きく、花卉直径の大きいもの(3)

e 瓦当部直径が中位のもので、花卉直径の大きいもの(7)

b 瓦当部直径が大きく、花卉直径の中位のもので、中心の突出しないもの(4)

f 瓦当部直径が中位のもので、花卉直径の小さいもの(8)

c 瓦当部直径が大きく、花卉直径の中位のもので、中心の突出するもの(5)

g 瓦当部直径が小さいもので、瓦当部輪郭の太いもの(9)

d 瓦当部直径が大きく、花卉直径の小さいもの(6)

花卉の断面が弧を描くもの

a 瓦当部直径が大きく、花卉直径の大きいもの(10)

もの(11)

b 瓦当部直径が大きく、花卉直径の中位の

c 瓦当部直径が中位のもの(12)

d 瓦当部直径が小さいもの(13)

C 一軸と剣があるもの

花卉の断面が台形となるもの(14)

花卉の断面が弧を描くもの

a 瓦当部直径が大きく、花卉直径の大きく剣の先端がとがる剣菱状のもの(15)

剣の先端がとがる剣菱状のもの(17)

b 瓦当部直径が大きく、花卉直径の大きいもの、剣が棍棒状のもの(16)

d 瓦当部直径が大きく、花卉直径の中位のもの、剣が棍棒状のもの(18)

c 瓦当部直径が大きく、花卉直径が中位で

e 瓦当部直径が小さいもの(19)

2. 連珠三巴紋(20-44) いずれも左巻きの巴を三つ中央に置き、その周辺に連珠を配したものであり、各地の近世の遺跡から数多く見られるものである。したがって特定の家紋を表したのではなく、瓦に一般に見られる文様と考えられる。数量的にもっとも多く、梅鉢に比べ明瞭に見分けられる差異に乏しいため、分類における法量の比重が大きくなった。したがって三巴紋の瓦当部破片の内、一見して特殊と思われたものを除き、直径の測定可能な破片（瓦当部円周が二分一以上残るもの）を検討の対象とした。

A 三巴紋と連珠の間に圏線の入らないもの

巴の尾が短いもの（巴の頭から尾の先までが 120° 以内のもの）

a 巴の頭と連珠の径の大きいもの(20)

c 連珠の径が中位で、巴の頭が丸い(22)

b 連珠の径が中位で、巴の頭が三角形(21)

巴の尾が中位のもの（巴の頭から尾の先までが $120^\circ \sim 240^\circ$ のもの）

a 瓦当部直径が大きいもの(23)

b 瓦当部直径が中位のもの(24)

第IV章 江戸時代の遺物

- c 瓦当部直径が小、連珠が少なく大きい (25) d 瓦当部直径が小、連珠が多く小さい (26)
- 巴の尾が長いもの (巴の頭から尾の先までが240°以上のもの)
 - a 瓦当部直径が中位で巴の頭の丸いもので、巴の径の小さいもの (27, 31)
 - b 瓦当部直径が中位で巴の頭の丸いもので、巴の径の大きいもの (28)
 - c 瓦当部直径が中位で巴の頭の三角形のもの (29)
 - d 瓦当部直径の小さいもの (30)

なお、31の巴の中心には焼成後の穿孔が見られる。

B 三巴紋の尾部が連結して圏線状になるもの (32)

C 三巴紋と連珠の間に圏線の入るもの

巴の尾が中位のもの

- a 巴の頭が細長く瓦当部直径の大きいもの (33)
- b 巴の頭が細長く瓦当部直径の中位のもの (38)
- c 巴の頭が細長く瓦当部直径の小さいもの (35)
- d 巴の頭が丸く瓦当部直径の大きいもの (36)
- e 巴の頭が丸く瓦当部直径の中位のもの (34, 37, 43)

巴の尾が長いもの

- a 巴の頭が丸いもの (39, 40)
- b 巴の頭の細長いもの (41, 42)

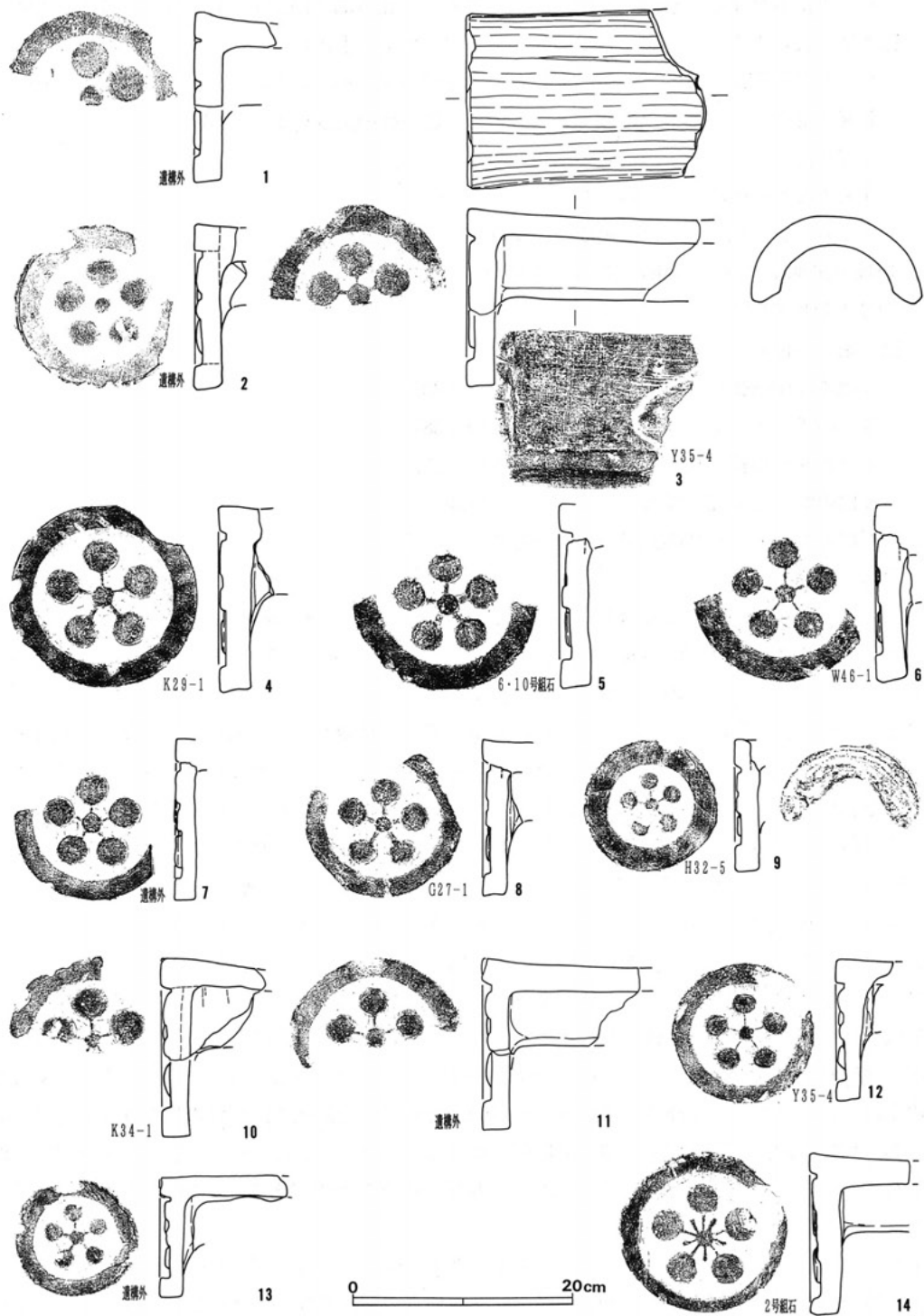
その他としたものには三種の紋が見られた。すなわち、「九曜」(45)、「三葉葵」(46)、不明(47)であり、それぞれ1点ずつのみの出土である。

軒平瓦(48-68) 御殿下記念館地点における出土例から判断すると、54を除く48-60は元禄期以前、54は元禄前後のものと思われる。49は御殿下記念館地点でも類例が多く見られるが、その大部分には金箔があり、本例も元来金箔が貼付されていたものと思われる。57は焼成後に上面が抉られている。61-64は「江戸式」A a類に分類される各範型によるもの。元禄期の本瓦葺に用いられたもの。66, 67もここに分類されると思われるが判然としない。67は左端に舛形の刻印が捺されている。65は同A a i類に分類されるが、御殿下記念館地点をはじめこれまでに類例の見られないものである。68は三角垂面形の特異な形態をもつもので、「朝鮮軒」と呼ばれるものである。元禄期以前に位置付けられる。中央に三葉葵の紋が陽刻され、右端に三角形の刻印が捺されている。

軒棧瓦(69-103) 69-97は棧瓦葺に用いられた「江戸式」の各類形である。73は右端に丸の中に「庄」の字を入れた刻印が捺されている。79は右端に「アサクサ 瓦源 イマト」の文字が隅丸長方形の中に入れられた刻印が捺されている。98, 100は御殿下記念館地点に類例の見られないものである。99, 101, 102は御殿下記念館地点では塀に葺かれていたと思われる棧瓦(IV-216図116)に伴う軒瓦である。103は軒丸部に巴でなく剣付きの梅鉢の配された例である。この例も御殿下記念館地点では見られない。

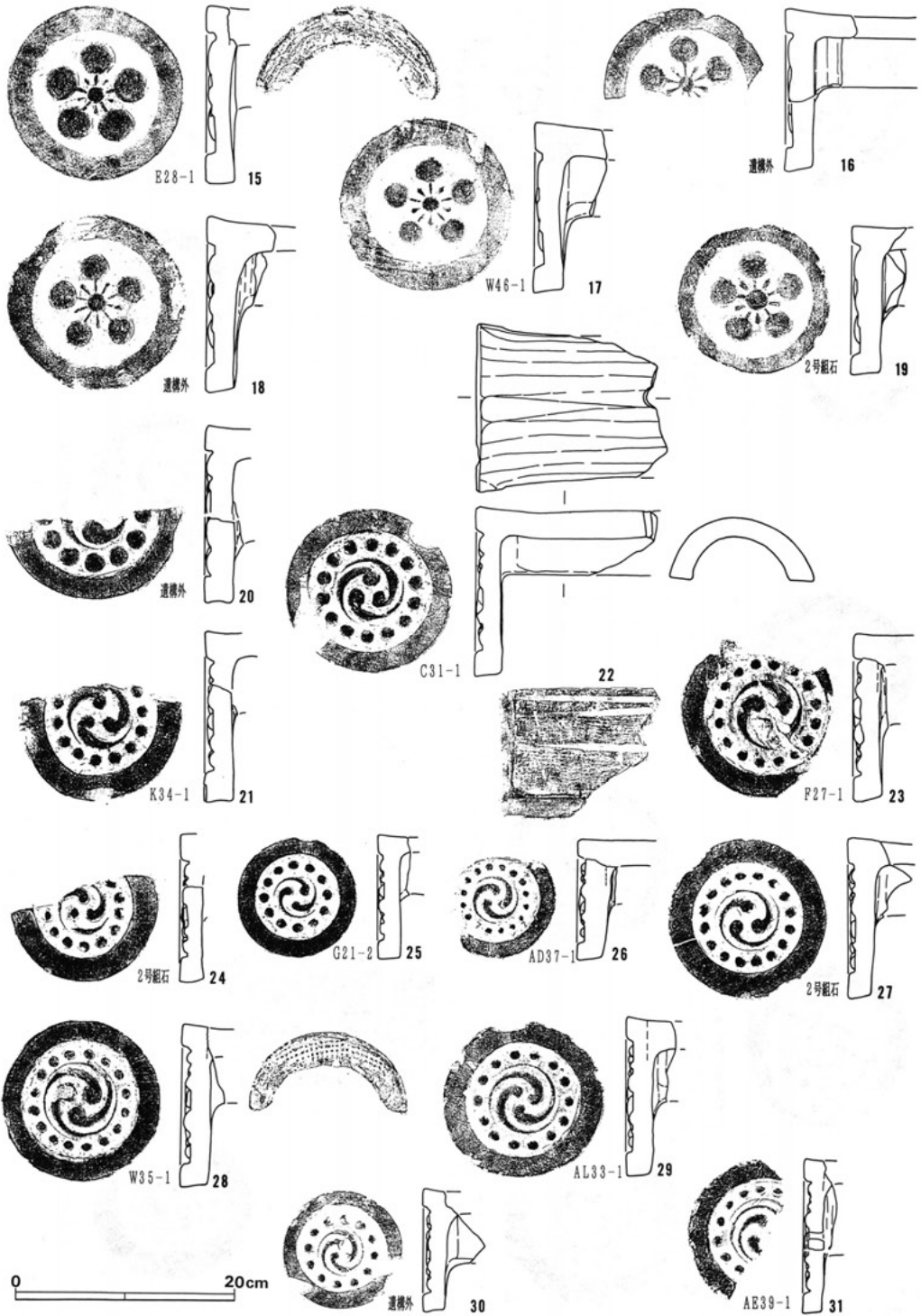
丸瓦(104-112) いずれも玉縁付丸瓦である。丸瓦は軒丸瓦、軒平瓦などに比べ文様をもたないため、特徴が捉えにくく、その分類は御殿下記念館地点で製作技術から詳細になされている。本項では主にその法量からの比較検討を行った。したがってその特徴の一見して明らかなものを除き、

第三節 各地点出土瓦



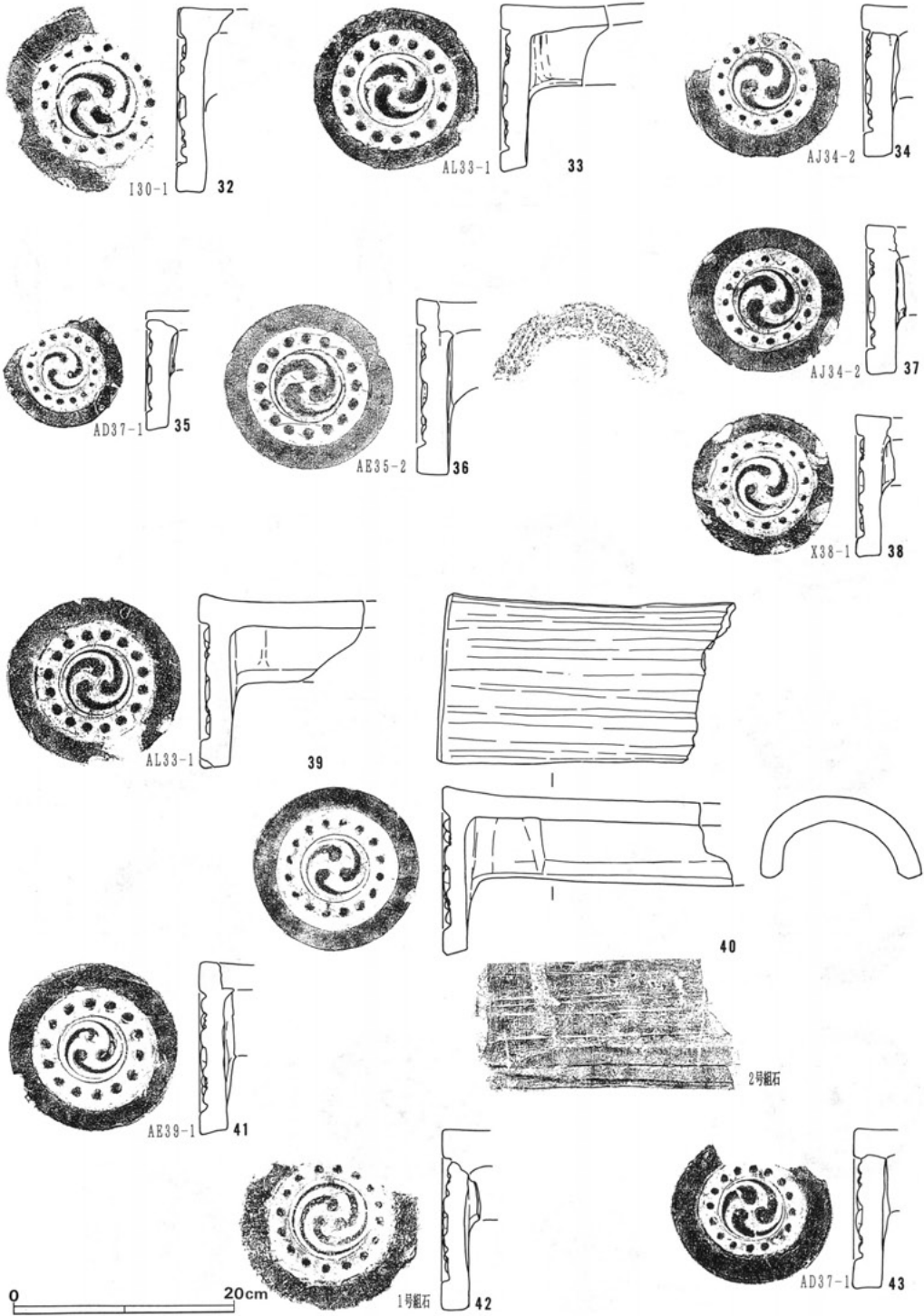
IV-209圖 各地点出土瓦(1)

第IV章 江戸時代の遺物



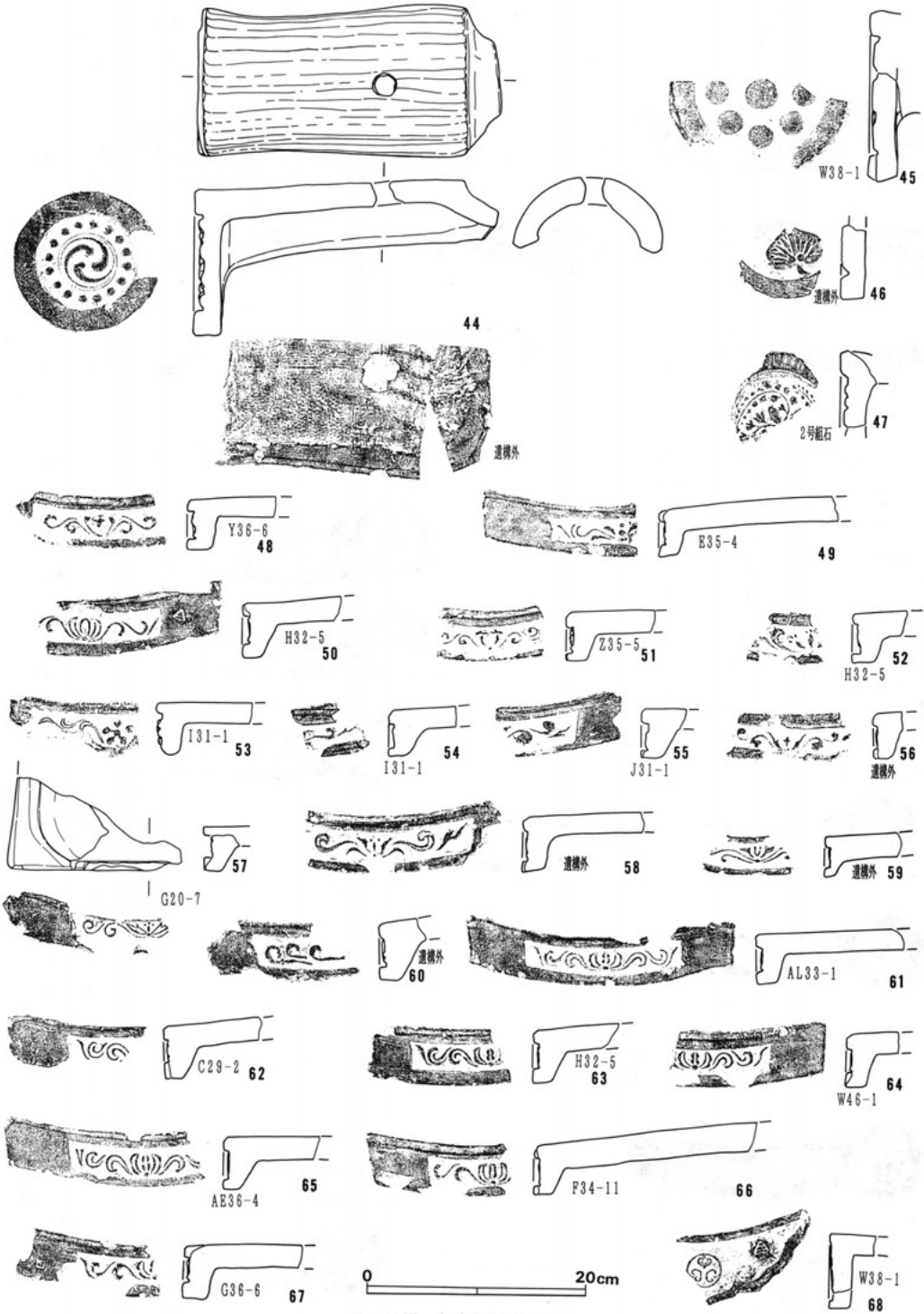
IV-210図 各地点出土瓦(2)

第三節 各地点出土瓦



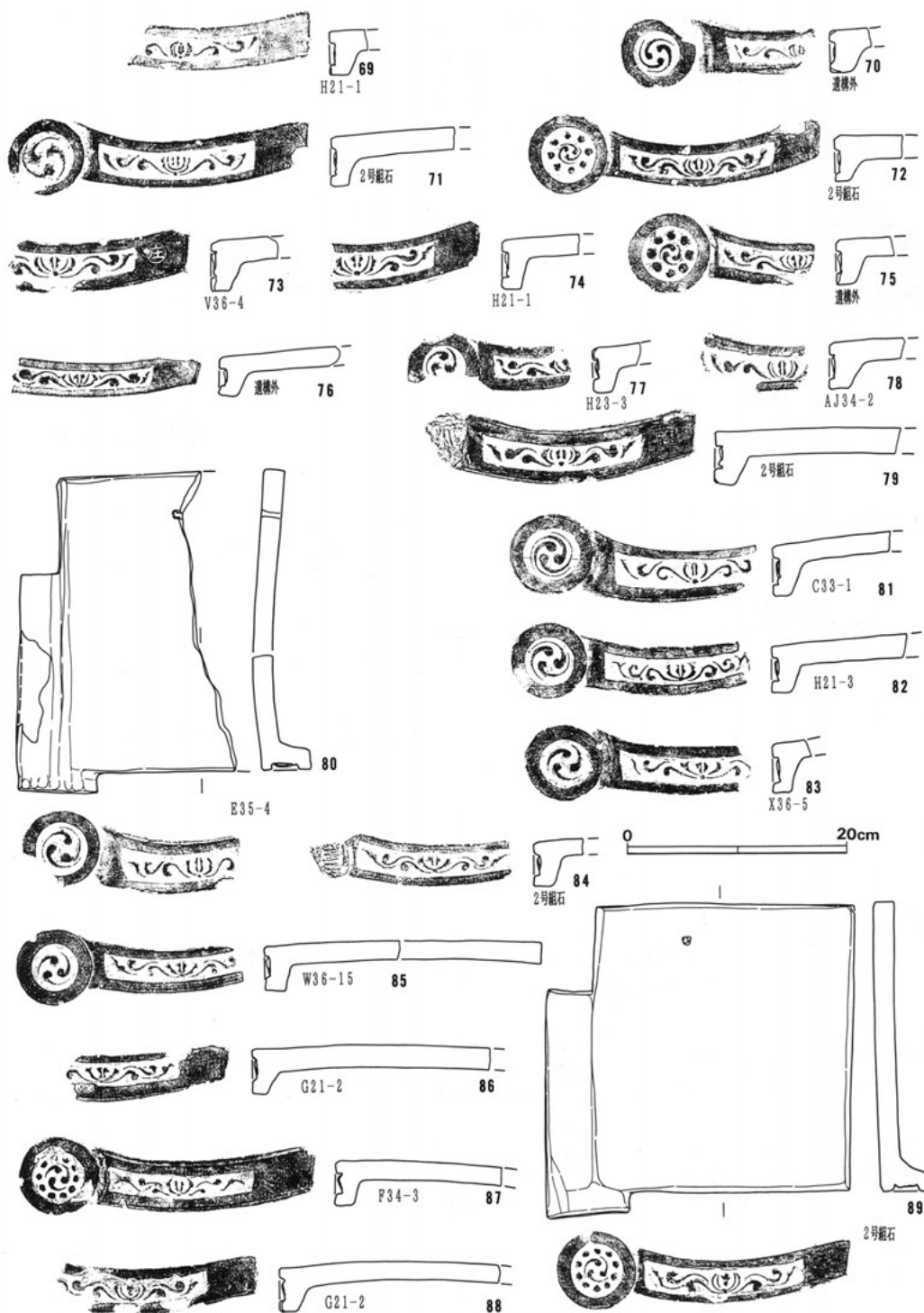
IV-211图 各地点出土瓦(3)

第IV章 江戸時代の遺物



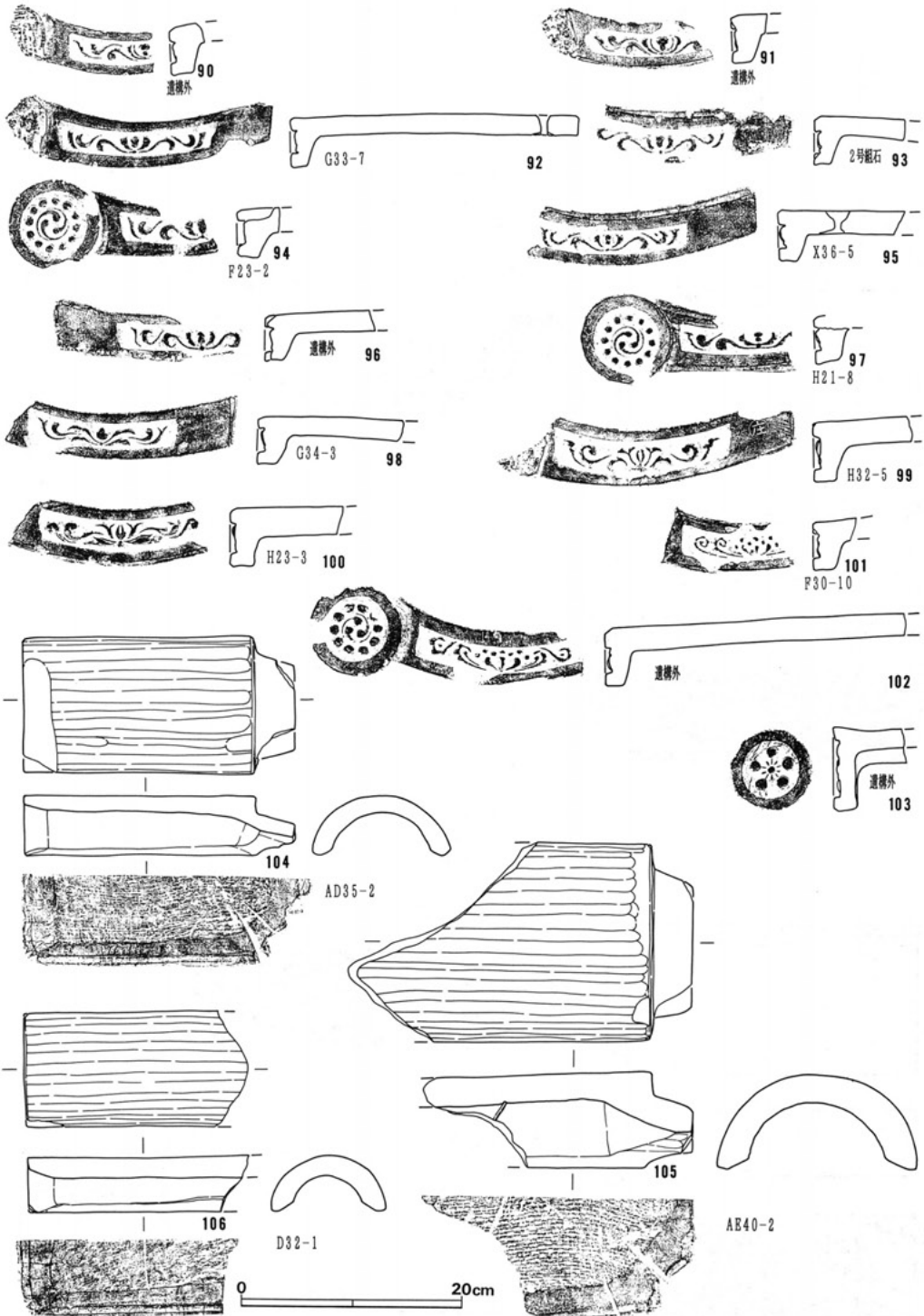
IV-212図 各地点出土瓦(4)

第三節 各地点出土瓦



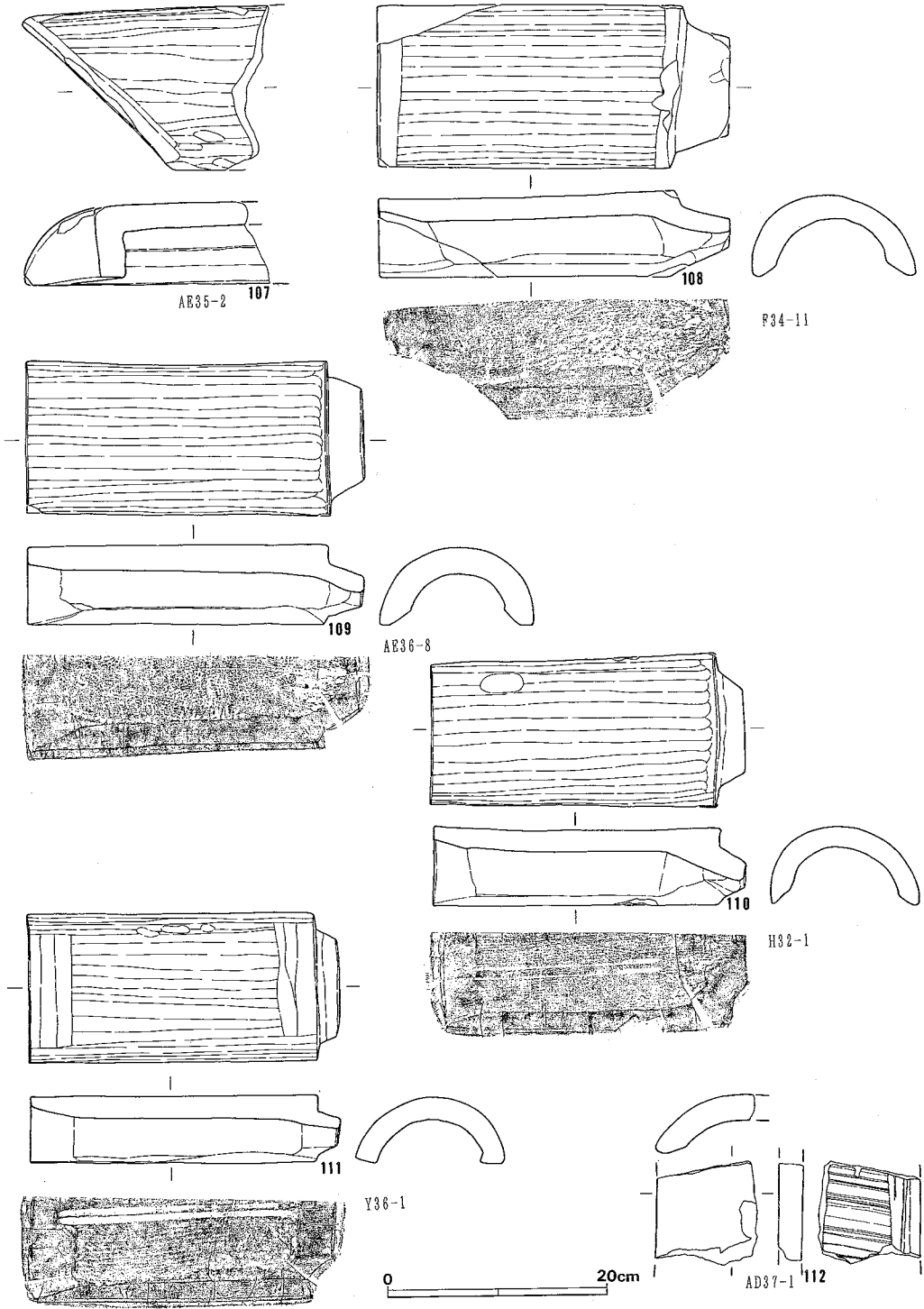
IV-213图 各地点出土瓦(5)

第IV章 江戸時代の遺物



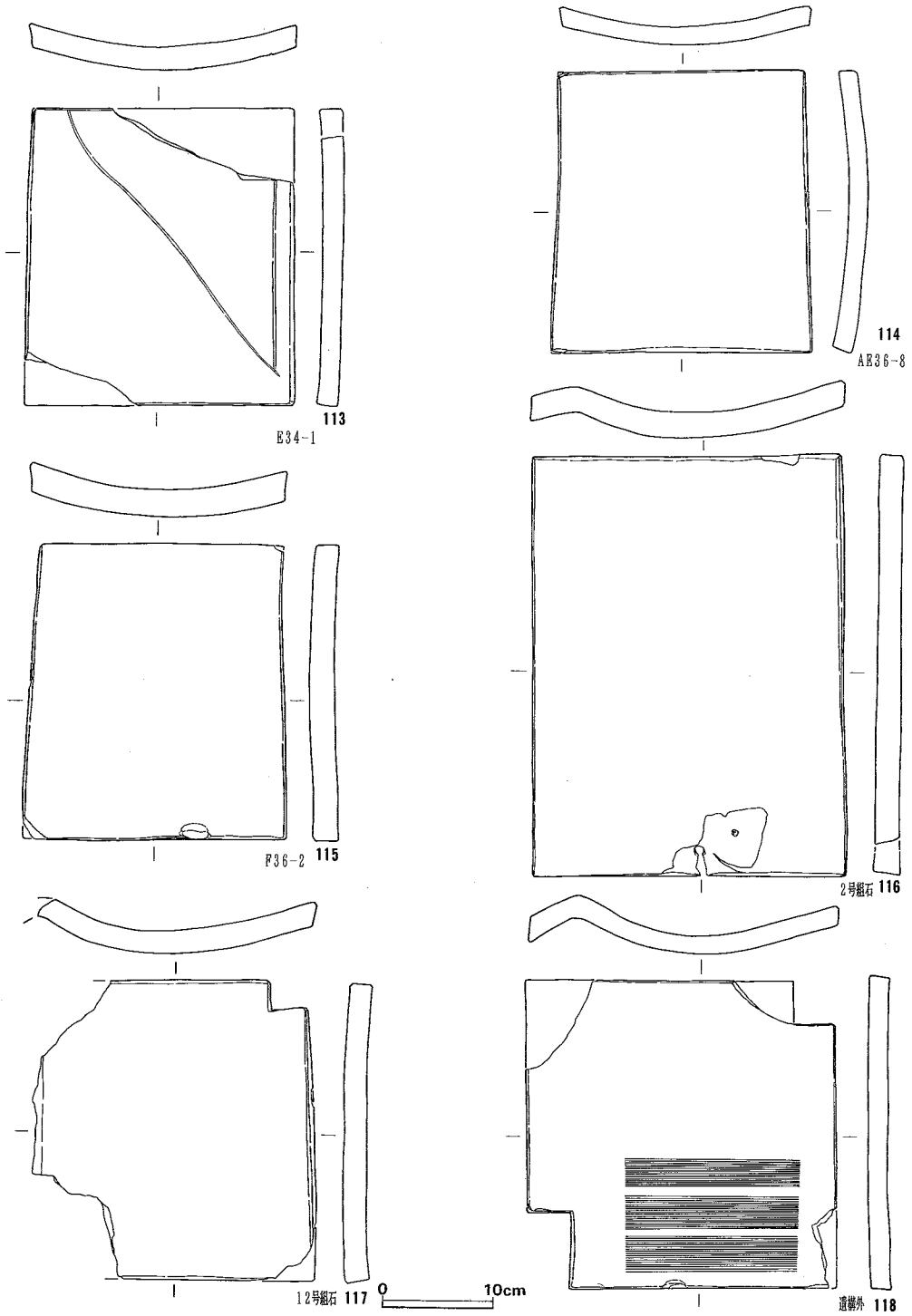
IV-214図 各地点出土瓦(6)

第三節 各地点出土瓦



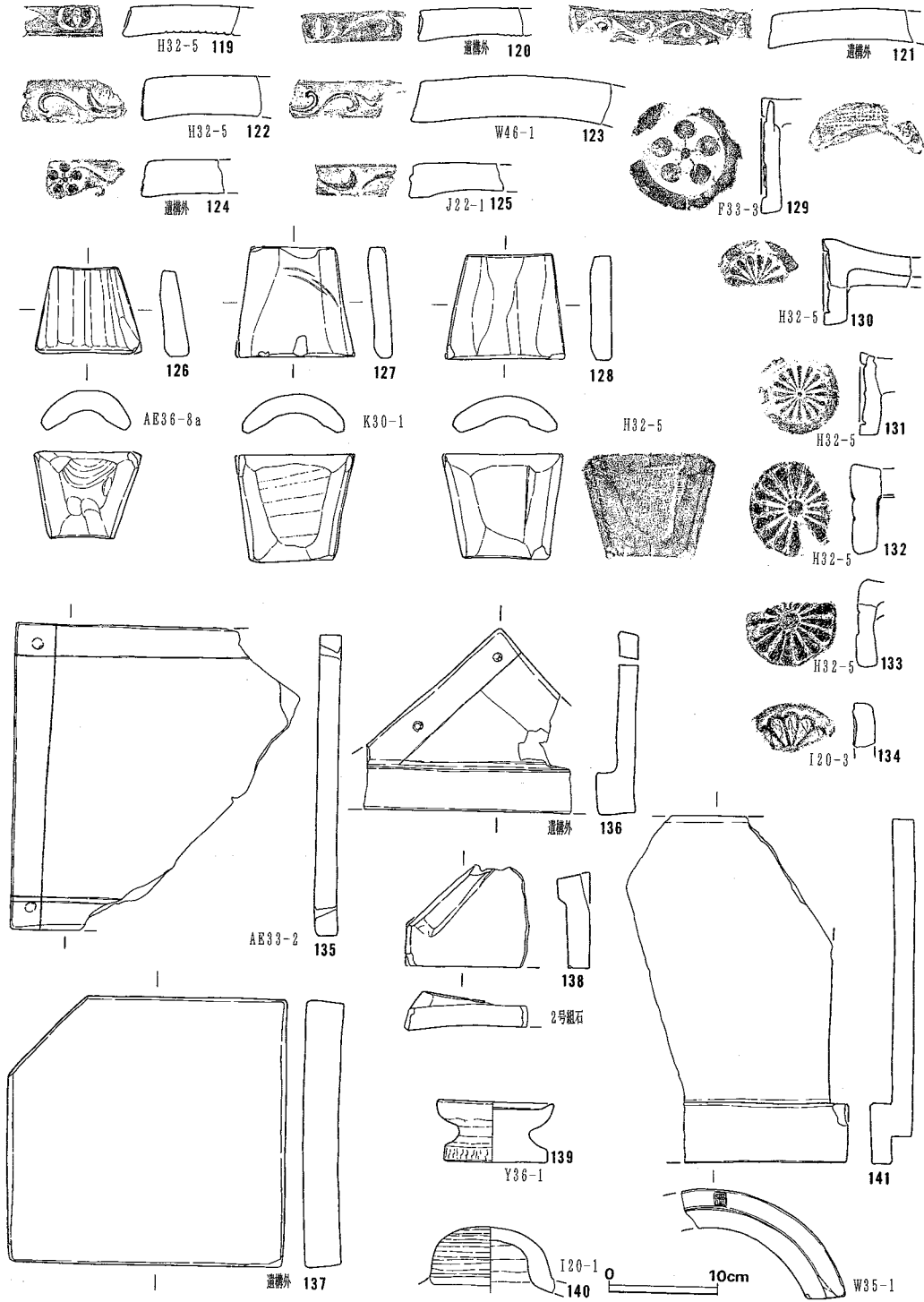
IV-215图 各地点出土瓦(7)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-216図 各地点出土瓦(8)

第三節 各地点出土瓦

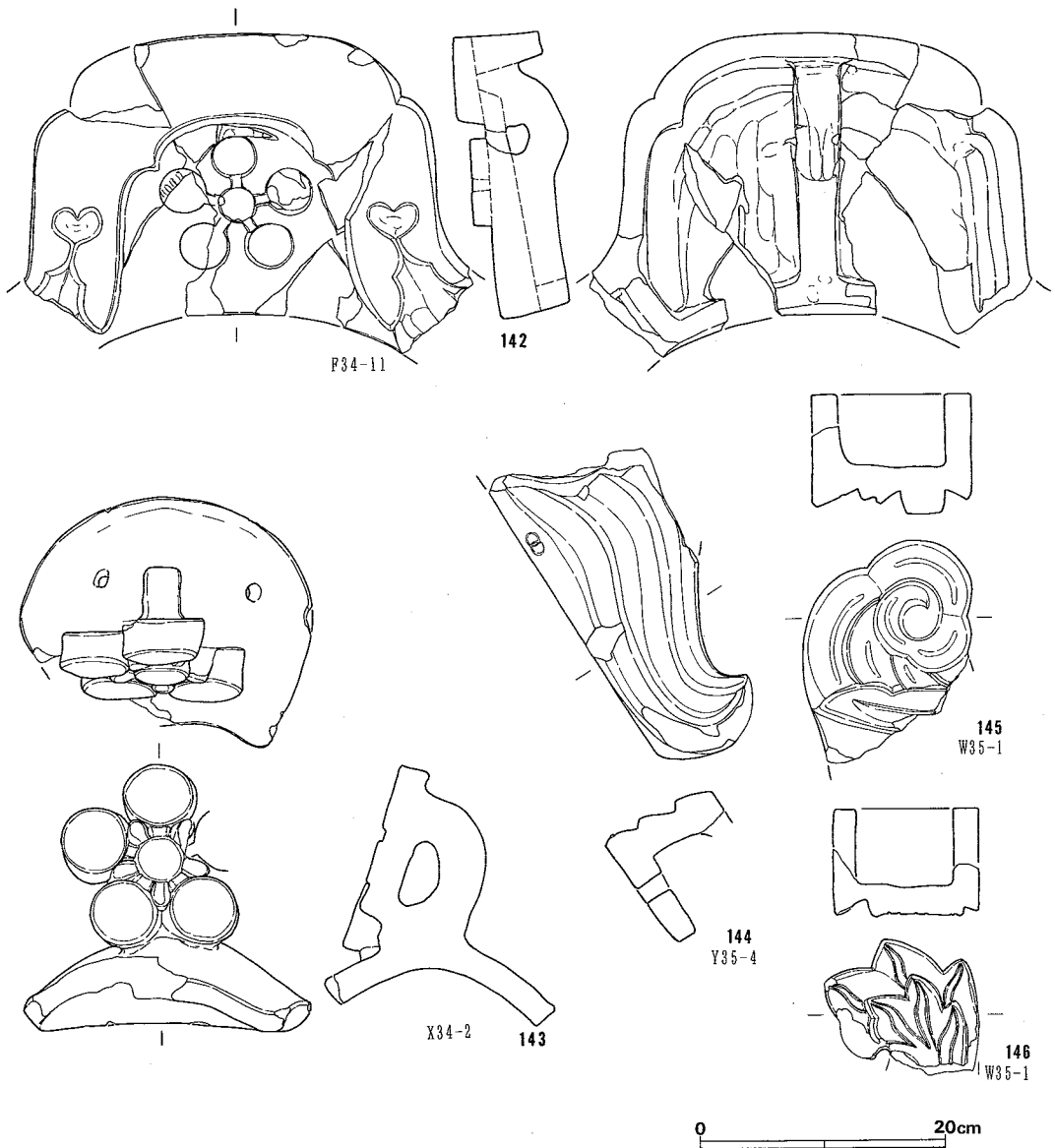


IV-217图 各地点出土瓦(9)

第IV章 江戸時代の遺物

ほぼ完形のものを抽出して図示した。104, 108-111は玉縁の長いものから短いものへと並べてある。105は径が比較的大きく、106は逆に小さいものである。107は末端が斜めに切られ縁がつけられている。谷丸瓦と呼ばれるものである。112は緑釉のかけられたもので、胎土は緻密で白色を呈する。

平瓦(113-115) 棧瓦(116-118) 平瓦, 棧瓦とも図示したのは裏面(凸面)である。この両者においては表面(凹面)は美観のためばかりでなく、雨水の浸透を少なくするために丁寧にミガかれており、裏面に見られるような特徴に乏しい。113には図のような焼成前の線刻が見られる。棧瓦葺に用いられる切平瓦として作られたものである。116は棧瓦の形態をもつが、釘穴と思われる穴が二



IV-218図 各地点出土瓦(10)

第三節 各地点出土瓦

遺構名	陶磁器よりの年代	軒丸瓦	軒平瓦	軒棧瓦	丸瓦	平瓦	棧瓦	特殊瓦
C29-2	18世紀前半		62					
C31-1	17世紀末～18世紀初	22						
C33-1	—			81				
D32-1	V期				106			
E28-1	V期	15						
E34-1	V期後半						113	
E35-4	V期		49	80				
F23-2	VIII期			94				
F27-1	II期	23						
F30-10	19世紀			101				
F33-3	V期前半							129
F34-3	VIII期			87				
F34-11	III期		66		108			142
F36-2	I期						115	
G20-7	17世紀		57					
G21-2	—	25		86.88				
G27-1	17世紀後半	8						
G33-7	?			92				
G34-3	18世紀後半			98				
G36-6	18世紀前半		67					
H21-1	VIII期			69.74				
H21-3	VIII期			82				
H21-8	VIII期			97				
H23-3	19世紀中葉			77.100				
H32-1	18世紀前半				110			
H32-5	II期	9	50.52. 63	99				119.122.128. 130-133 140 134
I20-1	VIII期							
I20-3	V期							
I30-1	17世紀後～18世紀前	32						
I31-1	17世紀後半			53.54				
J22-1	—							125
J31-1	17世紀中葉～後半			55				
K29-1	18世紀前半	4						
K30-1	IV期							127
K34-1	V期	10.21						
1号組石	V期	42						
2号組石	VIII期	14.19.24 27.40.47		71.72.79 84.89.93			116	138
6・10号組石	18世紀前半	5						
12号組石	17世紀中葉～後半						117	
V36-4	17世紀末～18世紀初			73				
W35-1	18世紀	28						141.145.146
W36-15	—			85				
W38-1	18世紀前半	45	68					
X34-2	18世紀後～19世紀初							143
X36-5	18世紀末～19世紀初			83.95				
X38-1	—	38						
Y35-4	18世紀前半	3.12						144
Y36-1	18世紀前半				111			139
Y36-6	18世紀後半		48					
Z35-5	V期		51					
AD35-2	V期				104			
AD37-1	III期	26.35.43			112			
AE33-2	—							135
AE35-2	—	36			107			
AE36-4	V期		65					
AE36-8	II期				109	114		126
AE39-1	VII期	31.41						
AE40-2	—				105			
AJ34-2	VIII期	34.37		78				
AL33-1	—	29.33.39	61					
W46-1	II期	6.17	64					123

IV-3表 図示した瓦出土遺構

第IV章 江戸時代の遺物

つ見られ平面形は長方形で切込みがない。御殿下記念館地点の出土例から判断すると塀に用いられたものと思われる。118には18本を単位とする櫛目が3列入れられている。同種の破片に「愛知縣下本場 大極上無類請合 和田米仕入」の刻印をもつものが見られ、近代以降の所産と考えられる。

道具瓦その他(119-146) 119-125は熨斗瓦。119-121には軒平瓦、軒棧瓦に見られるような唐草文が陰刻されている。122-125は同じく唐草文であるが陽刻であり、124では中心飾りにあたる部分に梅鉢が配されている。126-128は輪違い。129-134は菊丸瓦。129には無剣の梅鉢が、130-134には菊花が瓦当にあたる部分に表現されている。135、136は海鼠瓦。135は正方形を呈していたと思われ、四隅に釘穴が、四辺に平行に沈線が入れている。136は海鼠壁の縁辺部に用いられていたと思われるものである。137は輓。一つの角が落としてある。138は筋違。三角形の突起が裏面に見られる。139、140は性格、名称などは不明である。141は棧をもつ棟瓦。方形のなかに「音」の字の入れられた刻印がある。142、144-146は鬼瓦の一部。142は中央に無剣の梅鉢が配され、両側の若草を欠いている。144には「違い輪」の印が捺されている。144は足と呼ばれる部分である。143は留蓋。大聖寺前田家の家紋とされる棍棒状の剣をもったいわゆる棒梅鉢もしくは瓜実梅鉢が表現されている。

図示した瓦の出土遺構に相伴する陶磁器から推定される年代はIV-3表のとおりである。

小括 本地点から出土した瓦は、上に記したように量的には多かったが、その出土の状況を見ると、ほとんどが遺構の覆土に小破片として含まれており、いわゆる「瓦落ち」のようなかたちでの出土は見られなかった。ただ AE35-2など少数の遺構で覆土の大半を占めるように瓦の含まれる例が見られた。そのいずれもが火を受けており、また覆土の大部分は焼土であって、火災による一括した廃棄を窺わせるものであったが、そこからは陶磁器をはじめ瓦以外の遺物がほとんど見られず、時期的な検討が行なえなかった。こうした出土の仕方は、東京大学本郷構内でも理学部7号館地点や法学部4号館・文学部3号館地点の井戸をはじめ何箇所かで見られるが、これは火災の後片付けの際に地上に広がっていたであろう瓦を意識的に集めるという行為によるものとも思われる。

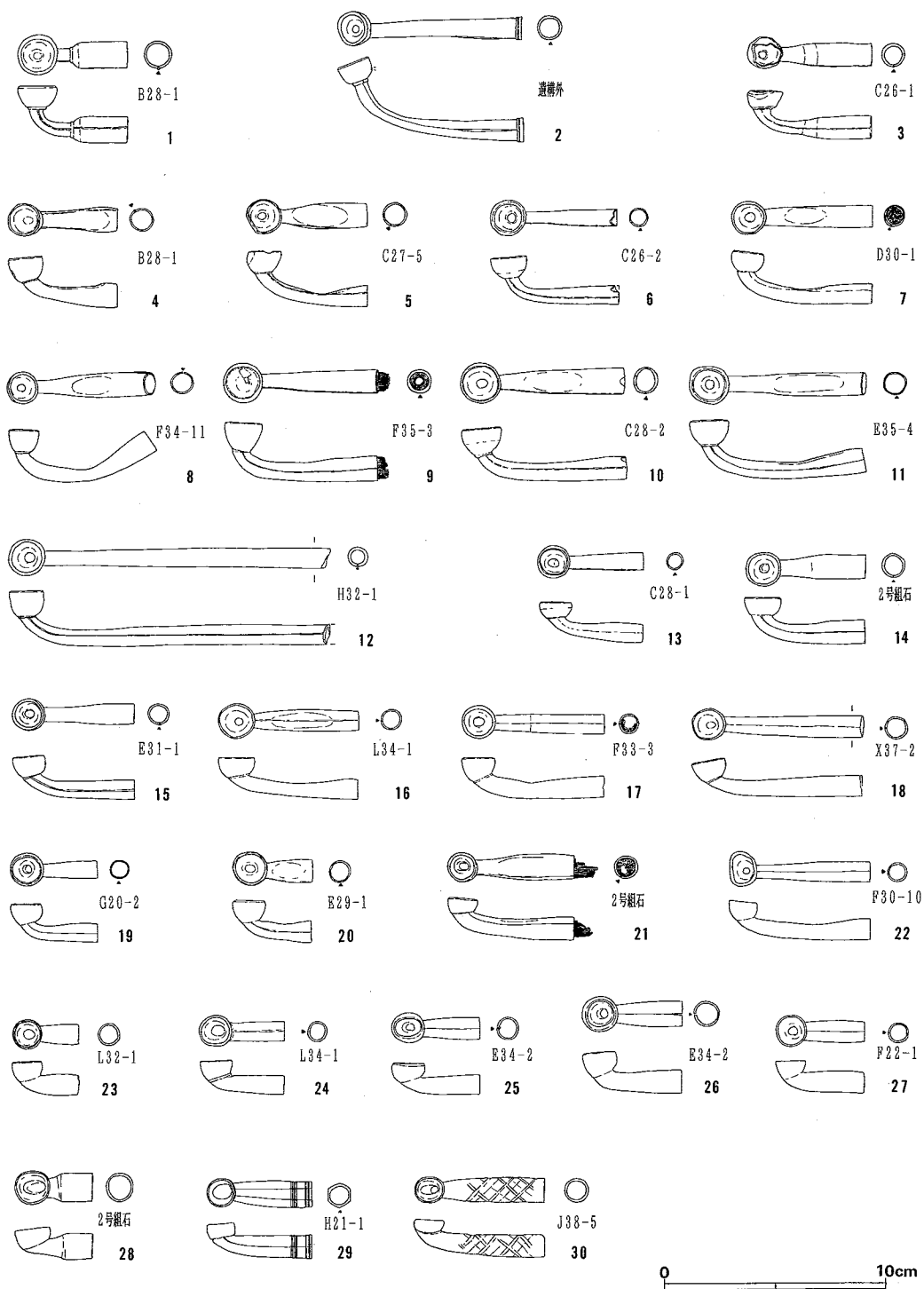
遺物としての瓦は、それが単独では機能し得なかったこと、比較的長い間使用されるため、時期的な判断の材料としては限界があることなど、やや特異な性格を有するものである。そういう意味でも本地点における資料から多くを期待することはできないと思われる。なお、本地点出土の軒平瓦、軒棧瓦については、加藤氏によって構内の他の地点とともに御殿下記念館地点出土資料との対比がなされている。御殿下記念館地点の調査報告書を参照されたい。(小川 望)

第四節 各地点出土金属製品

各地点の遺構のなかから、また遺構の外から豊富な金属製品が出土している (IV-219~224 図)。ここでは、煙管、各種製品、銭貨にわけて記述することにする。なお図示した銭貨の細かい分類・観察に際し、金子智氏の手を煩わせた。

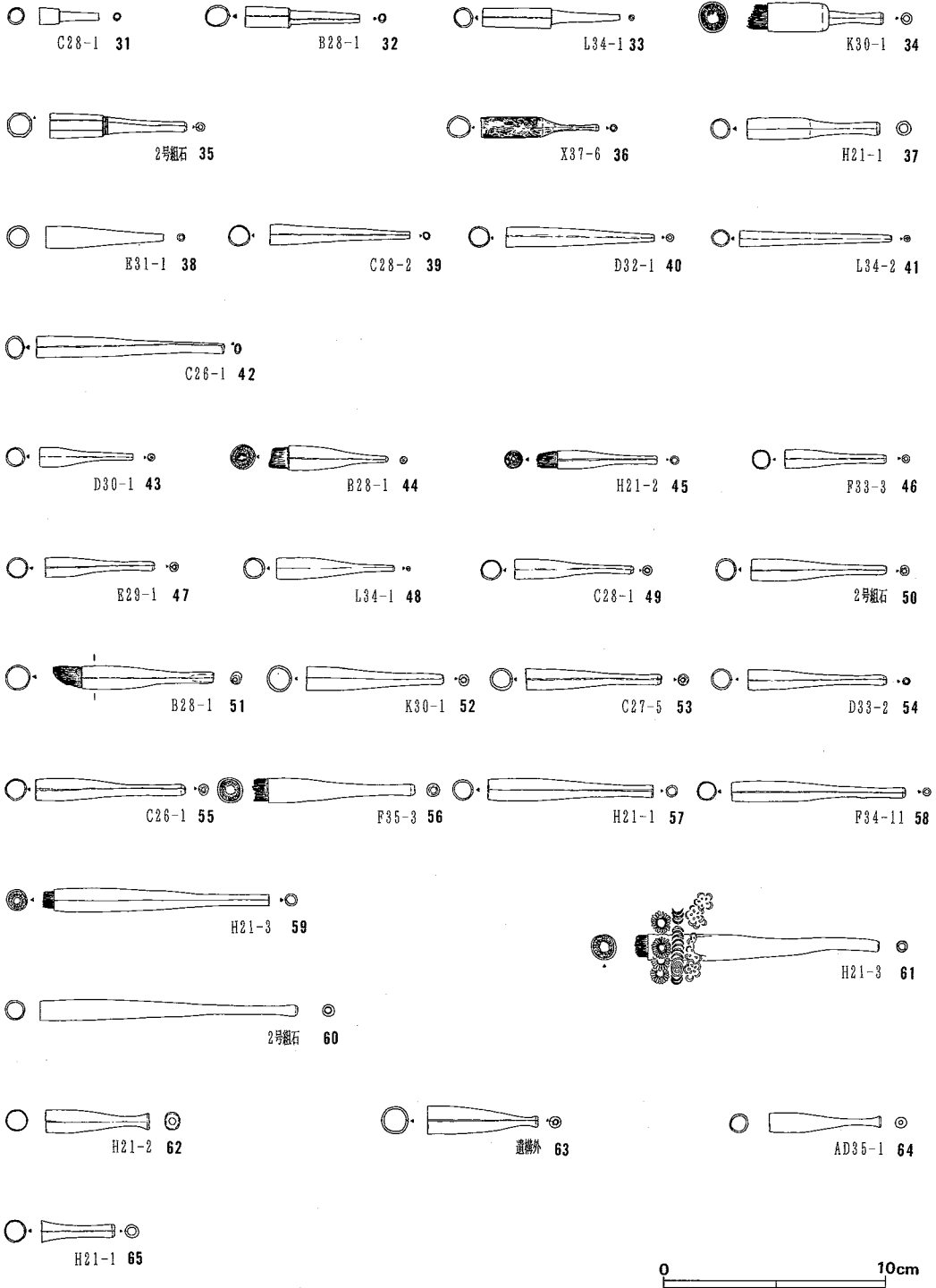
煙管(1-65) 煙管に関しては古泉弘氏の先駆的な研究がある(1985)。本稿では部分名称や分類の多くを氏に従っている。煙管は通常、金属製の雁首と吸い口、その間をつなぐ竹や木製の羅字(ラオ、ラウ)の三者からなるが、雁首から吸い口までが一体となった延べ煙管と言われるものも存在する。

第四節 各地点出土金属製品



IV-219图 各地点出土金属製品(1)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-220図 各地点出土金属製品(2)

第四節 各地点出土金属製品

本地点から出土した煙管は大部分が前者であり、後者は1点のみ(12)であった。ここではこれらのうち比較的よく残存しているものについて図示し報告する。なお特に記したものを除き、いずれも銅製である。

1-30は雁首。本地点からは総数69点が出土している。

古泉氏は雁首を、首部に肩のつくI類と肩の接合されないII類とに分け、これに特殊な形態のIII類とを加えた三種に大別している。I類はさらに脂(ヤニ)返しがいったん下方へ湾曲するAと下方へ湾曲しないBとに細分されている。この分類に従えば、I類Aに分類されると思われるものは見出しされていないが、1, 2はI類Bに分類されるものであり、これと12以外はいずれもII類に分類されるものであろう。1は首部と火皿、肩部の繋ぎ目に補強帯がそれぞれ見られる。首部と肩部には蠟着の合わせ目が上からみて左側にある。2はやや特異な形態の比較的大型の雁首。首部の羅字側の末端の肩部は輪になっている。合わせ目は左側にある。

古泉氏のII類は脂返しが大きく湾曲し、火皿と首部の接合部に補強帯がつくAと、補強帯のつかないB、脂返しが大きく湾曲せず、首部が火皿から比較的急に横に取りつくCとの三者に細分される。しかし氏も指摘されているように補強帯は脱落しやすくその存否は決定しづらい。そこで、ここでは氏のII類全体を主に火皿の形から分類しなおすことにする。まず火皿の口縁と、首部との接合面とが平行なものをa、平行でないものをbとする。aをさらに火皿の深さが口径の半分以上あるものとなないものに分け、前者をa1、後者をa2とする。またbを火皿から首部への移行部の全面が段をもつものともたないものに分け、前者をb1、後者をb2とする。このように分類すると、3-12と20がa1、13, 14がa2、15-19, 21, 22がb1、23-30がb2に所属することになる。

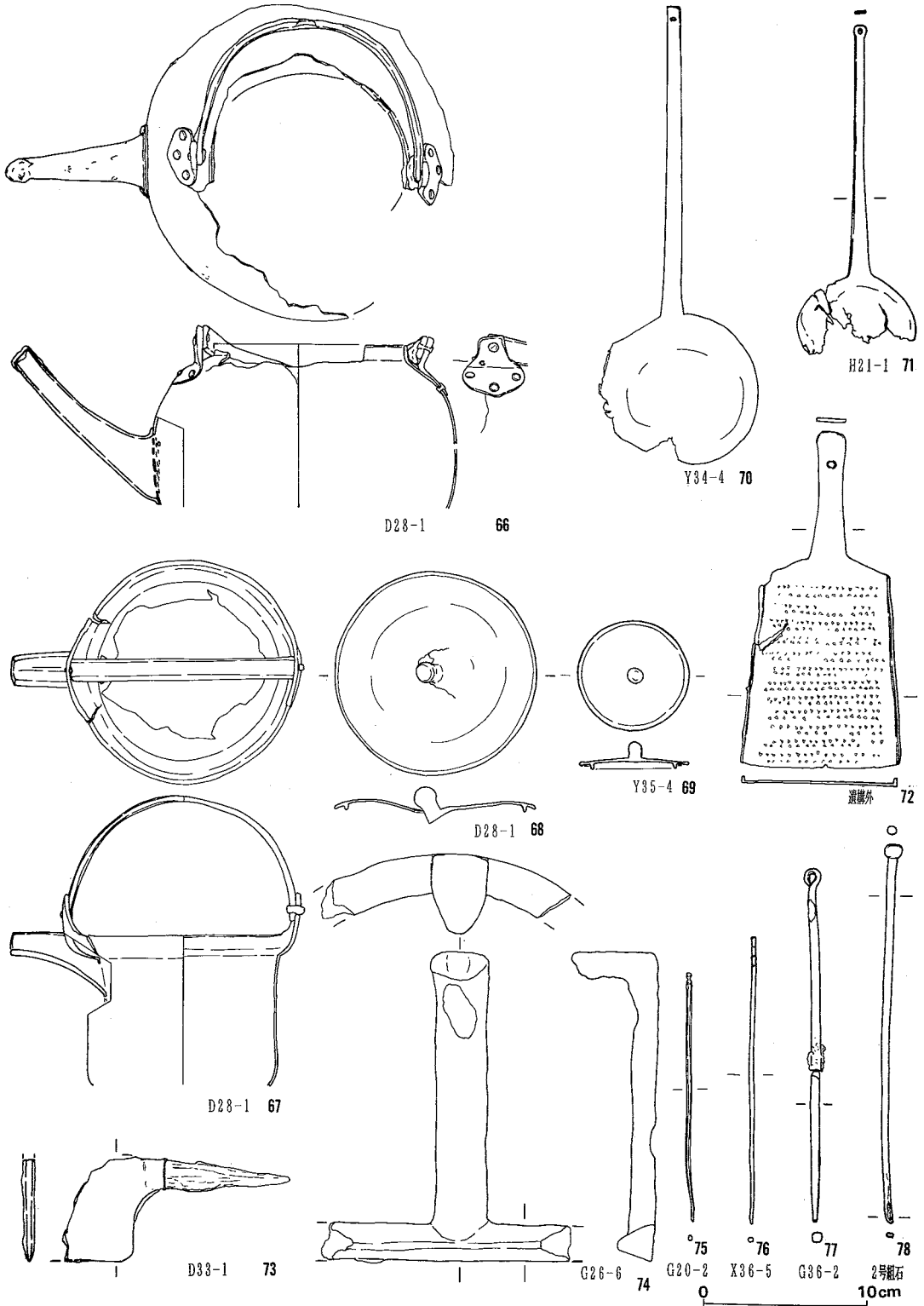
これらのうち12は首部がきわめて長く、すでに述べたように延べ煙管と思われるものである。a1, a2の大部分は合わせ目が左にあるが、4と8のみが例外的に右にある。首部の腹面には灰を落とすために、灰落としや火入れの縁に打ちつけた際に生じたと思われるツブレがみられるものが多い。このうち3は肩つきの形態をとどめるものであり、古泉氏が吸い口において指摘された、I類からII類への移行過程を示すものに相当しよう。合わせ目は左側にある。火皿と首部の間には補強帯がつき、火皿は破損して歪んでいる。

b1では合わせ目が上にあるものと左にあるものとがほぼ同数になり、b2では合わせ目は観察しうるものの大部分をしめる。またb2には形態的なヴァリエーションが多く見られる。とくに28-30は特異な形態や装飾を示すものである。28は首部の羅字側が段をもって太くなっており、I類の肩つきにも分類しうるような形態である。29は首部の断面が六角形を呈し、羅字側の末端に沈線が巡っている。火皿の下端、首部との接合部はわずかに破損している。30は火皿がきわめて小さく、またその下面は首部との接合面に覆われている。首部には斜格子状に深淺二種の沈線が入る。28-30は器壁がいずれも厚い。またb1, b2を比較すると、総じてb1の方が首部が長く、そのためでもあろうが上記ツブレの見られるものが多い。なお7, 9, 21には羅字が一部残存している。

31-65は吸い口。本地点からは総数88点が出土している。

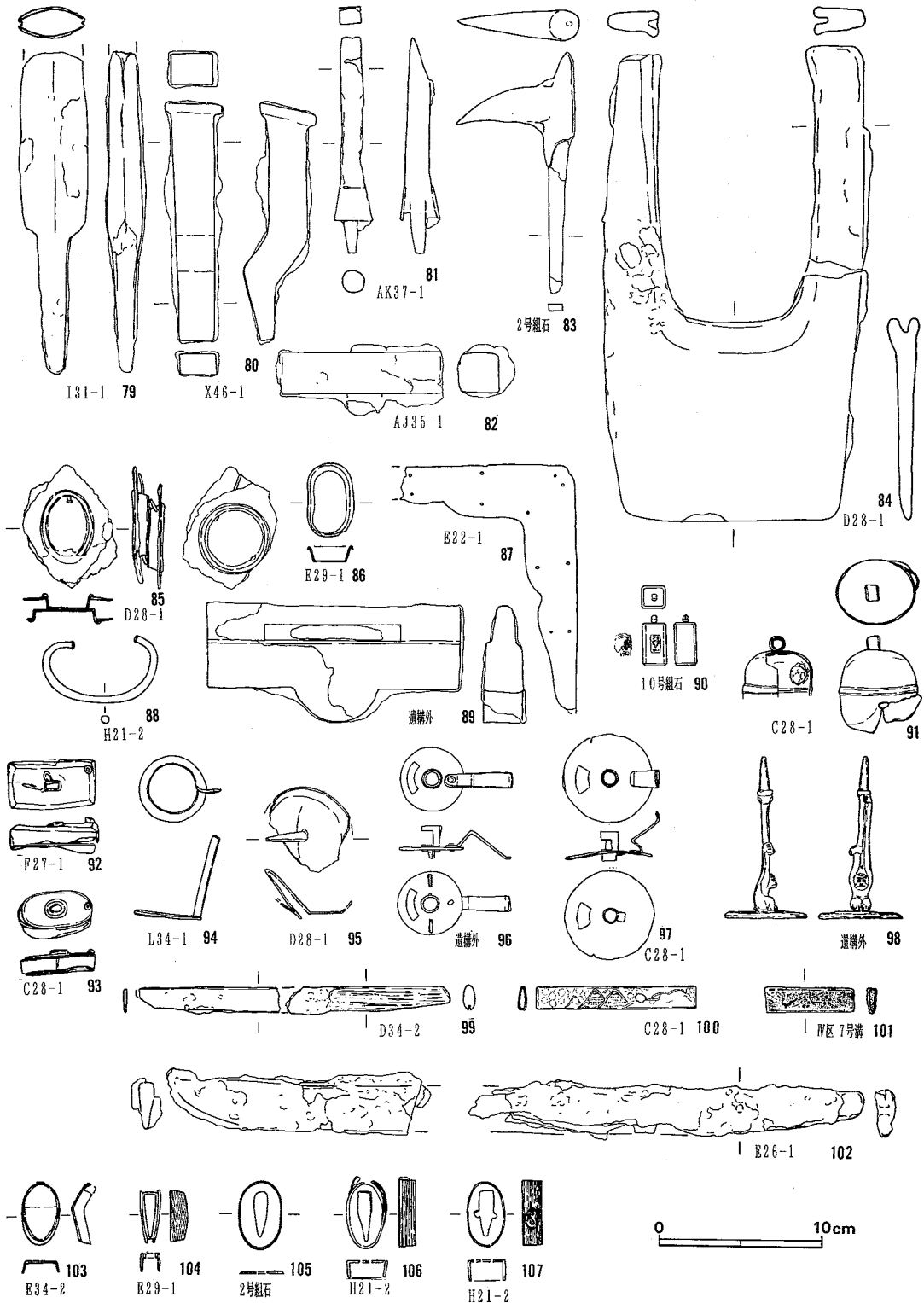
古泉氏は吸い口をひとまわり径の大きい肩のつくI類と肩のつかないII類とに分けている。I類はさらに径の異なる円筒を二本接合した形式のA、肩の後部がすばめられ緩やかに狭義の吸い口へ

第IV章 江戸時代の遺物

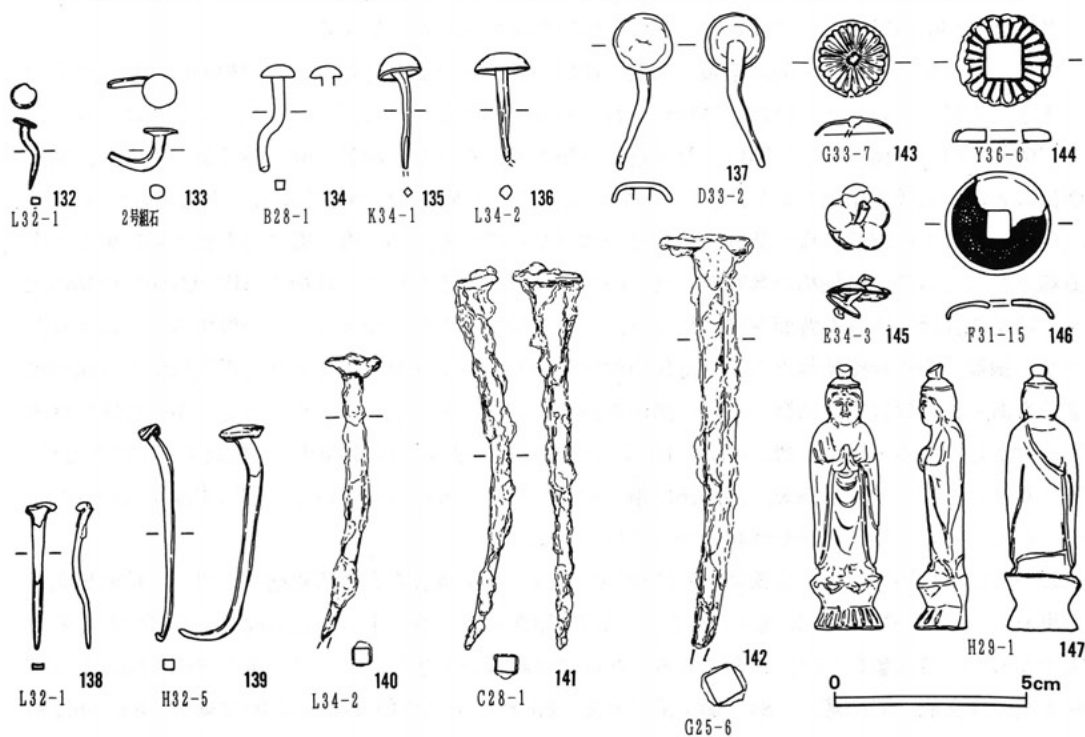
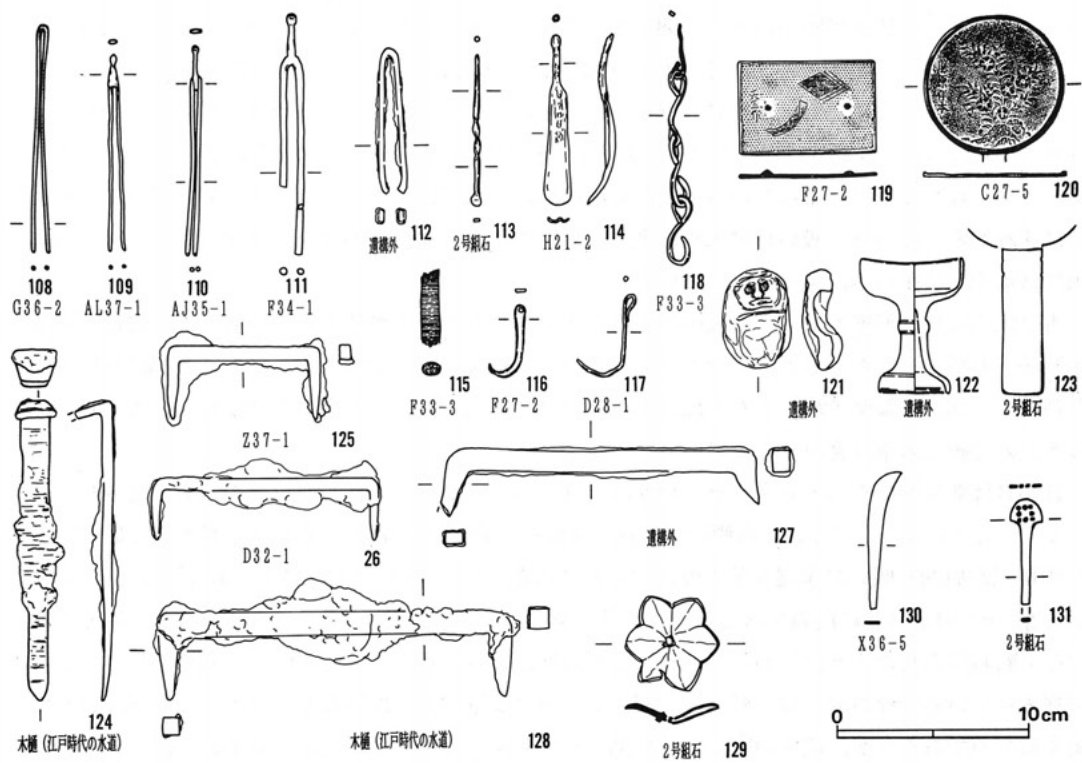


IV-221図 各地点出土金属製品(3)

第四節 各地点出土金属製品



第IV章 江戸時代の遺物



IV-223図 各地点出土金属製品(5)

第四節 各地点出土金属製品

移行するB、肩と狭義の吸い口とが別個に製作されているが両者の境に段差のないCとの三者に細分されている。この分類に従えばI類Cに分類されると思われるものは見出しされていないが、31-33、35はI類Aに、34はI類Bに分類されるものであろう。31はきわめて小型のものである。鑄のためであろう、合わせ目が観察できなかつた。31-33の狭義の吸い口の末端は脹らみや丸みがなく断ち切られたように終わっている。35は肩の部分が八角形に加工されている。肩と吸い口の接合部に沈線が巡っている。吸い口の末端が丸みをもっている。34は肩の部分が非常に太い。吸い口の末端は緩やかに脹らみ、丸みをもっている。

古泉氏のII類は形態的に肩と狭義の吸い口とが分離したI類の形態をとどめるAと、形態上も製作技法上も肩をもたないBとに二分されている。この分類に従えば36、37はAに、38-65はBに分類されよう。36は真鍮製で肩にあたる部分を中心にほぼ全面に細かい毛彫の装飾が見られる。吸い口はきわめて細く末端は丸みをもっている。

II類Bは数量的にもっとも多くその形態は多様である。そこでこれらを以下の三者に細分して述べていくことにする。すなわち両側辺が直線で側面観が台形を呈する1、両側辺が緩やかに屈曲する2、両側辺が屈曲し吸い口末端が強く外反する3である。このように分類すると、38-42がB1、43-61がB2、62-64がB3に所属することになろう。38-42、45、57、59の吸い口の末端は脹らみや丸みがなく断ち切られたように終わっており、これ以外は丸みを帯びている。61には花や渦巻きの装飾が刻まれている。なお34、44、45、51、56、59、61には羅字が一部残存している。また65はB2に属するものであろうが、羅字の収まるべき部分がほとんどなく、この先に肩にあたる部分がついていたか、あるいは全く異なった製品の一部とも考えられる。

各種製品(66-147) ここでは煙管と銭貨を除く各種の製品を一括する。

66-78は厨房具その他。66は薬罐。銅製。注口が細く長いことを除けば、形態的には現代のものと大きな差異はない。注口は体部に接合されており、体部と注口の間には小孔が多くあけられている。67は注口の上面が溝状に開いており銚子の類と考えられる。銅製。68、69は蓋。ともに銅製。68は67と同一遺構の出土であり、色合、材質、大きさなどから67に対応するものと考えられる。70、71は柄杓。ともに銅製。掬う部分と柄とは一体となっている。70の掬う部分の左側の辺は前後とも直線となっており、貝柄杓の名残か、貝を模したものと考えられる。貝柄杓(IV-231図)の柄の取りつけ用の孔はいずれも背面左側に見られ、この製品の柄の取りつき方とも一致する。72はオロシガネ。銅製。中央診療棟地点の江戸時代の堆積層の最上層よりの出土であり、近代以降の所産の可能性もある。73は包丁。鉄製。刃の一部から柄の装着部(茎)までの破片である。茎の周囲には木質が付着している。74は五徳。AL37-1出土の硬質瓦質の製品(IV-193図)と類似する形態をもつ。75-78は火箸でいずれも銅製。75、76は細く末端に刻みが入れられている。77は末端が丸められて輪になっている。78は末端が球状に加工されている。

79-84は工具類。いずれも鉄製。79は鑿(ヤスリ)。鑄が激しく表面は観察できない。槍の穂先とも思われるが茎が短い。80は鑿(タガネ)。二段に屈曲している。平坦な石の面などを打つための工夫であろう。81は鑿(ノミ)。平鑿である。基部には鉄板が巻き付けてあり、茎と鉄板の間に木質が残る。82は玄能。83は鳶口。84は鋤か鍬の刃先。85-88は家具の部分品。85-88は銅製。85、86は襖

第IV章 江戸時代の遺物

の引き手。85では表裏が溶着している。一面はくぼみが円形で、周囲の装飾は方形を基本としたものであり、他面はくぼみが楕円形で、周囲の装飾は菱形を基本としたものであったと思われる。これはおそらく襖の表裏に対応したものであろう。くぼみの内側の縁には一對の固定用の釘が見られる。87は箆筒などの角の装飾板と思われる。小さな釘穴が見られる。88は箆筒の引き手(環)。89は錠前。鉄製。全面が錆に覆われていて、詳しい観察は困難である。

90-93は文房具類。いずれも銅製。90は分銅。上面中央には穴のあるつまみがつく。正四角柱で各辺が面取りされている。側面に「天下一」、その反対の面には判読不能の文字が鑄出されている。重量は45.6g(十二匁)である。91は鈴。上下を合わせて成形されている。内面に鳴子が溶着している。92, 93は水滴。銅板を組み合わせて成形されている。92は長方形, 93は小判型で、中央に大きな孔が、一端に小さな孔が見られる。各々中央の孔は全体の形と一致する。94-98は照明具。いずれも銅製。94はカキタテと呼ばれるもので油皿の中で燈芯を押さえるものである。95, 98は蠟燭を保持する燭台の類であろう。95は破損しており全体の形が明らかでないが、尖った部分を蠟燭に差し込むものであろう。猿を象った98も同様で蠟を受ける皿の部分が欠損しているものと思われる。96, 97は把手が付属しており手燭であると思われるが、中央の切り欠きのある円筒の部分は蠟燭を入れるにはやや細い上、形態的に秉燭の中央の芯の支えに類似しており、あるいはカキタテのような油皿のなかに入れる芯押さえの一種とも思われる。

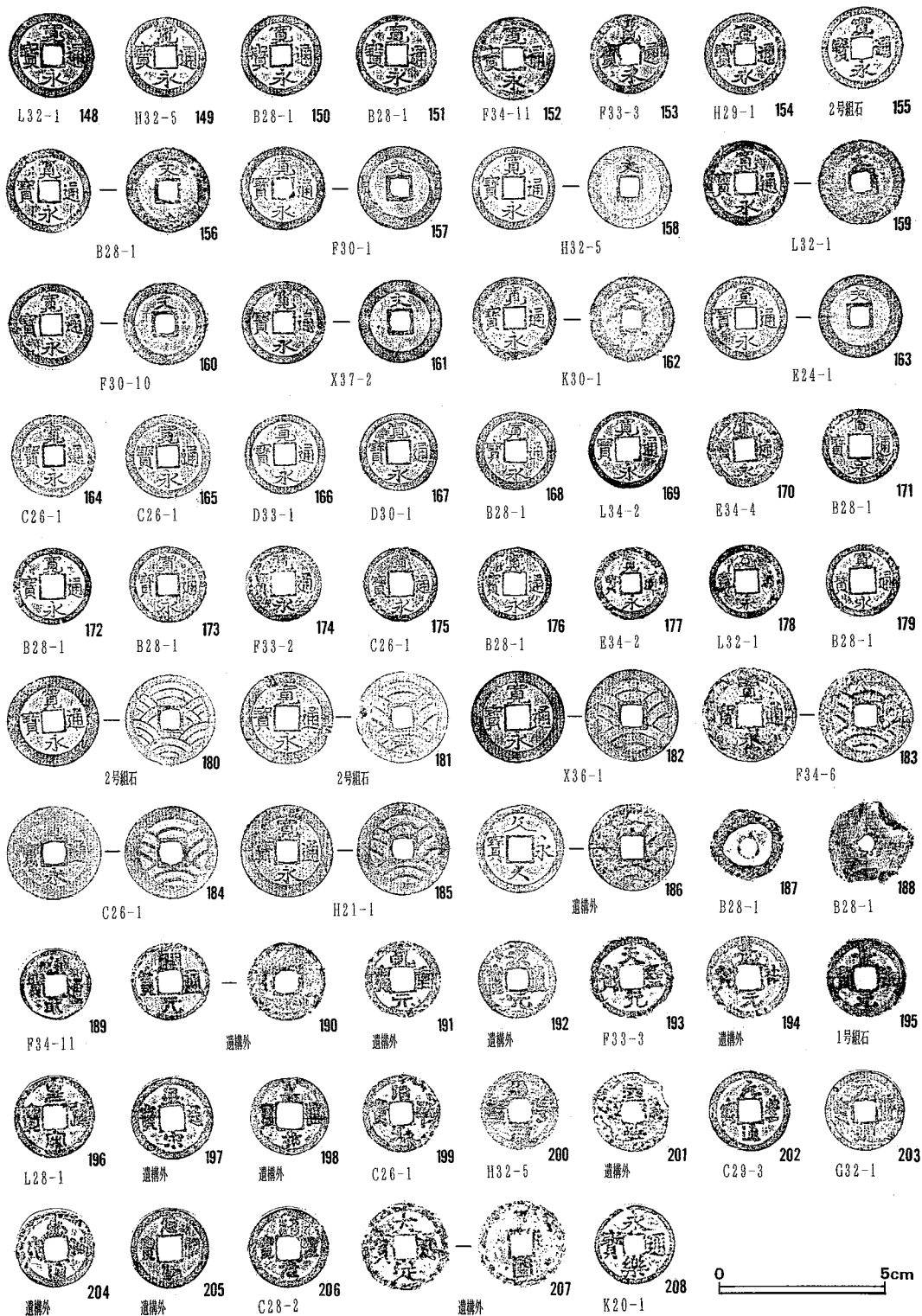
99-107は刀身と刀装具。99, 102は刀身。99は刀子もしくは小柄であろう。茎の部分には木質が付着しており刀子と考えるのが妥当かもしれない。102は小刀であろう。目釘穴が見られる。ともに鉄製、錆が激しくまた中央で折損しており全体の姿は明らかでない。100, 101, 103-107は刀装具。いずれも銅製。100, 101は小柄の柄。前者には風景が陰刻され、後者には梅の木が陽刻されている。103は鐺(コジリ)。104は鉏(ハバキ)。105-107は切羽。106, 107には縁がつく。107には「違丁字」を表わした銀の装飾がついている。

108-123は装身具類。108-111は簪(カンザシ)。いずれも双脚形で108はヘアピン形。110, 111は耳搔きつきである。108-110は錫と思われる白色の金属製。111は銅製。112は鉄製の毛抜き。113は銅製の耳搔き。114は銅製の匙。115は棕櫚のような繊維を銅線で巻いたもので刷子の一種であろう。116, 117は銅製の鈎。118は銅製の鎖。119は銀製の鏡。背の全面に小突起があり「天下一作」の文字と菱形と短冊をあしらった装飾が見られる。120は銅製の手鏡。背に「藤原伴本」の文字と植物が描かれている。123は銅製の手鏡の柄である。側縁に刻みが見られる。121は達磨を象った中空の銅製品。箸置き類とも思われるが用途など不明である。122は仏飯器。銅製。

124-129, 132-146は釘・鋌類。124は木樋の固定に用いられていた鉄製の平たい折釘。頭部が長く先端が篋状になっている。125-128は鏝(カスガイ)。鉄製。138-142は鉄製の頭巻釘。132-134は銅製の角釘で、136-143は銅製の鋌。143の頭部には菊花の模様が付けられている。129, 144-146は飾り金具。いずれも銅製で、146には金の鍍金が見られる。

147は銅製の仏像。蓮華合掌の印相などから日光・月光菩薩のいずれかの立像と思われるが、天部の可能性もある。溶解した銅板に包まれるようにして出土しており厨子の類の中に納められているものと思われる。130, 131は不明。玩具類の部分品であろう。

第四節 各地点出土金属製品



IV-224圖 各地点出土金属製品(6)

第IV章 江戸時代の遺物

銭貨(148-208) 本地点出土の銭貨は総数 510枚で、その内訳は本邦銭 447枚、渡来銭28枚、不明23枚、雁首銭12枚である。

148-185 は寛永通宝。寛永通宝は、寛永十三年(1636)から明治2年(1869)まで公鑄されたものがあるが、「寛永通宝」という銭名はそれ以前、寛永三年(1626)にさかのぼるといふ。この公鑄以前のものも含めると寛永通宝は 240余年の歴史をもち、その鑄造地も全国各地におよぶ。したがってその種類は千数百種にも細分され、その初鑄年、鑄造地を知ることのできるものも多いという(扇浦1988)。本地点で出土した 444枚の寛永通宝のすべてを泉界(古銭収集界)の精緻だが煩瑣な分類にしたがって示すことは不可能であり、またその必要性も認められないので、ここでは全体を古寛永、新寛永一文銭背文、新寛永一文銭無背、新寛永一文銭背元、寛永通宝四文銭に分け、その各々の中の字体、銭径における異同を拓影で示し、若干の補足を加えるにとどめる。

148-155 は古寛永。出土総数は 112枚。古寛永の語は狭義には公鑄された寛永通宝の内の明暦二年(1656)以前に鑄造されたものを指し、広義にはこれに公鑄以前のものを含めるが、いずれにせよ多くは宝(寶)字の17-19画が新寛永のハの字(ハ宝)に対し、スの字(ス宝)になっていることを特徴とする。本地点出土のものはいずれも公鑄以後の、すなわち狭義の古寛永であり、寛永十三年初鑄のいわゆる芝銭から明暦二年初鑄のいわゆる沓谷銭におよぶと見られる。149は鳥越銭と呼ばれるものである。

156-163 は新寛永一文銭背文。出土総数は72枚。いわゆる文銭であり寛文八年(1668)に江戸で鑄銭が再開された際に、「寛」の裏に「文」を鑄出して寛文を表したものといわれ、寛文十三年(1673)に延宝と改元されるに伴い、背面の「文」はなくなる。したがってこの6年間に鑄造されたものであることが知られるものである。164-178は新寛永一文銭無背。出土総数は 205枚。四文銭を含めた新寛永には各種の背文をもったものがあり、これによって鑄造地やその年代を知ることができるが、本地点出土の寛永通宝には上記の「文」および 179の「元」以外は見られない。したがって、背文をもたない新寛永一文銭をここに一括する。これは延宝二年(1674)から幕末にまでおよぶ多種のものを含んでいる。字体はもちろん銭径、穿の大きさ等に多くのヴァリエーションが認められる。164-166は背文をもたないものの字体などが「文」の背文もつものに酷似しおそらく「文」の削られたものと考えられる。167-178の多くは江戸亀戸で鑄造された四ツ宝銭と呼ばれるものであり、このほか猿江銭、不旧手、含二水永などが見られる。179 は新寛永一文銭背元(小字背元)。大坂高津、寛保元年(1741)初鑄といわれるものである。背文「元」は錆に覆われており、拓影は示していない。180-185は寛永通宝四文銭。出土総数は54枚。いわゆる波銭であり、明和五年(1768)に新たに制定された四文銭である。同年初鑄のものは背面の波が21波であり、真鍮銭である。180に示したものがそれで本地点からはこの1枚のみ出土している。短尾寛と呼ばれるものである。背面の波は翌明和六年(1769)年以降11波になり、文政期には真鍮の使用も停止されたという。これら四文銭は銀座懸りの銭座だけで鑄銭されたため、手替りは少ないという。

186 は文久永宝。出土総数は 1枚。文久三年(1863)から慶応元年(1865)までの鑄造である。これには真文、草文、略宝の三種の書体のものの存在が知られているが、本地点出土のものは、「文」が草書体の草文細郭と呼ばれるものである。給水設備棟地点遺構外よりの出土である。

第四節 各地点出土金属製品

遺構名	陶磁器から推定される年代	煙管（雁首）	煙管（吸口）	各種製品	銭 貨
B28-1	18世紀前半	1.4	32.44.51	134	150.151.156. 168.171-173.17 6.177.187.188 164.165.175. 184.199
C26-1	Ⅷ期	3	42.55		
C26-2	?	6			
C27-5	18世紀	5	53	120	
C28-1	Ⅲ期	13	31.49	91.93.97. 100.141	
C28-2	Ⅲ期	10	39		206
C29-3	18世紀前半				202
D28-1	18世紀前半			66-68.84. 85.95.117	
D30-1	?	7	43		167
D32-1	V期		40	126	
D33-1	V期後半			73	166
D33-2	18世紀前半		54	137	
D34-2	17世紀末～18世紀初頭			99	
E22-1	Ⅵ期			87	
E24-1	V期				163
E26-1	?			102	
E29-1	17世紀末～18世紀前半	20	47	86.104	
E31-1	V期	15	38		
E34-2	V期後半	25.26		103	179
E34-3	V期後半			145	
E34-4	V期後半				170
E35-4	V期	11			
F22-1	19世紀	27			
F27-1	Ⅱ期			92	
F27-2	17世紀後半			116.119	
F30-1	17世紀後半、19世紀				157
F30-10	19世紀	22			160
F31-15	?			146	
F33-2	18世紀前半				174
F33-3	V期前半	17	46	115.118	153.193
F34-1	18世紀末～19世紀			111	
F34-6	?				183
F34-11	Ⅲ期	8	58		152.189
F35-3	?	9	56		
G20-2	V期	19		75	
G25-6	17世紀後半			142	
G26-6	?			74	
G32-1	Ⅱ期				203
G33-7	?			143	
G36-2	幕末～明治			77.108	
H21-1	Ⅷ期	29	37.57.65	71	185
H21-2	Ⅷ期		45.62	88.106.107 114	
H21-3	Ⅷ期		59.61		
H29-1	Ⅱ期			147	154
H32-1	18世紀前半	12			
H32-5	Ⅱ期			139	149.158.200
I31-1	17世紀後半			79	
K20-1	17世紀後半				208
K30-1	Ⅳ期		34.52		162
K34-1	V期			135	
L28-1	17世紀後半				196
L32-1	Ⅱ期	23		132.138	148.159.178
L34-1	V期後半	16.24	33.48	94	
L34-2	V期		41	136.140	169
1号組石	V期				195

IV-4表 図示した金属製品出土遺構（1）

第IV章 江戸時代の遺物

遺構名	陶磁器から推定される年代	煙管（雁首）	煙管（吸口）	各種製品	銭貨
2号組石	VIII期	14,21,28	35,50,60	78,83,105, 113,123,12 9,131,133	155,180,181
10号組石	18世紀前半			90	
IV区7号溝	?			101	
X36-1	18世紀末～幕末				182
X36-5	18世紀末～19世紀初頭			76,130	
X37-2	18世紀前半	18			161
X37-6	18世紀後半		36		
Y34-4	IV期			70	
Y35-4	18世紀前半			69	
Y36-6	18世紀後半			144	
Z37-1	VIII期			125	
AD35-1	明治		64		
AJ35-1	VIII期			82,110	
AK37-1	—			81	
AL37-1	IX期			109	
J38-5	19世紀（幕末まで）	30			
X46-1	?			80	
木樋	?			124,128	

IV-4表 図示した金属製品出土遺構（2）

187, 188 は雁首銭。出土総数は12枚。煙管の雁首の火皿をつぶしたもので、通用銭ではなく、銭差しに混ぜて用いたという（扇浦 1988）。

以上が近世所産の銭貨であるが、このほか玩具類の項で記した南鐐二朱銀の土製模造品を除けば金銀貨の類は見られなかった。

189 は洪武通宝。元来明の1368年初鑄のものであるが、本地点出土例は銭径、字体などからみてわが国で中世に私鑄された加治木洪武と呼ばれる鑑銭であろう。以下に渡来銭を示すがこれらのなかにもこうした私鑄銭が含まれている可能性もある。190は開元通宝（開通元宝）。背面、通字の裏に「|」が鑄出されている。191は唐の乾元重宝。192は北宋の宋通元宝。193は北宋の天聖元宝。194, 195は北宋の景祐元宝。196, 197は北宋の皇宋通宝。198は北宋の嘉祐通宝。199, 200は北宋の治平元宝。201は北宋の熙寧元宝である。202, 203は北宋の元豊通宝。203は字体からみて万治二年（1659）初鑄の長崎貿易銭と呼ばれる本邦銭であろう。204, 205は元祐通宝。206は北宋の紹聖元宝。207は金の大定通宝。背面、定字の裏に「酉」が鑄出されている。208は明の永樂通宝である。

図示した金属製品の出土遺構に共伴する陶磁器から推定される年代はIV-4表のとおりである。

小括 ここまで述べてきたように本地点から出土した金属製品には多様なものがある。それらは材質から見ると鉄と銅が主でありこれに真鍮、銀が加わる。鉄は工具や釘、刃物の類に用いられ、銅は厨房具、家具、文房具、銭貨の類に用いられている。これはそれぞれの金属の特長に由来するものであり、特に鉄製のものについては現在とほとんど異ならない。ここではこれらのうち煙管と銭貨について若干の整理を試みる。

煙管 煙管は本地点からは全部で157点出土しているが、その40%に当たる65点を図示した。これらのうち遺構から出土したものについて、遺構に共伴する陶磁器から推定される年代ごとに整理すると以下ようになる。

第四節 各地点出土金属製品

陶磁器から 推定される年代	煙管(雁首)					煙管(吸口)				
	I B	II a1	II a2	II b1	II b2	I A	I B	II A	II B1	II B2

II期					1						
III期		3	1			1			1	2	
IV期							1			1	
(18世紀前半)	1	2		1		1			3		
V期				4	3	1			3	2	
(18世紀後半)						1					
VIII期		1	1	1	2	1		1	1	8	1
(19世紀)				1	2						1

この中のII期に属する雁首は L32-1出土のものであるが、この遺構の大部分の遺物とは異なり火を受けておらず、本来この遺構に所属していたものとは考え難い。陶磁器にも若干見られる混入と考え、またI類については類例が少ないのでこれを除くと、II類については相互に重なりあうものの {a1→a2→b1→b2} という変遷を見ることができるようである。一方吸い口ではI類がIII期からVIII期まで見られること、I類の形態をとどめ、I類からII類への移行過程を示すと考えられたII類AがVIII期にのみ見られることが指摘されるが、いずれも類例が少なく、ほとんど決定的なことは言えない。比較的類例の多いII類Bでは {b1→b2→b3} という変遷が見られるようである。

これらの結果は概ね古泉氏の指摘したところと矛盾していない。ここではこれに加うるに雁首の別角度からの再分類と、吸い口II類Bの細分の可能性が示された。その時間的変遷としての短小化の傾向とは別に、雁首と吸い口の長さにそれぞれ、また相互に一定の規範があったと思われ、今後の検討課題の一つである。

銭貨 すでに述べたように本地点から出土した銭貨は 510枚を数える。出土の特徴として、設備管理棟、給水設備棟の各調査地点からの出土が稀であるという点が挙げられるが、これは逆にこれらの地点の主体となる18世紀末から19世紀にかけての遺構からの出土が乏しいとも言える。

中央診療棟地点の主体となる大聖寺前田家と設備管理棟地点の南半と給水設備棟地点に位置する越後高田榊原家との屋敷地としての相違に基づくものであるのか、時期的なものであるのかは明らかでないが、陶磁器などの遺物を多量に出土する地下式坑やゴミ穴と呼ばれるいわゆる廃棄坑からの出土が比較的少なく、F26-1、F34-6などむしろ小型の土坑からまとまって出土する場合が多いようである。これらの中にはサシ状をなして出土したものも見られ、意識的な埋納を思わせる。したがって、地点ごとの出土量の違いの原因としては各調査地点における当時の土地利用上の違いも考慮しなくてはなるまい。すなわち、設備管理棟地点や給水設備棟地点のように他の屋敷との境界に近いところや、ゴミ穴が多く設けられたりするような場所にはこうした埋納がなされにくく、地下式坑が並ぶ生活の中心に近いところにはなされやすいと思われるのである。もちろん年代的な要因として地下への埋納の習慣そのものの衰退や、大名屋敷内に生活するものの経済的なあり方の違いも考えられる。他の遺跡との比較などを通じて明らかにしていかねばなるまい。

第IV章 江戸時代の遺物

一方銭貨は、その初鑄年という形で製造の上限が明らかになる場合が多く、これを出土する遺構の年代の推定の根拠とされる事がある。こうした観点から本地点でも若干の検討を試みた。

まず明代までの渡来銭と中世の私鑄銭はいずれも遺構の年代や性格を反映したものとは言えない混入品と考えられる。したがって、ここでは数多く出土した近世の銭貨である寛永通宝について、これを古寛永、新寛永背文、新寛永無背、新寛永四文銭の四種に分け、これを銭貨の10枚以上出土した遺構において共伴する陶磁器から推定される年代にしたがって整理した。なお各々の枚数の左の縦線は、その銭貨の鑄造されていた期間を示している。

遺 構 名 陶磁器から推定される年代 古寛永 新 寛 永 その他 計
背 文 無 背 四文銭

遺 構 名	陶磁器から推定される年代	古寛永	新 寛 永	無 背	四文銭	その他	計
F26-1	17世紀前～中	6	10	5		3	24
H32-5	II期	3	9			2	14
K20-1	17世紀後半	4	5			2	11
F34-11	III期	2	3	3	1	1	10
B28-1	18世紀前半	5	7	34		4	50
F33-2	18世紀前半	8	8	9			25
C26-1	VIII期	4		19	1	5	29
2号組石	VIII期	13	29	4	9	2	57
F34-6	—		1		29	1	31

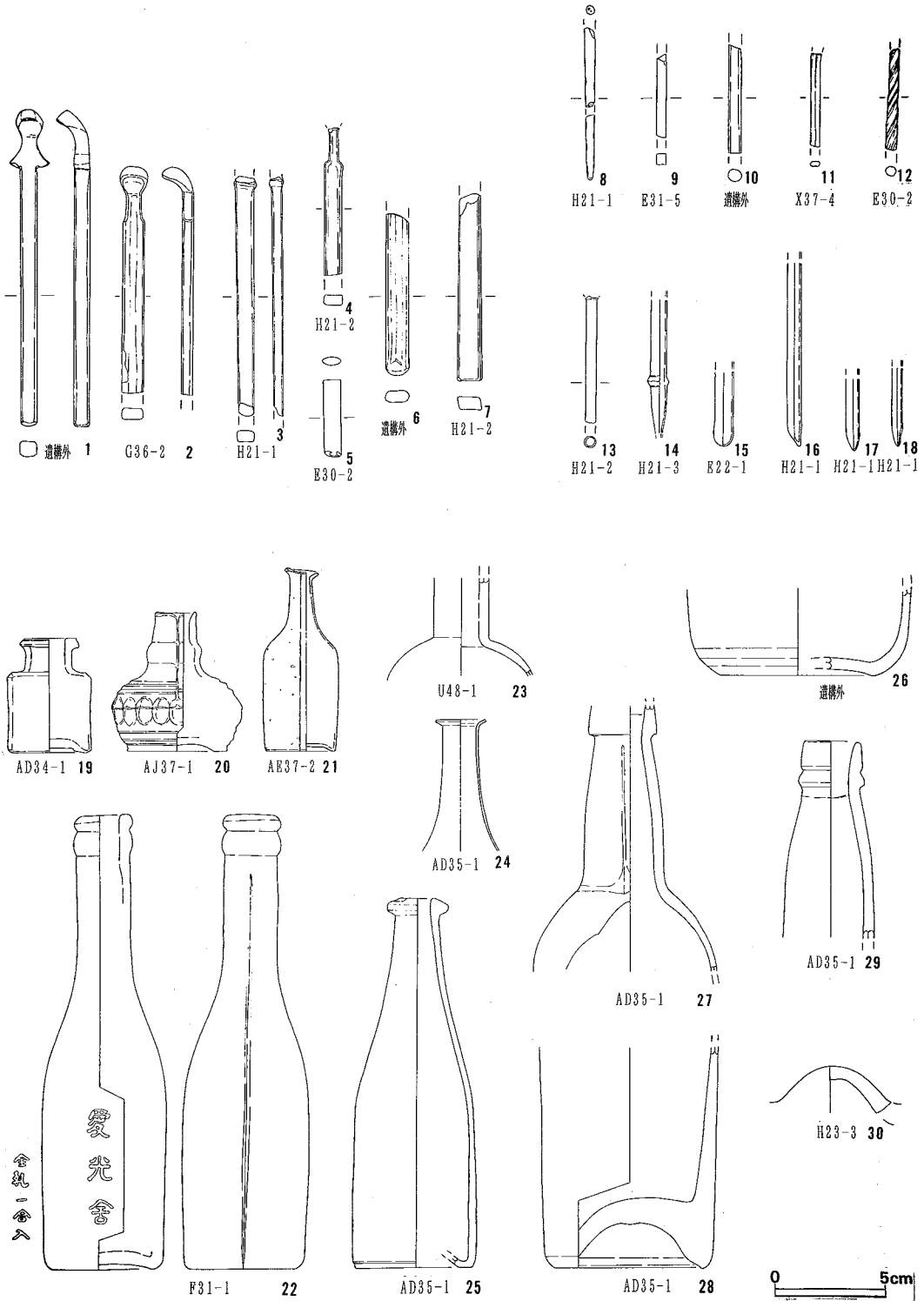
これらを見るかぎりでは、古寛永も新寛永背文も、その鑄造の停止後も長い間伝世していたことが知られる。また少なくとも F26-1 の新寛永無背5, F34-11の新寛永四文銭 1は混入と思われる。このほか F34-6に見られるように特定の銭貨を選択蒐集し、これを埋納する行為が存在したことは、銭貨の出土状況に一定の偏差を与えるものと思われ、検討を要するものである。(小川 望)

第五節 各地点出土ガラス製品

報告するのは簪(カンザシ)・筭(コウガイ)類、棒・管類と瓶・鉢類である(IV-225図)。板ガラスも若干出土しているが、年代の明らかなものがないので除外する。なお鉛ガラスの確認には東京大学アイソトープ総合センターの蛍光X線分析装置を用いた。

簪・筭類(1-7) 1は暗灰色の簪で、劣化のため表面は不透明の灰褐色の層に覆われている。中央診療棟地点 F35区遺構外よりの出土である。2は劣化のため本来の色がわからない。同じ遺構からこれよりやや細目の半透明灰色の簪の基部が出土している。3は淡黄色透明の簪の基部である。4も劣化のため色がわからない。7は淡黄色透明で大きさから筭と考えられる。5は淡黄色透明。6はやや珍しい紺色の簪で端部が膨らんでいる。中央診療棟地点東側遺構外、近世の堆積層の最上部よりの出土である。この他にも図示しなかったが簪・筭の部分が数個出土している。いずれも風化層に覆われ、断面からのみ本来の色を知ることが出来る。以上の簪・筭類はすべて鉛ガラスである。

第五節 各地点出土ガラス製品



IV-225図 各地点出土ガラス製品

第IV章 江戸時代の遺物

棒・管類(8-18) 8は淡黄色透明の2本の細い穴がある棒である。穴は先端まで達していない。両端を比べてみると穴の位置関係は捻れており、柔軟性のあるものが中心にあったことが分かる。9から12は中実の棒である。9は淡黄色、12は淡緑色、その他は無色透明である。11は2本を密着させたタイプで新宿区北山伏町遺跡でも出土している。10は中央診療棟地点東側遺構外、近世の堆積層の最上部よりの出土である。13-18は管状の製品で、17のみ緑色であるほかは透明無色である。棒状や管状のガラスは江戸の遺跡からよく出土するが、完形でないため性格がよくわからない。ガラス製の簪も当時存在したが、それだけまとまって同質のガラス棒が出土した例はまだ無く、大部分が簪なのではないかと考えられる。以上の棒・管類はすべて鉛ガラスである。

瓶・鉢類(19-30) 19, 20は淡緑色透明, 22, 23, 25は青緑色透明である。27-30はワインボトルで、暗褐色透明である。4個体分の底部が出土しているが、いずれも内面は均一に仕上げられていない。22の牛乳瓶は白山四丁目遺跡や山上会館地点で出土している金属製の止め金がついたタイプではなく、王冠が蓋となるタイプである。21, 24は透明の鉛ガラス製の瓶である。24が劣化のため内外面とも白色の不透明層に覆われているのに対し、21は全く劣化していない。21には型の跡が器壁対の隆線として認められる。21, 24以外は近代の製品であろう。

26は無色透明で鉢などの容器と思われる。アルカリガラスである。中央診療棟地点東側遺構外、近世の盛り土と考えられるいわゆる斑層よりの出土である。(西田泰民)

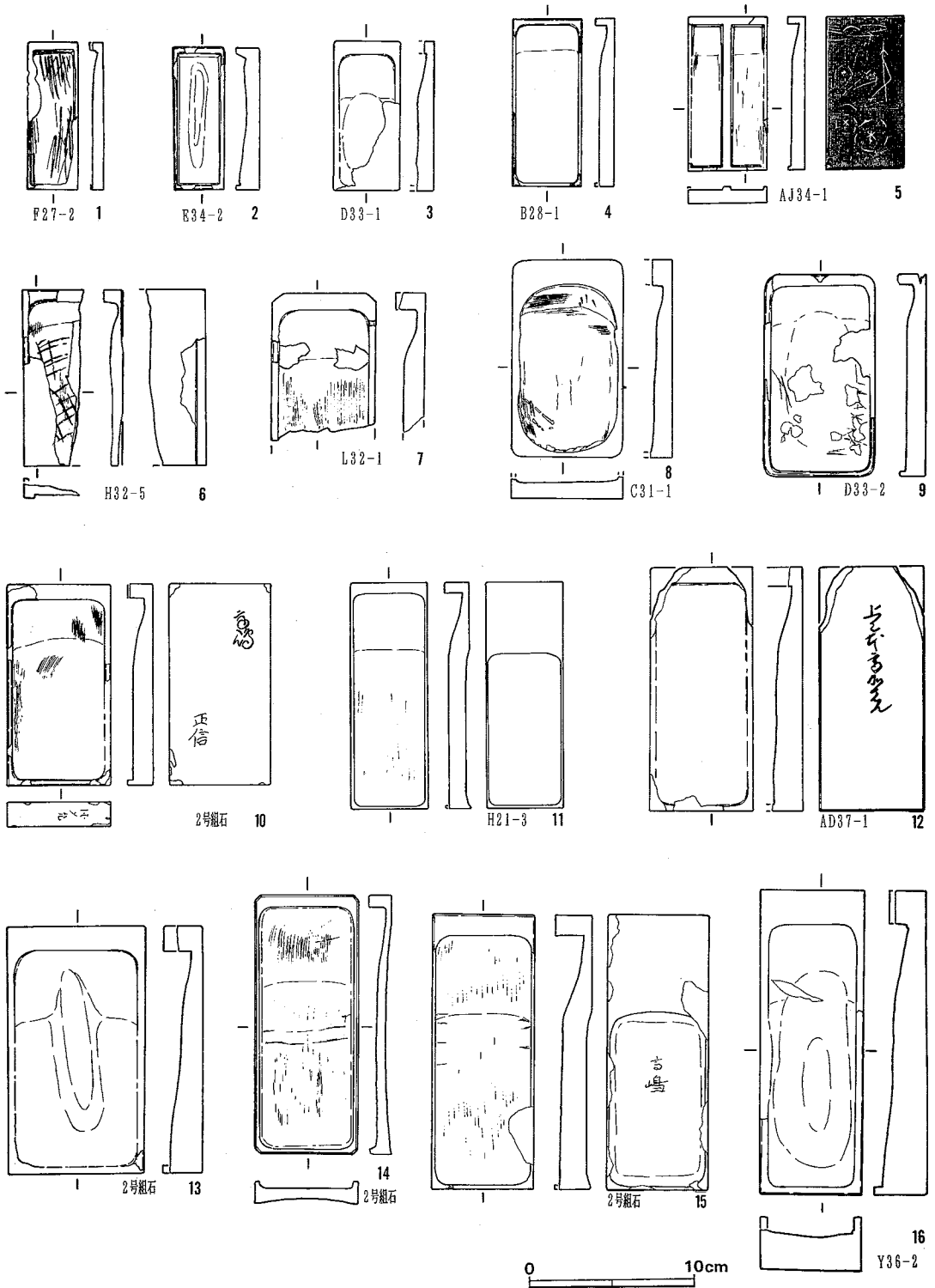
図示したガラス製品の出土遺構に共伴する陶磁器から推定される年代はIV-5表のとおりである。

小括 本地点のガラス製品は御殿下記念館地点の出土遺物に比べると量的にも質的にも見劣りがする。これはやはり調査対象地点の屋敷の違いに由来するものであり、当時ガラス製品が貴重であったことを裏付けるものであろう。こうした中でその出土遺構の共伴する陶磁器から推定される年代的なあり方を見ると、簪・笄類と棒・管類が中央診療棟地点の相対的に古い時期に属する遺構から多く見られるのに対し、瓶類が給水設備棟地点の新しい時期に属する遺構から多く見られるという傾向を指摘することができる。これは一つには技術的な問題として、瓶類のように成形するほうが、基本的には棒状の製品を作るより困難であるということに由来しよう。なお当然のことながら

遺構名	陶磁器から推定される年代	簪・笄類	棒・管類	瓶・鉢類
E22-1	VI期		15	
E30-2	18世紀	5	12	
E31-5	(18世紀)		9	
F31-1	II期			22
G36-2	幕末～明治	2		
H21-1	VIII期	3	8, 16-18	
H21-2	VIII期	4, 7	13	
H21-3	VIII期		14	
H23-3	19世紀中葉			30
X37-4	18世紀末～幕末		11	
AD34-1	18世紀末～明治			19
AD35-1	明治			25, 27-29
AE37-2	17世紀後半～18世紀前半			21
AL37-1	IX期			20, 24
U48-1	-			23

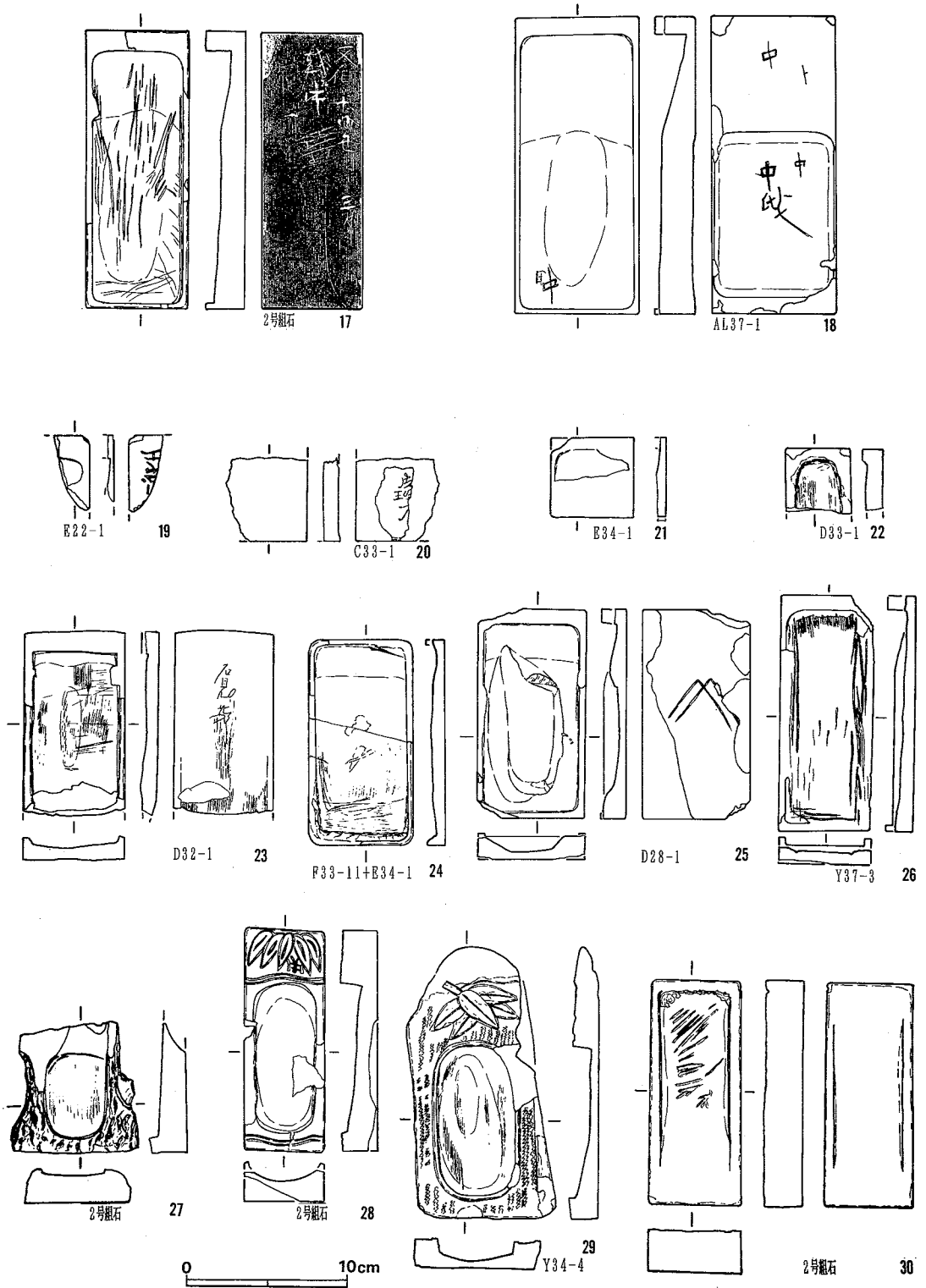
IV-5表 図示したガラス製品出土遺構

第五節 各地点出土石製品



IV-226圖 各地点出土石製品(1)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-227図 各地点出土石製品(2)

第六節 各地点出土石製品

F31-1 出土の牛乳瓶は近代以降の混入と考えられる。

またガラス製だけでなく、金属製、骨製の簪・筭類が出土することから、こうした婦人の持ち物の存在と大名屋敷内の生活や空間のあり方をさらに検討して行かねばならない。これは基本的には子供のものと考えられる玩具類においても同様である。 (小川 望)

第六節 各地点出土石製品

本地点からは、硯、砥石および各種の石製品が出土している(IV-226~230 図)。以下、それらのうちの主要のものについて報告する。なお石材の鑑定には武藤康弘があたった。

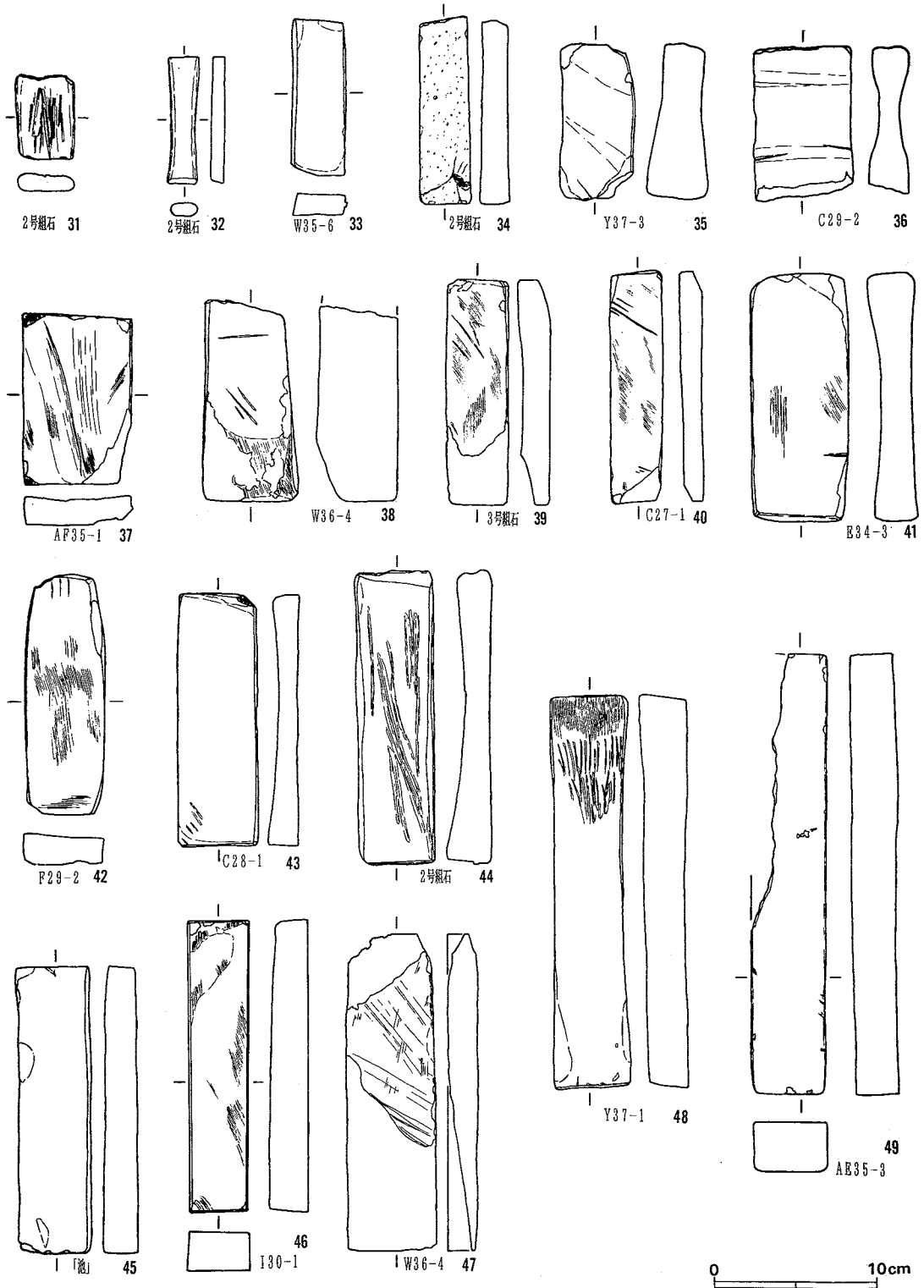
硯(1-30) 出土した硯は総数 104点に上る。これらは石材、色調、形態など様々であるが、まず彫刻の見られないものと見られるものとに二分され、さらに前者はその大きさから大まかに三分された。刻書や二次的な転用、加工の顕著なものを含め、その各々について述べていく。

1-5は比較的小型の長方形硯。1は粘板岩製。硯面(硯の上面の窪み)は長方形である。墨堂(墨をする平坦な部分、丘、陸)から硯海(墨の溜まる部分、海)にかけて何条もの線刻が見られる。2は泥岩製。硯面は長方形である。1に比べ厚みがある。硯側(硯の四側面)に墨が付いている。墨堂から落潮(墨堂と硯海の間の傾斜した部分)にかけての硯面中央が深く磨耗している。3は泥岩製。墨堂の中央が浅く磨耗している。4, 5は粘板岩製。4は硯面が隅丸長方形であり、硯首の硯縁が狭い。5は硯面が二つある「双履硯」と呼ばれるものである(鈴木 1987)。硯面は両者とも長方形であり、左側には墨、右側には朱墨の付着が見られる。硯背(硯の裏面、硯陰)には松葉と梅の花の線刻が見られる。

6-11は中型の長方形硯。いずれも粘板岩製で、硯面は隅丸長方形である。6, 7, 9は火熱を受けており、表面の剥落が著しい。6は破片資料であるが、硯背に窪みが認められる。覆手(硯背に見られる窪み)であると思われる。あるいは硯背手前側の縁のない「搜手硯」と呼ばれる形態のものであるかもしれない。墨堂は若干磨耗して窪んでおり、その上から斜格子状に線刻がなされている。8, 9は全体が隅丸長方形をなす。8の硯面は長円に近い。硯縁の欠損により硯面が一段彫り下げられた、硯面再生の一例であろう。10は濃緑色を呈する。手前側の硯縁に「弥□允」、硯背の右上に「高嶋」、左下に「正信」の刻書が見られる。11は硯縁が全体に細目で、硯背に覆手をもつ。

12-18は比較的大型の硯。硯面はいずれも隅丸長方形である。12は緑色を帯びた粘板岩製。墨堂中央がわずかに磨耗している。硯背中央に「上々本高□□石」の刻書が見られる。13は泥岩製。硯面中央、墨堂から落潮にかけて溝状の深い磨耗が見られる。14は粘板岩製。硯背は楕円形に緩やかに窪んでおり、覆手の一種と思われる。15は深い緑色を帯びた粘板岩製。硯背には覆手をもち、その中央には「高嶋」の刻書が見られる。16は浅い緑色を呈する粘板岩製。墨堂から落潮にかけて広く磨耗が見られる。硯面が彫り下げられて墨堂が修正されている。17は青緑色を帯びる粘板岩製。硯背には「文化十四(?)年(?)三月」「越中 □」の刻書が見られる。18は濃緑色を呈する粘板岩製で、墨堂中央は浅く磨耗する。硯背には覆手をもつ。墨堂左下に「田(?)中」、硯背の硯首側中央に「中」、覆手に「中」、「中氏」の刻書が見られる。

第IV章 江戸時代の遺物



IV-228図 各地点出土石製品(3)

第六節 各地点出土石製品

19, 20 は文字の線刻された破片。ともに粘板岩製。19は淡緑色を呈する。硯首部分の破片で、背面に刻書が見られるが判読は不可能である。20は硯背の覆手部分下半のみの残存する破片である。「虎斑」と思われる刻書が見られ、最後の一字は「石」であろう。21は折損した末端が、砥石のように転用されている。淡緑色を呈する粘板岩製。

22-26 は硯面が再生された例。22は泥岩製。硯縁の欠損したあとを平らに研いで新たに楕円形の硯面を彫り込んでいる。元来墨堂の下端であったほうに傾斜をつけて硯海としているようである。23は粘板岩製。本来の硯面が平らに加工されて硯背となり、本来の硯背に逆位に硯面が作られている。墨堂の中央を中心に比較的深い磨耗が見られる。硯背（本来の墨堂）には「石見□」の刻書が見られる。24は灰色を呈する泥岩製。全体が隅丸長方形を呈し、硯海も同形である。図の上方が本来の硯首側である。遺構間接合の見られた例でもある。25は粘板岩製。墨堂の中央が方形に彫り込まれている。深い溝状の磨耗を加工したものであろう。硯背には図のように「遼山形」の紋が刻書されている。所有者を示すものであろうか。26は粘板岩製。硯面の大部分が長方形に彫り下げられている。本来の硯海に向かって傾斜しているが、硯海にあたるくぼみは設けられていない。

27-29 は彫刻による装飾の施された硯。27は粘板岩製。硯縁から硯側にかけての部分が木の幹を象っている。28は泥岩製。全体は長方形を呈し長円形の硯面をもつ。硯首側の硯縁に竹を描いた線刻があり、また上下の硯縁には竹の節を表したと思われる二条の平行な沈線がそれぞれ見られる。29は粘板岩製。硯面の周囲には凸帯が巡る。硯首側の硯縁には竹の葉を描いた浮彫があり、残りの硯縁の大部分は鋸歯状の線刻が覆っている。本地点出土の装飾のある硯は以上ですべてである。30は砥石に用いられることの多い凝灰岩が、硯のように加工されかけた例。砥石としての使用がなされたと思われ、平滑でわずかに窪んでいる。

砥石(31-56) 出土した砥石は総数 454点に上る。これらは置き砥・持ち砥、粗砥・中砥・仕上げ砥といった分類が可能であるが、厳密を期しがたいのでここでは主にその形態と大きさに基づいて配列して述べていくことにする。

31, 32はきわめて小型で、特異な形態のもの。31は褐色の粒子を含む白色の凝灰岩製の中砥。32は白色の泥岩製の仕上げ砥。類似の半円柱状の側面形態をもつ小型の砥石は2号組石では31に類するもの4点、32に類するもの31点の計35点見られるが、これ以外の遺構では全く見ることができない。特異な使用の想定されるものである。

33-51 は直方体を基本とする形態をもつもの。33は淡褐色の泥岩製の仕上げ砥。34は気泡の多く入る褐色を帯びた白色の凝灰岩製の中砥。35は淡褐色の砂岩製の粗砥。36は赤みを帯びた黄白色の凝灰岩製の中砥。37は紫色を帯びた泥岩製の仕上げ砥。側面に鋸の目が見られる。38は褐色の波紋のある凝灰岩製の中砥。39は赤みを帯びた黄白色の泥岩製の仕上げ砥。40は赤褐色の泥岩製の仕上げ砥。41は灰緑色の粒子を含んだ白色の凝灰岩製の中砥。42は暗灰色の砂岩製の仕上げ砥。43は褐色を帯びた灰色の泥岩製の仕上げ砥。44は灰緑色の粒子を含んだ白色の凝灰岩製の中砥。45は淡緑色を帯びる灰色の泥岩製の仕上げ砥。側面に鋸の目が見られる。46は淡緑色を帯びる灰色の泥岩製の仕上げ砥。色合や使用の状態などが45にきわめて類似している。47は部分的に紫色を帯びた黄褐色の泥岩製の仕上げ砥。両側面に鋸の目が見られる。48は暗灰色の泥岩製の仕上げ砥。49は赤色の

第IV章 江戸時代の遺物

縞が縦位に走る白色の砂岩製の中砥。火熱を受けたと思われる黒変が見られる。50は褐色の縞と気泡の見られる黄褐色の凝灰岩製の中砥。51は黄褐色の砂岩製の粗砥。

52, 53は台石状の置き砥。52は黄褐色の凝灰岩製の中砥。右および下面に鑿の痕が見られる。53は淡緑色を帯びた灰色の泥岩製の仕上げ砥。上下両面に鋸の目が見られる。54, 55は特異な使用を窺わせる磨耗を示すもの。54は白色の凝灰岩製の中砥。中央に平行に並ぶ11条のくぼみがあり、全体が溝状にくぼむ。銭貨を重ねて縁にミガキをかけたもの(磨輪)とも思われるが明らかでない。55は凝灰岩製の中砥。緑色の粒子を含んだ褐色の波紋のある黄白色を呈する。上面に11, 下面に5の円筒形の孔があげられている。56は砥石と同様の磨耗が表裏および上下の面に見られる瓦の破片である。両側面には鋸の目が見られ、砥石としての使用を前提として意識的に成形がなされたものであろう。

各種製品(57-76) 57は凝灰岩製。正四角柱をなし一端は折損している。各面に擦痕などの使用痕は見られず、印材の類とも思われるが、用途性格は不明である。58-61は温石(オンジャク)。58, 59は褐色の砂岩製。両者とも一端に穿孔が見られる。60, 61も直方体であったと思われる。一端に穿孔が見られる。ともに片麻岩製。61は火熱を受けたと思われる剥離が著しい。

62-68は軽石。形態、大きさなど様々であるが、62, 63以外は一端に穿孔を有する。69は石燈籠のミニチュア。褐色の砂岩製。硬質瓦質の類似の製品がある(IV-206図)。70, 71は石臼の上臼。ともに安山岩製で、70は黒色、71は灰白色である。両者とも主溝が6本の6分画であり、副溝は6ないし7本で一定していないようである。上面のくぼみは70は放射状に、71は平行に彫られた痕が見られる。71には横打込穴が一对見られるが、70には見られない。72, 73は七輪。72は白色の凝灰岩製、73は暗灰色の閃緑岩製である。内面は火熱を受けており、剥落が著しい。新宿区三栄町遺跡からこれと同形の製品の下半部分にあたると思われる遺物が出土している(東京都新宿区教育委員会1988口絵写真)。74, 75は石製の容器。74は安山岩製の鉢形、75は砂岩製で浅い盤形で脚をもっていたと思われる。74は乳鉢の類とも思われるが、いずれも用途性格は不明である。76は火打ち石の破片と考えられる。石材は瑪瑙。

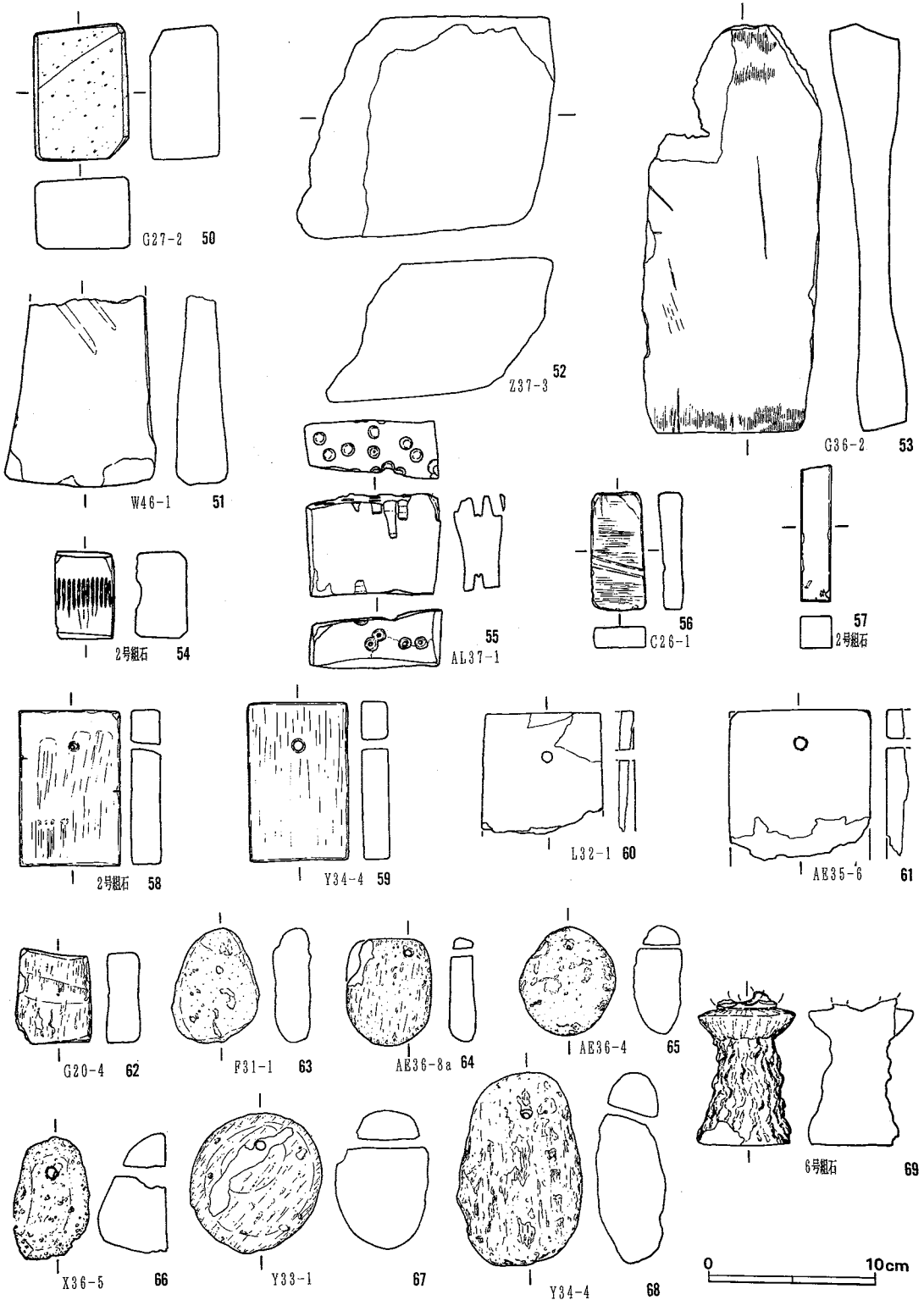
図示した石製品の出土遺構に共判する陶磁器から推定される年代はIV-6表のとおりである。

小括 上述したように本地点から出土した石製品の大半は砥石と硯である。ここではそのうちの硯について、主に法量の面から以下のような分析を試みた。

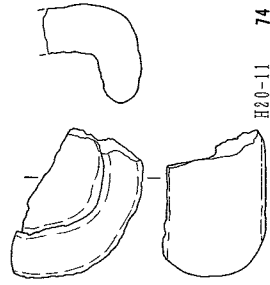
最近脇坂吉信氏は近世の遺跡より出土した硯のうち「高島石」銘をもつものに注目して検討を加えている(1989)。これによると分析した硯から見るかぎりでは、1)長さより幅が優先された規格をもつ、2)近世以来の伝統的な規格に基づく現在の学童用の硯と比較すると「高島石」銘をもつものは一般的に細目の製品である、という。

本地点より出土した硯には「高島」の刻印をもったものが2点(IV-226図の10, 15)、「上々本高□□石」の刻印をもったものが1点(12)見られる。それらの長さ×幅はそれぞれ12.2/6.2, 16.6/6.2, 14.8/6.3cmであり、いずれも脇坂氏の指摘と矛盾しない値となっている。しかし2)で規定された規格自体の検証はなされていない。そこで本地点出土の長方形をなす資料のうちその長さ×幅のそれぞれについて整理し(IV-7表)、さらにその長さ×幅の両者を計測しうるものについてグラフにまと

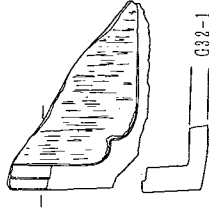
第六節 各地点出土石製品



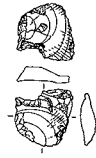
第IV章 江戸時代の遺物



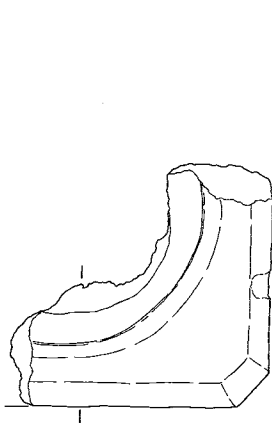
74



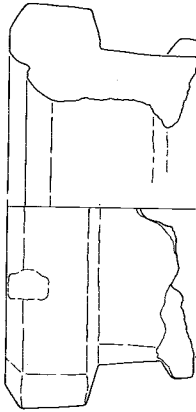
G32-1



L34-1



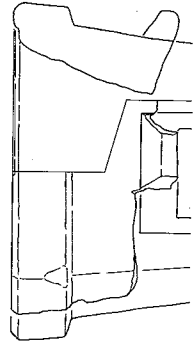
72



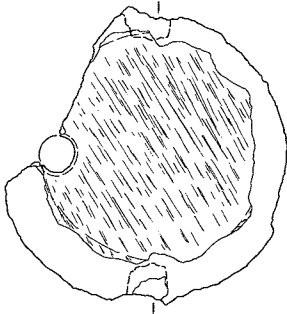
G36-2



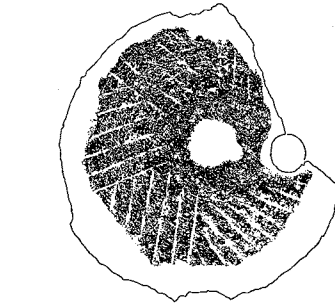
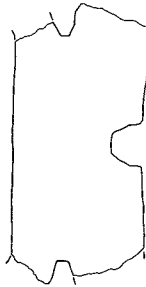
73



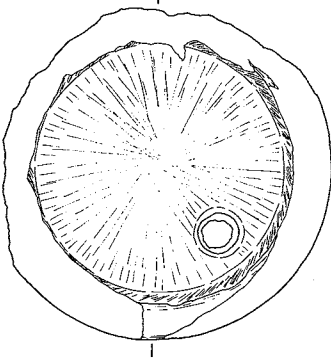
G36-2



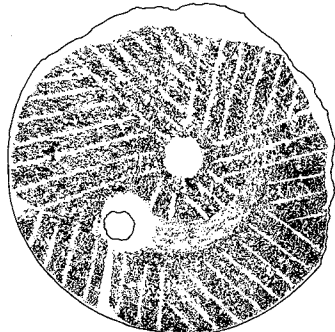
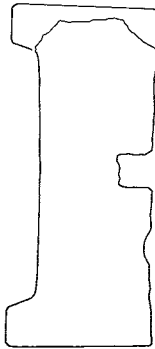
E26-1



71



G30-1



70



IV-230図 各地点出土石製品(5)

第六節 各地点出土石製品

めた。これらは遺構の時期など出土に関する属性を捨象したものであり、また「高島石」のような特定の産地を示す刻書がないため複数の産地からのものが混合していると思われるが、ここからいくつかの知見が得られる。

まず表を見ると、幅では4.5-4.9cm, 6.0-6.4cm, 6.5-6.9cmに集中があるのに対し、長さでは12.0

遺 構 名	陶磁器から推定される年代	硯	砥 石	そ の 他
B28-1	18世紀前半	4		
C26-1	VIII期		56	
C27-1	17世紀後半～18世紀前半		40	
C28-1	III期		43	
C29-2	18世紀前半		36	
C30-1	19世紀			70
C31-1	17世紀末～18世紀、19世紀	8		
C33-1	—	20		
D28-1	18世紀前半	25		
D32-1	V期	23		
D33-1	V期後半	3, 22		
D33-2	18世紀前半	9		
E22-1	VI期	19		
E28-1	V期			71
E34-1	V期後半	21, 24		
E34-2	V期後半	2		
E34-3	V期後半		41	
F27-2	17世紀後半	1		
F29-2	18世紀		42	
F31-1	II期			63
F33-11	?	24		
G20-4	17世紀後半			62
G27-2	17世紀後半		50	
G32-1	II期			75
G36-2	幕末～明治		53	72, 73
H21-3	VIII期	11		
H20-11	—			74
H32-5	II期	6		
I30-1	17世紀後半～18世紀前半		46	
L32-1	II期	7		60
L34-1	V期後半			76
2号組石	VIII期	10, 13-15, 17, 27, 28, 30	31, 32, 34, 44, 54	57, 58
3号組石	III期		39	
6号組石	III期			69
池	I期		45	
W35-6	?		33	
W36-4	18世紀前半		38, 47	
X36-5	18世紀末～19世紀初頭			66
Y33-1	18世紀前半、明治			67
Y34-4	IV期	29		59, 68
Y36-2	VI期	16		
Y37-1	18世紀前半		48	
Y37-3	18世紀	26	35	
Z37-1	VIII期		52	
AD37-1	III期	12		
AE35-3	18世紀末～19世紀初頭		49	
AE35-6	18世紀前半			61
AE36-4	V期			65
AE36-8	II期			64
AF35-1	X期		37	
AJ34-1	VIII期	5		
AL37-1	IX期	18	55	
W46-1	II期		51	

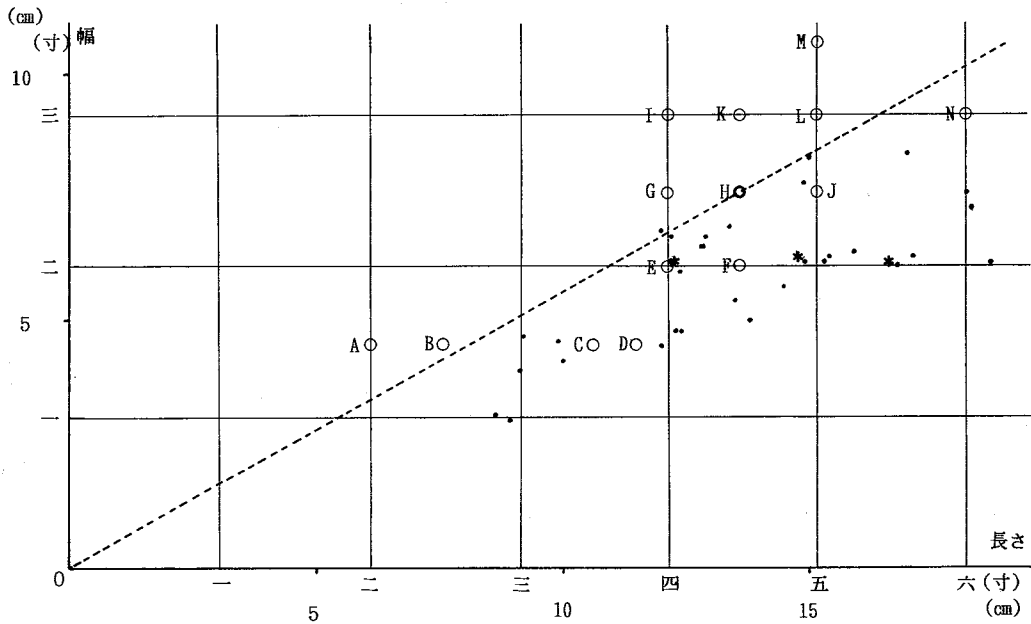
IV-6表 図示した石製品出土遺構

第IV章 江戸時代の遺物

-12.4cmにわずかに集中が見られるにすぎず、脇坂氏の指摘するように「規格を規制する目安」(1989:263)は幅が長さに優先されているといえるようである。

一方、2)について見るなら、グラフには脇坂氏によって設定された「四五平(シゴヒラ)」の幅と長さの比率の傾きを氏と同様に破線で示してある。ここにおいても1点を除きすべてこの線の下にプロットされる。したがって少なくとも本地点の幅と長さの計測しうる例においては「高島石」に類する銘をもたないものも先の規準に対してはほとんどすべてが細目の製品であったということになる。また先の「高島石」に類する銘をもった製品を*で示したが、これらは全体の中で特定の偏りを示してはいない。このことから、1), 2)は「高島石」に類する銘をもつものに限らず、近世江戸の硯に一般に敷衍しうるものであると思われる。

長さ(cm)	8.7	9.2	9.7	10.2	10.7	11.2	11.7	12.2	12.7	13.2	13.7	14.2	14.7	15.2	15.7	16.2	16.7	17.2	17.7	18.2	18.7	
点数	2	2	1	1	0	0	0	8	3	3	3	0	4	3	1	0	2	2	0	2	2	
幅(cm)	3.2	3.7	4.2	4.7	5.2	5.7	6.2	6.7	7.2	7.7	8.2	幅・長さとも区間の中央値を示している。3.2は3.0-3.4cmの間に入る点数を、3.7は3.5-3.9cmの間に入る点数を示している。										
点数	2	2	5	10	8	4	23	11	5	8	4											



規格	二度	二五度	三五度	三八度	四二寸	四五二	四平	四五平	四三五平	四五三	五三	五三五	三六	
幅	1.5	1.5	1.5	1.5	2.0	2.0	2.5	2.5	3.0	2.5	3.0	3.0	3.5	3.0
長さ	2.0	2.5	3.5	3.8	4.0	4.5	4.0	4.5	4.0	5.0	4.5	5.0	5.0	6.0
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N

IV-7表 本地点出土の硯の長さ(上)・硯規格表(下) 規格表は脇坂 1989より作成

第七節 各地点出土骨・角・貝製品

ここで硯に見られる“規格”について見ておきたい。IV-7表の下段はその出典が明記されていないが、脇坂氏によって示された硯規格表(1989:265)から作成したものである。これによると硯は幅と長さ、そしてここには示さなかったが厚さから規格が規定されていたものと思われる。したがって先に検討したグラフ上の破線に示される長さとの比率は、それほど意味をもっていたとは考えにくい。むしろ氏もこの後に示されたような寸を規準にして設けられた特定の格子点(A~N)に対する散らばり方を問題とすべきであったのではなかろうか。

こうした点から見ると、本地点資料はわずかに点Eの周辺に集まる傾向が見られるとは言うもののそれほど明確な集中を見出すことはできない。氏の示された規格表が何らかの理由で事実と異なったものであるのか、あるいはいわゆる「呼び寸」のような通常のものとは異なった尺度が用いられていたことによるものであるのか、今後石材の差から推定される産地ごとの比較や、時期的な比較などによって追究されていかねばなるまい。

以上、硯について若干の考察を行なった。硯はそれを用いる対象が比較的限られていたと思われるものの、念入りに彫刻された高級品から日用品まで多岐にわたり、また「高島石」のような産地を示すものから所有者と思われる人名や、購入した日であろうか年月日を示した様々な刻書が見られるなど豊かな情報を持つものである。今後さらに材質や時期、形態との関係や、当時の尺度、生産や流通の形態なども含め議論を深化させていきたい。

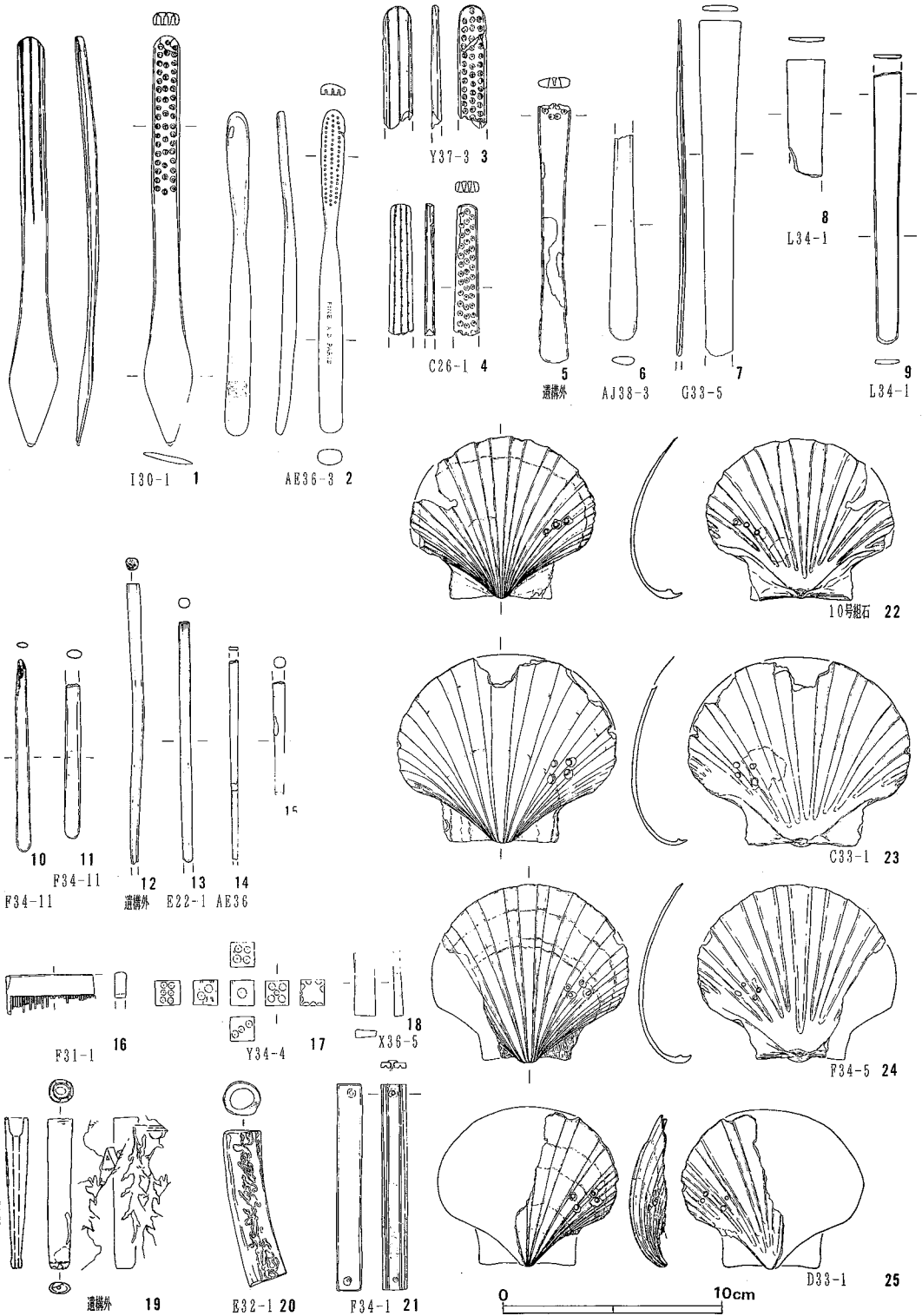
(小川 望)

第七節 各地点出土骨・角・貝製品

ここでは本地点より出土した骨、角、貝製品について取りまとめて述べる(IV-231図)。なお材質の鑑定は国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏によるものである。ただし、これらの製品は加工が多く加えられていて、動物の同定の困難なものが多いとのことである。

骨、角製品(1-21) 1-6は刷子。いずれもクジラの下顎骨製である可能性が高い。1は正面の上半には3列に小孔が穿たれている。各列の小孔の数は17, 13, 17と中央が少ない。この小孔は貫通していないが、これに対応するように背面に3本の細い溝が彫り込んであり、これによって両面は連絡している。溝の周囲は青緑色に変色しており、小孔に植え込んだ毛を銅もしくは真鍮の細い針金で固定したものと考えられる。下半は先の尖ったへら状に加工されており、薄くなっている。表面は丁寧にミガいてある。3, 4はこれと同様の製品の一部であろう。3は1と同様先端が丸いが、4はやや角張っており先端へ向かってわずかに狭まっている。金属の針金を用いてあったと思われること、毛の植えられた部分の長いこと等、歯ブラシとは考えにくい点もあるが、末端のへら状の部分が「房楊枝」に見られるものと類似していることも事実である。2は上三分の一ほどの部分にくびれがあり、くびれより上に3列に小孔が穿たれている。各列の小孔の数は19, 20, 19である。中央の列は直線的に並ぶが、左右の列は側縁に沿って弧を描いている。小孔は貫通しておらず、背面に溝も彫られていない。くびれの下、正面中央に「FINE A D PARIS」の文字が彫られている。文字は見られないが同様のものがAK38-1よりも出土している。5は小孔をわずかに残す刷子の柄。小孔は4列に並んでいたものと思われる。中央診療棟地点北側、富山藩邸側よりの出土である。6は2と同形

第IV章 江戸時代の遺物



IV-231図 各地点出土骨・角・貝製品

第七節 各地点出土骨・角・貝製品

と思われる刷子の柄。

7-9は薄い板状の製品。クジラの下顎骨製。一端が他端に比べ幅広く薄くなっている。筭(コウガイ)もしくは篋であろう。表面は丁寧にミガいてある。10, 11は楊枝様の製品。クジラの下顎骨製と思われる。断面は楕円形で一端が尖らせてある。12-15は箸様の製品。12はクジラか陸獣の骨, 13は不明, 14は大型の哺乳動物の骨を全面加工したもの, 15はクジラの下顎骨製である。断面は14の長方形を除き, 隅丸の方形である。12は中央診療棟地点西側よりの出土である。16は櫛。材質は不明。17は骰子(サイコロ)。このほか同形のものがあと2点同一の遺構から出土している。クジラの骨製である。各々の目は円錐形の浅い孔で表現されており, 錐のようなもので穿たれたと思われる。18は長方形の板状のクジラの骨製の製品。表面は加工の痕を多く残すが, 用途性格など明らかでない。19は煙草の吸い口。同種のもは鹿角製の事例が多いが, 本例は動物の骨製である。動物種は不明。合掌造りの家屋が線刻されている。煙管の吸い口とは異なって紙巻き煙草に装着して使用したものと考えられ, 近代以降の所産であろう。20は鹿角製の管。やや湾曲しているが, これは素材の形状によるものである。鹿角の表面を削り, 髄を除いて作られている。用途性格など明らかでない。21は細長い長方形の板状の製品。クジラの下顎骨製。両端に孔が穿たれそこに銅の釘が残っている。長辺の両側縁に沿って断面V字形の溝が彫ってある。なんらかの縁飾りとも思われるが, 用途性格など明らかでない。同形のもの破片がほかに4点ある。

貝製品(22-25) 22-25は貝柄杓。いずれもイタヤガイである。背面の右側に22では三つ, 23-25では四つの小孔が穿たれている。孔は背面の方が大きく, 背面から内面に向かってあけられたと思われる。あらかじめあけられたこの孔に釘を通して柄が固定されたものと思われる。柄や釘の残存は見られなかったが, 柄杓という性格上, おそらく竹か木によって作られていたと思われる。なお, 柄杓としての使用を直接窺わせる痕跡は認められなかった。

図示した骨・角・貝製品の出土遺構に共伴する陶磁器から推定される年代はIV-8表のとおりであ

遺構名	陶磁器から推定される年代	刷子	その他の骨・角製品	貝製品
C26-1	VIII期	4		
C33-1	—			23
D33-1	V期後半			25
E22-1	VI期		13	
E32-1	?		20	
F30-10	19世紀		15	
F31-1	II期		16	
F34-1	18世紀末~19世紀		21	
F34-5	?			24
F34-11	III期		10, 11	
G33-5	18世紀		7	
I30-1	17世紀後半~18世紀	1		
L34-1	V期後半		8, 9	
10号組石	18世紀前半			22
X36-5	18世紀末~19世紀初頭		18	
Y34-4	IV期		17	
Y37-3	18世紀前半	3		
AE36-3	18世紀末~明治	2	14	
AJ38-3	18世紀後半~19世紀前半		6	

IV-8表 図示した骨・角・貝製品出土遺構

る。

小括 本地点より出土した骨・角・貝製品のほとんどを報告したが、これらは時期的にも地点的にも明瞭な偏りを示しておらず、また材質として残りにくいものであることもあり、ここから多くのことを語り得ない。材質としてクジラの骨、特に下顎骨製のものが多いことが注目される。肉にせよ骨にせよ動物の利用自体が限られていたと思われる当時において、クジラの利用がこのように優越していたことはその捕獲や流通、加工の観点からの検討に値しよう。(小川 望)

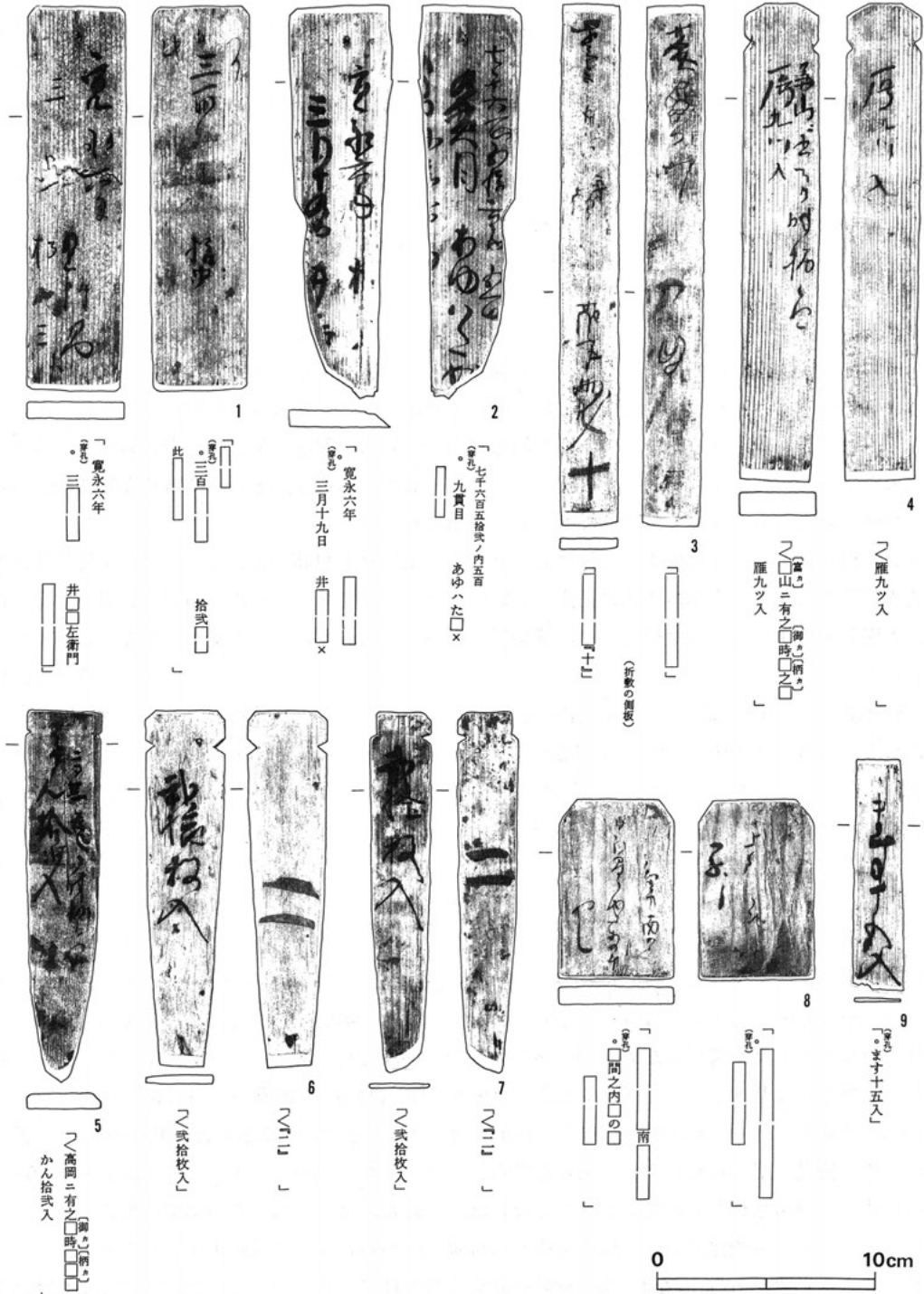
第八節 池出土の木製品

池からは、大量の「かわらけ」とともに多量の木製品が出土した。地中深く埋まっていたために使用時の形を留めるものは少なかったが、大部分は折敷、箸を中心とする食事の際に使用したものであると思われる遺物であった。これらは既に度々触れているように、寛永六年(1629)の紀年銘のある木札とともに出土しており、また当時の儀礼的な宴会の後始末に関連する遺物と考えられる。おそらく寛永六年四月の將軍家の「御成」に関連する宴会のものであろう。きわめて特殊な資料ではあるが、当時の宴会のありさまを具体的な証拠から物語る資料である。

なお、樹種については御殿下記念館建設地点より出土した木製品とともに、東京大学農学部林産学科木材物理研究室の安藤博康氏に同定をお願いした。多量であったため、種類・数量を限定したが、木製品34点すべてが針葉樹であり、建築材に用いられた2点のモミを除くとスギとヒノキで占められた。(萩尾昌枝)

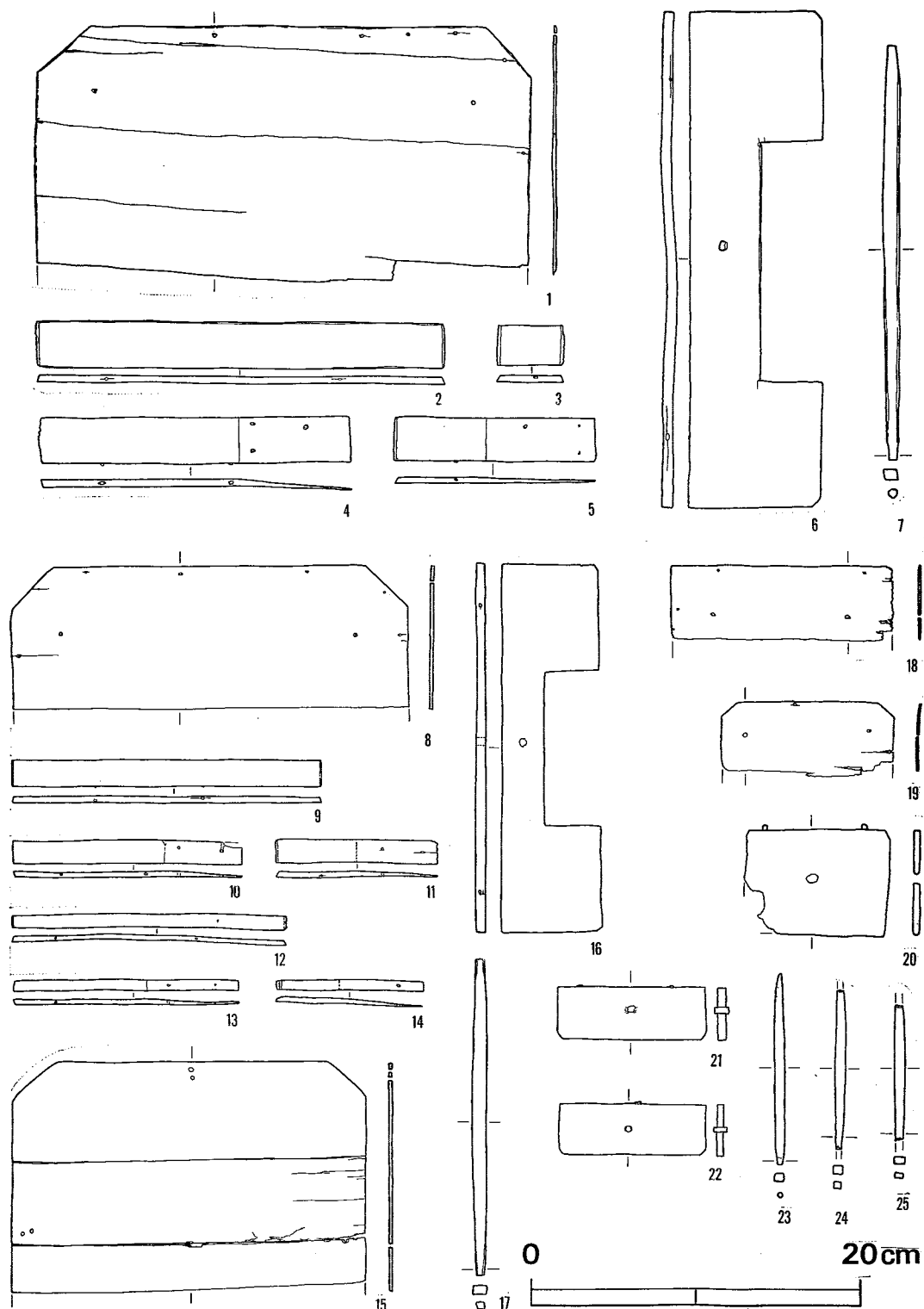
墨書木製品 (IV-232図) 池から出土した墨書木製品のうち、判読可能なものはIV-232図に掲げた9点である。この中で、(1)には「寛永六年三……」、(2)にも「寛永六年三月十九日」の年紀が見える。寛永六(1629)年という、4月26日に將軍家光が、さらに同29日には大御所秀忠が相次いで加賀藩本郷邸を訪れている。富山・大聖寺の両支藩が分封されたのはこれより後(寛永十六年)のことであり、この家光・秀忠の「御成」があった寛永六年当時は、中央診療棟地点付近はまだ加賀本藩の本郷邸の敷地内であった。加賀藩では両者の臨邸に備えてこの前年、すなわち寛永五年中には御成書院の新築を終え、国許は言うまでもなく、京・長崎・奥羽等、全国各地から献上物等の物資を買い集めたと伝えられる(『加賀藩史料』第弐編、寛永6年4月26日・29日条)。御成当日は、家光・秀忠をはじめ、おそらくは都合数千人にのぼる従臣らが本郷邸を訪れたものと思われ、加賀藩では、それらの人々を饗するため、相当多量の食物を用意したであろうし、その中には国許から輸送された物もかなり多かったと考えられる。(1)・(2)の日付は両度の御成の一月余り前のそれであり、(2)の「あゆはた……」は何を意味するかが不明ではあるものの(あるいは「鮎……」か)、何らかの物資の輸送に用いられた木札であると見られ、また「雁」「かん」「ます」等と読める(4)・(5)・(9)が同じ時期に使用されたものであるとするならば、これらは家光・秀忠らの臨邸に備えた物資の輸送用の木札である可能性が高い。同じ遺構から折敷・箸・かわらけが大量に出土したことも、これと併せて考える必要があるであろう。なお、(3)は折敷の側板に書かれているが、判読は困難であり、また(8)は鑑札様の形状であるが、同じくほとんど判読できないため具体的な用途は不明である。(宮崎勝美)

第八節 池出土の木製品



IV-232図 池出土木製品(1)

第IV章 江戸時代の遺物



IV-233図 池出土木製品(2)

第八節 池出土の木製品

折敷 (IV-233図) すべてが底板、側板、脚板、支え棒の各部分に離れた状態で発見された。接合部には 2~3 箇所の木釘が残存しており、簡単な接合が行なわれていたと思われる。樹種はスギとヒノキで、ほとんどが柾目どりをされている。

大きさと形状から三つの型に分類できた。それぞれの型について述べるが、数量的に多いので、代表的なものを図示した。

なお、底板はすべてが木目にそって割れており、一枚分の完全な形のものを探集することはできなかったが、その木釘の痕や文献資料などから各片は縦横とも同じ長さであったものと推定している (V章 推定復元図参照)。

大型の折敷(1~7) 底辺(1)の一辺が一尺二寸(36.4cm)から一尺(30.3cm)の長さを持ち、四隅の角が一手切り(辺に対して45度になるような角度で切り落とすこと)された足打折敷(脚の付いた膳)である。測定可能な70点中30点が一辺の長さ31.6~32.0cmの間に集中している。長さ約八寸(24.2cm)、幅約九分(2.7cm)の側板(2)を木釘で打ち付け、角の部分にも長さ約一寸五分(4.5cm)の同じ幅の板(3)を打ち付けている。ただし、使用する際に奥側になる辺には、二枚の長さの違う板(4, 5)をつなぎ、一枚の側板と同じ形になるように作られている。二枚の接合部は斜めに削られており、外側からみた合せ目が中心になるように長い板には釘状のもので印の線がひかれている。これは本来の折敷の側板が一枚のへぎ(ごく薄く割った幅の狭い板)を折り曲げ、折敷の向い側で樹皮で接ぎ合せて作られていたことから、この場合は複数の板を組合わせた側板であるにもかかわらず、その部分を重視し製作したと思われる。それぞれの側板の端は、斜めに切られており、うまく組合うようになっている。

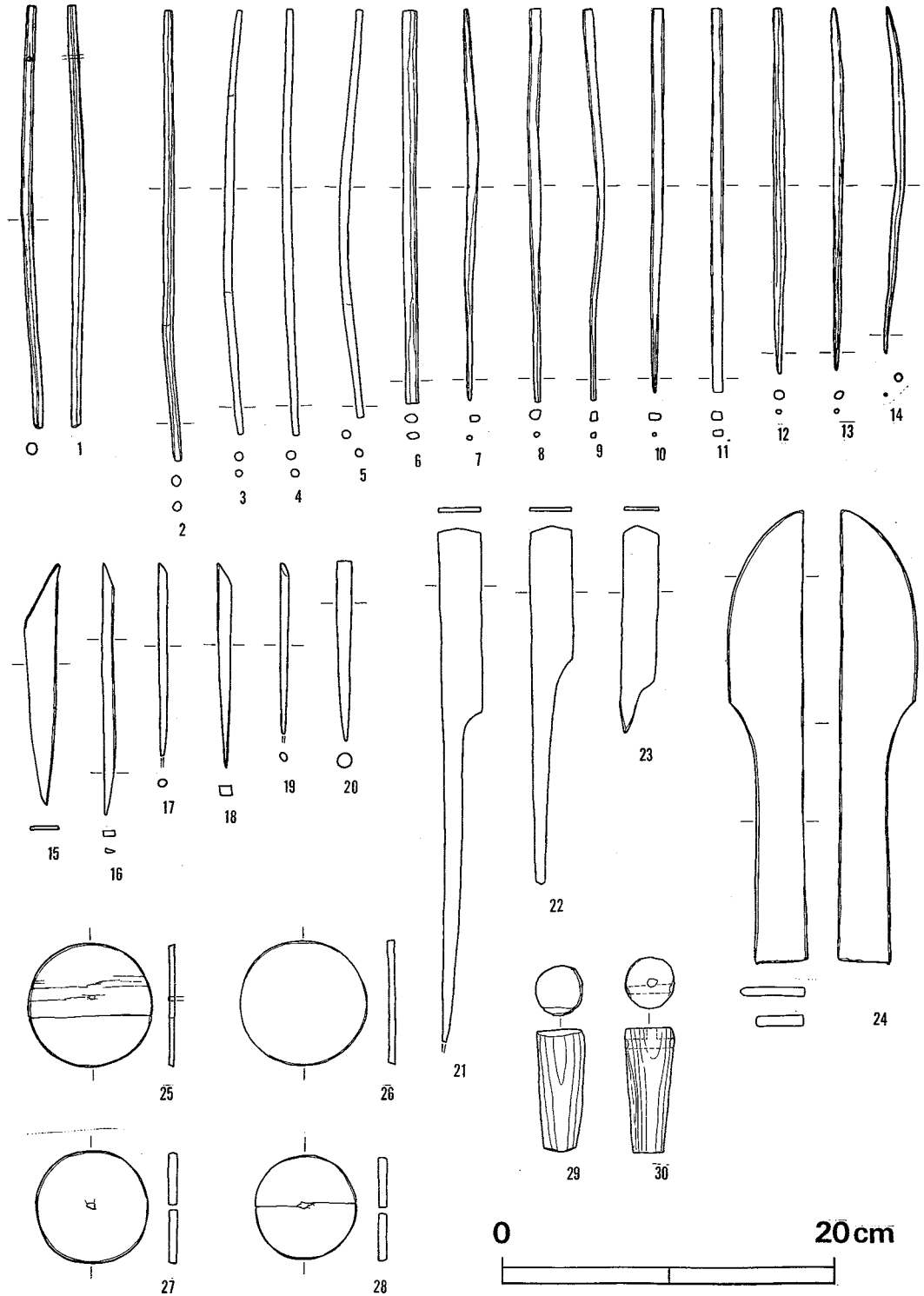
さらに、底板の縁から内側5cmほどのところに、木目と直行して、二枚の対になる脚板を打ち付けている。脚板(6)は長さ九寸(27.3cm)から一尺、高さ二寸五分(7.5cm)ほどであり、中央に高さ約一寸三分(3.9cm)の刳形(切り込み)が入っている。そして二枚の間を長さ六、七寸(18.2~21.2cm)の箸状の棒(7)が支えている。側板の数から、大型の折敷は 113膳を数えることができた。脚板からは 111膳が推定された。

中型の折敷(8~17) 底板の木釘の痕の有無でさらに二種類に分けた。一方は大型の折敷とほとんど同じ形に作られている。底板(8)の一辺の長さは約八寸で、角は一手切りされている。24膳分確認された。側板は長さ18.9cm、幅1.47cm(平均)のもの(9~11)と長さ16.9cm、幅0.66cm(平均)のもの(12~14)があり、それぞれの角の部分の側板は特定できず対応する脚板(16)、支え棒(17)の分類もできなかった。前者は18膳分、後者は 9膳分の側板が確認されている。

もう一方は底板(15)の一辺の長さが約七寸のもので、木釘の痕がなく、辺の中央に直径約 2mmの孔が縦に二つ並んでいる。側板をひも状のものでくりつけていたと思われる。角は一度切った後、できた二つの角をさらに小さく切り、丸みを出している(三つ手切り)。13点出土した。

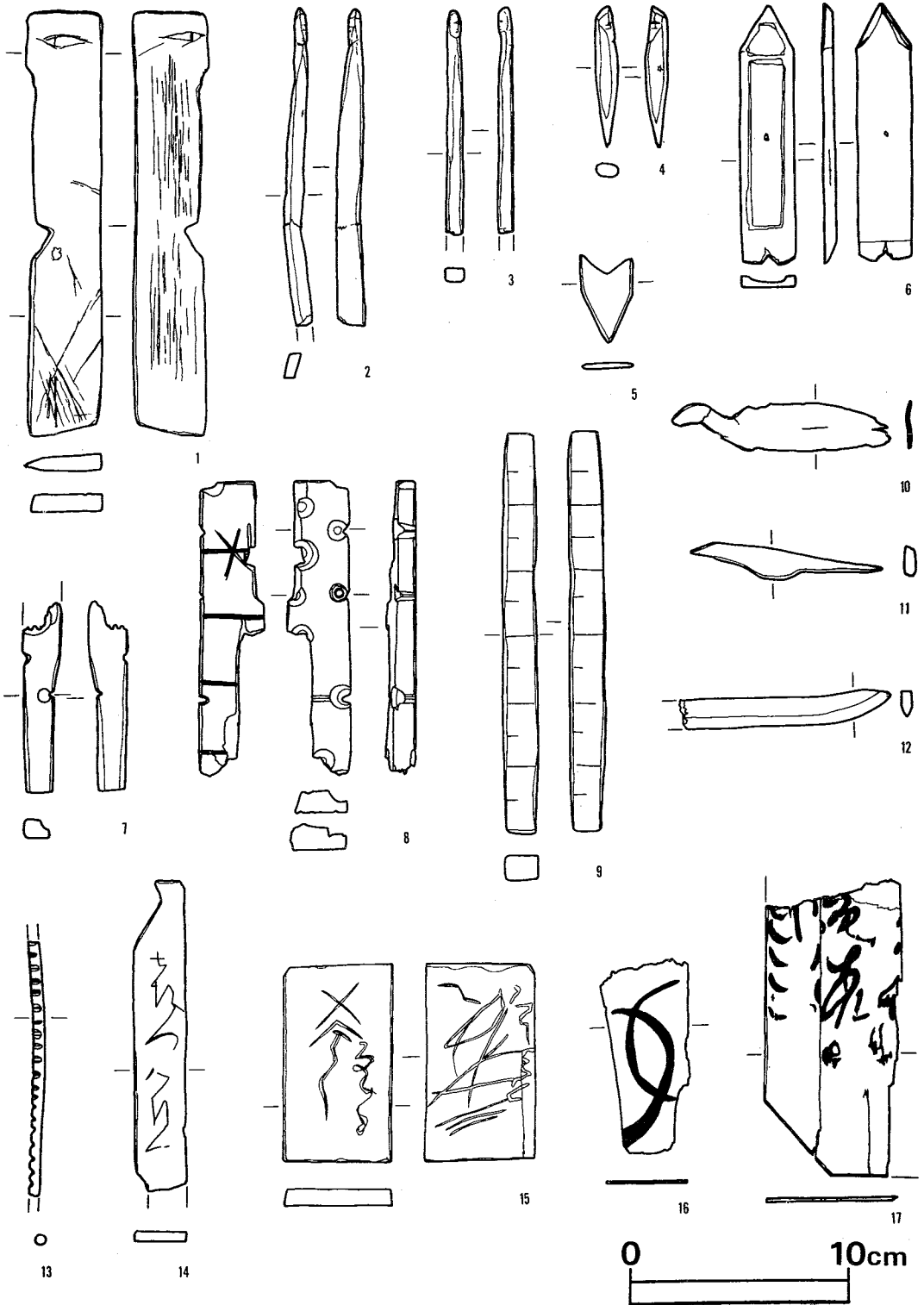
小型の折敷(18~25) これも底板の一辺の長さが約三寸半(10.5cm)のもの(18)17点、約四寸半(13.6cm)のもの(19)5点とに分類した。前者の場合、角は切られていなかったらしい。側板は確認できなかった。これらに伴うと思われる刳形のない幅約三寸(9.1cm)、高さ約一寸(3.0cm)の脚板(21, 22)は69点(35膳分)と多く、高さ 6.7cmと 5.5cmのもの(20)も 1点ずつあった。

第IV章 江戸時代の遺物



IV-234図 池出土木製品(3)

第八節 池出土の木製品



第IV章 江戸時代の遺物

底板は薄く、割れてしまっていたため判別は困難であった。

箸 (IV-234図 1~14) 多くが折れた状態で発掘されたが、そのうち長さが14cm以上あるものを1本の箸として数える対象とした。菜箸を除いた総数は1480本で単純に計算すれば、740膳分である。材質はほとんどがスギである。折れずに1本の長さが測れたのは433本で、これらを形から、寸胴箸、片口箸、両口箸の三通りに分類し、さらに寸胴箸を整形の良不良によって二つに分けた。

1は菜箸と思われる。一方にひもを通したらしい孔があいている。2~6, 11は寸胴箸で、両端に切断面が残り、全体にほとんど同じ太さに削られている。3~5は特に整形がよく、両端をやや細めに丁寧に作られている。8~10, 12は片口箸である。長さを決めた後、片方の端を細くしてあり、現在一般的に使われている箸の形に近い。7, 14は両口箸である。両端が細く削られている。箸の分類については第V章で述べることにする。

楊枝 (IV-234図 15~20) 15は薄い板を刃物の刃の形に切り取ったもので、上部と先端が斜めに切断されている。16~19は断面が長方形もしくは円形の棒の一端を斜めに切断し、もう一端を細く削るかまたは鋭く斜めに切断しているものである。74点確認された。20は細長い円錐状に削っており、同様のものが35点確認された。いずれも長さは一様ではなく、7cmから16cmまでであったが、12cm前後のものが多かった。

蒲鉾の板 (IV-234図 21~23) 薄い板を長さ10.6~21.9cm、幅約2.5cmに切り、一端をやや三角に、もう一端をカーブをつけて細く蒲の穂のような形に整形してある。当時の宴会の献立などによく見られる、幅の広い部分に魚の搦身をのせ、いろりなどであぶって食べる「小かまぼこ」の板であると思われる。14点確認された（蒲鉾の板については女子栄養大学の島崎とみ子氏の御教示を得た）。

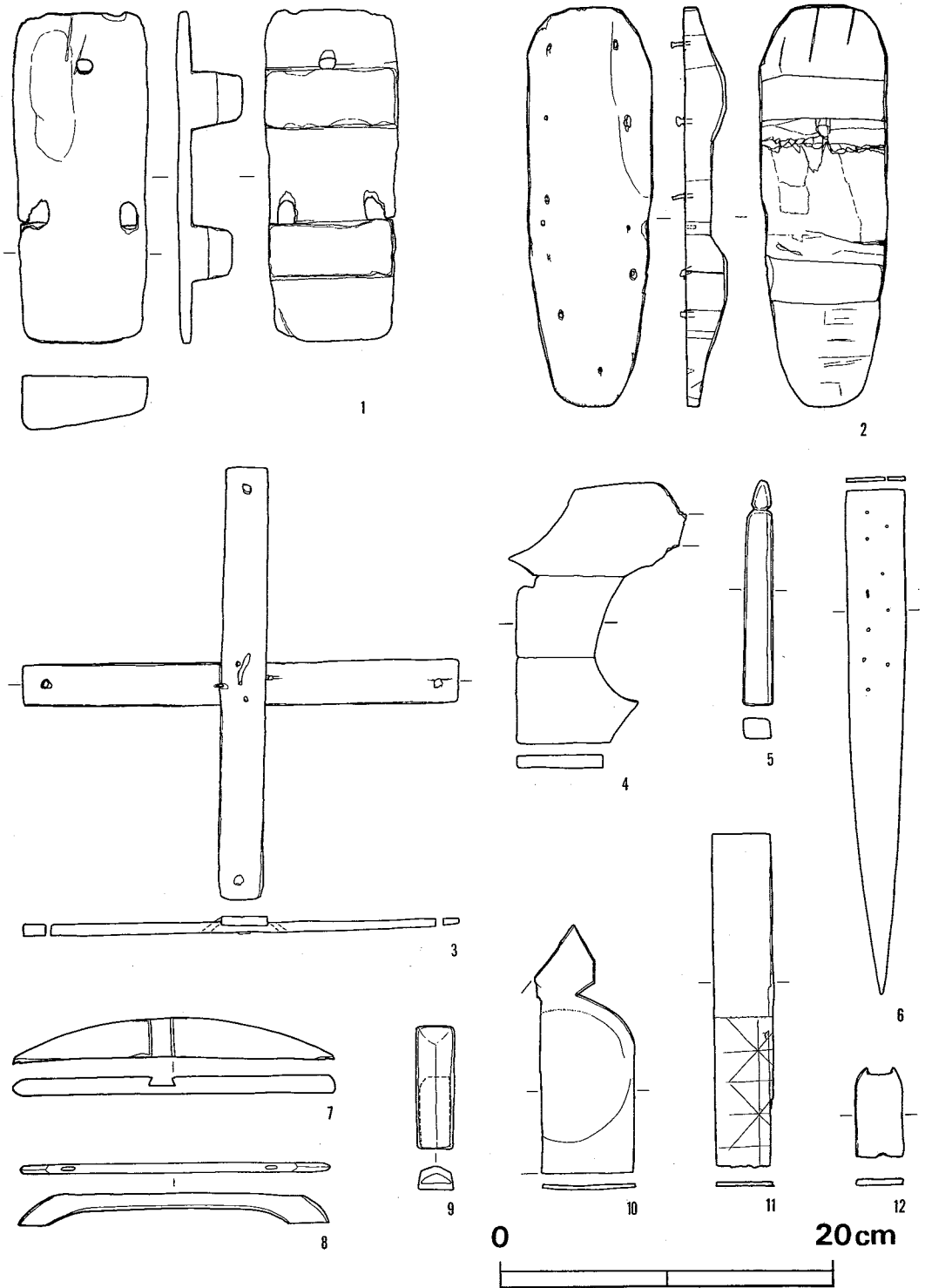
曲物の蓋および底 (IV-234図 25~28) 25は曲物の蓋で樹皮が残存している。把手の一部であろう。縁に斜めに角度がつけられている。径は7.7cmで、同様の遺物はほかに7点あった。26は曲物の底と思われ、やはり縁が斜めに落とされている。径はやはり7.7cmで、ほかに3点確認された。27, 28は中心に孔があいていて、蓋として用いられたと思われる。径は6.5cm前後で5点確認された。曲物も出土したが、すべて細かく割れており、これらに伴うものかどうかの判断はつけられなかった。樹種はすべてヒノキであった。

栓 (IV-234図 29, 30) 全部で7点出土した。高さ約7.5cm、径3cmで、1点はひもを通すための孔があげられていた。

篋 (IV-234図 24) 12点出土している。全体の長さは15.3cmから27.5cmで、刃部の長さは4.2cmから14.8cmと大きささまざまである。刃部は削られて滑らかになっている。

その他の遺物 (IV-235, 236図) IV-235図 1~4は人形である。1は板の両面に目と片面に手(?)が線刻され、鼻、口も側面を削ることで表現されている。2, 3は棒の先端に簡略化した目、鼻、口の切り込みが入れられている。4は面取りされた顔が彫られている。1, 4の左胸の付近に傷がついているようにも見える。5は鏝を模した木製品である。6は舟形木製品で、帆を立てる孔があげられ、リアルに作られている。7, 8は火鑽臼である。両方とも材質はスギで、7は4個、8は9個の火鑽痕が確認された(写真15)。特に8の中央の痕は中空の火鑽杵を用いて火を起こしたものの、その下は同

第八節 池出土の木製品

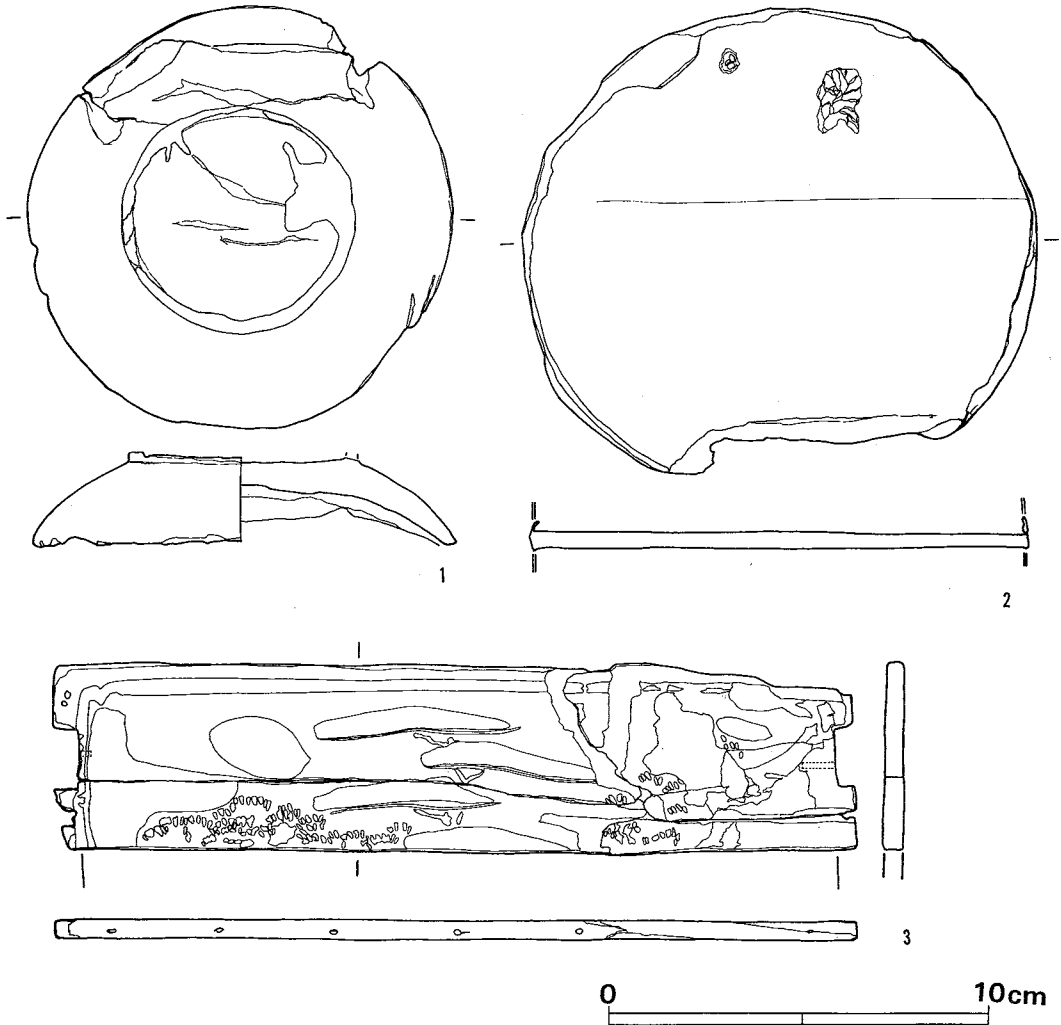


IV-236図 池出土木製品(5)

第IV章 江戸時代の遺物

一の孔で二度火を起こしたものと推測される。裏面は一寸刻みの目盛りのある物差しである。火鑽白については北海道教育大学釧路分校の高嶋幸男氏の御教示を得た。9は両面に一寸と五分の目盛りのある長さ六寸(18.2cm)の物差しである。10, 11は鳥形木製品である。12は小刀の形を模してあり、刃部は鋭く削られている。13は整形の良い箸状の棒に約3mm毎に刻み目が入れている。14, 15は板に線刻がされているが判読できなかった。15は折敷の脚板の一部である。16, 17には墨書が見られるがやはり判読できなかった。17は大型の折敷の底板に、側板を外した後に書かれている。

IV-236図 1, 2は下駄である。1は上面が長方形を呈し、長さ20.4cm, 幅8.2cm, 高さ3.4cmである。歯は連歯で、片側が大きく磨り減っており、歯の裏には砂粒が入り込んでいた。2は上面が丸みを帯びた長方形で、鼻緒を通す孔をもたず、「表」を釘で打ち付けて使用したものである。歯は連歯でかなり磨り減っている。3は長さ26.5cm, 幅2.7cm, 厚さ0.6cmの板を鉄釘で十字に組合わせたも



IV-237図 池出土木製品(6)

第八節 池出土の木製品

ので接合部分にはそれぞれ深さ 2mm ほどのくぼみがついていて、さらに斜めに木釘で固定されている。四つの先端には直径 4mm の孔があいており、細い棒が残存しているものもあった。同様のものがほかに 6組確認されたが、桶または曲物の底を固定した枠のようなものと推定される。4は三つに割れた状態で出土した。膳の脚か。5は四角い棒の先端を楕円形に削ってある。柄と推定される。6は木札状の薄い板で細かい孔が10個あいている。紙などをつけた跡である可能性もある。7は蓋の破片だと推定される。板をはめ込む幅 1.5cm の溝が彫られている。8は用途不明である。9は柄と推定される。10は薄い板に円形の線刻がある。正確な円ではない。11は 5本の並行する直線に直行する線と斜めに交わる線が刻まれている。12は用途不明である。これらのほか、建築材、用途が不明な加工痕のある板材、ムクノキや竹などの自然木が出土している。

漆製品 (IV-237図) 1は椀の蓋である。全面黒色に塗漆されている。直径12.2cm、高さ2.4cm 底が厚く、やや大型である。大きくひしゃげ、いとじりの部分と縁の一部が破損している。2は容器の底と思われる。直径13.5cm の円形で黒い漆が二箇所固まっていた。周囲には曲物の痕跡がある。3は箱物の側面と推定される。幅21.1cm、長さ5.1cm の板に黒い漆が塗られ、赤で枠取りをした中に金と赤の漆で月、松、菊が描かれている。両脇は板を組合せたくぼみと細い孔があげられており、側面には木釘の痕が残っていた。(萩尾昌枝)